

博士学位申請論文

三多摩地域社会教育史の研究
—「自分史」の源流に関する検証—

川原 健太郎

凡例

- 一、本論は横書きである。横書きのために、数字の表記は原則としてアラビア数字を基本とする。ただし書籍のタイトルなどの固有名詞の場合には、漢数字を用いる。
- 二、注は、各章末に記載してある。
- 三、注の頁表記については、煩雑を避けるため、「p.」及び「pp.」とした。
- 四、史料の引用について、汚れ等により判別が不可能な文字については「□」をあてた。
- 五、本論文のページ設定は40字×30行である。
- 六、本論文中の人名については原則的に敬称略とする。
- 七、「ふだん記」については、一般的に「」が付けられて呼称されている。本論文でもそれに従う。また、「自分史」については、とりわけ1980年代以降に活発な取り組みが展開されるようになった固有の活動であり、かっこを付けるものとする。

目次

序論.....	1
本論.....	20
第1部 明治期の三多摩における社会教育実践	20
第1章 近代三多摩の概要	20
第1節 三多摩の区域	20
第2節 近代三多摩の就学率	21
第2章 自由民権運動期の三多摩における五日市の青年による学習・文化活動	26
第1節 明治期三多摩における自由民権運動の位置付け	26
第2節 五日市の自由民権運動	28
第3節 勸能学校と学芸講談会	30
第3章 自由民権運動期における地域と青年に関する研究	36
第1節 千葉卓三郎の遍歴	37
第2節 故郷喪失者を受け入れた要因	39
第3節 千葉卓三郎の五日市における役割	41
第4節 千葉卓三郎の精神と地域の青年の受け入れ	42
第5節 「外来青年」と社会教育実践における意義	45
第4章 明治末期における『週刊多摩新聞』の研究	48
第1節 明治末期の三多摩における地方新聞	49
第2節 週刊多摩新聞の地域と概要	50
第3節 週刊多摩新聞と投書	55
第2部 大正デモクラシー期の三多摩における社会教育実践	61
第1章 大正期稲城における青年の地域文芸誌の研究	62
第1節 三多摩における大正デモクラシー期の学習・文化活動に関する先行研究	63
第2節 大正デモクラシー期のメディアと青年	64
第3節 稲城における文芸誌活動	65
第2章 地域通俗教育としての稲城・奚疑塾に関する考察	80

第1節	奚疑塾の成立の背景	81
第2節	奚疑塾の教育	84
第3節	奚疑塾の果たした役割	87
第3章	近代の私塾における同窓生の研究—奚疑塾を対象として—	94
第1節	近代における私塾に関する先行研究の到達点と課題	95
第2節	奚疑塾同窓生の研究	96
第4章	奚疑塾における錦絵の研究—視聴覚教育の観点から—	111
第1節	明治期における錦絵と教育	112
第2節	奚疑塾と教育内容と教育方法	116
第3節	奚疑塾における錦絵の主題	117
第4節	奚疑塾における錦絵の内容	122
第3部	戦後直後期の三多摩における青年の社会教育実践—戦中からの復興と戦後社会教育の出発—	136
第1章	第二次世界大戦下における三多摩の社会教育	136
第1節	第二次世界大戦下における社会教育の全国的状況	137
第2節	第二次世界大戦下の三多摩の社会教育	141
第2章	戦後直後期稲城における青年の社会教育実践の実証的研究	145
第1節	1940年代後半における三多摩における学習・文化活動の背景	147
第2節	稲城村青年団の活動	148
第3節	美を語る会の概要と活動内容	150
第4節	美を語る会の青年	153
第5節	サークル活動における青年	157
第6節	青年教員による人形劇、演劇	158
第3章	「ゴードン・W・プランゲ文庫」にみる戦後直後期の三多摩における青年の学習・文化活動	164
第1節	プランゲ文庫の概要	165
第2節	プランゲ文庫の小冊子を通してみた三多摩における青年の学習・文化活動	168
第4部	戦後三多摩社会教育史における橋本義夫及び「ふだん記」に関する研究—「ふだん記」から「自分史」へ—	181

第1章 橋本義夫の社会教育実践の一側面に関する研究	181
第1節 橋本に関する先行研究の到達点と課題	182
第2節 橋本関連資料について	190
第3節 社会教育実践の視点からみた橋本義夫の実践	198
第2章 橋本義夫の学習論研究—「ふだん記」を対象に—	217
第1節 「ふだん記」の成立と平凡人の教育	218
第2節 橋本義夫の学習論における鍵概念	227
第3節 橋本の学習論の検討	234
第4節 「ふだん記」の背景にみえる易行道の書	239
第5節 「ふだん記」の文友による易行道の受容	242
第3章 「ふだん記」における青年の学びに関する一研究	250
第1節 橋本義夫の中にみえる青年の学び	250
第2節 橋本の考える「ふだん記」の青年の学びにおける意義	252
第3節 青年の書く「ふだん記」にみる学び	259
附 橋本義夫「青年版『ふだん記』のすすめ」一覧表	266
第4章 ナラティブの視点からみた書く実践に関する一研究	276
第1節 ナラティブをめぐる諸相	276
第2節 書く実践の執筆過程に関する事例分析	279
第5章 書く実践の意義に関する一研究—「ふだん記」を対象として—	287
第1節 先行研究及び本章の視角	288
第2節 「ふだん記」インタビュー調査の概要	291
第3節 書く実践の意義に関する「ふだん記」のケーススタディ	292
第6章 「ふだん記」と「自分史」の一考察—橋本義夫による実践の再評価—	308
第1節 先行研究と本章の位置づけ	308
第2節 「自分史」の定義・起源と「ふだん記」	309
第3節 「自分史」執筆の要点と「ふだん記」	311
第4節 「ふだん記」の執筆内容の検討	313
補論1 1980年代創始の各地グループに関する研究—「ふだん記」北九州グループ、あ いちグループを対象として—	321
第1節 「ふだん記」各地グループの概要	322

第2節 北九州グループ	325
第3節 あいちグループ	334
第4節 各地グループの意義	341
補論2 地域における学習・文化活動の受容過程に関する研究—北海道における初期「ふだん記」を対象にして—.....	346
第1節 先行研究	347
第2節 初期北海道「ふだん記」関連史料及び本研究に係る調査	349
第3節 初期北海道「ふだん記」の歩み	355
結論.....	363
参考文献	378
資料 橋本義夫略年譜と三多摩の学習・文化活動.....	390

序論

(1) 本論文の目的

本論文は、明治維新以降の東京西部・三多摩における地域社会教育の歩みを、「自分史」の表現活動という視点から検証し、「自分史」の源流を明らかにすることを目的とする研究である。「自分史」とは、書き手が自らの生きてきた来歴を書き、自身の人生の歩みを振り返り文章に残す実践であるが、単に自分の歴史を書くだけのものではない。自らの暮らす地域、あるいは自分の生きている社会を認識するなど多面的意義がある成人の学習活動である。そうしたことから「自分史」は社会教育実践の代表的なものの一つとして位置づけられ、1980年代以降に多くの作品が生み出されてきた。本研究では、このような「自分史」の源流に関する検証を行っていく。

近年、執筆ブームとも言われる「自分史」であるが、その原型は、三多摩南西部に位置する八王子の実践家・思想家・教育家である橋本義夫により 1960年代後半頃に創始された庶民の文章運動「ふだん記」であるといわれる。「ふだん記」は、ふだん着のように飾らない文章を書き、読みあい、対面や手紙により交流を深める文章執筆運動である。「ふだん記」の活動において、書き手は自らの来歴や日常を書く。「ふだん記」はまさに日本が戦後、高度経済成長を遂げていく中で、約 50年にわたって庶民の文章運動として多くの書き手の思いを受け止め発表する場となってきた。

橋本は現在の八王子市域に生まれ、徹頭徹尾、三多摩に生きた人間である。橋本は三多摩での多様な学習・文化活動の遍歴から「ふだん記」を着想し実践した。その後多くの知己の協力や賛同を得て、現在「ふだん記」は、三多摩はもとより全国に広がる運動となっている。

「ふだん記」の発祥の地となった三多摩は、東京都の西部に位置する旧北多摩郡、西多摩郡、南多摩郡の地域の総称であり、現在の東京都の区部と島嶼を除いた地域にあたる。三多摩は、東京特別区という全国有数の都市部に隣接する郊外であり、東京のベッドタウンとして多くの人の流入があり、農村から都市近郊への変貌を遂げてきた地域である。三多摩は明治期においては自由民権運動が隆盛し、大正期から昭和期にかけては青年の学習・文化活動が活発に展開されていた。また、日本の戦後社会教育史の中では国立公民館の取り組みや、いわゆる「三多摩テーゼ」(東京都教育委員会「新しい公民館像をめざして」

1973年)が出されるなど、三多摩における学習実践が全国的に注目されてきた状況もある。

本研究では、近現代の三多摩での学習・文化活動を分析しながら三多摩の地域社会教育をとらえ、「自分史」の源流に迫るが、中でも本論で注目するのは人々が文章を執筆する活動である。例えばこれまでも三多摩では「ふだん記」以前に同人誌、機関誌、新聞投書などの書く実践が豊富に展開されており、「ふだん記」や「自分史」発展の背景を探るためにも重要と思われる。また、近現代の三多摩で展開されてきた草の根の学習・文化活動を社会教育実践に位置付ける上で、本論文では人々の学びの側面に着目し、人々がなぜ自分のことを書こうとするのかという、人間に内在する学習意欲の描出に留意したいと考えている。

社会教育実践の幅は広く、これまで戦後社会教育史の歩みにおいて婦人学級、青年学級、公民館の講座など、組織的な社会教育活動が豊かに展開され注目されてきた。一方で、「ふだん記」のように草の根の学習・文化活動の中には、等閑視されてきたものも少なくない。しかし、「ふだん記」の実践は、まさしく社会教育実践の範疇に加えるべきものであろう。

以上に鑑み、本論文では三多摩地域に軸足を置き、明治維新以降約150年に亘る時代の中で繰り広げられてきた多様な草の根の学習・文化活動の水脈の上に「ふだん記」が生まれ、これを受けて「自分史」の活動が展開されていったとする仮説を立て検証する。そして、明治維新以降の三多摩における地域社会教育の歩みを、「自分史」の源流という視点から研究し、「自分史」が社会教育の観点から見ていかなる意味を有するのかを歴史的な文脈から検討していきたい。

(2) 分析の視角

本論文の分析の視角は以下の通りである。

第一に、本研究は三多摩地域における学習・文化活動を、社会教育史の文脈に位置づけ、とりわけ社会教育実践史として描くことにある。教育における実践への着目の必要性について、藤岡貞彦は「社会教育学もまた、教育学の一構成部分である以上、社会教育の場における教育実践を固有の研究対象としなければならない」とし、社会教育学研究においても実践活動を取り扱うことは不可欠であると指摘する。

これまで社会教育実践として、たとえば、学習主体(女性・子ども・親・高齢者・外国人)、学習支援者(職員・リーダー)、施設(公民館・大学)、社会教育関係団体(ボランティア、NPO、NGO、市民運動)など多様な活動に焦点が当てられてきた(日本社会教育学会研

究大会の発表分野一覧参照)²。村田晶子は社会教育実践に関して、戦前の「母の講座」、妻籠公民館の青年による演劇サークル、尾道青年講座、庶民大学三島教室、上田自由大学等の学習会、『母の歴史』『鉛筆をにぎる主婦』などの生活記録、草の実会などの自己表現、信濃生産大学、枚方テーゼ、下伊那テーゼ、三多摩テーゼをあげている³。

鈴木敏正は社会教育実践を「地域住民がその自己疎外を克服して主体形成を遂げるために不可欠な、自己教育活動を援助し組織化する実践⁴」とし、飯館村の女性問題学習や、訓子府町の青年団活動、山形県の共立社生協の実践をあげている。藤岡貞彦は社会教育実践として、昭和 20 年代では社会教育講座や学校開放、昭和 30 年代では共同学習論やサークル論、農民大学論を、さらに、住民自治とその学習、民衆大学による学習論を取り上げている⁵。

このように社会教育実践に関連する分野は広く、社会教育学においても明確な定義はなされてこなかった。しかし、学習活動を通観すると、人々の学びに向かう意欲や、それを支えようとする人々の姿が存在している。そこで、本研究では社会教育実践を、社会において展開される人間相互の学び合いや成長に関わる学習活動と広くとらえたい。

これらの要素が含まれている「ふだん記」は、社会教育としては等閑視されてきたものの、社会教育実践そのものと考えることができる。「ふだん記」には自らの来歴を知り、書くことによる自己教育だけではなく、他の文友の書いた「自分史」へ共感することによるお互いのエンパワーメントなど、さまざまな社会教育的要素が含まれている。橋本は農村における青年教育への注視や教育活動、三多摩の地域文化に関する掘り起こしや執筆も行っているなど、八王子の社会教育に多面的に寄与してきたといえる。

しかしながら「ふだん記」の広がり大きさの比して、社会教育研究の中で取り上げられることはほとんどなかった。このため、橋本は「忘れられた思想家」、「忘れられた教育家」ともとらえられることができる。なお、研究されて来なかったのは、資料的な制約に加え、従来の社会教育研究においては、一般的に公民館の活動といった公的社会教育に研究の重点が置かれてきたことに起因している。

「ふだん記」には無数の草の根の声がつつられているが、多くの文章がこれまで研究面では未着手となってきた。これらを発掘し検証することで、戦後社会教育像の新たな側面を解明し、三多摩における地域社会教育史に新たな角度から示唆を与えたい。

第二に、本論文では、とりわけ文章を書くといった自己表現の実践に重点をおいて論じる。「自分史」を書く行為は、書き手の内に潜在してきた思いを表出することを意味する。

「自分史」は必ずしも歴史の表舞台に描かれてくることのなかった草の根の人々が、自ら見つめ書き残し人生の証を後世に伝えようとする意欲の発露である。また、「自分史」を書く人々や、「自分史」を書くことを励ます人々はいかようにして生まれたのかということは、「自分史」の成立に関わる疑問として浮かび上がる。

そこで本論文においては、人々がなぜ書くことを通じての自己表現へ向かうのか、そこに介在するのはどういったファクターかという分析の視角から論を進め、その上で、三多摩地域における「自分史」を中心とした草の根の学習・文化活動を検証し、地域社会教育実践史として描いていく。「自分史」の源流の検証は、人々が文章を書くことによる自己表現において、社会教育がいかに歴史的に重要な役割を果たしてきたかを提示してくれるものと思われる。

第三に、本論文での考究の対象は、いわば公的な社会教育活動ではなく、むしろ草の根の社会教育実践ともいべき学習・文化活動である。公的社会教育の法的な定義（社会教育法第二条）では、「学校教育法（昭和二十二年法律第二十六号）又は就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律（平成十八年法律第七十七号）に基づき、学校の教育課程として行われる教育活動を除き、主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動（体育及びレクリエーションの活動を含む。）をいう」と定義されている。本論文は近代以降の三多摩における草の根の地域社会教育史を跡づけようとしており、行政の範疇で実施される公的社会教育とは異なる領域を論じていく。広く社会における人間の学びは、近世からも継承されてきたのであり、三多摩では多様な学びが展開されてきたものとして把握したい⁶。

（3）先行研究

「自分史」の源流として三多摩の社会教育史を検証するために、主たる先行研究をその分野ごとに提示しておきたい。

①社会教育史研究、社会教育実践研究

宮原誠一は「社会教育本質論」において、非歴史的な立場からは社会教育の本質を理解することができないと社会教育を歴史の観点から明らかにすることの重要性を述べている⁷。宮原は、歴史的把握の上に立って社会教育の発展過程を明らかにする必要性を論じており、同論考は日本の社会教育史研究の基盤の一つとなる重みをもつ。

松田武雄は、近代日本の社会教育思想の成立過程を明らかにすることで社会教育におけ

る近代の諸相を描き、近代日本社会教育史像の再解釈につとめている⁸。近代日本社会教育を通観した上で、戦後に通じる理論、制度、思想などを見出す意義のある研究であるものの、草の根の社会教育実践はその研究範囲となっていない。

また大槻宏樹は、日本の近代における教育観の形成に疑問を投げかけつつ、自己教育論の視角を軸にした近代日本社会教育史を論じている⁹。その主眼は近代日本の自己教育論を明らかにすることに置かれている。近代社会教育史に関しては一定の積み重ねがなされてきたが、現代史を論じた研究は少ない。現代における重要な社会教育実践である「自分史」の源流を探求するにあたり、近代から現代への接続を意識しつつ、近現代史として論じる研究は未だ研究途上にある。

一方、社会教育実践を中心課題の一つに設定している研究では、社会教育基礎理論研究会編『叢書 生涯学習』のシリーズがある¹⁰。同叢書は多様な社会教育実践を通史も意識しながら論じている。一方、国土社から刊行されている「社会教育実践双書」シリーズでも、社会教育実践を対象にしている¹¹。

またタイトルに社会教育実践を掲げた研究としては、＜月刊社会教育＞に連載された戦後社会教育実践史をまとめた『戦後社会教育実践史』を挙げることができる¹²。1946年から1969年までの24年間の第一期(1945-48年)、第二期(1949-53年)、第三期(1945-59年)、第四期(1960-1969年)に区分しつつ、全48点の実践が紹介されている¹³。それぞれ占領と戦後社会教育の抬頭(第1巻、第一期及び第二期)、官僚統制と社会教育の発展(第2巻、第三期)、開発政策に抗する社会教育(第3巻、第四期)がテーマになっており、数多くの実践が紹介されている。例えば第一期(1945-48年)では公民館運動、青年夜学会、生活記録運動、うたごえ運動が対象にされている¹⁴。ただし、社会教育実践の広さを鑑みると、研究対象となっていない実践も少なくないことが課題であった。

②「自分史」研究

「自分史」を書き記す過程には文章を書く、自らの歴史を社会の中で位置づけ省察する、他の人に読んでもらい自らの歴史を知ってもらうなど、相互に自分史を読み合うといった複数の学びの要素が含まれており、関係する先行研究の分野は多岐にわたっている。

色川大吉『ある昭和史—自分史の試み』(1975)は、自身の十五年戦争における個人史とともに、橋本の足跡を検証しながら「自分史」について論じており、本論考の出発点となった研究である¹⁵。また小林多寿子『物語られる「人生」 自分史を書くということ』(1997)は、80年代以降に積極的に執筆されてきた自分史について、ともに書く自分史、物語産業

から生まれた自分史といったいくつかの系譜や潮流を明らかにしながら、全体像を明らかにしようとした研究である¹⁶。

また、社会教育においては、戦後、自分のことを書く実践が積極的に取り組まれてきた。戦後における書く実践の取り組みでは、1950年代における生活記録・共同学習があり、1960年代後半には「自分史」の原型といわれる「ふだん記」が創始される。1980年には鈴木政子による母の戦争体験を綴る『あの日夕焼け—母さんの太平洋戦争』が上梓される¹⁷。こうした「自分史」運動が広がりつつある状況下、社会教育において「自分史」は、どのように位置づけられてきたのだろうか。

『成人の学習としての自分史』（横山宏編著、「社会教育実践双書」シリーズ、1987年）は、社会教育実践における「自分史」学習に着目し研究の端緒を開いた意味で、大きな足跡を残した¹⁸。横山は「つねに時代や社会とのかかわりの中で自らを客観化し、その姿をしっかりと捉えておくことは不可欠のことであって、その素材としての自己の歩み＝自分史＝がもつ意義は極めて大きい¹⁹」とし、「自分史」に対する着目を述べる。他にも、同書では成人学校での自分史講座の学習実践や、高齢者教室の文集の実践、女性と自分史学習なども取り上げている²⁰。成人、高齢者、女性と異なる書き手が主体となっているが、実践を通じて多様な人々が学ぶ姿が描出されている。

こうした状況を受け、1990年代の社会教育関連の雑誌では、社会教育分野における「自分史」の実践に着目した論考が少なからず取り上げられている²¹。ただし、現在進行形で行われている実践の紹介がその中心となってきた。

近年の社会教育研究において識字との関わりから「自分史」を論じた研究として、添田祥史は、自分史学習に関して人間の主観を含めた全体像としてとらえるナラティブ・アプローチからのモデルを提示し、「自分史」による識字教育方法の可能性を示している²²。中澤智恵は生涯学習の分野における学びの方法として、書くことを紹介している。そこでは「自分史」を書くことを、学習メディアによる学びの方法ととらえている²³。

このように既存の社会教育研究において、書くことは成人の学びの方法としての意義を見出され、その実践過程で作成された記録とともに評価されてきたことが伺える。そして、「自分史」を学習の方法としてとらえ、その観点から「自分史」の書き方や自分史学習グループの実践内容が論じられており、こうした流れは、いわゆるオーラル・ヒストリーに着目した成人の学習の流れにも通じている²⁴。しかしながら、「自分史」を社会教育における歴史的文脈に位置づける試みは、なされて来なかったこともまた伺える。

③「ふだん記」及び橋本義夫研究

橋本研究は、1974年に雑誌〈中央公論〉に掲載された色川大吉による「現代の常民—橋本義夫論」がその端緒である²⁵。色川は、地域文化運動に取り組み、失敗と挫折を経ながら建碑運動に注力し、さらに「ふだん記」運動を興すというその生涯において常民と向き合っていた常民、橋本の半生を取り上げながらその精神史を振り返り、半生を高く評価している。同論考は、八王子にて地域文化活動に取り組んできた橋本の存在や「ふだん記」を広く知らしめることとなり、「ふだん記」に対する多大な注目を集めるとともに、その後の橋本義夫研究につながる端緒となった。

橋本の先行研究には、「ふだん記」に至るまでの思想遍歴をテーマとした小倉英敬による研究がある²⁶。小倉は、橋本の「ふだん記」以前の思想遍歴に着目した。一方で、橋本の「ふだん記」運動を通じての思想的展開は、依然解明を待たれる状況にあるといえよう。

橋本義夫という人物に関する先行研究としては、義夫の子息である研究者・橋本鋼二による研究『万人に文を 橋本義夫のふだん記に至る道程』を挙げられる²⁷。本書は、自身では人生の遍歴をトータルにまとめ上げた自伝を出さなかった義夫の伝記でもある。「ふだん記」の萌芽の背景に迫るためにも意義が深い。

小林多寿子は「ふだん記」を社会学の観点から分析した²⁸。報告書には「ふだん記」に関わる資料編が収載されており、「ふだん記」作品所蔵リスト、五十音順執筆者一覧、さらに創刊号執筆者の文章一覧等は、「ふだん記」研究の貴重な土台となっている。

小林は「書く実践と自己のリテラシー」の中で、どのように自己の関心や自己の形成がなされたのか、技術と方法に着目する〈自己のテクノロジー〉の観点から「ふだん記」の研究をおこなっている²⁹。ライフ・ヒストリー研究の第一人者である小林が橋本義夫研究の重要性に着目していた事実は、「ふだん記」の研究価値を示すものといえる。

④民衆史研究、民衆文化研究

本論文は、草の根の人々に光を当てた、色川大吉、柳田國男、北田耕也らによる民衆史、民衆文化の研究に多大な示唆を得た。

色川大吉は『民衆史—その一〇〇年』など、民衆史の研究に多くの足跡を残している³⁰。色川の民衆史ではオホーツク民衆史講座にも言及し民衆史の視点を提起し、三多摩における事例には、千葉卓三郎や北村透谷を取り上げている。

近代の世相から歴史を描こうとした試みに関しては柳田國男が想起される。柳田國男は、『明治大正史 世相編』において、「毎日眼前に出ては消える事実のみに拠って、立派に歴

史は書ける³¹」とする視点から近代の世相が描かれており、その中では青年団や婦人会についても触れている。ただし、視点は庶民の実践からそれぞれの時代を描き出すことにあり、やはり社会教育の視点とは異なっている。

社会教育の文脈からみた民衆文化の研究には、北田耕也による研究がある³²。北田は大衆文化を、「資本によって大衆向けに大量生産された文化的消費財と、それを中心とする生活の生み出す行動様式と価値表現の総体³³」とし、こうした大衆文化の支配を超えた民衆文化の重要性を説いている。そして民間文芸や流行歌、共同学習等、種々の社会教育実践を取り上げながら、文化の創造を果たす民衆の存在に着目している。

民衆文化に関する近年の研究成果は『地域に根ざす民衆文化の創造「常民大学」の総合的研究』である³⁴。本書は全国各地に広がる後藤総一郎による「遠山常民大学」、多摩地域での立川柳田国男を読む会を取り上げており、そういった実践を生んだ素地として、三多摩の民衆による学習・文化活動があったことを、「ふだん記」も含めつつ示している³⁵。同研究から、三多摩は民衆の学習・文化が発展し、常民大学の文化を受け入れる土壌を持つ地域であることが示唆されているといえよう。

⑤三多摩地域史研究

三多摩の学習・文化活動を対象にした研究には、地域史、郷土史の観点から多様な先行研究があり、三多摩の各自治体で取り組まれたてきた自治体史の一環での研究を挙げることができる。また三多摩全土というよりは各自治体単位にフォーカスした史的研究が中心となってきた。

その一方、三多摩全域にわたって、近代から現代にいたる多様な学習・文化活動を、歴史を文学、教育、産業、地理、自然など多様なテーマから論じた研究に、雑誌〈多摩のあゆみ〉がある。これは三多摩地域の地域文化発展に寄与をしてきた多摩中央信用金庫の財団である「たましん地域文化財団」から発行されている三多摩をテーマにした季刊誌であり、社会教育をテーマにした号もみうけられる³⁶。多摩百年史研究会編著『多摩百年のあゆみ』のように、三多摩の通史を描いた書もみられる³⁷。三多摩が近代に成立してから100年に及ぶ政治、産業、などを論じており、自治体史の変遷や年表などを含めて三多摩の容貌を描いている。神奈川県に属していた三多摩が1893年に東京府に移管されて100年にあたる1993年には、多摩100年の歩みをまとめた著書も出されており、鈴木理生³⁸、あるいは松岡喬一による研究³⁹などがある。

近現代の多摩の通史を論じた研究には、五日市憲法発見者の研究グループの一人である

江井秀雄の研究があるが⁴⁰、これは三多摩の近現代を近代の開国、明治維新、自由民権運動から現代の多摩の都市化までを論じたものであり、教育史は含まれていない。

三多摩地域を研究分野そのものとして把握しようとする試みもなされている。それが東京経済大学多摩学研究会『多摩学のすすめ』シリーズである⁴¹。多摩学とは、多摩を一つの地域として捉え、異なった学問分野からトータルに研究する試みである⁴²。領域や対象など不明瞭な部分も多くみられるが、三多摩という地域を学問分野そのものとして総合的研究に位置づけようとする試みが行われていたことは注目されよう。

一方、三多摩における社会教育史研究としてみると、自由民権運動などいくつかの個別具体的な事例が取り上げられてきているが、総体的な視点から論じられた既存の研究はほとんど存在しなかった。また戦後三多摩に関する社会教育史研究としては、東京都立多摩社会教育会館による『戦後三多摩における社会教育のあゆみ』シリーズがある。同シリーズは、戦後三多摩における社会教育の歩みを史料やインタビュー、座談会などにより実証的に検討したものである⁴³。対象となっている分野も広く、子ども会活動、婦人会、共同学習、青年団、社会教育行政と多岐にわたっている。その史料的価値も含め戦後三多摩の社会教育活動を収集している点に意義を見いだすことができる。ただし、同書以外に三多摩の戦後社会教育史を論じた研究はあまりみられない。

このように三多摩地域で展開されてきた学習・文化活動に関して、一定の蓄積があったことは認められる。本論文では、新たに第一次資料を発掘しつつ、近現代の三多摩の学習・文化活動を「自分史」及びその源流に焦点化して検証しながら、三多摩における地域社会教育史研究に新たな示唆を与えたいと考えている。

(4) 研究手法

本論文は、三多摩地域における地域文化活動、幅広い社会教育実践に関する文献を広く渉猟した上で論じている。たとえば奚疑塾に関しては、新たに発掘した錦絵などの資料を用いている。青年の文芸活動、地域サークル活動については、プランゲ文庫の資料も利用している。

また本論文は橋本の「ふだん記」に重点を置いており、橋本自身の学習論や運動論に関する著作及び、「ふだん記」の文友が執筆した文章が分析対象となる。例えば橋本義夫『平凡人の教育と文章』（地方文化資料第49集、1960年）、橋本義夫『みんなの文章～万人文章論』（ふだん記草子第1、みんなの文研究会、1960年4月初版発行、1968年4月増補再

販発行)、橋本義夫『ふだん記案内-万人の書く文・出せる本-』(ふだん記新書 31、ふだん記全国グループ、1976年)、橋本義夫『ふだん記の大道-その道標-』(ふだん記全国グループ、1978年)、橋本義夫『だれもが書ける文章』(講談社現代新書、1978年)、さらに既存研究では取り上げられることのなかった橋本による青年論である、橋本義夫「青年版『ふだん記』のすすめ」(<青年>日本青年館、第133号(1981年6月)-第157号(1983年6月))などがある。その他、橋本の関係者、及び文友へのインタビューなどから得られた第一次資料に基づきながら、論じていく。

(5) 本論文の意義

本研究の第一の意義は、戦後の社会教育実践の一つとして注目されてきた「自分史」の源流を解き明かすことにある。現在ブームとも言われる「自分史」であるが、その源流の一つは「ふだん記」にあるとされながらも、これまで検証が必ずしも十分ではなかった。もし、源流の一つが「ふだん記」にあるとするならば、「ふだん記」はなぜ、そしてどのように生まれてきたのであろうか。本論文では、「自分史」の源流とされる「ふだん記」が、どういった歴史的経緯、社会環境、人的ファクターの中でいかに成立してきたかに迫ることで、社会教育史研究の新たな側面を開くことを企図している。

第二の意義は、人はなぜ書くのかを、地域社会教育史の視点から考察することである。文章を執筆する実践としては、戦前から戦後にかけて、生活綴方、生活記録、さらに本論文で取り扱う「ふだん記」や「自分史」があり、数多くの文章が草の根の人々により積み上げられてきた。本論文は、そうした執筆者たちが書こうとする意欲をもたらず力の源泉を、三多摩という地域における社会教育の歩みといった視点からみていくことを試みるものである。「ふだん記」の橋本の学習論、運動論、青年論も、分析する意義があると思われる。

現代において文章を書くこと、それを発表することは、パーソナルコンピューター、携帯電話などのハードウェアの普及、インターネット普及に伴うソーシャルネットワーキングサービス(SNS)などのいわゆるメディアの発展に伴い、多様な形で行うことが可能になった。そのため、自らのことや生活に関わることを手軽に書く人々が増えている。文章を書き、読み合うことを通じて人々はお互いにコミュニケーションをとっている。

文章を発表する場(メディア)は違うが、SNSとこれまで積み上げられてきた書く実践では、自身のことを執筆し読み合うという形式(フレーム)に変わりはない。明治維新以

降の三多摩における自己表現活動に関する執筆者の意欲を追うことは、現代的意義もまた帯びている。

第三の意義は、これまで表出されていない、草の根の学習・文化活動に携わってきた人々の存在に光を当てることである。社会教育のすそ野は広い。本論文では、公的社会教育以外の社会教育実践に焦点を当てることで、草の根の人々に対する地域社会教育の役割を再考していきたい。とりわけ本論文においては、学習・文化活動の担い手として青年に注目している。その中には、自由民権運動、大正期の青年文芸誌の活動、奚疑塾、戦後直後の青年学習運動などがある。

顧みれば近世日本には、子どもと大人、成熟者と未成熟者の区分けしかなかった。すなわち、成熟者へと成長する過程にある青年は、近代以降に生まれた存在であるが、いわば未熟でマージナルな存在として位置づけられていた。こうした青年たちが地域の活性化の中核として活躍していた学習・文化活動を明らかにすることは、それ自体が近代以降の人間の成長を問い、現代の社会教育における青年の存在を考える上でも示唆を与えるものである⁴⁴。

活動の過程における熱意や喜び、苦悩などは必ずしも過去の青年だけのものではない。むしろ未成熟な存在であるがゆえの青年たちの自由の獲得への奮闘や苦悩などをみることは、現代青年の社会教育実践を考えるためにも意義があると思われる。

(6) 論文の構成

次に本論文の構成を以下に示し、各部において論じる内容を述べる。

序論

本論

第1部 明治期の三多摩における社会教育実践

第1章 近代三多摩の概要

第1節 三多摩の区域

第2節 近代三多摩の就学率

第2章 自由民権運動期の三多摩における五日市の青年による学習・文化活動

第1節 明治期三多摩における自由民権運動の位置付け

第2節 五日市の自由民権運動

第3節 勸能学校と学芸講談会

- 第3章 自由民権運動期における地域と青年に関する研究
 - 第1節 千葉卓三郎の遍歴
 - 第2節 故郷喪失者を受け入れた要因
 - 第3節 千葉卓三郎の五日市における役割
 - 第4節 千葉卓三郎の精神と地域の青年の受け入れ
 - 第5節 「外来青年」と社会教育実践における意義
- 第4章 明治末期における『週刊多摩新聞』の研究
 - 第1節 明治末期の三多摩における地方新聞
 - 第2節 週刊多摩新聞の地域と概要
 - 第3節 週刊多摩新聞と投書
- 第2部 大正デモクラシー期の三多摩における社会教育実践
 - 第1章 大正期稲城における青年の地域文芸誌の研究
 - 第1節 三多摩における大正デモクラシー期の学習・文化活動に関する先行研究
 - 第2節 大正デモクラシー期のメディアと青年
 - 第3節 稲城における文芸誌活動
 - 第2章 地域通俗教育としての稲城・奚疑塾に関する考察
 - 第1節 奚疑塾の成立の背景
 - 第2節 奚疑塾の教育
 - 第3節 奚疑塾の果たした役割
 - 第3章 近代の私塾における同窓生の研究—奚疑塾を対象として—
 - 第1節 近代における私塾に関する先行研究の到達点と課題
 - 第2節 奚疑塾同窓生の研究
 - 第4章 奚疑塾における錦絵の研究—視聴覚教育の観点から—
 - 第1節 明治期における錦絵と教育
 - 第2節 奚疑塾と教育内容と教育方法
 - 第3節 奚疑塾における錦絵の主題
 - 第4節 奚疑塾における錦絵の内容
- 第3部 戦後直後期の三多摩における青年の社会教育実践—戦中からの復興と戦後社会教育の出発—
 - 第1章 第二次世界大戦下における三多摩の社会教育

- 第1節 第二次世界大戦下における社会教育の全国的状況
- 第2節 第二次世界大戦下の三多摩の社会教育
- 第2章 戦後直後期稲城における青年の社会教育実践の実証的研究
 - 第1節 1940年代後半における三多摩における学習・文化活動の背景
 - 第2節 稲城村青年団の活動
 - 第3節 美を語る会の概要と活動内容
 - 第4節 美を語る会の青年
 - 第5節 サークル活動における青年
 - 第6節 青年教員による人形劇、演劇
- 第3章 「ゴードン・W・プランゲ文庫」にみる戦後直後期の三多摩における青年の学習・文化活動
 - 第1節 プランゲ文庫の概要
 - 第2節 プランゲ文庫の小冊子を通してみた三多摩における青年の学習・文化活動
- 第4部 戦後三多摩社会教育史における橋本義夫及び「ふだん記」に関する研究—「ふだん記」から「自分史」へ—
 - 第1章 橋本義夫の社会教育実践の一側面に関する研究
 - 第1節 橋本に関する先行研究の到達点と課題
 - 第2節 橋本関連資料について
 - 第3節 社会教育実践の視点からみた橋本義夫の実践
 - 第2章 橋本義夫の学習論研究—「ふだん記」を対象に—
 - 第1節 「ふだん記」の成立と平凡人の教育
 - 第2節 橋本義夫の学習論における鍵概念
 - 第3節 橋本の学習論の検討
 - 第4節 「ふだん記」の背景にみえる易行道の書
 - 第5節 「ふだん記」の文友による易行道の受容
 - 第3章 「ふだん記」における青年の学びに関する一研究
 - 第1節 橋本義夫の中にみえる青年の学び
 - 第2節 橋本の考える「ふだん記」の青年の学びにおける意義
 - 第3節 青年の書く「ふだん記」にみる学び
- 附 橋本義夫「青年版『ふだん記』のすすめ」一覧表

第4章 ナラティブの視点からみた書く実践に関する一研究

第1節 ナラティブをめぐる諸相

第2節 書く実践の執筆過程に関する事例分析

第5章 書く実践の意義に関する一研究—「ふだん記」を対象として—

第1節 先行研究及び本章の視角

第2節 「ふだん記」インタビュー調査の概要

第3節 書く実践の意義に関する「ふだん記」のケーススタディ

第6章 「ふだん記」と「自分史」の一考察—橋本義夫による実践の再評価—

第1節 先行研究と本章の位置づけ

第2節 「自分史」の定義・起源と「ふだん記」

第3節 「自分史」執筆の要点と「ふだん記」

第4節 「ふだん記」の執筆内容の検討

補論1 1980年代創始の各地グループに関する研究—「ふだん記」北九州グループ、 あいちグループを対象として—

第1節 「ふだん記」各地グループの概要

第2節 北九州グループ

第3節 あいちグループ

第4節 各地グループの意義

補論2 地域における学習・文化活動の受容過程に関する研究—北海道における初期 「ふだん記」を対象にして—

第1節 先行研究

第2節 初期北海道「ふだん記」関連史料及び本研究に係る調査

第3節 初期北海道「ふだん記」の歩み

結論

参考文献

資料 橋本義夫略年譜と三多摩の学習・文化活動

本論文の構成は以下のとおりである。

第1部は、「自分史」の発祥につながる明治期の三多摩における教育活動を検討する。

第1章では近代三多摩を俯瞰する。第2章では、明治期の三多摩の学習・文化活動の成果

の一つに数えられる五日市の民衆憲法草案起草をめぐる学習運動を取り上げる。第3章では地域における学びの場を生み出す存在としての青年に着目し、五日市憲法起草の中心人物であった千葉卓三郎に焦点をあてる。第4章では三多摩地域の地方新聞を検討する。情報媒体としての地方新聞の側面と共に、投書欄に着目し読者の声を文章で伝達するメディアとしての側面から論じる。

第2部は、自由民権運動の時代を経て、三多摩において学習・文化活動が盛り上がりを見せた大正期の活動を、青年たちが執筆した文芸誌と私塾に焦点を当てて論じる。第1章では青年による地域文芸誌運動を対象に青年たちの取り組みやそこでの考え方を検証する。第2章から第4章の中心テーマは私塾・奚疑塾(けいぎじゅく)である。奚疑塾は1880年～1913年の明治から大正初期にかけて稲城に開設された私塾であり、自由民権運動の薫陶を受けつつ多くの人材を排出した重要な私塾である。

なお、奚疑塾については、新たに発掘した史料を元に論じる。第2章は奚疑塾の果たした役割を、第3章は奚疑塾の同窓生をそれぞれ検証する。第4章は、奚疑塾所蔵の錦絵を分析し、視聴覚教育の可能性をみいだす。

第3部は三多摩の戦中から戦後直後の時期に焦点を当てた考察である。第二次世界大戦下での三多摩の社会教育を論じ、戦後直後の学習・文化活動を検証する。第1章では戦中の社会教育の大要と三多摩における社会教育を論じる。第2章では戦後の出発時に学習・文化活動に取り組んだ青年たちの実践の姿をみる。第3章は占領期の学習・文化活動の諸相を明らかにするため、同時期の貴重な資料群である「ゴードン・W・プランゲ文庫」に収められた三多摩の小規模な機関誌等を検討する。

ここでプランゲ文庫の資料群を取り扱う理由は二つある。第一は戦後直後の学び手の姿を小規模誌から迫りたいと考えたためである。本論文では、大正期の地域文芸誌、あるいは戦後の「ふだん記」など、「自分史」につながる書く実践を分析対象の一つにしているが、戦後直後期のプランゲ文庫の資料の検証を通じて、大正期と戦後とをつなぐことが可能となる。第二には、プランゲ文庫の史料は希少性が高いにも関わらず、三多摩研究において、同史料を取り扱った研究の蓄積が不十分だったことである。

第4部では八王子において戦前から戦後にかけて多様な実践に取り組んだ橋本義夫と書く実践「ふだん記」を対象とし検討を進める。「ふだん記」で特に中心となっているのは書き手の来歴や普段の生活など、書き手自身そのものである。そのため、直接「自分史」とのつながりを見出せる意味で、第4部は本論文の中心となる箇所である。

第1章は橋本に関する先行研究や橋本の来歴に焦点を当てながら社会教育実践の側面から読み解くことを試みる。第2章では「ふだん記」にまつわる橋本のさまざまな理念や考え方を対象にし、「ふだん記」の大要をみつつ、学習論を論じる。第3章は青年教育の視点でみた「ふだん記」の研究である。主に、橋本が日本青年館の雑誌〈青年〉に投稿をした連載記事や、「ふだん記」に執筆した若年層(20代・30代)に着目する。第4章は橋本の励ましを受けながら、「ふだん記」を書く文友と「ふだん記」本という物語を完成させる過程を取り上げ、ナラティブの側面から研究を行う。第5章は、「ふだん記」に執筆した文友へのインタビュー調査や書かれた「ふだん記」をみることにより、文章を書く実践の意義を明らかにする。第6章は、三多摩・八王子で発祥し全国で広がった書く実践「ふだん記」が、重要な社会教育実践として位置づけられている「自分史」に通じることを検証し、戦後社会教育実践史における「ふだん記」の意義を確認したい。

また、第4部の末尾には、「ふだん記」の実践を全国で行っている各地グループを対象にした二つの論考を補論として置いている。各地グループでは三多摩から地理的に離れているものの橋本や「ふだん記」の理念に共鳴しながら活動を行っている。三多摩発祥の書く実践の文化が、全国で独自の発展を遂げていることを示す重要な証左となると思われる。

補論1での研究対象は、1980年代に創始された二つの各地グループ、「ふだん記」北九州グループとあいちグループである。第1節では各地グループの概要、第2節では北九州グループ、第3節ではあいちグループを、それぞれ論じている。第4節では各地グループの意義に関して述べている。

補論2においては、北海道における各地グループの初期の活動を対象にした。北海道の各地グループは全国各地に広がっているグループ活動をみるうえで特に重要な存在である。なぜならば、道内だけで六つ(旭川、札幌、江別、北見、帯広、留萌)と最多の数を誇っており、なおかつ道内の各地グループの集まりである全道交流会など、活発な実践を行っているためである。ここでは、「ふだん記」が北海道に芽吹き、根付くまでの初期の北海道「ふだん記」を追い、学習・文化活動の広がりを探している。これらの補論は、三多摩の水脈の上に培われてきた「自分史」の表現活動が、全国に普及していることを示し、さらに書く実践の今後の展開に示唆を与えるという意義がある。

結論の部分では、第1部、第2部、第3部、第4部の各章のまとめを行い、三多摩地域社会教育史という全体を通じての考察及び今後の課題を述べる。

本論文の末尾には、資料として橋本義夫の略年譜と三多摩の学習・文化活動を対照させ

た表を収載している。

以上、本論文においては近現代の三多摩におけるさまざまな学習・文化活動を、地域社会教育実践史として実証的に考究し、「自分史」の起源を再検証していくものとする。

序論 注

- 1 藤岡貞彦『社会教育実践と民衆意識』草土文化、1977年、p.3。
- 2 「日本社会教育学会第64回研究大会自由研究発表について」、日本社会教育学会第64回研究大会(埼玉大学)発表申し込み資料、2017年。以下の通りである。1. 原理論・理想、2. 歴史、3. 学習主体(女性・子ども・親・外国人・高齢者など)、4. 学習方法・学習過程、学習の組織化、実践分析など、5. 学習支援者(職員・リーダー・PDなど)、6. 支援方法・条件整備、7. 施設(公民館・大学など)、IT、通信・放送など、8. 社会教育団体、ボランティア、NPO、NGOなど、9. 法・行財政・教育計画など、10. 市民運動など、11. 子育て、学校、地域課題など、12. グローバリゼーション、現代的課題、13. その他。
- 3 村田晶子「社会教育の事業と実践 総説」、久保義三、米田俊彦、駒込武、児美川孝一郎編著『現代教育史辞典』、東京書籍株式会社、2001年、pp.319-322。
- 4 鈴木敏正「社会教育実践論の課題」、山田定一監修『地域住民とともに 講座主体形成の社会教育学』北樹出版、1998年、p.12。
- 5 藤岡貞彦『社会教育実践と民衆意識』草土文化、1977年。
- 6 大槻宏樹『近世日本社会教育史論』校倉書房、1993年。
- 7 宮原誠一「社会教育本質論」、宮原誠一『宮原誠一教育論集』第2巻社会教育論、国土社、1977年、pp.15-24。
- 8 松田武雄『近代日本社会教育の成立』九州大学出版会、2004年、pp.6-8。
- 9 大槻宏樹他編著『自己教育論の系譜と構造—近代日本社会教育史』早稲田大学出版部、1981年。
- 10 社会教育基礎理論研究会編『叢書 生涯学習』(全10巻、雄松堂)のうちII『社会教育実践の展開』(1990年)、III『社会教育実践の現在(1)』(1988年)、IV『社会教育実践の現在(2)』(1992年)で取り上げられている。
- 11 例えば、『成人の学習としての自分史』(横山宏、1987年)、『地域に生きるスポーツクラブ』(森川貞夫編、1987年)、『公民館の再発見—その新しい実践』(小林文人、1988年)、『平和学習入門』(藤田秀雄、1988年)などがある。
- 12 戦後社会教育実践史刊行委員会編『戦後社会教育実践史』民衆社、1974年。
- 13 同前、p.1。
- 14 同前、pp.27-137。
- 15 色川大吉『ある昭和史—自分史の試み』中央公論社、1975年。
- 16 小林多寿子『物語られる「人生」 自分史を書くということ』学陽書房、1997年。
- 17 鈴木政子『あの日夕焼け—母さんの太平洋戦争』立風書房、1980年。
- 18 横山宏編著『成人の学習としての自分史』国土社、1987年。
- 19 横山宏「まえがき」、同前、p.2。
- 20 荒井隆「綴り学びあう『自分史』の実践」(同前、pp.104-127)、佐直昭芳「草の根の語り手たち—昭島市高齢者教室文集『ほた火』の実践から」(同前、pp.128-154)、宮澤郁子「女性と自分史学習」(同前、pp.155-186)など。

-
- 21 おがわ・としお「女性4人4様の自分史を読む」、＜月刊社会教育＞37(3)、国土社、1993年3月。手島勇平「奇遇にも戦後50年に高齢者の自分史づくり」、＜月刊社会教育＞40(6)、国土社、1996年6月。吉沢輝夫「生涯現役論と自分史づくり」、＜社会教育＞53(1) 1998年1月、全日本社会教育連合会。川又俊則「大衆長寿社会の自己表現・自分史と葬り方に見る」、＜月刊社会教育＞42(9)、国土社、1998年9月。などがある。
- 22 添田祥史「識字教育方法としての自分史学習に関する研究-ナラティブ・アプローチからのモデル構築の試み」、＜日本社会教育学会紀要＞(44)、日本社会教育学会、2008年、pp. 41-50。
- 23 中澤智恵「私を書く 物語を書く」、赤尾勝己、山本慶裕『学びのスタイル生涯学習入門』玉川大学出版部、1996年、pp.28-42。「ふだん記」に関して言及しており、まず書かせるようにする「ふだん記」創始者の橋本義夫の理念を明快であると評価している。
- 24 日本社会教育学会年報編集委員会編(委員長 三輪建二)『成人の学習』東洋館出版社、2004年。
- 25 色川大吉「現代の常民—橋本義夫論 昭和精神史序説」、＜中央公論＞89(8)、中央公論新社、1974年8月。
- 26 小倉英敬『八王子デモクラシーの精神史 橋本義夫の半生』日本経済評論社、2002年。
- 27 橋本鋼二『万人に文を 橋本義夫のふだん記に至る道程』揺籃社、2017年。
- 28 『「ふだん記」運動の展開過程と戦後のリテラシーの変容に関する実証的研究』、平成15-16年度科学研究費補助金基盤研究(c)(2)研究成果報告書(研究代表者 小林多寿子)、2005年。
- 29 小林多寿子「書く実践と自己のリテラシー」、桜井厚編『戦後世相の経験史』せりか書房、2006年、p.240。
- 30 色川大吉『民衆史—その一〇〇年』講談社、1991年。
- 31 柳田國男『明治大正史 世相編』新装版、講談社、1993年、p.3。
- 32 北田耕也『大衆文化を超えて 民衆文化の創造と社会教育』国土社、1986年。
- 33 同前、p.12。
- 34 北田耕也監修、地域文化研究会編『地域に根ざす民衆文化の創造「常民大学」の総合的研究』藤原書店、2016年。
- 35 山崎功「東京・多摩における民衆の学習・文化活動」、北田耕也監修、地域文化研究会編『地域に根ざす民衆文化の創造「常民大学」の総合的研究』藤原書店、2016年。
- 36 例えば、第136号「近現代の多摩農業」(2009年11月)や第129号「かわりゆく駅風景」(2008年2月)では多摩の産業を取り上げており、第147号「多摩の小川」(2012年8月)では自然をテーマにしている。教育をテーマにした号もあり、一例を挙げると第125号「地域の教育力—寺子屋から学校へ」(2007年2月)のような地域教育を対象にした号や、第144号「戦後多摩の公民館活動」(2011年11月)、第120号「わたしたちの図書館・博物館」(2005年11月)のような社会教育をテーマにした号も発行されている。三多摩を長いスパンでとらえた特集としては、例えば第41号「多摩の大正時代」(1985年11月)、第72号「多摩百年—その歴史と未来—」(1993年8月)、第100号「二〇世紀の多摩」(2000年11月)などを挙げる事ができる。
- 37 多摩百年史研究会編著『多摩百年のあゆみ』けやき出版、1993年。
- 38 鈴木理生『多摩・東京—その百年』たましん地域文化財団、1993年。
- 39 松岡喬一著『多摩近現代史年表』たましん地域文化財団、1993年。
- 40 江井秀雄『多摩近現代の軌跡—地域史研究の実践』けやき出版、1995年。
- 41 東京経済大学多摩学研究会編『多摩学のすすめ I』けやき出版、1991年、東京経済大学多摩学研究会編『多摩学のすすめ II』けやき出版、1993年、東京経済大学多摩学研究会編『多摩学のすすめ III』けやき出版、1996年。
- 42 柴田徳衛「多摩学の試み」、東京経済大学多摩学研究会編『多摩学のすすめ I』けやき出

版、1991年、p.24。

⁴³ 『戦後三多摩における社会教育のあゆみ I』(東京都立多摩社会教育会館、1988年)から『戦後三多摩における社会教育のあゆみ IX』(東京都立多摩社会教育会館、1998年)まで。研究時期は戦後直後の学習文化運動から1970年代の住民運動までが対象となっている。

⁴⁴ 多仁照廣『若者仲間の歴史』日本青年館、1984年。多仁照廣『青年の世紀』同成社、2003年。

本論

第1部 明治期の三多摩における社会教育実践

第1章 近代三多摩の概要

1874年における民選議院設立建白書の提出などから全国的に起こった自由民権運動の流れは、三多摩に影響を及ぼしていた。三多摩においては、政治運動や社会運動が学習・文化活動と結びつきながら展開をしていた。第1部では自由民権運動下の三多摩における社会教育実践を論じる。

本章ではその前提として、近代三多摩最初の広範な学習・文化活動が展開された時期である自由民権期から戦後文化運動まで収集・整理し、社会教育的役割をまとめる。本章では三多摩における青年の社会教育実践を整理、俯瞰することによって、研究対象の概要を把握する。中でも三多摩の社会教育実践を、活動の形態から分類しつつ、活動の教育性や地域との関係をとらえることを念頭に置いている。三多摩の社会教育実践の概要の俯瞰は、以下の各章での検討にあたり、全体の指標を示す意義がある。

本章第1節では、三多摩の地理や歴史の概要、第2節では、三多摩の教育に関する基礎データを取り上げる。三多摩の概要を整理することによって本論文の問題の所在を考察したい。

第1節 三多摩の区域

三多摩は東京都の西部に位置し、その区域には現在の東京都から区部及び島嶼を除いた地域が該当する。「三」多摩の名が示すように、大きく分けて北多摩、南多摩、西多摩の三つの地域から構成される。三多摩は関東平野の一角に立地し、武蔵野台地、多摩川低地及び多摩丘陵が領域に含まれ、西多摩郡の西部は、関東山地にかかっている。そのため、平地から台地、山地と地理的には多様な特性を帯びている所に特徴がある。それぞれ東は東京区部、北は埼玉、南は神奈川、西は山梨に接し、とりわけ南は横浜港に通じているため、貿易における交通の要所として機能していた。

三多摩の地域は、それぞれ以下の自治体が含まれる。北多摩郡は、現在の立川市、武蔵

野市、三鷹市、府中市、昭島市、調布市、小金井市、小平市、東村山市、国分寺市、国立市、西東京市、狛江市、東大和市、清瀬市、東久留米市、武蔵村山市、世田谷区の一部(旧砧村、旧千歳村、世田谷区に 1936 年に編入)から成っている。東京区部に最も近い地域である。

南多摩は現在の八王子市、町田市、日野市、多摩市、稲城市で構成されている。多摩川以南の地域であり、戦後にはニュータウンが造成されるなど東京のベッドタウンの役割も持っている。

西多摩は青梅市、福生市、羽村市、あきる野市、瑞穂町、日の出町、檜原村、奥多摩町から成る地域である。なお、現在西多摩郡の名称は、瑞穂町、日の出町、檜原村、奥多摩町にのみ残っている。

近代において主な産業は農業であったが、八王子などでは織物業も盛んであり、さらに東京都心部の近くである立地条件から、北多摩を中心に工場の移転もあった。

三多摩の地域区域が成立したのは、1878(明治 11)年の郡区町村編制法による。「郡区町村編制法」第一条には、「地方ヲ畫シテ府縣ノ下郡區町村トス」とあり、地方を区分し、府県の下に郡区町村が分けられるとある。すなわち、この郡区町村編制法により北多摩郡、南多摩郡、西多摩郡の区画が成立したのである。

なお、三多摩において三多摩は成立当初、神奈川に属していたが、1893(明治 26)年に東京府に移管された。東京都の資料である東京都編『水道問題と三多摩編入』(都史紀要 15、東京都、1966 年)をみると、東京の水源である多摩川などを東京の所管に置くことや、当時自由党の地盤であった三多摩を神奈川県から切り離すなどの理由が示されており、諸説がある¹⁾。

三多摩移管に関しては本論の中心的テーマではないので、移管理由の詳細を論じることはない。しかしながら、三多摩は近代の出発時においてその帰属に曲折があったことは念頭に置いておきたい。すなわち、政治の影響により大きく行政地域が変化していたのであり、なおかつ自由民権運動とも関わりが深かった点が認められる。

第 2 節 近代三多摩の就学率

本節では三多摩の出発時における教育を取り巻く状況を見るために就学率を確認する。参照するデータは、大正年間に三多摩の各郡役所である北多摩郡役所、西多摩郡役所及び南多摩郡役所から出された三多摩の統計資料である。それぞれ『北多摩郡誌』は 1912(大

正元)年、『東京府西多摩郡第一回郡勢一斑』が1914(大正3)年、『南多摩郡誌』は1923(大正12)年に出版されている²。『北多摩郡誌』の発行が早く、年代は西多摩・南多摩と時期はずれるものの、少なからず地域の教育を取り巻く状況を把握ができる史料である。いずれも各郡の沿革も含む調査などの概要を収めた文書であり、土地・地勢などの地理情報、さらに戸数や人口などの戸籍関係のデータ、農業工業などの産業状況とともに教育に関するデータが収められている。例えば学校数、教員数、児童生徒数、就学率に加え教育費のデータもここからみることができる。

まず北多摩郡の教育に関する統計を取り上げる。北多摩郡役所から出された『北多摩郡誌』には主に1900(明治33)年の調査結果が収められている。同年は小学校令の改正及び小学校令施行細則が制定された年であり義務教育は4年である。義務教育が実質無償となり、公教育制度が確立した時期にあたる。

就学率を以下の表に示した。

表1 1900(明治33)年3月における学齢児童数及び就学率(北多摩郡)

学齢児童		合計	就学歩合		不就学児童内訳
就学児童	不就学児童		百人ニ対シ	全上平均	
男	6,649	1,139	7,788	85.37	猶予 疾病男 300 女 400 700 貧困男 815 女 2109 2924
女	4,450	2,533	6,983	63.73	
計	11,099	3,672	14,771		免除 疾病男 9 女 6 15 貧困男 15 女 18 32

*「明治三十三年三月ニ於ケル學齡児童及就學歩合」北多摩郡役所『北多摩郡誌』、1912年、p.49。原典の縦書きを横書きに換え、新字に置き換えている。

就学率はそれぞれ男85.37%、女63.73%の平均75.14%であった。1900(明治33)年当時の全国の就学率は男90.6%、女71.7%、平均81.5%であり³、いずれのカテゴリーでも就学率は全国よりも下回っている。特に女子はその差が顕著である。さらに貧困などを理由とする猶予免除は女子に相当数があり、実際はここで示されている数字よりも就学者は少なかったであることが推測できる。

それでは西多摩の状況はどのようであろうか。西多摩郡の状況が記されている、『東京府西多摩郡第一回郡勢一斑』は1914(大正3)年の発行であり掲載されているデータは、北多摩郡のものより少し後の1912(大正元)年のものである。北多摩郡の上記の数値と直接比較できないため、全国のデータと比較を行った。

表 2 1912(大正元)年度における学齢児童数及び就学率(西多摩郡)

尋常小学校の 教科を修ル者		尋常小学校卒 業者		合計		不就学		
男	女	男	女	男	女	男	女	
4,672	4,450	1,644	1,416	6,326	5,866	123		336
総計		就学始期ニ達 セサル者		通計		就学歩合		
男	女	男	女	男	女	男百人中	女百人中	男女百人中
6,449	6,202	917	895	7,366	7,097	98.09	94.58	96.37

*「学齢児童 大正元年度」西多摩郡役所『東京府西多摩郡第一回郡勢一斑』、1914年、p.94。原典を一部抜粋し縦書きを横書きに換え、新字に置き換えている。

ここでは西多摩郡の1912(大正元)年度の学齢児童に関する概要のうち、就学率等の数値を抜粋した。表2によれば、就学率は男98.09%、女94.58%、全体96.37%であったことがわかり、同年の全国の就学率、男98.8%、女97.6%、平均98.2%⁴とくらべると。若干ではあるものの下回っていることがわかる。

次に南多摩の就学率等のデータを確認する。参照した史料は『南多摩郡誌』である。年次変化のデータも掲載されており、以下の表では1917、1916、1914(大正6,5,3)年度及び1909、1904、1899(明治42,37,32)年度の学齢児童数及び就学率等のデータを引用した。

表 3 学齢児童数及び就学率(南多摩郡)

	既ニ就学ノ始期ニ達シタルモノ						未タ就学ノ始期ニ達セサルモノ		学齢児童合計		百人中就学歩合		
	就学		不就学		計		男	女	男	女	男	女	男女
年度	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男女
大 6	6,052	5,662	117	318	6,169	5,980	1,024	1,004	7,193	6,984	98.10	94.68	96.41
大 5	8,613	7,666	168	431	8,781	8,097	1,389	1,312	10,170	9,409	98.09	94.68	95.08
大 3	8,096	7,314	241	556	8,337	7,870	1,253	1,262	9,590	9,132	97.11	92.94	95.45
明 42	9,299	8,089	224	631	9,523	8,720	1,036	984	10,559	9,704	97.65	92.76	95.32
明 37	6,895	6,079	217	804	7,112	6,883	1,041	1,028	8,153	7,911	96.95	88.32	92.70
明 32	6,844	4,826	1,461	2,935	8,305	7,761	517	587	8,822	8,348	82.41	62.18	72.64

*大正 5 年度以前は八王子町を含む

*「学齢児童」『南多摩郡誌』南多摩郡役所、1923 年、pp.57-58。原典を一部抜粋し縦書きを横書きに換え、新字に置き換えている。

全国の就学率の年次それぞれの数字を参照しながら、表 3 と比較させながらまとめたのが、以下の表 4 である。

表 4 南多摩郡全国の就学率の比較

就学率	全国男	南多摩男	全国女	南多摩女	全国	南多摩
明治 32	85.1	82.4	59.0	62.2	72.8	72.6
明治 37	97.2	97.0	91.5	88.3	94.4	92.7
明治 42	98.9	97.7	97.3	92.7	98.1	95.3
大正 3	98.8	97.1	97.7	92.9	98.3	95.5
大正 5	99.0	98.1	98.2	94.7	98.6	95.1
大正 6	99.1	98.1	98.4	94.7	98.7	96.4

*データは%、『学生百年史』文部省、1972 年、p.321。より全国の就学率を、南多摩郡の就学率は、前表から再掲し、比較のため小数点以下 1 桁に四捨五入し掲載した。

南多摩郡と全国の就学率を比較すると、第一に、総計の就学率は南多摩郡がすべて下回っていることである。第二は、女子の就学率であるが、1899(明治 32)年こそ全国平均を上回っているものの、他の年は全国を 3 ポイント近く下回っており 1 ポイント前後の男子よりも差が開いている。女子は全国平均を大きく下回っていることがここから読み取れる。

小結

本章では三多摩の地理や成り立ちなど、大要に関して確認した。まず都心部に隣接しながら都心部と異なる地域であることを確認した。加えて北多摩、南多摩、西多摩それぞれ三つの異なる地域的特性を持っていることを伺うことができた。さらに都心と隣接しているものの、就学率は全国平均と比べても下回っており、必ずしも学校教育は先進的に整備が進められていなかったことも推察できた。

第 1 部 第 1 章 注

1 鈴木理生『多摩・東京—その百年』たましん地域文化財団、1993 年の第 1 章「三多摩編入事件」において詳細が論じられている。そこでは三多摩編入事件の原因を三つに整理しており、「イ、水道問題(玉川上水の維持・管理をめぐる問題)を主な理由とするもの。ロ、自由党弾圧の一つの手段として、その最大の地盤であった三多摩を、神奈川県から切り離すための措置。ハ、ロを実現させるためイを表向きの理由にしたというもの(同書 p.24)」の 3 点をあげる。理由は諸説わかれているが、三多摩の東京への編入は、東京都のインフラ等の格差などの三多摩格差問題や、ベッドタウンとしての多摩地域など、三多摩のその後の方向性に影響を及ぼす事件であったと推察される。

2 『北多摩郡誌』は象山社により 1983 年に、『東京府西多摩郡第一回郡勢一斑』(復刻時タイトル『西多摩郡誌』)は千秋社により 1993 年に、『南多摩郡誌』も千秋社に 1994 年にそれぞれ復刻されている。

3 『学生百年史』文部省、1972 年、p.321。

4 同前。

第2章 自由民権運動期の三多摩における五日市の青年による学習・文化活動

本章では、近代三多摩における最初の大規模な学習・文化活動である自由民権運動期の実践を取り上げる。とくに五日市（現あきる野市）において起草された私擬憲法である五日市憲法を取り巻く青年たちによる活動を対象とする。

五日市は西多摩郡に位置し、西部は山地に接する地域である。1889年4月1日には神奈川県西多摩郡五日市町と小中野村が合併し西多摩郡五日市町が成立、1995年9月1日に秋川市と合併し、現在はあきる野市となっている。旧秋川市、八王子市、青梅市、日の出町、奥多摩町、檜原村と隣接している地域で、西多摩郡の中南部に位置している。

明治期の五日市地域では、当時この地にも自由民権運動が盛んであったことを象徴する、千葉卓三郎らにより起草された五日市憲法の存在が著名である。この憲法草案の作成過程で重要な役割を果たした学習組織である勸能学校や学芸講談会も、また注目に値する実践である。こうした五日市の自由民権運動は、色川大吉らの研究グループによって発見され研究が行われてきた¹。

社会教育における先行研究においても三多摩の自由民権運動が取り上げられており、例えば、藤田秀雄は五日市の自由民権運動下の学習活動を教育権や学習権の視点から評価している。藤田は「わが国の自己教育運動は、自由民権運動下の学習結社の活動からはじまる²」と述べ、自己教育の原点であるとも論じている。しかしながら、活動の背景となった学習理論を中心に論じていることもあり、活動への言及はそれほど多くない。

そこで本章では、五日市における取り組みを社会教育実践そのものとして評価をしながら論じたい。特に学習に意欲的に取り組む青年の姿を浮かび上がらせる。これらの成果は、現代の青年の地域活動のあり方を考える際においても示唆を与えることができると考える。

以下、本章は次の構成となる。第1節では三多摩全体における自由民権運動の背景を論じる。第2節では三多摩西部に位置する五日市の自由民権運動の大要について述べる。第3節では五日市において展開された実践である勸能学校や学芸講談会を対象に、その内容や活動の姿を見ることにより社会教育実践としての特質を示す。

第1節 明治期三多摩における自由民権運動の位置付け

五日市の青年による学習・文化活動を取り上げる前に、三多摩全域を対象に自由民権運

動がどのように機運が高まっていたのか、その背景を探ってみたい。なお、三多摩にとっての明治時代とは 1878 年 11 月に施行された郡区町村編制法による西多摩郡、南多摩郡、北多摩郡成立、1893 年の東京への移管がされるなど行政的に大きな変化の流れが幾度も訪れる状況にあり、政治的関心が高まりやすい時期であった。

自由民権運動は単に政治運動だったのではなく、多様な学習・文化活動も併せて展開されていたことを特徴とする。例えば、自由民権運動下の学習・文化活動が盛んであったことは、当時の三多摩地域の民権・学習結社が、61 の数に上っていることから示されている³。そもそもこの運動の中心時期がいつ頃であったかという問題であるが、この自由民権運動の時期は、色川ら五日市を中心に三多摩の自由民権運動の研究グループによって次の通り明らかにされている。

「一般にこの運動はその始点を民選議員設立建白のあった一八七四年(明治七)、クライマックスを明治一四年の政変の起きた八一年においている。終期については、①一八八四年の自由党の解党の時点、②一八八七年の保安条例の発布による三代事件建白運動の敗北の事件、③一八八四年の初期議会の終了の時点の諸説あるが、私たちは制度的に明治憲法体制が確立する一八八九年(明治二二)ごろまでとした。しかし、これらの諸説にしても、八一年が自由民権運動の画期であることには異論がなく、それまでを運動の高揚期、八二年六月以降を退潮期としている点も共通している⁴。

1874 年は民撰議院設立建白書が 1 月に提出されたほか、4 月には板垣退助らにより立憲社が設立されるなどまさに自由民権運動の出発点である時期である。終期については上記の通り諸説あるが、クライマックスは憲法論議が非常に高まった明治 14 年の政変の起こった 1981 年であるのとらえるのが自然であろう。すなわち、この 1874 年から 1881 年が三多摩最初の学習・文化活動の機運が最初に高まった時期とも考えることができる。

なお、自由民権運動の起点である 1874 年は三多摩が神奈川県地域変更法により東京府に移管された 1873 年の前年にあたる。この最初の東京府編入は近代三多摩の起点の一つとなる時期であり、このように近代の三多摩が大きく変化した時期に自由民権運動が起こったことは、学習・文化活動の展開をみるにあたって念頭に置くべきことと思われる。自由民権運動は規模の大きさや内容の広さから、単なる政治運動ではなくむしろ学習運動としての側面も内包していた。このことは、教育史研究者である片桐芳雄が「自由民権運動は、一般に、あらゆる政治運動は必ず何らかの意味で学習運動を内包する以上に、民衆の学習熱を必要としたのである⁵」といったことにも示されている。

加えて、三多摩における自由民権運動の性格に関しても言及しておきたい。三多摩での自由民権運動は、色川によれば「福島や越前、美作などとならんで、全国的にも『豪農民権』の指導性が終始強力につらぬかれていた⁶⁾」という性質を持っていたといい、さらに、初期の神奈川県令が開明的なこともあり、「他県のように保守的な県令を相手とする初期の民会闘争を経験する事なく⁷⁾」地方政治への住民参加の道が開かれた地盤があったという。これらについて色川大吉は、三多摩民権運動の性格を「比較的温和なもの、教育的文化的な色彩の強いもの⁸⁾」にしたと性格付けている。三多摩に多くの学習結社が生まれたことにはこうした背景が作用していたのではないかと推測される。さらに、当時三多摩は絹の生産地から出港場所の横浜まで運ぶいわゆるシルクロードがあり生糸貿易の流通の重要経路だったことから、物流だけでなく、思想や文化も流入しやすい地域でもあった⁹⁾。三多摩の自由民権運動の活性化にはこのような影響もうかがえる。

なお、自由民権運動下の学習・文化活動に関わる結社は、五日市だけでなく三多摩に広く存在していたようである。例えば、南多摩郡町田においた 1878 年に南多摩郡野津田村（現町田市）を中心とした数か村の豪農など 27 名によって発足した「責善会」が挙げられる。18 歳から 58 歳までの青年、壮年、老年の混成となっており、主に例会での討論が行なわれており、年齢による旧来のルールから解放され、平等な立場での議論であったようである¹⁰⁾。

さらに、北多摩郡粕江でも地域の民権家により 1879 年末から 1880 年始めに誕生した学習を主体とした民権結社で母体が講組織になっている「交潤講益社」の活動がされるなど¹¹⁾、五日市が位置する西多摩のみならず、自由民権運動期における学習結社は三多摩の各地でおこなわれていた。60 社を越えていた学習結社が三多摩の各地に存在し、結社の中において学びが展開されていたことには、自由民権運動の中での学習・文化活動が、三多摩の各地域に息づいていたことを示すものと考えられることができる。

第 2 節 五日市の自由民権運動

五日市では文化的渴望をもつ富裕層による啓蒙活動は明治に入り、村政自治に密着し、積極的な学習活動を通じて若い民権家の育成と、自由民権運動の基礎固めを行っていき状況となっていた¹²⁾。こうした状況に対して、歴史学者の新井勝紘は「五日市は地理的にみると確かに山深い里といえるが、新しい西欧文化や情報の伝達には、多面的な機能が重層

的に働きあい、山村でありながら他地域とは比較にならないほどの情報がいち早く入り込み、伝統的な農村共同体とその構成員に刺激を与えてきた¹³⁾と指摘している。これは、この時期の学習・文化活動は地理的な理由よりむしろ他の原因があったことを読み取れる。新井は重層的な働きあいと述べているが、この一因には活動を担う人間の影響もあったことは容易に想像できよう。

では、五日市はなぜ三多摩の中でも特に他に先駆けて自由民権運動が発展していったのであろうか。この発展の背景に関して新井は、三つの多面的な機能が重層的に働き、情報が入り込んで刺激を与えたことを言及している。その機能とは、①五の日ごとに立つ市で終結する人々のコミュニケーション ②林業の発達による木材を運ぶ多摩川の「筏道」と呼ばれるルートが存在 ③明治期以降の横浜→町田→八王子と結んだ「絹の道」のルート、の3点である¹⁴⁾。これと同時に、こうした新しい文化の流入を受け入れる人々の存在も重要な要素である。これにより、五日市には地元有志、活動に参加する青年、外から流入する文化(人)、による交流、それを生み出す「場」の形成、それぞれがぶつかり合って緊張関係を生むシチュエーションが作り出されていく循環を生み出していた。

五日市での自由民権運動のうち特に著名な成果の一つとして数えられる五日市憲法起草の背景には、上記で述べたようなさまざまな人間による交流が背景にあったといえるであろう。すなわち、自由民権運動の学習・文化活動の鍵には、実践を行っている人間の存在が重要であったと思われる。

五日市で実践を行っていた人間にはどのような人々かという点に目を向けると、自由民権運動は土着の人間だけによって担われていたのではない様子がみえる。例えば、(五日市の豪農であり後に衆議院議員になった)内山安兵衛や(後に神奈川県議会議員になった)深沢権八ら活動当時の若手グループ、五日市の自由民権活動のリーダーであった馬場勘左衛門や土屋勘兵衛・常七兄弟ら老年在地名望家グループと、千葉卓三郎や長沼織之丞ら仙台藩士出身のインテリ外来グループとがうまく融合し、運動を飛躍的に押し進めた地域であったことがうかがえるのである¹⁵⁾。五日市の私擬憲法、五日市憲法はこれらのさまざまな人々によりできあがっていた。このような、青年層、地元有志、地域の外からの人々によって成り立った協働による実践は、五日市の学習・文化活動の中にさまざまな形でみることができる。

多数の青年達や五日市の外の地域から入った人間が自由民権運動下において活動に関わりを持つことができたことは、五日市において豊富な学習・文化活動が展開されたことの

要因の一つと推測される。すなわち五日市には、外からの力を受け入れる開放性があったのではなかろうか。

五日市の開放性を示す事例として、千葉卓三郎など多くの人物が他地域から流れ着き、地域へ影響を及ぼすことができたことをその一つに数えることができる。例えば新井勝紘の指摘を参照しよう。新井は五日市を「さまざまな屈折した体験をもつ故郷喪失者のような人間を自由に受け入れ、かれらの実力が存分に発揮できる開放的な“場”¹⁶⁾があったと述べている。五日市には千葉卓三郎をはじめ、多くの流れ着いた人々が定着していったのであるが、こうした人々の存在が、五日市憲法草案を生み出したことについて着目したい。新たな地域文化を生み出すための要因には、このように他個所からのエネルギーの受け入れがその一端を担っていると考えられているからである。他にも、歴史学者の江井秀雄の指摘もある。江井は「共同体が頑迷な閉鎖性を持たず、逆に外部の人間を積極的に彼らの地域に招き、同化させていった¹⁷⁾」と、五日市について開放性を特徴に挙げている。この五日市の開放性は外から多くの人々を受け入れ、結果的に地元有志と外からの文化との交流を生み出す前提条件として、欠くことのできないものだったといえるだろう。

本節では五日市における自由民権運動の背景をみてきたが、五日市のもつ開放性は、地域の外からの人々を受け入れ活躍の場を提供していたことを伺うことができた。次節ではこの過程が具体的にどのように行われていたかを、活動内容から論じていきたい。

第3節 勸能学校と学芸講談会

(1) 勸能学校

本節で取り上げる勸能学校とは五日市の周辺地域である五日市・深沢・入野・館谷の四か村連合で設置された公立の小学校であり¹⁸⁾、五日市憲法の起草や後述する学習活動である学芸講談会における拠点となった学校である。

勸能学校に関しては、概要や状況がわかる記録が残されているが、その一つが1884年3月の勸能学校校則(草案)である¹⁹⁾。この校則は、29条の条文と学校新築に関する1条からなっている。また総則や費目、学務委員や教員の責任などによって構成されており、学校の概要を知ることができる。校則(草案)のうち序文には都会や地方などの区別のない学校による教育を行いたいとする考え方を示している箇所もある²⁰⁾。五日市は西多摩で都心に接した地域ではなかったが、地方にも教育を普及することが重要との気概で学校を興して

いたのである。

では、実態はいかようであったか。勸能学校の状況は、五日市に後の小田急の創始者であり、五日市で教員を務めていた利光鶴松による「利光鶴松翁手記」における記述が参考になる²¹。利光の手記にはいくつかの重要な指摘がみられる。第一には五日市が自由党の首領株が多くいたこと、第二には公立学校の名目で設立されていたものの、実態としてはむしろ全国から「浪人」を引き受けて配置し、むしろ正規教員よりも重んじていたことである。そのため学校ではあるが、むしろ内情は他の地域からの人の引き受け所のような体であったことがわかる。このように五日市にあった他地域から受け入れる風土は、具体的な機関の中で実践されていたことがわかる。

このような勸能学校の状況に関しては数字の上にもあらわれている。「勸能学校教員表」によれば、勸能学校の教員 28 名のうち、出身地が確認できる中で三多摩出身の教員は西多摩郡 2 名(留原 1)、南多摩郡 2 名(川口、南平から各 1)を数えるのみで、北は宮城県から南は大分県まで広がっている²²。こうした様々な人が集まって生み出されたこの学校の状況に対して、新井勝紘は「個性豊かな人間集団を作り、学校教育と呼ばれる狭い領域にとどまらず、五日市やその周辺地域の社会教育を果たしながら、自由民権運動の一翼を担ったのではないだろうか。バラバラな個性の集まりが、むしろ県から郡へ、郡から町村へと下りてくる画一的な教育支配体制をはねのけ、自由奔放な教育を生み出していった。²³」と分析をしている。学校を舞台にしながらも社会教育的組織であったともみることもできよう。

教員にさまざまな地域から人々がつどっていたことから、学習・文化活動の拠点機関の観点から勸能学校をとらえると、勸能学校は人材を集める拠点となったことで新たな学習・文化活動の発展の基盤としての役割を果たしていたとみることができよう。この五日市のケースでは地域の学習・文化活動展開の背景に組織的支えがあったことが伺える。

(2) 学芸講談会

続いて五日市における学習・文化活動の展開を示す事例に学芸講談会をとりあげ、その活動をみていきたい。学芸講談会を端的に説明すると、文字通り「学芸について講談を行う」学習結社である。ここには前述した勸能学校のメンバーを中心に作られており、この会の概要は「学芸講談会盟約」などからも推察することができる²⁴。

議論のテーマは学芸講談会における討論題集からみることができる。討論題集の内容を

みると、法律、憲法、選挙制度など五日市憲法起草に関わる政治・法律に関する内容を多角的に論じていたことが分かる²⁵。

さらに「会員名簿」の年齢構成をみると、自由民権運動のピークである 1939 年時点の年齢では 39 名の半数のうち、千葉卓三郎や深沢権八を含め 15 名の 20 歳代の会員、5 名の 10 代の会員が含まれており、ほぼ半数が青年層となっている²⁶。また、会の青年たちの出身も地元五日市以外にも宮城、秋田、福岡などに広範に渡っている。

学習・文化活動の伸展に寄与していた。地元青年の地域への影響やその中でみえる人間の成長との関わりに目を向けてみよう。ここで対象にする人物は、五日市での文化活動の中核を担っていた人物であり五日市の青年のリーダー的存在であった深沢権八である。深沢権八は深沢村の名主である深沢名生の長男であり、父名生はいわゆる現代でいう「名士」の存在であったと思われる。名生は若い頃、穴沢天神という部落の小さな神社の神官をかねており、皇学や漢学に関心をもっていた。そのために深沢権八も漢籍に親しみ、中でも漢詩を愛好していたようだ²⁷。近代初期の日本において漢詩は知識層にとってはある種の「たしなみ」の役割をもっていたものであり、深沢もそうした人物の一人であったのであろう。

深沢権八の人物像は前述の「利光鶴松翁手記」に「深沢権八氏ハ五日市地方ノ豪農ニテ頗ル篤学ノ人ナリ²⁸」と書かれているように、学問熱心な人物であったことをうかがい知ることができる。さらに利光鶴松は他にも以下の様な一節も残している。

「町長 馬場勘左衛門 豪族 内山安兵衛、深沢権八ノ三氏ハ 深ク 天下ノ浪士ヲ愛シ 之ヲ厚遇セシニ依リ 四方ノ 有志 伝聞シテ来遊スルモノ甚ダ多シ²⁹」

上記の箇所からは深沢権八を含む五日市の有志が全国から人を受け入れる性向をもっていたからこそ、多くの人々が五日市に集っていたとする深沢らに対する利光の思いをみることができる。なお、ここで引いた二つの引用文は、利光鶴松自身が自由党黨員になった動機を書いた一節中の文章であり、おそらく利光自身もこのような五日市の風土に大いに共鳴していたのではないかと推察できる。

29 歳で亡くなる深沢権八を取り巻く五日市の人々のつながりは、学芸講談会以外にも、様々な場を通じてつながっていたようである。深沢の私邸には「凡ソ 東京ニテ出版スル新刊ノ書籍ハ 悉ク之ヲ購求シテ書庫ニ蔵シ居タリ³⁰」の状況になっており、それが青年

達の学習内容を充実させていたといえる。『三多摩自由民権史料集』にある深沢家の書籍をみると、分野は外国憲法に関するもの、法律関係に関するもの、さらに、外来思想書にもまたがっているとのことであり、議論の場と共に知識を学ぶ場があったこともうかがえる³¹。

小結

以上本章では三多摩の自由民権運動期における青年による学習・文化活動を社会教育史に位置づけるため、五日市における学習・文化活動の事例を取り上げ社会教育実践としての特質を論じた。

第1節では三多摩における自由民権運動の概要を述べた。そこでは、運動の背景に三多摩の風土があることや多数の学習結社の存在などを確認でき、学習・文化活動へと取り組む機運が形となっていたことをみた。第2節では具体的な地域に西多摩・五日市を対象に取り上げ活動の概要を観た。そこでは、五日市地域は、外来の人を受け入れる開放性を土壌に持つ地域であったことが伺えた。さらに、第3節では勸能学校や学芸講談会を対象に、五日市の青年による学習・文化活動の実態を取り上げた。特に五日市に人材が集まる拠点になっていた勸能学校や学芸講談会の活動を中心に論じた。さらに五日市の学習・文化活動において活動する青年も取り上げたが、これをみると活動は人間そのものの成長に影響を及ぼすような活動であったことがわかった。そこで次章においては具体的な人物を対象に、五日市の実践の実態に関してさらに分析を進めていきたい。

第1部 第2章 注

¹ 五日市憲法は、1968年色川大吉らによって五日市町、深沢家の土蔵から発見された。(色川大吉編『三多摩自由民権史料集』大和書房、1979年ほか参照)。

² 藤田秀雄『社会教育の歴史と課題』第3版、学苑社、1979年、p.17。

³ 多摩百年史研究会編著『多摩百年のあゆみ』けやき出版、1993年、pp.27-29。なお、学習結社の数であるが、多摩を除いた神奈川では73社の数であった。

⁴ 前掲『三多摩自由民権史料集』、p.5。

⁵ 片桐芳雄『自由民権期教育史研究』東京大学出版会、1990年、p.3

⁶ 色川大吉「総論 三多摩自由民権運動の意義」、前掲『三多摩自由民権史料集』、p.17。

⁷ 同前、p.11。その後県令は1876年野村靖(1876年4月18日～1881年11月8日)と交代させられ、さらに沖守固が続き、この二人の県令が直接三多摩の自由民権運動の相手となったという(「総論 三多摩自由民権運動の意義」p.11)。

- 8 同前、p.18。
- 9 東京経済大学多摩学研究会編『多摩学のすすめ I—新しい地域科学の創造—』けやき出版、1991年、p.270。
- 10 前掲『多摩百年のあゆみ』、pp.27-30。他に『町田市史』下、1976年、pp.499-500、『町田市教育史』上、1988年、pp.87-89。など。
- 11 狛江市史編さん委員会編『狛江市史』狛江市、1985年、pp.893-903。
- 12 五日市町史編さん委員会編『五日市町史』五日市町、1976年、p.686。
- 13 新井勝紘「民衆憲法の創造—五日市の民権運動と起草者たち 解説」、前掲『三多摩自由民権史料集』、p.158。
- 14 新井勝紘「私擬憲法の起草過程について—五日市憲法草案の場合—」、著者代表色川大吉『民衆文化の源流』平凡社教育産業センター、1980年、p.160。
- 15 秋川市史編纂委員会編『秋川市史』秋川市、1983年、p.1140。
- 16 新井勝紘「民衆憲法の創造—五日市の民権運動と起草者たち 解説」、前掲『三多摩自由民権史料集』、p.161。
- 17 江井秀雄『多摩近現代の軌跡—地域史研究の実践—』けやき出版、1995年、p.99。
- 18 新井勝紘「民衆憲法の創造—五日市の民権運動と起草者たち 解説」、前掲『三多摩自由民権史料集』、p.167。
- 19 「勸能学校校則(草案)」1884年3月、前掲『三多摩自由民権史料集』、pp.212-213。
草案の序文は以下のようにある。
「黒煙一発米史ノ来ルヨリ国家ノ進歩ハ文運ノ旺盛ニアルヲ覺リ、都鄙ノ区チナク学校ヲ興シ師弟ヲ教育シ、其ノ父兄タル者ハ学事ニ奔走尽力シテ日モタ足ラサル如シ、文運ノ隆ナル未タ嘗テ有ラサル所ロナリ、然リ然ルニ吾カ五(六)ヶ村ノ聯号タル潮勢ニ激セラレ明治六ニ創立スト雖トモ、之レカ為メ奔走尽カスノ人ニ乏シク師弟ノ教育ハ顧サル者ノ如シ、故ニ隆盛ノ如キハ勿論後者頽廢事務怠雑一ツモ統一スル所ロナシ、之他町村ノ侮リヲ甘セントスル乎、若シ嗤笑愧チ学校学事ヲ整正セサル可カラス、大ニ茲ニ草案ヲ記シテ討議スルスノ如シ
明治十七年三月 日(マ)」
- 20 「勸能学校校則(草案)」1884年3月、同前。
- 21 「利光鶴松翁手記」抄、前掲『三多摩自由民権史料集』、p.212。以下の手記に自由党の中心人物が多くいた五日市の状況や、勸能学校の実態が克明に記されている。
「五日市町ヲ始メ其附近一帯ノ村々ハ皆悉ク自由党を以テ堅メ、五日市町長ノ馬場勘左衛門同町。ノ大富豪内山官兵衛、深沢村ノ深沢権八、戸倉村ノ大上田彦左衛門、留原村ノ佐藤蔵之介氏等何レモ皆自由党ノ錘々タル首領株ニテ、其村内ニハ曾テ一人ノ反対黨員ノ存在ヲ許サズ、斯ル形成ナルニ依リ、勸農(能)学校ハ公立小学ナレドモ實際ハ全国浪人引受所ト云ウ形ニテ、町村の公費ヲ以テ多クノ浪人ヲ養ヒ、県ノ学務課ヨリ差向ケタル正当ノ教員ハ片端ヨリイジメテ追イ出シ、県ニ於テモ止ムヲ得ズ放任セルヨリ、勸農(能)学校ハ浪人壯士ノ巢窟トナレリ、予等教員ノ月給ハ教員之ヲ取ルニアラズ、有志ノ寄附金ト合セテ一団トシ、是レヲ以テ雲集シ来レル浪人壯士ノ接待費ニ充ツルナリ、而シテ教員モ亦浪人壯士ノ生活ヲ共同ニスルナリ」
- 22 「勸能学校在職教員表(付 戸倉学校)」、前掲『三多摩自由民権史料集』、pp.168-169。
- 23 前掲「民衆憲法の創造—五日市の民権運動と起草者たち」、p.169。
- 24 「学芸講談会盟約」、前掲『三多摩自由民権史料集』、pp.193-194。第一章の会則は以下のとおりである。細則を示した第二章は第九条から第十八条まで。他にも全七条からなり、会員に関する規定などを定めた附則がある。
第一条 本会ハ名ヲ学芸講談会ト云フ
第二条 本会ハ万般ノ学芸上ニ就テ講談演説或ハ討論シ、以テ各自ノ智識ヲ交換シ氣力ヲ興奮センコトヲ要ス

-
- 第三条 本会ハ日本現今ノ政事法律ニ関スル事項ヲ講談論議セズ
第四条 本会ハ時時他ヨリ高尚ノ人物ヲ聘シ講談演説ヲナサシム
第五条 会員ハ各自智識ノ進歩ヲ計ラン為メ、本会ニ備ヘ置ク書籍ヲ閲読スルヲ得
第六条 会員タルモノハ品行ヲ方正ニシ、世ノ信ニ背カザランコトヲ要ス
第七条 本会ハ当分ノ内五日市町ニ本組ヲ設ケ、各地ニ支部ヲ置ク
但シ地方ノ名称ニ従フ

第八条 本会ノ主義ヲ拡張センタメ、時トシテ遊説委員ヲ各地ニ派遣スルコトアルベシ
²⁵「討論題集(深沢権八手録)」、前掲『三多摩自由民権史料集』、pp.196-198。全部で63の論題が挙げられているが、ここにもみえるように、政治制度や立法制度などの国家のあり方そのものに関する議論が数多く並んでいる。以下に一部を抜粋し示す。

- 1 自由ヲ得ルノ捷徑ハ智力ニアルカ将タ腕力ニアルカ
- 2 貴族可廢乎否
- 3 贅沢品ニ重税ヲ賦課スルノ利害
- 4 増租ノ利害
- 5 女戸主ニ政權ヲ与フルノ利害
- 6 下院ノ彈劾セル奸吏ハ何処ニ於テ判決ス可キヤ
- 7 国会ハ二院ヲ要スルヤ
- 8 憲法改正ニハ特別委員ヲ要スルノ可否
- 9 議員ノ選挙ハ税額ト人口ト何レニ由ルベキヤ
- 10 女帝ヲ立ツルノ可否

(後略)

²⁶「学芸講談会会員表」、前掲『三多摩自由民権史料集』、pp.162-163。新井勝紘によれば、学芸講談会は明治12年頃にはじまったとしている(同書 p.159)。年齢層全体をみると、60代1名、40代5名、30代2名、20代15名、10代5名、不明11名であった。

²⁷ 色川大吉『明治の文化』岩波書店、1970年、p.49。

²⁸ 「利光鶴松翁手記」抜粋、前掲『三多摩自由民権史料集』、p.925。

²⁹ 同前、p.927。

³⁰ 同前、p.925。

³¹ 前掲『三多摩自由民権史料集』、pp.173-175。

第3章 自由民権運動期における地域と青年に関する研究

本章では自由民権期における学習・文化活動について、地域と青年の視点から論じる。学びの場が生み出される背景には、多様な存在の影響が予想される。現代の社会教育実践の文脈においても、地域活性化の場づくりにはいわゆる「よそ者・若者・ばか者¹⁾」のような何らかの外部からの影響を指摘している言説があるが、これは現代に限ったことではなく、近代以前からも続いていたように推察される。

そこで本章では、仙台から他地域を経て三多摩地域に流れ着き、私擬憲法・五日市憲法起草において中心的役割を果たした人物である千葉卓三郎を対象にした。五日市で活発に展開されていた学習文化活動の背景には、他地域出身者や多様な思想を受け入れる開放性があったことは記述したとおりであるが、本章ではこうした開放性に共鳴し学習活動に深く関与した青年及び、彼らに移り住んだ地域、すなわち五日市に与えた影響に注目する。なおここでは出身地から離れ、移り住んだ地域に土着し影響を及ぼした青年を「外来青年」と定義している。

歴史学者の色川大吉は千葉卓三郎を含めて、明治自由民権期の青年を四つのタイプに分類している。それは土地にあって活動していく「在村活動家」、中央を目指す「中央指向型」、財政的、精神的などで支えるいわゆる「後方守備型」、そして「産業ブルジョア型」である²⁾。こうした指摘は、自由民権運動に関わった青年は一様ではなく、様々な背景を持つ青年が関わっていたことを示すものであるといえる。

本章で改めて五日市を「外来青年」研究の事例に取り上げた理由としては、五日市を社会教育の学習環境の側面からみたいと考えたことがある。五日市では地元有志(深沢村名主の深沢名生・権八親子)が収集した多くの書籍・雑誌があり、学習環境が整っていたために多くの青年が都市から集まる、という状況が作られており、「外来青年」を受け入れた地域としてとらえることが可能である。

千葉卓三郎に関する先行研究に関しては、これまでは五日市憲法の発見をした色川大吉らのグループによる研究や、千葉の出身地である仙台における郷土研究において分析が進められてきており、足跡や人物について明らかにされている。一方で千葉は、その取り組みに社会教育や通俗教育の名が冠されていなかったこともあり、これまで社会教育研究の中で取り扱われることが少なかった。

そこで本章においては、千葉卓三郎を他地域から土着した「外来青年」と位置づけ、地

域の学びの原動力としての「外来青年」の寄与の意義を明らかにすることを目的とする。千葉卓三郎を社会教育史に位置付け、社会教育実践との関わりから論じることによって本章の意義がある。

以下、第1節においては、仙台藩から五日市に流れ着いた千葉卓三郎の遍歴をみながら、なぜ五日市という地域に定着していったのか考察を進めていく。第2節では千葉が五日市に受け入れられた要因について分析を行う。第3節において千葉の五日市での役割を、第4節では千葉の精神に対する地域の受け入れとその後をみる。最後に第5節では、社会教育実践の場と「外来青年」に関して考察をする。

第1節 千葉卓三郎の遍歴

千葉卓三郎は1852年6月、宮城県栗原郡白幡村に仙台藩の下級士族の長男として生まれた。儒学を学びながら、戊辰戦争の敗北を機に、医学、洋学など実利的学問をはじめ、浄土真宗、ギリシャ正教、カトリック教、プロテスタント等宗教的な信仰の世界へ入る、という経験をしている³。このように多くの精神的変化を経ているが、それには千葉のその後の来歴にも大きく関わっており、さらに千葉が三多摩に関わりを持つことに対しても影響を及ぼしているものと伺える。

千葉卓三郎の父宅之丞には、先妻・後妻ともに子がなく、後妻と協議後に妾ちかのを入れ、そこに生まれたのが卓三郎である。さらに千葉が生まれる前に宅之丞は危篤になり、先妻の里子の清水彦左衛門を千葉家の養子に迎え相続人とする。3歳の時には、ちかのは千葉家を去り、卓三郎は義母に育てられた⁴。複雑な環境に育った千葉であるが、その生涯において第一の転機となったのは、仙台、戊辰戦争における白川口の敗北であった⁵。戊辰戦争での敗北の経験は、千葉の最初の大きな挫折点であり、千葉の精神面に影響を及ぼしたと推測できる。千葉卓三郎はこれを機に分家、平民となり、放浪生活となる。いわば、千葉の「故郷喪失者」「放浪の求道者⁶」、の出発点といえる。

医学、洋学などの遍歴を経た後、千葉が故郷を離れる契機となったのがギリシャ正教との関わりである。1971年6月に駿河台に出て、ロシア正教の修道司祭・宣教師であり、日本ハリストス正教会の創建者でもあるニコライより受洗をしている。入信が千葉にもたらした影響を、歴史研究者の相沢源七は次のように記している。

「(一)戊辰戦争の敗北者として、反薩長藩閥論者たる彼にとって、ハリストス教(ギリシ

ヤ正教：引用者注)は、明治維新政府を遥かに超えて世界的であると考えたこと。(二)ニコライに接することによって、彼は惜し気もなく故郷を捨てて上京する契機となすに至ったこと。そして(三)この故郷喪失者は、その後数年の遍歴を経て、漸く五日市に足を踏み入れることとなること⁷⁾。

故郷を失った千葉は、精神遍歴の中で接したギリシャ正教を学ぶ中で、仙台を離れ東京に出た。上京は新たな故郷といえる五日市に定住する一歩になったと考えられる。

こうして上京した千葉であったが、1875年5月にニコライから去り、江戸末期に活躍した儒学者である安井息軒に学ぶことになる。安井はキリスト教排斥論者であるが、どのような理由によりニコライを離れ、キリスト教排斥論者に学んだのか。その理由に対して相沢源七は、ニコライが布教のために明治政府へ妥協をしたことへの失望、卓三郎の内にある明治新政府に対する叛逆精神が、この安井息軒に共鳴を覚えた、と述べている⁸⁾。しかし、1年を経たずに安井息軒が亡くなったことによって、再びキリスト教の門を叩き、フランス・カトリック宣教師ウィグルスに学ぶ⁹⁾。この変遷には千葉の精神的な「迷い」をみることができる。

ウィグルスへの接触は、千葉が五日市と関わることとなる直接的な要因となった。ウィグルス神父が布教を通して八王子付近を訪れたのは1875～1876年と考えられており、それを契機として千葉も五日市に関わりを持つようになったのではないかと考えられている¹⁰⁾。さらに、その後の1877年にはプロテスタントの宣教師マクレイに学んでいる。

千葉の精神遍歴はキリスト教からキリスト教排斥論者へと大きな変化をしており、このように一つの事に依拠せず、精神的にも放浪する「故郷喪失者」「放浪の求道者」の一端がみえる。故郷を喪失した千葉は、結果的に勸能学校のような浪人を多く受け入れる組織を持ち、地域外からの人物を受容してきた五日市への関わりを持ちながら、五日市へ定住する。千葉は自由民権運動が盛んであった五日市への定住した時期及びその前後から、自由民権運動に関わっていたことが予測される。

五日市の民権運動と千葉との関わりを考える際に、プロテスタントとの関係は興味深い。千葉が2年半あまりの間学んだプロテスタンチズムの宣教師はアメリカのメソジスト監督教会から派遣されたマクレイであった。メソジスト派はプロテスタントの中でも、もっとも社会活動に熱心であり、この派からは自由民権運動や平和運動、社会運動に参加した人が多数出ている点は特筆すべきといえる¹¹⁾。これについて、色川は千葉が「自由民権家に飛躍するための最も手近なききっかけになった¹²⁾」と述べている。千葉は五日市に関わりを

持ちながら、社会運動に携わるグループとの接触により、自由民権運動に関与するようになったと推測される。

以上、千葉は多岐に渡る学問と接しながら、ギリシャ正教からキリスト教排斥論者へ、カトリックからプロテスタントへというような大きな精神的変化を経てきた。経験からみてとれることは、故郷を離れるという物理的な放浪と共に、精神的にも様々な宗教的、学問的な遍歴を辿っていたことである。五日市における青年の学習・文化活動の展開において、地域が受け入れた青年の一人が、このような物理的、精神的放浪をしていた人物であったことにここでは着目したい。

第2節 故郷喪失者を受け入れた要因

千葉が五日市に受け入れられた要因を考察する上で、重要と考えられるのが勸能学校である。勸能学校とは、「五日市・深沢・入野・館谷の四か村連合で設置された公立の小学校¹³」であり、学芸講談会や五日市憲法の起草における拠点となった学校である。勸能学校では、千葉卓三郎以外にも、校長であった宮城県出身の永沼織之允など、多くの教員が五日市の外からの出身者で占められていた。

他にも勸能学校では、「同じ仙台藩出身の永沼織之丞が勸能学校の初代校長、伊藤道友が同訓導として、千葉吾一が戸倉学校にという具合に、同じ仙台人の仲間が教師¹⁴」になっていた。こうしたことは、千葉が五日市に招聘されることもなんらかの影響を与えていたと推測できる。同郷である永沼は、千葉と同様に仙台藩士として戊辰戦争に従軍しており、敗北経験をもっていた人物である。両者ともに「故郷を離れ、ただひたすら信仰や学問を求めて研鑽を積み、第二の故郷ともいえる新天地を求めて入りこんできた¹⁵」ことが共通している。このような人物を、開放性を持つ五日市は積極的に受け入れてきた。それが、勸能学校やそのメンバーを中心とした民権活動グループ、学芸講談会である。こうした地域性がもたらした外来文化の受け入れの土壌こそが、新たな地域文化創造につながっていたのではなかろうか。

千葉が五日市に定住した理由を色川大吉は「深沢、土屋、内山らを中心とした中心とした五日市学芸講談会や勸能学校や村の自治体が、他所では見られない創造的なコミュニティを作り出していたから¹⁶」と説明している。さらに、「五日市地方の教育や経済や社会組織はことごとく同志の内山や土屋や深沢らの手中にあったのである。そのため警察官まで

がかれらに同調したり、職をなげうって民権運動に参加したりするという雰囲気¹⁷」がつけられていたことも着目すべき点である。外から五日市に移り住んだ千葉にとって、このような地域的な環境の影響は重要であったのではないか。

自由民権期の五日市は多くの外来人を受け入れており、さらに地域を挙げて自由民権運動が盛んに展開されていた。また外来人を受け入れる五日市の地域状況は、故郷喪失者である千葉が定住する理由となったといえる。

千葉卓三郎を中心とした青年達によって議論が行われており、五日市憲法起草にも大きな影響を与えた学芸講談会における議論も、千葉の定住の一つの理由として挙げられる。学芸講談会なども含めて五日市という地域全体での自由民権運動の状況を考えると、それは千葉にとって「生まれてはじめての幸福¹⁸」であった。つまり、千葉の考えを支え、その思考を実行に移すための環境が整っていたのだといえる。

外から多くの人々が定住していた五日市の学芸講談会において、「互ニ親和スルコト一家族ノ如クナルベシ¹⁹」という規約もみることができる。これは五日市の開放性を示しており、ここから「外来青年」と地域の受け入れには地域の開放性が影響を及ぼすということが考えられる。

千葉と大きくかわりを持ち、千葉を支えていた学芸講談会の構成をみると、年齢については、10代が22.2%、20代が48.1%とほぼ4分の3を占めている²⁰。色川大吉は学芸講談会について、学芸講談会会員の土地の所有面積は、大地主が3、4名で後は中農や土地をまったく持たない人も存在していることから、貧富の差をこえ、学歴・身分の違いをこえ、人間的つながりをもって結集した会であったと述べている²¹。地域の中で、差を設けずに学びあう点で、極めて社会教育としての価値のある活動である。こうした人間的つながりによる交流は、千葉がその力を発揮する上での支えとなっていたと考えられる。

学芸講談会では10名近い放浪者型の青年が参加しているが²²、特にこの点は注目される。千葉を含め、多くの放浪者型の「外来青年」が、学芸講談会の活動を通じて五日市に影響を及ぼし、「外来青年」によって、学習・文化活動が展開されていたことを示している。

さらに、学習・文化活動は「外来青年」だけによってなされたものではない。五日市の開放性や、在地の人間の受け入れが彼らを受け入れ、地域の青年や地元有志によって活動を起こしたことで、「外来青年」の受け入れが可能になった。

第3節 千葉卓三郎の五日市における役割

学芸講談会を中心とした五日市の自由民権運動では「憲法起草を運動方針の大眼目²³」として活動が行われてきた。千葉卓三郎はこの五日市の中でどのような役割を果たしてきたのか、その位置付けを本節の中で取り上げる。

五日市憲法は、「実現可能な漸進的憲法を構想し(中略)大多数の民権家の現実意識を集約した公約数的なもの²⁴」であると色川は述べている。これは五日市憲法の特徴の一つであり、こうした志向は、千葉に対して五日市という地域や地元の人々が与えた影響によるものあり、地域の人々と関わりながら、千葉は五日市憲法の起草をしていったのではなからうか。

五日市における千葉の位置付けについて、新井勝紘は次のように述べている。「二〇四条もの条文を持つ『五日市憲法』を神奈川県下の山村で創造できたのは、集団的な民権学習にプラスして、理論的指導者・千葉卓三郎の存在が不可欠であった。それはまた最後に条文にまとめあげた千葉にとってもいえることで、数十人の仲間と共に展開している地域の民権運動を抜きにしては、実現不可能であった。集団と個人の相互の力が相乗して、普段の実力以上の成果を出すことができたと考えられる²⁵」。

自由民権運動が盛んであった明治期の五日市では、学芸講談会などを中心に多くの青年が学習活動に関わっており、その中でも中心的な役割を果たしていたのが千葉卓三郎であり、議論に関わりながらも統括する立場にあった。

地域における私擬憲法作りは、地域の人々の様々な意見を踏まえた上で集約するという作業が必要なために、困難が予想される。新井はこれについて「起草のための議論を十分に咀嚼し、所属する会員の納得できるような内容に組み替え、補充修正し、かつ憲法全体として条文相互に矛盾のない草案に完成させることができる能力を持った人物の存在が大きいのである。『五日市憲法』における千葉卓三郎は、まさにそうした立場にいた民権家であった²⁶」と述べている。すなわち千葉の存在こそが、地域での支柱としての役割を果たしていたと考えられる。千葉が支柱になることができたのは、物理的、精神的な放浪を経て地域の外をみてきた経歴もあったであろうし、外から新たな人を受け入れる五日市の土壌もあったからであろう。「故郷喪失者」「放浪の求道者」である千葉卓三郎は、五日市の開放性によって受け入れられながら、地域における自由民権運動の中心としての役割を果たすまでに至った。千葉の経験による学問的な能力と同時に、受け入れた五日市の人々との

関係の側面があるといえる。

千葉と五日市の在地の青年との関わり的一端が伺えるのが、1881年の千葉が死去する直前、9月の千葉の深沢権八への書簡である。

「一 衆愚貴地在勤中不残御厚恩ニ沐浴シ、尚且海南行資まで御厄介願上居候段、誠ニ感涙ニ堪へず難有奉拝謝候（中略） 一土屋両家、馬場、大福、佐藤、北村、永沼氏等へもよろしく²⁷」

これは勸能学校に在職中の五日市での厚遇の感謝を示したものである。ここで名前を挙げられているのは土屋勘兵衛、常七、馬場勘左衛門、大福清兵衛、佐藤新平、北村弥助、永沼織之丞。ここに挙げられた全員が学芸講談会の会員であり、そのうち永沼を除く6名は在地の人間である。

こうした千葉と地域の人々との交流は、故郷喪失者千葉にとって強い人間関係を持つことができる意味でも重要なものだった。千葉が晩年に至ってもこのようなやり取りは続き、このことは書簡からもみることができる。千葉が五日市の地域人に支えられていたことが読み取れる。

第4節 千葉卓三郎の精神と地域の青年の受け入れ

千葉が著した代表的な論文、「王道論」と「読書無益論」には千葉の精神があらわれている。「王道論」は1882年秋に書かれた。新井勝紘はこの論文について、「千葉卓三郎の思想を考えるに、最も主要な論稿である²⁸」ととらえている。「王道論」では「王道」という言葉を通して、千葉の民権運動への考え方が述べられていると考えられる。その主旨は「古代中国の政治思想（いわゆる儒教の原典）によって、明治の立憲制の理念を構築²⁹しようとしたものである。「王道」とは何であるのか。千葉は次のように論じている。

「何ヲカ明治今日ノ王道ト謂フ乎、曰ク立憲ノ政体即チ是ナリ、立憲ノ政体ヲ建テ、国約ノ憲法ヲ制定シ、抛テ以テ国会ヲ開設シ、上ハ以テ王室ノ尊栄ヲ無疆ニ護シ奉リ、下ハ以テ億兆ノ福祉ヲ永遠ニ保全シ、上下供ニ其慶ニ頼テ以テ各其志ヲ遂ケ、政ニ倦ムナカラントスル者ハ此レ皆ナ王道ヲ顕彰スル所以シノ者ナリ³⁰」。

すなわち、千葉にとっての王道とは立憲政体であり、憲法を制定して国会を開設するこ

とである。引用した一節は、千葉の考える民権論が示されたものといえよう。王道論はいわば千葉の自由民権論を、立憲制を挙げて述べたものであるが、その考え方が形成されるようになった背景には、千葉自身の精神と共に、五日市での議論による千葉への影響も存在しているのではないかと推測される。それは学芸講談会の討論題集をみても、「国会ハ二院ヲ要スルノ可否」「憲法改正ニハ特別委員ヲ要スルノ可否」というような立憲制に関わる議論が多くなされているためである³¹。

千葉の精神と地域の考え方のつながりに関して、新井は五日市憲法の条文の中で、第二篇公法の第一章国民の権利に書かれている「府県ノ自治ハ各地ノ風俗習例ニ因ル者ナルカ故ニ、必ラス之ニ干渉妨害ス可ラス、其県域ハ国会ト雖モ之ヲ侵ス可ラサル者トス³²」という条文を取り上げている。そして「地方自治権の絶対的な不可侵性を示している。(中略)上意下達型行政の中で苦悩し続けた現実を直視し、またその自らの体験を踏まえたからこそ、こうした強い自治意識が芽生えたといえる³³」と述べている。ここには千葉の明治政府に対する反発精神と五日市での民権家の精神の呼応が示されていると考えられる。

「読書無益論」は千葉が 1883 年 11 月に 32 歳で死去するその数ヶ月前に書かれたものである。その内容の中には、「多芸專業ナク貪読創思ヲ害スト、蓋シ世人ノ芸多ク書ヲ読テ而シテ尚ホ往々一事一業ヲモ成シ得サル者ハ主トシテ皆此多芸貪読ニ由ラサル者幾ント少レナリ (中略) 夫レ爾リ是故今試ニ業ヲ定メテ専修シ、書ヲ読ンテ精ヲ得ルノ要領綱維ヲ提挈開示シテ以テ略ホ是ヲ焉ニ論セン³⁴」という一節をみることができる。本をただ読むというだけでなく、一つに学問を定めてやることが大切であると述べている。多くの学問に迷いをみせながら彷徨していた自身の遍歴に対して、千葉は必ずしも良いと捉えてなかったのではないかと推察できる。

さらに、実践的活動の考え方についても記述されている。それは千葉の著した「読書無益論」の中で記されており、千葉は「専ハラ智識ヲ蓄フルノミヲカトム可ラス、必ス先ツ我有ル所ノ智識ヲ運用スルヲカトムヘキナリ³⁵」と述べている。ここには本で得た知識だけではなく、必ずそれをどのように生かすかが重要だと書かれている。千葉の実践活動の重視への思いをみることができる。

五日市では地域ぐるみで自由民権運動に取り組んでおり、それに関わって多くの地域活動が展開されていたが、活動はこうした政治運動だけにはとどまらない。例えば、協立衛生義会という人々の保健と衛生のための自主組織³⁶にも、西多摩の自由民権家は関わっており、これは五日市の人々の自由民権運動への取り組みの状況を示しているものだといえ

よう。この「読書無益論」は、千葉の五日市の自由民権運動に対する取り組み姿勢を示していたといえるものであり、五日市の中で活動していく上で、討議や憲法の起草活動以外にも、幅広い活動に関わっていた千葉の状況とそこでの考え方をみることができる。

1883年11月に千葉卓三郎は結核によって32歳で死去するが、療養中における千葉とそれを支えた地域青年との関わりには、千葉が五日市に受け入れられた状況を伺うことができる。千葉は五日市を去った永沼織之丞に代わり、1881年に勸能学校二代目校長に就く。そこでの運営は、五日市の青年で自由党に入党した深沢や内野小兵衛が学務委員に選出されるなど、かなりリベラルなものであり、千葉は自由に自分の力が発揮できた³⁷。こうした千葉ら民権運動の担い手が「町村自治の実権を握っているという、まさに地域＜コンミューン＞的な『場』（新しい質の共同体）³⁸」という状況は、五日市での「外来青年」と地元青年達の結びつきを明示している。放浪を続けてきた千葉にとって、地元青年たちとの関係の構築は喜ばしいことであり充実した日々を送っていたと考えられる。

しかし、その後まもなく結核を悪化させ、翌1882年6月には草津温泉へ療養に行った。これは千葉の同志らのすすめであった。すでに半身不随の状況だったが、この時にも五日市の青年を激励している。結核が悪化した後もその後1年半でいくつもの論文を書き、同志を激励し、民権運動や教育に奮闘していた³⁹。

さらに1年を経て1883年春には、病勢が急に悪化し、上京して入院をする。その間も、五日市の同志によって支えられていた⁴⁰。特に深沢権八との親交は、千葉にとって非常に重要であった。こうした背景には、深沢家が書物を集め、都会から多くの青年が集る学習環境を形成していたように、外から流れ着いた者を受け入れ、地域の運動を支える役割を果たしていく深沢の精神がある。千葉を支える深沢の活動からは、「外来青年」と地域青年との関係性の構築が考えられる。千葉を追悼する深沢の詩には次のような一節がある。

懐君意気捲風濤 郷友会中尤俊豪

雄弁人推米辺理 卓論自許仏蘆騷⁴¹

千葉卓三郎を会の中で最も俊豪であり、雄弁であったというこの詩には千葉と深沢との結びつき、五日市における意見のまとめ役であった千葉の立場が表されている。地元の青年と結びつきながら、千葉卓三郎は五日市に定着していったのであり、またその教え子の存在は見過ごすことができない。「千葉卓三郎を慕った非常に優れた弟子たちが、東京都下の町や村に⁴²」おり、こうした者たちとの関わりから、千葉の五日市の地域文化への影響を確認することができる。

第5節 「外来青年」と社会教育実践における意義

ここでは本章でみてきた千葉と五日市の実践から見出される特徴をまとめ、社会教育実践における「外来青年」の意義に関して考察を行いたい。

第一は、千葉が五日市の外から来た人物であった点である。故郷を離れ仙台から東京を経て五日市にたどり着いた千葉は、五日市においてまさに「外来青年」たる人物であった。五日市において豊かな学習文化活動が展開されたのは、地域の外から訪れた人々が新たな視点を地域に入れ、実践を広げる契機となったためと推察できる。加えて、地域が外というだけではなく、さまざまな思想に触れていたことから新たな考えを議論に持ち込むことも可能であった。

第二は、千葉が学びと実践の結びつきを強く意識していたことである。「読書無益論」などからもみられるように、千葉は知識を知識のみにとどめることなく、むしろ運用することに重点を置いていた。五日市において豊かな実践が展開された背景には、理論を実践につなげる考え方も作用していることが伺える。

第三に挙げるのは、地域での「外来青年」の受け入れである。五日市には様々な出身の「外来青年」が集っていたが、これは地域による受け入れがあったからこそと考えられる。千葉卓三郎が五日市の人々の意見の集約を行うなどの触媒の役割を果たせたことについては、「外来青年」そのものの力とともに、こうした人物の力を見出し活躍できるような場となっていたこともまた重要であったと思われる。

小結

本章では、地域の学びの原動力としての「外来青年」の意義に関して考察を行った。第1節では千葉卓三郎の遍歴を取り上げた。千葉は戊辰戦争の敗北を契機に、放浪をすることとなったが、それは物理的面にとどまらず精神的面でも同様であった。そのような迷いをみせながら自由民権運動の地に関わるようになったことをみることができた。

第2節では故郷喪失者千葉卓三郎が五日市になぜ受け入れられたのかを考察した。それには地域の持つ開放性に関わっていることが推察できた。千葉は五日市が開放性を有していたために、定住し地元有志や地域の青年との交流をもつことができたと思われる。

第3節においては千葉の五日市で果たした役割を確認した。五日市憲法の起草に関して、

千葉には意見を集約する重要な役割を果たしていたが、同時に五日市の人々との交流から地域の人に支えられていたことが明らかになった。

第4節では千葉の思想をとりあげた。千葉の精神が五日市の自由民権運動と関わりがあること、晩年の千葉と青年たちから五日市と千葉の結びつきが根付いていることが伺えた、第5節では本章で取り上げた事例の特徴を社会教育実践との関わりからの視点からまとめた。

本章で取り上げた五日市における「外来青年」を介した実践の展開過程からは、社会教育実践の展開の在り方を考える上でも示唆を与えうるものと思われる。しかし、千葉の遍歴については千葉家の記録や履歴書など既存研究に依るところが大きく、千葉の精神遍歴など更に詳細にみながら実証していくという課題がある。さらに、三多摩における「外来青年」に関しては、後に与えた影響をその後の地域文化活動の展開から見出していくことが重要となる。今後の課題としていきたい。

第1部 第3章 注

1 藤崎慎一、村松真貴子「藤崎慎一氏に聞く(前編)『よそ者・若者・ばか者』の情熱で地域活性・地域の住民、文化、自然を生かす(特集 こんな時代だから、企業との連携)」、<月刊公民館>、全国公民館連合会、2006年3月。

2 色川大吉、江井秀雄、新井勝紘『民衆憲法の創造』評論社、1983年、pp.84-92。

3 五日市町史編さん委員会編『五日市町史』五日市町、1976年、p.719。

4 相沢源七『民衆憲法の創始者・千葉卓三郎の生涯』宝文堂、1990年、pp.15-16。

5 同前、p.21。

6 前掲『民衆憲法の創造』、p.197。

7 前掲『民衆憲法の創始者・千葉卓三郎の生涯』、p.43。

8 同前、pp.64-67。

9 同前、p.86。

10 前掲『民衆憲法の創造』、p.199。

11 同前、p.201。

12 同前。

13 新井勝紘「民衆憲法の創造—五日市の民権運動と起草者たち」、色川大吉編『三多摩自由民権史料集 上巻』大和書房、1979年、p.167。

14 前掲『五日市町史』、p.720。

15 前掲「民衆憲法の創造—五日市の民権運動と起草者たち」、p.167。

16 色川大吉『新編 明治精神史』筑摩書房、1995年、p.238。なお、土屋勘兵衛・常七は、老年の在地名望家グループに属するメンバー。内山安兵衛は深沢権八と同じく若手グループに属するメンバーである。(秋川市史編纂委員会編『秋川市史』秋川市、1983年、p.1140)。

17 前掲『新編 明治精神史』、p.238。

18 色川大吉『明治の文化』岩波書店、1970年、p.113。

19 「学芸講談会盟約」、色川大吉編『三多摩自由民権史料集』大和書房、1979年、p.194。

20 「五日市憲法草案の碑」記念誌編集委員会編『「五日市憲法草案の碑」建碑誌』五日市町役場、1980年、p.30。30代も11.1%おり、10代~30代で8割ほどを占めている。

-
- 21 同前、p.46。
- 22 色川大吉「個人・地域・民族の歴史」『社会教育会館資料 No.4 昭和四十四年度講演集 多摩の近代史—底辺の視座から—』東京都立川社会教育会館、発行年不詳、p.28。学芸講演会には大分、宮城、岩手、函館からも参加している。
- 23 江井秀雄『多摩近現代の軌跡—地域史研究の実践—』けやき出版、1995年、p.101。
- 24 前掲『新編 明治精神史』、p.244。
- 25 新井勝紘「自由民権運動と民権派の憲法構想」、江村栄一編『自由民権と明治憲法』吉川弘文館、1995年、p.110。
- 26 同前、p.112。
- 27 「千葉卓三郎書簡(深沢権八宛)」1881年9月15日、前掲『三多摩自由民権運動史料集』、p.258。
- 28 前掲『民衆憲法の創造』、p.223。
- 29 同前、p.207。
- 30 天舟千葉道海「王道論」、前掲『三多摩自由民権史料集』、p.246。
- 31 「討論題集(深沢権八手録)」、前掲『三多摩自由民権史料集』、pp.196-198。
- 32 「五日市憲法草案」、前掲『三多摩自由民権史料集』、p.220。
- 33 前掲「自由民権運動と民権派の憲法構想」、p.106。
- 34 天舟千葉道海「読書無益論」、前掲『三多摩自由民権史料集』、p.253。
- 35 同前、p.254。
- 36 前掲『明治の文化』、p.154-155。
- 37 同前、p.119。
- 38 前掲『民衆憲法の創造』、p.208。
- 39 色川大吉『民衆史—その100年』講談社学術文庫、1991年、p.231。
- 40 前掲『新編 明治精神史』、p.232。
- 41 深沢権八「漢詩 悼千葉卓三郎」、前掲『三多摩自由民権史料集』、p.295。
- 42 前掲『民衆史—その100年』、p.235。奈良橋村(現東大和市奈良橋)の自由民権運動に関わった鎌田喜十郎や、上川口村(現八王子市上川町)の困民党指導者の秋山増蔵が挙げられる。

第4章 明治末期における『週刊多摩新聞』の研究

本章では、明治末期のある地方新聞に着目して、地域における社会教育実践を検討する。情報源が現代よりも相当に限られていた状況下において、情報発信などの機能を有していた地域メディアの実像を明らかにすることは、地域社会教育史の検証の上で不可欠である。

印刷技術の伸展とともに出版メディアも発展してきたが、日本においてもこれまで当然ながら新聞、雑誌が地域において発行されてきた。とりわけ地方にあり情報発信ができるメディアの意義は大きい。比較マスコミ論研究者の門奈直樹は地方ジャーナリズムに対して「人間の生の具現化、生きることへの証明となる営みである¹⁾」と述べ、地方におけるメディアの価値の重要性を指摘している。

自由民権運動の活性化をうけて、明治以後様々な出版物が発行されており、少なからず隆盛していた。ここでは、明治末期の調布地域にて発刊された三多摩の地方新聞である『週刊多摩新聞』（以下、週刊多摩新聞）を題材に取り上げ地方メディアの側面から社会教育実践を考察したい。

新聞は基本的には情報を伝えるという役割を担っているが、情報発信機能だけではなく読者の声を紙上に掲載する機能などを持っている。小規模な地方新聞をとり上げたのは、メディアである地方新聞はその地域密着性から、地域での人々の学びに対して何らかの役割を担っており、とりわけ、地域限定のメディアは、社会教育実践の地域での展開に何らかの寄与があるのではないかと推察したためである。

地方新聞も含め、小規模のメディアの先行研究の状況を確認すると、1990年代以降、新聞研究の視点の見直し、雑誌研究の本格化、非活字メディアに関する先行研究はある²⁾。しかしメディアと読者との関係に焦点をあて地方新聞がいかなる役割を果たしていたのかについては、管見の限りはみられなかった。そこで三多摩における地方新聞が地域や読者にとってどのような役割をもち、意義は何かを考察する。地方新聞を取り巻く学びの姿を明らかにすることが、本章の目的である。

研究対象には、三多摩、北多摩郡神代村(現調布市)佐須において、明治末期、多摩新聞社(主幹・中西悟玄一祇園寺住職)により発行された週刊多摩新聞をとりあげる。同紙は一定規模の発行部数があったにもかかわらず、これまで社会教育研究の中でとりあげられてこなかったためである。

週刊多摩新聞の創刊は明治末期の1909年3月10日であり、1910年3月11日(第36

号)までの号を確認することができる。ニュース報道にとどまらない幅広い内容で、特に投稿欄が多く設けられていたことが特徴として指摘できる。同紙の方針は「社会の裏面を観察すれば小弱なる人民が凶暴なる高压者の為に苦める実情なしとせず、本社は弱者の友となりこれら高压者の敵たることを期し、正論直言敢て憚ることなきを期す³⁾」という立場である。弱者の立場に立つと公言していることは、地方新聞のあり方として注目に値する。

週刊多摩新聞に関して、地方史の中で研究がなされてきた。『調布市史』は、「発行期間は短かったが、まさに記事の内容は豊富で(中略)地域の文化活動にも大きな影響を与えていた⁴⁾」と評価している。なかでも週刊多摩新聞第34号の雑報欄に掲載された「調布乱声会」での文芸研究サークルの紹介文について言及し、調布地域の文化に対し同紙が果たした活動支援の機能を指摘している⁵⁾。しかしながら、地域的展開や読者に関してはふれられておらず教育の視点からみることはなかった。そこで、本章においては、地域における週刊多摩新聞の位置づけや読者にとっての役割の視点を交えた考察を行いたい。

本章は3節の構成である。第1節では明治期における三多摩の地方新聞の概況をとりあげ、週刊多摩新聞の成立背景の検討を行う。第2節では週刊多摩新聞の概要と地域状況に関して、広告などのデータをみながら実態や読者の及んだ地域範囲などを考察する。第3節では週刊多摩新聞の読者投書欄に着目し、読者に対して果たした地方新聞の役割を論じる。

第1節 明治末期の三多摩における地方新聞

週刊多摩新聞が発行されていた明治末期における三多摩のメディアを取り巻く状況を検証するため、三多摩の出版物に関する動向と地方新聞の概況をみていく。地方における新聞の発達の意義を、山田公平は、「中央主導の近代化の中で、大新聞を中心に全国的コミュニケーションが拡大、浸透していくのに対して、地域の自立的な文化コミュニケーションを形成していく意義をもっていた⁶⁾」と述べる。コミュニケーションメディアとして、地方新聞は自律的な文化を作り得る力があり、独自性が存在するという指摘である。

さて、全国的に1900年代以降における地方新聞の活躍は目を引く。1922年発行の『日本新聞発達史』によれば、地方新聞に対して「日露戦争以後地方新聞の活躍は注目に値するものがあつた⁷⁾」と評しており、そこでは日露戦争後に創刊された88紙の地方新聞の名を挙げている。

この時期に出版物の隆盛があったことは、新聞雑誌の各種出版物の数に関するデータにもあらわれている。内務大臣官房文書課により出された『大日本帝国内務省報告』をみると、1905年から週刊多摩新聞が発行された1909年まで5年間の新聞紙及び雑誌の年末数について、1775点から2768点にまで大幅に増加している状況がみえる⁸。

一方で三多摩地域に限ると、『多摩の印刷史』では「明治20年代から大正時代にかけての多摩の印刷界の動きは、記録がとぼしく詳しいことはわからない⁹」と指摘されており、地方新聞の動向は不明な点も少なくない。しかし、印刷所に関しては1907年頃より新規開業が増えており、『多摩の印刷史』は11の印刷所の開業を明らかにしている。少なくとも印刷所の開業を支える体制ができつつあることは伺える。

「新聞」の名称ではないが、週刊多摩新聞以前の三多摩における最も内容の充実した地方新聞的性格を持つ雑誌の一つに「武蔵野叢誌」がある。明治中期の1883年10月～1884年11月に北多摩郡府中において発行されていた本誌は、「勸懲ノ雜報公益ノ論説等ヲ輯メ¹⁰」られた総合雑誌である。本誌は新聞の形態をとってはいなかったものの、地域の新聞的メディアの役割をも有していた。週刊多摩新聞の第3号(1909年4月1日)において掲載された「武蔵野叢誌発刊に就き所感」の記事からは、読者が「武蔵野叢誌」を新聞と捉え、地域の重要なメディアととらえていたことを確認できる。その記事では「武蔵野叢誌」を振り返り、「回顧すれば(中略)其の当時神奈川県における二大新聞として横浜なる毎日新聞と府中町なる武蔵野叢誌なりき叢誌は侃々の言、諤々の論、一世を風靡して時の政府を畏怖せしめたるもの¹¹」との評価をしている。これは、武蔵野叢誌が北多摩郡の地域独自の情報紙として先鞭をつけるものであったことを伺うことのできる記述である。

武蔵野叢誌は、第4号以降「雑報の記事を大幅に減らすことにより報道的要素を希薄に¹²」なるなど、新聞的側面が後退する経緯を辿る。しかし、このような地域独自の総合誌が北多摩郡で発行されていたことが、週刊多摩新聞のような地方新聞が生まれる背景にあったことは踏まえておきたい。

第2節 週刊多摩新聞の地域と概要

(1) 週刊多摩新聞の地域

本項では、週刊多摩新聞が発行された1909年頃の神代村周辺の概況をみることによって、週刊多摩新聞の地域的位置づけを考察する。週刊多摩新聞の事務所は東京の西部、北

多摩郡神代村(現調布市)佐須の祇園寺にあった。北多摩郡は「東京府ノ中央部ヨリ稍西武ノ平地ヲ占メ東ハ北豊島、豊多摩、荏原ノ三郡、西ハ西多摩郡ニ接シ南ハ多摩川ヲ隔テ、南多摩郡及神奈川県橋樹郡ニ相對シ北ハ埼玉県北足立郡県全県入間郡ニ界¹³」した位置にあり、神代村はその中でも東京区部に近い三多摩の南東部に位置する地域である。

神代村の1909年の人口は4452人。1901年から昭和に入るまで4000人台で推移しており、この時期にはまだ大きな変動はみられない。昭和前期に入ってからはいわゆる都市近郊の地域として人口の激増はあるものの、明治末期においてはまだ農村が色濃い地域であったことがここから読み取れる¹⁴。

産業は養蚕が重要な位置にあった。1900年の神代村周辺における養蚕農家の割合は神代村400/523戸(76%)であり、隣の調布町で250/616戸(41%)を数えるのとは様相を異にする¹⁵。週刊多摩新聞では地域情報の中に、養蚕に関する情報が多く取り扱われていることにはこうした背景が影響しているものと考えられる。

週刊多摩新聞が発行されていた1909年～1910年は、武蔵電気軌道株式会社が京王電気軌道株式会社として社名変更・会社が設立(1910年9月)し、その後電力供給や鉄道の敷設へ向かう契機となった時期にあたる¹⁶。これらの変化は、神代村・調布町地域が「東京の郊外」としての都市の性格を強めていく端緒となる出来事である。つまり、直前の週刊多摩新聞の発行時期は農村から都市へ地域が変貌する過渡期にあったとみることができよう。

(2) 週刊多摩新聞の特徴

週刊多摩新聞の内容は、評論やコラム、三多摩に関連するニュースの他、意見投書、市況、海外レポートや投稿による文芸(俳句・川柳、短歌・狂歌)などで構成されており、情報紙の枠を超えた幅広い紙面構成になっていたようである。なかでも、評論やコラムは、政治や農業、宗教など幅広いため、週刊多摩新聞は総合紙としての性格を持っていたと考えられる。本紙の特徴には、時期的には自由民権運動が下火になっていた1900年代の発行でありながら、自由民権運動の薫陶を強く受けていたことを挙げる事ができる。板垣退助の週刊多摩新聞第1号への寄稿や、板垣の秘書であった和田三郎による板垣の意見掲載などに自由民権の影をみることができよう。

次に、週刊多摩新聞の読者層を探るために、『新聞総覧 明治四三年度版』(日本電報通信社編纂、1910年)から、当時の大新聞の価格や広告と比較を試みることにしたい。

週刊多摩新聞の価格は、各号によって若干の上下はあるが、ほぼ2.5銭～3銭前後であ

った。1909年当時の物価と比べると、米一升 17 銭(1909年)、銭湯 2~3 銭(1909年)・3 銭(1910年)となっていることから¹⁷、本紙の価格は銭湯の入浴料とほぼ等しかったと推測される。当時の大新聞の価格は、東京朝日新聞で 1 枚 2 銭(一ヶ月 37 銭)、読売新聞は 1 枚 1 銭 5 厘(一ヶ月 35 銭)(いずれも 1909年 7 月 30 日)となっていた。週刊紙と日刊紙の違いはあるが週刊多摩新聞が若干高いことが分かる。この価格設定からは、ある程度の対価を払っても地域情報を必要としていた購読者層に読まれていたことが推測される。さらに、週刊多摩新聞のような地方新聞が成立できたのには、購入者たるこの地域の人々に養蚕による現金収入があったことも理由の一つと考えられる。

しかし、この購読料は常に集められていたわけではないようで、どの程度の支払いがあったかという購読料の実態には不明な点もある。それは 1909年 9 月 30 日の第 21 号において、巻頭から経営状況に関する社告が出されていたことから伺うことができる。

「三多摩郡は勿論隣府県に渉れる数十方里の読者諸君にしあればいちいち購読料の集金は実際に行はるべきものにあらず又初号より地方有力の方々へも引き続き送付し置きし分も有之本社は(中略)殆ど独力にて経営せしものなれば此際至急購読料払込被下度、又引続無代配布の方々はさらに購読仰付の御報に預り度此段徳義に訴へ御願申上候也¹⁸」との記事がある。

この記事からは週刊多摩新聞が一部で無料配布されていることや、独立運営されていたこともわかる。購読料に関する記事は第 23 号(1909年 10 月 20 日)にも掲載されており、購読料収入は、新聞運営上の課題となっていたといえよう。

(3) 週刊多摩新聞の広告

広告収入は当時の新聞にとり、「新聞経営に就いて最も重きを置くところのもの」であり、「新聞の命脈は位置に繁りて広告収集の巧拙に在りと謂ふも不可なし」という役割を持っていた重要なものである¹⁹。そのため、週刊多摩新聞の活動をみる上でも広告は欠くことのできないものであろう。

週刊多摩新聞の広告料は第 1 号で「21 字詰め 1 行 30 銭」、第 2 号以降からは「21 字詰め 1 行 20 銭」、第 15 号からは「19 字詰め 1 行 20 銭」となっている。当時の他の東京に所在を構える 21 紙の同時期の行数・広告料を平均すると、一行 17.75 字・54.25 銭である²⁰。最も高い万朝報で 18 行・70 銭、最も安価な日本新聞で 17 行・45 銭となっていることから、週刊多摩新聞が相当に安価な広告料を設定していたことがわかる。

表 5 新聞広告行数比較

新聞名	週刊多摩	東京毎日	報知	東京日々	読売	中外商業	東京朝日
売薬	100	10,233	12,799	6,350	3,008	3,244	10,350
化粧品	34	3,733	7,941	3,652	7,672	2,175	8,444
書籍	-	4,104	7,834	3,547	7,011	2,503	9,864
呉服	48	772	1,331	888	655	729	884
会社	187	1,328	1,812	1,974	1,006	4,571	1,837
決算	-	1,182	1,400	1,026	1,257	3,318	913
官庁	-	4,778	796	494	428	799	1,032
登記	-	830	-	-	-	3,354	-
学校	-	56	388	146	98	19	458
病院	134	1,346	4,235	1,859	3,331	845	2,383
雑品	542	4,529	7,423	2,092	3,214	2,169	5,487
出版	-	1,475	120	4,659	-	4,947	2,470
雑件	286	1,082	4,607	2,431	1,414	2,903	4,212
計	1,331	35,448	50,686	29,118	29,094	31,576	48,334

(1909年6月『新聞総覧』日本電報通信社編纂発行、1910年、pp.100-134)、「週刊多摩新聞」より作成)

表 5 新聞広告行数比較は、『新聞総覧』(日本電報通信社編纂発行、1910年)より、1909年6月の東京を本拠とする新聞に出されていた広告を抜粋し、1909年6月に発行された週刊多摩新聞の業種別広告の出稿行数を対照させたものである。

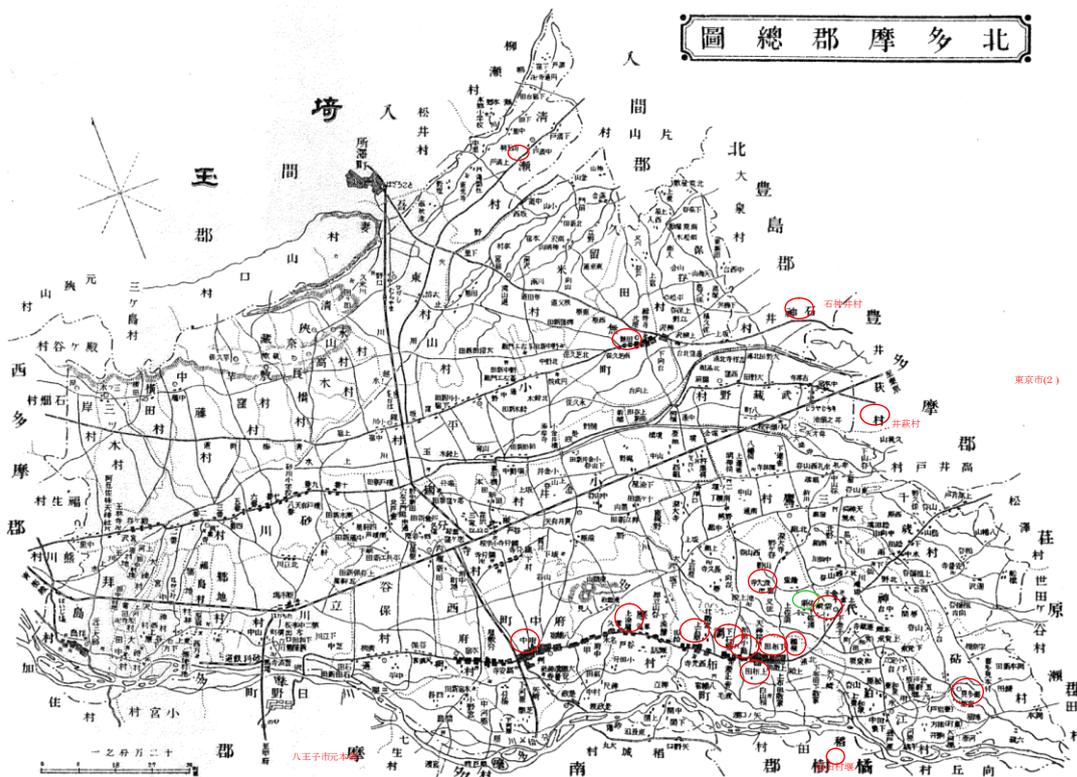
週刊多摩新聞の広告に、『新聞総覧』の分類を適用すると、「売薬、化粧品、書籍、呉服、会社、決算、官庁、登記、学校、病院、雑品、出帆、雑件」の13項目において出稿されていることがわかる。業種による広告の割合に関して、他紙では売薬や化粧品の広告行数の割合が高いが、週刊多摩新聞においてそれらは低く、むしろ雑品及び雑件に関する広告が多いことが特徴と指摘できる。

内容別にみると、雑品の細目の分野は食品や生活雑貨といった日常使用する物品などから養蚕器具や肥料などの業務に使用する物品まで幅広い。特に日常使用の物品や雑件を中

心に広告を集めており、売薬や書籍、官庁といった大新聞で多く出ていた業種とは異なる広告を掲載している。生活品が目立つ広告内容は、大新聞との違いであるということができよう。

次に広告主の所在地から、読者の及んだ地域を考察する。週刊多摩新聞の読者範囲は、第10号(1909年6月10日)の第二回美人投票募集記事から推測することが可能である。そこでは、「三多摩郡及豊多摩郡、北豊多摩郡、神奈川県橘樹郡等多摩川両岸即ち本紙愛読者のある範囲に於てこれを募集す²¹⁾」とあり、神代村・調布町が含まれる三多摩郡、さらに隣接した地域の一部が読者の対象地域となっていたことがわかる。

広告依頼主の地域からも、読者の所在地域の広がりを検証したい。図1 週刊多摩新聞第10号(1909年6月10日)広告主地域分布は週刊多摩新聞第10号より、事務所所在地であった神代村佐須及び、広告主(委託販売物については取扱所)の場所を地図に示したものである。広告数を地域別に分類すると、全広告数は31件のうち調布町のものは14件、神代村のものは4件で、合計で18件である。調布町及び神代村の発行地域周辺の割合では業者数が半数以上を数えている。さらに、広告主の地域分布は、週刊多摩新聞の事務所であった佐須を起点としながら、街道に沿い東西に範囲が延びていることがわかる。このことから、週刊多摩新聞は神代村・調布町内の街道沿いの同一の生活圏が対象地域となっていたことを推測することができる。週刊多摩新聞は、安価な広告費設定で大新聞と異なる種別の地域性のある広告が集まっていることや、発行の関係地域が限られていることなど、大新聞とは異なる位置づけにあったことが伺える。



(『北多摩郡誌』1912年及び「週刊多摩新聞」より作成)

図 1 週刊多摩新聞第 10 号(1909 年 6 月 10 日)広告主地域分布

第 3 節 週刊多摩新聞と投書

(1) 週刊多摩新聞の構成と投稿記事の位置づけ

週刊多摩新聞の内容構成の中で、特徴の一つとして数えることができるのが、投書である。山本武利は投書を「読者と新聞の相関を集約的、象徴的に²²⁾ あらわしたものであると述べたが、投書欄は、新聞読者の意見を紙面に反映する機会の一つとしてみる事ができる。そこで、本章では読者投稿に着目し、紙面を分析することによって、週刊多摩新聞が読者に対して果たした役割を考察したい。

週刊多摩新聞の内容変遷をみても投稿募集や投稿記事は一定数収められていたようである²³⁾。同紙の基本的紙面はニュースや雑報等の地域ニュースとコラムや投稿、文芸作品などの読み物によって構成されていた。なお、投書は新聞と読者をつなぐことができ、読者

が紙面に参加できる機会の一つであり、新聞紙上における双方向性メディアとしての機能の一端を担っていたものである。投書はコラムなどにおいて掲載され、投書欄や文芸欄などで、随時投稿記事を受け入れるページが多く作られていた。このことから投書が重視されていたことが推測できる。

明治末期における新聞は、大新聞では 1890 年代後半のハガキ投書ブームが終わり、報道新聞中心への移行している状況にあったようだ²⁴。週刊多摩新聞において投書欄が「多摩百面相」と名前が変わり拡大された 1909 年 7 月 30 日の第 15 号と同日の東京朝日新聞、読売新聞においても投書欄が縮小されている。さらに、東京朝日新聞では投書欄は設けられておらず、読売新聞でも投書欄の 7 本掲載にとどまっていた²⁵。それに対し、週刊多摩新聞では 23 本の投書が掲載されており、紙面での扱いは大きいものとなっていた。

次に、週刊多摩新聞の方針や投稿募集記事をみることによって、同紙が投書欄・投稿記事をどう位置づけていたかに関して考察を試みる。例えば、週刊多摩新聞が自らの新聞をニュース配信のみのメディアとして位置づけていないことは、記事の中からも随所でみることができる。

その記事の一つに挙げられるのが、入社の際において述べたと書かれている「善行美言を発揚して悪行者の燈台となり、社会教育の補助者たらんと欲す²⁶」という活動方針である。ここからは週刊多摩新聞の社員が週刊多摩新聞の持つ社会教育的役割に着目し、何らかの社会教育的意義を期待して発行していたことが推測される。

同紙が「野に叫ぶ声」に期待し紙面運営を目指していたことは、第一号に掲載されている「発刊の辞」から読み取ることができる。そこでは「野に叫ぶ声に耳を籍さん正しき道に估りて歩まん²⁷」と記載されており、「野に叫ぶ声」を集めることにより発行を進める姿勢をみることができる。

さらに、週刊多摩新聞において、意見投稿と並ぶもう一つの記事募集の中心となっていたのが創作作品、特に狂歌や都々の募集である。創作作品の掲載は、創刊から最後まで通して掲載されており、紙面を作る重要な役割を果たしていた。

(2) 投書欄「百面相」

週刊多摩新聞の読者投稿は、主に三つの形式のものをみることができる。一つ目はコラムや政策提言など、不定期に掲載されていた長文の投書、二つ目は文芸欄であり、三つ目が本項で取り上げる「百面相」と題された投書欄である。投書欄は週刊多摩新聞が 1909

年7月12日に発行された第13号に「投書集」として始められた短文の投書欄である。連載途中で「多摩百面相」「百面相」「投書籠」とタイトルを変更しながらも、最終第36号まではほぼ毎号欠かさず掲載が続けられており、もっとも掲載回数の多い連載の一つであった。

同欄は、短文による投書であることから、他の投書文などの投稿記事に比べ、より多くの人々の声を掲載できる。そのため、新聞紙面中、発行者と読者の関係について、双方向性を持たせる役割を担っていたと推測される。「百面相」の投書内容は非常に幅広く、社会問題に対する意見、週刊多摩新聞への要望・意見、地域でのうわさ話、日常生活での不満、日々の生活に関する感想などを集め掲載していた。なお、行数からも投書欄の拡大をみることができる。第13号(1909年7月12日)では20行だが、次第に増加をみせ、最も多い時には110行(1909年8月30日第18号)、投書欄の掲載行数で平均57.5行に及んでいる。

(3) 投書記事の役割

投書の中でも、読者からの発信としての性格を持つ記事の一つに挙げられるのが、週刊多摩新聞の記事や紙面への感想・要望などである。新聞そのものや紙面に対する感想には、「百面相は照魔鏡なりいよいよ出て、いよいよ面白し猛虎一声山月高しの趣きあり(谷保生)」(1909年9月30日第21号)や、「多摩新聞が出た為下民は大悦び助かります(大賛成家)」(同21号)などをみることができる。

他にも「富澤仙士と谷田部氏との水力電気論面白い双方反対の理由が十分ある(砂川の住人)」(1909年8月30日第18号)といった意見がある。この水力電気論に関する投稿は、1909年8月20日の第17号(富澤仙士「現時の水力電気事業」)の東京市の電力事業に関する賛成意見、及び1909年7月30日の第15号(神城子「水力電気建設」)の電力事業に対する反対意見に関する両論併記の投書への感想である。投書に対する反応投書も紙面で展開されていた。

さらに、同紙への要望には、取材を求める投稿を多くみることができる。例えば、「当町には新聞三面の材料が沢山あります早く素破抜いて下さい(田無町青年)」(第15号)や、「千歳村には色々不正なことがあります探って載せて下さい」(1909年10月20日第23号)などの投稿がある。これらはニュースの中心地域である調布市域以外の取材要望に関する投稿であり、週刊多摩新聞が地域ニュースを取り扱うメディアとして期待をされていたことや、意見を受ける場として機能していたことがわかる。

紙面への意見に対して、記者の返答を掲載している投稿も見受けられる。「多摩新聞が廃刊する噂がある本当ですか(同生)」「決してソナことはありませぬ五年でも十年でもやる積りです(記者の一人)」「いずれも 1909 年 9 月 10 日第 19 号)のという投稿からは、読者からの要望が一方的なものだけではなく、記者からの返答を紙面を通して伝えていたことがわかる。紙面を通じて読者投稿へのフィードバック機能を持っていたことが特徴といえよう。

次に意見投書を取り上げる。「百面相」での投書の多くは社会問題や日常生活での不満に対する意見を述べたものである。その対象範囲は幅広く、社会に対する批判、日常生活での不平不満を訴えるものなど、多岐に渡っている。

具体的には「三鷹村と武蔵野村の両村長に申し上げ候上連雀塚より田無町へと通ずる道路と来たら汚水常に溢れ通行の難儀は勿論流行病発生の折柄何とか処分願上候」(第 19 号)や「境調布間の人力車賃金は一定して居ない其筋にては注意しないのですか(小僧)」(1909 年 11 月 10 日第 25 号)、などの投稿を挙げることができる。これらの投書からは、投書欄が社会への不満を述べる場としての意義を持っていたと考えることができる。

さらに、本欄で最も多くを占めていた投書は、地域名を挙げた日常の雑談に関する投書である。本紙の美人投票の感想や身近な商店等の善し悪し、地域のうわさ話など、特定地域に関する情報を集中的に取り扱っているものは、地方新聞にみられる特徴的な記事であるといえる。例えば、「府中の魚元は料理が好くて安い」(1909 年 8 月 20 日第 17 号)や、「ラッパの豆腐屋さん毎日甲州街道へ来ますよ」(1909 年 12 月 10 日第 28 号)という投書である。

地方新聞において雑談に関する投書の意義は、読み手、書き手双方の地域が近いことから、居住地に密着した情報をやり取りできる点にある。週刊多摩新聞は調布周辺における幹線道沿いの近隣地域に広がっており、地域情報に関する投稿の掲載は必要であったと推測される。さらに、本紙の雑報欄でも、多くの地域ニュースが掲載されている。これらの記事は大新聞とは異なって、読者(投稿者)同士の地理的距離が近い為に成立する、地方新聞独自のものといえるのではないかと。

本項では投書欄を取り上げたが、週刊多摩新聞の持つ大新聞とは別の特徴をみる事ができた。一つは、新聞の投書欄が縮小に向かう中、週刊多摩新聞では、新聞自体が積極的な記事の募集を行っていたことである。さらには紙面の中での投稿記事に比重をかけて充実を図っていたことも、週刊多摩新聞ならではのものではなかった。

投稿記事は出版者側が選定するため、投稿者の意見がそのまま掲載されない制限はある。しかし、意見を表明し、なおかつ紙面に対して要望を出す機会があったことは、地方新聞が読者から発信できるメディアとしての意義を有していたと考えることができる。さらに大新聞が取り扱わない身近な情報交換の場として、投書欄が役割を果たしていたことも重要な点として指摘できよう。

小結

本章では、北多摩郡神代村を中心として発行されていた週刊多摩新聞を素材に、明治末期における社会教育実践の一形態としての三多摩の地方新聞を検討した。中でも、読者からの発信・交流の場としての地方新聞の役割に注目した。

第1節では明治期の三多摩における地方新聞の位置づけを検証した。明治末期は、地方新聞の発展の時期にあり、そこでは、全国で地方新聞の隆盛がみられ、三多摩の地方新聞発生背景となっていたことを推し測ることができた。

第2節では週刊多摩新聞が及ぼした地域の範囲や週刊多摩新聞の性格を明らかにするため、新聞の概要、大新聞との広告内容や地域の比較などを行った。その結果、週刊多摩新聞は大新聞と異なり、より生活に密着した形で展開されていたことが明らかになった。

第3節では週刊多摩新聞の記事構成の中から投書欄に着目し、週刊多摩新聞の持つ読者に対する役割の検討を行った。大新聞と比較すると、週刊多摩新聞では投稿欄を重要視していたことが伺えた。投書欄はニュース記事とは異なり、読者から新聞に自らの意見を発信できる場の役割を備え、なおかつ紙面への要望を出すことが可能であること、さらに身近な情報を交換する場の役割をも果たしていたことがわかった。

特に、大新聞において投書が縮小される流れの中、地方新聞においては投書欄のような読み手からの情報発信を可能にする場の選択肢が存在し、活用されていたことは、地方新聞の特質を示すものであったといえよう。すなわち、身近な情報を得ることのできる情報源であっただけではなく、意見表明のできる能動的な学びの場であった。こうした投書欄に掲載されている人々の声に、書き手の学習に向かう意欲の源流を見出すことができるのではなかろうか。

第1部 第4章 注

- 1 門奈直樹『民衆ジャーナリズムの歴史』講談社学術文庫、2001年、p.20。
- 2 土屋礼子「メディア史研究の動向—明治大正期—」、メディア史研究会編<メディア史研究>(4)、ゆまに書房、1996年5月、p.152。
- 3 「週刊多摩新聞」第1号、1909年3月10日。本史料は1970年に調布史談会より400部限定で復刻されたものである。
- 4 調布市市史編集委員会編『調布市教育史』調布市教育委員会、1982年、p.196。他にも「地域の文化に寄与する点が多かった。」(『調布市史』下巻、調布市市史編集委員会編集、調布市、1997年、p.508)などの言及がある。
- 5 前掲『調布市史』下巻、p.508。
- 6 山田公平「創設期の名古屋新聞—近代地方新聞史研究—」、<メディア史研究>(1)、ゆまに書房、1994年3月、p.75。
- 7 小野秀雄『日本新聞発達史』大阪毎日新聞社、1922年、p.357。
- 8 内務大臣官房文書課『大日本帝国内務省第二十六回報告』、1912年7月、p.249。
- 9 「多摩の印刷史」刊行会編『多摩の印刷史』東京都印刷工業組合三多摩支部、1985年、p.223。
- 10 <武蔵野叢誌>第1号、武蔵野叢誌社、1883年、p.1。
- 11 神城生「武蔵野叢誌発刊に就き所感」、『週刊多摩新聞』第三号、1909年4月1日。
- 12 遠藤吉次「解説」(府中市立郷土館編『武蔵野叢誌(下)』府中市教育委員会、1978年。1884年5~11月に成文舎から発行されたものを復刻)、p.388。
- 13 『北多摩郡誌』北多摩郡役所、1912年、p.1。
- 14 「明治四二年事務報告書・基本財産」『調布の近現代史料』第三集、調布市市史編集委員会、1995年、p.150。『行政史料にみる調布の近代史料』調布市市史編集委員会、1986年、p.299。
- 15 『調布読本—近代調布の歩み』改訂二版、調布市郷土博物館編集発行、1999年、p.2。
- 16 『調布市史』下巻、調布市誌編集委員会編、1997年、調布市、pp.443-449。
- 17 岩崎爾郎『物価の世相100年』読売新聞社、1982年。
- 18 多摩新聞会計部「社告」、『週刊多摩新聞』第21号、1909年9月30日。
- 19 『新聞総覧』明治43年版、本電報通信社編纂発行、1910年、p.518。
- 20 同前、pp.1-4。
- 21 「三多摩郡及附近美人投票募集」、『週刊多摩新聞』第10号、1909年6月10日。
- 22 山本武利『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局、1981年、p.364。
- 23 『週刊多摩新聞』第36号まで発行された本紙の10号ごとの内容構成の変遷は次の通りである。
 - ・第1号(1909年3月10日)の主な構成
ニュース、論説、短歌、コラム、投稿募集記事、雑報、社告
 - ・第10号(1909年6月10日発行)の主な構成
コラム、名所探勝雑記、ニュース、雑報、文芸、美人投票募集
 - ・第20号(1909年9月20日発行)の主な構成
コラム、告示、ニュース、文芸、雑報、投書欄、美人投票
 - ・第31号(1910年1月11日発行)の主な構成(30号は元旦の為形態が異なる)
コラム、ニュース、雑報、小説、投書欄、文芸
- 24 前掲『近代日本の新聞読者層』、p.362。
- 25 「朝日新聞」1909年7月30日、「読売新聞」1909年7月30日。
- 26 前田耕造「入社之辞」、『週刊多摩新聞』第22号、1909年10月10日。
- 27 「発刊の辞」、『週刊多摩新聞』第1号、1909年3月10日。

第2部 大正デモクラシー期の三多摩における社会教育実践

第2部では大正デモクラシー期を中心とした三多摩における社会教育実践を論じる。大正デモクラシーは、1910年代頃から始まった民主主義運動である。当該期には普通選挙運動などの社会的な動きはもとより自由主義を重んじる風潮により、さまざまな学習・文化活動が花開き、大正自由教育運動に代表されるように新たな教育のあり方が模索されていた。

社会教育に目を転じると、この時期は臨時教育会議による通俗教育の改善に関する答申が出され(1918年12月24日)、翌1919年には文部省官制の改正、1921年10月には第1回社会教育主事協議会の開催などが行われ、社会教育に関わる行政制度の確立が進んでいる。さらに、1921年6月23日文部省官制の改正の際に通俗教育の語が社会教育に改められるなど、行政においても社会教育の名称が使用されるといった変化が生じる時期でもあった¹⁾。

大正期の三多摩の状況をみると全国的な大正デモクラシーの薫陶のもと、地域に関する学びや文芸創作などの学習・文化活動が花開いていた。第2部においてはこれらの学習・文化活動を中心に焦点をあて、人々の学びの姿を描き出したい。

第2部で取り上げる実践の一つに稲城における文芸運動がある。第1部では地方新聞という地域メディアを題材に論じたが、ここで対象にするのは市井に暮らすいわば普通の青年たちが執筆したさらに小さなメディアである。こうした文芸誌には青年たちが書き記した言葉が溢れ、学習・文化活動に取り組む当時の青年たちの熱意を直接読み取ることが可能である。

もう一つの研究対象は、私塾・奚疑塾(けいぎじゅく)である。同塾は南多摩の稲城に設置された私塾であり、三多摩を中心に広く受講生を集め、多摩の学びの拠点であった。その半面、史料の制約もありこれまで社会教育研究の中で取り上げられることは少なかった。しかしながら、近年、稲城市にて実施された近代稲城の文化財調査により、貴重な史料が多数発見された。筆者はこの調査にメンバーとして参画しており、新たな第一次資料を用いながら奚疑塾に関して論じたい。私塾・奚疑塾は階層を問わず多くの同窓生を集め送り出しており、基本的なカリキュラムはあるにしても学び方はさまざまである。地域に開かれた私塾の研究は当時の社会教育実践の一側面をみる上で重要と思われる。なお、奚疑塾は明治期から大正初期にかけて設置された私塾であり、大正デモクラシー期と必ずし

も重ならない。しかし明治の民権期の薫陶を受けた活動であり、大正期以降の稲城に多くの人材を排出したことも考え合わせると、自由民権から大正デモクラシーへの橋渡しをした同塾の意味は大きい。

第2部では、第1章において大正デモクラシー下の学習・文化活動のうち特に文芸誌などの同人誌を中心に上げる。また第2章では奚疑塾の教育を、第3章では奚疑塾の同窓生を、第4章では奚疑塾の教育方法に関連して、奚疑塾所蔵の錦絵に関して論じる。

第1章 大正期稲城における青年の地域文芸誌の研究

大正デモクラシー期は、デモクラシー隆盛の風潮の中、様々な学習・文化活動が展開された時期であるが、このような状況における青年たちの活動及び思いを明らかにすることが本章の目的である。

本論では、青年たちの学びによる成長の姿をみるために、青年自身が直接語った言葉から探る方法をとった。具体的には青年たちの地域文芸誌、南多摩郡稲城における地域文芸誌〈せゝらぎ〉〈谷戸川〉〈大丸同窓会誌〉を研究対象に据えた。地域文芸誌は青年自身が自らの手で記したものであり、作品に記された青年自身の言葉を追うことが可能なためである。また、地域が学習・文化活動にとり重要な場所であることも考慮し、地域文芸誌の分析を通じて、青年が居住した地域も含めて研究する必要があると考えた。

社会教育研究において地域は一貫して重要なテーマであり続けてきた。北田耕也は、地域をそこに生きた先人たちの学習・文化活動と行動の場という角度からとらえ直すことによって、「地域民衆史の発掘」をすることの重要性を提言していた²。

また、地域の観点から社会教育をみることの必要性は、先行研究の中でしばしば取り上げられてきた。例えば、社会教育学会の年報はその流れを示すものといえるが、年報第20集『コミュニティと社会教育』(1976年)、年報第22集『地域の子どもと学校教育』(1978年)などにおいて、地域やコミュニティに関する社会教育の研究が進められてきた。近年でも年報52集『〈ローカルな知〉の可能性 もうひとつの生涯学習を求めて』(2008年)が出されており、地域が重要な研究分野となってきたことがわかる。

なお本章で対象とした稲城は南多摩郡東部に位置する農村地域である。農村地域が多くを占める当時の三多摩において典型となる地域属性をもつことをその理由とする。

以上をふまえて第1節では大正デモクラシー下の三多摩における学習・文化活動に関する先行研究を取り上げる。第2節では地域に根ざした学習・文化活動の担い手の一つであった青年に注目し、その役割を考察する。第3節では稲城の地域文芸誌の分析を行う。ここでは地域文芸誌に記された文章から、活動内容や青年が学習・文化活動を行う中での思いがいかようであったかを検討し、文芸誌の活動に関わる人々の姿に迫りたい。

地域の視点を踏まえた社会教育実践研究は、現代の青年における社会教育・生涯学習の課題である地域の教育力の再生や、地域活動などの見直しなどにも関わる。大正期の学習・文化活動を地域との関係から考察することは、現代における地域と社会教育をみる上でも示唆を与えうる意義がある。

第1節 三多摩における大正デモクラシー期の学習・文化活動に関する先行研究

1912年から1926年の大正期は、1890年頃の自由民権運動の終息期から10年を経て、広範な分野にまたがって二度目の学習・文化活動が盛んになる時期である。普通選挙運動等に代表される政治運動だけではなく、文化に対する人々の関心も高まった。大正デモクラシー期を自由民権運動に次ぐ民主主義運動に位置づけることは、先行研究においても指摘されてきた。ここではいくつかの言説をとりあげる。

金原左門は大正デモクラシーに対して以下のように述べる。「『明治国家』形成の真の推力としての役割をはたした自由民権運動について、民主主義運動の第二のサイクルとして歴史の総過程の中で決定的な重みをそえて展開し、かつそこにおける運動の諸構成は、まぎれもなく現代の起点を意味し現在に具体的につながっているのである³⁾。ここには、大正デモクラシーを民主主義の第二のサイクルととらえる同時に、現代の民主主義運動の起点とする考え方が示されている。さらに、太田雅夫によれば、大正デモクラシーの思想は「昭和ファシズムの嵐のなかで一時は挫折したとはいえ、戦後民主主義の原初形態としての価値を持っていたことを忘れてはならない⁴⁾」と指摘する。すなわち大正デモクラシー思想を戦後民主主義の原初形態としての価値を持つものと述べている。このように先行研究では、この時期は近代における第二の民権運動高揚期であるだけでなく、戦後の萌芽がすでに表れているとされている。

さらに、府中市の近現代史研究に従事する松本三喜夫は、府中町青年団の「本町青年会

報」の分析を通じて大正デモクラシー期の青年の考え方を論じている。そして「地域の担い手、国家の相続者としての自覚を持つ青年、人生に煩悶する青年、自らの権利に目覚めつつある青年など、そこには多様な考え方があり、そういう存在が許された時代⁵」であったと著している。種々の研究で指摘されているのは、大正デモクラシーという時代が文化活動の土壌を形作ったことの価値である。

では、大正デモクラシーは三多摩ではどのような意義を持つものであったか。考古学者であり、南多摩郡八王子の大正デモクラシー文化研究にも従事していた梶国男は、戦後の新しい政治や教育・文化のリーダーたちが青年期に大正デモクラシー文化の洗礼を受けた人たちであることを明らかにしている⁶。

このことは、例えば大正デモクラシー期に八王子の南多摩郡連合青年団書記を務めていた松井翠次郎が戦後民主主義下における八王子の学習・文化活動の中で活躍している⁷ことや、大正デモクラシー末期の1928(昭和3)年には、「ふだん記」で知られる橋本義夫によって書店揺籃社が開店されたことに示されている。揺籃社は、書店という機能だけではなく、そこに集まる良書などを求めて多くの人々が集う文化センターともなった。揺籃社は、現在の青年教育におけるいわば「たまり場」に該当するものであった。

三多摩地域における大正デモクラシー期の学習・文化活動には、他にも、文化講座(例えば、1921年8月15日から6日間には御岳山上にて、東京府立師範学校同窓会及び東京府西多摩教育会主催によって夏期大学が開催されている⁸)等が開催されるなど、無数に存在している。

第2節 大正デモクラシー期のメディアと青年

大正デモクラシー期には青年も学習・文化活動の担い手になっていた。本章で取り上げる文芸誌などのメディアでもその姿が表れている。大正デモクラシー期に規模の大小を問わず多くの雑誌等の出版物があり、ここではそれらに迫っていきたい。

雑誌、新聞など当時のマスメディアと青年の結びつきに関して、金原左門は社会主義、デモクラシーのような思想用語を民衆の世界にまで普及した雑誌、『中央公論』『東洋経済新報』などは大都市の知識人や学生たちだけでなく、地方新聞のジャーナリストや小学校教師、読書好きの農村青年たちにも読まれていたことに言及しており、この時期の出版物が幅広い人々に影響を及ぼしていたことを示している⁹。大正デモクラシーは民主主義の思

想を基調にした運動であり、このような思想性を持つに至るには、様々な言論に関するメディアの役割は少なくなかったであろう。

梶国男は、南多摩西部の八王子のデモクラシー期において広がった児童文化運動、研究活動、文芸運動など多くの活動を対象に「教育文化活動や児童文化運動は、地域の教化や文化の発展をめざす社会的運動であったが、大正デモクラシーの陽光をあびて一斉に芽を吹き成長をはじめた諸学の影響を受けて、地域研究に情熱を傾ける青年たちも現れた¹⁰⁾」事を明らかにしている。本章にて取り上げる大正デモクラシー期の青年による文芸誌は、民主主義を基底にした自由に言論の場を持つことのできる空気、その下で展開された多くの出版物、さらにはこれらを読む活動の担い手になった青年により生じていたものであるといえよう。

新井勝紘は特に地域に根ざした青年たちが取り組んだ大正時代の文芸活動を「地域青年文芸運動¹¹⁾」と呼ぶ。新井が示すこの時期の青年の文芸活動は、このような言葉を与えられるほど、一定の量を伴った活動であった。なお、大正時代の三多摩に関わる文学作品といえば、羽村出身の中里介山による小説「大菩薩峠」(1913年「都新聞」にて連載開始)が著名である。しかし一方で静かに広く文芸を書く実践も地域に広がりつつあったことが伺える。新井勝紘は地域青年文芸運動を「時代のデモクラシーの息吹を敏感に感じとった青年たちや地域のグループが新しい運動を展開している¹²⁾」と指摘しており、やはり活動の背景にはこの時代の風潮があったとの見方を示している。

このように地域青年文芸運動の灯が広がっていることは、複数の先行研究により指摘されている通りである。しかしながら、当時在野の文芸活動に関する実践が豊富に展開されていたが故に、依然、解き明かされていない実践は少なくないと思われる。そのため、地域に点在し広がっているさまざまな文芸誌を一つずつ丹念に解き明かしていくことが課題といえよう。これら文芸誌に書かれた青年の言葉を丁寧に読みとることによって、大正期に稲城に徐々に浸透していた青年の学習・文化活動と地域との関係を浮かび上がらせてい。

第3節 稲城における文芸誌活動

稲城村(現在の稲城市)が含まれる南多摩郡の当時の地域状況のデータは、1914年発行

の『東京府南多摩郡農会史』からみることができる。「南多摩郡ニ於ケル農業ノ位置」によれば、戸数・人口は17333戸・101852人、そのうち農業戸数・人口は9842戸・53420人となっており、個数の半数以上が農業従事者である。主産業という側面からみても、「農業ニ依リ衣食スルモノハ過半ヲ占メ郡民生活ノ要素ハ一ニ農業ニアリテ存スト云フヲ得ヘシ¹³」という状況であり、農業により成り立っている地域であったことがわかる。

大正デモクラシー期の南多摩郡及びその周辺をみると、多様な文芸誌が出版され、地域文芸運動が展開されていたことが伺える。例えば、南多摩、町田地域の〈葎の笛〉(忠生村)、〈紅潮〉(小山田村)、さらに〈紅潮〉を発行した紅潮社による同人誌の交換先として〈桑の實〉(本町七一)、〈あかね〉(八王子大横町)、〈飛火野〉(日野町)、〈アカシア〉(多摩村)、西多摩には〈プラタナス〉(西多摩郡小木曽村)などがあり、三多摩の各所に存在していた¹⁴。稲城の文芸誌も、これらの文芸誌の一つであると考えられ、以下それぞれの文芸誌毎に順を追いながらみていきたい。

(1) 創作作品にみる青年の日常一文芸誌〈せゝらぎ〉

〈せゝらぎ〉は稲城大丸地区の芦川正吉を中心としたせゝらぎ会によって発行されたもので、予告号が1920年4月に発行されている。〈せゝらぎ〉予告号は、手書き、22ページ構成、発行人には、芦川正吉、発行所はせゝらぎ会となっている。予告号の目次をみると、ページ数は多くないが内容については、小説、詩、作文、和歌などがバランスをもって収録されており、総合的文芸誌の形式となっている¹⁵。

予告号の回覧者は、須江清一、大久保操一、吉野佐一、梅沢栄一、大久保忠、大久保隆重、石井春吉、芦川正吉の8名となっており、22ページのページ数とあわせ、小規模な回覧誌であるといえよう。文芸誌の内容に関しては、「五月号題」と題された次号の予告から、和歌、俳句など創作の小品が中心であったことがわかる¹⁶。

さらに、せゝらぎ会が掲げていた目標は〈せゝらぎ〉予告号の巻頭言に示されている。会の目的には三点が挙げられており¹⁷、第一には文芸研究の資とすること、第二には思想向上を図ること、第三には趣味を多大にすることであるという。〈せゝらぎ〉の会誌の目的には文芸を学ぶことで趣味豊かにすることが挙げられているが、会の活動だけにとどまるのではなく、文芸研究や思想向上のような教育的側面も意識されていることを特徴とみることができよう。

さらに、巻頭言を執筆した会の中心人物である芦川正吉は、会の目的を「大丸青年ノ名

勢盛ナラシメンガ小生ノ思想」と明記し、大丸(おおまる：稲城の地名)地域青年の向上を目指してつくったものだとする。すなわち、会は活動を通して地域そのものを盛り上げることをも考慮していたことが伺える。

会の活動内容に関しては、〈せゝらぎ〉せゝらぎ会の会則から知ることができる。

「せゝらぎ會則」¹⁸

- 一、本會ヲ「せゝらぎ」會ト稱シ芦川方ニ置ク
- 一、本會ハ毎月回覧雑誌「せゝらぎ」ヲ発行ス
- 一、「せゝらぎ」ハ文藝研究誌トス
- 一、會員ハ毎月必ズ投書スルコト
- 一、投稿ハ特別ノ許可有ル外ハ必ズ自作ノコト
- 一、會員ハ毎月會費トシテ三錢納ムコト

せゝらぎ会 芦川方

目的と同じく会則においても「文芸研究誌」であることが明確にうたわれている。会則からは、会員による毎月の投書が義務づけられていたことや、自作でなければならないことが明記されていることがわかる。この二点の規則はいずれも会への積極的な投稿を呼びかけているものである。作品を作り出すことは投稿者の成長にもつながるものと推察される。

どのような作品が望まれていたのかは〈せゝらぎ〉の中にある会員呼びかけからみることができる。「御賛成願ヒマス」の題をつけられており、「胸中ノ有リノマヽヲドシドシ投書シテ下サイ」と、会員に投稿者の胸中を作品にするような投稿を呼びかけていた。すなわち、編集者が投稿を求めるに際して、投稿者自身の心にあることを書くよう望んでいたことをここから読み取ることができる。心情を作品にいれたものを投稿しこれを相互に読み合うわけであり、せゝらぎ会では作品の創作を通して成長する下地を備えていた文芸誌であると考えられる。

それでは、どのような作品が掲載されていたのであろうか。具体的な作品を取り上げながら活動内容をみていきたい。〈せゝらぎ〉に収録された創作の三つの作品、歌「雑詠」、四行詩の「小鳥」、冠附の「口惜しい」を取り上げる。

芦水「雑詠¹⁹」

野を歩む軽き心に久しくも 忘れぬし歌を歌ひるしかな
鉛のごとにふめる心抱きつゝ 夜更の道を一人歩むも

第一に示した「雑詠」では2点の短歌が歌われている。いずれも歩いているときに思う率直な思いを綴った歌である。一番目の歌は気分がいい時に歩きながら感情を歌ったものであり、二番目の歌は気分が落ち込んでいる時の歌であろう。それぞれの作品中に含まれている「軽い」、「重い」の言葉が対応したものである。心情を素直に吐露した作品となっている。

戦水「四行詩 小鳥²⁰」

鎮守の森に雨が降る
あめあめ降るな雨降らば
五重の塔に巣をかけた
可愛い小鳥がぬれよも

次に第二に引用した四行詩「小鳥」は、雨の情景を歌ったものである。森に降った雨をみながらそこに暮らす鳥のことを思った歌であるが、日常で遭遇した雨に際して浮かんだ情景が描かれているようにみえる。

「冠附 口惜しい²¹」(作者名記載なし)

口惜しい正直に云つて叱られる
口惜しい喧嘩は受けるしかられる
口惜しいメタル(マ)どころかまた没書
口惜しい轉んだ上に緒まで切れ

一方で第三に示した冠附「口惜しい」という作品は、「雑詠」や「小鳥」とは異なる趣向による作品である。「口惜しい」は日常生活の中での悔しいと思ひ起こした感情に関して歌ったものである。歌の形式こそとっているが、ここにみられるのは創作芸術作品というよりはむしろ日常の気持ちの吐露である。素直な感情を表した作品である。

以上、三つの歌をみたが、これらに示されているのは情景や感情のような何気ない日常である。生活と結びついた内容が中心であることがわかる。

さて、〈せゝらぎ〉には、作者の幼少期の思い出を振り返ったと思われる作品も収められている。それが「思い出²²」というショートエッセイである。これは幼少期に遊んだ際に転んで怪我をしてしまった事故を振り返った記憶が記されている。淡々と事実が記されているのみであり、執筆時の感想などは文章に織り込まれていない。あえて作品の形で掲載していることは、事故が印象深い思い出として作者に刻まれているためと推察される。同誌では思ったことをどんどんと投稿するよう推奨されているが、エッセイにも頭に浮かんだことをそのまま記した作品が入っている。

〈せゝらぎ〉予告号には長編作品も収録されている。それが、小説「五拾銭」である。この作品は浅草のある私立小学校を舞台にしたもので、児童の授業料が1円なのに対し、1円50銭を出している児童ひとりのみが教員から優遇されているというものである。作者の思いが強く現れていると思われる、小説「五拾銭」の最後の一節はこう締めくくられている。

「五拾銭」(抜粋)

淀川に対して手を挙げる事は出来なかつた 教師はよく淀川を保護して居る
我々の出す授業料は一円なり 初公淀川の出すのは一円五拾銭なり 五拾銭の差
嗚呼!!! 金の力!!! 金の力!!!
内田は何度となく之を心の内で繰り返へした おわり

僅かなお金の差により不平等が生じている状況に関する問題提起を読み取ることができる。この作品は創作作品であるが、社会の不正義に対する自らの思いこそが主眼点であろうと思われる。以上とりあげてきたように、〈せゝらぎ〉は創作作品中心の文芸誌であるが、作者が日常に感じた思いを表現する場の性格が色濃く出ている文芸誌である。

作品が発表されたあとの会員相互のつながりに関しては、巻末の「通信²³」欄にある意見交換欄、例えば〈せゝらぎ〉発行に対する期待や、御礼などから読み取ることができる。人物像への賞賛、雑誌への感謝などである。しかしながら、〈せゝらぎ〉の作品の相互批評まではみることができなかつた。一方で、「通信」欄にある雑誌発刊の会員の喜びなどをみると、雑誌への期待は少なからぬものがあつたろうと推察できる。

(2) 総合雑誌的な文芸誌-〈谷戸川〉

稲城の坂浜地域において青年教師らによって発行された〈谷戸川〉は、機関誌的性格を持つ文芸誌である。1923年に発行された第5号が現存している。〈谷戸川〉第5号の目次を確認すると、本誌の概要が浮かび上がる²⁴。

〈せゝらぎ〉予告号と比べると、「松原先生の講演」(永田筆記)や「青年団組織の改造」(高橋豊治)のような、講演会の記録や、青年団変革の提言などの文芸創作作品以外のものも多く含まれており、文芸誌というよりも総合雑誌的性格が強いことが特徴といえよう。

さらに、目次中に「こん度も原稿が多すぎて載せきれませんから、あとは次号へ送ります。」と末尾に記載されていることも目を引く。収録されている作品だけでも膨大であるが、それ以外にも多くの投稿があったのであろう。ここから、雑誌への投稿活動が活発に行われていたことが読み取れる。

〈谷戸川〉5号中に掲載されている社会への提言の一つは青年団に対するものである。この高橋豊治「青年団組織の改造」は青年団活動に対して意見を述べた作品である²⁵。

著者の高橋豊治は、青年団の年齢の上限に関して批判を行い、その対応策に青年団を満17～22才、22～30才までの二種類に分けるといふ提言をしている。前者では団員の自らの修養に主眼を当てることを、後者では社会に関しての奮闘を視野に入れた基礎づくりを中心に行うべきだとしている。このような文章が収められていることから、〈谷戸川〉には社会に対する提言誌のような性格を帯びていたことを伺うことができる。

〈谷戸川〉のもう一つの特徴にあげられるのは、高橋梨花「批評を受けて感想」や富永瑤濱「批評について」のような意見交換をテーマにした作品がみられることにある。例えば、高橋梨花「批評を受けて感想²⁶」は、俳句批評を受けさらにその批評に対しての返答である。人物批評を受けたことは意外であったと前置きしつつも、作品批評に対しては適切であったと述べ、なおかつ自らの俳句作成をより一層努力したいとする。ここでは、誌面上の文章を通じて批評を重ね合う姿を見ることができる。

さらに、このような相互の作品批評に対して、肯定的な意見が掲載されていることも確認できる。それが富永瑤濱「批評について²⁷」という文章である。これは、活発に批評が行われていたアメリカの大学での演説批評を例に、「一心不乱に句作するのも善いが、又時には御互の句を批評するのも、あながち悪くないと思います」と書かれており、作品批評を通じての会員の交流を呼びかけたものである。これらから、〈谷戸川〉では執筆者・読

者が批評を重ね合い、相互に関わりあいながら執筆活動を行っていたことが伺える。

＜谷戸川＞第五号には、小説も掲載されている。富永瑤濱「溝渠²⁸」は学校を舞台にした作品があり、問題行動を起こした生徒についての話し合いにおける教員間の衝突を述べている。その一節に、生徒側に立つ下田ら数名の若い教員と他の教員とのやり取りが収められている。作品で示された教員同士のやりとりは、執筆者による当時の社会における人間関係におけるさまざまな問題に向けられた意識をみることができる。中でも親と子の間、先生と生徒との間に存在している様々な軋轢について論じている点に注目したい。この文章は青年教員の側に立った視点で描かれているが、特に会話文の箇所はベテラン教員と青年教員の生徒処遇を巡る対立を赤裸々に描いている。当時の日本において近代化が進んだものの、作品中に示されているように人間関係など依然多くの問題が残っていることへの警鐘も鳴らす。筆者は教育現場を事例に問題があることを示しているのである。

小説や短歌の他にも、英訳文が掲載されていることは目を引く。英訳文“A Bamboo flute(竹笛)²⁹”は「I was working with a plasterer behind my house.」の書き出しで始まる、日常生活を描いた翻訳文である。この他誌にはみられない英訳文の存在などは、＜谷戸川＞の特色といえよう。巻末には、日本語をローマ字書きで、他氏の文章を翻訳した、という注釈も付記されている。

A Bamboo flute(竹笛)にも示されているように、内容からも＜谷戸川＞の青年の興味の広さや知識の豊富さを知ることができる。なお、＜谷戸川＞の中心人物であり、執筆者の一人であった教員富永置三（瑤濱）は、＜谷戸川＞が発行された坂浜地域にて行われた俳句会＜鶯の里＞において中心的な役割を果たしていた³⁰。

さらに＜鶯の里＞は東長沼、矢野口を中心とした農業の品種改良の為の機関誌＜花のささやき＞にも影響を及ぼしているという。富永が＜谷戸川＞だけでなく、＜鶯の里＞へも関わりをみせていることは、この時代の学習・文化活動のグループ同士の連携や広がりを感じさせる。これらの繋がりからみられるように、学習・文化活動が他へ影響及ぼしながら、地域の中に広がっていった事例として捉えることができる。そのため、この時期における稲城の文芸誌は単発のものではなく、他との関わりによって成り立っていたものであることを示している証左となると考えられる。

（3）多様な年齢層の総合誌-＜大丸同窓会誌＞

最後に、青年以外の年齢層も含まれた総合誌をとりあげ、その中の青年に関する叙述を

みていく。〈大丸同窓会誌〉は、その名に表されているように稲城にある地域、大丸（おおまる）に所在していた大丸尋常小学校の同窓会誌である。〈せゝらぎ〉及び〈谷戸川〉の二誌と比較すると若干異なる地域文芸誌である。分量に関しても文芸誌〈谷戸川〉と比べても3倍以上のページ数で構成されている。さらに、同窓会の雑誌であるため青年の雑誌ではなく、執筆者は幅広い年齢層に渡っている点に特徴がある。「大丸同窓会誌目次」「3月号」の目次をみると³¹、文章の他にも、書や画などまでも掲載されており、文学により作られた作品のみならず、内容は幅広く作品数も多い。

大丸同窓会の位置づけに関しては、〈大丸同窓会誌〉第2号の批評欄から、「会員相互の娯楽と修養の二つの機関³²」であることがわかる。内容は小学校の同窓会らしく、和歌や随筆以外にも絵や童謡、珠算の除法までも掲載されており、執筆者層同様、掲載作品の幅も非常に広い。

本誌の作品のうち、青年活動に関わる部分をみると、例えばこの時期設立された大丸地区の処女会に関して書かれている。この中では、青年団を含めたさまざまな社会教育活動団体が存在することの重要性が述べられている。第2号の中で様々な団体、ここでは青年団、処女会、同窓会であるがこれらが「お互いに平行してゐってはじめて発達するもので好結果を上げられるもの³³」とされている。なお、〈大丸同窓会誌〉の3月号回覧順の一番目には、〈せゝらぎ〉でも中心的役割を果たしていた芦川正吉の名をみることができる³⁴。

なお、他にも稲城の地域文芸運動に取り組むグループの連携の広がりを見ることが出来るものとして、〈唄〉という地域文芸誌がある。〈唄〉は東京市外下尾久(現荒川区)における文芸誌で、ここでも芦川正吉の名前が回覧者欄にある³⁵。1925年7月発行の7月上旬号をみると、小説、短歌によって構成されている。

ここでは3誌を研究対象に取り上げたが、他にも多数の雑誌が存在していた。稲城の近現代研究雑誌に収められた田尻清子「稲城の文芸運動」(『聞き書きによる農民とくらし』1982年、稲城市第二公民館近代史研究会発行)では、参加者の聞き取りより、ここで取り上げた以外の現存していない複数の雑誌がつながりを持っていたことが明らかにされている。回覧や相互批評など雑誌に備わる基本的性質ゆえ、多くの雑誌が連動しあっている可能性は高い。

本節においては〈せゝらぎ〉〈谷戸川〉〈大丸同窓会誌〉の3誌を対象に、それぞれの本文も丹念に引用しながら書かれていた内容を分析した。これらからうかがい知ることが

できたのは、創作などによる文芸作品が多く収められているが、むしろ執筆者が普段の生活の中で感じたことや他の人に理解してもらいたい感情がテーマになる作品が多かったことである。すなわち、文芸誌の形態をとっていたものの、執筆者が日常の思いを吐露するメディアになっていたといえよう。

小結

本章では、大正デモクラシー期における三多摩の青年による社会教育実践をみるために、大正期稲城の文芸誌を取り上げ、そこに記されている人々の考え方などを読み取りつつ、学びの姿に迫った。

第1節では、大正デモクラシー下の学習・文化活動に関わる先行研究を取り上げた。ここでは自由民権運動に続く第二の民権運動期に位置づけられていることを読み取ることができた。このことから多様な学習・文化活動が展開されていたことをうけ、さらに第2節では広範な学習・文化活動のうち文芸誌に着目した。自由闊達に意見を述べることのできる大正デモクラシーの機運の高まりの中、多くの文芸誌が三多摩各地において発行されていた。

第3節では具体的事例として稲城における青年地域文芸誌の数点を取り上げ、分析を行った。ここでは青年による積極的な地域における学習・文化活動の活性化への思いや、学習・文化活動に対する青年の提言など、様々な青年の姿を明らかにした。大正デモクラシー期の三多摩では、リベラルな空気のあった世相を背景に社会教育実践活動も盛んになっており、地域文芸誌に収められている作品には、創作作品であるが現実に即したテーマや課題が論じられているものも少なくなかった。

以上により、文芸誌における作品の創作や会員相互のやりとりなどを通じて青年たちが学びながら成長する活動が展開されていたことをみることができた。

第2部 第1章 注

- 1 文部省『学制百年史』、1981年15版発行、pp.526-528。
- 2 北田耕也「地域と社会教育—三地域・比較研究の試み」、北田耕也、草野滋之、畑潤、山崎功編著『地域と社会教育—伝統と創造』学文社、1998年、p.2。
- 3 金原左門『大正デモクラシーの社会的形成』青木書店、1967年、p.8。
- 4 太田雅夫「改造・解放思潮のなかの知識人」、金原左門編著『大正デモクラシー』吉川弘

文館、1994年、p.76。

5 松本三喜夫「府中青年団史」、府中市教育委員会編『府中青年団のあゆみ 別冊』府中市、1993年、p.19。

6 梶国男「八王子における大正デモクラシー文化」、〈多摩のあゆみ〉第41号、多摩中央信用金庫、1985年、p.121。

7 松井翠次郎著作刊行会編『松井翠次郎遺稿集』松井メイ子(出版)、1990年。

8 「読売新聞」1921年7月6日付4面。

9 金原左門「近代世界の転換と大正デモクラシー」、前掲『大正デモクラシー』、p.15。

10 前掲「八王子における大正デモクラシー文化」、p.125。

11 新井勝紘『『多摩百年の歴史から』—自由民権から戦後の地域文化運動まで—、〈多摩のあゆみ〉第72号、たましん地域文化財団、1993年8月)、p.6。新井は1910年代に青年や青年教師等が行った文芸同人誌創作の動きを「地域青年文芸運動」と名づける。

12 前掲『『多摩百年の歴史から』—自由民権から戦後の地域文化運動まで—、p.8。

13 東京府南多摩郡農会『東京府南多摩郡農会史』、1914年、第二編「農業状態」、p.2。なおこの調査は1912年調査によるデータである。

14 新井勝紘「草の根のデモクラシー」、〈多摩のあゆみ〉第41号、多摩中央信用金庫、p.161-162。この紅潮社の交換先は全国に及んでいたようで、他にも東京の〈プラタナス〉(小石川大塚)、〈清流〉(渋谷)、〈文学世界〉(神田)、神奈川県の〈小波〉(橋本)、〈さざ波〉(高座郡大沢村下九沢)、北海道の〈芸術三国〉(札幌)、〈極光〉(釧路)、〈無限〉(空知郡滝川村)、九州の〈光輝〉(福岡)なども挙げられている。

15 「目次」〈せゝらぎ〉予告号、1920年4月。

「せゝらぎ會誌予告」目次は以下のとおりである。

せゝらぎ會、則

小説 五拾銭

雑詠

四行詩 小鳥

冠附

御賛成ヲ願ヒマス

五月号 題

作文 思ひ出

和歌

加入者氏名

16 「五月号題」、前掲〈せゝらぎ〉予告号、p.14。

「五月号題」は以下の様な内容が掲載されている。

和歌 せゝらぎ サミダレ

俳句 せゝらぎ ワカバ

冠句 ザワサワト

口語詩 随意

笑話 葉書

17 「せゝらぎ會誌予告」、前掲〈せゝらぎ〉予告号、p.1。巻頭言は以下のとおりであった。

「せゝらぎ會誌予告」

諸君ト相図リテ「セゝラギ會」ヲ起シ會誌「せゝらぎ」ヲ発行シマショー

本誌目的ハ文藝研究ノ資トナシ又ハ思想向上ヲ図リ或ハ趣味ヲ多大ナラシメ以テ大丸青年ノ名勢盛ナラシメンガ小生ノ思想故諸君ニモ時ニ触レ機ニ監ミテ御投稿下サイ

編輯部内 正吉

18 「せゝらぎ會則」、前掲〈せゝらぎ〉予告号、1920年4月、p.1。

19 芦水「雑詠」、前掲〈せゝらぎ〉予告号、p.10。

20 前掲<せゝらぎ>予告号、p.11。

21 「冠附 口惜しい」(作者名記載なし)、前掲<せゝらぎ>予告号、p.12。

22 白山「思ひ出」、前掲<せゝらぎ>予告号、pp.15-16。内容は以下のとおりである。「思ひ出」

「ひどく振ったらいけないよ」と健ちやんはおどしだ声で僕に注意しながら おほつかなひ足取りで遊動円木を渡つて行く 僕は両手に軽く鎖を持つて静かに振つてみた

少し大きく振つたらどんなに驚くだらう

ひとつしたら落ちるかも知れんつと起つたいたづら心から前後の考へもなく心持ちはげしく振つて見た と案の條「アツ」と一声健ちやんは腹匍いにぶつ倒れた

「あ痛ツ！」起上つた健ちやんの額にはべつとりと真赤な血がついて居た どうしたらいいんだらう 僕はたまらなくなつて健ちやんと側へ走つて居た「こらへてねー」と言った「えつ」と健ちやんの答へには元気がなかつた 僕は恐しくなつて泣き出した

健ちやんもなき出した

23 「通信」<せゝらぎ>予告号。通信欄には以下のとおり書かれている。

「賛成々々第二君ハ深々氣アル快男子ナリ」

「謹みて發刊を祝し奉り候ヤヨ賢明ナル大兄ヨ・・・」

「尚本誌主任並びに暗に御援助被下し無名乃書記に厚く感謝致し候段此段御届申候也以上」

24 <谷戸川>5月号、1923年5月。目次及び補足は以下のとおりである。

<谷戸川>第5号「目次」

松原先生の講演	永田筆記
青年團組織の改造	高橋豊治
批評を受けて感想	高橋梨花
批評について	富永置三
投げたる石	瑤濱
病床	梨花
涅槃	瑤濱
竹笛(英訳)	重寛
初夏	豊治
渡部さんからの手紙	
短歌	桃雨
麦畑	たけし
童謡	桃雨
短歌	瑤濱
瞳	桃葉
椿の花輪(童謡)	同
お池の金魚(同)	同
豆(童謡)	たけし
苺(同)	同
祝賀句集	諏訪會

こん度も原稿が多すぎて載せきれませんから、あとは次号へ送ります。次号は八月十五日締切。

俳句(五句) 和歌(五首) 童謡(一) 短文(一) 募集

だれでも歓迎します。この本は非賣品。

25 高橋豊治「青年團組織の改造」、前掲<谷戸川>5月号。内容は以下のとおりである。

高橋豊治「青年團組織の改造」

今普通にありふれた青年團を見ると心寂しい。青年指導者は青年といふものを性的にも思想的にも能く解してゐるだらうか。形式的に團員最大年齢を二十五才に限つて内容の聯

絡のない郡青年團は村では二十才迄甚しいの三十五才の者とを。若し同一視するなら馬鹿々々しい骨頂だ。此の異なる者を形式にでも無理に一つ型に入れ様とする青年指導者の頭が不思議でならない。同じ液体でも水と油と一つの器具に入れて混和せしめ様と思つても無理だ。何うしても青年團員は三十才まで必要だとするなら次の二種とする。

一、第一種。青年團。満十七才より二十二才

一、第二種。青年團 二十二才より三十才迄

第一種青年團は其の眼目とする所は自己修養、體育に精神的に世の風潮を外に純白に自分自身の修養をなし他日の資に供する基礎を作るに勉むる。

第二種青年團は第一種青年團終了者にして其の主眼とする処は社会にあてゝ奮闘する基礎を作る。即ち経済学に、法規に、延世にあらゆる方面に渡つての修養を積む、かゝる方法によつて青年團を組織したら利己主義に走り、底冷たい青年團が出来上がらないだらおうと思ふ、少くとも或る程度まで防ぐ事が出来るだらうと思ふ。其の具体的説明を必要とするが、紙数に限りあるから、これで筆を措く。又他日を期して自分の愚想を吐かせて戴きます。

(大正十二年五月)

26 高橋梨花「批評を受けて感想」、前掲<谷戸川>5月号。内容は以下のとおりである。

高橋梨花「批評を受けて感想」

谷戸川第四号の富永氏の僕対桃司君に対する批評は可成面白く読んだ。氏が僕に了解を求められたのは俳句の批評であつた。然し論旨は大体を通じて人物評論である。僕としても一寸意外な感が起つた。人物評殊に個性に渡りての批評は僕が今更事新しく申し立つる迄もなく現今の論理に於て特殊を除く外(敵視してゐる時又はその人を中傷又は悪寒を有してゐる時)は、非常に重大視され又遠慮されつゝあるのである。然るに氏は読者をして抽象的とまで感じ得さする迄深入りして得意然と論評させられた。如何な鉄面皮な僕であつてもあつと云わざるを得ない。然し全論を通じ特に俳句に対する批評はよく適所をとらへてゐると思つた(感心する程)僕も同感だ。桃司君の俳句は内容の充実に形式の整つてゐる点に、自然に対する美しいイモーションを個性のひらめきを力強さを作句した上に溢れてゐる。其して一種独特な力強さがあり、又人をロヤームするに足る美しさもある。まだ未完品然たる僕又は失言かも知れんが氏などの遠く及ばない感があります。人の俳句を批評などしてゐるより自分等は自己自身の作句に努力しなければならない。(後略)

27 富永瑤濱「批評について」、前掲<谷戸川>5月号。内容は以下のとおりである。

富永瑤濱「批評について」

或る時元良先生が申されました。先生が亜米利加の大學へ入學された時、其の大學には毎月辯論會があつて批評が盛んであつた。渡米された時は末だ語学に達者でなかつたから、どれか甘いのか、どれが下手なのか解らなかつたが、語学が達者になると同時に演説の批評も出来得る様になつたと。其の話を聞いて、先生は誠に正直な方であると思ひました。私達も學校で英語の演説など練習して居る時批評など出来ませんでした。多く聞いたり、話したりする中に、だんゝゝ出来る様になりました。自分は上手に演説が出来ずとも、他の上手下手は批評の出来るものです。一般の婦人は反物を織り又は染める事が出来ずとも、其の善悪を随分細かく批評するものです。其の反物や染方が出来ないから、批評が出来ぬと限りません。吾等は歌詞を製ることは出来ませんが、塩瀬の菓子とか、藤村の羊羹とか云つて味を批評します。又批評し得ると思ひます。吾等は蕉雨楼先生の御指導により俳句といふものを学びまして、多少俳句の善意を批評し得る様になりました。一心不乱に句作するのも善いが、又時には御豆の句を批評するのも、あながち悪くは無いと思ひます。抽象的になつたり、人物評まで這入つてはいけません。短歌なり、俳句についての批評は誰にも云つて貰いたいと思ひます。それで四号の俳句の批評を桃和君に頼みました。兎に角俳句について批評し得る様になつたのは、一つの進歩と思ひますから、他山の石と思つて気かけずに讀んで戴きたいと思ひます。

28 富永瑤濱「溝渠」、前掲<谷戸川>5月号。作品の一部を以下に取り上げる。

富永瑤濱「溝渠」(一部)

(前略)

甲先生。あの生徒が、そんな事しますかねえ。間違ではないせうか。

乙先生。いやあ鳴かぬ猫が鼠を捕る例に浅ないのさ。証拠が上がつては如何も辯解のしようも無いね。

甲先生。然し答案位では手跡が能く了らぬだらう。

乙先生。しかし本人が自白したのだから、もはや爲方がない。

教官。此の問題は軽い様であるが一面なのかなな、重大の問題で、既に世間に評番になつて居るからに、うやむやに葬れば、学校の威信に関するから充分責任を以つて取り調べました。

校長。戦法の女学校に対しても犯人がめつかつて何も處分せずには義理上済まさないから、厳罰に処した方がよろしいと思ひます。どの位の程度にしたら宜しう御座いませう。

吾等の仲間の下田が起つた。彼は早稲田で、自由の空気を吸つた来た独身の若い先生である。

下田。私は無罪を主張します。いいのといふ生徒は悪い生徒ではありません。そして未だ十六歳の紅顔の美少年である。渠は天真爛漫であつたからです。自然に悪のさ、やきがあつた時、渠は臆面もなく感情を流露したに過ぎません。謂はゞ無邪氣に何の深い意志あつて計畫したのではありませんから、私は無罪を主張します。

他の先生方は無罪と聞いて驚いた顔つきをした。吾等は内心無罪を望んで居た。

漢文の先生。これは女生徒を脅迫し社会を騒がしたのであるから、厳罰に処した方がよろしい。

博物の先生。十六歳位にして既に彼の大胆の事をすれば行末恐ろしい者になるだらう。訓戒位では効力が無い。厳罰に處すべし。都合によつては放校も可ならん。

博物の先生は既に五十の坂を越え高等学校の教授であつたが、ある事状のため、休職となり内職がてら勤めて居るので既に二十歳に近い娘の親であつた。

下田は怒気を含んで云つた。ある生徒が悪い事をした。

それを直ちに處分し放校すれば、其の学校では厄介払をして結構であるが、遂はれた生徒には同情すべきである。そういう生徒を教育するのが一体吾等の任務では無いでせうか。

博物の先生。御説は尤もなれど、あんな生徒を置けば善い生徒が直ぐ感染して悪くなるから、犠牲者として放校した方がよろしいのである。

下田。放校などしないで校長より訓戒して、それでも前非を悔いない時は放校の處分しても遅くないではないか。

若い先生方二三名もそれに賛成したが老人達はなか、動きそうにも無い。校長は頭をひねつて居た。

下田は校長をうながして「そうなすつてはどうです」と云つた。

博物の先生。そんな事では駄目だ。

下田。自分の若い時を考へて見ろ。

博物の先生。何んだ。此の青二才。

下田。何のこのなま意氣志め。

と云いながら下田は傍にあつた椅子を振り上げて博物の先生を撃たんとした。多くの先生が仲裁に這入つてまあ、と両方を窘めた。校長は皆さんの御意見も伺ひましたから教頭と協義して何れかにか決定するからと云つて閉会を告げた。多くの先生達は雪崩をうつて教員室に立ち戻りわれがちに校門を出た。自分は下宿に帰つてつくづく考へた

日本は急激進歩をしたが處々に間隙がある。親と子の間、先生と生徒との間、否先生の間にもこれだけの間隙があるのでは無いかと。たつた一つの恋といふ問題に関しただけでも、間隙・・・溝渠があるから問題が絶えぬのである。

(大正八年五月作)

²⁹ 富永置三‘A Bamboo flute’(「竹笛」)、前掲<谷戸川>5月号。内容は以下のとおりである。

A Bamboo flute

It was on the 13th of April. I was working with a plasterer behind my house. It blew violently and bitterly cold, though buds of mulberry and other trees began to burst. I saw three men scattering fallen leaves with kumade in the mulberry farm of Mr. Tominaga. Keeping some distance with one another, they were moving, kumade with eagerness. They was indeed glormy cold day. But we could dimlly see the Sun, as cloud was comparatively thin. All of them coverd their heads with old dirty handkerchiefs and worked as hard that they did not converse with one another. At close attention, I found one of them was Mr. Takeji. Long days of Spring make seemed not to be exceptional He hit whom a plan to while away his tiane and smiled. Setting his life to the toh hole of his kumade,he began to blow. He blew again and again. Shrill sounds were heard through the valley. He continued with smiles, till the other man,setting kumades asaide, began to listen. I also could not but smile. It was a seene of whith a hoot might have continued short. I hope I do not forget the seen.

Translate by O.tominaga

(Nagatasan no tanbun wo eigo ni yakushite shimaimashita)

³⁰ 田尻清子「稲城の文芸運動」『聞き書きによる農民とくらし』1982年、稲城市第二公民館近代史研究会発行、p.36。

³¹ 「大丸同窓会誌目次」<大丸同窓会誌>三月号、1925年3月。目次は以下のとおりである。

「大丸同窓会誌目次」

書	典名 子
書	大久保繁浩
野の乙女	全 ふで
雪をけたて、	全 武浩
春	石井長太郎
童謡	梅澤武浩
書	大久保良一
短歌	全 隆重
偶感	全 操一
笑話	全 武喜
現實に生きる女性	たんぼ 千鳥
書	梅澤 一男
童謡	全 武
話	高野 政浩
初春の一日	大久保操一
家庭訓話	全 秋
ものはづけ	春 氣生
話	長瀬福造
俳句	大久保繁浩
冬の夜	若林 マサ
短歌三題	須恵 清一
各國の工業	田口 孝一
私の言葉	無名 草
優しい集ひ	大久保ふで
結婚靴	大久保隆重

画	齋 月
雪の朝	若林イチ
四季に咲く花のもつ心	たんぼ 千鳥
春の一日	大久保 フヂ
新年	吉野 フヨ
僕は早く大きくなりたい	全 伊太郎
見舞の文	芦川 敏夫
想浅春	千 鳥
画	齋 月
俳句	大河原 孝
水戸黄門記	長瀬 シマ

以上

³² 「ヒセウラン」＜大丸同窓会誌＞第2号、1924年4月。

³³ 清一「感想」＜大丸同窓会誌＞第2号、同前。

³⁴ 廻覧順＜大丸同窓会誌＞3月号、1925年3月。

³⁵ ＜唄＞7月上旬号、1925年、7月、p.58。

第2章 地域通俗教育としての稲城・奚疑塾に関する考察

本章では、近代の私塾がもつ通俗教育的役割に注目し、近代における一私塾を取り上げ地域通俗教育の側面から検討をする。私塾は近世に起こり多くの塾が設立され、藩の正式な教育機関である藩校や庶民教育の場であった寺子屋以外の教育の場として、人々の学習意欲を支え教育の機会を拡大してきた。近世の私塾の種類は幅広く、武士や僧侶が指導した庶民教育、あるいは高名な学者が指導した高等教育機関として、様々な教育の役割を担ってきた。明治維新以降は近代的な学校教育制度が導入されていき、教育をめぐる状況は変貌を遂げていくが、私塾は近代以後も続き、一部は近代の学校に整備されていくものもあるが、学校と並立し学校とは異なる組織的な教育機関となっていた塾もあった。

そこで、本章では明治期から大正初期にかけて地域に開かれていたある近代の私塾を地域通俗教育の視点から検討し、役割と意義を実証的に明らかにすることを目的とする。具体的な分析の対象は、教育者・漢学者である窪全亮により開設され、1880～1913年に東京都心部から西南に位置する旧南多摩郡の稲城地域に開かれていた私塾、奚疑塾(けいぎじゅく)である。

奚疑塾を対象とする理由の第一は奚疑塾が開設されていた稲城の地域特性である。稲城は東京近郊とはいえ都心部から離れた農村であり、立地の面からは必ずしも恵まれた環境になかったにもかかわらず、多くの塾生を集めており、同塾は検証に値すると思われる。第二の理由としては、奚疑塾が、地域通俗教育的な活動を行っていたことにある。例えば、同塾は漢学を中心とした近世的な私塾としての教育を実施する一方で、金銭的に学習困難な人の教育機会の確保や女子教育にも力を入れており、これらを多角的にみることは有意義なのではなかろうか。

先行研究に関しては、1880年代～1900年代初頭の東京地域における通俗教育・社会教育の姿を明らかにした研究として、松田武雄による『近代日本社会教育の成立』を挙げることができる。松田は、近代日本の社会教育(行政)の成立過程において、地域の通俗教育活動に着目し、通俗教育会、講談会、図書館や青年会など、通俗教育・社会教育の諸相の実証的な考察を行なっている。その上で、都市、農村、山村、島嶼と地域的多样性をみせていた東京地域のなかで、時期的・地域的に豊かな実践があったことを明らかにした。松田は官製的な地域の通俗教育活動の中に、単に国家政策の浸透ではない地域の主体的な要因を見出している¹。しかしながら、ここで対象になった実践に私塾に関する考察は含まれて

はいない。

なお私塾は、通俗教育会、幻灯会、通俗図書などの旧来の通俗教育から生まれるイメージとは厳密には一致しない。しかし、前述のとおり地域通俗教育の機能も担っていた。そこで地域通俗教育の視点から奚疑塾を分析することにより、社会教育史に近代の私塾を位置づけていきたいと考えたことから対象に取り上げた。

なお、奚疑塾を取り上げた先行研究には、次の三つの研究を挙げることができる。第一が、渡辺賢二らを中心とする稲城市の市史研究である²。同研究では、奚疑塾史料を掘り起こしながら、奚疑塾の稲城における戦後への影響を中心とした分析を行ない、文化財価値としての奚疑塾に着目している。加えて奚疑塾の頌徳碑建立運動や奚疑塾に関わった人々の活躍から、「奚疑塾と窪全亮は、戦後の稲城や三多摩地域に有形無形の数多くの影響を残している³」としている。同研究は奚疑塾の姿を明らかにし、奚疑塾の持つ価値を検討した点で重要である。

第二に小林孝雄による研究がある⁴。小林は神奈川県地域民衆史を考察する中で、創設者窪全亮の分析を行なっている。特に漢詩人としての窪全亮に着目し、その漢詩や交友関係をみることで、窪を慕い多くの子弟が奚疑塾を訪れている事を指摘している。

第三に多田仁一による研究がある⁵。多田は、多摩地域の郷学校を検討する過程で、長沼村の長沼郷学校を取り上げ、郷学校教員時代の窪の指導に触れ、在村文化や儒教の存在を指摘している。第二、第三の研究は奚疑塾の創始者である窪全亮を対象としたもので、塾そのものの教育的意義に迫る研究ではない。本章では、こうした研究を踏まえながら、特に奚疑塾を通しての人間形成に焦点を当て、同塾が地域社会に果たした意義や役割の分析を行なっていきたい。本章は、私塾・奚疑塾を地域における民間有志による通俗教育・社会教育実践に位置づけ、地域に根づいた私塾を実証的に研究する点に特色がある。

本章の構成は以下の通りである。はじめに第1節において奚疑塾が成立に至った背景を論じる。第2節は、奚疑塾の設立理念や教育内容を対象に塾の目指す人間形成をみる。第3節では奚疑塾の役割を地域との関わりを中心に述べる。

第1節 奚疑塾の成立の背景

(1) 近代における私塾教育の展開

明治期の私塾は小久保明浩の研究により三つのタイプが示されている⁶。類型の第一が教育制度の発足時小学校に学んだ人たちが、小学校の課程以外に漢学の学習をするための塾である。第二は、この時期東京への遊学熱が盛んなことから、地方から上京して来る遊学者や、小・中学生、さらに中・高等教育の諸学校への入学の手がかりを得ようとする、向上心にあふれた若者たちが東京で学んでいた塾である。さらに、第三は明治期に誕生した人間的ふれあいを持つ新しい性格を持つ塾が挙げられている。

このような近代の塾に関して、小久保は次のように論じている。「近世の家塾・私塾と種々の点で異なった形態の新しい塾が明治期に生まれる。近世の塾は、漢学、国学、洋学といった学問を教育・研究するものとして存在したが、新塾では学問の教育を主体とするのではなく、塾を主宰する教師との人間的なふれあい、つまり何らかの人格的影響を期待しての、合宿生活が営まれた⁷」。近代の塾が近世の私塾と異なるものとしていた指摘である。このような塾は学問研究以上に人間的ふれあいによる人格の成長を期待するところに力点が置かれている塾であるとする。すなわち近代の私塾には机上の学問以外での人間成長を重んじていた塾が出現していたという考え方である。

また『東京都教育史』を確認すると、私塾をいわゆる公的学校と異なる位置付けに置いていた状況も確認できる。1880年の文部省第八年報からは、「小学中学若クハ専門学校ノ資格に適合セザル」学校や家塾の類を「純然完備ノ学校ト甄別」するため、家塾等を含め各種学校の項「各種学校」の項目が設けられたとある⁸。

なお、稲城が含まれていた神奈川県下における明治初期の私塾に関しては、1892年に文部省より出された『日本教育史資料』八を参照したい。ここに収められた「私塾寺子屋表」からは、11箇所私塾を確認できる⁹。奚疑塾がこれには含まれていないことに留意する必要があるが、近代に入ってからでも神奈川県で複数の塾が展開されていたことを伺うことができる。

(2) 奚疑塾の成立背景

次に、奚疑塾の成立の地域的背景を当時の稲城の地域や教育の概要からみておきたい。稲城は南多摩郡に位置するが、『東京府統計書』から南多摩郡、北多摩郡、西多摩郡の1893年から1908年の人口増減をみると、奚疑塾の活動期に三多摩全域で大きな変動はみられない。この傾向は東京市部との比較でも明らかであり、市部が約1.70倍に対して、三多摩合計では約1.19倍にとどまっている¹⁰。多摩丘陵が土地の多くを占めていることもあり、稲

城が含まれる南多摩の地域全体の主産業は農業であった。稲城では、農家が 80%ほどを占め、多くは農業で生計を立てていた。稲作が主であったが、副業としては、炭焼きや養蚕などもあった¹¹。南多摩地域は、1878 年 11 月郡区町村編制法により神奈川県に入った¹²。稲城村が誕生したのは 1889 年であり、矢野口・東長沼・大丸・百村・平尾・坂浜の合併によって成立した¹³。癸疑塾の時代の稲城は人口の大きな変動がなく、都市近郊であるが農村としての性格を強く持っていた地域と考えられる。なお、稲城村はこの時期以後、現在の稲城市に至るまで区域に大きな変更はない。

近代に入ってから教育・文化活動をめぐる動きで注目すべきものは自由民権運動であろう。1874 年の民撰議院設立建白書に端を発した自由民権運動は、三多摩では全国でも最も盛んに広がっており、1880 年 1 月、八王子に政社第十五嚶鳴社が成立したことを機に民衆の動きが活性化している¹⁴。自由民権運動は、単に政治的運動にとどまるものでなく、教育との関わりが深かったことから、近代の私塾をみる上でも避けて通ることはできない。教育史研究者の片桐芳雄は、自由民権運動を「国家の必要によって強権的に作り出されつつあるわが国の公教育に対して、まさにその成立時点において批判を加え、成立しつつあるそれとは異なる制度を希求する運動としての側面をもつものであった¹⁵」と日本教育史の視点から評している。

癸疑塾成立の背景にも、自由民権運動の影響を複数でみることができる。第一は、塾の支援者が自由民権運動の薫陶を受けていることである。例えば 1878 年町田に誕生した学習結社責善会と稲城の人々との関わりが挙げられる。責善会は、純然たる学習結社であったが、自由民権運動への導火線となり、地域ぐるみへ高揚する契機となった結社である¹⁶。責善会の呼びかけ人には稲城からも富永重侃、森素直が参加しているが、森素直は癸疑塾の支援者の一人として、癸疑学舎の開申書に創始者の窪全亮と共に名を連ねている¹⁷。

第二は、自由民権運動に影響された地域の人々が自らの子を癸疑塾で学ばせていることである。その例として稲城村の黒田尚雄の存在を挙げることができる。黒田は、南多摩郡自由党に参加し、平尾区域の自由黨員として活動をしていたが、子の黒田尚寛を癸疑塾で学ばせている。このような自由民権運動の影響を受けた人が、子どもを学ばせているケースが癸疑塾には少なくない。つまり、癸疑塾にはこうした自由民権運動の薫陶を受けていたことを確認することができる。

癸疑塾の活動が始まった 1880 年代頃の稲城の就学率をみると比較的高いとするデータがある。『稲城市史』での調査によると、坂浜・平尾を地域とする稲城市域の小学校である、

立志学校の就学率は1882年59.3%、1883年60.4%となっていた¹⁸。1882年の全国の就学率をみると48.5%、1883年は51.0%(1880年41.1%、1881年43.0%)の数値を示している¹⁹。これらからは稲城が教育意欲の高い地域であったことを推し測ることができる。

奚疑塾の基礎には、長沼郷学校の存在を確認することができる。1871年に神奈川県は県内に対して、郷学校を寄場組合単位に設置することを指示し、「郷党仮議定・郷学校仮規則」を布達する。これを契機に、神奈川県下では郷学校の建営が進むが²⁰、実際に設立された郷学校15校の中に稲城の長沼郷学校がある。『日本教育史資料』三によれば、創立に協力した人物に稲城市域6ヶ村の有力農民の名が並び、そこには前述した長沼村の森素直や平尾村の黒田尚雄の名もある²¹。長沼郷学校では奚疑塾創始者の窪全亮が教鞭をとっていることから、郷学校と奚疑塾とのつながりは深い。長沼郷学校の経費の項をみると「出納簿亡失ノ詳ナラス之ヲ更ニ據所ナシ今之ヲ憶測スルニ凡ソ百圓内外ナリシ但有志者ニ募リ一般人民ニ課セス²²」と記録されており、有志者によって支えられていた状況を伺うことができる。

以上、奚疑塾の成立時の状況からは、地域ぐるみの教育への意欲がみられること、民権運動に影響を受けた有力農民が地域での教育活動を支えていたことが確認された。

第2節 奚疑塾の教育

(1) 奚疑塾の概要

奚疑塾は、稲城・東長沼にある創設者窪全亮の私邸に1880年に開設された。設立当初は奚疑学舎の名称での構想だったが、後に奚疑塾と名乗ることになった。塾の名称は陶淵明の帰去来辞、「樂夫天命復奚疑」(かのでんめいをたのしみてまたなにをかうたがはん)から命名されている。

奚疑塾は1913年、窪の死去により活動を終えるまで約30年に亘り多数の卒業生を輩出している。奚疑塾の教育内容を確認できる史料のうち、概要を記したものは主に二つが現存している。その一つが1882年6月の奚疑学舎開申に関わる一連の史料群であり、もう一つは1882年以後に作成されたと考えられる「奚疑塾教課定則」である²³。以下、この二つの史料に基づき、奚疑塾の理念や教育内容をみていきたい。

(2) 奚疑塾の基本的理念

奚疑塾は基本的理念に教育機会の拡大を志向していたことが挙げられる。奚疑学舎の開申書には、設置の目的が「小学学齡外ニシテ学資乏ク中学或ハ他ニ就テ学ヲ能ハサル子弟ノ為メニ設ク²⁴」と記されている。稲城の研究に詳しい歴史学研究者渡辺賢二は、このような奚疑塾の設置目的から、「窪全亮は能力ある者については、その学び成長する権利を積極的に容認し、その能力を開花させていこうとする子ども観をもっていた²⁵」と述べている。

奚疑塾の学費をみると、授業料は「一ヶ月金三十銭 一ヶ年同三円六十銭」と規定されているが、同時に「但シ極メテ貧寒ノ者ハ定額ノ限りニ非ス²⁶」とも開申書に書かれている点が注目される。3円60銭の授業料を他と比較すると、例えば1878年の牛込区の農作雇用賃金は3.17円(男)、1.25円(女)²⁷であり、必ずしも安価であるとはいいい切れない。しかし極めて貧しい者に対しては授業料を定額にしない配慮をしたことがみえる。すなわち、窪による広く教育の機会を提供しようとする理念は、この授業料の追記事項から読み取れるのである。このような理念は授業料の設定だけではない。「奚疑学舎教則」には「華士族平民ヲ論セス、総テ滿十四年以上、小学年齡外ノ者ニ授ク²⁸」とも書かれており、奚疑塾では小学学齡よりも上の者誰もが学べるようにしていた。

塾の理念には自己研鑽の重視があることを奚疑学舎校則の生徒心得から読み取ることができる。例えば第十八項の「偽計妄談ヲナシ儕輩ヲ迷惑セシムル^(コト：引用者)アル可カラス一ニ誠實遜讓ヲ旨トスヘシ²⁹」、第十九項に「徒ニ世ノ利病ヲ論シヌ人ノ長短ヲ説ク可カラス一ニ己ヲ治ムルヲ以テ要トスヘシ³⁰」と書かれている。このように奚疑塾では、自らの研鑽による学びを重視していたのである。「奚疑塾教課定則」の塾則五条の中にも「塾中之徒不可論世之利病又不可説人之長短一以治己為要³¹」と開申書と同様に塾の生徒に対して、人の長所短所を論じるよりも自らを治めることを重要としており、一貫して自己研鑽を重視していたことが伺える。

(3) 奚疑塾の教育内容にみる人間形成

奚疑塾の教育は組織だった形で行われていたことが、教則等から読み取れる。奚疑学舎教則の第一条第二項によれば「毎等學科ハ讀書習字トス 但脩身作文歴史ハ讀書科ニ於テ修ル者トス³²」となっている。読書と習字で内容が構成されており、修身、作文と歴史は読書科で学んでいたようである。

さらに、第三条をみると読書は「第六項 読書 読書ヲ分テ讀法及作文トス³³」とあり、読法と作文に分かれていた。同じく第六項において、読書は「読書ハ専ラ先句讀ヲ習ハシメ而シテ字義章句ノ意ヨリ学力漸進スルニ從ヒ獨見講述セシムヘシ」、作文は「日用書牘ヨリ逐次ニ記事紀行ノ和文體ヲ作ラシメ漸ク等ヲ進ムニ於テハ漢文序記題跋ヨリ論説小傳等ヲ作ラシムヘシ」とその内容が規定されている³⁴。いずれも、内容は学習が進むにつれて徐々に難易度が上がっていった。

奚疑塾は寄宿制を採用していたため、遠方の学生を受け入れることが可能であった。それに伴い塾の規則には、生活に関する規律を定めたものが多くみられるが、これを同塾における教育活動の特徴として挙げることができる。例えば生徒心得の中には「寄宿スル生徒」に対して、夜中の音読の禁止や、起床（6時）・就寝（22時）時限、門限（22時）から火鉢ランプの取り扱いなど、細かく規定が定められている³⁵。これらによって、奚疑塾は学問教授の場であるだけでなく、塾生の人間形成そのものに影響を与える存在でもあったと推測できる。なお、学びに関するしっかりとした組織であることは、記章なども作られていることからもうかがうことができる（図 2）。

以上をまとめると、奚疑塾では自己研鑽の重視など、学問の習得の場であると同時に、自らの学びによる人間的成長を期待していたことがわかる。



図 2 奚疑塾記章(窪貞亮家資料)

第3節 奚疑塾の果たした役割

(1) 窪全亮の評価と稲城

創設者・窪全亮は稲城におけるいわゆる文化人として、地域に影響を与えた人物である。窪は教育者、漢学者、書家の三つの顔をもっていることから、塾を通しての地域とのつながりはもちろんのこと、稲城の各所にその足跡が見える。

第一は、教育者窪の側面である。窪は1847年(弘化4年)稲城の大丸に生まれた。年少時は、稲城の常楽寺で学業に励み14歳の時に上京、星野介堂、大沼枕山から漢学を、巻鷗州から書を学んでいる。故郷稲城に戻り、1871年常楽寺に開設された長沼郷学校、博文舎などで教師として活躍した。その後、1880年に奚疑塾を東長沼に設立し、窪は教員をやめ、その活動に専念している。窪は一貫して教育者として活躍した人物といえよう³⁶。

第二に挙げられるのが、漢学者、漢詩人窪の側面である。窪は字を肅卿、素堂と号し、多摩地域随一の漢学者の名声を博した。窪は江戸末期～明治前期にかけて活躍した漢詩人、大沼沈山に学んでいる。漢詩の批評を通して、溝口桂巖、小菅香村、嵩古香、森鷗村、小島慎斎・守政などと親交があったという³⁷。漢詩の繋がりは、1883年10月～1884年11月にかけて発行されていた地元総合雑誌「武蔵野叢誌」においてもみることができる。「武蔵野叢誌」は、稲城と隣接する北多摩郡府中の成文舎によって発行されていた。北多摩郡の「郡役所の広報誌」「政論雑誌」などさまざまな性格を持ち、漢詩や和歌などの文芸記事も充実していた地域の総合雑誌である³⁸。

「武蔵野叢誌」の中に文芸欄があり、漢詩文、和歌、俳句が投稿されているが、稲城からも多くの作品が掲載されており、窪全亮や奚疑塾同窓生の作品もある³⁹。例えば漢詩文には東長沼の窪素堂(全亮)ら5名14作品が掲載されている。特に窪は9作品が入っており、例えば第四号に「謝^ス苔菴詞兄^{ノル}寄^ル武蔵野叢誌^ヲ併祝^ス其發兌^ヲ」と題した漢詩文が寄せられている⁴⁰。沈山門下の本田苔庵との交流があったことを推察できる。この他にも第十号には「喜雪」、第十三号には「春日」など窪の作品には自然を詠んでいるものが多い。さらに和歌には5名18作品が収められており、中でも東長沼の福島彌繼は11作品が掲載されている。例えば第五号「夜中ノ目」や、第九号「夕霞」等、情景を詠んだものが多い。これらの作品からは直接、塾の情景をうかがい知ることはできないが、窪の交友関係を通して、塾生の活動が広がっていたといえよう。

第三は書家としても地域に多くの足跡を残していることである。墓碑やのぼり旗、扁額

などが三多摩に広く所蔵されており、例えば稲城の矢野口穴澤神社の碑文や稲城の青渭神社の幟などがある⁴¹。このように、窪は文化人として高い評価を得ており、窪が創始した私塾である奚疑塾が地域で受け入れられるための土壌となっていた。

(2) 地域における教育の場としての奚疑塾の役割

奚疑塾の同窓生数は、1910年3月調査の「奚疑塾同窓会会員名簿」によれば、総計で732名である⁴²（1913年まで塾が活動していたことを考えると、732名以上と予想される）。このデータからは、二つの特徴がみえる。一つは稲城の同窓生と共に、他地域出身の同窓生が多いことである。他地域出身者は約3/4を占めている。神奈川の民権運動研究に従事した小林孝雄の研究によれば、同窓生732名のうち、稲城出身者は183名（全体の約25.3%）である。地域ごとにみると、三多摩の出身者は534名（全体の約73.0%）、三多摩以外の近隣地域193名（全体の約26.4%）、その他地域は14名（2.0%）となっている。三多摩以外にも多くの地域の人々が奚疑塾で学んでいたことを示している。

さらに、奚疑塾には三多摩からでも青梅や五日市など遠方の塾生もいた。奚疑塾は寄宿制度のある塾であったが、そのことも塾生の出身が広範囲に及んでいた要因と考えられる。塾生の地域分布から、奚疑塾は稲城や周辺地域に住む人々にとっては地域の教育の拠点であったこと、さらに遠方からの学生にとっては「遊学」の為の教育機関であったこと、二つの役割を担っていた。

女性の同窓生も学んでいたことを指摘しておきたい。1910年名簿の集計の中で総計732名中34名が女性、うち22名が稲城の出身であったことがわかっている⁴³。奚疑塾での男女の人数比について、差が大きいことは否めない。しかし少なくとも、地域の女子に対して開かれていたことは確かな事実である。女性の塾生が学んだ内容は、1986年に女性を含め3人の奚疑塾塾生に対して実施されている聞き取りから知ることができる⁴⁴。そのうち、伊藤ノブ（明治23年生）、市川シズ（明治28年生）の通塾時期は明治30年代年頃にあたと推測される。伊藤の聞き取りからは「女の人が五・六人通って⁴⁵」いたことや、「塾では、本を読むことと、手習いとそろばん⁴⁶」を学んでいたことがわかる。さらに、市川の聞き取りからは、「小学を終えて、上級の学校にいこうとしましたが、坂浜あたりで、『ババア、ババア』といじめられていかなくなり⁴⁷」、間もなく奚疑塾に入ったとの証言がある。市川は奚疑塾での学習を「自分で勉強が進めばむずかしいものにとりくむ様な仕組みでした⁴⁸」と述べているが、奚疑塾では自学自習を行う場でもあったことを読み取れる。奚疑塾では

出身地域や性別に関わらず教育を受けることができたことから、広く地域に開かれた教育の場としての役割を担っていたことがわかる。

(3) 青年のつながりを生んだ奚疑塾

次に同窓生の書簡などから、青年のつながりを生んだ奚疑塾のありようをみたいそこで。同窓生で足跡が明らかにされている一人、平尾の黒田尚寛を例に取り上げたい。「對州巖原病院院長 醫學士」の肩書きで同窓生名簿に掲載されている黒田は、1871年生まれである。奚疑塾を出た後、第一高等学校、東京帝国大学を卒業し、医学士となっている⁴⁹。その東京在学中の黒田尚寛の書簡からは、奚疑塾出身の青年間で連絡を取っていた様子を見ることが出来る。例えば1874年生まれの同郷東長沼の森円蔵にあてた1890年3月の書簡では「貴兄者近頃奚疑へ御通学被也候哉伺上候、并せて奚疑之近況を御報知被下度候⁵⁰」と、奚疑塾の近況について確認している様子が伺える。他にも1891年に1月31日に同じく森円蔵に宛てて、遊学中の近況報告と共に、「第二回奚疑塾同窓温知会」への不参加などを綴っている⁵¹。ちなみに、奚疑塾同窓生の活動は盛んに行なわれていた。1888年3月23日の「毎日新聞」雑報欄によると、18日に「奚疑塾同窓恩知会」が開催され、「来會者無慮百七十名の多きに及び楼上楼下立錐の余地なく⁵²」と盛況だった様子が記されている。

さらに、黒田以外にも奚疑塾出身の東京の遊学者が存在していたことは、1896年5月の黒田尚寛の書簡からみることが出来る。「一同窓(奚疑)生新陳代謝大改革 嶋田、中島、市川、三氏土曜毎位に来る」など、7名の名前が挙げられている⁵³。こうした青年間のつながりは、奚疑塾あってこそ生じたものであり、これは塾の果たした役割として指摘できる。

他に稲城地域へ関わりを持った同窓生には森円蔵がいる。1874年生まれの森円蔵は、1885年4月に奚疑塾に学び、その後、奚疑塾での学問を打ち切り、1890年7月には慶應義塾に学ぶこととなる⁵⁴。しかし、森円蔵は病気により1891年1月に帰郷する。森円蔵の活動の中で特に注目されるのは、稲城へ帰郷後に与えた稲城への影響であろう。稲城に戻った森は後に、青年文芸グループ「兮韻会」「雄飛会」などの組織、「稲城青年会」の結成などに中心的な役割を果たしている⁵⁵。

奚疑塾出身青年の関わりがみられる組織には、1890年代の稲城各地の青年会の存在がある。稲城では、農事改良や学術研究、青年文芸グループなどの組織が生まれる。前述の「兮韻会」「雄飛会」の組織の他にも、1892年3月の「平尾青年談話会」、1892年8月に規約が成立した「坂浜鳳雛会」、1879年1月に誕生した「百村青年会」などがある⁵⁶。平尾青年会

は「農事・養蚕改良への取り組み、夜学・俳句会を起こしての学術研究、教育・衛生に関する幻灯会」などを展開していた。ここには奚疑塾の具体的関与をみることはできない。しかし、地域の青年グループの結成に奚疑塾の同窓生が中心的な役割を果たしていたことは伺える。具体的には平尾青年談話会の発起人の一人として鈴木静蔵や「吟韻会」「雄飛会」の森田蔵などを事例としてあげることができる。このように浮かび上がってくる同窓生の書簡や、そこにある「奚疑塾同窓会」「同窓恩知会」「在京奚疑塾同窓会」などの存在から、塾が奚疑塾生のつながりを生む為の重要な役割を果たしていたと考えることができる。同窓会を通じて東京へ遊学した青年と地域の青年とが交流していたことは注目に値しよう。

(4) その後の支持の広がり

窪全亮が跡継ぎに恵まれなかったこともあり、窪の死去に伴い奚疑塾は閉塾するが、その後も同窓会を通じて地域に影響を残している。同窓会活動で窪の銅像が作られることもあり、窪没後の1916年3月16日には、窪邸にて「窪素堂先生銅像除幕式兼第十一同窓恩知会」が開催されている。「記念品寄附金及ヒ人名」によれば、掲載されている人物名は延べで528名、寄附金額にして512名分集まっている⁵⁷。ここからは、同窓恩知会への出席人数を知ることはできないが、少なくとも多くの人数がこうした趣旨に賛同していること、窪全亮が没した後も同窓会組織の活動があったことを伺える。窪全亮及び奚疑塾に関わる動きは、戦後にも展開されている。例えば1986年4月29日「窪全亮先生頌徳碑」が建立されている。窪全亮にゆかりのある人々が呼びかけ人となった「窪全亮先生頌徳碑建立発起人会」により、1984年から活動され、170名の寄付が寄せられている⁵⁸。

以上、奚疑塾が地域に与えた影響からその役割を推察した。奚疑塾の活動が、同窓生ばかりでなく、地域の人々により支持されていたことがわかった。こうした人々の支持があったからこそ、奚疑塾は三多摩地域に広く根ざした活動を展開することができたといえよう。

小結

本章は、近代に稲城に開設されていた私塾・奚疑塾を取り上げ、地域において展開された学習活動の取り組みに関して、地域通俗教育の視点から検討を行うことを試みた。第1節では、奚疑塾開設時期の私塾及び稲城の背景の考察を行なった。奚疑塾の成立背景には自由民権運動の影響が少なからずあったことや、地域ぐるみで塾の教育を支える環境にあ

ることがわかった。その郷学校は地域の有志によって支えられていたことをみることでできた。

第2節では、奚疑塾の教育内容を中心に検討し、教育の目的や理念などから奚疑塾の教育を考察した。そこでは、人々の教育の機会拡大、自己研鑽の重視が志向されていたことなど、自ら学ぶことで人間成長を期待していた塾であることがわかった。第3節では奚疑塾は三多摩を中心に広く塾生を集め多数の同窓生を輩出していたことや、女子教育の一翼を担っていたこと、地域の教育拡大に寄与している塾であることが明らかになった。さらに塾生がそれぞれ自主性を持ち、学習に取り組む自己教育の形式による教育も取り入れられていたことを示すことができた。奚疑塾生の書簡や青年会からは、青年同士のつながりが浮かび上がってきた。以上から奚疑塾は稲城を中心として地域における拠点的な機能を担い、人々が交流する上での要の役割を果たしていたと考えられる。

以上から奚疑塾は、経済的事情により学ぶことが難しい人々に学ぶ機会を提供することなど、学校教育の機能と通俗教育の機能を併せ持つ塾であったといえよう。他にも、東京への遊学が盛んだった時期にも関わらず、東京都心部以外であった奚疑塾に多くの青年が学んでいた点は特筆すべきである。

なお、本章の課題に挙げられるのが、同窓生の足跡のより詳細な追跡である。奚疑塾が教育機関としてどのような実績を残していたのか、さらにそこで学んでいた人々がどのように成長していったのか明らかにするには、そこで学んでいた人々を対象により深く研究する必要がある。これにより奚疑塾において学ぶことの意味を究明し、奚疑塾の地域における役割がみえると思われるため、次章で取り上げる。また奚疑塾では漢学、書道などの教養的な教育が行なわれていたが、例えば平尾青年談話会の会則第三条「実業及学術ノ研究又ハ討論ヲ為シ、其発達ヲ図ルヲ以テ目的トナス⁵⁹」にあるような、実学の教育との関係を明らかにすることも、今後に残された課題である。

第2部 第2章 注

1 松田武雄『近代日本社会教育の成立』九州大学出版会、2004年、p.142。

2 渡辺賢二「南多摩地域の中での戦後稲城の特徴」、<稲城市文化財研究紀要>第2号、稲城市教育委員会、1999年3月、渡辺賢二「戦後初期の青年たち」、<稲城市教育委員会編稲城市文化財研究紀要>第6号、稲城市教育委員会、2004年3月、稲城市編集発行『稲城市史』下、1991年、川島琢象(代表)『窪全亮先生と奚疑塾』窪全亮先生頌徳碑建立委員会、1986年など。

- 3 前掲「南多摩地域の中での戦後稲城の特徴」、p.78。
- 4 小林孝雄「民衆文芸の創造と川崎」、『神奈川の夜明け—自由民権と近代化の道』(第二版)、多摩川新聞社、1994年。
- 5 多田仁一『在村文化と近代学校教育—多摩地域等の事例から—』文芸社、2001年。
- 6 小久保明浩『塾の水脈』武蔵野美術大学出版局、2004年。
- 7 同前、p.131。山形悌三郎の塾(埼玉県)、田尻稻次郎(北雷)の塾(小石川区金富町)1880年、坪内逍遙の逍遙塾(本郷区真砂町)1884年などが挙げられている。
- 8 東京都教育研究所編集発行『東京都教育史通史編』一、1994年、p.549。漢学を教授していたのは1585校中、676校であった。
- 9 文部省編『日本教育史資料』八、1892年、pp.270-271。
- 10 『東京府統計書』東京府、1893-1908年。
- 11 前掲『稲城市史』下、pp.755-756。
- 12 松岡喬一編著『多摩近現代史年表』たましん地域文化財団、1993年、p.20。1978年五日市村・小中野村が連合編成、小和田村・留原村・高尾村が連合編成(明治村)、八王子・横山・八日市・八幡4宿が合体して八王子町に、五日市村が五日市町に、田無村が田無町になどの動きがあった。
- 13 前掲『稲城市史』下、p.217。
- 14 松岡喬一『年表に見る八王子の近現代史』かたくら書店新書、2001年、p.24。
- 15 片桐芳雄『自由民権期教育史研究』東京大学出版会、1990年、p.2。
- 16 町田市教育委員会編集発行『町田市教育史』上巻、1988年、p.88。
- 17 「私立学校開申」1882年6月。
- 18 『稲城市史』下、稲城市、1991年、p.168。
- 19 日本統計協会編集・発行(総務庁統計局監修)『日本長期統計総覧』第5巻、1988年、p.212。
- 20 神奈川県立教育センター編『神奈川県教育史通史編』上巻、神奈川県弘済会、1978年、p.355。
- 21 文部省『日本教育史資料』三、1890年、p.364。
- 22 同前、p.365。
- 23 「私立学校開申」1882年6月。「奚疑学舎教則」「奚疑学舎校則」「小試業課程表」などからなっている。「奚疑塾教課定則」は年月日が記載されていないが、奚疑塾の名称を名乗っていることから、「私立学校開申」より後に作成されたと考えられる。
- 24 窪全亮、河島新太郎、森素直「私立学校開申」1882年6月。
- 25 前掲「南多摩地域の中での戦後稲城の特徴」、p.76。
- 26 前掲「私立学校開申」。
- 27 『東京都教育史』通史編1、1994年、p.341。
- 28 「奚疑学舎教則」、「私立学校開申」、1882年6月。
- 29 同前。
- 30 前掲「奚疑学舎校則」。
- 31 「奚疑塾教課定則」年月日不明。
- 32 前掲「奚疑学舎教則」。
- 33 同前。
- 34 同前。
- 35 同前。
- 36 『稲城町誌』稲城町、1967年、p.245。教員の辞任は1885年6月。
- 37 渡辺賢二編「資料にみる窪全亮先生と奚疑塾」解説、『窪全亮先生と奚疑塾』窪全亮先生頌徳碑建立委員会、1986年、pp.101-103。
- 38 「二〇〇二年度第二回企画展《『武蔵野叢誌』一八八三年秋、創刊!—自由民権期の地域

-
- 雑誌—」の記録」、町田市立自由民権資料館編『「武蔵野叢誌」一八八三年秋、創刊！—自由民権期の地域雑誌—』町田市教育委員会、2003年、p.2。
- 39 遠藤吉次「解説」、府中市立郷土館編『武蔵野叢誌』下、府中市教育委員会、1978年。1884年5～11月に成文舎より発行復刻、pp.396-408。
- 40 窪素堂「謝_ス苔菴詞兄_{アル、フ}寄_ニ武蔵野叢誌_ヲ併祝_ス其發兌_ヲ」(武蔵野叢誌)第四号、成文舎、1883年10月、p.20、前掲『武蔵野叢誌』下。
- 41 磯川豊一「素堂先生の文化遺産 碑と幟」、前掲『窪全亮先生と奚疑塾』、p.16。
- 42 「奚疑塾同窓会員名簿一覧」1910年、前掲『窪全亮先生と奚疑塾』、pp.70-86。
- 43 同前。
- 44 「塾生による奚疑塾回想」1981年6月15日に市川氏宅にて実施(聞き手：馬場亀三郎氏、浜住氏、渡辺賢二氏)聞き取りのまとめである。前掲『窪全亮先生と奚疑塾』。
- 45 前掲「塾生による奚疑塾回想」、pp.30-31。
- 46 同前、p.31。
- 47 同前、p.32。
- 48 同前、p.32。
- 49 黒田尚寛氏の東京遊学については、前掲『稲城市史』下、pp.258-260に詳しい。
- 50 「勸業博覧会へ誘う黒田尚寛書簡(森田蔵宛)」1890年3月、稲城市編集発行『稲城市史資料編』3近現代I、1997年、p.458。
- 51 「東都遊学中の近況及び奚疑塾同窓温知会につき黒田尚寛書簡(森田蔵宛)」1891年1月、前掲『稲城市史資料編』3近現代I、pp.459-462。
- 52 『毎日新聞』、1888年3月23日。
- 53 「一高在学中の近況及び奚疑塾同窓生につき黒田尚寛書簡(加藤梁吉宛)」1896年5月、前掲『稲城市史資料編』3近現代I、pp.463-466。
- 54 前掲『稲城市史』下、p.261。
- 55 同前、p.263。
- 56 同前、p.268。
- 57 「窪素道先生銅像除幕式兼第十一同窓恩知会開催通知資料」1916年3月3日、前掲『窪全亮先生と奚疑塾』、p.107。
- 58 「窪全亮先生頌徳碑建立趣意書及建立経過」、前掲『窪全亮先生と奚疑塾』、pp.126-143。
- 59 「平尾青年談話会の会則」年不明、前掲『稲城市史資料編』3近現代I、p.526。

第3章 近代の私塾における同窓生の研究—奚疑塾を対象として—

私塾は、公教育制度が確立する近代以後も、その一部は継承され、組織的な教育機関としての役割を果たしてきた。そのため近代の私塾も、地域の庶民教育を担う場の一つとして看過できない存在である。私塾の幅は広く、プライベートな教育を行う塾、学校教育制度の確立途上において公教育の代替的役割を果たしている塾、などさまざまな形態の塾があった。

近代の私塾が持つ機能として、まず公教育の代替としての側面がある、学制の第十四章には、「官立私立ノ学校及私塾家塾ヲ論セス其学校限り定ムル所ノ規則及生徒ノ増減進否等ヲ書記シ毎年二月学区取締ニ出スヘシ学区取締之ヲ地方官ニ出シ地方官之ヲ集メテ四月中督学局ニ出スヘシ」とあり、同第四十三章には「私学私塾及家塾ヲ開カント欲スル者ハ其属籍住所事歴及学校ノ位置教則等ヲ詳記シ学区取締ニ出シ地方官ヲ経テ督学局ニ出スヘシ²⁾」と規定されている。

私塾の開設にあたっては地方官への届け出が必要であり、さらに生徒増減などの運営も官立・私立学校と同じように届け出が必要になっている。届け出の義務など、私塾はある程度公的な側面を有する組織となっていた。つまり名称こそ私塾であるが、法制上においては少なくとも学校制度に位置付けられていたのであり、一部の私塾はある程度現代でいうところのオルタナティブ・スクール的なものも存在していたわけである。

他にも通俗教育・社会教育の機能も有し、教育機会の拡大や女子教育の役割を担っていた。近代教育の変遷の過程で、私塾の中には学校に改編され公的な教育機関の一部になるものや、民間の教育の場としてあり続ける塾など、多様であった。

そこで本章では私塾で学んだ人々に注目し、同窓生の側面から足跡の分析をすることで近代私塾の果たした役割を明らかにしたい。現代においては、教育の危機が叫ばれフリースクールなど多様な教育の場が模索されている。近代の教育制度が確立する過程で公教育とは異なる教育を行っていた私塾の社会教育的役割を人間成長の面から改めて考察することには、現代的意義が少なからずあると考える。

私塾の役割の解明にあたっては、私塾がまさに「私」的な教育機関としての性質を持ち膨大な種別がある以上、全容把握は難題である。そのため、瑣末になってしまうおそれがあるものの、個別の私塾の活動を丹念に追うことにより、進めていくアプローチが必要であろう。

本章では奚疑塾を改めて分析対象に取り上げる。前章では、塾の教育理念や塾則などの塾のあり方を中心に検討しながら奚疑塾の意義や役割を解明してきた。そこでは（特に中等教育を意識した）教育を受けることができない人のために教育がなされていたことや、学費などのシステムの整備がされていることがわかり、地域の人々の教育機会の拡大に一定の意義があったことが明らかになった。だが、具体的にどのような影響をそこで学んだ人々に及ぼしていたかまでは踏み込むことができなかった。そこで本章では、奚疑塾の同窓生に着目し、その学びや動向の側面から、近代私塾の社会教育的役割の考察を深めていきたい。

なお、本章では卒業生ではなく、同窓生の語を用いた。奚疑塾の記録に卒業の制度はあったが、奚疑塾で学んだ者は必ずしも卒業を目的としたわけではない。全課程を受けることをせずにやめる者など、人によりさまざまな形で学んでおり、塾で学んだ多様な人物を検討の対象に含めていることがその理由である。

本章の史料は、2006年度から4年間にわたり、筆者も調査に加わっていた稲城市教育委員会の文化財調査による、奚疑塾の悉皆調査に依拠する。なお、同調査は『窪全亮と奚疑塾』（稲城市教育委員会、2010年）にまとめられている。この調査は、渡辺賢二らによる1986年の調査（『窪全亮先生と奚疑塾』（窪全亮先生と頌徳碑建立委員会、1986年）が上梓されている）以来の大規模なものであり、同窓生の動向も含めて多くの新史料が発見されている。ここでは貴重な原典史料を用いて論じるが、研究方法は史料の文献サーベイに加え、同窓生の動向を中心に整理する手法を取る。

第1節では先行研究の到達点と課題を述べる、第2節では塾の同窓生をタイプ別に分類し、それぞれを検討する。

第1節 近代における私塾に関する先行研究の到達点と課題

近代の私塾に関する研究は、地域史研究や教育史研究などの分野で行われてきた。ここでは私塾研究の中でも、近代の私塾に関する研究を取り上げ、その到達点と課題を論じる。

例えば、近代の私塾に関連する総論的な研究には、小久保明浩による塾の歴史研究がある³。これは塾の歴史的変遷を明らかにしたものであり、近代の私塾もテーマの一つである。

池田雅則による学習歴の社会的評価及びカリキュラムの研究も重要な研究である⁴。池田

研究では、フォーマルな学校を絶対的と見なしがちな価値観を歴史的な観点から反省する契機をもたらす可能性としての私塾、という論点を提示した上で、学習歴の社会的評価やカリキュラムの研究の観点に着目している。また私塾以外の教育機関との関係性からその機能を位置づけるために、進学・非進学の行為に対する私塾の役割を明らかにし、私塾の隆盛を支える要因として私塾のカリキュラムを研究する重要性に言及している⁵。具体的事例として地域指導者層の私塾「長善館」（新潟県西蒲原郡）を題材に論じている。

他にも個別の私塾をとりあげた事例研究は行われており、関口直佑による近代私塾の研究は、近代の東京の一私塾である同人社を対象とし、明治初期の時代状況や私塾の盛衰を明らかにしている⁶。関口は英学、漢学などを教授した私立学校的性質を色濃く持つ同人社を題材に、私塾が近代的教育制度の先駆けとなっていたことやその衰退を論じている。他にも、平沢信康によるキリスト教の伝道師らによって開設された幕末・明治初期におけるキリスト教系私塾の設立を対象にした研究もある⁷。

「私」のものである私塾の性質上、この分野に関する研究では個別の塾の事例などの実証的な研究中心の一つとなりうると思われるが、既存の研究では、私塾から育った同窓生がテーマにされることは少なかったことが伺える。私塾は教育機関であるため、人間の学びの側面からみることが課題となっており、本章の研究ではそういった側面を補強する意義を有している。

第2節 奚疑塾同窓生の研究

(1) 奚疑塾の概要

奚疑塾の同窓生が学んだ環境を見ておくために、奚疑塾やその教育内容を改めて確認する。奚疑塾は、神奈川県令に出された奚疑塾の開申書「私立学校開申」において、名称を「奚疑学舎」と定めており⁸、本格的な学校を想定し設立していた。特筆すべきことは、奚疑学舎「設置ノ目的」に「小学学齡ニシテ学資乏ク中学或ハ他ニ就テ学ヲ能ハサル子弟ノ為ニ設ク⁹」と書かれているように、小学校卒業後金銭的問題により中等教育などを受けることができない者にも塾が開かれていたことである。

創設者・窪全亮は東京で漢学、漢詩を学んだあと奚疑塾開設までの間に、博文学舎で小学一等訓導を、西多摩郡拜島村知恩学舎と大神村執中学舎の学務を兼任するなど、学校の

教員を務めている¹⁰。窪が教員として働いた経験は、奚疑塾の構想に対して少なからず影響を及ぼしていると推測できる。奚疑塾開設の内容を示している「私立学校開申」をみると、奚疑学舎の教育システムは、学科、作文、習字の学科設定や、六等のレベル分け、小試業・定期試業・大試業など適宜設定されたテストなど、設立当初は本格的な中等教育の私立学校を目指していたことが推測される。窪全亮が漢学者であったこともあり、塾は読書、作文、習字などの漢学を中心としており、基礎教育を重視した漢学塾であった。なお、近い時期の稲城に開かれていた私塾には関流和算の指導者・小俣勇造による和算塾¹¹などもあるが、詳細は明らかになっていない。

奚疑塾の学習のカリキュラムをみると、奚疑塾では成績による席次の決定があったことや（「第十六項 定期試業ハ毎等満期ニ至リ、該一期内修学セシ学科ノ成績ヲ検シ其落第ヲ定メ其得点ノ多寡ニヨリ生徒ノ席次ヲヒ下スル者トス¹²」）、成績を定期試業の成績による席次の貼り出し（「第三十二項 生徒ノ席次ハ定期試業ノ得点ノ多寡ヲ以テ之ヲ定メ名札ヲ教場ニ掲クヘシ¹³」）など、厳しく学問を修めるようになっていた。さらに、第三十一項 「課業中ハ父兄若クハ親戚タリトモ教師ノ許可ナクシテ生徒ニ応接スルヲ禁ス」という規定に見えるように、課業の間には学外の人間に会わず、集中するようなことも定めてあった。学科は読書、作文、習字の三科であったが、のちに出された「奚疑塾教課定則」では算術を教授していたようである（「算術ハ和洋随意タルヘシ 但決修モ亦随意タルヘシ¹⁴」）。

しかし、塾生は塾の課業だけを学んでいたわけではなく、例外に課外での学問に関する規定もある。奚疑学舎教則の第三十項には「学業ハ都テ順序ヲ逐ヒ定課ニ就クヲ法トス若シ定課ノ外業ニ就クヲ欲スル者ハ其旨ヲ具シ校長ノ指揮ヲ待ツヘシ¹⁵」と、基本的には奚疑塾での学業を行うことが基本であるが、さらに学びたい者には、その学習意欲を高めるような配慮もされていた。

以上の奚疑塾の規定をみると、奚疑塾では基本的には学校の形態をとっていたが、学校以外の側面も少なくない。学びたいが金銭的な理由で学習することが難しい者に対しては学問の場を提供することや、さらに学びを深めたいものが課外学習で学問を深められるように対応がされていることなどがわかる。学びたい意欲のある者を伸ばそうとする、教育者・窪全亮の志向を推し測ることができ、なおかつ塾生が多様な学びを進めることができるよう、塾のシステムで担保していたことが伺える。

（2）同窓生の出身地域

奚疑塾は開かれた約 30 年の間に、多くの同窓生を送り出しており、1910 年調査の「奚疑塾同窓会員名簿一覧」によると、1910 年時点で 732 名もの同窓生がいる¹⁶。1910 年時点の居住地であるため、このことからおよそその出身地域を推測できる。さらに、出身地域に残った者以外の卒業後に外へと転出した者の一覧もわかり、塾生のその後を分析するための一助となる史料である。名簿一覧 732 名中、稲城が住所となっている者は 182 名。およそ 1 / 4 が地元の稲城であるが、他にも東京市部からは 20 人、隣接する神奈川県からは 100 名を超える同窓生を出している。なお、外国（米国、韓国）を含めた諸国（東京、神奈川、埼玉以外）に居住する同窓生も 14 名を数える。奚疑塾の同窓生が関わった地域では、決して地元の稲城に限定されたものではなく、地域も広がったことがわかる

奚疑塾の多くの同窓生が散開することなく彼らを組織できたのは、奚疑塾の同窓会（同窓会・同窓恩知会）の果たす役割が大きかったと思われる。奚疑塾の同窓会は、1888 年の毎日新聞で報道されたような奚疑塾の地元近くで開催された同窓会（「去る 18 日、神奈川県下多摩郡府中駅前中屋に於て題号の如き一大懇親会を開きたり、（中略）来会者無慮 170 名の多きに及び、楼上楼下の余地なく¹⁷」）だけでなく多数開催されている。さらに同窓会は稲城周辺で行われたものだけでなく、在京者による同窓会である在京奚疑塾同窓会も開催されている¹⁸。

（3）奚疑塾同窓生に関する調査

奚疑塾の同窓生の動向は、主に三つの研究によって明らかになっている。第一の研究は、詳細が判明している同窓生のさらなる足取りの調査（①）である。前述の文化財調査においては、ある程度の動向が判明している同窓生（稲城出身の同窓生が多い）に対しても史料の追加調査が行われ、ノートなどによる学習の状況や書簡がみついている。第二は奚疑塾同窓生名簿に掲載されている、稲城を除いた市区町村の自治体史における同窓生の足取りに関する文献調査（②）である¹⁹。②の文献調査では稲城市外の同窓生の動向の一部が判明している。

第三は奚疑塾同窓生名簿を元にした、近隣自治体に対する同窓生の子孫の悉皆調査（③）である。この調査では、奚疑塾の同窓生のさらなる実態をつかみ、新たな同窓生の動向を調べるために、東京都内の市区町村の文化財担当課への照会を行うことによって、子孫の現在の状況や資料の現存状況等を調べる方法によって進められた²⁰。この方法からは、武蔵村山市及び瑞穂町の 2 名の同窓生が新たに判明している。

(4) 奚疑塾同窓生の動向

本項では、前述の①から③の調査や関連する史料に依拠しながら奚疑塾同窓生の動向の分類と整理を試みる。分類にあたっては、詳細な動向が明らかになっており、代表的な同窓生が多いと考えたことから、①の調査にあたる詳細な動向が判明している同窓生を分類にあたっての基準とした。

奚疑塾で学んだのち、詳しい動向が明らかになっている同窓生も少なくない。ここにその一部を列記すると、第一高等学校から東京帝国大学に進み医師となったのち、長崎県対馬の共立巖原病院の院長兼外科部長となった黒田尚寛²¹。東京の慶應義塾へ遊学するも体調不良により中断し、稲城にもどり稲城村村会議員として活躍した森田蔵²²。稲城村の初代村長森清之助の次男であり、日露戦争で若くして没した森為之助²³。さらに同窓生には、稲城村の平尾出身で、神奈川県の新井村で教員として勤めた白井錠次郎²⁴や、多磨村(現府中市)役場に勤め、多磨村村会議員も二期務めた清水九一²⁵もいる(図 3)。

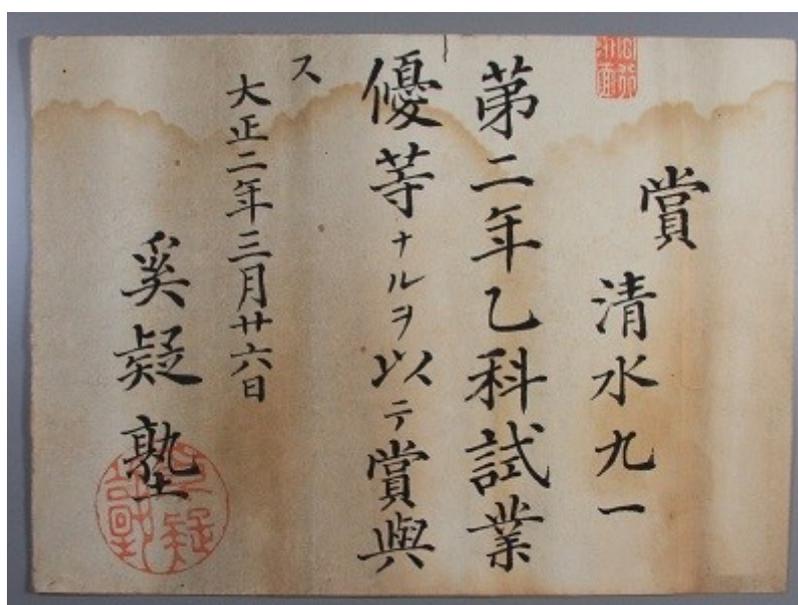


図 3 証書(清水九一)(清水義夫家資料)

これらの他にも、1981年、1986年当時存命であり、奚疑塾に関する聞き取りを実施した三名の同窓生の動向も判明している²⁶。その聞き取りからは伊藤ノブ、市川シズら奚疑塾で学んだ女子の同窓生や、小学校卒業後奚疑塾を経て獨協中学から一高、東大へと進み精

神科を専攻した松本松男の3名の同窓生を知ることができる。

続いて、稲城市外の同窓生の分析を進めるが、ここでは、表6 三多摩の自治体史にみる奚疑塾同窓生の動向を参照する。

表6 三多摩の自治体史にみる奚疑塾同窓生の動向

地域名	旧町村名	同窓生名	略歴	出典
八王子市	八王子町八幡	梅原勘兵衛	文久元年9月10日生まれ 八王子町会議員(明治22年4～、明治31年11月～)、職業：質屋、呉服商	『八王子市議会史資料編Ⅱ』(1988年)、48頁
	八王子町八日	中村宗三郎	明治5年5月7日生まれ 八王子町会議員(明治33年3月～、明治45年3月～)、職業：織物製造業	『八王子市議会史資料編Ⅱ』(1988年)、8～13頁
	八王子町八日	島村龍造	明治6年2月17日生まれ 八王子市会議員(大正6年11月2日～大正10年1月1日)	『八王子市議会史資料編Ⅰ』(1988年)、14頁
	八王子町寺町	須田平四郎	八王子町会議員(八日町)(大正5年3月～)、市会議員(大正6年11月2日～)	『八王子市議会史資料編』(1988年)、13頁
多摩市	多摩村寺方	杉田林之助	明治29年、37年多摩村所得額第1位	『多摩市史 通史編二 近現代』(1999年)、318頁
	多摩村乞田	新倉城之助	農家小組合組合長、経済更正実行組合第八区副組合長、乞田第二農事実行組合組長、多摩村常会推進員、農業委員	『多摩市史 通史編二 近現代』(1999年)、455頁
	多摩村関戸	小林万平	熊野神社氏子総代、納税区世話掛、経済更正実行組合第一区副組合長、産業組合監事、関戸農事実行組合理事、農業会理事、地主、消防組部長	『多摩市史 通史編二 近現代』(1999年)、460頁、504頁
	多摩村下河原	高野幾三	多摩村長(昭和23年～昭和31年)	『多摩市史 資料編』

	多摩村連光寺	小金豊成	多摩村役場書記、助役、村長、国民精神総動員実行委員	『四近現代』(1998年)、318～409頁 『多摩市史 通史編二近現代』(1999年)、504頁
	多摩村貝取	横倉勇造	多摩村収入役臨時代理(明治36年11月18日～37年3月10日)、村会議員(大正2年～大正10年)	『多摩市史 通史編二近現代』(1999年)、460頁、210頁、448頁
調布市	調布町国領	小山芳次郎	調布町会議員(下布田)：明治三七年三月(半数)一級、明治43年3月(半数)一級	『調布市史 下』(1997年)、333頁
	調布町国領	永川賞吉	調布町会議員(国領)：明治31年1月(補欠)二級、明治37(半数)二級、明治43(半数)二級	『調布市史 下』(1997年)、333頁
	調布町布田	原雄一	南多摩郡長、原豊穰の長男 株式会社調布銀行の発起人(15名)―明治33年7月14日より営業開始、監査役、調布町会議員(上布田)明治31年3月(半数)二級、明治37年3月(半数)二級、明治43年3月(半数)二級	『調布市史 下』(1997年)、333頁、421～413頁
	調布町飛田給	板橋権右衛門	調布町会議員(飛田給)―明治22年5月(初回)一級、明治28年3月(半数)一級	『調布市史 下』(1997年)、333頁
日野市	桑田村豊田	山口清之助	文久3年10月9日生まれ。早く両親に死別、4才の時に山口平太夫の養子となる。 多摩でも名だたる豪農山口家はきわめて進歩的な考えで事業を進めていた(ビールの生産「山口麦酒」) 明治20年アメリカに渡航(24才)	『日野市史 通史編三 近代一』(1987年)、211頁、215頁、349頁

			日野町農会評議員(明治41年～大正3年) 耕地整理組合組合長(明治43年6月25日)	
東村山市	東村山野口	小島証作	東村山村農区品評会委員(明治24年10月) 東村山村長(明治36年月10日)	『東村山市史 10資料編 近代2』375頁
あきる野市	西秋留村油平	瀬沼伊兵衛	(神奈川県)県会議員：明治二四年 (明治二六年神奈川県から東京府へ移管後東京府会議員に選出される) 甲武鉄道は多摩の有力者として協力員に要請(協力員は鉄道用地買収が主任務)	『秋川市史』(1983年)、1117頁、1162頁
昭島市	大神村	中村半左衛門	自治改進黨 明治一三年一二月五日の神奈川県武州懇談会の仮幹事に選ばれる 明治二一年十一月甲武鉄道を青梅まで延長する依頼書を提出、総代人(六名)となる	『昭島市史』(1978年)、1420頁、1421頁、1428頁
小金井市	小金井村貫井	島田藤吉	関野新田地主 水海道鉄道設立発起人	『小金井市誌Ⅱ 歴史編』(1970年)、446頁、448頁
狛江市	狛江村岩戸 狛江村覚東 狛江村覚東	須田林之助 (または輔) 高木一平 鈴木泰一	旭貯金銀行狛江支店取締役 狛江村の地主 狛江村における多額納税者(明治45年1月第2位、大正11年6月第11位) 狛江村における多額納税者(明治45年1月第11位、大正11年6月第10位) 狛江青年会幹事(大正4年) 狛江村における多額納税者(明治45年1月第10位、大正11年6月第7位) 狛江青年会会計主任(大正四年) 同志倶楽部設立発起人(明治三二年一月二	『狛江市史』(1985年)、1204頁、1263頁 『狛江市史』(1985年)、1263頁、1283頁 『狛江市史』(1985年)、1263頁、1283頁

	狛江村和泉	飯田利平	三日) 狛江村青年会幹事(大正四年)	頁、1067 頁 『狛江市史』(1985 年)、1283 頁
府中市	西府村本宿	松本晋	西府村助役(昭和 6 年 7 月 7 日～昭和 7 年 4 月 25 日) 西府村村長(昭和 7 年 4 月 26 日～昭和 21 年 11 月 6 日)	『府中市史 下巻』 (1974 年)、696 頁、 12168 頁
	西府村中河原	高野寛一	玉南電気鉄道監査役	『府中市史 下巻』 (1974 年)、572 頁
	府中町	竹内太左衛門	府中銀行支配人(明治 30 年か若干前) 第 62 図『武蔵国三多摩郡公民必携名家』(国立国会図書館蔵)に掲載されている。明治 2 年 12 月生まれ、蚕種製造業、府中銀行支配人 株式会社第七十八銀行清算人 府中町議明治 39 年～昭和 3 年 6 月 29 日 競馬場招致委員 競馬場招致常任委員	『府中市史 下巻』 (1974 年)、416 頁、 414 頁、500 頁、1269 頁、591 頁
	府中町	田中智造	競馬場用地買収費貸付(7 名で 60、900 円、昭和 5 年 4 月 9 日) 府中町議員昭和 11 年 6 月 30 日～昭和 22 年 4 月 30 日	『府中市史 下巻』 (1974 年)、591 頁、 603 頁、1270 頁
国分寺市	国分寺村	市倉良輔	国分寺村平和会(平和的村議選挙を目的)の 停車場地区実行委員(昭和 4 年 3 月) 国分寺村助役(大正 8 年 9 月 8 日～大正 8 年 21 月 10 日)	『国分寺市史 下 巻』(1991 年)、254 頁
	国分寺村中落	中藤俊弥	国分寺村村長(大正 8 年 21 月 10 日～大正 21 年 21 月 9 日) 国分寺で最初のキリスト教受洗(明治 22 年	『国分寺市史 下 巻』(1991 年)、1044

	国分寺村内藤新田 国分寺村平兵衛新田	神山平 尾又彦一郎	3月10日)、父神山平左衛門他2名で計4名 村内有志協議会(村会議員選挙における対策、競争でない候補者選出の方式をとる)地区委員、昭和4年3月6日	頁 『国分寺市史 下巻』(1991年)、90頁 『国分寺市史 下巻』(1991年)、253頁
三鷹市	三鷹村野崎	吉野泰之助	慶應3年～昭和13年 父は吉野泰三。泰三が政治運動に活躍する留守を守り活動を助けると共に、吉野派の壮士の領袖として身を挺した明治25年第2回総選挙戦のなかで自由党派壮士に襲われ負傷。その後「正義青年会」「青年同志会」を組織、地域内の青年達を中心に政治的・文化的交流を図るなど積極的に活動した。 明治29年父泰三が死に際して政治家になることを禁じたため遺言を守り、旧跡の探訪や書画・骨董・刀剣・庭木の収集など、趣味に生きる生涯を送った。父と同様に書を能くし「凌雲」の雅号を持っていた。家伝の薬「保寿丸」を関東地方を中心に鹿児島・北海道まで販路を広げていた。	『三鷹吉野泰平家文書目録 三』(2001年)、5頁
瑞穂町	箱根ヶ崎村	会田寛一郎	瑞穂町議会議長(昭和22年5月～昭和26年4月) 瑞穂町助役(昭和28年7月～昭和33年12月)	『東京都瑞穂町 瑞穂町史』(1974年)、1014頁
川崎市	柿生村黒川	坂本與吉	明治22年3月から明治24年12月まで癸疑塾で学ぶ明治42年3月31日尋常片平小	『柿生の教育のあゆみ』(1980年)、239

	柿生村麻生	越水音八	学校の訓導兼校長として着任 明治25年10月準教員として尋常鉄小学校 に着任 下麻生小学校、片平小学校を経て、明治33 年7月8日鉄小学校の訓導兼校長に着任	～240頁 『柿生の教育のあゆ み』(1980年)、2401 頁
横浜市	山内村石川	横溝寛康	明治42、3年頃年石川小学校へ着任	『柿生の教育のあゆ み』(1980年)、240 頁

(「奚疑塾と窪全亮」稲城市教育委員会、2010年、pp.74-75。より抜粋。)

ここで引用した表は、前述したとおり、奚疑塾同窓生名簿に掲載されている同窓生の足取りを自治体史の文献調査によってまとめたものであり、八王子市、多摩市、調布市、日野市、東村山市、あきる野市、昭島市、小金井市、狛江市、府中市、国分寺市、三鷹市、瑞穂町、川崎市、横浜市の同窓生の一部の足取りが明らかになっている。三多摩地域で12自治体、神奈川県では2自治体、36名にわたっている。参照した文献が自治体史であることから、同窓生に関する記載はその地域での活動を中心とした者に限られているが、ここからは、職業、地域での委員活動などが判明している。少なくともこの一覧で見られる同窓生は、地域の有力者として活躍している者が多いことがわかる。多額納税者の記録に残っている同窓生もあり、地域の政治や経済に対して多大な影響を及ぼしている人物も少なくないと推測できる。稲城以外の奚疑塾の同窓生数がおおよそ553名²⁷であることから考えると、リストにある36名という割合は必ずしも少ない数でないように思われる。一覧には、国分寺で初めてキリスト教の受洗を受けた一人である神山平のような、地域活動とは異色の分野で名が残る同窓生の名前もみることができる。

(5) 奚疑塾同窓生の分類と動向

奚疑塾の同窓生を類型化すると、以下のように整理できる。

- 1) 立身出世型
- 2) 地域リーダー型
 - 2)-1 政治関係
 - 2)-2 地域活動のリーダー (青年会幹事など)

2)-3 実業関係（銀行、鉄道会社などの発起人、企業など）

3) 教員型

4) その他

なお、同窓生はこの分類に対してそれぞれ一つカテゴリのみに該当するものではなく、複数の分類にまたがって該当する同窓生も少なくない（例えば、調布銀行発起人であり、調布町会議員であった原雄一など）。

ここではこの分類にしたがって、それぞれから代表的な同窓生をみることにより、奚疑塾の同窓生が学びをしていたのか、さらに奚疑塾がどのような役割を果たしていたかに関して分析を進めたい。

1) 立身出世型

ここで取り上げるのは奚疑塾同窓生のうち出世を果たした人物、いわゆる立身出世を果たした同窓生である。「奚疑塾同窓会員名簿一覧」（1910年）の地域で見ると諸国、とりわけ外国にいる3名の者などがここに該当する。対馬にて病院の院長を務めていた黒田尚寛は奚疑塾出身の同窓生の中でも、象徴的な存在に数えることができよう。黒田は稲城・平尾出身で、一高から帝大、病院院長をつとめた黒田はのちに故郷の平尾に帰郷した際、地元の大歓迎を受けている記録が残っている²⁸。

黒田のように帰郷時の記録が発見されていないため詳細は不明であるが、他にも米国・在サンフランシスコ日本国総領事館の館長であった井田守三²⁹や、同窓会員名簿に「京城青山町韓国政府顧問獣医学士」と記載されている原島善之助も立身出世を果たした人物といえる。

原島は『産馬大鑑』（1907年）を出版しているが（原島には韓国統監府官舎の肩書きがついている）、その内容は「産馬ニ関スル一切ヲ網羅収集シタルモノ³⁰」であり、馬史や種別、馬の構造に至るまで網羅した書である。ここにあげた同窓生のうち、その後の詳しい歩みがわかるものは黒田尚寛に留まるが、黒田以外にも数人の同窓生をみることができる。ほかにも立身出世した同窓生は存在する。その一人、松本松男の奚疑塾の記憶に関する証言を引用する。

松本は獨協中学から一高、東大へと進み精神科を専攻する歩みを送るが、次のような言葉を残している。「小学校を終えて、奚疑塾に行きました。（中略）しかし奚疑塾に行ったのはいくらでもなく、すぐ獨協中学へ行き、一高、東大へと進みました³¹」。

この証言にあるように松本は奚疑塾における期間は短かったようだ。その後の歩みから連想できるのは奚疑塾をさらなる中等教育の準備段階にしていたことである。ここで分類した同窓生にとっては奚疑塾での学びそのものが目的ではなく、いわば予備校のような役割を果たしていたと考えることができる。

2) 地域リーダー型

次に取り上げるのが、塾を出た後も地域にとどまり活躍した同窓生である。同窓生の中でも最も数が多いのがこのタイプである奚疑塾での学んだ者が地域のリーダーとなったケース、地域の有力者がその子弟を奚疑塾で学ばせ、そのまま後継として地域のリーダーになっていたケースの両方を想定できる。

さて、一言に地域リーダーといった場合にも様々なリーダーの形が想起されるが、その中でも奚疑塾で特に顕著なのは政治家となり活躍した同窓生の数である。東京に出た後に稲城にもどり稲城村村会議員として活躍した森田蔵をはじめ、町会議員、市会議員、県会議員などの地方議員になった者、村長などの首長になった物もいる。さらには助役になり地方行政に関わっていた同窓生も複数みられる。

さらに地域のリーダーは政治家だけではない。地域への関与の方法をみると、さまざまな形で地域活動のリーダーとなっている者も複数でみられる。具体的に例示すると、農区品評会委員、青年会幹事などである。他にも、競馬場招致委員、選挙に関する協議会委員など各方面で活躍していたようにみえる。ここで例示したような地域活動は、各同窓生の主たる属性というわけではなく、政治関係の職や実業など本職と兼務して行っているものである。

政治関係とならび実業関係で名前をみることができる同窓生も多い。とりわけ特徴的であるのが、実業関係の発起人となっている同窓生をみることができる点にあり、具体的には、銀行や鉄道会社の発起人が該当する。銀行の支配人や多額納税者などもおり、実業の世界で活躍していた同窓生が多い。ここから読み取れることは、奚疑塾は政治、行政、経済などの地域の根幹となる部分に寄与する地域のリーダーに多くの同窓生を輩出していることである。すなわち奚疑塾は地域のリーダーを供給する役割をもっていたのであろう。

3) 教員型

さらに、教員を務めていた同窓生も確認されている。前述の自治体史の文献調査では、

現在の神奈川県に位置する3名の同窓生が教員であったことがわかっている。前項で述べた、柿生村で教員として活躍し謝恩碑まで建立された白井錠次郎のように、教員となった同窓生は、数の上では現在わかっている限りそれほど多くはないものの、教育機関であった奚疑塾の役割を考える上でその存在は重要であろうと思われる。これはあくまでも推察であるが、奚疑塾で学んだ者にとって元教員であった窪の薫陶を受けることは少なからぬものがあつたと思われる。

4) その他

他にも奚疑塾での学びが個人の研鑽に影響を与えたと思われる同窓生も少なくない。本項では上の三つのグループには分類できなかったが重要だと思われる同窓生を取り上げ論じる。例えば、前章で既に取り上げた女子の同窓生はまさにそのような同窓生である。ここでは奚疑塾が個人に与えた影響の大きさを推し量る意味で、本項ではさらに、瑞穂町の同窓生である石塚武一を取り上げる。

稲城から若干離れた殿ヶ谷村（現瑞穂町）から奚疑塾に学んだ石塚武一は28歳で早世してしまう人物であるが、ここで敢えて論じる理由は石塚の墓碑である。石塚の墓碑をみると奚疑塾創立者の窪全亮（窪素堂の名は窪全亮が書を記す時などに用いる名である）に学んだことが刻まれている。墓碑は故人の人生の歩みを後世に遺すものであるが、この墓碑に窪のことを書かれている意義は大きい。石塚にとり奚疑塾での学びが本人の歩みの中でも大きく意味があることを伺うことができる。記された墓碑銘を以下に示す³²。

武一君号節堂石塚照寿君之長男母者梅子君
幼而嗜学受業於窪素堂先生書法亦得其妙後
遊東京得良師友学大進君為人忠直事親孝稟
性強記黽勉致病療養無効歿於家實明治廿一
年戌子十二月二十九日也時年二十八

墓碑は漢文で書かれているものである。上に見られるように、窪全亮先生から学業を学んだこと、奚疑塾の学びが本人にとり意義深いものであつたかをうかがい知ることができる。窪から学んでいたことが早世した石塚にとり重要な経験であつたかが推察できる。塾での学びそのものの意義があるものであつたであろう。

小結

本章は東京西部・三多摩地域の稲城で明治から大正にかけて窪全亮によって開かれていた私塾、奚疑塾を対象にした塾の同窓生の研究を行った。本章においてはそれぞれ以下のことが示された。第1節では、既存の私塾研究においては、カリキュラム等が中心で同窓生を対象にした研究は少なかったこと。第2節では、奚疑塾が多くの同窓生を集めたことの背景を塾の教育内容から探り、なおかつ奚疑塾の同窓生の分析を行った。奚疑塾の役割の一つが漢学を学ぶいわば学校教育の代替としての側面を持っていたが、それに留まらず自らで学びを深められるような仕組みを持っていることをみた。

さらに奚疑塾同窓生の動向を把握し、その分類と分析を行った。同窓生のその後の活動などから、奚疑塾の役割は、さらに学びを続けたい人にとっての学校の予備校的な存在、地域の政治経済の中心となる人材や教育に貢献する人材の輩出をする地域のリーダーの養成機関、自己研鑽の場など人により異なっていたが、地域に対しては多様な人材の供給を行い、学んだ人々に対しては貴重な学問の場であって来た。以上を概観すると、奚疑塾には、単に公教育の代替や立身出世のための中等教育という側面にとどまらず、地域に基盤を置く教育機関として多様な人々の学ぶ意欲を支え多様な人材輩出をしていたことが明らかにされた。

第2部 第3章 注

- 1 「学制」第十四章、1872年。
- 2 「学制」第四十三章、1872年。
- 3 小久保明浩『塾の水脈』武蔵野美術大学出版局、2004年。
- 4 池田雅則「近代日本における私塾を問う視点」、＜東京大学大学院教育学研究科紀要＞第49巻、東京大学大学院教育学研究科、2009年。
- 5 同前、p.4。
- 6 関口直佑「明治初期における東京の私塾—同人社を中心として—」、＜社会学論集＞Vol.12、早稲田大学大学院社会科学部研究科、2008年。
- 7 平沢信康「近代日本の教育とキリスト教（3）幕末・明治初期におけるキリスト教系私塾・学校の出現と信仰の自由化」、＜鹿屋体育大学学術研究紀要＞第12号、鹿屋体育大学、1994年。
- 8 窪全亮、河島新太郎、森素直「私立学校開申」1882年6月。
- 9 同前。
- 10 『窪全亮先生と奚疑塾』窪全亮先生頌徳碑建立委員会、p.123。
- 11 『稲城市史 通史編下巻』稲城市、1991年、pp.173-175。
- 12 「奚疑学舎教則」、前掲「私立学校開申」、1882年6月。

-
- 13 同前。
- 14 「奚疑塾教課定則」、年不明。
- 15 前掲「奚疑学舎教則」。
- 16 「奚疑塾同窓会員名簿一覧」1910年。
- 17 「毎日新聞」、1888年3月23日。
- 18 「在京奚疑塾同窓会につき黒田尚寛書簡」(森田蔵宛)年不明9月など、関連する同窓生の書簡が多く残っている。
- 19 「三多摩の自治体史にみる奚疑塾同窓生の動向」、「奚疑塾と窪全亮」稲城市教育委員会、2010年、pp.74-75。
- 20 前掲「奚疑塾と窪全亮」、p.6。
- 21 「一高在学中の近況及び奚疑塾同窓生につき黒田尚寛書簡(加藤梁吉宛)1896年5月、「親類会議及び病院勤務状況につき黒田尚寛書簡(鈴木和重郎宛)1905年6月など。
- 22 「森田蔵の履歴書及び取調書」1908年10月。
- 23 「森為之助君墓碑銘」1911年。なお、この墓碑には、奚疑塾創始者の窪全亮が揮毫を行っていることが墓碑に記されている。
- 24 稲城・平尾村出身で柿生村において教員を勤めていた白井錠次郎は、新聞投書(「平尾村白井錠次郎の学問奨励と黒田尚雄・窪全亮の応援を称える新聞投書」(「横浜毎日新聞」第1267号、1875年2月)や謝恩碑(「白井錠次郎謝恩碑除幕式祝辞」1923年4月)など、地域で高く評価されている。
- 25 2008年10月18日稲城市・体験館で行われた講座における、清水義夫氏へのインタビューによる(聞き手・渡辺賢二)。清水氏は奚疑塾で学んだ多数のノートや教科書類を残しており、これらの分析により、奚疑塾の学びについてさらに詳しい状況が今後明らかになる可能性がある。
- 26 稲城の歴史研究者である渡辺賢二らにより実施。
- 27 「明治43年発行『奚疑塾同窓会員名簿』から見た塾生の分布状況」、前掲「奚疑塾と窪全亮」、p.48。
- 28 「黒田尚寛帰郷歓迎会に関する鈴木静蔵農事日誌」1902年1-3月。
- 29 「奚疑塾同窓会員名簿一覧」において、井田は「米国公使館法学士」と記載されている。井田は1927年から総領事として勤務していた。
(http://www.sf.us.emb-japan.go.jp/jp/m01_06.htm(在サンフランシスコ日本国総領事館ホームページ、2013年12月23日閲覧)。
- 30 原島善之助『産馬大鑑』裳華房、1907年、例言。
- 31 『窪全亮先生と奚疑塾』窪全亮先生頌徳碑建立委員会、p.34。
- 32 「石塚武一の墓碑」1888年。

第4章 奚疑塾における錦絵の研究—視聴覚教育の観点から—

本章は、奚疑塾の教育内容・教育方法に着目し、中でも奚疑塾に所蔵されていた錦絵を取り上げ、視聴覚教育の視点から分析を行う。なお、錦絵とは多色刷りの木版画であり、浮世絵を代表する絵の一つである。錦絵は寛保期に興り、近代に入り明治末頃に衰退したと一般的には認知されている。喜多川歌麿、安藤広重、葛飾北斎などの作品によって知られ、美人画、名所絵、役者絵などの画題が有名である。これらの主題に示されるような錦絵は、近世では人々の興味を引くメディアであり、人気を博していた。しかし、錦絵は明治期以降に入ると、刷りや色のような技術面では相当に発展し、なおかつ大量に生産されるようになったが、さまざまな技術を用いられた新しい絵の進展に伴って、衰退していった側面もある。

一方で、錦絵は芸術のメディアの側面だけでなく、情報伝達のメディアの役割を持っていた。近代における具体的な例をみると、例えば新聞錦絵をその一つに挙げることができる。これは新聞のいわゆる「三面記事」の挿絵、ゴシップ記事や刺激的な画題などを錦絵にしたものであり、人々が視覚的に物事を知ることに対して、少なからぬ役割を果たしていた。これを鑑みると、錦絵は単なる芸術品ではなく、多様な意義をもったメディアであると考えることができる¹⁾。

ところで、本章で錦絵に着目した理由には、コンピュータなどのいわゆる近代的な視聴覚メディアの発展以前の視聴覚教育の歴史を明らかにしたいとの関心が出発点にある。メディアは発信者と受信者の間をつなぐものであり、このことを錦絵に照らして考えてみると、錦絵は錦絵の描き手や錦絵を紹介する人々である発信者と、錦絵をみる受信者の間をつなぐメディアと捉えることが可能である。そこで、本章ではそのようなメディアとしての役割を持つ錦絵に着目し、視聴覚教育メディアの視点から分析にあたる。錦絵は色鮮やかに描かれている特性を持ち、視覚的に閲覧者への影響を大きく与え得るメディアである。そこで、明治時代の錦絵に関する資料群を題材に分析を行い、錦絵のもつ視聴覚教育メディアの価値を明らかにすることを試みたい。

本章において研究対象とするのは奚疑塾にて所蔵されていた140点を数える錦絵である。奚疑塾は学校に準ずるカリキュラムを持っていたが、地域における通俗教育機関であった奚疑塾は、さまざまな教育方法を行っていた。

その特徴の一つが、奚疑塾に所蔵されていた錦絵である。奚疑塾における錦絵は、2006

年より 2009 年まで行われた稲城市教育委員会による、奚疑塾を中心に関係する近代稲城の文化財への悉皆調査の中で発見された²。奚疑塾の創始者である窪全亮によって集められた奚疑塾の錦絵は、塾という教育機関に集められていたため、教育の観点から分析を進めることによって、一般に流通していた錦絵が視聴覚教育としてどのような役割を果たしていたのかを分析し得ると思われる。本章では奚疑塾に収集された錦絵の分野別傾向をとらえ、これを当時の錦絵の全体的傾向と比較することや、内容を分析することによって近代における視聴覚教育の一側面を見出していく。

本章では以下の構成により論じる。第 1 節では、明治時代の錦絵に関してその概要を把握し、なおかつ錦絵を対象とした先行研究の到達点と限界をみる。第 2 節においては、今回の調査で発見された錦絵が所蔵されていた奚疑塾を取り上げる。同塾での教育の状況や教育方法、内容を取り上げ、錦絵の利用が可能であったかに関する分析を行いたい。第 3 節は奚疑塾所蔵の錦絵に関する資料を対象に検討を実施する。主な研究方法は、分野ごとの収録点数を整理しながら奚疑塾の錦絵の傾向をとらえることによって、錦絵の教育的価値をみる。第 4 節では、奚疑塾の錦絵の内容に焦点をあて、視聴覚教育の観点から検証する。

本章の意義は、錦絵の役割を芸術品や報道メディアだけでなく、視聴覚教育メディアの側面から明らかにすることにある。さらに、私塾での錦絵を教育資料の視点から提示する意義もある。加えて、明治期の錦絵の研究によって、近代における投影機材以外の日本の視聴覚教育メディアの一諸相をみていきたい。

第 1 節 明治期における錦絵と教育

(1) 明治期における錦絵

錦絵は多色刷りの木版画のことであり、代表的な浮世絵の一つである。錦絵の大元である浮世絵は延宝、元禄期頃に始まったとされ、明治末期頃にその隆盛は終期を迎えたといわれる。錦絵に関していえば、多色摺の浮世絵版画が出現するのは寛保期(1741~44)であり、1765(明和 2)年を迎え、完成された多色摺版画である錦絵が誕生する。

浮世絵の画題の根幹をなすものは、美人画、役者絵、相撲絵、名所絵などである³。つまり、美人を描いたもの、歌舞伎などの役者を描いたもの、相撲を描いたもの、名所旧跡の

風景を描いたものである。これらは、芸能人やスポーツ選手、風景など現代においてはグラフィック写真に相当するものであり、庶民にとって魅力があった。

錦絵も含まれる浮世絵の特徴は、名前に「浮世」の言葉が入っていることに示されるように、俗世におけるさまざまな事象が描かれていることにある。つまり、人々の暮らす社会風俗が、浮世絵の中には示されている。中でも錦絵は前述のとおり、目立つ色合いや大胆な構図などを備えた鮮やかさがその特徴であることと同時に、多色刷りの版画という大量生産に適した方法で作られていたことから、みやすく色鮮やかな絵が多くの人に入手可能であった。その意味でも、錦絵は芸術作品でありながらも限られた人が目にするものではなく、多くの人にみてもらうことのできるメディアであったといえよう。

なお、浮世絵を代表する画家である喜多川歌麿、歌川豊国、安藤広重や葛飾北斎など多くは江戸後期に活躍しており、庶民に高い人気を得た芸術作品の評価を錦絵は得ていた。しかし、明治に入ってからは衰退期とされ、明治期以後の錦絵を巡る状況は変わってくる。

浮世絵研究者である山口桂三郎は、明治期の浮世絵の概況をとりあげ、海外の浮世絵ブームや技術の向上もあったことに言及しながら、次のような状況を指摘している。「明治の浮世絵は、浮草のごとく自主的なルートを形成することなしに開化絵・時事報道画・教育画・新聞雑誌の挿絵などに目新しい題材を求めて流転した。そしてその背後に銅板・石版画の追い打ちに会いつつ、次第に地盤を喪失していった。しかし、幸いなことに浮世絵版画の彫・摺の技法は空前の練達度を加え、その精緻さはあらゆる表現にこたえうる高度の技術に到達していた。この浮世絵木版技術の伝統は、技術そのものが先行して、画材や内容の芸術的表現を疎かにしてしまうが、これは見逃せない事実である。そして浮世絵版画は明治三十七・八年の日露戦争をテーマにした作品をもって、実質的にはほとんど制作されなくなる⁴⁾。

上記研究において指摘されているように、近代の錦絵は地盤を喪失していった一方で、時を経たことで進化した一面があったことは見逃すことができない。なぜならば、明治以降の錦絵は、あらゆる表現が可能であり、教育的に意義のある表現をすることも可能だったと推測ができるためである。

例えば、明治期の多様な展開をみせていた錦絵を巡る、一諸相を示す例として挙げることができるのが新聞錦絵である。新聞錦絵とは新聞の挿絵に用いられた錦絵を使い、これを彩色したものである。そのため性質は、「売る商品にするためには面白い記事ばかりを錦絵にするので、当然のごとく殺人や珍談奇話が多くなる⁵⁾、と浮世絵研究者の高橋克彦が

指摘している。新聞錦絵は、センセーショナルな題材が中心になり、ゴシップが多く描かれ人々に受け入れられていた錦絵の性質を改めて確認できる重要な存在である。新聞錦絵のような庶民に人気を博した志向の錦絵が存在していたことは、錦絵のもつ大量配布できるメディアであるとの性質が、明治期以降にも十全に活かされていたことの一部を示すものと指摘できよう。

以上のように、錦絵は絵であり芸術的な性質のあるメディアでありながらも、安価に大量生産し大量配布が可能でもあった。このことは近代にも受け継がれており、その一つに新聞錦絵のような錦絵がある。

(2) 教育的メディアとしての錦絵に関する先行研究

続いて、近代の錦絵を対象とする先行研究を取り上げ、錦絵の持つ教育的メディアである性質に着目した先行研究に関しても言及したい。色鮮やかで大量生産が可能である錦絵は、江戸時代から比較的入手しやすい娯楽的メディアとして人気があり、かつ近世を代表とする美術品としての役割を帯びていた。錦絵、浮世絵は現代においても人々をひきつけ、魅了するメディアであり続けている。例えば、江戸時代の錦絵を取り上げ版木から作成されるまでをテーマとした、国立歴史民俗博物館で開催された企画展「錦絵はいかにつくられたか⁶⁾」や、大久保純一『カラー版 浮世絵』(岩波新書、2008年)などの一般書籍なども出版されている。

このように人々に訴えかける力のあるメディアである錦絵だが、美術、娯楽のメディアであるだけでなく、教育的なメディアとして機能してきたことに対しても、先行研究の中で言及されている。日本美術史研究者の小林忠は、「浮世絵が庶民の教養を高める教育的なメディアとしても機能したことを、忘れてはなるまい。先にも触れたように、絵を通して和漢の古典と親しみ、和歌や俳句をはじめ各種の詩歌を味わって情操を養い、外国や国内の情報に通暁するなど、浮世絵から知ったり学んだりすることは多かつた⁷⁾」ことを述べている。

浮世絵は、世相を色鮮やかに描いたものであり、社会のさまざまな事象に関するさまざまな事象も画題にされている。さらに、複製がしやすく手に入りやすいものであるゆえ、多くの人に頒布することが可能である。そのため、市井の人々にみてもらいやすい。このことから、一つの浮世絵の画題自体は目的をはっきりさせた教育的に明確な意図をもったものでなくとも、人々が手に入れやすい絵である浮世絵をみることによって、自己教育を

行うことも可能であったと推測できる。上記のような浮世絵に関する指摘は、錦絵のもつ視聴覚的役割を捉え直すためには、重要と思われる。

さて、錦絵を対象にした近年の研究には、錦絵の主題を研究したものや作家を対象としたもの、描かれたテーマを分析したものの研究など、さまざまな研究があるが、ここではメディアとしての錦絵に着目した研究や、教育との関係で分析をした研究を中心に取り上げる。

前述したように、メディアとしての役割を持っている錦絵に着目した研究は多い。例えば、これは幕末期を対象にした研究であるが、政治への関心を高めるメディアの視点から錦絵を分析した、奈倉哲三による研究がある⁸。この研究は「戊辰戦争諷刺錦絵が有する思想史的特質を、同時期ヨーロッパの諷刺画と比較することで、その世界史的位置の解明を試み⁹」たものである。政治とは離れたところにあった民衆が、錦絵によって政治を理解していたことを示している。

さらに、メディアと錦絵に関しては、近代の新聞と錦絵に関する本田康雄による研究がある¹⁰。本田は、新聞の「雑報」記事の面白さに着目し、浮世絵師と戯作者が「新聞錦絵」を工夫して流行を起こした事象や、新聞記事とその錦絵を同時掲載する紙面となっていたタブロイド版の小新聞を視野に入れながら、大新聞の雑報記事から小新聞の絵入り雑報の変遷を論じている¹¹。

いずれも、錦絵が情報を伝えるメディアであることに視点をあてている研究であるが、中でも特に錦絵が人々に人気の高い内容のものと結びついていたことへの着目は注目すべき点と考えられる。錦絵の持つ魅力が情報伝達のメディアである錦絵の役割を際立たせていたことがわかるためである。一方で錦絵は他にもさまざまな形で、社会への影響を与えていたことが推測される。

明治期の錦絵と教育に関する研究には、岡野素子による、浮世絵の技法で西欧の科学技術や倫理を説いた文部省発行錦絵に関する研究があげられる¹²。この研究では、近世までの歌川派の芸術性と明治の学校教育という近代国家の側面から文部省発行錦絵を分析したものである。浮世絵の持つ芸術性の高さが、民衆の人気や一般性と結びついたことに言及し、錦絵と教育政策との関連を論じている。

錦絵を視聴覚教育メディアの観点から論じた先行研究には、古屋貴子の研究がある¹³。この研究では錦絵や双六を取り上げ、明治初期の文部省発行教育用絵図を教育史に位置づける試みを行っている。この研究では、教育政策の中で作られたメディアを対象にその内

実に迫ることを課題に上げている。更に、古屋の研究では、学校教育を補完する「メディア戦略」ともいべき教育メディア政策の一つのあり方に教育錦絵を位置づけている¹⁴。教育の中における錦絵の重要性は先行研究で着目されているとおりである。

一方で、教育的な意図をはじめからもって製作された錦絵ではなく、市井で流通していた錦絵を用いた教育に関する先行研究は見当たらなかった。そこで本章では錦絵と教育について、視聴覚教育の観点に立ちながら、一般的な錦絵と社会教育での利用の立場から分析を行いたい。明治期における錦絵などのメディアと教育の諸相を明らかにするには、民間での社会教育の利用を解明することが必要だからである。

第2節 奚疑塾と教育内容と教育方法

ここでは、奚疑塾での教育内容及び教育方法について、再確認しておこう。塾でのカリキュラムは読書、作文、習字、算術などの基礎教育を重視したものになっており、漢学教育を重視するスタイルをとっていた。奚疑塾の「奚疑学舎教則」(1882年)には、教育内容が以下のように定められている¹⁵。

第一項 学科ヲ分テ六等トス

第二項 毎等学科ハ読書習字トス 但修身作文歴史ハ読書科ニ於テ修ル者トス

ここからは、学科をレベル毎にわけていることや、塾創始者の窪全亮を反映した漢学の体系の教養を重視した教育内容であったことがわかる。なお、教科書に関しては、「奚疑学舎教則」における、読書の部の教科書一覧から知ることができる。それぞれ、六等は国史略・論語、五等は十八史略、四等は孟子・日本外史、三等は日本政記・正文文章軌範・孟子、二等は通鑑口要(口は覽の上+手)・詩経・続文章軌範、一等は書経・礼記・左伝校本が記されているが¹⁶、教則に記載されているように歴史や中国の古典の学習が重視されていたことがわかる。

奚疑塾の教育方法は関連する史料から知ることができるが、中でも奚疑塾同窓生の清水九一(稲城市大丸)が使用していた直筆の学習ノートが現存しており、塾生自身の学習の記録から学びの様子を知ることができる。

奚疑塾では読書科の教科書を用い、国史略などを通して学習していたが、これは漢文で書かれたものが多く、小学校卒業後の塾生たちにとり、決して平易なものでなかったと思

われる。なお、塾の教育方法のうちいくつかは、現存しているノートから二つの方法で学んでいたことが判明している。その一つが問答形式による学習であり、もう一つは難字の漢字書き取りによる学習である。

前者の問答形式による学習は、「問答集」の題が付された塾生のノートなどによって知ることができる。奚疑塾の後期の塾生であった清水九一のノートである「国史略問答筆記」をみると、「問 東大寺ニ行幸シ仏ヲ拝シ自ラ三宝ノ奴ト称セシハ何帝ゾ」「答 聖武天皇¹⁷」というものである。自ら問を立てそれに答える形での学習をしていた。なお、この形式での学習は同じく塾生であった窪通敏のノート「歴史問答筆記」にも同様の記録がされていることがわかる。塾では対面で問答によって学ぶ方法が重視されてことを、これらの資料は裏付けるものといえよう。

漢字書き取りによる学習には、『国史略』の書き取りノートである「国史略難字抜粹」（清水九一）や『十八史略』のノートである「十八史略難字抜粹」（清水九一のノート）の史料からみることができる。いずれも、本文中で出てくる難字にフリガナを振りながらノートに書き取りをしたものである。以上からわかるように、奚疑塾では読書の学習の中でも、狭義の意味での読書だけを行う方法で学んだのではなく、問答や書き取りなどの方法を交えながら、歴史をさまざまなやり方を用い、総合的に学習していたのであろうと推測できる。多様な学習方法が採られていたことに注目したい。

第3節 奚疑塾における錦絵の主題

（1）奚疑塾における錦絵の主題の傾向

2005・2009年に行われた奚疑塾を中心にした近代稲城の教育に関わる文化財調査において発見された錦絵の数は140点にもものぼり、一枚ごとの紙の形ではなく貼り合わせ横長の帯のような壁などに貼ることのできる形状にされて所蔵されていた。1枚の大きさがおおよそ縦38センチメートル×横25センチメートル、これらを20点ほど貼り合わせていたので、一巻きの錦絵は5メートルほどのかなり大きなものとなる。これが数巻分に分けられた形で発見された。この張り合わされた錦絵の一巻きは、似た傾向の錦絵がつなぎ合わされている部分もあるが、特に時代や内容によってはっきりと分けられているわけではなく、法則性を持って貼りあわされたようにはみえないものであった。

奚疑塾において発見された全ての錦絵の年代を外観してみると、おおよそ 1877(明治 10)年から明治 23(1890)年の間、特に明治 10 年代後半発行のものに集中している。年代がわからないものも数点存在しているが、年代が判明している 1800 年代後半の錦絵と一緒に張り合わされていたことから、ほぼ塾の開設と同時期のものであると推測される。奚疑塾調査において発見されたうち、発行日が判別している錦絵は、窪全亮がいずれも教員になってからのものである(窪が奚疑塾を設立したのは 1880(明治 13)年である)。

この錦絵は窪全亮によって収集されるものと考えられるが、本章では、奚疑塾の錦絵をみるにあたり、どのようなものが集められていたのか、その主題(絵のジャンル)ごとに分析を行った(表 7 奚疑塾所蔵錦絵主題別分類集計)。本表は、奚疑塾の錦絵全 142 点をその主題毎に分類し、点数を数えたものである。表左列は分類種別の単純集計、表右列はさらに、近い主題同士を同じカテゴリにまとめたものである。

表 7 奚疑塾所蔵錦絵主題別分類集計

分類	点数	割合
歴史	42	29.6%
歌舞伎	31	21.8%
風俗(美人画以外)	20	14.1%
美人	10	7.0%
戦争関係	10	7.0%
ニュース	9	6.3%
皇室関係	9	6.3%
政治	6	4.2%
相撲	5	3.5%
計	142	

「奚疑塾と窪全亮 稲城市教育委員会文化財調査報告書第 23 集」より集計。

奚疑塾の錦絵における主題の件数をみると、それぞれ、「歴史 42 点、歌舞伎 31 点、風俗(美人画以外)20 点、美人 10 点、戦争関係 10 点、ニュース 9 点、皇室関係 9 点、政治 6 点、相撲 5 点¹⁸⁾」となっている。歴史(源平時代が描かれたものと、月岡芳年による錦絵を

含む)を主題とした錦絵が 42 点で最も点数が多い。これは全体の 30%近い数字を示している。

次に多い主題は歌舞伎に関する錦絵である。なお、この分類では歌舞伎をテーマにした錦絵であるが、役者が歴史上の人物に扮した錦絵も含まれており、歴史関連と数えることのできるものも含まれている。さらに、続いて政治やニュースなどの奚疑塾との同時代的な主題の点数が多くなっていることも目立つ。一般的に錦絵で人気の画題とされる主題は、「美人画」「役者画」「風景画」である。つまり、美人を描いたものや役者を描いたもの、さらに風景を描いたものである。しかし、歴史に関連した錦絵の点数が多いことがわかり、意図的に種類を歴史と美人画以外を主題とした錦絵を除いた他のものが、ほぼ均等に集められていることも特徴であろう。

それぞれの錦絵の奚疑塾の錦絵の主題は、教育目的別にみると大きく分けて三つの主題に分けることができると考えられる。第一のものは歴史に関連する錦絵である。ここには、歴史全般に関連するもの、源平合戦を描いた歴史のもの、月岡芳年が描いた歴史のものなどが該当する。最も点数の多い歴史を描いた錦絵は、色鮮やかに描かれたものであり、視覚的に歴史学習のサポートとなりうるものと考えられる。

第二のものは時事的な主題を取り扱った錦絵である。ニュース、皇室関係、政治関係、戦争がそれぞれ該当し、報道的性格の強い錦絵がここに相当する。皇族関係には展覧競馬の図などが、政治関係には議会における会議や議場の様子などが、戦争では西南戦争の様子などの錦絵がある。奚疑塾の所在地であった稲城は三多摩南部に位置する、東京近郊の地域とはいえども、当時東京の都心部からは 30 キロ近く離れた農村地帯であり、決して東京は身近なものではない。これらは都心部に行くことなく「文明開化」を知ることができるものである意味において、価値の高いものだったと推測される。

三つ目は、世相などの風俗を紹介した錦絵である。この分類では美人画を除く、相撲、風俗などを描いた錦絵と、歌舞伎の一部が含まれる。この一群の錦絵は、社会風俗が描かれていたもので、二つ目の時事的な主題の錦絵との違いは、報道的な記事が含まれていないことにある。ニュースとは異なり、生活がみられるものとの意義があったと考えられる。ここにみるように、奚疑塾所蔵の錦絵は一定の教育的意図を持って収集されていたものであることが推察できた。

(2) 国立歴史民俗博物館所蔵の近代錦絵との比較

続いて、奚疑塾の錦絵にみえる一定の傾向を他の錦絵データと比較することによって、検討をしたい。対象にしたのは、国立歴史民俗博物館所蔵の錦絵であるが、近代のものも含めた錦絵の所蔵点数が多く、主題分けもされているため比較することが容易であるためである、国立歴史民俗博物館所蔵の錦絵を対象とした。国立歴史民俗博物館所蔵の錦絵の国立歴史民俗博物館データベース¹⁹から明治期(1868年-1911年)のものを抽出し(815件、2012年1月29日時点)、割合を出すことによって、奚疑塾に所蔵されていた錦絵の主な主題の分類と比較を行った。なお比較をするにあたり、国立民俗博物館の錦絵の分類は、全体からのそれぞれの細かい分類ごとの割合を出すことを狙ったために、「玩具絵 武者絵・歴史画」や「時局絵 武者絵・歴史画」など、複数の主題にまたがる錦絵は、それぞれを一つに集計した。

奚疑塾の錦絵に加えて国立歴史民俗博物館の近代錦絵の主題を分類・集計し、双方の数や割合を比較したものが表 8 奚疑塾及び国立歴史民俗博物館所蔵の明治期錦絵の主題比較である。表 8 奚疑塾及び国立歴史民俗博物館所蔵の明治期錦絵の主題比較の上図、奚疑塾の錦絵の主題割合をみると、歴史 29.6%、歌舞伎 21.8%、美人 7.0%、戦争 7.0%、ニュース 6.3%、政治 4.2%、相撲 3.5%となっていた。最も多数のものは歴史を主題としたものであり、全体の3割ほどとなっている。

表 8 奚疑塾及び国立歴史民俗博物館所蔵の明治期錦絵の主題比較

奚疑塾		
分類	点数	割合
歴史	42	29.6%
歌舞伎	31	21.8%
風俗(美人画以外)	20	14.1%
美人	10	7.0%
戦争関係	10	7.0%
ニュース	9	6.3%
皇室関係	9	6.3%
政治	6	4.2%
相撲	5	3.5%

国立歴史民族博物館		
分類	点数	割合
歴史	72	8.8%
美人画	208	25.5%
人物	2	0.2%
戯画	54	6.6%
教育・啓蒙	8	1.0%
名所絵	215	26.4%
役者絵	80	9.8%
時局	45	5.5%
戦争	45	5.5%
相撲	1	0.1%
武者	73	9.0%

左表は「奚疑塾と窪全亮 稲城市教育委員会文化財調査報告書第23集」(前掲)より、右表は国立歴史民俗博物館、「錦絵データベースの検索」(http://www.rekihaku.ac.jp/up/cgi/login.pl?p=param/nisikie/db_param)により集計(2012年1月29日閲覧)。全815点中の割合を示している。複数のカテゴリに重複しているものは別カウントになっており、また、主要のカテゴリを抜粋しているため母数とは一致しない。

表8の下図、国立歴史民俗博物館所蔵錦絵の主題別の割合に目を転じると、歴史(8.8%)、美人画(25.5%)、人物(0.2%)、戯画(6.6%)、教育・啓蒙(1.0%)、名所絵(26.4%)、役者絵(9.8%)、時局(5.5%)、戦争(5.5%)、相撲(0.1%)、武者(9.0%)で、最も点数が多い主題である美人画、名所絵の二つの主題で5割を超える。歴史、美人画、名所絵、役者絵が多くを占める傾向になっており、上位に人気の錦絵の主題のものが入っていることがわかる。

歴史が主題となっている錦絵は奚疑塾が3割近い29.6%なのに対し、国立歴史民俗博物館では8.8%になっている。歌舞伎の役者絵に関しては、奚疑塾が21.8%だが、国立歴史民俗博物館は9.8%になっている。一方で、美人画の錦絵に関する割合は、奚疑塾では7.0%

にとどまっているが、国立歴史民俗博物館の錦絵では25.5%を占めている。

主題別割合をみると奚疑塾の錦絵は、歴史を重視することなど、同時代の錦絵の主題割合とは異なる傾向を持って集められていたことがわかる。さらに、歴史だけでなくニュースなど、当時の社会状況を知ることのできる主題の錦絵も集められていたことも特徴に指摘しておきたい。ここで分析した奚疑塾の錦絵の主題に関する全体的傾向をみると、歴史や社会状況を知ることのできる絵が集められていることを読みとることができる。

第4節 奚疑塾における錦絵の内容

(1) 歴史に関連する錦絵

本節では、視聴覚教育の観点から第3節で分類した主題をもとに、特に教育と関わりが深いと考えられる歴史主題の錦絵及び時事的な主題の錦絵のうち数点を取り上げ、詳細に内容をみていきたい。はじめに奚疑塾でも最も点数が多い歴史を主題とした錦絵を取り上げる。

奚疑塾では歴史に関する教育を相当に重視していた。さらに、歴史の教授のあり方に対してはその設置した本旨を、「第十三項 歴史ハ古今治乱興廢ノ跡忠妊賢佞ノ言行ヲ講究シ其身ニ反省セシムルヲ要スレハ即古人ノ善悪行事ニ就キ自感動シ国家ヲ愛護スルノ心ヲ煥發セシムル等是此課ノ本旨トスルナリ²⁰」と「奚疑学舎教則」に記載されている。ここに「自ずから感動し」と書かれているように、歴史を教える中で何らかの印象深いものにしようとする意識があったことを読み取ることができる。この一文からは、視聴覚教育においてさまざまなメディアを使うことによって、教授する内容を印象深くすることができるという共通点をみいだすことが可能であり、奚疑塾の錦絵による歴史教育のあり方を考える上で重要なものであるといえよう。

奚疑塾の設立に対し、当時の神奈川県令に提出した奚疑塾(設立当初は奚疑学舎と称する)の概要を記した史料である「奚疑学舎教則²¹」、さらにその後に出された「奚疑塾教課定則²²」からは奚疑塾で使われていた歴史書が記載されている。そのうち、読み物に関する教科書を以下に引用する²³。

○第六等 読物 四書及国史略一、二ヲ授ク

○第五等 読物 国史略三、四、五及五経ヲ授ク

- 第四等 読物 十八史略及日本外史ヲ授ク
- 第三等 読物 文章軌範及左氏伝元明史略 以日本正記換元明史略
- 第二等 読物 八大家文及綱鑑易知録半部
- 第一等 読物 史記評林及通鑑即チ温史 等其他博覧ヲ要

これらに記されている使用されていた教科書をみると、日本史に関するものには『国史略』『日本外史』『日本政記』のタイトルが、中国史に関するものには、『十八史略』『書経』などをみることができ、さまざまな通史的な本で学んでいたことがわかる。奚疑塾の教科書の一つである『日本外史』に関連する錦絵には、奚疑塾所蔵の錦絵の一つに「日本外史之内楠木正成(明治12年、方円舎精親筆作、小林清親画工)」のような、書籍を錦絵化された作品が奚疑塾にあることもわかっている。

表9は、歴史が主題になっている奚疑塾の錦絵142点のうち42点、さらに歌舞伎を主題とした錦絵のうち歴史を描いた10点をリスト化したものである。

表9 奚疑塾所蔵歴史関連錦絵一覧

番号	表題	日付	作者	画工	版元	分類	時代
35	朝鮮征伐人評定 図	明治10年	応斉芳年画	彫工春星 堂	前田正三郎	歴史	安土桃 山
36	紫野大徳寺焼香 之図	明治10年	芳年画	月岡米次 郎	小林鉄次郎	歴史	安土桃 山
37	日本英勇(ママ) 鏡	明治11年8月5 日		幾三郎	樋口銀太郎	歴史	源平
38	本朝拝神貴皇鏡	明治11年12月	楊州周延	橋本直義	綱島亀吉	歴史	歴代大 皇
39	将軍徳川家累代 録 上巻	明治12年6月 12日	楊州周延筆	橋本直義	綱島亀吉	歴史	江戸
40	日本外史之内楠 木正成	明治12年	方円舎精親 筆	小林清親	武川清吉	歴史	南北朝

41	義経記五條橋之 図	明治 14 年	大蘇芳年画	月岡米次 郎	森本順三郎	歴史	源平
42	吉野山忠信偽乗 図	明治 15 年	一陽斎豊宣 画	歌川金太 郎	森本順三郎	歴史	源平
43	吉野山忠信偽乗 図	明治 15 年	一陽斎豊宣 画	歌川金太 郎	森本順三郎	歴史	源平
44	新撰太閤記	明治 16 年 6 月 20 日	豊宣筆(豊 宣画)	荒井喜三 郎	荒井喜三郎	歴史	安土桃 山
45	新撰太閤記	明治 16 年 6 月	豊宣画	画工兼版 元 森本順三 郎	彫工 弥太 郎	歴史	安土桃 山
46	新撰太閤記	明治 16 年 6 月	豊宣画	画工兼版 元 森本順三 郎	彫工 弥太 郎	歴史	安土桃 山
47	新撰太閤記	明治 16 年 8 月 4 日	豊宣画		武川清吉	歴史	安土桃 山
48	大坂軍記之内	明治 16 年 12 月 1 日	口蝶楼豊宣	歌川金太 郎	綱島亀吉	歴史	安土桃 山
49	芳年武者無類 弾正少弼上杉謙 信入道輝虎	明治 16 年 12 月 7 日	大蘇芳年筆	月岡米次 郎	小林鉄次郎	歴史	戦国
50	芳年武者無類 山中鹿之助幸盛	明治 16 年 12 月 7 日	大蘇芳年筆	月岡米次 郎	小林鉄次郎	歴史	戦国
51	芳年武者無類弾 正少弼忠松永久 秀	明治 16 年 12 月 7 日		月岡米次 郎	小林鉄次郎	歴史	戦国
52	芳年武者無類	明治 16 年 12 月	大蘇芳年筆	月岡米次	小林鉄次郎	歴史	鎌倉

	島山庄司重忠	7日		郎			
53	大日本武將鑑	明治16年	口雪豊宣画	歌川金太郎	小林鉄次郎	歴史	平安～ 戦国
54	英勇(ママ)武者鏡	明治17年4月 8日		橋本直義	網島亀吉	歴史	源平
55	南北太平記之内	明治17年11月	口蝶豊宸筆	歌川金太郎	樋口銀太郎	歴史	南北朝
56	平家福原棧敷殿 ニテ管弦之図	明治18年4月 1日	応齊年方筆	野中条次郎	小林鉄治郎	歴史	源平
57	源平盛衰記 一	明治18年7月 2日	楊洲周延筆	橋本直義	網島亀吉	歴史(源平)	源平
58	源平盛衰記 二	明治18年7月 2日	楊洲周延筆	橋本直義	網島亀吉	歴史(源平)	源平
59	源平盛衰記 三	明治18年7月 2日	楊洲周延筆	橋本直義	網島亀吉	歴史(源平)	源平
60	源平盛衰記 四	明治18年7月 2日	楊州周延筆	橋本直義	網島亀吉	歴史(源平)	源平
61	源平盛衰記 五	明治18年7月 2日	揚州周延筆	橋本直義	網島亀吉	歴史(源平)	源平
62	源平盛衰記 七	明治18年7月 2日	楊州周延筆	橋本直義	網島亀吉	歴史(源平)	源平
63	源平盛衰記 八	明治18年7月 2日	楊州周延筆	橋本直義	網島亀吉	歴史(源平)	源平
64	源平盛衰記 十	明治18年7月 2日	楊洲周延筆	橋本直義	網島亀吉	歴史(源平)	源平
65	源平盛衰記 十 一	明治18年9月 3日	楊洲周延筆	橋本直義	網島亀吉	歴史(源平)	源平
66	源平盛衰記 十 二	明治18年9月 口口	楊洲周延筆	橋本直義	網島亀吉	歴史(源平)	源平

67	源平盛衰記 十三	明治 18 年 9 月 21 日	楊洲周延筆	橋本直義	綱島龜吉	歴史(源平)	源平
68	源平盛衰記 十四	明治 18 年 9 月 21 日	楊洲周延筆	橋本直義	綱島龜吉	歴史(源平)	源平
69	源平盛衰記 十五	明治 18 年 9 月 21 日	楊洲周延筆	橋本直義	綱島龜吉	歴史(源平)	源平
70	日本略史図解天皇十五代	明治 18 年 11 月	応斉年方筆	野中条二郎	三宅半四郎	歴史	神話
71	芳年武者無類平忠盛	明治 18 年	芳年画	月岡米次郎 人蘇芳年筆	小林鉄次郎	歴史	源平
72	月百姿	明治 19 年 3 月	芳年筆	月岡米次郎	秋山武右工門	歴史	不明
73	大日本名将鑑平相国清盛			月岡米二郎芳年	熊谷庄七	歴史	源平
74	豊臣昇進録		一魁斉芳年筆	万屋孫兵衛		歴史	戦国
75	歴史画		国綱画		両国人平板	歴史	不明
76	伊予守源義経					歴史	源平
117	川中島之場	明治 10 年	豊原国周筆	荒川八十八	神山清七	歌舞伎	戦国
119	歌舞伎画	明治 13 年 3 月 13 日	梅堂国政筆	竹内栄久	辻岡文助	歌舞伎	平安
122	川中島の戦	明治 14 年 7 月 5 日	豊原国周筆	荒川八十八	神山清七	歌舞伎	戦国
125	(川中島)	明治 15 年 4 月	楊洲周延筆	橋本直義	山村鋳治郎	歌舞伎	戦国
126	(川中島)	明治 15 年	揚州周延	橋本直義	林吉蔵	歌舞伎	戦国
130	歌舞伎画	明治 16 年 8 月	揚州周延筆	橋本直義	浅野栄蔵	歌舞伎	戦国

135	吉野山義経危難 之図	明治 18 年 2 月	楊州周延筆	橋本直義	福田熊次郎	歌舞伎	源平
136	見立七賢人	明治 19 年 1 月	豊原国周筆	荒井八十 八	小林鉄次郎	歌舞伎	戦国
137	歌舞伎画	明治 20 年 2 月 18 日	豊原国周筆	荒川八十 八	小林鉄治郎	歌舞伎	安土桃 山
146	歌舞伎画					歌舞伎	源平

・上記の錦絵は全て窪貞亮家資料（所在地：稲城市東長沼）

・本表は「奚疑塾と窪全亮 稲城市教育委員会文化財調査報告書第 23 集」pp.94-104 のうち、資料一覧に時代区分を分類し、一部を削除して作成した。番号は出典資料の資料番号に依る。

表 9 の錦絵を描かれている時代別に区分し整理すると、主に次の五つに分類することができる。

- ①源平合戦 24 点(うち歌舞伎 2 点含む)
- ②戦国時代 10 点(うち歌舞伎 6 点含む)
- ③安土桃山時代 8 点(うち歌舞伎 1 点含む)
- ④年代をまたがる錦絵 (江戸時代の歴代将軍 1 点、平安～戦国の武士 1 点、歴代天皇 1 点)
- ⑤その他(平安歌人 1 点(歌舞伎 1 点)、鎌倉 1 点、南北朝 2 点、神話 1 点、不明 2 点)

「源平盛衰記」13 点を含む源平合戦に関する錦絵 (①) は 24 点もあり、点数の多さが目立っている。その内容は図 4 「源平盛衰記七」、楊州周延筆、橋本直義画工、明治 18 年 7 月 2 日における「一ノ谷の合戦」や、「源平盛衰記 十」(明治 18 年 7 月 2 日、楊州周延筆作、橋本直義画工)の「屋島の合戦」のような歴史的事象を描いたもの、図 5 「大日本名将鑑 平相国清盛」年作者不明、月岡米二郎 芳年画工のように、特定の人物を紹介するものが中心である。事象と人物の二つの側面から学ぶことができる錦絵があることがわかる。



図 4 「源平盛衰記七」、楊州周延筆、橋本直義画工、明治 18 年 7 月 2 日



図 5 「大日本名将鑑 平相国清盛」年作者不明、月岡米二郎 芳年画工

左・図 2、右・図 3、いずれも窪貞亮家資料。

錦絵の一部には、文章により解説をつけられているものもある。例えば、「源平盛衰記 七」には「一ノ谷の戦ひに平軍よく防ぎし故いつはつべきともみえず義経考□(: □は判読不能な文字)ふるに鶴ごえは険阻を頼みて必ず守りの兵なかるべしとて是より兵を分ち自から真光に進み山に分け登り見るにきゝしに勝る険阻なり され義経ことゝもせず逆落しに攻め入りける(後略)²⁴」と書かれており、絵と解説で歴史的事象を知ることのできるような形になっている。

次いで戦国時代(②)の 10 点・安土桃山時代(③)の 7 点も数が多い。これらにも源平合戦と同様に事象と人物に関する錦絵があることがわかる。歴史事象のイメージをわかりやすくする意義があると考えられる。

視聴覚教育の観点からとらえると、④と区分をした時代をまたがって描かれている錦絵にも注目したい。ここには「大日本武将鑑」(明治 16 年、□雪豊宣画作、歌川金太郎画工)、「將軍 徳川家累代録 上卷(明治 12 年 6 月 12 日、楊州周延筆作、橋本直義画工)」、「拝神貴皇鏡」(明治 11 年 12 月、楊州周延作、橋本直義画工)の 3 点が該当する。これらの時代をまたがって描いた錦絵は一つの時代の一つの事件が描かれたものでなく、テーマに従

って歴史上の人物を描いている錦絵である。複数の時代の人物を一枚に描いた作品であり、通した形で歴史を見渡せるようになっている錦絵であることに意義があると思われる。他にも、多くの人物を描いているものには、在原業平や小野小町等のさまざまな平安歌人を描いた「歌舞伎画」(明治13年3月13日、梅堂国政筆作、竹内栄久画工)も挙げることができよう。

歴史を取り扱った錦絵では、時代毎の枚数にばらつきはあるが、平安時代から江戸に至るまで錦絵で視覚的にみることができることを確認できた。特に複数の時代にまたがった錦絵は一覧で歴史をとらえることができるという意味で、歴史を学ぶ上でも価値があるものであると考えられる。

(2) 時局・ニュースに関する錦絵

次に取り上げるのが、塾の活動期と同時代に関する時局に関するニュースなどの錦絵を取り扱った錦絵である。以下に一覧を掲載する。

表 10 癸疑塾所蔵時局等主題の錦絵一覧

番号	表題	日付	作者	画工	版元	分類
77	(上野公園)	明治14年1月	梅寿国利幸	山村清口	倉田太助	ニュース
78	大日本東京名所之内 浅草金龍 山境内従隅田川遠景 図	明治14年6月 23日	梅寿国利	画工兼版元 小児弥七		ニュース
79	新版鉄道馬車往復	明治15年9月			内藤	ニュース
80	世界第一チャリ子大 曲馬ノ図	明治19年9月 3日	楊洲周延筆	大倉四郎兵衛		ニュース
81	世界第一チャリ子大 曲馬ノ図	明治19年9月 3日	楊洲周延	画工兼出版人 大倉四郎兵衛		ニュース
82	磐梯山噴火之図	明治21年7月	土佐光画		森本順三	ニュース

		25日			郎	
83	上野公園気球技芸双六	明治23年12月	永嶋暮暁画		佐々木豊吉	ニュース
84	東京府下名所尽 (新橋ステーション)				辻岡屋亀吉板	ニュース
85	横浜鉄道蒸気出車之図		梅堂国政筆		板本口口 (破損)	ニュース
147	明治小史年間紀事	明治9年12月5日	応需芳年筆		大倉孫兵衛	皇室関係
148	錦町華族学校学習院 開業式図	明治10年10月20日 御届	応需国明筆	蜂須賀国明	長谷川忠兵衛	皇室関係
149	春色和歌之宴会	明治11年	応需桜斉房 種筆	村井静馬	福田熊次郎	皇室関係
150	大日本国産之内養蚕 大覧之図	明治11年	雄斉国利筆	山村清助	井上茂兵衛	皇室関係
151	蓬来千代島台	明治13年9月8日	楊州周延筆	橋本直義	犬塚喜三郎	皇室関係
152	芝公園地丸山御遊覧 之図	明治13年9月8日	蜂須賀国明	蜂須賀国明	山本与市	皇室関係
153	上野不忍大競馬之図	明治18年4月	□一□治□	瀬尾文二郎 彫工藤	石島八重	皇室関係
154	新年御拝賀之図	明治20年	石斉国保画	瀬尾文治郎	横山良八	皇室関係
155	上野不忍共同競馬会 社開業式之図	明治□年10月24日	楊州周延筆	橋本直義	大倉孫兵衛	皇室関係
161	観兵式御幸之図	明治19年2月19日	石州国保画	瀬尾文治郎	長谷川常次郎	政治関係
162	観兵式御幸図	明治20年1月	石斉国保画	瀬尾文二郎	石島八口	政治関係
163	大日本帝国国会仮議	明治21年2月	探景筆	山田金三郎	児玉又七	政治関係

	事堂之図	1日				
164	枢密院会議之図	明治 21 年 10 月	楊洲周延筆		横山良八	政治関係
165	国会議場之図	明治 22 年 4 月	東州勝月		小林鉄次 郎	政治関係
166	陸海軍大演習之図	明治 23 年 3 月			印刷兼発 行者 小森宗次 郎	政治関係

・上記の錦絵は全て窪貞亮家資料(所在地：稲城市東長沼)

・本表は「奚疑塾と窪全亮 稲城市教育委員会文化財調査報告書第 23 集」pp. 94-104 のうち、時局等を主題にした一部を抜粋して作成した。番号は出典資料の資料番号に依る。

表 10 奚疑塾所蔵時局等主題の錦絵一覧をみると、時局における出来事を扱った錦絵には二つの特徴があることがわかる。

第一の特徴は、東京都心部の様子を描いた錦絵が非常に多いことである。例えば、図 7 東京府下名所尽（新橋ステーション）(年月日、作、画工不明)や「大日本東京名所之内浅草金龍山境内従隅田川遠景図」(明治 14 年 6 月 23 日、梅寿国利作、画工兼版元小児弥七)などが該当するが、いずれも東京の様子がわかるものであり、稲城で学びながら東京中心部の様子を知ることができるものである。皇室関係に分類されている「上野不忍共同競馬会社開業式之図」(明治□年 10 月 24 日、楊州周延筆作、橋本直義画工)に類する絵のような事象を描いたものからも、当時の東京の地理を知ることができると思われる。



図 6 「(上野公園)」(明治 14 年 1 月、梅寿国利幸作、山村清口画工)

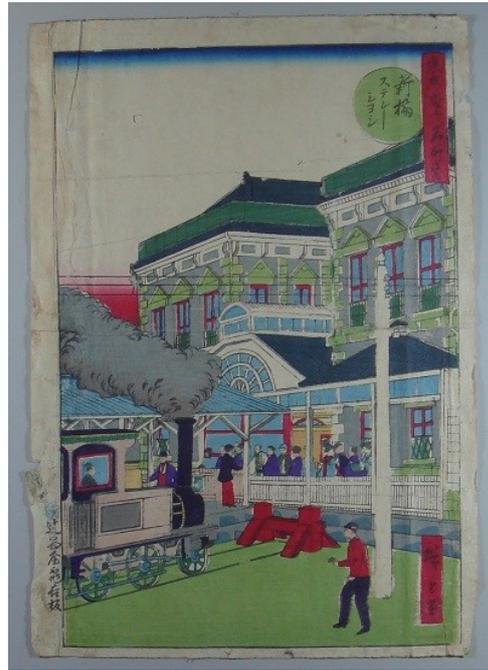


図 7 東京府下名所尽 (新橋ステーション)(年月日、作、画工不明)

左・図 4、右・図 5、いずれも窪貞亮家資料。

第二の特徴に数えられるのが、文明開化に関する錦絵である。新橋駅を描いた図 7 東京府下名所尽 (新橋ステーション)(年月日、作、画工不明)や「横浜鉄道蒸気出車之図」(年月日、画工不明、梅堂国政筆)の鉄道に関するものや、「大日本帝国国会仮議事堂之図」(明治 21 年 2 月 1 日、探景筆、山田金三郎画工)や「枢密院会議之図」(明治 21 年 10 月、楊洲周延筆、画工不明)などの明治新政権下における政治の姿を描いたものなどがある。

奚疑塾は明治中期～大正始めに開かれており、主に明治中後期が活動の中心だった私塾である。江戸から時代が変わり、時代が移り変わってきた時期に塾生達は学んでいたが、奚疑塾に集められていた錦絵は、駅や街の様子など新たな時代を示す文明開化の様子は視覚的に伝えることができるものである。さらに、普通の生活においてみることのできない出来事を描いた国会の議場や枢密院会議などの錦絵は、新しい時代の政治のあり方を知る役割はもちろんのこと、普段みることのできない場所や出来事を具体的なイメージをもってみることができるため、視聴覚教材として意義があるものであるといえよう。

本節においては、視聴覚教育の観点から奚疑塾に集められていた錦絵を対象に内容を取りあげた。奚疑塾の錦絵の内容は、歴史分野に関するものが特に多く、さらに同時代の社

会に関するものも多数含まれていた。歴史分野の錦絵に関しては、特定の時代を描いたものだけでなく通史をみることができるような錦絵を複数点みることができ、さらに視覚的に日本の歴史をイメージできるものがあることも伺えた。同時代の社会に関する錦絵は、地理的にみづらいものを間接的にみることができただけではなく、普通の生活の中ではみられないものを、錦絵を通してみることが可能になるものが含まれていることを見出した。

小結

本章では、奚疑塾の教育内容の一端をみるため、奚疑塾に所蔵されていた錦絵を対象に錦絵のもつ視聴覚教育メディアとしての意義を研究した。

第1節では、明治時代の錦絵に関してその概要を把握し、さらに錦絵を対象とした先行研究の到達点と限界を取り上げた。錦絵は明治期には衰退期とされるが、技術的には円熟していたことや、庶民に人気の高いメディアであり興味を集める力があつたことを確認した。その一つの例には、新聞錦絵のような形で報道と結びついて使われていた形態があつたこともみることができた。明治期の錦絵に関する先行研究では、錦絵が情報を伝えるメディアの機能を果たしてきたことや、人気の高さから、教育に使われていたことなどが明らかにされている。一方で、教育的意図を必ずしも目的に作られていない一般的な錦絵に対する視聴覚教育の視点からの分析はこれまでなかったことを確認した。

第2節では奚疑塾の教育の状況や、奚疑塾の教育方法・内容などを論じた。奚疑塾の教育内容をみると、教養を重視した基礎教育を行っていたことを推察できた。内容に関しては歴史に関する教育は徹底的に教えられていたことをみることができ、方法に関しては塾生が多様な方法により学んでいた。

第3節では奚疑塾所蔵の錦絵に関する資料を対象に分析を実施した。分野ごとの収録点数を整理しながら奚疑塾の錦絵の傾向をとらえることを試みたところ、奚疑塾の錦絵は、歴史に関するものやニュースに関する錦絵の点数が多く収集されており、教育的な意図を持って集められていたことを推し測ることができた。国立歴史民俗博物館との比較の観点からも、奚疑塾の錦絵は一般的に人気のあつた画題ではなく、特定分野に偏つたものが多いようであった。

第4節では、内容に関する検討をさらに進め、視聴覚教育の観点から奚疑塾の錦絵を分析した。歴史が描かれた錦絵では各時代のものと通史的に概観できるもの双方あり、視覚的に歴史を学ぶことができる錦絵が多かつたことや、塾での教科書の主題が錦絵されてい

るものも所蔵されていた。さらに、同時代の事件や世相などを描いた錦絵は、普段の生活ではみることが難しい出来事を主題にしたものが収集されていることもみられた。これらの錦絵はいずれも視覚的な側面から学習を支えることが可能なものであった。

以上により、奚疑塾の錦絵は一般的な錦絵の主題傾向とは異なるものであり、教育的な意図を持って集められており、なおかつ歴史に関する事柄や文明開化などの内容を視覚的に知ることのできるものであることから、視聴覚教材の役割を果たせるものであることがわかった。これらの奚疑塾に集められた錦絵の資料群は、視覚によって新たな知識を得られる可能性を広げられる重要な意義があると考えられる。

しかし、奚疑塾の錦絵の使用法の解明は、課題として残っている。錦絵と塾教科書との関わりは認められたが、具体的にどのような方法で使われていたかまでは史料では明らかにすることができなかった。今後の課題としたい。

第2部 第4章 注

1 ニュースパーク(日本新聞博物館)企画・編集・発行『企画展 明治のメディア師たち—新聞錦絵の世界』、2001年。

2 これらの錦絵の資料は、稲城・窪貞亮家資料による。調査報告は、稲城市教育部生涯学習課編『奚疑塾と窪全亮 稲城市教育委員会文化財調査報告書第23集』稲城市教育委員会、2010年3月。にまとめられている。

3 浅野秀剛『錦絵を読む』山川出版社、2002年、pp.3-6。

4 山口桂三郎『浮世絵の歴史』三一書房、1995年、p.235。

5 高橋克彦『新聞錦絵の世界』角川書店、1992年、p.32。

6 開催期間：2009年2月24日(火)～5月6日(水)。於：国立歴史民俗博物館。国立歴史民俗博物館編集『企画展示 錦絵はいかにつくられたか』(財)歴史民俗博物館振興会、2009年2月。

7 小林忠『江戸浮世絵を読む』ちくま新書、2002年、p.105。

8 奈倉哲三「戊辰戦争諷刺錦絵の世界史的位置-国民国家草創期における民衆思想」、<跡見学園女子大学文学部紀要>(40)、2007年。

9 同前、p.1。

10 本田康雄「報知から雑報へ：明治初期の新聞記事」、<学校法人佐藤栄学園埼玉短期大学研究紀要>13、埼玉短期大学、2004年。

11 同前、p.160。

12 岡野素子「明治期歌川派と教育錦絵-《文部省発行錦繪》を中心に」、<芸術学研究>8号、筑波大学大学院人間総合科学研究科、2004年。

13 古屋貴子「明治初期の視覚教育メディアに関する考察—教育史における文部省発行教育用絵図の位置づけをめぐる—」、<生涯学習・社会教育研究>第31号、2006年。

14 古屋貴子「明治初期における視覚教育メディア政策の思想的背景に関する考察」、<東京大学大学院教育学研究科紀要>46、2007年、p.319。

15 「奚疑学舎教則」1882年6月。

16 同前。

-
- 17 清水九一「国史略問答筆記」(ノート)、(清水義夫家史料)。
- 18 前掲「奚疑塾と窪全亮 稲城市教育委員会文化財調査報告書第 23 集」(p.55)における点数の分類では、風俗が 30 点となっているが、ここでは比較対象の必要から、風俗のうち、美人画に関するもの 10 点を別の分類にし、「風俗 20 点、美人画 10 点」とさらに細かい分類を施した。
- 19 国立歴史民俗博物館、「錦絵データベースの検索」。(2013 年 12 月 23 日閲覧)
http://www.rekihaku.ac.jp/up-cgi/login.pl?p=param/nisikie/db_param
- 20 「奚疑学舎教則」1882 年。
- 21 同前。
- 22 「奚疑塾教課定則」、年不明。
- 23 「教則」、「奚疑学舎教則」1882 年。
- 24 「源平盛衰記七」(錦絵)、楊州周延筆、橋本直義画工、明治 18 年 7 月 2 日。(窪貞亮家資料)。

第3部 戦後直後期の三多摩における青年の社会教育実践—戦中からの復興と戦後社会教育の出発—

第1章 第二次世界大戦下における三多摩の社会教育

第3部は1945年の戦後直後期の三多摩における社会教育実践に関する研究である。中でも戦後三多摩の出発をみるにあたり、第二次世界大戦下における三多摩の社会教育の動向を論じるのが本章の目的である。戦後の三多摩の出発点を研究するにあたり、その前史ともいえる第二次世界大戦下の三多摩の社会教育活動に関して概観しておくことは欠かせないが、この時期の三多摩社会教育に関する先行研究は他の時期に比ベ量的に多くはない。これは社会が戦争へと向かう中で、社会教育実践が生まれにくかったという時代的背景もあったと推察される。

社会教育学者の大串隆吉は、この時期の時代状況と社会教育に関して、「大正デモクラシー期にみられた日本を民主主義的に改革しようとする政治運動とその主体形成をめざす自己教育運動は不可能となった。形成期の段階では、政治改革ではなく抵抗にしか活路を見出だせず、しかもその抵抗は政治批判が圧殺されるなかで、政治の場面ではなく、日常生活の場から築かれねばなくなった¹⁾」と述べる。そのような中、大串は雑誌の発行や新聞等によってファシズムに反対する学習・教育運動に活路を見出す。例えば、『労働雑誌』(1935年3月～1936年12月)、『土曜日』(1936年7月～37年10月)、『信濃毎日新聞』における「農村雑記」などである。一方で、『労働雑誌』や『土曜日』も長く続くことがなかった現実も論じられている。「農村雑記」は農村生活の現実を描くことを志向しつつ社会教育政策との対決をみた。しかし時局を鑑みつつ抽象的にならざるを得ないところから、事実による批判意識が次第に減じていたことも示されている²⁾。この時期の社会教育実践がいかに難しいかが伺える。

そこで本章では戦中の三多摩の社会教育の大要の把握につとめ三多摩社会教育の「冬の時代」においてどのような実践が展開されていたのかを示す。

なお、大串により示された抵抗の社会教育実践であるが、三多摩にも該当する人物はいらる。それが八王子における実践家、橋本義夫である。橋本は非戦論者であり、戦中に勾留経験を持つ人物である。橋本に関しては、第4部にて改めて取り上げる。

第1節 第二次世界大戦下における社会教育の全国的状況

(1) 第二次世界大戦下の社会教化活動の強化

第二次世界大戦下の三多摩における社会教育を論じるにあたり、本節では第二次世界大戦下における社会教育の全国的状況を論じ、時代背景を確認したい。この時期の社会教育の全国的概要に関して、本節では『学制百年史 記述編』を参照しつつ論じる³。

戦時下の社会教育体制の全国的動向には二つの点が指摘されている。その第一のものは戦時態勢に即応した社会教化活動の強化であり、第二は社会教育の体系的整備である。このうち社会教化活動の強化に関しては1921年代以降、特に1929年教化総動員運動の開始により既に推進されており、その流れを汲むものである。行政の面では1937年8月24日には「国民精神総動員実施要綱」が閣議決定され、文部省社会教育局に事務局が置かれた。さらに1940年7月に文部省主催で長野県菅平において全国社会教育主事を中心とする常会指導者講習会が開催、1940年9月には内務省から部落会・町内会の整備に関する訓令が出され、文部省では社会教育に関する件の通牒が発せられている⁴。

以上から組織の改変、講習会、部落会・町内会と国レベルの整備から地域の中に至るまで徹底的に社会教化が行われていたことを推察できる。このような姿勢は国民精神総動員実施要綱の主旨をみると如実にあらわれている。

「挙国一致堅忍不拔ノ精神ヲ以テ現下ノ時局ニ対処スルト共ニ今後持続スベキ時艱ヲ克服シテ愈々皇運ヲ扶翼シ奉ル為此ノ際時局ニ関スル宣伝方策及国民教化運動方策ノ実施トシテ官民一体トナリテ一大国民運動ヲ起サントス⁵」

ここでは厳しい時局にある中、挙国一致や堅忍不拔といった精神高揚を掲げ国民を教化するために行政・民間とともに巻き込んだ国民運動をうたっている。さらに実行にあたって社会教育の関与が示されている。実施機関に示されているのは以下の四点である⁶。

(一) 本運動ハ情報委員会、内務省及文部省ヲ計画主務庁トシ各省総掛リニテ之ガ実施ニ当ルコト

(二) 本運動ノ趣旨達成ヲ図ル為中央ニ民間各方面ノ有力ナル団体ヲ網羅シタル外廓団体ノ結成ヲ図ルコト

(三) 道府県ニ於テハ地方長官ヲ中心トシ官民合同ノ地方実行委員会ヲ組織スルコト

(四) 市町村ニ於テハ市町村長中心トナリ各種団体等ヲ総合的ニ総動員シ更ニ部落町内
又ハ職場ヲ単位トシテ其ノ実行ニ当ラシムルコト

まず、中央には各方面の有力団体を網羅した組織を作るように指示をしていたことがわかるが、特に地域のレベルにおいて部落町内や職場単位などでこの運動が実施されていることは目を引く。そして社会教化を実行するにあたり社会教育がその担い手の一つと位置づけられていたことを見て取れる。

戦時下の社会教育の全国的動向における第二点は社会教育の体系的整備である。これは1941(昭和16)年6月16日「社会教育に関する件」の答申では、「一貫した指導方法を樹立し、組織体系を設けて施行する必要があることを指摘し、社会教育一般、青年学校、青少年団体、成人教育、家庭教育および文化施設に関する六種の事項に分類してその方途を明らかに⁷⁾している。全般的な社会教育を挙げるとともに、年齢階梯別、家庭教育、社会教育施設まで網羅している。一元化した形で社会教育を整備しているが、ここには社会教化の方針の姿も垣間みえる。

以上、第二次世界大戦下の全国的な動向には、社会教育の教化への着目と組織化をみることができた。このような官製の組織化の傾向に関しては、青年に対しても如実に影響が現れている。

(2) 第二次世界大戦下の青年教育の全国的動向

第二次世界大戦下における青年教育に関する全国的な動向のうち、特に象徴的といえる事象が二つある。第一は青年学校義務制の実施であり、第二は大日本青少年団の結成である。

第一に挙げた青年学校義務制の実施には前史がある。1935年の実業補習学校と青年訓練所の統合による青年学校制度の確立である。統合の当初、青年学校への就学は半数にも達しなかったが、その後1938年7月15日に教育審議会による「青年学校教育義務制実施に関する件」の答申が行われる。答申には青年学校義務化の方針、内容の充実・将来の女子に対する義務制の実施への努力要求が含まれており、義務化に向けて整備が開始される。これを経て翌1939(昭和14)年4月26日勅令第254号により、青年学校の義務制が交付された。青年層の多くを占める勤労青年が小学校卒業後にも組織的教育を受ける機会を持つ

ことになった⁸。

青年学校は所轄が社会教育局にあったことから、社会教育的性格を有する学校であった。青年学校令(昭和十年四月一日勅令第四十一号)の第一条には目的が以下のように記されている。

「第一条 青年学校ハ男女青年ニ対シ其ノ心身ヲ鍛錬シ徳性ヲ涵養スルト共ニ職業及實際生活ニ須要ナル知識技能ヲ授ケ以テ国民タルノ資質ヲ向上セシムルヲ目的トス」。

職業及び実際生活のための知識技能を授けることが目的となっているが、心身の鍛錬や特性の涵養のほか、職業や実際生活を授けるように指示されており、社会教育的性格を読み取ることができる。さらに詳しく内容を見ると、第九条のカリキュラム、普通科の教授・訓練科目は、男子では修身、公民科、普通学科、職業科、体操科が、女子は修身、公民科、普通学科、職業科、家事、裁縫科、体操科が指定されており、普通学科以外の実生活をみずえた科目があることから生活に即した内容が意識されていたようにみえる。

『学制百年史』によれば、青年学校は義務制の実施により短期間に顕著な普及をみせていたようで、昭和13年には学校数が17,743校・生徒数2,207,022人であったのに対し、学校数が最大になった昭和17年になると21,272校・2,710,986人にまで増加していた。しかしながら戦時下の困難な状況もあって完全なものではなく、小学校との併設、専任教員の充実の困難など不備も少なくなかった。さらに、1943(昭和18)年10月12日の閣議により「教育に関する戦時非常措置方策」が決定され青年学校が継続されるなどの形式的な整備はあったものの、軍需生産増強の必要に応じた教育の職場転換の強化など内容が後退する状況もあった⁹。

さて、戦時中の社会教育において青年教育への影響の第二点には、大日本青少年団の結成を挙げることができる。文部省では大日本青年団、大日本連合女子青年団、大日本少年団連盟、帝国少年団協会の幹部の結果、1940(昭和15)年9月以降に大日本青少年団の結成による大同団結が決定され、1941(昭和16)年1月16日に日本青年団において結成式が行われた¹⁰。

大日本青少年団の結成状況に関しては、文部省訓令「大日本青少年団ニ関スル件(昭和十六年三月十四日文部省訓令第二号)」を確認しよう。

「輓近青少年団体ノ実績極メテ顕著ナルモノアルハ邦家ノ為洵ニ喜ブベキ所ナリ然レドモ国家内外ノ情勢ニ鑑ミ青少年ノ教養訓練ノ徹底ヲ図リ国家興隆ノ根基ニ培フ

ノ要今日ヨリ急ナルハナク特ニ現下喫緊ノ要務タル高度国防国家体制建設ノ要請ニ即応セシムル為ニハ青少年団体ヲ統合シテ学校教育ト不離一体ノ下ニ強力ナル訓練体制ヲ確立スルノ要緊切ナルモノアリ本省ニ於テハ予テ関係団体ト之ガ具体案ニ関シ協議ヲ進メ来リタル処今般大日本青年団、大日本連合女子青年団、大日本少年団連盟及帝国少年団協会ノ四団体ヲ統合シテ新ニ文部大臣統轄ノ下ニ大日本青少年団ノ結成ヲ見ルニ至レリ茲ニ新団体ノ発足ニ当リ之ガ運営ノ大綱ヲ示サントス¹¹⁾

さらに文部省訓令には青少年教育を教化や訓練の場ととらえる見方がはっきりとわかる。例えば高度国防国家建設の要務がそれである。学校教育と不離一体の下に強力なる訓練体制を確立することが団体の目的であると明記されている。すなわち、この統合による大日本青少年団は、戦時における訓練の役割が色濃く現れた団体であった。戦時の訓練の場としての役割に加え、訓練のあり方に関しても、前述の文部省訓令から確認すると、以下のとおりに記されている。

「三 訓練ニ関スル事項 大日本青少年団ノ訓練ハ国体ノ本義ニ基キ団体的実践修練ヲ施シ共励切磋ノ功ヲ積マシムルト共ニ克ク東亜及世界ニ於ケル皇国ノ使命並ニ皇国ノ当面スル内外ノ情勢ヲ明確ニ認識セシメ青少年ノ行動ヲシテ国家目的ノ遂行達所ニ帰一セシムルヲ要ス¹²⁾」(以下略)

上記のとおり、青少年団の訓練の基本は団体の本義であること、皇国の使命、内外の情勢を明確に認識することである。さらに青少年の行動をして国家の目的の遂行と書かれている点に、青年団体も教育の場であるよりも戦時の訓練の場であるとの性格が強く現れている。

このような社会教育関係団体が組織化、一元化がすすめられていく中で行われた大日本青少年団の結成に関して、大串隆吉は次のように指摘する。「大日本青少年団の結成は、町村団長を小学校校長にすることによって、それまで長野県のように団長を青年の中から選任して形式的にしる自主性を保っていた青年会から一片の自主性さえ奪うものとなった¹³⁾」。少なからず自主性を保っていたところでさえも、全体的に一元化されていく中で、徹底的に自主性が失われていったのである。

社会が戦争に直面する中で社会教育はまさに国民の教化の役割を担わされており隅々ま

での組織化の中、厳しい状況にあった。

第2節 第二次世界大戦下の三多摩の社会教育

次に、第二次世界大戦下において三多摩の社会教育はいかなる態様であったか、三多摩の社会教育実践はどのような課題に直面していたかを論じる。はじめに、三多摩における主な出来事を日中戦争開始の1937年7月以降について以下に示す¹⁴。

- 1937(昭和12)年8月 中島飛行機株式会社武蔵野製作所が操業開始(武蔵野町)
- 1938(昭和13)年 東京陸軍航空学校が所沢から村山村(現武蔵村山市)に移転
- 1939(昭和14)年7月 砂川村(現立川市)に陸軍航空審査部飛行場が開設(後の横田基地)
- 1940(昭和15)年 日立製作所中央研究所が国分寺町に開設
- 1941(昭和16)年4月 調布飛行場完成
- 1943(昭和18)年 富士電機豊田工場操業開始
- 1944(昭和19)年 多摩川梨畠が強制伐採を命じられ十分の一に減少
- 1945(昭和20)年8月 八王子・立川大空襲

ここに顕れているように、いずれも軍需に関係する施設の開設が相次いでいた。もっとも、こうした状況は戦中に入る少し前の1935年頃から始まっていたようで、歴史学者の江井秀雄によれば、「広大な平坦大地を持ち、東京へ一時間以内といった交通の便のよいことが三多摩に多くの軍事用地を生んだ原因」に起因するとの認識が示されている¹⁵。立地のよさから三多摩では各地にさまざまな軍事関連の施設が作られることになり、より一層、戦争は身近な問題となって日常生活にも影を落としていたように推測される。

さて、ここからは具体的な地域に焦点をあてながら戦時下の三多摩における社会教育の状況に関して検討する。はじめに、大正期のあとどのように変容していたかをみるためにも、第2部で研究対象にとりあげた南多摩郡の稲城地域を改めて取り上げ、そこにおいて展開された青年教育の諸相を論じる。

1935(昭和10)年10月の青年学校成立に伴う稲城青年学校をみる。前述のとおり、青年学校は実業補習学校と青年訓練所の統合により生まれ、戦中に義務化がすすめられた社会教育の性格が強い学校であるが、稲城青年学校は活発に活動が展開されていた。

1937年には90名分の完全武装の整備、1939年には銃器庫・専用教員室が新設、1943年には専任校長が就任し実業補習学校、青年訓練所、小学校と並べて看板を掛けられていた前身とは異なり、独立した青年学校となった。青年学校青年数は1935年には男142人・女58人であったところ1939年では男151人、女82人にのぼっている¹⁶。

当時の青年訓練所や青年学校の様子に関しては、当時の青年訓練所の指導教官であった川島琢象による回顧の記録が残っており、その言葉から確認していきたい。川島琢象「青訓二十年の略史」は『稲城教育一〇〇年のあゆみ』（稲城市教育委員会、1975年）に収録されているが、川島も「敗戦直後軍教に関連せる記録等は焼却せられしもの多く¹⁷」と振り返っているように、記憶をたぐった貴重な記録である。以下はこの「青訓二十年の略史」を基に当時の稲城の青年学校の状況を述べる。

青年訓練所の開所当初の1926年の様子のうち生徒の服装は、農業を営む家庭にいるときと同様、野良着や学生服など服装もまちまちで、帽子は大半が鳥打帽、履物は地下足袋のものが多く革靴はごく少数であったといい統一されたものでなかったが、時を経るごとに変化していったようである。特に精神教導の必要、兵器機材の必要のため、募金や寄贈を積極的に集め、1934(昭和9)年にいたっては「関東一の軍曹整備訓練所」となるまでであった。

1935(昭和10)年11月に稲城村立青年学校となってからも、積極的に兵器などの装備の充実を推し進め、1940(昭和15)年7月に東京商科大学(現一橋大学、国立市)グラウンドで開催された府下青年学校大会においては、模範演技を披露し参列者の感嘆を誘ったとの記録もある。稲城村立青年学校は1945(昭和20)年8月15日の終戦とともに同日廃校になったが、ここで大要を確認したのみでも積極的に戦時に尽力していたことを伺い知ることができる¹⁸。

以上によりみえるのが、稲城青年学校において積極的な戦争協力に多くの青年が動員されていた姿である。ここには社会教育実践としての姿は見出しにくい。これは青年学校に限ったことではなく、青年団の活動の中でも多大にあらわれている。例えば1937(昭和12)年8月30日における稲城地域の青年団であった百村青年団の記録には次のような記録が残っている。

「我カ稲城村村民ハ一致団結政府ノ方針ヲ遵奉シ益国民精神ノ振作ヲ図リ粉骨碎身銃後ノ備ニ万全ヲ尽シ以テ皇国日本ノ隆昌ト東洋平和永遠ノ確保ヲ期ス¹⁹」

ここにも、積極的に戦争協力に向かう稲城の様子がかがいがい知ることができる。なお、大日本青少年団は、1941年1月16日結成式が行われたが、稲城においては3月26日に、稲城村青年団の解団式と同日に稲城村青少年団の結成式が開催されたとの記録が残っている。同日の青年団の記録によれば「青年ノ修養ト少年団ノ鍛錬ヲ以上ニ必要ト認め此ノ挙ニ出タルモノト推察出来ルノデアル 其ノ当時ノ士ハ宜敷時ノ非常ヲ洞察シ一意心身ノ練磨ニ努メヨ²⁰」とある。

このような記述をみると、稲城村青少年団も全国的な青年団体の状況と同様、戦時における修養・訓練団体であることが色濃く顕れている。明治から大正にかけて優れた実践活動である奚疑塾のような民衆の自発性を重視した社会教育活動ではなかった。このような戦争の社会教育への影響は、上記で述べた南多摩郡稲城だけに限ったことではなく北多摩郡府中においても青年団の勤労奉仕や戦争激化にともなう衰退などであった。

その一方で、この時期の青年学校が必ずしも負の側面だけに限らなかったことは言及しておく必要がある。例えば軍需関係の工場の青年学校がある。1935年代に三多摩には多くの軍需工場が移転したことはすでに述べた通りであるが、府中においては、日本製鋼所武蔵製作所、陸軍燃料廠、東京芝浦電気府中工場、日本小型飛行機などの進出があったようである。この影響のため府中の多くの青年層は工場へ勤める者が多くできるため、安定した賃金収入を得ることとともに工場内の青年学校での学習を行えるということがあったとの指摘もされている²¹。

もっとも戦争の激化を念頭に置きつつそのカリキュラムをみると、学習とはいいがたい側面も多くあった。例えば、上記工場の青年学校のうち「私立府中芝浦青年学校学則」から本科(男子)第一部の科目課程と5学年合計の配当時数をみると、以下のようにになっている。「修身及公民科」(国民道徳ノ要領、国民ノ政治経済及社会生活ニ関スル事項)は185時、普通学科(郷土、祖国、近代日本、東洋、世界、家庭ト科学、自然界ノ理法、宇宙ト地球、産業、購読、作文、習字、読書、要点記述、数学、音楽、自由研究)・職業科(工業ニ関スル須要ナル事項)705時、教練科(各個教練、部隊教練、陣中勤務、軍事講話、体操、競技、武道)550時、計1440時。すなわち、教練に関する時数が全体の550/1440と3分の1を超える時数を占めている²²。このことから青年学校が大きく戦争に影響を受けたものであったことは推察できる。

加えて、青年団に関しても戦局悪化の1943(昭和18)年以降は軍需品増産の国策のため、

工場勤務での残業から、地元青年団へ積極的に参加できなくなっている状態にあった²³。

小結

本章では国家が戦争へと向かう中で三多摩の社会教育もこの影響から免れ得なかったことが、稲城や府中の青年教育からうかがい知ることができた。多くの青年団体が一元的に組織化され、三多摩も例外ではなく社会教育に戦争協力の色が強く顕れていた。このことを考えると、草の根の社会教育実践は充実していたとは言い難い状況であった。

第3部 第1章 注

1 大串隆吉「天皇制ファシズム期の社会教育体制」、藤田秀雄、大串隆吉編著『日本社会教育史』エイデル研究所、1984年、p.139。

2 同前、pp.154-161。

3 『学制百年史 記述編』文部省、1972年初版発行(1981年第15版)、pp.609-620。第1節は本書を参照し記述した。

4 同前、pp.609-610。

5 「国民精神総動員実施要綱」昭和12年8月24日、閣議決定。

6 同前。

7 前掲『学制百年史 記述編』、p.611。

8 同前、pp.613-614。

9 同前、pp.615-616。

10 同前、p.617。

11 文部省訓令「大日本青少年団ニ関スル件（昭和十六年三月十四日文部省訓令第二号）」。

12 同前。

13 大串隆吉「天皇制ファシズム期の社会教育体制」、前掲『日本社会教育史』、p.148。

14 多摩百年史研究会編著『多摩百年のあゆみ』けやき出版、1993年、p.271。

15 江井秀雄『多摩近現代の軌跡』けやき出版、1995年、p.239。

16 『稲城市史 下巻』稲城市、1991年、p.525。

17 川島琢象「青訓二十年の略史」、稲城教育一〇〇年のあゆみ調査委員会編『稲城教育一〇〇年のあゆみ』稲城市教育委員会、1975年、p.95。

18 同前、pp.96-102。

19 「百村青年団の記録 一九三三年～四三年」昭和12年8月30日、稲城市『稲城市史資料編4 近現代II』稲城市、1995年、p.248。

20 同前、p.254。

21 府中市教育委員会『府中市教育史 通史編 上』府中市教育委員会、2002年、p.509。

22 「私立府中芝浦青年学校学則変更認可申請」昭和19年3月1日、府中市教育委員会『府中市教育史 資料編二』府中市教育委員会、1999年、pp.344-350。

23 前掲『府中市教育史 通史編 上』、p.510。

第2章 戦後直後期稲城における青年の社会教育実践の実証的研究

本章では、戦後直後期における三多摩の青年の社会教育実践を具体的事例から実証するため、南多摩郡稲城において展開された青年の学習・文化活動を対象に、活動の過程を実証的に探究していきたい。

終戦後の1940年代後半は三多摩も含め全国的に「文化国家建設」「新日本建設」の機運が高まっていた。そして、多くの青年がこれらを意識して新しい時代を作るべきであると表明していた。戦後直後期は、戦後の出発点であり青年たちがかつてないほどに地域文化運動に意欲を傾けた時期であった。それは戦中の抑圧された時期からの大幅な変化であり、文化への熱が高まった時期の活動を明らかにすることは、戦後の出発点をとらえる上で不可欠と考えられる。そこで、本章においては具体的な実践活動を数点取り上げながら、青年たちが文化を渴望していた中、どのような実践に従事していたかを取り上げていきたい。

個別具体的な活動をみるにあたって、ここでは改めて、南多摩郡稲城を事例に取り上げることとした。稲城を取り上げたのは、二点の理由による。第一の理由は、当時三多摩の多くの地域と同様に農村地域であったために、三多摩の他地域の実践をみるにあたってモデルケースとなりうることにある。例えば、稲城村(当時、現稲城市)における1945年度の事務報告(昭和21年2月28日提出)における職業別戸数を確認すると農業地域稲城の性質がはっきりとわかる。以下に引用する。

表 11 1945年度稲城における職業別個数

種別	農林業	工業	商業	公務自由業	其ノ他	計
戸数	593	16	13	93	955	1670

稲城村「1945年度事務報告¹⁾」による

表 11 からわかるように、全戸数の1/3以上が農林業に従事している状況であり、まさに典型的な農村地帯であった。さらに、1950年初頭の稲城地域の農業の状況を『稲城市史』からみると、5反以下の農家が全体の34.5%を占めている経営規模の零細農家が多かったことや、商品作物化が振興していたこと、さらに、麦、菜穂、甘藷、馬鈴薯、たまねぎなどが南多摩郡全体平均に比して、1反辺りの収穫量が高いようであった²⁾。三多摩の多くがこ

のような農業を主産業としており、稲城と平仄が合っている。

第二の理由は、本論考の中で大正期から戦中期の稲城の研究を行ってきたため、同じ地域を対象を限定することによって、戦後直後期の特性をより明確に浮かび上がらせることが可能になるためである。特に第3部第1章では戦中の稲城における青少年団などを取り上げ、戦時下において学習・文化活動が難しい状況を確認した。そのため、戦後においてこの状況からどのように変化を迎えたのかを比較対照するために稲城における学習・文化活動を対象に取り上げたい。

1945年度の稲城村の人口は7,931人、世帯数は1,630世帯であった³。地理的には南多摩でも東部にあり東京都心部と隣接する地域でありながらも、人口は多くなく注目度が低かったためか、結論から記すと稲城の学習・文化活動に関する先行研究はそれほど多くない。

しかし、小川正美「南多摩郡青年団体連絡協議会と稲城(平尾地区)の青年団」では稲城の青年団の概要がヒアリングにて明らかにされている⁴。さらに、渡辺賢二は当時の青年が関係した実践活動を取り上げている⁵。

ただし、青年の人間的成長に関することなど、取り上げられることはほとんどなかった。そこで、本章においては、学習・文化活動を行う中で青年がどのように変わり、結果として地域に何がもたらされたかを考察することによって、地域に展開された学習・文化活動の課題や可能性を考察することを目的とした。

本章では、文献調査による学習・文化活動の活動過程の考察に加え、1940年代後半の稲城における学習・文化活動に携わっていた人々へのヒアリング結果も研究対象に含めた。これは活動内容の他に、活動へ参加に対する考え方に迫りたいと考えたためである。対象とする具体的事例は、青年団活動、芸術活動、小グループの活動等個人的規模のサークル活動などである。

青少年教育における昨今のさまざまな取り組みの中で、地域が改めて注目されている。

地域は生活、雇用、生産、消費、居住等で人と関わる場であり、教育・文化活動を支える基礎となる。地域の活性化等の教育施策の実施、地域密着の住民活動など、地域教育は現在においても重要な課題の一つである。教育社会学者である松原治郎は「元来社会教育は、地域社会を場として、地域住民の生活要求と密接に結びついて展開するものである。特に都市部においては、社会教育活動への参加を通して形成されたグループや人間関係は、伝統的地域集団に代って地域における新しい住民組織の核となり、地域形成の主要な担い手となっていく傾向を持っている⁶」と述べ、社会教育と地域の関係の重要性を論じている。

地域に根付いた学習・文化活動を通じて青年の姿をみていくことは、教育をめぐるさまざまな問題が生じている現代社会の中で、地域教育活動に示唆を与える意義がある。

以下、構成を示す。第1節では戦後直後期の三多摩における学習・文化活動を概観する。第2節では、稲城村青年団を検討する。第3節においては、青年団とは別の組織的学習・文化活動をみるため、稲城における美術活動である「美を語る会」を取り上げた。第4節では少人数で構成される小規模サークルの活動を論じる。第5節では、青年教員活動事例をみるため教員劇や人形劇を検証する。

第1節 1940年代後半における三多摩における学習・文化活動の背景

1940年代後半の戦後直後期は、国レベルでの動向をみても社会教育に対する期待が大きかった。1945年11月6日には文部省訓令「社会教育ノ振興ニ関スル件」が出され、さらに1949年に制定された社会教育法により戦後社会教育が法的にも整備が進められた。さらに、青年団に関しては1946年に都道府県レベルで初の長野県連合青年団の結成、1947年にはほとんどの都道府県で連合青年団が発足することになる⁷。

このように、全国津々浦々で学習・文化活動への熱意が高まる中、青年団以外にも文化講座や素人演劇、やくざ踊りなど多種多様な活動が展開された⁸。歴史学者の大串潤児は、このような戦後文化運動の特徴を「その広がり多様性⁹」にあると指摘している。

三多摩においても全国的な文化運動の気運の高まりと軌を重ねるように、西多摩、北多摩、南多摩のそれぞれにおいて多くの活動が展開されていた。各地の青年団における活動はもとより、西多摩福生での有志による「あかざ」等文芸創作の活動、さらに元八王子の多摩自由大学や福生の西多摩夏期大学といった文化講座、青梅の初音座など、青年による演劇活動などが数多く確認できる¹⁰。

これらは当然、行政による活動ではなく、民間で行われていた社会教育実践である。活動の隆盛をみて社会教育研究者である小林文人は「三多摩社会教育史を彩る重要な要因は、全般的に幼弱であった社会教育行政というよりも、むしろ住民の諸活動(エネルギー)、いわゆる社会教育関係団体(青年団や婦人会)あるいは教師・活動家等のボランティア活動¹¹」と指摘を行っている。すなわち、戦後の出発点において行政以上に地域の力が大きかったとする捉え方である。そこで、地域が具体的にどのような活動が展開されていたかを具体的に検証していきたい。

第2節 稲城村青年団の活動

稲城村青年団は1946年3月に結成されている。まさに戦後青年団が各地域に広がりはじめた時期にあたる。稲城村青年団に関しては、1947年6月の創刊号から1970年の第36号までを数える膨大な団報〈稲城〉からその実態に迫ることができる。ここでは、結成の1946年頃を対象にその理念や活動に関して論じる。

「稲城村青年団々則」には、活動内容などの団の概要が記述されている¹²。なかでも、第3条には新日本建設の語が見えている所に稲城村青年団が戦中の青少年団と異なる、戦後青年団であろうとする意思がみえる。さらに、第4条の事業においても、団員修養や生産増発といった内容とともに、娯楽に関する事業を掲げていることも稲城村青年団は社会のための事業を行うだけでなく、会員自身のための団体であることを示すものといえよう。

次に組織に関して取り上げる。1947年6月における稲城村青年団の「稲城村青年団機構¹³」によれば、団長1名、副団長4名、地域毎の各支部として、矢野口、長沼、大丸、百村、坂浜、平尾、押立の6つの支部を持ち、それぞれに、支部長と副支部長をおいている。また、各部として、財務会計、文化部、厚生部、体育部、産業部、家政部の6つの組織によって構成されていたようであり、支部数や組織の部門数の多さから、相応の規模の団体であったことが伺える。

一年間の活動内容については1947年の「事業予定」を参照した¹⁴。上記で示した各部が担当して時宜に応じた社会の改良運動や体育に関する活動、加えて娯楽に関する活動などもあり、地域社会、団員のためなど複数の役割を帯びた活動が行われていたことがわかる。以上、青年団の活動を確認してきたが、戦中の青年団と異なる新たな時代に向けて文化活動に取り組もうとする青年団の姿を読み取ることができる。

続いて、稲城村青年団団員が戦後直後期にどのような思いを持っていたのか。その内面を確認していく。特に初期の青年団報には、今後の決意表明が多く含まれると推察し、ここでは〈団報〉創刊号の巻頭言を確認した¹⁵。巻頭言には、若き熱、意気、力とさまざまな言葉でまさに新しい青年団の出発における団の思いを力強く表明している。さらに、本文中にはさまざまな青年の新時代への期待と自負をも読み取ることができる。例えば新憲法の発布を取り上げながら新たな時代の到来を述べることや、平和や自由の到来への言及、さらに金銭よりも個性の目覚めや個人の人格の完成を重んじる姿勢に明確にあらわれてい

る。

このような団員の持つ未来への希望や意欲に関しては、団長であった芦川義夫の「新しき歩みの爲に¹⁶⁾」と題された文章からもみることができる。この文章は当時農村地域であった稲城における青年団のありかたに関するものである。

芦川の文章では農村においても、農村文化を向上させることの重要性を述べ、さらには、農村において文化を重んじることを重視したいとする。加えて、生まれ育った土地を重んじることにも言及している。そして、青年の団活動への意欲や、新たに農村建設に向かおうとする青年の意志を、さらには、稲城地域への思いをみることができる。以上により、青年団の公的な局面においてこれからの時代に向け、文化国家の重視が重んじられていたといえよう。

このような思いは青年団の中心人物に限ったわけではないようである。稲城村青年団における青年の意欲に関しては、終戦時 18 歳であり戦後初期の稲城村青年団活動に参加していた千木良文祐から得た証言¹⁷⁾によれば、「『自由主義』『民主主義』だということで新しい会を作りたかった」と考えていたと述べ、青年団の成り立ちにおける雰囲気から青年たちの気概が高まっていたようであった。

さらに、千木良はヒアリングの中で「団報の創刊号には『新しき』『自由』『解放』という言葉が執筆者が使っていることからわかるように、新しい時代に目覚めて意気に燃えていた」と述べ、「空気の入替わりのような感じ」との感想をもっていたという。

このように当時の青年により語られていた希望は、特定の青年にみられた現象ではなかった、これらが具体的な言葉となって語られたものといえるのが、弁論討議会であろう。ここでは一例に 1948 年 3 月に行われた稲城村青年団第 3 回の弁論討議会の論題の一覧を取り上げた¹⁸⁾。これからの青年のあり方が中心テーマになっていたこと、多くの青年が文化の希望に関する内容を語っていたことが推察できる。しかしながら<稲城>第 3 号に掲載されている弁論大会は演題のみなので、詳細までは確認できなかった。

稲城村青年団が行った活動の一例は既に述べきたとおりであるが、ここでは農村における青年団を示す活動である農産物品評会の内容をみるために<稲城>第 8 号の「産業部報」に報告されている農産物品評会の内容を取り上げた¹⁹⁾。

農産物品評会では、農業の改良に関する講習会、苗の販売、品評会など農村地帯稲城での生活に結びついた活動が展開されていた。戦後直後期の稲城村青年団に参加していた千木良のヒアリングにおいても、このうち品評会に関してコメントを残している。それは「品

評会に出したものは買い取ってもらった。この収入が青年団運営の資金源となった」とする点であるが、品評会で売り上げた資金は、稲城、多摩、八王子、北多摩等、様々なところと交流するための費用などに使われていた。具体的には他との「連絡協議会」で、これが発展し連合して陸上競技大会、駅伝大会、農業品評会を実施していた。農産物、特に稲城の名物である梨を買える機会であり、好評を博していたとのことである。

本項では戦後直後期の稲城村青年団を対象に、組織などの団に関する概要、文化活動に携わる青年の思い、さらには地域活動の内容に関して取り上げた。これらを通じてみえるのは、青年団に係る青年たちの学習・文化活動への期待などのエネルギーである。加えてこのようなエネルギーの受け皿の役割を青年団が果たしていることもみえる。次に、青年団以外の活動を例に取り上げ青年の学習・文化活動への参加の姿を取り上げる。

第3節 美を語る会の概要と活動内容

(1) 美を語る会の概要

稲城村において行われていた美術に関する活動である美を語る会を対象に会における青年の姿を中心に論じる。この会は当時の稲城村における有力者であった稲城郵便局長の大河原与徳、豊島商業教諭の大久保龍両の発案により1947年に発会する。会の活動は主に近隣の文化人を呼び講座形式で話を聞く活動と、美術品の鑑賞の大まかには二つの形式で行なわれていた。名前にも見られる通り、その特徴は「自らは一篇の詩もつくらず、一幅の画も描かず、ただ美しいものを鑑賞してひとときの安らぎを求めた²⁰」ことにあった。

活動期間は1947年、48年の2年間。わずか2年間の活動ではあったが、その活動は講座形式のもの、美術品鑑賞活動など幅広く多様なものであった。この会は地域の有力者による美術をテーマに集ったサロンのような活動であったようにみえるが、必ずしも有力者だけの集まりではなく、青年層も集っていた。

同会の経緯に関しては、稲城の市民史家である沢久枝によってまとめられており、そこでは若者の存在も確認されている。なお講師による講座には、古代蓮の研究で知られる大賀一郎博士から700年前の古代蓮の研究について、長沢邦治から名優の衣装や化粧の苦心談、陶芸家の富本憲吉から日常の中にある美に関する話を聞くといった活動をしていた。さらに、会の一周年記念には小説家の吉川英治を招いており、若い人々も集まり大いに盛り上がったようだ²¹。

はじめに、当時の時代背景においてこの会がどのような考え方により生まれたかは、会報「美を語る」に記載されている。

真理は冷やかに感じ、宗教は窮屈を覚えます。時勢が時勢なので併し何かしら求めて、まず憩いたい、くつろぎたい、笑いたい。これがB二九来襲撃時頃からの腹のそこからの要求でした。美を語る会はさうした時勢の子です。お互いに美を語って楽しみ おのがじし情を頌ってなごみ 一時でもよいから清涼の気持ちになりたい 平安の境地に遊びたい かうした心が身ごもり育ってこの美しい名の会が生まれました²²。

上記に引用した会の創始に関する文章から伺えるのは、会の出発が戦後直後である時代背景と密接に結びついていたことである。文化に親しみ穏やかな気持ちをもちたい、と記されているとおり、戦時中の辛い体験を出発にして文化活動へ欲求を募らせたことが背景にあったという。

このような会の始まり方は、心の平安を求めた結果として会が創始された点で、戦後青年団の起こりとは異なる。むしろ結果として文化活動を選択したようにもみえる。すなわち、「美を語る会」のケースからうかがえるのは、新しい日本の建設ではなく、個人の楽しみや学びのために文化が期待されていたことである。

(2) 美を語る会の活動内容

会の由来にみられるように、美を語る会は青年団とは異なる側面で文化を通じて当時の人々の思いを受け止めていたが、本項では具体的な活動をみながら、参加者にどのような影響を与えうるものであるのかを考察していきたい。

具体的な会の活動を以下に示す(表 12)²³。

表 12 美を語る会の活動一覧

	年	月日	場所	講師・内容
第1回	昭和22年	2.2	大河原氏宅	講師 大賀一郎博士
第2回		3.30	大河原氏宅	講師 長澤邦治氏 名優の衣装 化粧の苦

				心談を聞く
第3回		5.4	妙覚寺	狩野元信の名画鑑賞
第4回		6.29	大河原氏宅	講師 小島善太郎画伯 日本古代美術の成果を聞き、再び、狩野元信の名画鑑賞
第5回		9.14	大河原氏宅	講師 富本憲吉氏
第6回		9.14	常楽寺	
第7回		11.2	妙見寺	
第8回		2.11	大河原氏宅	講師 吉川英治氏・小島善太郎氏 一周年記念会
第9回		8.29	常楽寺	講師 金原省吾氏、常楽寺の秘仏拝観

表 12 における 9 回の活動をみると、大きく分けて二つの形態に分類することが可能である。第一の形態は講師を招へいしての講座形式であり、第二の形態は会員それぞれによる美に関する意見交換を中心としたものである。後者に分類した美に関する意見交換は、講師の設定がない会で行われていたものであり、例えば第 6 回の美を語る会では「秋の半日を郷土の歴史 美を心ゆくまで語りたく²⁴」と呼びかけられている。

ここでは様々な講師を招へいしているが、この中でも特に目を引くのが第 8 回の作家、吉川英治であろう。『宮本武蔵』、『三国志』などで知られる吉川英治は 1947 年当時に 52 歳、青梅に疎開をしていた経験を持つ。人気作家である吉川を呼んだことから、美を語る会の主催者は相当の期待をもって会を運営していたことが伺える。

なお、吉川英治のような著名な作家を招へいできたことに関しては、稲城の産業構造や地理的状況もあったのではないかと推察できる。当時の稲城村は農村地帯であったため、「配給だけで生存できない都市の人々は、不足分を補うために農村への買い出しに殺到することとなる。稲城村にも、縁故を求め人や物々交換の形で多くの民衆が買い出しに訪れた²⁵」という状況であった。『稲城市史』では「村民自身は、乏しいながらもなんとか自分たちの食糧を確保できたが、買い出しに応える余裕は残されていなかった²⁶」との指摘もされていたが、稲城には少なくとも村民が食べることができる食糧があり、都心に近い農村地帯であるため著名人を招くためにも何らかのアドバンテージがあったとしても違和感がなく感じる。

これは参加者の感想にも顕れている。詳細は次節で述べるが「美を語る会」の参加者で

ある進藤孝雄の聞き取りでも「色々な人が稲城に来てくれたのは、稲城に来れば食べ物にありつけるといふ面があったと思う。それで色々文化が集まるきっかけになった²⁷」という証言からも推察できる。

さて、意見交換に関する活動からは会の性格が美術鑑賞をするためだけのものではなく、語り合いの場となり地域における文化に携わることのできる役割をも果たしていたように推察できる。

第4節 美を語る会の青年

(1) 美を語る会に参加した青年① 進藤孝雄のケース

前節では美を語る会の概要を中心にどのような会であるかの内容に関して取り上げた。では美を語る会に青年はどのような関わりを持っていたのであろうか。本節では美を語る会における青年の姿に関して、参加者の証言を交えて確認していきたい。美を語る会は前述のとおり地域の有力者によるサロンの側面があったようにみえるが、青年層も活動に参加しており、当時青年の参加者として関わっていた進藤孝雄から聞き取りを行なった²⁸。

聞き取りの中で進藤は、会が与えた進藤への後の人生への影響について、さらにこの会が契機となって美を語る会以外にも地域で様々な文化活動を起こしていた、と証言をしている。これらの証言からは1940年代にこの地域で起こった文化活動への機運の高まりがわかり、かつ青年がその中で果たしていた役割がわかる。

進藤は1927年生まれ、美を語る会の主催者であった大河原与徳と親交があり、当時20歳の青年であった。会の講師から得た衝撃は今尚覚えているとのことであった。講師に関しては、第8回の一周年における吉川英治を招へいした会が印象深いとし、「講師に来た、吉川英治や刀剣家の話の中でも印象的な言葉は今も覚えている。吉川氏の本を好んで読んでいたこともあり、講師に来た時は衝撃であった」と証言をしている。

会の一周年に吉川英治を呼んだ時、大いに盛り上がったそうだが、その際に参加者が持っていた意識には「稲城に“あの”大作家が来てくれた」との思いがあったようである。

「美を語る会」に有名講師を招へいし、なおかつ青年も参加できたことに関しては、「様々な講師を呼んだり、美術に感してのつながりができたこと、会の運営に関しては、稲城郵便局長をしていた大河原与徳氏の影響が大きかった」とされ、地域の有力者の役割が大きかったとの証言もある。

進藤は美を語る会に対して「美を語る会に参加することは楽しく、勉強にもなった。色々な人から刺激も受けた。美術品鑑賞については、鑑賞をしながら話し合う状況は、相撲のぶつかり稽古のようなものでもあった」と述べる。講座では、参加者同士も関わりがない状態で参加していたのではなく、影響を与え合う中でのこの会の活動があった。さらに、「会に参加したきっかけのようなものははっきりと覚えていないが、覚えていることは、そこに参加するメンバーの人柄、大河原氏の人柄に引かれて入っていったようなことはあると思う」との証言もあった。

これらからわかるのは、青年団以外にも学習・文化活動の場が開かれていたことである。特に青年団の理念でみられたような文化による国家の建設といった目的を意識した活動ではなく、平和を実感するものとして個人的な楽しみのある場もあったことである。この美を語る会に関する聞き取りで確認できたのは、美を語る会での活動の経験が参加者の中にその後も息づいていた点である。進藤は美を語る会や大河原との関わりは美術に興味を持つ契機となり、その後もそれは続き後の人生に影響があったと述べる。戦後直後の学習・文化活動はこの時期の一時の盛り上がりだけでなく、活動に参加した各個人に成長に影響を及ぼしていたことを推察できる。

(2) 美を語る会に参加した青年② 勝山道子のケース

次に取り上げるのは、美を語る会に参加した青年のうち「外来青年」である勝山道子である。ここでは「美を語る会」に参加していた勝山道子に対して行った会への関わり及び勝山自身の学習・文化活動に関する聞き取り²⁹を中心に、稲城における「外来青年」の活動の考察を行う。

なお、「外来青年」とは活動が行われた地域外から流入・土着し、地域文化に影響を与えた人物のことを示す本論文における造語であり、第1部における五日市憲法草案をめぐる千葉卓三郎もここに位置づけ分析を行った。ここで再び「外来青年」の考え方をふまえて進めたい。

聞き取りを実施した勝山道子は、千葉県出身で稲城に関わった人物である。勝山道子は1923年生まれである。1948年に勝山は千葉県大和田町より結婚によって移り住んでいる。同年5月には移り住みすぐに婦人会へと関わり社会教育活動への関わりを持つことになった³⁰。「美を語る会」もこの時期に参加した活動の一つである。

以下「美を語る会」について証言を交えながら分析を行う。(カッコ内は勝山の証言)

・「美を語る会」に関わった契機

「美を語る会の中心人物であった大久保龍氏と繋がりが強かったために会に呼ばれた。大久保氏が府中で幼稚園を作る際に協力をしたこともあり、府中の人々が「美を語る会」に関わっていた。裏方のほとんどを大久保氏がやっていたようだ。大河原与徳氏が慶応大学に通っていた際に、大久保氏のお宅に下宿していたという繋がりが二人にあった。」

勝山が「美を語る会」に関わったのは、大久保との繋がりによるものであったという。この大久保とは府中文化幼稚園を作る際での関わり等もあり、府中の人物とのつながりも深いということがこの聞き取りでは明らかになっている。本会中でも府中在住の人と「美を語る会」の関わりがあったことも指摘されている。

・会の活動内容

美を語る会の活動に関しては、正式な会に位置づけられた活動以外にも実施されていたようである。例えば、「本を読んで芸術を語る活動をしていた。正式に会としては10回前後であったが、他にも俳句を作ったり、外国船がきたときの船員の様子を紹介する、浮世絵を鑑賞する、などの活動を月に1回をやっていた。そうした場所に大久保氏がよく連れて行ってくれた」との証言が得られた。大河原宅が旧家で多くのコレクション等に恵まれていたこと、さらに慶応義塾大出身であり、東京に出ていたということもあって大河原の発想がかなり豊かであったとの印象を受けているとの話もこの際にされている。

・「美を語る会」から勝山が受けた影響及び勝山が地域に与えた影響

勝山は美を語る会の活動から学んだことや、会での経験によりその後自ら地域活動に及ぼした影響に対しても証言があった。それは以下のことである。

「敗戦のときに美術を見て、これから日本は文化中心の国家でないとだめだ、ということを会の活動から教えられた。文化国家というのはなんだろうか、ということを考えながら活動を行っていた。こうした文化の話は非常に印象的だった。細かい記録の中身のお話については覚えていないが、そういう大きかったことは覚えている。その後に地域の民具を集めるなど様々な社会教育活動を行ったが、それにもこの時期文化運動の重要性を知ったことが影響していると考えている」。ここでは、稲城の外から移り住んだ勝山が稲城に根付きながら、その後勝山が自ら地域で活動を行うなど、会の経験からその後の活動につなが

るまでの歩みが述べられている。これは社会教育実践が参加者を通して形を変えながら根付いていくまでの過程そのものであり、戦後直後期の活動は後につながる意味を持つものであったともとらえることができよう。

・「美を語る会」の活動の終了

「美を語る会」そのものはプライベートな活動であるが故に限界もあったようである。会の活動の終了に関しては次のような証言があった。「10 回くらいやって自然解散したが、『美を語る』ということへ行かない兆しがみえたから解散したのではと思っている。そこここで短歌、俳句など様々なささやかな文化祭のような活動がされてきただけに、あえてここで語らなくても、というように考えていたのかもしれない」。

「美を語る会」の活動終了に関する原因は明確にはわかっていないが、勝山によれば会の必要性が薄まったことを一因にあげている。この時期多様な学習・文化活動が開花した時期ではあったが、文化による戦中からの復興の時期から高度経済成長期に向かう中で、役割を終えていったのであろう。

・「美を語る会」とその後の活動

会は自然消滅したが、ある一定の影響を参加者に及ぼしていたことは明らかである。勝山は「美を語る会」を「自分としては様々な活動をしたきっかけだった」と評価しており、「美を語る会」が後の活動の精神的基盤となっていたことが分かる。直接内容がつながる活動には、「美を語る会」で触れた短歌を契機に、短歌の会を作るといった活動や地域文化祭なども起こしていたようである。その後も勝山は婦人学級や公民館設立運動など稲城の地域の社会教育の分野で活躍するが、戦後直後期に稲城に根を下ろし始めたことがその後の活動につながっていったという。「つらい思いをしてきたが、転換期になったのは『美を語る会』であった」と述べていることからうかがい知ることができる。

・勝山と稲城への「土着」の重要性

ここでは勝山が稲城に根づくまでの過程に関連した証言を取り上げる。勝山は外から移り住み、土着していくにあたって次のように述べている。「様々な地域活動をする中で、土着したところでどう過ごすか、その土地でどう生きていたかが重要だと思う」。すなわち、土着にあたってはその後の地域活動が重要とのことである。

勝山はその後、地元で使われていた農具を展示する会を行うという活動をおこなっていたようだが、これは地域と結びつきが強かった勝山であったから行えたという。「外来青年」が地域に根付き、地域文化運動への影響を及ぼしていく過程には、こうした地元の結びつきが見られたことが、このことから確認できた。

以上、本節では当時青年で美を語る会に関わった 2 名の人物を取り上げた。美を語る会のような地域活動は、限られた有志により行われる活動であり、広く浸透する活動ではないが、ここで取り上げた 2 名のいずれにも共通しているのは、その後の自らの歩みへの影響があったと振り返っていることである。美を語る会のような地域の有志での限られた活動は青年団のように全国にネットワークを持つ活動と異なり、影響は限定的であり決して広くはなかった。しかしながら参加者への影響をみると、やはり戦後直後期の文化の担い手として参加者に大きな意味を持っていたととらえられる。

第 5 節 サークル活動における青年

次にサークル活動の事例を取り上げる。ここでは進藤孝雄へ実施した聞き取り³¹を元に、進藤のこの時期の活動である山岳会と写真の活動事例をみながら、この時期のサークル活動が青年にどのような影響を及ぼしていたか検討する。

山岳会は進藤を含む 7 名前後で行われていた、登山を趣味とするメンバーの集まりによるサークル活動である。山岳会は文字通り山登り好きのグループであり、上高地(22 年 7 月)や白馬山(23 年 7 月下旬)、槍ヶ岳(24 年月不明)など、各地の山に登ったとのことである。会長は、美を語る会の中心の一人大河原与徳がつとめていたようであり他のメンバーよりもベテランであった。山岳会ではバッジをつくるなど、会の形式で行っていたが、この活動は早くに自然解散してしまったとのことである。

さらに、進藤がほぼ同時期に活動していたのが写真である。写真を始めたのは友人の兄から写真機を譲り受けたことが契機とのことである。「写真会という形式を作ったというものよりも、写真好きが集まりゆるやかに活動をしていたようなもの」であった。このメンバーは山岳会メンバーと重なっており、登山時にも自分たちで写真を撮り、現像も行っていったとのことである。

進藤は山岳会や写真等の文化運動を通して、自らが得られた経験についても証言をして

いる。その一つに挙げられたのが自らの変化である。「元々多趣味だったが、今でも仲間がいて、色々なところへ出かけたりしている」や「色々なことに関われたことは、自分の人生を豊かにする意味でもよかったと思う」と述べている。写真はその後も続いたとのことだが、青年期に学習・文化運動に関わることによって、自らの成長へ影響を及ぼしていたと伺える。

第6節 青年教員による人形劇、演劇

次に取り上げるのは、青年教員による人形劇や演劇の取り組みである。前節までは社会教育団体の事例に青年団を、地域における大規模な趣味の集まりとして美を語る会を、個人的なサークルの例に山岳会をそれぞれとりあげたが、ここでは学校を舞台に行われた活動を事例に文化活動に関わった青年の学習・文化活動を取りあげる。

小学校教員として新任時稲城に関わり、地域における文化運動に参加していた光永久夫³²は、1925年生まれ、教員で就職をする際に農村での就職を希望した。「日本の子どもの9割は農村にある、ということを知った。自分の故郷は長崎の大都会、出身は東京。都会しか知らなかったが、農村を知らなかったら教育はできないと考えた」との理由である。

光永は稲城との出会いを次のように述べる。「当時自由が丘に住んでいて、下宿から通える農村を探していた。一番近くて通えそうだったのが、稲城村だった。とりあえず下見にいったが、その際、校舎もそれほど新しくなく、設備がほとんどそろっていなかったという印象だった。」しかし、その反面、自由に様々なことができたと述べている。当初3年間とのことだったが、稲城に5年間勤務する。光永はそれだけ大事にされたのだと思うと、稲城に対する愛着を述べていた³³。光永の地域への愛着はこの時代に形成されていたとみられる。このように、新任の青年教員が地域に徐々に愛着を深めながら教育に関わっていたことが活動の背景にあった。

それでは、ここから光永による稲城における学習・文化活動の内容に述べる。第一には、前述した美を語る会に関するものである。美を語る会には光永も参加していたとの証言を得られた。青年団の立ち上げにも関わっていた小学校校長五島茂永に誘われたのが参加の契機であったと述べ、そこには4回ほど参加し千木良ら地元青年との関わりも持ったようである。光永も「美を語る会は非常に印象深いものであり、特に吉川英治氏の話を知ったときは特に興味深かった」と、会の感想に関する証言を行っている。

第二にあげられるのが教員による人形劇活動である。光永が人形劇を始めたのは、自身が学生時代に人形劇等の活動に関わった経験があったためである。「学生の頃から文化運動に興味を持って、人形劇などをやっていた」と、教員になる前にもいろいろなボランティアを経験していたとの証言があった。

人形劇は、稲城でも第一小学校を利用してやっていたという。活動の様子について、光永は次のように述べている。以下内容に関して箇条書きで記す。

- ・第一小学校の教室のしきりをとってやっていた。机を並べて、舞台を作っていた。
- ・自分が小学校にいる間、毎年やっていた。夏休みにやっていた。
- ・上演していた作品は元からシナリオがあるものの他にオリジナルも作って上演していた。
- ・演出も自分たちで考えてやっていた。音楽や照明などそれぞれの専門の人が工夫をしてやっていた。

小学校で開催された、人形劇によってもたらされたことを次のように述べる。「当時の稲城の子どもたちにとっていい影響を与えられていたと思っている」。他の娯楽も少なかったこともあり、かなりの人が集まっていたという。

さらに、第三に挙げる活動が学校教員たちによる教員劇である。教員劇は、稲城の学校教員によって1951年の1年のみ小学校の運動場で実施した劇であり、学校に備品が不足していたために、観覧料を子どもの学用品購入にあてたそうである。子どもの家族も含めて相当数の人間が集まったとのことである。

光永はこうした経験について、「ひとつのことに教員の気持ちを集めるということの経験ができたのが良かった」と証言している。さらに、人形劇を契機に生まれた地域の人々との関わりに関しては、「自分の人生にも芝居として一生懸命やったという記憶。一生懸命やっていたという心は周囲がみんな読んでいてくれていた。それが結果として生きている。それを地域の人が覚えていてくれた。若い教師がいて、そのころの青年団の人もみてくれていた。自分たちがそういったことをやってくれているから、青年団のメンバーの活動を手伝ったりもした」と述べ、教員劇の取り組みを通じて地域の他の青年たちとの交流をもつことになった経緯にも触れている。

以上、本節では人形劇や教員劇を中心に青年教員による学習・文化活動に関して証言を交えながら論じた。これらは、青年が行った活動が地域に娯楽として受け入れられていた事例である。本章で取り上げてきた他の事例と異なる点はこの活動自身が地域の人々に対する楽しみの提供になっていた点である。

小結

本章では南多摩郡に位置する稲城の事例をみながら、1940年代後半における青年による社会教育実践に関して証言を交え活動内容を論じた。各節で述べた内容は以下のとおりである。

第1節では、戦後直後期における三多摩における社会教育実践に関わる、稲城の地域状況を取り上げた。そこでは、稲城地域においても戦中の状況からは変化を迎え、学習・文化活動への期待の高まりとともに、地域が重要な社会教育実践の場となりつつある状況にあったことを確認した。第2節では戦後直後期青年団の例に稲城村青年団を取り上げた。そこでは、新しい時代を迎えた中、文化国家建設という大きな目標を掲げた青年の意欲をみることができた。第3節では地域における文化活動の事例に「美を語る会」を分析した。青年団の熱のこもった期待の高まりとは異なる、静かさを求めるための文化への期待が持たれて行われていた活動の姿をみることができた。さらに第4節では「美を語る会」が参加した青年に与えた影響をみた。第5節は小規模活動サークル活動の事例を取り上げ、参加者への影響をみた。そこでは、活動の経験が参加者のその後に人生に息づいていたことが伺える。第6節では、青年教員による演劇や人形劇を取り上げた。この事例では活動が地域の人々に娯楽の一つとして受け入れられていた。

本章で取り上げた活動の背景には、戦後を迎え文化への期待が高まっていた中で、多様性を帯びたものになっていたことがわかった。さらに、サークル活動や人形劇のケースにおいてその活動経験はその後の人生に影響をもたらしていたようである。さらに、青年達がこの時期に携わった活動は本人達の成長の糧になっただけでなく、地域の人々にとり娯楽として楽しみになっているケースも確認できた。

本章では、戦後の出発点にあたる戦後直後期において、三多摩でそれぞれ目的をもちながらさまざまな活動が展開されていることを明らかにした。具体的にはこれからの社会の進むべき道として文化に期待するケース、戦中の反動からやすらぎの手段を求め文化活動に関わるケース、さらに地域における楽しみとなる活動を行っていたケースなどである。本章で取り上げた学習・文化活動のそれぞれ目的は異なっていたが、参加者はいずれも文化に対して期待をもって活動に臨んでいたことは共通点すると思われる。

第3部 第2章 注

- 1 「一九四五年度事務報告」稲城村、1946年2月28日提出(昭和21年第二回稲城村村会々議録)、『稲城市史 資料編4』稲城市、1995年、p.300。
 - 2 稲城市編集発行『稲城市史』下巻、1991年、p.608。
 - 3 前掲「一九四五年度事務報告」、p.298。
 - 4 小川正美「南多摩郡青年団体連絡協議会と稲城(平尾地区)の青年団」、『戦後三多摩における社会教育のあゆみ III』、東京都立多摩社会教育会館、1990年。
 - 5 渡辺賢二「戦後初期の青年たち」、<稲城市教育委員会編稲城市文化財研究紀要>、第6号、稲城市教育委員会、2004年3月。
 - 6 鐘ヶ江晴彦「地域学習社会の展開」、松原治郎編『地域の復権』学陽書房、1980年、p.81。
 - 7 日本青年団協議会編『地域青年運動50年史—つなぐりの再生と創造—』日本青年団協議会、2001年、p.5。
 - 8 北河賢三『戦後の戦後の出発 文化運動・青年団・戦争未亡人』青木書店、2000年や、山寄雅子『京都人文学園成立をめぐる戦中・戦後の文化運動』風間書房、2002年参照のこと。
 - 9 大串潤児「戦後の大衆文化」、吉田裕編『戦後改革と逆コース』吉川弘文館、2004年、p.206。
 - 10 「三多摩の社会教育のあゆみ年表」、『戦後三多摩における社会教育のあゆみ III』東京都立多摩社会教育会館、1990年、pp.70-85。
 - 11 小林文人「戦後三多摩・社会教育のあゆみ—その歴史を掘ろう—」、『戦後三多摩における社会教育のあゆみ I—その揺籃期を探る—』東京都立多摩社会教育会館、1988年、p.4。
 - 12 「稲城村青年団々則」、<稲城>創刊号、稲城村青年団文化部、1946年6月、pp.24-25。
青年団々則には稲城村青年団の概要を以下のとおりに規定している。
- 第一條 本団ハ稲城村青年団ト稱シ事務所ヲ団長宅ニ置ク
第二條 本団ハ稲城村及押立在住ノ男女青年ヲ以テ組織ス
原則トシテ男子ハ滿十五才以上二十五才
女子ハ滿十五才以上二十五才迄ノ未婚者トス
第三條 本団ハ団員相互ノ親睦ヲ図リ修養研鑽ニ努メ新日本建設ニカヲ発スヲ目的トス
第四條 本団ハ前条ノ目的ヲ達スル為メ左ノ事業ヲ行フ
一、団員ノ修養、娯樂ニ関スル事業
二、生産増発ニ関スル事業
三、其ノ他前條ノ目的ヲ達スル事業
- 13 「稲城青年団機構」、前掲<稲城>創刊号、pp.25-27。
 - 14 「本団事業予定」、前掲<稲城>創刊号、pp.27-28。
1947年の事業予定は以下のものであると報告されている。
- | | | |
|-----|----------|-----|
| 六月 | 薬品斡旋販売 | 厚生部 |
| 七月 | ピンポン大会 | 体育部 |
| 八月 | 夏季大会 | 各部 |
| 〃 | 盆踊り | 厚生部 |
| 九月 | 弁論大会 | 文化部 |
| 〃 | 農産物品講評会 | 産業部 |
| 十月 | 運動会 | 体育部 |
| 十一月 | 児童手芸品展覧会 | 家政部 |
- 15 「巻頭言」、前掲<稲城>創刊号。

「巻頭言」

○民主日本建設の平和の鐘は鳴りひびき新憲法は発布された。建設へ(々々々：繰り返し記号が入る、引用者補足)我らは足並を揃へスクラムを組んで!!若き熱と意気と力とを持つた、

我らでなくてだれかそれを成しとげよう。

春、春。大地に我らの心は満ち満ちてり うらゝかな春、そして平和への、自由への、解放への春。我らの希望は何か。名譽か、地位か、金錢か。否！否！理想的社會、多くの人たちの幸福は社會、目覚めた個性、智性豊かな個人の完成。

これこそ我らの希望なのだ。

こゝに「稻城」第一号を送る。諸君の愛護を祈るや切なり。

文化部

16 芦川美夫「新しき歩みのために」、前掲<稻城>創刊号、稻城村青年団文化部、pp.2-3。創刊号の巻頭言の後ろに囲み記事で記されている。ここではその一部を抜粋した。

「農業經營の合理化に伴ふ農村文化の向上は日本農業の後進性を拂拭せんとする民主農村建設への力強き発足である、然るに今次の改革も農民の自覚と建設的意慾が湧出でるいまなら何らの価値も生まれまいであらう。

(中略)

新なる知識を租借し消化し吸収しうる能力と熱情を以て任ずる者は誰あらう、我ら青年なのだ全国的に生れた農村の青年団は今や建設的段階に入った農村に於ける若人の修養と社交の唯一の文化団体たる青年団をして真に民主団体たらしむるものは青年団を構成し、或いは構成せんとする青年各人の責務である

(中略)

我等は此の土地に生れ此の土地に育ちやがては此の土地にかへるであらう、されば我等は内的充実に雄雄しくも隣人愛にもへた人間性の向上を目指し明日の平和な農村を契ふことこそ我らの最上の榮譽であり崇高なる使命なのだ」

17 千木良文祐聞き取り、2004年7月26日、於：常樂寺。千木良は1927年生まれで、1940年代後半時期から青年団に参加している。

18 「文化部報」、<稻城>第12号、1949年12月、稻城村青年団、p.15。

弁論討議会の題が以下のとおり記されている。農村に関するものや青年がどうあるべきかということを中心に議論が行われていたことを推察できる。

三月二十日 稻城青年団第三回弁論討議會

- 一、自覚せよ青年団
- 一、常識の法律
- 一、土に生きよう
- 一、政治への関心を高めよ
- 一、我等青年と農村文化
- 一、青年と人生
- 一、一滴の汗
- 一、青年の本領
- 一、農村文化向上に付て
- 一、赤短とパーマネント
- 一、青年よ夢を抱け
- 一、青年と伝記

19 「産業部報」、前掲<稻城>第8号、pp.43-44。農産物品評会の内容をそれぞれ説明されている。

第一回産業部主催 馬鈴薯及甘藷の苗床の講習会を常樂寺にて催し致しました。

日時 二月二四日 午後一時より四時まで

場所 長沼 常樂寺

- 議題
- 一、甘藷の苗床
 - 二、馬鈴薯の種切について
 - 三、蔬菜温床

講師 松原茂樹氏
主川農事試験所地方技官

第二回 秋蒔きの趣旨を皆々絶大なる御協力によりまして沢山御注文を取り、大和種苗の御注文は左の通りです
総買上 計五四四八円
(以下略)

第三回 今回の産業部主催の農産物品評会も皆さん方の又支部長の絶大なる御協力と更に又協同組合の幹部の方々の御骨折によりまして無事終了をみました事とは部長と致しまして厚く御礼申し上げます。

(以下略)

20 沢久枝『美を語る会』について、<稲城市史だより>第15号、稲城市史編集委員会発行、1986年11月、p.5。

21 沢久枝『美を語る会』について」同前、p.7。

22 大久保龍「美を語る会のうまれた由来」、<美を語る>〔1〕、美を語る会、1947年8月。

23 前掲『美を語る会』について」、p.6。

24 『稲城市史 資料編四 近現代Ⅱ』稲城市、1995年、p.388。

25 『稲城市史』下巻、稲城市、1991年、p.571。

26 同前。

27 進藤孝雄聞きとりより。2001年9月19日、於：進藤孝雄宅。

28 2001年9月4日、進藤宅で実施。聞き取り時75歳。

29 2003年8月4日勝山道子宅にて実施。

30 勝山の自分史については勝山道子『私の社会教育史—自分史のひとこまとして—』（勝山道子発行・編集協力書肆にしかわ、1998年）に詳しく記されている。

31 進藤孝雄聞き取り、2004年7月14日実施、於：進藤孝雄宅。

32 光永久夫氏聞き取り、2004年7月29日実施、於：光永久夫宅。

33 稲城赴任当時の光永の体験については光永久夫「連載 私の新任時代」、<児童心理>第45巻第1号、金子書房参照。

第3章 「ゴードン・W・プランゲ文庫」にみる戦後直後期の三多摩における青年の学習・文化活動

本章の課題は戦後直後期の状況下において、三多摩の社会教育実践がどのような状況にあったかを明らかにすることである。戦後直後期はいかなる時代であったか、端的に述べると抑圧からの解放とそれに伴う学習・文化活動への渴望が高まった時代であった。青年団の活動の活性化や文化サークルの結成など、青年は様々な学習・文化活動に取り組んだ。その一つとして数えられるのが、ここで対象とする出版物などを通じた著作活動である。これらは青年が直接、筆を執ったものであり、出版メディアを通じ青年達は来るべき時代への希望などの意見を表明していたと推察される。

そこで本章では、戦後社会教育の草創期にあたる戦後直後期(1945年から1950年頃)の青年による出版物の発行状況の概要を行った上で、青年の学習・文化活動の実態を把握しながら、活動の中で当時の青年がどのように意見表明をしていたか実証的に示していきたい。

具体的には戦後直後の占領期における膨大な資料コレクションである「ゴードン・W・プランゲ文庫」(以下、プランゲ文庫と表記する)に収載されていた三多摩における青年によって書き記された雑誌の文献サーベイから、活動の実態を明らかにしようと試みるものである。

プランゲ文庫は1945年～1949年に連合軍総司令部により検閲、保管されゴードン・プランゲによりメリーランド大学に寄贈された出版物コレクションの総称である。連合軍によりあらゆるものが検閲されていた性格上、雑誌コレクションの内容は多様で、学術、風俗、教育など、あらゆる分野の市販の一般誌、全国各地の青年団雑誌、労働機関誌、短歌、俳句の同人誌なども収載、所蔵タイトルは1万3000に上り、大半は日本国内には現存していない貴重な資料群である¹。

プランゲ文庫収載の資料の有用性に注目することの意義は2点ある。第一の意義は、プランゲ文庫そのものの資料的価値の存在である。プランゲ文庫は、この時期における膨大な資料を散逸なく納められているため、多くの自主製作のメディア文化が花開いたこの時期の三多摩の出版文化の状況を解明することができると予想される。未出資料が多く含まれるプランゲ文庫ではあるが、本文庫の膨大さと資料入手の難しさにより、三多摩研究の中で取り上げられることは、これまで少なかった²。

第二の意義は、「新日本建設」「文化国家建設」に青年が向かっていた時期の青年の姿を、青年によって書かれた、極めてローカル性の高いメディアから直接、青年の気概をみることができることである。

本章では次の構成により論じていく。第1節においては、プランゲ文庫の概要と特徴について、先行研究や所蔵資料の分類などを確認する。第2節ではプランゲ文庫の所蔵資料のうち三多摩に関する史料の一部を取り上げその記された内容を読むことにより、戦後直後期の三多摩における青年の学習・文化活動の実態の一側面を実証的に解明する。

第1節 プランゲ文庫の概要

(1) プランゲ文庫の特徴

プランゲ文庫の特徴はその史料数にある。膨大な量の雑誌が検閲されていたことを示すかのごとく、プランゲ文庫の雑誌コレクションのマイクロフィッシュは、タイトル数 13,787、マイクロフィッシュ数 63,131、推定ページ数 610 万にものぼる史料が収められている。さらに、同文庫所蔵の新聞コレクションでも 18,047 タイトル、3,826 リール、推定紙面 170 万ページ、推定記事数 2,600 万を数えており、この史料群の大きさを伺える³。

プランゲ文庫収載の資料は、メディア研究者で日本のプランゲ文庫研究の先駆者である山本武利によれば、次のように説明されている。

「連合国軍による日本占領の時代、とくに 1945 年から 49 年にかけて発行されたすべての出版物(書籍、雑誌、新聞、パンフレットや手紙、葉書の通信物、さらには電話までが連合国軍総司令部(GHG/SCAP)によって厳しい検閲下におかれていた(中略)検閲制度の終了とともに、CCD で保管されていたこれらの検閲済み出版物は、CCD に勤めていたゴードン・プランゲ博士の尽力で、米国のメリーランド大学に寄贈された。このコレクションはプランゲ文庫と名付けられ、同大学図書館に保管されている⁴」。

この説明に示されているように、手紙やはがきに至るまで検閲されていたためにまさにあらゆる出版物が収められていることに特徴がある。なおかつこのことから、通常であれば保存されなかったような、配布先が限定されていたような出版物(小規模サークルの機関誌)まで収められていることも特徴に数えることができよう。

これらのコレクションは、メリーランド大学と国立国会図書館が協力してマイクロ化、さらに占領期メディア データベース化 プロジェクト委員会(代表・山本武利)によって

データベース化(「占領期新聞・雑誌記事情報データベース」)がなされており、現在では概要を把握しやすくなっている。

プランゲ文庫に関しては、内容面からもいくつかの特徴を指摘することができよう。第一の特徴は、記事タイトルで1万3000点タイトルを超え、多岐にわたる記事が含まれていることにある。第二の特徴は、その収録されているジャンルの幅の広さにある。プランゲ文庫には、学術、文芸、風俗、教育などあらゆる分野に関する当時の出版物が網羅されている。このようなジャンルを問わない膨大な史料群は他にみることはできない。さらに、第三の特徴にはプランゲ文庫に収められた史料内容の希少性を挙げられる。山本武利はプランゲ文庫の希少性を次のように述べている。

「プランゲ文庫の雑誌タイトルの二割くらいしか国立国会図書館は持っていない。とくに指南されていなかった雑誌に貴重なものが多い。地方紙、小新聞には全国どこにも観られないものが多数所蔵されている⁵⁾」。

プランゲ文庫は当時全国にあったさまざまな史料がおさめられていること、さらに小規模サークルなどによる個人規模による出版物が多数含まれていることを確認することができた。中でも、小規模のメディアが多く入っているため、草の根の人々が記した直接の声を読むことができる点は特筆すべきと思われる。

(2) プランゲ文庫における所蔵史料の分野の広さと学習・文化活動との関わり

次に、プランゲ文庫に収められている史料の分野を確認し、ここから学習・文化活動との関わりを見出したい。ここで取り上げるのは、山本武利らによるプランゲ文庫に関する研究である。山本らによる「占領期新聞・雑誌記事情報データベース」の研究は、プランゲ文庫の概要を明らかにしており、プランゲ文庫を知るにあたり基礎研究となるものである。このデータベースではプランゲ文庫に所蔵されている資料について、タイトル、発行年、発行箇所、雑誌タイトルや記事タイトルをデータベース化したものであり、この記事レコード数からは全体傾向を読み取ることができよう。2004(平成16)年度からのレコード投入数及び2006(平成18)年の公表時の雑誌タイトル数、記事レコード数⁶⁾を見ると、タイトル数2000を数える小冊子の記事レコード数311,678件ある。全体1,964,933件のうち15%強の割合を示していることがわかる。なお上記の記事の中、教育に関するものは独立したカテゴリである「教育」以外にも各分類の中にも含まれておりジャンル分類だけで学習・文化活動を把握することは難しいと思われる。

そこで、青年の学習・文化活動に関連する分野にどのようなものがあるかをみるため、日本史研究者である北河賢三による研究における分類を参照する⁷。これは地域文化運動における出版物に関して述べられている研究であり、北河は戦後地域文化運動下における出版状況に対して、本資料における雑誌コレクションの目録索引から関連する分類を抽出し、その点数を明らかにしている(表 13)。以下に引用する(便宜上ここではプランゲ文庫における分類記号を付与し、引用した)。

表 13 北河賢三による戦後地域文化運動下における出版状況分類一覧

分類記号	分類名	点数
ZK24	文芸誌(文芸一般、随筆)	879
ZK26	俳句誌	497
ZW05	読物誌(週刊読物誌、講談、推理小説、風俗)」	504
ZK08	音楽・舞踊・演劇・映画	255
ZK14	スポーツ	133
ZK13	趣味・娯楽(つり、狩猟、茶華道、ゲーム、切手、ペットなど)	84
ZG07	地方史・誌(地域総合誌)	463
ZZ50	地域活動、自治体、公共機関、公民館	132
ZZ51	青年団、青年会	637
ZW07	青年誌	52
ZZ65	芸術、芸能、スポーツ	156
ZZ81	文化、教養、勉強会、読書会、同好会	187
ZZ82	生活、趣味、仲介、親睦、ト占、その他	152
ZZ20	社内報、部内資料、職場・職域雑誌、勤労	509
ZZ25	労働組合、職員組合、授業員組合、教職員組合	976
ZZ26+ ZZ27	全逓信+国鉄労組	307

(北河賢三『戦後の出発』青木書店、2000年より作成)

北河は戦後地域文化運動下の出版状況に関して、上記分類のうち地域誌・地域文化誌、青年団・青年誌及び職場・組合文化誌の三者を文化運動と関連の大きい三つのグループであると分析している⁸。なお分類番号の始め二桁 ZZ は「各種小冊子、機関誌、同人誌、個人誌」のものであるが、ここで挙げられている点数 5923 のうち、3056 点の数にも上っていることがこの表から読める。以上により、学習・文化活動に関連する分野の出版活動の中でも小冊子の占める位置が大きかったことを確認できた。

第2節 プランゲ文庫の小冊子を通してみた三多摩における青年の学習・文化活動

(1) 先行研究の到達点と課題

三多摩におけるプランゲ文庫を用いた研究は途上の状況であり、蓄積は必ずしも十分ではない。その中で、新井勝紘『『プランゲ文庫』公開と多摩地域文化運動の課題』（＜隣人＞19号、草志会、2005年）は、初めて三多摩研究におけるプランゲ文庫の重要性に言及した礎石となる研究である。新井は、三多摩の戦後直後期研究におけるプランゲ文庫の重要度を指摘しており、プランゲ文庫を含めさまざまな資料の分析の積み重ねで戦後三多摩の地域文化運動に関する総体の把握の可能性を有していることを論じている⁹。一方で、新井研究においてプランゲ文庫そのものの入手が困難であったことの影響が指摘されているように、プランゲ文庫における文献の内容分析がこれまで課題とされていた。

他にも、三多摩におけるプランゲ文庫に関する研究の課題としては、未だ研究の絶対数が不足していることも挙げることができよう。以上をふまえここでは、プランゲ文庫に収載されている文献資料の中で、特に点数の多い小冊子に関する史料を取り上げながら分析を行う。

なお、戦後直後期は非常に多数の出版活動が行われており、あくまでもプランゲ文庫はそれらの多くの出版物の一部であることは留意しておかねばならない点と思われる。

(2) 青年団による学習・文化活動にみる青年の熱気

戦後直後期の青年団の概要に言及しておきたい。戦前の青少年に関する社会教育団体に関しては、1941年に大日本青少年団を結成することでより戦争協力団体としての性格を色濃く有したものになっていたが、大日本青少年団は1945年6月には学徒隊へと変わり、終戦を迎え解散になった。このことから戦中期の青年団は戦争協力が色濃い団体であり、

学習・文化活動を行うとの性格は相当に弱まったものであったように思われる。

しかしながら、そのような状況は戦後に入り大きく転換することとなる。それを示すものの一つに文部省より出された「新日本建設ノ教育方針(昭和二十年九月十五日)」である。中でも青年団体に関する二つの項目、「七 社会教育¹⁰」及び「八 青少年団体¹¹」を取り上げる。

「七 社会教育」には戦後直後の学習・文化活動の方針が色濃く顕れているが、特に出版も含め、国民文化の隆盛を意識したものであったことは目を引く。新日本建設の根底の一つに教養の向上が意識されていることが方針に定められているなど、社会教育に関しても、戦中からパラダイムの転換がなされていることが顕れている。さらに「八 青少年団体」では青少年団体に期待される役割の変化も明確に示されていることがわかる。新青少年団体は、中央の統制に置くものではなく、郷土に基盤をおいたものが期待され、これにより青少年の自発や共励切磋がうたわれていた。こうした方向性に加え、文部省の次官通牒「青少年団体ノ設置並ニ育成ニ関スル件」が1945年9月25日に出され青年団などの青年団体の方針が明確化されている。この頃の戦後青年団の特色に関しては、日本青年団協議会が「新生青年団最大の特色は青年のみで構成し、役員も青年の中から選出したという点だった。青年団は、戦争、そして敗戦という大きな犠牲の代償として、大人たちの支配から脱し、青年団本来の姿に立ち戻ることができたのである。男女合同の組織が多かったことも、特徴といえる¹²」という点を示している。

すなわち、青年の自主性が重んじられた団体の形をとるようになっていたことが特色であり、「青年団本来の姿」にもどっているというわけである。このような背景の中全国各地に地域の青年団が誕生していた。

プランゲ文庫にもこのような青年団体の息吹が残る史料が収められている。ここでは三多摩の中ではただ一つ収載されている青年団報である、立川市曙町青年団第二分団文化部編<団報>2巻6号(1948年4月)を引きながら、当時の青年の学習・文化活動への意欲を読み取りたい。

北多摩の立川市曙町の地理に関して補足をすると、立川は北多摩郡に位置するが曙町は現在の立川駅に近い地域である。本項にて取り上げる<団報>からも、都市部の団であることが推察される箇所が散見される。曙町青年団第二分団発行の青年団報、<団報>は1948年4月発行である。本誌の奥付に「団報も生まれて早一年を経過致しました」とあり、少なくとも1947年にはこの分団の活動が開始されていたものと考えられる。団報の目次を

みることで概要の把握をする¹³。

〈団報〉の内容は、団の創立に関する挨拶、分団設立の目的、海外の話、詩やコントなどの創作、団の各部の活動紹介などにより構成されている。構成自体はこの時期の団報に多くあるような総合的雑誌であるが、作品の形態の豊富さなど青年の学習・文化活動への熱意をよみとることができる。そこで数点を取り上げその実像をみたい。

団の性格は以下にある目的から推察することができる。

第二分団の目的「第二分団□団員□和の下、活発なる意見の交換と、切磋琢磨とにより、再建日本への各自の反省努力を期し、健全ある思想と、豊富なる教養を身につけ、良識ある文化人として郷土愛に燃えつゝ若い情熱を以て民主日本の建設に邁進するを以て目的とす¹⁴」。

郷土愛に燃えつつ若い情熱をもって、と書かれた表現からも団活動における青年の思いが示されている。活発なる意見の交換や切磋琢磨といった相互の学び合いがその方法に挙げられていることから、団における青年同士の学びの姿が浮かび上がる。

さらに、この団の四つの各部の主な活動内容と補足からは活動のより具体的な内容を見ることができる¹⁵。そこには、団報の発行などを行う文化部や、生活改善に関する社会部、スポーツ・レクリエーションに関する体育部、連絡・会計の業務を行う総務部などが規定されている。ここから、この青年団の活動は地域活動やスポーツ・レクリエーション活動などを行う性質の団体であることがわかる。

青年たちがどのような思いをもちながら活動を行っていたかをうかがい知ることができる作品に「理想」と題された提言がある。これは読者に向けてこれからの青年のありかたに関して訴えたものであり、当時の青年自信の率直な思いを読み取ることができるため、以下にその一部を抜粋し示す。

「新しい国是として民主主義、平和国家、再建の目標が確立されてある。この重大な任務を担当するものは実に我々青年なのです。それには健全な思想と豊富なる教養を身につけ、良識ある文化人として日本発展に、広くは世界に貢献することです¹⁶」。

青年が新しい任務を担う存在であるのだという言葉が示されているところにも、意欲に沸き立つ青年の意志をみることができる。こうした青年団の新時代へ向けての意欲はこの立川の青年団報に限らず、様々な青年団で表明されていた。例えば、三多摩南多摩の稲城村の青年団団報の〈稲城〉第三号をみると、「現在民間貿易も再開された。世界各國の文化

を取り寄せ、新文化國家として立ち上るに。最も、喜ばしい絶好のチャンスでわなないか。我々青年は、日本建設とともに、世界各國に大使、日本の美点と、信用を特に高めなければならぬ¹⁷⁾と、文化国家としての希望を述べている。

さらに伊豆諸島神津島の神津青年団の団報〈郷土〉でも、「青年の力を發揮するのに今を□いて又何時の日があるう 若き情熱のありたけをかたむけつくして吾が愛する郷土の再建に諸君奮起しようではないか。¹⁸⁾」と述べられるなど、こうした文化に着目し、青年の意欲は様々な地域でみられていたものであった。

立川市曙町青年団第二分団の具体的活動の項目は目次にも掲載されていたが、より具体的な内容は立川市曙町青年団第二分団〈団報〉の「各部乃紹介」に書かれている¹⁹⁾。総務部では組織について書かれており、分団長を一名、副分団長二名、総務二名、体育三名、社会三名、文化に五名の担当が割り当てられていることがわかる。体育部では、ハイキングの実施や富士山旅行の実施予定、文化部ではレコードコンサートの実施や雑誌〈青年〉の回覧、社会部では街燈の補修工事などが行われていたようである。さらに、本団では役員として、団長、副団長、文化、社会、体育、総務に各一名の役員が置かれており、第三、第四、第五分団の存在も確認できた。

これからの文化を取り入れたいとの思いをみるにあたり、興味をひくのは巻末に掲載されている「新常用語外来語辞典」である。この記事では、五十音順で外来語を解説したものであり、この6号ではア、イ、ウの三音が掲載されており、例えばアでは「アーティスト 芸術家」、「アイディア 理想 観念 心象」などが、イでは「インターナショナル 国際的の 国際労働組合」、「インテリゲンチヤ (露)知識階級(累語インテリ)」などとの形で外来語とその解説が加えられているものである²⁰⁾。

以上みてきたように、直接的に理想を訴えかけるだけでなく創作作品や実用記事なども含めて全般的に学習・文化活動に取り組む青年の熱意を見出すことができる。まさに、編集後記に「すでに世は春です。自由の春、待望の春、活動の春です。此のとき起たずして何ぞ我等が若さを發揮する時があらうか²¹⁾」との言葉に示されているように、青年団活動に望む青年の熱意が顕れている。

(3) 学校内での青年の学習・文化活動

次に、戦後直後期の学校の校友会誌をみる。学校に関する史料は、前述の通りプランゲ文庫の小冊子の中で1/3を越え、最も多数を占めるカテゴリであり、この雑誌は青年の活

動を知る中でも重要なものの一つと数えられるものである。

ここでは上記の青年団〈団報〉と同じ立川市にある、立川第一中学校の校友会誌である〈校友〉創刊号(立川市立立川第一中学校校友会、1948年3月)を取り上げ、内容を確認してみたい。

校友会誌の本文にあたる前に立川第一中学校の背景に関して論じる。ここで改めて述べるまでもなく、この時期はまさに学校教育も大きな転換期を迎えた時期である。特に1947年4月に発足した新制中学校により、教育機会均等や多くの公立校の共学化など、中等教育に変化がもたらされた。本項で取り上げる立川第一中学校の設立は1947年4月1日である。まさに新学制に伴って設立された新しい形の公立中学校であり、戦後生まれた典型的な公立学校である。

立川第一中学校の中学校校友会は、中学校の職員と生徒によって成り立っている組織であり、1947年6月16日に創立されている。ちょうど学校設立と同時期にあたり、1948年3月に発行された交友会誌の創刊号はこの時期の息吹をみることができる。交友会の活動の理念は、「發刊に際して」と題された巻頭言にもあらわれている²²。そこでは学校の開校に際する賑やかな様子なども含めて、会の役割が示されている。学校設立とほぼ同時に設立した交友会は、巻頭言でも学校と表裏一体の存在であると規定されている。しかしながら、生徒の自発的活動、道義や情操の涵養により自活の訓練のためになるようにとしたような文面からみえるように、学校教育の補完としての存在であった。

次に校友会の規約である「立川市立第一中學校校友會規約²³」を取り上げるが、ここには会の目的や組織体制が示されている。目的には自主的活動を基本にしながらも、持っている力を伸ばすことや、会員の親睦などが掲げられている。

「校友會」は学校の課外活動などをサポートする組織のようなものであったと推測できる。それでは、〈校友〉の具体的な内容を見ることで、青年の思いに迫ろう。この雑誌の主な内容を列記すると、巻頭言の他、教員からのメッセージ文、生徒の作文や詩歌俳句、文芸創作、各部の報告、教務日誌などである。学校報であるため実験記録や英作文など学科の勉強に関する記事もあり、校内の教員、生徒の様々な取り組みや学校の活動報告の年表などが掲載されているなど、学校での活動の様子を知ることができる。

一方で創作物や、文化系・体育系を問わず日常の活動報告がなされているなど当時の在校生の学習・文化活動の取り組みもある。それらのうちここでは、物象部(天文・気象班、ラジオ班、化学班に分かれている文化系活動の部)の活動報告の中の一節を以下に取り上げ

る²⁴。

活動報告の中では、自然に関する研究を例に科学的な視点や取り組み方の重要性に関して説いた文章である。科学を重んじることを、「文化向上」との視点からとらえており、これから来るべき新しい時代における取り組む姿勢を見出すことができた。

本項ではプランゲ文庫に収載されている三多摩に関する史料のうち、ある中学校の学校誌をとりあげ学校における青年の学習・文化活動に取り組む考え方の一例をみた。ここで取り上げた例では、青年団のみならず、学校でも学習・文化活動に前向きになっている青年がおり、これからの時代において青年は科学の視点をもつべきとした考え方が表明されていた。

(4) 労働組合での学習・文化活動

次に、労働組合など企業での学習・文化活動の事例を取り上げる。プランゲ文庫に収載された労働組合関係の出版物は多岐に渡っているが、それらのうち、教育活動に関連している、教員による活動をとりあげたい。こことりあげるのは、福生町(現福生市)の西教組文化部文学サークルによる創作文芸雑誌、〈流域〉(1948年12月)である。活字ではなく、50ページ強の分量、奥付には定価が60円との記載がある。主な内容には、評論、随筆、小説、短歌・俳句、詩などで構成されており、文学サークルの作品発表の場であったと推測できる。

マイクロフィルムの原稿が劣化しているため、巻末にあるサークルの会員名簿はほとんど読み取ることができないが、サークル名簿の掲載者数はおおよそ60名程、辛うじて読み取れた、メンバーの所属の学校では、吉野小、霞小、五日市小、福生中、五日市中、などの名前を掲載されていることが確認できることから、福生や周辺の西多摩地域の小・中学校教員による会であったと考えられる。さらに、本文中には、西多摩の教育活動の中心的な役割を果たした一人である、今井誉次郎の著作もみることができる²⁵。

内容は創作発表のものが中心であるために、会の組織や会の活動内容などは、ここでは明確に読み取ることができないが、編集後記には次のような一節があり、若干の活動内容がみられる。

「九月臨時総会が青梅で持たれた折、いち早く我が文学サークルはその活動を開始し、四十余名の多数の方の入会を得て、研究会・座談会等々を開いて来ました。傍ら、雑誌発行を計画し、漸く其の創刊号をお届け出来る事になりました。²⁶」

例えば、雑誌発行以前からすでに研究会や座談会の活動を行っていることなどが記されており、会誌活動以外にも活動が行われていたことがわかる。さらに、どのような考え方でこのグループは活動に取り組んでいたかも編集後記に記されている²⁷。

自由を享受できるようになった当時において、どのようにそれを活かすべきかが述べられている。すなわち、作品の上手い下手を意識するのではなく、むしろ自らを隠さずさらけ出し、お互いを知ることを重んじるべきであるという。ここには、自由に学習・文化活動ができるようになった中で、どのように活動すべきであるかという指針が説かれているが、まさに新しい時代が到来するにあたってのあり方が真剣に考えられていたようにみえる。

(5) サークルにおける学習・文化活動

続いて、戦後直後期の学習・文化活動の例に地域サークルの文芸誌を取り上げる。社会教育団体、学校教育、労働組合における例を取り上げてきたが、サークルは既存組織を軸にしたつながりとは異なる、地域での趣味などを通じた学習・文化活動である。ここでは二つの文芸誌、青梅町の奥多摩文化会によって発行された雑誌<多摩川>1巻1号(奥多摩文化会編、1946年3月)、及び<多摩川>4月号(奥多摩文化会編、1946年4月)をみながら、青年団や学校以外での学習・文化活動の内容に関して論じる。

なお、具体的な活動を論じる前に、本史料の重要性に関して、戦後直後期の奥多摩文化会の状況に関する『青梅市教育史』の記載にも触れておきたい。『青梅市教育史』では『奥多摩文化会』の実態は不明であるとされていた²⁸。ここにあるようにこれまで奥多摩分科会は従来活動が明らかにされていなかった団体であった。プランゲ文庫の史料の持つ今後の研究の可能性を示す例といえよう。

それでは、奥多摩文化会の活動の詳細を具体的な本文の記載からみる。第一号は活版、18ページの雑誌で、定価は1部1円50銭、送料は10銭となっている。内容は巻頭言、青梅について、随筆、演劇台本、詩、短歌、小説、会則となっていた。

会の趣旨については、「創刊について」と題された巻頭言にみることができる²⁹。この文にはこれからの時代に向かっの執筆者の熱意が伝わって来る。特に「新しき日本」、さらには平和的文化国家建設のようなまさに戦後直後期に各地で見られた言葉がみられる点からもただ文芸活動に取り組んでいたのではなく、このような文化活動を行うは新しい日本を作ることに通じるとの考えを持ちつつ、実践を行っていたことが読み取れる。

さらに文芸誌<多摩川>においては、地域にこだわった考え方も示されている。それが都市集中でなく、地方文化の興隆という方向性からの活動の発展を目指していたことである。すなわちこの新しい時代を迎えるにあたって、地方が文化を作るのであるとする考え方がもたれていた。このような地方の重視に関しては、「編集後記」においても収録された作品について、「總て郷土に根を下した作品であるのは喜ばしい限りである³⁰」と評されていることから読み取る事ができる。

次に、「会則」について取り上げ、組織体制などを確認する³¹。「奥多摩文化會會則」にあるように「会則」からは、活動の概要や組織をみることができる。これをみる限り、ある程度以上の規模の団体であったことが伺える。さらに、このような組織の大きさを感じる箇所は他にもあり、例えば<多摩川>4月号の「幹事決定」の記事によると、第2回総会で決まった幹事として、庶務、貸本、会計、会誌、短歌、演劇、絵画、英語、音楽に各1名、地域連絡員に7名が決定されていることから推察できる³²。地域連絡員は奥多摩のみではないため、関連する地域もある程度拡がりがあった可能性もある。

なお、上記で挙げた部ごとの活動のうち絵画部に関しては、日展鑑賞会を3月10日(第2日曜日)午前8時に開催するとした募集記事や³³、同じく3月10日午後1時半に青梅町本町会館にて、第1回総会を開催する募集記事などが掲載されており、活動内容の一端を知ることができる。鑑賞会の開催や、総会の開催などはある程度しっかりしたフォーマルな活動であったことも考えられる。

<多摩川>は、この会誌活動の一環であると思われるが、他にもプランゲ文庫には、<児童文化>(1号1946年6月発行)という奥多摩文化会によって発行された雑誌が収録されている。学校教員などによる、「教育者諸賢の機関誌」(<児童文化>1号編集後記)という位置づけのようである。<児童文化>創刊号の内容は小学校教員による教育評論や、児童の作文などになっている。奥多摩文化会は、これらの多様な活動により、多方面から地域の文化活動に関わりを持っていたものとみることができる。

奥多摩文化会のこの時期の文化運動に関する考え方は、雑誌<児童文化>の発行権編集人であった吉田定一による「地方文化運動に就いて」と題された文からもみることができる³⁴。

「地方文化運動に就いて」から読み取れる考え方のうち、特に二点、目を引く事柄がある。第一は、地方文化がこれから発展すると確信した中で活動に関わっていたことが背景としてあったことである。戦後の出発の時期にあたるこの時期からすでに新しい時代には

地方が重要であると認識されていた。戦後の新たな出発の時期に社会教育の中でこのような考え方が存在していたことは、戦後社会教育の出発点を考えるうえで意識しておく必要がある。さらに第二点として、このような担い手は教育者であるべきとするとの考え方があったことも重要であろう。以上からうかがえるのは、地域での学習・文化活動において、人々が新しい時代の文化の担い手となることへの期待がもたれていたことが見受けられる点である。

小結

本章では、プランゲ文庫における出版物のうち、三多摩発行に関する冊子を対象として当時の学習・文化活動における考え方などをみた。プランゲ文庫は膨大な史料が収められているが故に、これまでは知りえなかった当時の考え方などを読み取ることができる可能性を有していると仮定した。そのためプランゲ文庫で知ることのできる青年の言葉から、戦後直後期の学習・文化活動における青年の考え方を知ることを試みてきた。

第1節ではプランゲ文庫の大要の把握につとめ、特に概要と収録誌の分野に着目した。そこでは、プランゲ文庫には相当数の資料が収載されており、青年の学習・文化活動に関連する史料が一定以上収められていたことが認められた。

第2節ではプランゲ文庫に収められた史料の本文を取り上げながら、当時の活動に関わる人々の思いを読み取ることに努めた。取り上げた対象は青年団、学校、労働組合、地域でのサークル活動であった。出版物から、それぞれにおける学習・文化活動の概要及びそこにおける考え方をみたが、いずれも敗戦を経験した直後ではあったがこれからの国を文化によって創り出していこうという強い思いは総じて共通していた。

さらに青年が関わっていた活動のうちいくつかを形態別に取り上げた。それは、戦中と異なり文化に期待を持ちながら活動が行われていた青年団、新しい学校での教育に対する考え方や科学を意識した生徒活動への取り組み、労働組合での作品の巧拙を意識しない創作活動、地域サークルでの地方の重視などである。本章でみてきた事例からは、いずれも戦後初期の時代背景の中、青年たちが希望を抱きつつ活動に取り組んでいることが伺えた。戦後の出発点における豊富な実践を生み出した背景には、青年たちの期待があった。

第3部 第3章 注

¹ 山本武利「占領期雑誌目録データベースの作成—プランゲ文庫の活用を旨として」、20世紀メディア研究所編<Intelligence>1巻、20世紀メディア研究所、2002年3月、p.6。

2 新井勝紘『「プランゲ文庫」公開と多摩地域文化運動の課題』、＜隣人＞19号、草志会、2005年。

3 「プランゲ文庫とそのマイクロ化」<http://20thdb.jp/outline>、「20世紀メディア情報データベース」、NPO法人インテリジェンス研究所 2017年11月29日閲覧。

4 前掲「占領期雑誌目次データベースの作成—プランゲ文庫の活用をめぐって」、p.6。

5 山本武利「占領下のメディア検閲とプランゲ文庫」、＜文学＞第4巻第5号、岩波書店、2003年9月、p.8。

6 「データベースの作成・雑誌(第一期)」<http://20thdb.jp/outline> 2017年11月29日閲覧。ジャンル毎に主に以下の点数が収載されている。

雑誌ジャンル(タイトル数)—記事レコード数

政治・法律・行政(408)//経済(600)//社会・労働(371)—320,550

教育(359)—47,417

芸術・言語・文学(3,163)—454,625

歴史・地理(512)//哲学・宗教(230)—120,705

科学技術(1,724)—360,293

書誌・図書館学(115)//一般誌(971)//一般学術誌(19)//児童誌(508)—349,665

小冊子(2,000)—311,678

合計 1,964,933

7 北川賢三『戦後の戦後の出発 文化運動・青年団・戦争未亡人』青木書店、2000年、pp.18-24。

8 同前、p.20。

9 前掲『「プランゲ文庫」公開と多摩地域文化運動の課題』、p.48。

10 「新日本建設ノ教育方針（昭和二十年九月十五日）」。

七 社会教育

「国民道義ノ昂揚ト国民教養ノ向上ハ新日本建設ノ根底ヲナスモノデアルノデ成人教育、勤労者教育、家庭教育、図書館、博物館等社会教育ノ全般ニ亘リ之ガ振作ヲ図ルト共ニ美術、音楽、映画、演劇、出版等国民文化ノ興隆ニ付具体案ヲ計画中デアルガ差当り最近ノ機会ニ於テ美術展覧会等ヲ盛ニ開催シタキ意嚮デアル

11 「新日本建設ノ教育方針（昭和二十年九月十五日）」。

八 青少年団体

「学徒隊ノ解散ニ伴ヒ青少年ノ共励組織ヲ欠クニ到ツクノデ新ニ青少年団体ヲ育成スルコトトシタ、新青少年団体ハ従来ノ如キ強権ニ依ル中央ノ統制ニ基ク団体クラシメズ原則トシテ郷土ヲ中心トスル青少年ノ自発能動、共励切磋ノ団体タラシムルモノデアツテ曩ニ学徒隊ノ結成ニ伴ヒ解散セル大日本青少年団ノ如キモノヲ復活スルノデハナイ

12 『地域青年運動 50年史一つのつながりの再生と創造—』日本青年団協議会、2001年、pp.4-5。

13 「目次」立川市曙町青年団第二分団文化部編＜団報＞2巻6号、1948年4月。「目次」の全体は以下のとおりである。

ご挨拶

第二分団の目的

理想

友情

結婚十戒

ひとゝき

詩 葦に歌ふ お便り 君を知りて プラットホーム

コント

各部の動き 総務部 文化部 体育部 社会部

- 14 「第二分団の目的」、立川市曙町青年団第二分団文化部編<団報>2巻6号、1948年4月、p.1。□は判別不能の文字。
- 15 「第二分団の目的」、前掲<団報>2巻6号。以下の活動内容が示されている。
- ①文化—A 団誌の発行(三ヶ月に一度)、B 分団ニュース(毎月一回発行)、C 新誌の回読、D 娯楽施設の完成、E その他
- ②社会—A 町内街燈維持、B 少年の不良化防止、C—その他許す範囲に於て事業す
- ③体育—A 野球チーム結成、B 卓球、C 季節に依る郊外ハイキング、D その他
- ④総務—A 回覧板その他に依る凡ゆる部面の連絡、B 会計
- ⑤本団聯団の事業に対しては許す範囲にて協力する。
- 16 阿部芳雄「理想」、前掲<団報>2巻6号。
- 17 加藤嘉重「社會と青年」、<稲城>第三号、稲城村青年団文化部、年月日不明(1947年11月頃と推測される)、p.3。
- 18 <郷土>11月号、第16巻、東京都神津青年団、1946年11月。
- 19 「各部乃紹介」、前掲<団報>2巻6号。
- 20 「新常用外来語辞典」、前掲<団報>2巻6号。
- 21 「編集後記」、前掲<団報>2巻6号。
- 22 伊東藤治「發刊に際して」、<校友>創刊号、立川市立立川第一中学校校友会、1948年3月、p.1。巻頭言では以下のように記されている。
- 「昭和二十二年三月三十一日、新學制公布と共に新しい使命を帯びて本校は誕生した。ついで六月十六日職員制と拍手のうちに、柴崎の講堂で校友会が創立せられた。校友会は學校と表裏一體となつて、學校教育の補充的機能を發揮し、以て校風の振作を圖るのが目的である。而して此の目的を達成するには、生徒の自發的活動を活かして創意工夫の力を啓培し道義並に情操の涵養に努めて、自活の訓練に資する様に運営せられなければならない」。
- 23 「立川市立第一中學校校友会規約」、<校友>創刊号、同前、pp.27-28。以下にこの一部を抜粋し示す。
- 「立川市立第一中學校校友会規約」(一部)
- 第一條(名稱)本會は立川市立立川第一中學校校友會と稱する
- 第二條(會員)本會は立川市立立川第一中學校職員及び生徒を以て會員とする
- 第三條(目的)本會は生徒の自主的活動を基調としてその性能を十分に伸展させ併せて會員相互の親睦をはかり以て校風を振作するのを目的とする
- 第四條(組織)前條の目的を達成するために左の部を設ける
- 総務部 文藝部 演劇部 美術部 音楽部 生物部 物象部 野球部 卓球部 排球部 籠球部 水泳部 競技部
- 第五條(役員)本會に次の役員を置く
- 一、會長(當校校長)會の代表者で一切の會務を總括する
- 一、部長(職員中より委嘱)部の代表者で部務をみる
- 一、部理事(職員中より委嘱)部長を補佐し部務をみる
- 一、部委員(各部毎に若干名選出し委嘱する)部長及び部理事の下で部務を行い、任期は一カ年とする
- 24 「各部報告 物象部」、<校友>創刊号、同前、p.31。「各部報告 物象部」には 以下の一節が記されている。
- 「一つの製作に夜おそくまでかかつたり、どんなに眠くても、毎日觀測を続けたりするのは、目前の興味からだけでは出来ません。自然の現象を如何に科學的に見るか、又、地球していくかこれを正しく求めるか否かが問題なのです。このことがなかつたら、私たちは、

現在の水準を超えて一步も進むことは出来ないのです。

これは、私達物象班だけの問題でなく、文化向上を目指す者皆の問題だと思います。」

²⁵ 今井誉次郎「老婆」、＜流域＞西教組文化部文学サークル、1948年12月。

²⁶ 「編集後記」、＜流域＞同前、p.50。

²⁷ 同前。「編集後記」においては、活動に関する考え方を以下のように示されている。

「閉鎖された環境、或いは炉辺談義にいくら自由に語つたとて自由本来の偉力は発揮出来ない。しかし我々は語るに事柄、語る方法を知らない。お互いに何も言えない人間なら磨きあつて、言えるようになるのではないか！其の場所を提供したり念願が此の会生の主な要素である。上手下手など従つて問題ではなくなる事は勿論である。お互い、自分をさらけ出して自分を知り、他を知り、封建の残滓に凝り固まつている我々の内部からそれ等を摘出し合わなくてはならない。それは日本の民主化の先祖に立つべき教職の何よりも重大な義務である」。

²⁸ 青梅市教育史編さん会議編『青梅市教育史』青梅市教育委員会、1997年、pp.940-941。

では以下のように、『奥多摩文化会』の状況が示されている。

「戦後の文化団体について、始めて記録に現れてくるのは、昭和二十四年の『青梅町のしおり』の記述であろう。それには『この外、文化団体の主なるものは青梅町郷土史編纂会、奥多摩文化会等、町の講演を得て夫々の文化活動を行つて居り・・・』とあつて、たった二つの団体が書き上げられているだけで、しかも、『奥多摩文化会』なる団体が、どのようなものであり、また、どのような活動をしていたのか、不明である」。

なお、同書には、「しかし、現在の青梅市美術協会の清水保夫会長によれば、奥多摩文化会は、昭和二十一年に発足し、美術協会結成以前は、この会に所属して、「奥多摩美術展」を五回ほど開催した、という。美術協会の前身であったのか、いくつかの団体が加わつて奥多摩文化会を構成していたのかは不明である。」（『青梅市教育史』、p.941）の記述もされているが、詳細不明の活動であった。

²⁹ 「創刊について」＜多摩川＞1巻1号（奥多摩文化会編、1946年3月、p.1。巻頭言は以下のように書かれている。

「創刊について」

「戦時中郷土文化向上の目的で有志の者集り、青梅文学會を結成し、演劇、展覽會を催し、機関誌青梅文学發刊の運びとなつたが、當局より戦時下考慮されたしの命あり、又會員諸氏の出陣等の爲一時解散となつた。

そして一年半勝利を信じた日本は敗戦の不名誉な状態に陥没してしまつた。敗戦による苦悩と昏迷の中に一人二人と復員した有志は、文武官僚の統制によつて拘束された封建的文化を破碎し『新しき日本』平和的文化國家の再建に邁進した。多摩川の創刊はその第一歩である。

又従来日本の文化はあまりにも都市集中を示してきた。新しき文化の創造にあつては、地方文化の興隆をはからねばならぬ。そしてそれを世界水準にまで高めねばならない。

これこそ我々の責務であつて、益々諸賢の支援を御願ひする所以のものであると共に、文化奥多摩の理想を現出する礎石となることを信じて疑わぬ次第である」。

³⁰ 「編輯後記」、前掲＜多摩川＞1巻1号、p.18。

³¹ 「奥多摩文化會會則」、前掲＜多摩川＞1巻1号、p.17。以下のように規定されている。

「奥多摩文化會會則」

第一條 本會ハ奥多摩文化會ト呼稱シ事務所ヲ東京都内多摩郡青梅町青梅三二一番地根岸律男方ニ置ク

第二條 本會ハ三多摩ヲ中心トセル郷土文化の向上ヲ以テソノ目的トシ文化建設ニ熱意ヲ有スル會員ヲ以テ組織ス

(事業)

第三條 本會ハ第二條ノ目的ヲロセンガ爲左ノ事業ヲ行フ

一、生活力培養ニ関スル事項

一、教養和樂ニ関する事項

一、會誌ノ發刊

(會員)

第四條 本會ヘノ入會ハ特別ニ制限セズ、希望ニヨリ隨時入會シ得、入會金ハ別ニ徴収セズ毎月弐圓五拾錢也ヲ會費トシテ納入スベキモノトス

第五條 本會ハ會務ヲ處理センガタメ左ノ役員ヲ設ク

庶務會計 一名

會誌 一名

演劇 一名

講演 一名

繪畫 一名

地域連絡員 数名

第六條 本會ハ會務運営ノタメ通常月一回(第一日曜)役員會ヲ開催シ、末月(第四日曜)實地ノ事業ニツキ討議ス

³² <多摩川>4月号、1946年4月、p.29。

³³ 前掲<多摩川>1巻1号、p.3。日展鑑賞会の記事として、3月10日午前8時、青梅駅、最後尾車に乗車、弁当、多摩川(おそらくこの雑誌と推測される)持参のこと、と告知記事が掲載されている。

³⁴ 吉田定一「地方の文化運動について」、前掲<多摩川>4月号、pp.12-13。地方文化を守り立てる方法として、以下のように地域の教育との関わりから論じている。

「地方文化を今の状態において急速に向上推進するに如何なる人々が如何なるものをもつにするかを私の考をのぶれば、その地方の教育者が負荷することが最上ではないかと思ふ。専門、中等、国民学校に至るまでその地方の文化指導の中心となつて活動すべきである。

校舎内にとちこもり生徒の授業のみ終われずそのと木々を傾けて地方大衆の文化を推進するために挺身したならば地方文化の向上に急速に伸展すると思ふ。教室より家庭への直線コースが有り、又地方では教育者は特に尊敬されている點文化運動をやり易く効果的である。

例えば三年前青梅文學會で演劇を催した。その節國民學校の先生が三人演じた。この町としては大事件であつたに違ひない。芝居をやる人々は大抵道樂者の遊び位に考へてみた(勿論そんな人々が多かつた)それなのに先生が芝居をやる、驚きの聲と共に演劇の見かたも幾分違つて來たと思つた」。

第4部 戦後三多摩社会教育史における橋本義夫及び「ふだん記」に関する研究—「ふだん記」から「自分史」へ—

第1章 橋本義夫の社会教育実践の一側面に関する研究

本論文全体を通じた目的は近現代の三多摩において展開されてきた様々な学習・文化活動を対象に時代的狀況を踏まえながら社会教育史として実証的に考究し、社会教育実践である「自分史」のルーツを解き明かすことであった。そのため、第1部から第3部では、近代三多摩で展開されてきた多様な学習・文化活動を分析の対象にし、草の根の人々の実践から学びに向かう意欲がどのように紡がれてきたかをみてきた。これを受けて第4部では戦前、戦中、戦後の三多摩を生きた八王子の実践家である橋本義夫(はしもとよしお、1902-1985年)及び橋本が1960年代後半に創始した庶民が自由に文章を書き、出版をする運動である「ふだん記」(ふだんぎ)を対象にした研究を行う。「ふだん記」では主に、書き手の来歴を書くことが中心となっており、戦後の社会教育の重要な活動の一つであった「自分史」の原点とされる¹⁾。

橋本は、三多摩の南多摩西部に位置する八王子市域に位置する川口村(現八王子市)に生まれ、生涯を送った八王子において数多くの学習・文化活動を行った実践家である。

第1章では橋本義夫の来歴、思想、実践及び、橋本の創始した「ふだん記」の双方を、社会教育史の視点から論じその意義を明らかにすることを目的とする。

従来、社会教育の文脈においては、橋本を総体的にとりあげた研究が少なかった。橋本は、「ふだん記」以外にも多様な実践を行っており、大正期から戦前の昭和期、戦後期に至るまでの間に、例えば教育、学習文化活動、地域史研究など多くの活動に取り組んでいる。また橋本は、戦前、南多摩・町田に私立南多摩農村図書館を開くなど農村図書館発展に大きい貢献をもたらした浪江虔とも交流をもち²⁾、八王子の社会教育にも多面的に寄与してきたといえる。さらに、橋本は戦前から戦後にかけて地域に着目をした活動をしており、地域への影響も極めて大きい。そのため、橋本の多様な実践を、社会教育の視点から論じることで日本の社会教育実践の新たな一側面を明らかにできると考える。

本章の構成は以下である。第1節では橋本に関する先行研究のレビューから、橋本がどのような評価をされてきたかを社会教育との関わりから検証する。第2節では橋本に関する

る文献を紹介する、第3節では、橋本の生い立ち、事績を紹介しながら、橋本の活動を社会教育実践の視点から論じる。

橋本の多様な学習・文化活動や橋本の興した「ふだん記」を社会教育の視点から分析を行うことで、草の根で文章を綴り続けてきた、人々の学びに向かう意欲を解き明かし、戦後三多摩の社会教育史の新たな側面を明らかにする意義がある。



▲自転車で文友や印刷所を走る橋本義夫(梶国男撮影)



▲橋本義夫 80歳の写真

(いずれも橋本鋼二提供)

第1節 橋本に関する先行研究の到達点と課題

第1項 橋本の人物に関する先行研究

(1) 色川大吉の研究

はじめに、橋本の先行研究を整理し、その到達点と課題をまとめておきたい。

既に序論で述べた通り、「ふだん記」の実践や橋本研究の端緒を開いたのは、色川大吉である。色川は1974年に雑誌〈中央公論〉で「現代の常民—橋本義夫論」を論じている³。なお、色川論文ではあえて常民という言葉が使われていることを踏まえ、ここで柳田の常民論との違いについても確認しておきたい。色川は橋本の半生を通して、ものを書き、歴

史を紡ぐ新しい常民の姿を論じているが、こうした色川の常民論は柳田のいう常民と異なるものであるように思われる。では、色川研究の中で触れられた常民とはどのような存在であろうか。

色川は、柳田の常民をこう記している。「常民とは山人とは違って里人であり、通常は農耕や漁労に従事し、里に定住して漂泊などはしないもの。そして祖先から子孫にわたる『家』の永続を願い、その生命の連鎖と愛慕の好感とを喜びとして生きてきた。目に一丁字なくとも事の理を明らかに解し、判断力にとむが、文字をあやつって表現する能力はない。だが、民俗の内部生活の歴史を胸に保管し、それらを説話伝承として次代の人びとに伝える。また、それを改造することによって歴史を基底から動かす⁴⁾。ここでいう柳田の常民とは、在野に暮らし、文字ではなく説話伝承により次代に伝える存在であると考えられている。

一方で、色川が橋本義夫を対象に示した新しい常民像はそうではない。橋本を「常民を愛し、常民とたたかって、惨憺たる失敗と挫折を重ねた人⁵⁾」、さらに「かれは自分の生まれた土地の不毛性を呪いながら、終始そこに踏みとどまり、日本の民衆の愚かさと格闘していった現代の常民である⁶⁾」と評しながら、現代の常民の資質を描き出している。

色川大吉の述べた現代の常民は以下の5点に要約される⁷⁾。

- 一、情報化社会、民主社会に対応した自己主張、自己表現の可能な人間で無くてはならない。
- 二、柳田学が認めるように民族(民俗)の魂を”語り”によって伝承するものではなく、”文”によって後世に継承するものでなくてはならない。
- 三、常民としての平成への願いも、祖先崇拜や”家”永続の次元にとどまるものではなく、個が個の生命や地域を越えて、全体(国民—人類)に繋がる所に求められなくてはならない。
- 四、既成概念を破って、社会と自己のありのままの姿を、その真実を見分けてゆく力をもたねばならない。
- 五、新しい常民は歴史的な生活の智慧を活用しながらも、古い共同体観念の排他性、閉鎖性を乗り越えなければならぬ。

現代の、という意味では古い共同観念を乗り越えた存在としての意味はもとより、一の「自己主張、自己表現の可能な人間」や、二の「“文”によって後世に継承する」ところは本章のテーマに鑑み、特に注目したい。なぜなら情報化社会の中で自己主張、自己表現可

能な人間が、文章を綴り、文により伝承するという現代の常民像は、これからの社会教育実践の担い手の一つのモデルとして見出しうると考えたためである。

加えて、橋本と色川による直接の対話のなかで、橋本自身が「ふだん記」の原則を語っている。色川は、『橋本さんよ、あなたのやっている仕事は世界の第一線の人びとの実験と並んでいるようですよ』と。私が北米や西欧で見た若者たちは、新しい人間社会^{コミュニティー}を作ろうと次のような原理をかかげて実験していた。①われわれは競争をしない、②われらはいっさい差別をしない。③われらは閉鎖しない。④われらは人と人との関係の中心に金^{かね}を据えない。⑤われらは人間疎外を強いるいっさいのものとたたかう⁸』と問いかけている。これに対して、橋本は喜色を満面に浮かべながら以下のように答えたという。

「ふだんぎの原則と同じです。ふだんぎのグループは競争しない、差別をみとめない、新人に拍手する(新人優先)、年功序列をみとめない、劣等感をあたえない、あらゆる職業、身分の人と共に苦しむ。そういう要素を内包した文化を創りたいのです⁹」。

この橋本の言葉には、文章を綴り発信する人間が、支えあい協働で文化を創り出したいとする、橋本の思想遍歴や活動内容から生まれたグループ活動のあり方の一モデルが内包されている。全国に広がった橋本の「ふだん記」は、誰もを平等に重んじながら協働の支えあいがあったの活動であり、橋本の考え方を丹念に追うことは、社会教育における学習論を浮き彫りにすることを可能にする。

なお、色川大吉『ある昭和史 自分史の試み』(中央公論社、1975年)において、日本の言論界ではじめて「自分史」という概念を持ち出したことに関して、色川自身は色川大吉「自分史論」、(色川大吉『色川大吉著作集第三巻 常民文化論』筑摩書房、1996年)にて「ふだん記」運動の指導者橋本義夫を紹介し、「庶民の文章運動」の一つとしての「自分史」を流行させる発端になったと述懐する¹⁰。

色川はどのような人物であろうとも歴史を持っていること、さらに庶民のものは消えてしまうかもしれないが、それぞれの個人史は本人にとってかけがえの無いもので無限の思い出を秘めた喜怒哀楽の足跡としていた¹¹。さらに色川論文においては、橋本義夫は「自分史」運動の先覚者、実行者であったために¹²、「これから長く研究される人物になるであろう。彼の一生には拾っても拾っても尽きない光った形見が残った。彼こそ民衆の真の自立を熱望した警世家であり、民衆史掘り起こし運動、庶民の「自分史」運動の先覚者、実行者であったからである¹³」としている。

色川による橋本研究の意義は、(1)「ふだんぎ」の価値に着目したこと(その価値をさら

に高めたこと)、(2)橋本の半生を論じ、橋本自身が「ふだんぎ」にたどり着くまでの思想遍歴を明らかにしたこと、(3)橋本の地域での奮闘を通して新しい常民のありかたを論考したことにある。橋本の生涯におよぶ地域との格闘の中で、彼自身が幾度と無く希死念慮に陥りながらも立ち直りたどりついた、市井の人が書き記す運動の広がり尽力することの価値が論じられている。

なお、橋本義夫の人物研究として、義夫の子息であり、研究者であった橋本鋼二による(橋本鋼二『万人に文を 橋本義夫のふだん記に至る道程』(揺籃社、2017年)がある。自身の総合的な「自分史」を残さなかった義夫の生涯、人物を追った研究として本書は重要な研究と位置付けられる。

(2) それ以外の橋本に関する人物研究

橋本の人物を対象にした研究に関しては、その他、橋本の歴史家、地方史研究者の一面に焦点を当てた研究がある。渡辺奨は、橋本の地方史研究の実践を対象とし、歴史家としての橋本を論じている¹⁴。橋本が行った地域史研究活動を特筆する価値のあるものと捉え、色川大吉らによる研究との関わりから、色川のグループを中心とする三多摩自由民権運動と困民党の研究に大きな成果をあげたのも、色川による『困民党と自由党』や『明治精神史』なども、その土壌は橋本の先進的な業績に負うことが大きいとし、橋本が「ふだん記」の指南書といえる『みんなの教育・文章』の冊子を源泉とし普及させながら、自らも地方史研究・執筆を行い着々と「ふだん記運動」の素地を作っていたことによると高く評価している。渡辺は橋本の活動の足跡に対して橋本義夫がよく口にしていた「その土地よかれ」という言葉を挙げ、「おびたしいふだん記運動の冊子の中に、地方史研究に値するものが多数ある。私は橋本義夫の貴重な地方文化運動の足跡を学び、継承することにより、地方史研究と文化運動の落差をなくし、あわせてその発表を願ってやまない¹⁵」と述べる。すなわち橋本の功績のうち、むしろ地域に根ざした学習・文化活動の担い手であり、歴史家であったことが、三多摩の研究のみならず全国の地方史研究に寄与しているとの指摘であり、歴史家、地方史研究者としての橋本を評価している。

他にも、橋本義夫の生涯に焦点をあてた、梶國男による総合的な研究がある¹⁶。梶は橋本との親交があり、いわば橋本の「語り部」の一人として、橋本義夫の人生の歩みを精緻に描き出し、人物像を浮かび上がらせている。橋本義夫を、農業をしながら檜原などの縄文土器を掘った塩野半十郎とともに「土の巨人」と名づけ、歴史研究活動や地域に与えた

影響などを論じている。

このように橋本の人物研究に関しては一定の蓄積がなされてきたものの、教育者としての側面から研究されることはほとんど無く、橋本の実践について社会教育からの言及もあまりみられてこなかった。その点に橋本研究には未達の分野があることを示している。

第2項 橋本の実践に関する先行研究

(1) 小林多寿子による研究

「ふだん記」は1960年後半の創始後から50年を経過した今なお全国に広がり続けていることからもうかがえるように、橋本の最後のライフワークであり、橋本の中核となる実践である。橋本研究の中でも、最も多くを数えるものが「ふだん記」を対象にした研究である。本項ではそれらを見つづ、橋本研究に関して論じていきたい。

「ふだん記」をリテラシーの観点から総合的に取り上げた研究には、小林多寿子による一連の研究がある¹⁷。

小林は「ふだん記」運動が現代社会にいたる新たな変化を先取りしていたことを2点に整理して述べている。第1点には戦後リテラシーの変容をめぐる問いを示していると述べる。「ふだん記」は誰もが文章を書き出版をする運動だが、このように文章を書き、本を出版する力が知識階級に限定されていた状況が、1960年代から1970年代にかけて大きく転換したのではないかと述べている。この時期の転換は、1980年代からの「自分史」ブームやその後に訪れるインターネット上の日記や「自分史」の氾濫という自己表現のリテラシーの飛躍に至る前のステップであると言及している。

小林が述べる第2点は、「ふだん記」運動が個人的経験を書く力を養った実践であり、結果として「自己表現力としてのリテラシー」を高めていたということである。小林はリテラシーを読み書き能力だけではなく、「書く綴ることで自己の経験を表現する力」としてとらえるが、この自己の経験を書く力、すなわち「自己表現としてのリテラシー」が1960年代から1970年代にかけて「ふだん記」運動の中で現在に先駆けて養成が試みられたのではないかと推察している。加えて、現在において多様に自己のことを述べるリテラシーが駆使される前に、既に先駆けて中心とされていたと捉えている。すなわち自己を書くことをめぐるターニングポイントのひとつが1960年代の「ふだん記」空間の中にみいだしているのである¹⁸。

小林は「ふだん記」の初期の1960年代に着目し、ここが現在も続く様々なメディアを

使って表現をする時代に移った転換点にあたりと指摘している。さらに、「ふだん記」で読み書きができることの先に、自己を表現することができる力を含めた新しいリテラシー像を表出させた。これはさまざまなリテラシーを単に読み書きだけでないにとらえる、重要な発見である。単純な読み書きの力だけでない現代のリテラシーのあり方を「ふだん記」から示しているためである。

さらに、小林には初期の「ふだん記」運動を取り上げながら、自己を書く取り組みにおいて、共同体で共に書く形式の実践の過程を分析している¹⁹。3人の女性執筆者の書く実践の姿を描き、他者の文を読み、互いに手紙を書きやり取りをする相互のやり取りの重要性を見出しながら、「ふだん記」グループを「書く共同体」としている。そしてグループの特徴を「書く実践だけによって生成されるものではない」とし、「読む実践がたえずともなった共同体であり、そして、手紙を媒介とした相互のコミュニケーションがさらなる共属感情と情緒性の交感を生み出している共同体²⁰」と論じる。「ふだん記」グループを、相互の読み合いや感想の交換による共同体の視点から分析を行なった点で意義がある。

この論文は「ふだん記」をライフストーリー研究へと発展させた点で重要であり、小林は「書く共同体」の姿を明らかにし、橋本義夫が識字の重要性を意識していたことや、橋本の励ましにより執筆者が書く実践を進めている姿をも示している。しかしながら、この共同体による書き方が「ふだん記」を含めた「自分史」的な文章運動の特徴なのかどうかを明らかにすることが課題であることも、指摘している。

(2) それ以外の橋本の実践に関する研究

橋本の実践に関する研究には、社会教育学習の観点から「ふだん記」を取り上げた上田幸夫の研究もある²¹。社会教育の活動の一環として「自分史」の執筆に着目し、1977(昭和52)年の茅ヶ崎市の「地域に残る言いつたえの教育力」をテーマにしていた茅ヶ崎の市民教養講座における「ふだん記」グループと、社会教育における市民教養講座とのかかわりを例示している。「ふだん記」の話をもり込みたいとの職員の相談に応じて「ふだん記」のメンバーが『誰にでも書ける自分史のすすめ』を語り、講座における反響から同年に「茅ヶ崎のふだんぎ」創刊号が刊行される過程を描いている。また「ふだん記」に集まる人たちが、講座がきっかけとなって他のグループとの交流を活発化させていった様子も述べている。しかし、同論文は「ふだん記」の考え方を取り入れた社会教育講座の学びの過程を中心課題にして論じている。そのため、橋本の実践に主眼が置かれたものではなく、あく

までも「ふだん記」を通じた社会教育講座の研究であり、橋本が中心テーマとなる研究ではない。

「ふだん記」以前の橋本に関しては、建碑運動など橋本の戦後の地方文化運動を取り上げながら論じた増沢航による研究もある²²。増沢研究では橋本の戦後の地方文化運動や建碑などの記録運動を論じている。このうち記録運動の研究では、橋本の記録運動を石碑である「石の碑」と本やパンフレットに書き上げた文書である「紙の碑」として示し、1950年代の足跡をたどりながら、橋本の地方文化研究会の記録や橋本義夫にとっての記録の意味を検証している²³。橋本による農村調査や埋もれた人の顕彰、新聞投稿などの記録などを取り上げ橋本の記録運動の二つの特徴を指摘している。第一は当世や未来を含めた人々に向けて評価を受けて来なかった人々の記録を残すという橋本の執念である。第二は建碑による地域の発展に関する橋本の意図である。増沢は、橋本が自らの暮らす八王子における建碑の過程において地元の有力者や関係者との対立を経ながらも建碑を行う過程に関して、橋本が建碑という手段を通じて研究ばかりではなく自分の生きる八王子という地方を少しでも繁栄させようとしていたとの意図があったことを示している²⁴。しかしながら、建碑の結果、地域に何がもたらされているかについて言及がみられず、その点に不足があるようにみえる。

橋本の実践を対象とした先行研究に関しては、「ふだん記」が中心であり、「ふだん記」以外の実践も包括した幅広い実践の研究は依然として、課題として残されていると思われる。

第3項 橋本の思想に関する先行研究

橋本の先行研究には、他にも橋本の思想を研究対象にしたものを挙げるができる。例えば「ふだん記」に至るまでの思想遍歴をテーマとした小倉英敬による研究である²⁵。そこでは橋本の思想の背景を形成した八王子、農村での青年教育運動、書店揺籃社の開設と運営、教育科学運動、多摩郷土研究会、戦争協力への決意と心理的葛藤、反戦論を唱えたことによる治安維持法違反による留置場拘束、内村鑑三への傾倒による非戦主義など、人生における思想遍歴を追っている。小倉は橋本義夫の思想家としての側面をとらえ、「橋本義夫は、まさに『近代』とは如何なる時代かを考えさせる思想家である。彼の思想形成と思想進化を綿密に追跡することで、われわれは『近代』が人類にとり何を意味するかを考えさせられる²⁶」と評する。橋本の思想を小倉はこうも述べる。

「大正デモクラシー時代に青年期を過ごし、その影響が戦中期にまで生き延び、戦後の民主主義志向につながったことは、大正デモクラシーが戦間期の総力戦体制を経て、システム社会化した戦後においても継続性を持ったことを意味する。戦後においては、総力戦。総動員化したシステム社会が形成されはしたものの、なんらかの形態で大正デモクラシーの遺産は継承されたと見るべきである。少なくとも、敗戦直後の橋本義夫の思想には、大正デモクラシーと 1930 年台の講座派的な思考方法が、内村鑑三の反戦・非戦思想を基礎にして、継続されていた。橋本義夫の思想は『一視同仁』の思想である。そこには、戦前・戦中・戦後を問わず、常に他者を対等に見、弱者に救いを与える姿勢が強く感じられる²⁷⁾。

戦前、戦中、戦後とパラダイムシフトともいえるべき、大きく社会的思想が変わる中にもありながらも、橋本に一貫して流れていたという弱者に救いを与える姿勢を評価したものであり、橋本研究の幅を広げる考察である。一方で橋本の思想が実践にどのようなつながっていったかについては、課題として残されている。

橋本義夫の思想に関しては、土橋寿の研究もある²⁸⁾。土橋は、橋本の前半生の概要や橋本の「地方の文化」運動、「万人の文章」運動、「新人類文化研究会」などを引きながら、橋本の「ふだん記」の背景にある考え方を探っている。

土橋は「橋本が日本の文章史に残した最大の功績は、なんとといっても『文章』を庶民の生活に取り入れたことである。橋本の行動は、万人が著書を持つことは町村、隣組、職場といったせいぜい百人ほどの人に覚えられるだけの存在が、全国に友人を持てることになる。これが慣行となれば、若者に夢を与え、意欲を沸き上がらせ、ひいては社会のエネルギーになるとの信念に支えられてきた²⁹⁾」といい、著書を出すことにより人間関係が広がることや、その広がりが社会を動かすエネルギーとなっていることを指摘している。すなわち「ふだん記」は単なる文章を書く執筆ではなく、社会を動かす運動につながるものとして評価している。しかしながら、「ふだん記」の執筆者の変容にまでは言及しておらず、この点の解明は残された課題である。

社会教育分野において橋本の著作から思想を研究したものには初期「ふだん記」を対象にした辻喜代司による研究がある³⁰⁾。これは橋本の初期著作である「地方文化資料」、「ふだん記」グループによって出版された「ふだん記本」及び「ふだん記新書」の史料(辻はこれらをまとめ「自著本」と称する)の検討、さらに両者の連続性及び関係性を考察している。辻は、「地方文化資料」と「自著本」の関係を『ふだん記』がその多様性にこそ自らの価値を見出してきた経緯からすれば、以上のような『地方文化資料』及び『自著本』の作品

分析を通して、両者を結ぶ概念を抽出することは難しい課題である。しかし両者に通底するものは間違いなく存在するように思われる³¹」と述べ、その可能性に着目する。橋本の理念と作品群のつながりに関する分析から、橋本の執筆した『地方文化資料』と『自著本』には喪失の体験を踏まえた自分と家族の物語という共通項が存在することを指摘している。そして、これが庶民の人生における知の伝承をめざしていると結論づけている³²。しかしながら、「ふだん記」執筆者の具体的な姿まではみることができなかった。

以上、本節では橋本義夫に関する先行研究を人物、実践、思想のそれぞれの観点から取り上げた。しかし教育の視点からみる研究や、橋本の思想が橋本の実践にかかわった人々へ及ぼした影響などに関して蓄積は十分ではなく、課題であることが浮かび上がった。

第2節 橋本関連資料について

続いて、主な資料に関して論じる。橋本義夫は「ふだん記」に至るまでの過程、さらに「ふだん記」運動を始めてからも無数の著作を残しているため、本論文で取り上げる資料は一部に留まっているが、極力主要なものをカバーするようにつとめた。橋本の著作の全容に関しては、橋本義夫の子息である橋本鋼二による義夫の生涯を研究した書、『万人に文を 橋本義夫のふだん記に至る道程』（揺籃社、2017年）も参照されたい。

なお、本論文では橋本の著作のほか、「ふだん記」運動に共鳴した人々の作品も取り上げる。そこで把握を容易にするため大きく三つの史料群に分類した。それは、1)橋本義夫による「ふだん記」以外の文献、2)「ふだん記」に関する橋本義夫の文献、3)橋本以外の著者による「ふだん記」関連の文献である。

1)橋本義夫による「ふだん記」以外の文献

橋本義夫「八王子に於ける教育運動—薫心会の活動記録」、＜教育＞1939年10月号、岩波書店、1939年10月。

橋本義夫『橋本喜市のこと』地方文化資料 第52集、地方文化研究会、1961年。

橋本義夫『村の母・橋本春子のこと』八王子文化サロン、1966年。

橋本義夫『雲の碑 地方の人びと I』多摩文化研究会、1966年。

橋本義夫『雲の碑 地方の人びと II』多摩文化研究会、1966年。

橋本義夫『地方の記録』ふだん記本30、ふだん記グループ、1972年。

橋本義夫『何でも書いて験してみた』地方新聞執筆目録、ふだん記全国グループ、1979年。

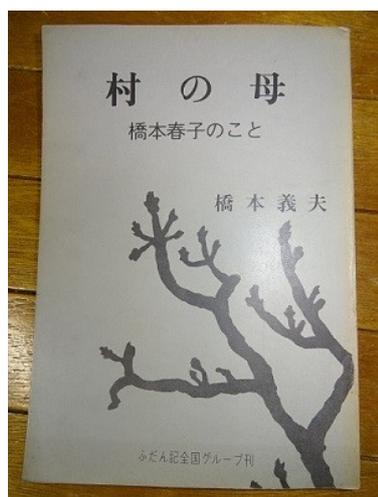
橋本義夫『姉・「桶菊」』ふだん記新書 96、ふだん記全国グループ、1981年。

橋本義夫『未知は誘惑する：古代・中世地方史研究法稿：砂漠に樹を一戦後地方文化運動記録』ふだん記新書 133、ふだん記全国グループ、1983年。

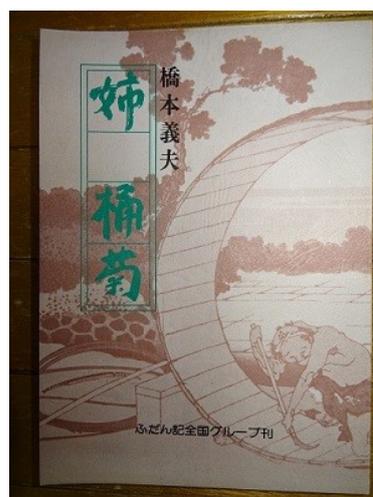
橋本義夫(色川大吉、梶国男、清水英雄編)『砂漠に樹を 橋本義夫初期著作集』、揺籃社、1985年。

橋本義夫(橋本鋼二編)『暴風雨の中で 橋本義夫著作集第二集 戦中戦後日記・手記』ふだん記旭川グループ、1996年。

<多摩文化>多摩文化研究会、掲載記事。



▲橋本義夫『村の母』



▲橋本義夫『姉・「桶菊」』

第一群は橋本の「ふだん記」以外の著作である。中でも自らの実践の回顧録、家族や友人知人に関して記したもの、八王子などを中心に地域文化を研究したものなども多くを残している。ここでは数例の著作を取り上げ説明したい。橋本が「ふだん記」以前から取り組んでいた学習・文化活動に関する著作物に関しては、例えば橋本義夫(色川大吉、梶国男、清水英雄編)『砂漠に樹を 橋本義夫初期著作集』(揺籃社、1985年)にまとめられている。この初期著作集には、橋本の地元である八王子地方での教育運動や、戦中期の留置場生活、詩集など、橋本の思想に迫る多くの著作が収められている。著作集は、橋本義夫の子、鋼二によりまとめられた橋本義夫著作集第2集、橋本義夫(橋本鋼二編)『暴風雨の中で 橋

本義夫著作集 第二集 戦中戦後日記・手記』(ふだん記旭川グループ、1996年)もある。これらには橋本義夫の実践や「ふだん記」の着想に至る前での思考の歩みなども読み取ることができる史料が多く収められている。

さらに、橋本は家族に関して執筆した本も残している。橋本義夫の母である橋本春子の人生をまとめた、橋本義夫『村の母-橋本春子のこと』(八王子文化サロン、1966年)、父のことを書いた橋本義夫『橋本喜市のこと』(地方文化資料 第52集、地方文化研究会、1961年)では橋本の原点を知ることができる。橋本の姉である「ショウ」、姉婿である桶職人の「桶菊」こと西山菊五郎に関して書いた本である、橋本義夫『姉・「桶菊」』(ふだん記新書96、ふだん記全国グループ、1981年)がこれに該当する。

2) 「ふだん記」に関する橋本の著作

橋本義夫「ふだん記運動」と文章平民の創造」、<月刊 社会教育>(民衆文化と地域の創造<特集>)21(11)、国土社、1977年11月。

橋本義夫「不器用の拾い物・「ふだん記」運動から」、<言語生活>375号、筑摩書房、1983年3月。

橋本義夫『平凡人の教育と文章』地方文化資料第49集、地方文化研究会、1960年。

橋本義夫『みんなの文章～万人文章論』ふだん記草子第1、みんなの文研究会、1960年4月初版発行、1968年4月増補再版発行。

橋本義夫『短言』ふだん記新書1、ふだん記全国グループ、1974年。

橋本義夫『抑制の哲学』ふだん記万人の本、ふだん記全国グループ、1975年。

橋本義夫『万人可能の哲学 附” 新人類文化”』ふだん記全国グループ、1976年。

橋本義夫『ふだん記案内-万人の書く文・出せる本-』ふだん記新書31、ふだん記全国グループ、1976年。

橋本義夫『書いて花咲く哲学』樺出版、1977年。

橋本義夫編『ふだん記の花ひらく』ふだん記新書66、ふだん記全国グループ、1978年。

橋本義夫『だれもが書ける文章』講談社現代新書、1978年。

橋本義夫『ふだん記の大道-その道標-』ふだん記全国グループ、1978年。

橋本義夫(ふだん記茅ヶ崎グループ編)『万人の文章のために』ふだん記新書77、ふだん記茅ヶ崎グループ、1979年。

橋本義夫(四宮さつき編)『「時」の魔術師の手のひらに』ふだん記新書 78、ふだん記全国グループ、1980年。

橋本義夫(足立原美枝子編)『大きな拾い物は一小さな顔をしていたー』ふだん記新書 69、ふだん記八菅グループ、1981年。

橋本義夫「青年版『ふだん記』のすすめ」、<青年>第133号-第157号、日本青年館、1981年6月-1983年6月。

橋本義夫(四宮さつき編)『ふだん記の花大きく開く：北海道大会成果』ふだん記新書 110、ふだん記全国グループ、1982年。

橋本義夫(岡田勝美編)『ふだん記文化のすすめー宛名のない手紙ー』ふだん記新書 130、ふだん記旭川グループ・ふだん記全国グループ、1983年。

橋本義夫(講話)『日々是楽しんでー私の体験からー』ふだん記八菅グループ、1983年。

橋本義夫(岡田勝美編)『「新人類文化」のすすめ』ふだん記新書 130、ふだん記旭川グループ・ふだん記全国グループ、1983年。

橋本義夫(講話)『「本」作りはメモから：人類の滅亡を救うもの：大きなロマンを持って』ふだん記八菅グループ、1984年。

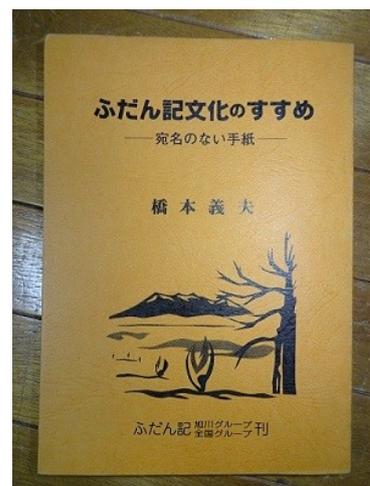
橋本義夫、四宮さつき『下手に書きなさい ふだん記のすすめ』大揚社、1984年。

橋本義夫『宛名のない手紙』ふだん記本 103、ふだん記全国グループ四宮さつき、ふだん記旭川グループ岡田勝美編集発行、1985年。

橋本義夫『老枯日記』ふだん記新書 175、ふだん記全国グループ、1985年。



▲橋本義夫『ふだん記の大道』



▲橋本義夫『ふだん記文化のすすめ』

第二群は、「ふだん記」に関する橋本自身の著作である。橋本は「ふだん記」運動を進める中で多くの著作を残している。文章の書き方や本の出し方、グループの作り方などに関する具体的な方法論を論じたものや、「ふだん記」で得られた橋本自身の体験に関して書いたもの、さまざまな書き手とのやりとりや記録なども残している。これらの具体的な方法に関する橋本の考え方は、学習論や運動論として見出しうる文献と思われる。方法論に関する書籍についてみると、例えば、橋本義夫『平凡人の教育と文章』（地方文化資料第49集、1960年）、橋本義夫『みんなの文章～万人文章論』（ふだん記草子第1、みんなの文研究会、1960年4月初版発行、1968年4月増補再販発行）、橋本義夫『ふだん記案内-万人の書く文・出せる本-』（ふだん記新書31、ふだん記全国グループ、1976年）などがある。中でも、橋本義夫『誰もが書ける文章』（講談社現代新書、1977年）では、一般に流通する書籍で出された本であり、橋本の考え方がより広く知られることになった。さらに、橋本自身の存在とともに「ふだん記」の立ち上げから発展に尽力し、全国に広がる「ふだん記」運動を支え続けた四宮さつきとの共著、橋本義夫、四宮さつき『下手に書きなさい』（大揚社、1984年）においては、「ふだん記」の書き方の指南が収載されているが、他にも「ふだん記」の草創期からの初期の活動に関する記録が収載されており、「ふだん記」の成り立ちを知ることのできる史料である。

3)橋本義夫以外の執筆の「ふだん記」関連文献

高野清子『高野清子文集 道はるかなれど』ふだん記草子10、みんなの文化研究会、1969年。

四宮さつき『ながれの中に』ふだん記本15、ふだん記グループ、1971年

海端俊子『詩集 海は私の絵本』ふだん記新書3、ふだん記全国グループ、1974年。

尾股協子『麦の穂』ふだん記文書4、ふだん記全国グループ、1975年。

小金井巽『小っちゃな八百屋』ふだん記文書2、ふだん記全国グループ、1975年再版。

四宮さつき『十年-ふだん記と共に-』ふだん記本50、ふだん記全国グループ、1976年。

西村サキ、『郷土沖永良部島』ふだん記新書52、ふだん記全国グループ、1976年。

橋本義夫編『北海道のふだん記』第1号、ふだん記全国グループ、1977年。

ふだん記旭川グループ編『北海道のふだん記』第2号、ふだん記土別、北見さいはてグループ、旭川グループ、全国グループ、1982年。

山本久江『若い寿司屋』ふだん記新書114、ふだん記北九州グループ、1982年。

尾股協子『佐久の山彦・多摩の夕焼』ふだん記新書 107、ふだん記全国グループ、1983年。

四宮さつき『続十年—ふだん記と共に—』ふだん記本 79、ふだん記全国グループ、1984年。

小野征子『跳躍のある歩行—ある若い東北女性—』ふだんぎ新書 158、ふだん記みちのくグループ、ふだん記全国グループ、1985年。

四宮さつき編『橋本義夫先生追想集』ふだん記全国グループ、1986年。

岡田勝美『「ふだん記」にひかれて』ふだん記本 114、ふだん記旭川グループ、1988年。

田倉春代、尾股協子、山本千枝子『おかげさまの旅』ふだん記全国グループ、1990年。

四宮さつき『続々十年—ふだん記と共に—』ふだん記本 50、ふだん記全国グループ、1994年。

橋本義夫(尾股協子編)『その土地よかれ・その人よかれ』ふだん記新書 282、ふだん記旭川グループ、1996年。

八王子市中央図書館編「橋本義夫～民衆史の掘り起こしから創造へ～」(橋本義夫生誕100年記念ふだん記運動創始者「橋本義夫と自分史の源流展」開催記念パンフレット)、八王子市教育委員会、2001年。

尾股協子『麦の穂』文芸社、2001年。

橋本義夫生誕100年を記念する会編『紙の碑』ふだん記運動創始者「橋本義夫の生涯と「自分史」の源流展」図録、揺籃社、2002年。

橋本義夫(岡田勝美、谷口三郎編)『橋本義夫とふだん記運動』ふだん記旭川グループ、2003年。

増沢航『記録の戦後史—橋本義夫が遺した記録—』ふだん記創書 24、ふだん記雲の碑グループ、2007年。

橋本鋼二『万人に文を 橋本義夫のふだん記に至る道程』揺籃社、2017年。



▲尾股協子『麦の穂』



▲小金井巽『小っちゃな八百屋』

第三群は、創始された八王子から、現在では日本各地に広がる「ふだん記」運動の中で出版されたさまざまな「ふだん記」関連の書籍等の史料である。膨大な数の本が発行されているため、ここでは本論文で取り扱う一部の史料を示した。「ふだん記」運動の参加者が執筆したもの、「ふだん記」運動の実践の過程を記録したもの、さらに、橋本義夫そのものを論じた記録もある。これらの執筆者は文友（ぶんゆう）といわれる「ふだん記」運動に参加する執筆者たちであり、内容形式にとらわれないものであり、日記や伝記、詩集などの多岐にわたっている。これらは著者自身のライフヒストリーそのものであり、さらに生きた社会教育実践が示されている。無数に発行されているそれぞれの「ふだん記」本には自由に書く文友の思いが込められており、これらの史料をみることは、「ふだん記」運動の過程の実像に迫ることができると同時に、文友たちが書くことによる変容や成長、書く実践が書き手に与える影響などを見ることができると思われる。

また、「ふだん記」のさまざまなグループが発行する機関誌には、文友たちがつづったたくさん的小文が掲載されており、これらもまた「ふだん記」の分析にあたって分析をする意義がある資料である。手書きで発行されている（図 8）ものから、活字のもの（図 9）まで多くに亘っている。（なお、ここでしめしたくみちのくふだん記は途中から活字印刷の雑誌になる。）

図 9 <ふだん記 雲の碑>第 10 号、ふだん記雲の碑グループ、2002 年 6 月。

第 3 節 社会教育実践の視点からみた橋本義夫の実践

第 1 項 対象設定の理由

ここで橋本義夫及び「ふだん記」を研究対象に設定した理由は、「自分史」の直接の原型であることはもとより、橋本義夫や「ふだん記」は社会教育実践の要素を多分に有しているためである。

第一に、橋本義夫が社会教育の実践家としての側面を多分に持っている点である。橋本は、自身の生涯遍歴において戦前から戦後にかけて一貫して八王子地域に根を張りながら、人々と向き合いつつ数多くの学習・文化活動に関わってきた。橋本は教員でもなく、文筆業を生業とするものでもなく、書店を営んでいたいわば普通の人間であった。しかしながら、青年の学習活動、地域の無医村を解消する運動、地域の歴史から忘れられた人々を顕彰する建碑運動のような実践、地域文化を調べ文章に残すことや、地域新聞への数多くの寄稿、さらには「ふだん記」のような文章執筆運動など、多くの社会教育実践に取り組んできた。

橋本の理念に社会教育の理念と通底する言説が残されている。橋本は「学校で教えないものを教えたい。学びたい。」という言葉を残し、学校外での教育に目を向けていた。それだけでなく「学校教育は高校まで、あとはみだりに普及せぬこと」という言説もある。橋本は学校教育に関して「膨大な予算をつかい、ものすごい人と物と時間を使っている学校教育に対比して、「ふだん記」取り組みは、市井の人々が援助なく進めてきたものである」としている。これらからは橋本が学校以外の教育の重要性を意識していたことが推察される。

第二点目は、「ふだん記」の執筆者の言葉から、教師というよりも学習の支援者としての橋本の姿を読み取ることができることである。橋本は直接の指導ではなく、告白という形の教育方法をとっていた。橋本は文章の執筆を人に伝える方法について、「私は指導はしないが告白した。そうしたら人が集まってきた³³」とする言葉を残している。これは積極的な指導よりも間接的な指導である。いわば、社会教育主事の職務でいうところの助言に通底する考え方である。すなわち、橋本の文章執筆の教え方は、上からの指導ではなく対等な立場からの支援といった成人の自己教育の支援の方法に通じる。

そのため橋本義夫の没後に出版された、橋本に対する想いが綴られた書である『橋本義夫先生追想集³⁴』から、橋本が「ふだん記」の執筆者たちにどのようにとらえられていたかみてみよう。

「先生のおっしゃる無尽蔵という人間の埋蔵資源を掘り出して、人類有用、御役に立ち『その土地よかれその人よかれ』の御言葉に従い実践し、その心を広く偏在させてゆきたいものである³⁵」。

「生前口酸っぱい程に諭された『マイナスをプラスに一』他、先生の残された宝玉のような沢山の語録を反復し学び、力強く歩んでゆかなくてはなりません³⁶」。

先生とは橋本のことであるがいずれも、橋本義夫の告白は人々の学びを支援する助言としての役割を帯びているといえよう。その意味で、橋本の「ふだん記」は、社会教育実践としてとらえることが可能であるように思われる。

第三は、「ふだん記」の書き手が、文章を書くことで成長を促されている点である。「ふだん記」を実践していく中で、文章の上達法をこう述べる。「広告紙の裏とかワラ半紙に暇さえあれば書き、メモを取り、その上、文章を書くつもりでハガキを常に書くことだ。ハガキを五十枚なり、百枚なり買って置いて、常に書くことに心掛けることだ。何事も練習時に物臭いようでは駄目だ³⁷」。「ふだん記」では庶民の文章運動であり、必ずしも文章を書きなれている人々だけが執筆するのではなく、これまで文章を書いたことのなかった人々が初めて文を書くことも多い。橋本義夫はこうした人々に対しさまざまな方法で文章の書き方を伝えている。「ふだん記」は庶民が自らの来歴である「自分史」や自らの生活のなかで感じたことなど、自身のことを書く。書き手が文章を執筆する行為は、自らの生き方を振り返ることであり、他者に物事を伝達することに通じており、書き手の成長に何らかの影響を及ぼしている可能性を見いだすことができる。

第四は、「ふだん記」運動で書かれてきたさまざまな文章そのものが、戦後社会教育実践の足跡を示す史料としての価値があると推察できる点である。「ふだん記」では50年に亘るその活動の過程でさまざまな雑誌や書籍を出版しているが、これらは書き手自身の歩みや、文章が書かれた当時の人々の生きた記録であり、それらの多くに人々の学びの姿が残されている。

第2項 橋本義夫の背景

(1) 生涯におけるトピック

以下では二点の方向から論じたいと考えている。第一は橋本義夫の履歴の概要を把握することである。橋本義夫の生涯を通観することによって、地域に根ざした在野の一実践家の歩みが地域に何をもちたらしめたかを浮かび上がらせたい。第二は橋本義夫の実践を取り上げ、社会教育の側面から意義を明らかにすることである。

橋本義夫の半生を概観すると、いくつか特徴的な活動がある。例えば、『紙の碑』の小題をみると橋本の生涯におけるトピックとして次のようなものが挙げられている³⁸。

農村での教育運動

書店揺籃社を基盤とした文化活動

文化映画「村の学校図書館」

第2次大戦中における行動

地方文化研究会の活動

地方紙への投稿(紙の碑)

詩「丘君・雑木林君」(自筆)

建碑運動(石の碑)

ふだん記運動

上記の概要に関してそれぞれ補足説明をする。例えば農村での教育運動は、青年たちの日曜学校を開いたことや回覧誌や生活改善の活動をおこなったものである。揺籃社は橋本が八王子に開店した書店であり地域の文化センターの役割を果たした。文化映画「村の学校図書館」は恩方村(現八王子市)の小学校の活動記録に関する映画である。第2次大戦中における行動とは、教育科学研究会の活動、橋本義夫の戦争協力と転向と治安維持法による検挙と拘留の経験を指しており、ここまでの戦前の橋本義夫の記録である。

戦後の橋本義夫の活動のうち、地方文化研究会の活動は地域に埋もれた人を発掘し検証する建碑運動や地域文化に関する出版、地方紙などへの投稿などである。地方紙への投稿(紙の碑)は橋本の地方紙への投稿、詩、「丘君・雑木林君」は橋本義夫の環境破壊への警鐘を訴えた詩であり、1980年中学校公民教科書(学校図書)に取り上げられたものである。建碑運動(石の碑)は上記、地方文化研究会における活動である³⁹。



▲文化映画「村の学校図書館」に出演する橋本義夫(橋本鋼二提供)

(2) 橋本義夫の生育の背景

橋本義夫は1902(明治35)年3月13日、南多摩郡川口村字檜原(現八王子市)に生れる。なお、川口村は八王子市域内にあったかつての自治体であり、戦後1955年には横山村、元八王子村、恩方村、加住村、由井村と川口村が八王子市に編入されたため、現在は八王子市である。

橋本義夫の生涯を通貫して論じたものとして、梶國男による『土の巨人』⁴⁰や、橋本鋼二による橋本の伝記・人物研究がある⁴¹。他にも橋本義夫生誕100年の特別展(於：八王子市中央図書館、2001年10月12日-2002年8月)における図録である『紙の碑』⁴²においても橋本の履歴の大意が示されている。さらに、橋本義夫の「ふだん記」以前の言説を収めた二冊の著作集⁴³も「ふだん記」以前の橋本の思想や実践を知ることのできる貴重な史料である。ここでは、これらの資料や橋本自身が執筆した回顧などを参照しながら、橋本義夫の履歴を述べていく。

橋本義夫の実家は、農業のほか養蚕、撚屋、土木請負業などを兼業する中豪農層であった⁴⁴。父・橋本喜市は南多摩郡会議員、東京府議会議員を務めた人物であり、母・橋本春子は主婦であった。両親に関して橋本義夫が執筆した本が出版されている。父である橋本喜市に関しては『橋本喜市のこと』⁴⁵で、母である橋本春子に関しては『村の母 橋本春子のこと』⁴⁶で、橋本自身がそれぞれを綴っている。橋本の背景をみるために、橋本義夫

が父の事を述べた『橋本喜市のこと』から橋本家について述べる。

橋本義夫の実家は、農業のほか養蚕、撚屋、土木請負業などを兼業する中豪農層であった⁴⁷。父・橋本喜市は南多摩郡会議員、東京府議会議員を務めた人物であり、母・橋本春子は主婦であった。両親に関して橋本義夫が執筆した本が出版されている。父である橋本喜市に関しては、橋本義夫『橋本喜市のこと』(地方文化資料 第 52 集、地方文化研究会、1961 年)が、母である橋本春子に関しては、『村の母 橋本春子のこと』(文化サロン双書 第二、八王子文化サロン(後援 多摩文化研究会)、1966 年)でそれぞれ語っている。橋本の背景をみるために、橋本義夫が父の事を述べた『橋本喜市のこと』から橋本家について述べる。

以下には橋本義夫に関する家系図(図 10 橋本義夫家系図)を示す。同図は、橋本義夫のみに焦点を当てて作図しており、橋本の姉などのきょうだいや他の親族等は除いてある。

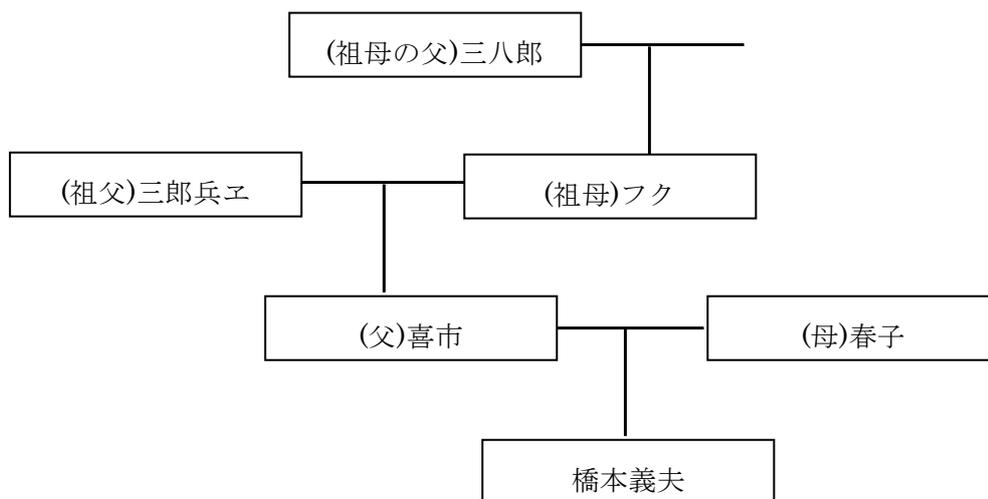


図 10 橋本義夫家系図

*橋本義夫『橋本喜市のこと』(地方文化資料 第 52 集、地方文化研究会、1961 年)より筆者作成

橋本義夫のルーツは郷土身分の幕臣である八王子千人同心にあったようだ。千人同心とは、幕府の直轄地を守護する現在の八王子市周辺の半農半士の人々である。千人同心の家に生れた、義夫の曾祖父橋本三八郎は 30 歳ほどで早世したが、三八郎の一人娘であるフク(義夫の祖母)の婿養子である三郎兵ヱ(義夫の祖父、婿養子)は「稼ぎ者」で働きものであ

ったようである。橋本義夫によれば、三郎兵エが橋本家の養子になったのは1870年頃、体が大きく力が強く、我慢強情、負けず根性でもあったという。長男喜市の嫁に村で一番裕福であった家から迎え、土蔵をつくり、墓石を建てるなど橋本家を盛り立てていたとされている。三郎兵エの没年は1907年11月1日(享年77)である⁴⁸。

橋本の父喜市は、1872年東京府南多摩郡川口村檜原に生れる。小学校は「陶鎔学校」(義夫の母校でもある)を卒業する。喜市の結婚は祖父三郎兵エの見立てである。その頃母春子の生家井出家は全盛時代であったので、経済的には差があったが、春子の実父茂平治が父を見込んでくれたと橋本は著述する。1893年3月結婚。1897年ごろから村議員をつとめており、橋本義夫の幼年期には南多摩郡会議員だった⁴⁹。

次に橋本の母春子であるが、いわゆる「家庭婦人」たるイメージのみにて語りつくせるものではなかったようだ。例えば、母に関する「御母讚^{おかあきん}」と題した詩は「世の多くの人々を愛して 生を終る⁵⁰」と結ばれているように、人のために尽くすことに注力する人物であった。このことに関する具体的エピソードは、『村の母』の巻頭に寄稿をしている植竹圓次により端的に示されている。例えば、「嫁入り道具を質に入れて家業を興す、養蚕撚糸業・土木建築業と夫を助けて八面六臂の商才を発揮する。夫婦喧嘩を裁き、暴力団を追っ払い、大胆と奇智で幾度の危機を脱れる。縁談を結ぶこと七十組、世話好きで朗らかで人を侮らない。女乞食と仲よしになり、選挙で単身敵陣にのり込む⁵¹」ことなどである。橋本の母の豪気な様子が伝わってくる。母・春子に対して橋本義夫は次のような印象的な言葉で表現している。

「一言で云えば『良妻・村母』。多くの人々の世話にいそがしく、子供たちまでまわり兼ね、『賢母』を失格してしまったひと、もっとも『賢母』だったらこんな本を書く気はない。酬いられるからだ。『損母^{そんぼ}』の手向けの小冊子。人々の世話に熱中するから家人の批判を受けるので、こっそりやる。(中略)相手とした人々は主に世話の焼ける貧しい庶民ばかり、これ故に記録する人は他にあるまい⁵²」。

橋本は母に対していわゆる「賢母」ではないが、村の他の人々のため尽くした「村母」であると述べる。橋本は賢母失格と謙遜をしながらも、決してそのことを卑下することはない。むしろ村の人びとに尽くす母のことを本に書き記すことこそ意味があるとしている。この言葉からは橋本の母に関する思いの一部をくみ取りうる。

また橋本のごく身近に他の人のために力を注いでいた市井の人がいたのであり、橋本の人格に少なからず影響を及ぼしていた可能性がある。橋本義夫を教育的側面で捉える上で、

「村の母」春子の存在は重要である。梶國男は次のように述べる。「橋本さんの生き方が、檜原村の人たちをだれかれの別なく面倒をみ“村の母”と呼ばれた母橋本春子と結びついていたことは確かであり、橋本さんは自分に厳しい強い人であったが、同時に多くの人たちを優しく暖かく育てる母性の人であったとおもう⁵³」。橋本の教育者としての背景には母の影響を垣間見ることができるといえよう。

(3) 橋本義夫の青年時代と八王子地域での教育運動

橋本義夫は地元の^{とうよう}陶鎔小学校高等科を1917年の春に出ると、東京府立農林学校に3年間学び、卒業すると家業に従事しながら読書にふけたという。その頃の読書経験は、毎月『新潮』をとって読み、トルストイの作品に感激し、武者小路実篤や有島武郎も読んだ。大正デモクラシー文化波及の頃であった⁵⁴。

橋本は自身の青年期を次のように振り返り、自学自習の経験が教育活動につながったことが伺える。

「学校の本は殆ど手にしなかったが、当時、家で新聞をとっていたので、それだけは不思議によんだ。何のことはない、わたくしの学校は新聞であった。学校の終るころ、丁度大正の一けた頃で、第一次世界大戦末期、私は青年期であった。学校では本ぎらいだったが、ここで本好きとなり面白さにひたった。自分が感激すると人々に分配するのが私の性質である。これが青年の読書運動を起し「読ませよう」とのスローガンのもとで戦災まで二十二年もやった⁵⁵」。

橋本が学校に通っていた時代の教育制度を補足しておきたい。橋本が地元の陶鎔小学校に通っていた時期を『学制百年史』の区分と照らし合わせると「近代教育制度の確立と整備(明治十九年—大正五年)⁵⁶」の時期にあたる。当時は6年制の義務教育制度が確立され、義務教育後の進学者が中学校・高等女学校・実業学校及び高等小学校に分離され始めていた⁵⁷。橋本の最終学歴は青梅の東京府立農林学校である。本人は学校嫌いというが、読書好きであったことをみると、も学ぶことを嫌っていたのではないように推察される。

1921年代前後以降の八王子地域が含まれる南多摩郡の教育も見ておきたい。この時期の地域状況の基礎データは、1923年に南多摩郡役所から発行された『南多摩郡史』にある。1922年3月末日現在の学齢児童の就学率は「當局に於ても極力之が向上に意を注ぎ逐年

良好の成績を示しつつあるも」、当時の国の平均男 99.14%女 98.92%よりは低く、男 98.37%女 95.49%となっていた⁵⁸。なお、橋本の出身であった川口村のみのデータをみると就学率は男 98.86%女 93.88%で、やはり全国平均よりは低い。地域の青年会状況に関しては、近隣の元八王子村の 1921 年の青年団体状況調査が残っている。元八王子村青年団では正団員 256 人(その他の団員 455 人)、正団員の年齢範囲は 14 歳から 25 歳までとなっている⁵⁹。

1921 年代の南多摩郡の文化運動の状況に対しては、橋本義夫が自身の活動も含めて四つのグループに分類している。橋本の分類によれば、(1)八王子の市川英作、梅沢昌晴を中心とする『薫心会』、(2)山村の恩方では松井翠次郎のグループ、(3)浅川村では細川喜治達のグループ、(4)橋本義夫達の檜原・中野という八王子郊外に起こったグループである⁶⁰。(1)の薫心会は橋本義夫が雑誌<教育>に記事を書いている(橋本義夫「八王子に於ける教育運動—薫心会の活動記録」<教育>岩波書店、1939 年 10 月号)。これによれば、写真師市川英作、アマチュア梅沢昌晴、小川吉鷹らにより 1921 年に結成された八王子の教育運動のグループである。活動内容を推し量るため例会のタイトルをいくつか示すと、「生活改善について」(大正 12 年 3 月第 18 回)、「八王子市の将来について」(大正 13 年 1 月第 27 回)、「補助教育機関の必要」(大正 13 年 2 月第 28 回)などである⁶¹。

(2)のグループで示された松井翠次郎は、青年団などの活動に尽力した人物である。八王子地方も含んでいる南多摩郡連合青年団及び南多摩郡教育会の専任書記になっている(昭和 3(1928)年就任)。南多摩郡青年団の頃には青年団に関する雑誌への投稿、幹部養成講習会や巡回公演会に尽力していた⁶²。橋本義夫とは後に述べる書店揺籃社で出会い、教科研南多摩支部でも交流を持っている。(3)の浅川グループは作家中里介山と協力し「隣人学園」という私塾を開設している。

八王子は就学率こそ全国平均は若干下回っていたにも関わらず、さまざまな実践家により多様な活動が展開されていたことがうかがえる。橋本の言葉を記すと、「いずれも色合いが違い、学校関係の人々ではなかったが、みんな教育に手をつけた⁶³」ということになる。橋本義夫の活動もこのような地域における教育運動が展開される下、行われていたことがわかる。

1923 年、21 歳になった橋本義夫は厭世観に囚われ、毎日空しいくらい日々がつづいたようである。しかし、7 ヶ月後、ポール・ケラスの『仏陀の福音』を読んで救われ、西中野の井上栄蔵、井上助次郎、檜原の岸清次らと教育の家運動を始めたという。それは村の念西庵を“教育の家”と呼び集まった日曜学校であり、毎晩のように仲間の家で読書会を

開き、回覧誌『自然人』を発行していた。さらに、教育の家運動の他にも、精力的に地域でさまざまな活動に従事している。1925年には賀川豊彦にひかれ、1927年からは内村鑑三に心酔して、村の中の因習や不合理に目を向け、悪習打破運動、生活改善運動、青年運動、農村図書館建設運動を行ない、下中弥三郎・渋谷定輔らの農民自治会運動にも加わるなど、20代半ばごろには自らの地域を良くしようと多様な活動に従事していた⁶⁴。

橋本の実践は、いずれも橋本が自らの暮らす農村の人々と向かい合い、学習・文化運動により地域変革を目指していととらえられることができよう。

第2項 書店・揺籃社

(1) 揺籃社の概要と橋本の理念

戦前の橋本義夫の実践の中でも代表的なものの一つが、教育の家運動と一緒にやっていた井上英三らと1928年に八王子横山町に開店した書店、揺籃(ようらん)社である。揺籃社は橋本にとり、生活の糧を得る職場との意味合いももちろんあったが、「庶民的な文化運動のセンター又はクラブ的存在⁶⁵」であった。

なお揺籃社という名前は、スイスの教育者ペスタロッチの「^{ゆりかご}揺籃を動かすものは世界を動かす」という言葉からつけられたものである。大衆雑誌はごくわずかで、青年たちが理想的とするような本を取り寄せて並べていた。開店時のチラシに書かれた「若し不人道的な道ばかり行くようでしたら、最早、ようらん社の存在意義を失いますから、その時は断然やめてしまいます」という言葉をとらえ梶國男は青年たちの意気と主張があったことを指摘している⁶⁶。

なお橋本義夫は1930年には新しい店を開店、岩波茂雄(岩波書店の創業者)に傾倒したこともあり、橋本は店内を良書で埋めた。八王子地域では珍しい存在であったことから他町村からも客を集め、揺籃社はさまざまな本や人間が集う文化センター的存在になった⁶⁷。揺籃社は本の売り場である書店ということ以上に大きいように見える。橋本が揺籃社に対して期待していたことを橋本自身のいくつかの言葉から探してみたい。橋本が揺籃社の店内に張り出した言葉が残されており、これらは橋本義夫著作集第2集(橋本義夫(橋本鋼二編)『暴風雨の中で 橋本義夫著作集 第二集 戦中戦後日記・手記』(ふだん記旭川グループ、1996年)の中に収められている。

「昭和十七年(一九四二年)～二十年(一九四五年)に店内に張り出したり、特に書き残し

た短言⁶⁸」(抜粋)

- ①史料を保存しましょう。自由経済時代の庶民生活を最もよく表現するような史料を保存しましょう。(歴史学のために御協力を乞う。)多摩郷土研究会(十七年四月)
- ②本屋は文学青年を繁殖させるための培養基の皿の如きものであった。こんな下らぬことをしてはならない(十七年五月)
- ③明日の任務を双肩になっている青少年のためにふさわしき本を置け。(ウンオー[蘊奥]だとか自負している老人向きの下らぬ本なんかに錯覚を起こすな)(十七年十月)
- ④教育にはもっとも力ある人があたるべきである。教育を馬鹿にする国には前途が無い。地方からロクな産業もないし人も出ない。(十七年十月二十五日)

以上は開店 15 周年の昭和 17 年、橋本義夫 40 歳頃に書かれたものであり、揺籃社経営の理念が示されている。①は史料の保存を勧める短言である。ここで注目するのは、庶民生活を示すものを保存すべきという考えである。②は橋本が本屋は文学青年を増やす場と考えていたことを提示している。③では本は青少年のためのものであるべきとの理念を示しており、④からは教育を重んじていたことが明らかである。これらをも橋本がいかに揺籃社を重視していたかがよくわかる。ちなみに橋本義夫は、揺籃社を始める以前から本による教育を重視しており、前述した教育の家運動にもそれが顕れている。

(2) 文化を介した交流の場としての揺籃社

揺籃社は良書を多く置き岩波書店の書を揃えるなどの文化の拠点であった故、地域の多くの知識人が集っていた。それゆえ、揺籃社時代に橋本は地域の多くの知己を得ていた。例えば、八王子において南多摩郡青年団で活躍をした松井翠次郎、橋本義夫の「真友」である歯科医の須田松兵衛もそうである。のちの 1951 年には須田松兵衛の碑である「友の碑」を建立しているほどの友人である。この「真友」は橋本が須田を評した言葉であり、橋本義夫『真友須田松兵衛』新人類文化叢書(2)、1985 年)の書も残している。

小倉英敬によれば橋本が揺籃社を通じて得た友人には、松井、須田の他には八王子で教育活動に従事した平井鉄太郎、松井とともに恩方村での青年教育に従事した教科研南多摩支部の支部長菱山栄一、多摩少年院院長の太田秀穂などとの親交が明らかにされている⁶⁹。

このような状況を踏まえて、小倉英敬は「彼らが橋本義夫を取り巻き、八王子の知的・文化的空間である揺籃社が彼らが集う『たまり』となっていた⁷⁰」と評している。橋本が

提供した揺籃社は 17 年で戦中に空襲により焼失してしまうが、文化を介した交流の場の役割を揺籃社は果たし、橋本にとっても文化の拠点である揺籃社に人々が集まるという経験をもてた。揺籃社の置かれた八王子にとっては、交流の場で人々のつながりが生まれたことにより、派生したさまざまな活動を生み出す契機となったことに意義を見いだせよう。

第3項 教育科学研究会と多摩郷土研究会

(1) 教育科学研究会での活動

揺籃社の時期と重なるが、昭和初期から戦中にかけての橋本義夫に関して、教育科学研究会の活動、反戦思想による拘留も重要なトピックである。この頃の教育科学研究会とのつながりに関しては、橋本義夫自身により書かれた、「地方の教育運動-昭和戦前の八王子周辺」(橋本義夫(色川大吉、梶国男、清水英雄編)『砂漠に樹を 橋本義夫初期著作集』揺籃社、1985年、pp.275-313)に詳しい。

教育科学研究会(教科研)は、1937年5月に結成された戦前最後の民間教育研究団体であり、教育の実証的研究を進め教育改革の基礎となる教育改革の基礎となる教育学研究、「教育科学」の創造を志向した団体である⁷¹。1937年11月の城戸幡太郎や留岡清男などによる教育科学研究会の恩方村(現八王子)視察、さらに1939年8月26日の教育科学研究会南多摩支部の結成があった。この中で教育科学研究会のメンバーとの関わりを橋本は持ち、八王子からは橋本義夫、松井翠次郎、恩方村の文化人・菱山栄一らが関わっていた。1941年5月には教育科学研究会は解散となるが、橋本は同年6月に多摩郷土研究会を組織し、無医村解消運動や青年教育運動を行っていた⁷²。

橋本、松井、菱山ら南多摩郡に関しては、機関誌『教育科学研究』においても教科研南多摩支部長を務めた菱山栄一の名で紹介されており、第1巻第1号(1939年9月)の南多摩の動向の紹介、第2巻第1号(1940年1月)の「毎月例会と本部の協力-八王子」などで知ることができる。『教育科学研究』創刊号(1939年9月)における地方通信の南多摩郡の項にて紹介されている支部結成の様子をみると一見教育とつながりがみえないような独特のメンバーが集っていた⁷³。例えば八王子の歯科医とは須田松兵衛であり、書店の主人とは橋本義夫である。すなわち学校教育関係者以外が集っていることが書かれているが、このような形態で支部が結成されたことは、橋本の揺籃社も影響を及ぼしていると推察できる。なお、数年来の南多摩との浅からぬ因縁とは、上記で述べた1937年11月の教育科学研究会一行の恩方村視察のことである。

続いて1939年8月の南多摩支部結成以後の例会の活動に関して述べる。第2回では地域における小学校の分断式学校経営の報告と意見交換など、第3回例会では留岡清男による「児童観と教育」に関する講座、第4回は留岡から北方教育の視察報告、第5回は本部から山田清人、平野婦美子(予定のみ、病気で取りやめ)を迎え学級経営の話をしたようである⁷⁴。南多摩支部の会員は、「教育実践家」15名、「局外者」5名の構成になっていた。異なる人々によって会が構成されていたため関心の違いなども生じていたが、「殊に実践家と局外者とを抱合する點で、この支部は特異な存在⁷⁵」といった特徴も指摘されている。全国の教育研究組織との関係を構築しながら地域で教育に関わることは、橋本義夫に教育の重要性を改めて認識させる契機となったと思われる。

(2) 多摩郷土研究会の活動とその後

教育科学研究会は1941年5月に解散するが、橋本はその後も地域における教育活動を続ける。それが、多摩郷土研究会である。多摩郷土研究会の基本理念や狙いに関して橋本自身によって示されている。橋本は地方開発を目指してつくったとの前置きをした上で以下のように論じている。

「或る村、或る土地をまず各専門的知識ある人が視察し、そこの研究機関、研究者とも会い、それらの特殊技術が、交流浸透していない障害物を取り除き、又各地と物的人的に交流させて能率を高めること。さらに最進歩的行動的なのは青年等であるから、これと交流し、青年教育をはかり、各地の青年とも見学座談会をやって、交流と動員を実行した。さらに一般学校教育とを結びつけた。かくてこれを其の地方の実験地とさせ、これを報道機関によって普及させようというのが『多摩郷土研究会』の本当のねらいであった⁷⁶」。

多摩郷土研究会では橋本義夫、無医村解消運動や当時の三多摩の有名中学校(旧制)の校長を集めた教育方針の座談会の開催をやっている。無医村解消運動は橋本の述懐によると実験として驚異的な成功を収めたという。しかしながら、この活動は1941年12月8日の太平洋戦争の開戦とともに終焉してしまった。

橋本義夫はその後、戦争早期終結を願い仲間たちと東条首相に直訴する計画を立てる、抵抗の言葉を揺籃社の店内に貼るなどのこともあり、1944年12月7日に揺籃社は家宅捜

索を受け、橋本は治安維持法で連行されてしまい早稲田署に抑留されることになる⁷⁷。抑留の経緯に関しては前述の橋本義夫初期著作集に「小さな実験-監禁の記録」として記録が残っているが、厳しい抑留生活であったようだ。東京大空襲はこの抑留の最中に経験をす。橋本は 1945 年 4 月に釈放されている⁷⁸。八王子に戻った橋本は八王子空襲に直面するが、空襲では揺籃社に加えて生家までも焼失する。橋本は 1945 年 8 月 2 日の八王子空襲をこう振り返っている。

「二十年八月二日未明、アメリカ空軍は B29 という大型飛行機群によって八王子を空襲、焼夷弾は八王子をほとんど全部灰にしてしまった。周辺の村や町も大損害を受けた。松井君の公会堂、浅川の細川君の花屋、橋本達の揺籃社、平井鉄太郎氏の蔵書、市民が『おやじさん』と親しんだ太田秀穂氏の家等々など、この運動(戦前八王子の教育運動：引用者注)に関係のあった思い出の建築物はことごとく消え失せ、まわりの丘や山々だけがばかりに大きくみえるようになった。全く荒野が残ったという感じだった⁷⁹」。

終戦時の橋本は 43 歳であった。空襲による消失は橋本の活動の拠点や蔵書にとって、相当の大損害であり、この影響は計り知れないものであったと推察される。一方で、ここに至るまでの間にさまざまな実践活動に従事する中で多くの知己を得ており、この経験は戦後の活動にもつながっていた。

第 4 項 地方文化運動

戦後、橋本は地方史研究や投稿活動、建碑活動などの地域文化運動に取り組んでいる。例えば、戦後直後の 1945 年 10 月には焼け残った家に教育学者細谷俊夫を招き、地元教師とその後の教育のあり方について聴き、翌年 1 月には浅川小学校で 3 回、「近代教育史」の学習会を行うなどの活動を行っている⁸⁰。教育学者細谷俊夫とのつながりは戦前に教科研の活動を行っていたことから生まれたものである。他にも自身の関心から橋本義夫は天才の研究に取り組んでいる。橋本は、天才研究に関して「飢えた共食いの巨大な人口を資源とする以外は資源はないのである⁸¹」と書き残している。戦後直後期の状況に直面する中で、人間の存在の重要性への注目がより強くなっていたと読み取れる。さらに、青年との関わりからは「先天的な素質ある者を、青年期に、社会の発展に必要な後天的な条件を

加えて方向づければ、世を益するが、青年期に適切な条件を与えなければ埋もれて朽ちる⁸²⁾とも述べており、青年に目を向けていたことも着目すべき点である。

橋本義夫が地方文化に目を向けて取り組んだ活動が地方文化研究会である。1951年に橋本自らの家に開設し、本格的な地方文化研究の開始を開始した。この中で地域に大きな貢献をしながら埋もれて顧みられない人をあいついで発掘し、顕彰や名誉回復のためにペンを取った。さらにその業績を後世に永く伝えるため建碑運動に乗りだした⁸³⁾。地方の名前を掲げて活動をしていたのであり、橋本の地方への着目を示すものといえる。建碑運動では多くの碑を建立したが、例えば橋本の「真友」であり地方文化発展に寄与した須田松兵衛の「友の碑」(1951年)、困民党の首領であった塩野倉之助の碑(1954年)、近代に長野などの絹の産地から横浜港を経て輸出する過程の交通の要所であった、八王子地域を顕彰した「絹の道碑」(1955年)などがある。

加えて橋本はこの時期に精力的な著作活動にも取り組んでいた。梶国男は『村の母』『平井鉄太郎』『明治の末』『農家の年中行事』『伽羅の木のある家』『大伝道者メイラン』『地方の教育運動』『古代・中性地方史研究法稿』『平凡人の教育・文章』『天才』『砂漠に樹を』『小さな実験-監禁の記録』を建碑運動後の代表作に挙げている⁸⁴⁾。このうち『平凡人の教育・文章』(1960年4月)は橋本の文章に対する考え方が示されている書であり、「ふだん記」にも通じる理念の一つとなった。他にも八王子・立川で発行された地方新聞にも精力的に投稿をしている。1956年から1970年頃までの『商工日日新聞』『三多摩新聞』に掲載された橋本の原稿は、後に橋本義夫(橋本義夫、四宮さつき、松岡喬一編)『何でも書いて験してみた』ふだん記新書74、ふだん記全国グループ、1979年に目録がまとめられている⁸⁵⁾。

さらに、この時期橋本義夫は地方文化研究に関しては、八王子振興信用金庫の専務であった鈴木龍二の協力を得て多摩文化研究会を設立し、1959年4月に会誌<多摩文化>を創刊することになった⁸⁶⁾。<多摩文化>に橋本は、多くの論文を投稿している。掲載内容は多岐にわたっており、例えば近世の八王子周辺の半農の武士である千人同心(これは橋本家のルーツでもある)の名称に関して歴史的変遷を追った「千人同心と千人隊」(<多摩文化>10号、1962年3月)や、橋本の出身である川口村(現八王子市)に関して論じた「村の地誌-旧川口村の場合-」(<多摩文化>11号、1962年8月)や、明治期における暮らしにあったニワトリの姿を描いた「庭鳥」(<多摩文化>14号、1964年6月)などを書いていた。橋本の生きた地方文化を意識しながら書く事に精力的に力を注いでいた活動からは、

橋本の研究者、文筆家としての側面をみることができる。

第5項 「ふだん記」

橋本義夫の最大のライフワークが、「ふだん記」である。ガリ版刷りの雑誌〈ふだんぎ〉が出されたのは1968年1月、橋本義夫が68歳の時である。「ふだん記」は橋本義夫が『万人の文、万人の本』を目指し、これまでに橋本が執筆してきた経験を元に着想した、さまざまな理念を踏まえた文章執筆や出版を行う運動である。「ふだん記」はスタートしてから10年弱の1976年1月には八王子以外の最初の各地グループである八菅グループが神奈川県八菅に誕生する⁸⁷。その後北海道をはじめとして、関西、九州、東海、東北などに各地グループが広がっている。橋本義夫の活動が共感とともに全国に広がったことを示しており、「ふだん記」の社会的影響が垣間見える。「ふだん記」の特徴の一つはその独特な運動のあり方に見出すことができる。文章の巧拙を恐れず書く「下手に書きなさい」という誰でも文章を書けるように障壁を取り除く考え方もそうであろうし他にも多くの理念が込められている。

『万人の文・万人の本』を目標とし、人を選ばず、誰にも書かせ、誰の文でも本にする。機関誌『ふだんぎ』は、巧拙、金銭多寡、地位、年功の順などによらず、否むしる『新人優先』し、過去の文など模範にせず、正直話をすすめ、他人に劣等感を与えるのをさげ、自慢話や競争よりも、失敗談を書くことをすすめた⁸⁸。

無理をすることなく自然に、万人を大切にし、平等を重んじ、共感を呼ぶ。「ふだん記」はこのような理念が込められた運動であるという。橋本がその生涯の中でたどり着いた理念には多様な人を尊重し、平等に処遇する橋本の意志を見出す事ができる。

さて、橋本義夫の実践を通観した中でみえた、社会教育的意義を以下2点に示す。第1点は、橋本義夫が行ってきた実践そのものが、社会教育実践としての価値があることである。一例を述べると次のような事柄を挙げることができよう。戦前では青年期から地元根ざし取り組んだ活動は農村青年の学習機会の拡大が、書店揺籃社には地域の人々の知の集積地・居場所、文化センターの役割が、教育科学研究会との関わりや地域教育のなどの実践からは、地域教育の意義を認めることができる。戦後では、地方史研究や建碑運動では地域の再発見や歴史的文化の保存などが、「ふだん記」では万人を重んじ、人々の生きがいの獲得、執筆による学び・交流などの意義があろう。これら一つひとつの実践は社会教育の役割を十全に有している。

第2点は橋本義夫の存在そのものが地域に根ざした社会教育実践家として特筆すべき意義がある。戦前・戦中・戦後と長きにわたって地域のために貢献をしてきた人物の生涯は、まさに個人からみえる、在野の社会教育史の姿であると思われる。

小結

本章では橋本義夫を取り上げ、社会教育実践の側面から検証した。第1節では橋本義夫に関する先行研究のサーベイを行った。先行研究では、橋本を教育者という視点からみる研究、橋本の思想が橋本の実践に関わった人々へ及ぼした影響など教育の側面からの分析は十分ではなく、橋本研究における課題であること示した。第2節では橋本義夫、「ふだん記」に関わる主な資料に関して論じた。第3節においては橋本義夫の実践を取り上げ社会教育実践の視点から論じた。橋本は社会教育に通じる理念を持ち、その取り組みには社会教育実践としての意義が認められることなどを明らかにした。

第4部 第1章 注

1 横山宏編『成人の学習としての自分史』国土社、1987年、では橋本の「ふだん記」を「自分史」の原点に位置づけている。

2 浪江虔『図書館運動五十年 私立図書館に拠って』日本図書館協会、1981年。

3 色川大吉「現代の常民—橋本義夫論 昭和精神史序説」、〈中央公論〉89(8)、中央公論新社、1974年8月、pp.123-152。

4 同前、pp.124-125。

5 同前、p.124。

6 同前、p.124。

7 同前、pp.151-152。

8 同前、pp.152。

9 同前、pp.152。

10 色川大吉「自分史論」、色川大吉『色川大吉著作集第三巻 常民文化論』筑摩書房、1996年)、p.365。

11 同前、p.361。

色川は以下のように、民衆史の掘り起しなどの観点から橋本の取り組みを高く評価している。

「橋本義夫はこれから長く研究される人物になるであろう。彼の一生には拾っても拾っても尽きない光った形見が残った。彼こそ民衆の真の自立を熱望した警世家であり、民衆史掘り起こし運動、庶民の自分史運動の先覚者、実行者であったからである」。

12 同前、p.389。

13 同前。

14 渡辺奨「地方史研究と文化運動・ふだん記運動の原点と継承」〔地方史研究協議会 1986

年度] 大会特集・新しい地方史をめざして)・(問題提記)」、<地方史研究>36(4)、地方史研究協議会、1986年、pp.28-32。

15 同前、p.31。

16 梶野半十郎『土の巨人』、たましん地域文化財団、1996年。梶野半十郎「掘る人 蒔く人—塩野半十郎・橋本義夫—」(pp.71-105)では橋本の戦前のあゆみが、梶野半十郎「万人の文章」(pp.227-271)では終戦から「ふだん記」までの橋本のあゆみがそれぞれ論じられている。

17 小林多寿子『「ふだん記」運動の展開過程と戦後のリテラシーの変容に関する実証的研究』(平成15-16年度科学研究費補助金基盤研究(c)(2)研究成果報告書)、2005年、桜井厚編『戦後世相の経験史』せりか書房、2006年など。

18 小林多寿子「書く実践と自己のリテラシー」、桜井厚編『戦後世相の経験史』せりか書房、2006年、p.259-260。

19 小林多寿子「書く実践と書く共同体の生成：初期『ふだん記』運動の場合」、<生活學論叢>3、1998年、pp.59-70。

20 同前、p.68。

21 上田幸夫『「生活」と「歴史」をつなぐ「自分」の発見—「自分史」学習の系譜』、前掲『成人の学習としての自分史』、pp.10-40。

22 増沢航「橋本義夫が遺した記録—建碑運動という方法」、<国際文化研究紀要>14、横浜市立大学大学院国際文化研究科紀要委員会、2007年、pp.59-82。増沢航『記録の戦後史—橋本義夫が遺した記録—』ふだん記創書24、ふだん記雲の碑グループ、2007年。

23 増沢航『記録の戦後史—橋本義夫が遺した記録—』ふだん記創書24、ふだん記雲の碑グループ、2007年、p.79。

24 同前、pp.101-102。

25 小倉英敬『八王子デモクラシーの精神史 橋本義夫の半生』日本経済評論社、2002年。

26 同前、p.263。

27 同前、p.268。

28 土橋寿「新人類文化提唱者・橋本義夫論：『ふだん記』の哲人」、<研究紀要>13、帝京学園短期大学、2004年、pp.1-21。

29 同前、pp.14-15。

30 辻喜代司「庶民による人生の記録の創出—橋本義夫と初期『ふだん記』運動の場合」、<京都大学生涯教育学・図書館情報学研究>9、2010年、pp.73-88。

31 同前、p.82。

32 同前、p.83。

33 橋本義夫「青年版『ふだん記』のすすめ(四) 暗いその向こうに光がある」、<青年>136号、日本青年館、1980年9月、p.32。

34 四宮さつき、香川節編『橋本義夫先生追想集』ふだん記本105、ふだん記全国グループ、1986年。

35 井出喜代子「哀悼の花束 橋本先生安らかに」、『橋本義夫先生追想集』同前、p.100。

36 小林薫「永遠の師 橋本先生へ捧ぐ」、『橋本義夫先生追想集』同前、p.102。

37 橋本義夫『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』講談社現代新書、1978年、p.50。

38 橋本義夫生誕100年を記念する会編『紙の碑 ふだん記運動創始者 橋本義夫の生涯と自分史の源流展図録』揺籃社、2002年。

39 同前、pp.5-17。

40 梶野半十郎『土の巨人』たましん地域文化財団、1996年。

41 橋本鋼二『万人に文を 橋本義夫のふだん記に至る道程』揺籃社、2017年。

42 橋本義夫生誕100年を記念する会編『紙の碑 ふだん記運動創始者 橋本義夫の生涯と自分史の源流展図録』、揺籃社、2002年。

43 橋本義夫(色川大吉、梶国男、清水英雄編)『砂漠に樹を 橋本義夫初期著作集』揺籃社、1985年では、橋本による八王子での教育運動の記録や、天才研究、戦後地方文化活動の記録が、橋本義夫(橋本鋼二編)『暴風雨(あらし)の中で 橋本義夫著作集第2集戦中戦後日記・手記』「ふだん記」旭川グループ、1996年は橋本の戦前や戦中、敗戦直後の日記・手記、更には戦前から戦中に書けた印刷配布したビラなどが収められており、これらも橋本の生涯を知る貴重な史料である。

44 前掲『八王子デモクラシーの精神史 橋本義夫の半生』、p.3。

45 橋本義夫『橋本喜市のこと』地方文化資料 第52集、地方文化研究会、1961年。

46 橋本義夫『村の母 橋本春子のこと』文化サロン双書第二、八王子文化サロン(後援 多摩文化研究会)、1966年。

47 前掲『八王子デモクラシーの精神史 橋本義夫の半生』、p.3。

48 前掲『橋本喜市のこと』、pp.2-4。

49 同前、pp.5-7。

50 橋本義夫「御母讃」、橋本義夫『村の母 橋本春子のこと』文化サロン双書第二、八王子文化サロン(後援 多摩文化研究会)、1966年。詩の全文は以下のとおりである。(ふりがなは語句の後に記した)

御 母 讃(おかあさん)

優しかりしが

強かりき

働きたれど

常に感謝しぬ

難(かた)き事は進みて為せしが

誇らざりき

言葉尠(すく)なからざりしが

黙(もく)すべきを知れり

美を好みたれど

おぼれず

世の多くの人びとを愛して

生を終る

51 植竹圓次「橋本義夫氏の著書に寄す」、前掲『村の母 橋本春子のこと』、p.1。

52 橋本義夫「はしがき」、『村の母 橋本春子のこと』同前、p.7。

53 前掲『土の巨人』、p.270。

54 梶国男「橋本義夫の生涯」、橋本義夫(色川大吉、梶国男、清水英雄編)『砂漠に樹を 橋本義夫初期著作集』揺籃社、1985年、p.405。

55 橋本義夫(岡田勝美編)『新人類文化のすすめ—宛名のない手紙—』ふだん記新書130、ふだん記旭川グループ全国グループ、1983年、p.22。

56 文部省『学制百年史』(1972年初版発行、1981年15版発行)、pp.267-438。

57 同前、p.297。

58 南多摩郡役所『南多摩郡史』、1922年、p.58。

59 「青年団体状況調査(大正10(1921)年5月)」、八王子市市史編集委員会『新八王子市史資料編5近現代1』八王子市、2012年、p.380。

60 橋本義夫「地方の教育運動—昭和戦前の八王子周辺—」(1959年)橋本義夫(色川大吉、梶国男、清水英雄編)『砂漠に樹を 橋本義夫初期著作集』、揺籃社、1985年、pp.277-278。

61 橋本義夫「八王子に於ける教育運動—薫心会の活動記録」、<教育>岩波書店、1939年10月号、pp.66-75。

62 保坂一房「昭和初期の南多摩郡青年団—松井翠次郎の動向を中心に—」、パルテノン多摩

-
- 編集発行『地域文化の源流 多摩に生まれた「学び」の系譜』、2001年、pp.72-78。
- 63 前掲「地方の教育運動—昭和戦前の八王子周辺—」、p.278。
- 64 前掲「橋本義夫の生涯」、p.405。
- 65 前掲「地方の教育運動—昭和戦前の八王子周辺—」、p.278。
- 66 前掲『土の巨人』、p.95。
- 67 同前、p.97。
- 68 橋本義夫「昭和十七年(一九四二年)～二十年(一九四五年)に店内に張り出したり、特に書き残した短言」、前掲『暴風雨の中で』、pp.289-290。
- 69 前掲『八王子デモクラシーの精神史 橋本義夫の半生』、pp.100-114。
- 70 同前、p.114。
- 71 佐藤広美『『教育科学研究』解題』、佐藤広美・高橋智編『戦前 教育科学運動史料1』緑陰書房、1997年、p.1。
- 72 橋本義夫「地方の教育運動—昭和戦前の八王子周辺」、橋本義夫(色川大吉、櫛国男、清水英雄編)『砂漠に樹を 橋本義夫初期著作集』揺籃社、1985年、pp.275-313。
- 73 菱山栄一「地方通信 南多摩」、<教育科学研究>第1巻第1号、教育科学研究会、1939年9月)、p.11。
- 74 菱山栄一「毎月例会と本部の協力—八王子」、<教育科学研究>第2巻第1号、1940年1月)、pp.20-21。
- 75 同前、p.21。
- 76 前掲「地方の教育運動—昭和戦前の八王子周辺—」、p.306。
- 77 前掲「橋本義夫の生涯」、p.406。
- 78 橋本義夫「小さな実験—監禁の記録」、前掲『砂漠に樹を 橋本義夫初期著作集』、pp.317-361。
- 79 前掲「地方の教育運動—昭和戦前の八王子周辺—」、pp.312-313。
- 80 前掲『土の巨人』、p.120。
- 81 橋本義夫「天才—地方は天才を生むが育てない利用しない—」、前掲『砂漠に樹を 橋本義夫初期著作集』、p.106。
- 82 同前、p.103。
- 83 前掲「橋本義夫の生涯」、p.408。
- 84 同前、p.408。
- 85 橋本義夫(橋本義夫、四宮さつき、松岡喬一編)『何でも書いて験してみた』ふだん記新書74、ふだん記全国グループ、1979年。
- 86 前掲「橋本義夫の生涯」、p.409。
- 87 四宮さつき『十年—ふだん記と共に—』ふだん記本50、ふだん記全国グループ、1976年、p.77。
- 88 橋本義夫(岡田勝美編)『新人類文化のすすめ—宛名のない手紙—』ふだん記新書130、ふだん記旭川グループ全国グループ、1983年、p.17。

第2章 橋本義夫の学習論研究—「ふだん記」を対象に—

本章では庶民が自由に文章を書き、出版する運動である「ふだん記」(ふだんぎ)を対象に、創始者の橋本義夫の言説を学習論にまとめようと試みる。橋本は東京都八王子市域に位置する川口村(現八王子市)出身である。「ふだん記」は全国に広がり、現在もなお日本の各地で活動が行われている。本章では「ふだん記」を生んだ橋本の理念を学習論として解き明かすことを目的とする。

書くことをテーマにする実践は、1950年代からの生活記録運動など日本の学習史上に果たした意義は大きい¹。「ふだん記」もこうした実践と同様の書く実践であり、人々の持つ、書きたいと思う要求が「ふだん記」の中に込められてきた。

人々の要求に関しては、「要求以前のものが、要求となる過程こそが、問題意識の創出過程であり、教育活動の原点である」とする言説がある。要求創出は「未だ表現されざる意識」を解明し、表出部と照らし合わせるということが重要であるという指摘である²。「ふだん記」には「下手に書きなさい」と訴えかけることによって、内在する要求が書く実践の形で表出されたものであり、その考えをまとめることは学習者の自己教育を支える方法のあり方に示唆を与えうると思われる。

先行研究を見れば、日本の成人の学習論として、三輪建二は1970年代からの成人発達研究、1980年代からのアンドラゴジーをめぐる理論の展開、1980年代後半からのポスト・アンドラゴジーなどの3つの潮流を示している³。この流れを受け近年では日本社会教育学会における2001年秋から2003年にかけてプロジェクト研究「成人の学習」及びその成果を踏まえた年報第48集『成人の学習』(2004年)がある。そこでは「成人の学習論の諸相」、「学習プロセス・方法の革新」、「学習支援者・専門職の力量形成」、「学習する組織の展開」で構成されている⁴。

また、ライフ・ヒストリーに関わる研究、すなわち自らの歴史を振り返る学習が近年、社会教育の学習論研究にも取り入れられている。成人の学習論に関して、ブルックフィールド、メジロー、クラントンらの「意識変容」を念頭に置いた上で、長期のスパンの中で分析を行った研究⁵、さらに20代から30代のヤングアダルトを対象のライフ・ヒストリー分析による学習論の意義をみいだした研究⁶などがそれである。これらからみえるように、成人の「意識変容」志向の学習に関する議論の深化や、ヤングアダルトの自立に向けた歩みの分析など、ライフ・ヒストリーが学習者の学びを深める可能性が模索されてきた。

社会教育研究の中でライフ・ヒストリー研究が展開されてきたことの意義は、一つに新たな成人の学習方法を拡大・深化させたことであり、もう一つは人々が記したライフ・ヒストリーそのものが学ぶ題材としての価値があることを示したことである。しかしながら、これまでの社会教育におけるライフ・ヒストリーに関する研究では、書き手がライフ・ヒストリーを書き始めるに至るまでの過程は明らかにされることは少なかった。そこで、本章は書き手がライフ・ヒストリーを書き出せるようになるまでに導く過程を解き明かすことに着目し、学習者が容易に学べるように支える学習論を「ふだん記」から見出すことを試みたいと考えた。

「ふだん記」は書くことは難しいという先入観に対抗し、平明に万人に文章を書くように説いた文章執筆・出版の実践であり、誰もが学べることを是とする橋本義夫の学習論は、まさに誰もが生涯にわたって学び続ける生涯学習の理念に通じるものである。しかし、これまで橋本は社会教育・生涯教育の側面から取り上げられることは必ずしも多くなかった。

そこで本章は第1節 「ふだん記」の成立と平凡人の教育、第2節 橋本の学習論における鍵概念、第3節 「ふだん記」の展開、第4節 橋本の学習論の検討の構成により論じる。

第1節 「ふだん記」の成立と平凡人の教育

第1項 橋本義夫の略歴及び初期「ふだん記」の概要

(1) 橋本の略歴

橋本義夫の学習論を考察する前提として、なぜ橋本は文章を書くことのなかった人々を支えて文章を書かせようとしたのか、ここで改めて橋本の略歴を概観しつつ橋本の学びを確認したい。1902年生まれの橋本は1985年に83年の生涯を終えるまで、戦前・戦中・戦後の長きに亘りさまざまな実践に取り組んでいる。その生涯については八王子の歴史家梶国男による小論などで知ることができる⁷。橋本は学校時代に劣等感に悩んでおり、学校嫌いであった⁸。

機関誌である〈ふだんぎ〉1号は1968年に出版されている。当初の「ふだん記」はまだ活動の進め方など定まったものではなく、試行錯誤のすえ「ふだん記」のスタイルは1973年頃に定まったという⁹。「ふだん記」が全国的に注目を集めることとなったのは、橋本を取り上げた色川の雑誌記事¹⁰などが契機であり、さらに、1976年には橋本義夫の地元・八王子以外の地域に「ふだん記」の活動を行う八菅グループができ、以降、全国に広がった。

日本では1960年代から1970年代にかけて国民総生産はほぼ毎年のように前年度比10%以上の伸びを記録した時代でもある¹¹。「ふだん記」が始まったのは、いわゆる高度成長期を経験した後の時代である。むしろ地道に静かに広がっていったのが「ふだん記」である。

(2) 初期「ふだん記」文友の概要

「ふだん記」では、「ふだん記」の活動に参加し執筆していた人々を文友(ぶんゆう)と呼ぶ。ここでは「ふだん記」文友の初期の概要に関して、小林多寿子や辻喜代司の研究を参照しつつ論じたい⁽¹²⁾。第一は執筆者の性別である。「ふだん記」初期の執筆者は、女性が多い。

橋本義夫自身は、こう語っている。

『ふだん記』、最も多くの喜びと協力のあったのは、無名の家庭主婦であった。次は無名の職人、働く人、今迄社会で花の咲かぬ層であった。女性層と、花の咲くチャンスの無かった男性のそこから湧き上がる、喜びとエネルギーの燃え上がりを見て、第一に驚いたのは私であった¹³。

すなわち、抑圧されてきたエネルギーを持つ人々のためのものであったととらえているのである。

小林研究では、1968年から1970年までの機関誌<ふだんぎ>を、辻研究では1968年から1977年の『ふだん記本』及び『ふだん記新書』から橋本を除いた性別執筆者割合をそれぞれ調べている。<ふだんぎ>では、第1号は女性率が93.3%。最も女性率が低い第3号の50%であるものの、1号から17号までの女性率の平均は60.71%で女性の比率が高い¹⁴。一方『ふだん記本』と『ふだん記新書』の女性率は53.5%でやはり女性の執筆者が多いが男性も参加する運動であったと指摘されている¹⁵。

女性の執筆者に関しては、職業では主婦業を含む者が圧倒的なこと、学歴では小学校卒(高等科、高等小学校、裁縫学校含む)、青年学校・中学校(新制)・高校(同)が多数を占めつつも、大学や師範学校など広範に渡るため一概に学歴が低いとは言い切れないとの指摘がある¹⁶。比率からみても主婦などの女性が主な担い手であったが、女性も偏った層に限られたことはなく、学歴の多様性や男性の文友も含まれることがみえるから、女性の学びが中心となりつつもそこに限らず他の層も含まれており、橋本義夫のいう万人のための書く運動の性格がここからもみえる。

第二に年代であるが、『ふだん記本』と『ふだん記新書』に関しては90代1名、80代2

名、70代9名、60代24名、50代15名、40代11名、30代5名、故人3名(不明2)であった¹⁷。中心的な執筆者は70代～60代であった。

第三は執筆者の地域性であるが、当初は八王子の執筆者が占める割合が高かったが、徐々に比率が下がり、地域的に広がってきた(<ふだんぎ>1号で86.7%。以下4号は85.7%、6号85.7%、8-12号77.6%、16号54.5%)¹⁸。

(3)「ふだん記」の言葉にみえる橋本の理念

橋本の学習論の基盤となる理念の探求のため、「ふだん記」の言葉に込められた意味をここではとりあげたい。以下に橋本の言葉の一つを取り上げる。

『ふだんぎ』がほんとうの姿とも云えるでしょう。『よそゆき』は芝居がかったものが少なくないでしょう。勿論『よそゆき』は必要ですが、『ふだんぎ』は其何十倍も大切です。『ふだんぎ』は生活そのものだからです。ここに『ふだんぎ』と云ったのは、着物ばかりでなく、生活のすべてのシンボルを云います。『ふだん』の生活をよくし、『ふだんぎ』でつきあい、『ふだんぎ』で話し、『ふだんぎ』でものを書きましょう。(中略)なるべくひらがなを元にし、ごちゃごちゃした漢字を少なくする。手紙から文まで何でもよい。みんなの言葉、みんなの字、ペン、鉛筆、なんで書いてもよい¹⁹。

これは橋本義夫が「ふだん記」を始める前の1958年頃の文章の書き方を述べた言葉である。「ふだん記」は「ふだん着」の言葉に通じる意味があることであり、「ふだん」で書くようにすべきであると橋本義夫は論じている。「ふだん」こそが大切な意味を持ち、生活そのものであり、文章においても「ふだん」の姿で書くべきとしていたのである。

その後、文章の書き方を論じた『平凡人の文章』(1960年)を経て、徐々に「ふだん記」の型がみえてくる。「ふだん記」運動の中で出されている主な出版物のうち機関誌の<ふだんぎ>(1968年1月創刊)に橋本義夫の考え方が示されている。「みんなが文章を書く習慣をつける目的。できるだけ新人優先。劣等感をもたせぬ為、競技はさける。楽しく書き、楽しく読む様心掛けています。問合せや原稿送り先は、グループの人なら誰でもいい²⁰」とする言葉には新人優先、劣等感をもたせぬなど「ふだん記」における根幹となるキーワードが含まれている。つまり、「ふだん記」は誰もが入れるよう開かれたものであるべきで、機関誌<ふだんぎ>はより多くの人に門戸を開き、参加者が書くことの力を伸ばすことも意

識されて出版されていたといえよう。

橋本義夫の誰でも文は書けるとする考え方は、『ふだん記案内-万人の書く文・出せる本-』（ふだん記新書 31、ふだん記全国グループ、1976 年）の巻頭言の「私でも書けるんだから、書けない者はない²¹」という言葉からもみることができる。文章が万人のものであることを意識していた橋本義夫の視座がここに示されている。

なお万人のものという視点は書かれる文章だけでなく、本を出版することにも向けられていた。「ふだん記」では、文章を機関誌〈ふだんぎ〉に掲載し、さらにそれぞれが書いた文章をまとめて、単行本の形で出版する『ふだん記本』が出される。新書や単行本など形態はさまざまであるが、万人のものという視点でそれぞれが本を出せることにも目が向けられていた。「ふだん記」初期の 1970 年代に出されていたふだん記新書の巻末の刊行説明で橋本はこう述べる。

『ふだん記』は「万人の文章」「万人自身の言論」を目標として来たが、この大きな情勢下には地平線に出るべき時であろう。この事情を受けて『新書』を刊行することにした。グループ及多くの人々の協力を待つ²²。

文章は限られた人のものではないとする橋本の考えがここにも表されており、万人の言葉が文章となり本として世間に出るべきであるとする意志を伺い知る事ができる。劣等感に悩んできたという「平凡人」が書く実践を続ける中で着想した、万人に書かせようとする「ふだん記」運動は、万人及びその文章が尊重されるべきとの考えを一貫して投げかけており、万人が書くことのできる実践の底の一つを成していたのであろうと思われる。

なお、本の出版の方法に関して橋本は、商業出版、官庁出版、個人自費出版などの出版方法とは異なる「ふだん記」的グループ出版を提起し、グループの人々や地域の印刷所との協力を得ることにより作り手に負担の少ない方法での出版を推奨していた²³。誰でもできるように負担を減らそうとする「ふだん記」の理念がここからも読み取れる。一方で出版、刊行し「地平線に出る」ことに際しては、グループ以外にも広くさまざまな読者に対するアプローチが必要であるように思われるが、書き手が自由に書く「ふだん記」の文章がどのようにグループ以外の読者層に受け止められていくかという受容過程は、出版に関する言及の中でみることはできなかった。

（４）「ふだん記」の出発に際しての橋本の言説

次に「ふだん記」がどのように出発したかを橋本義夫の言葉を中心にとらえることを試

みる。ここでは橋本義夫が「ふだん記」を始めるに至った経緯をみたい。

橋本義夫が「ふだん記」を始める前に、地域文化運動に携わり雑誌の投稿などを通じて相当に多くの文章の執筆を積み重ねてきたことは橋本の概略で述べたとおりであるが、「ふだん記」そのものの創始は橋本自身の著書、『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』（講談社現代新書、1978年）において記されている。家庭の主婦に文章を書くことをすすめて歩いているなかで、主婦の作文である『多摩婦人文集』をきっかけに書く運動を始めたことがきっかけと語られており、さらに「ふだん記」をおこした重要人物である主婦の四宮さつきの存在を示している²⁴。

「ふだん記」は橋本の個人的な経験からはじまり、書くことに関する橋本のコンセプトに対する協力者を得ることで具体的な活動へとつながる経緯を出発点としていた。「ふだん記」は橋本義夫という稀代の実践家あってこそその運動ではあるが、四宮さつきのような協力者の存在を得て始められたことも重要な事実である。換言すれば「ふだん記」は共感の広がりによって支えられている運動であり、橋本がこれから「ふだん記」のあり方をどのようにすべきかの着想を得る上での基盤の一つになったことが推測できる。

機関誌〈ふだんぎ〉は1968年1月に、主婦によるガリ版刷りのわら半紙で初めて発行されたものである。橋本は〈ふだんぎ〉の当初に関して、「これが続くなどと思う人はだれ一人いない。だから表紙に番号さえもなかった。そんな機関紙でも『発刊のことば』だけは立派だった²⁵」と述べる。

不格好で小規模の雑誌で、橋本は続くとは思わなかったといいながらも、橋本義夫は『発刊のことば』が立派だったと自負している。「発刊の辞」をみると、「ふだん記」が続かないと思いつつも「ふだん記」に大いなる期待を持っていることが推察できる。その後「ふだん記」は全国的に運動が広がり継続されていくのは多くの人を知るところである。

〈ふだんぎ〉「発刊の辞」にはこう記されている。

「人類の勝利の大きな原因の一つはみんなが言語をもつことであつた。だがその勝利を一層決定的なものにしたのは、文字とその組合せによる文章をもつことであつた。然し、この文字、文章も、長い長い間は、直接には一部の特権者や、そのための文章職人等のものであり、上意下達的存在であつた。とに角、言語と文字は人類社会を今日の如く大きく発展させた。更にその能率を高めるためには、『言語が万人のものである如く、文字もまた万人のものでなければならぬ』と信じる。これが我々の道である。然し、世の多くの発表

機関はいまだに過去の習慣の中に沈み、(何とか理屈をならべているが) 門を閉ざしている。文字が万人のためであるためには発表機関もまた門が開いていなければならない。我々は、我々に開かれた発表機関を各方面で持つ必要がある²⁶】。

人類はみなが言語をもっていること、文字と文章をもっていることが人類にとって重要なこと、さらに言語が特定の人間のものではなく、みんなのものであるとし、「言語が万人のものである如く、文字もまた万人のものでなければならぬ」ともいう。このように「ふだん記」運動の出発を力強い言葉で宣言している。橋本の視点は徹底して万人に向いていることが言説から伺うことができる。

「ふだん記」の運動スタイルは、開始当初は未完成ではあったが、根幹を成す考え方に關しては<ふだんぎ>の創刊時に既に完成されていたことをここから読み取ることができる。特に、文章を書くことは万人のものであるとする考え方は、誰もが生涯にわたってあらゆるところで学び続けるという「ふだん記」運動のもつ社会教育・生涯学習の意味を考察する上でも示唆を与えるものである。

例えば、社会教育に関わる領域において重要なものの一つに識字がある。<ふだんぎ>の創刊のことは、日本のように識字がある程度の浸透をみせている国において、どのように学んでいくべきかに関する橋本の支え方が示されている。つまり、言語や文字が万人のものであるために、世の中には庶民が発表できる場があるべきとしていたのである。

すなわち、「ふだん記」の根幹にあるのはただ文章を書くことだけではない。文字や文章は万人のもので、万人が書くことができ、発表機関が開かれているべきなど、言葉が万人のものになるとする「ふだん記」の基本的考え方がここに明言されている。

なお、橋本は発刊の辞の末尾においては、「ふだん記」は文章を書くことを繰り返すことであるとした考え方も表明している²⁷。人間は文章を何度も書くことで、積み上げていくべきであり、この観点からみても発表機関があることの意義は「ふだん記」に係る人間にとって非常に大きい。「ふだん記」の出発段階から既に、「ふだん記」の運動の中において行われる学習の方法は、書くことと発表することの双方を行うことであると、明確に示されていたことがわかる。

「ふだん記」出発時の橋本の理念は、一貫して万人に向けられており、「ふだん記」がのちに多くの人々に受け入れられた理由の一端をみることができた。

第2項 「ふだん記」の展開

(1) 初期「ふだん記」以降における活動の展開

ここでは橋本の理念が文友に受容された後の「ふだん記」をみるため、「ふだん記」運動の機関誌である〈ふだんぎ〉の創刊号が出された1968年1月以降の「ふだん記」の展開に関する具体的姿を追っていきたい。参考とするのは、橋本義夫とともに「ふだん記」を支え続けた四宮さつきによる、四宮さつき(橋本義夫編)『十年-ふだん記と共に一』(ふだん記本50、ふだん記全国グループ)である。

同書は四宮による「ふだん記」運動の実証記録である。橋本義夫の言葉を借りると、「実務担当面の多い筆者(四宮さつき：引用者補足)の本書は『ふだん記運動史』の重要な生きた資料²⁸」であり、詳細年表形式で「ふだん記」の初期にあたる四宮さつきの橋本義夫との出会い(1966年12月)から10年後(1976年11月)までの歩みを記してある²⁹。

全体で80ページを超える多くの内容になっているが、注においては機関誌〈ふだんぎ〉の発行(5号刻み)や関連する本の発行、「ふだん記」がマスコミに取り上げられたものなどを中心に取り上げた。ガリ版にて出版されたのは17号(1970年12月)まで、18号(1971年1月)よりタイプ印刷になっている。初期の活動の中でも、朝日新聞やNHKラジオなどに取り上げられることもあり、多くの参加者が増えていたことも『十年-ふだん記と共に一』から知ることができる。

例えば、〈ふだん記〉10号の記念会では参加者45人であったのが、その後5回を迎えた「逢う日・話す日」(「ふだん記」運動での交流会)では89人の参加となっていた。さらに、橋本がすすめる地域の印刷所の協力を得る実践(清水工房)を行なってきたのもこの時期に確認できる。発行した〈ふだんぎ〉は45号にのぼる。

初期「ふだん記」以後の展開をみてわかるのは、色々な人の協力を得ながら着実に活動の規模が大きくなってきたことである。「ふだん記」は、「新人優先」などの差を設けず新しい人間が入りやすいようにする方法をとっていたことも作用していたのではなかろうか。

(2) ふだん記各地グループにみる地域の広がり

本項では「ふだん記」運動を全国で行っている、ふだん記各地グループについてもふれておきたい。「ふだん記」に初めて各地グループが出来たのは、1977年、神奈川県八菅のふだん記八菅グループである。「ふだん記」では「独立するが孤立しない」をその理念に掲げており、各地に「ふだん記」の理念に共感しつつ執筆をするグループがある。20ほど

のグループが活動を続けている。例えば、北九州、あいち、雲の碑(八王子市)、みちのく(仙台市)や、北海道にさいはて(北見市)、旭川、札幌、留萌、江別、帯広のグループなどがある。

これらからもわかるように、「ふだん記」は多くの賛同者を得て、全国に広がっている。「ふだん記」が各地に広がることを橋本は期待し、推奨していたこととも平仄を合わせているようにみえる。「ふだん記」の方針と各地グループに関して橋本は「各地にグループを」と題した一節において次のように述べる。

『その土地よかれ、その人よかれ』が方針である。庶民自身の文化だから、中央集権を避け、地方分権的にならねばならない。とくに、先進国がなくなった今日では、地方地方が独立的に、地方色を出し、独創を生む素地にしたい。先進国は、地方が各々に先進的な歩みをするものである。この意味でも各地にそれぞれ『ふだん記』グループをつくり、それぞれの文章街道を建設しなければならない³⁰。

それぞれの土地の良さを重んじることの重要性を、はっきりと述べている。地方が独立しながら、地方の色を出し、独創を生むことを橋本は期待していた。「ふだん記」では個人個人それぞれが、自らでないと書けない文章を書くよう勧めることと重なる。すなわち地域においても各々の土地の良さを生かしたものであるべきであるというわけである。

橋本は地域に根ざした実践家らしく地方分権を掲げている。地方それぞれの独自性を出すことで新しい時代を作りたいとする考え方は、先進的と思われる。

上記文において、文章街道を建設しなければならないと述べているが、この文章街道に関しては、このように説明している。

文章街道³¹

「この街道には、車のラッシュがありません。
コンピューター、機械づくめ、規格がないんです。
この街道は、静かです。さわやかです。暖かいです。
サラリーマンも、職人も、若人も、年寄りも、^{よそもの}他所者も、
だれでもみんな胸をはって、伸び伸びと歩きます。(以下略)」

橋本は各地に広がってほしい活動の姿を、丁寧に簡易な言葉を用いて説明している。現代文明を象徴するものとして、車のラッシュ、コンピューター、機械、規格などを挙げな

がら、文章による運動ではこれらが無いものとする。さらに、心地いいものであり、いかなる職業であっても、年齢であっても、地域であっても、伸び伸びとできるともいう。さらに、地域が離れていても心が通じ、色々な感情を伝えあうものであると伝えている。

「ふだん記」を通じた地方による文化の発展を勧める過程においても、橋本は一貫して競争をせず平等を重んじていることが読み取れる。それぞれの持つ良さを重視する。こうした橋本義夫の平等公平の理念が多くの人々に受け入れられたからこそ、「ふだん記」各地グループの発展が広がっていたものと考えられる。



▲1984年10月21日逢う日話す日（橋本鋼二提供）

（3）「ふだん記」が拡大した理由

「ふだん記」の成長の理由に関し橋本自身が分析している言説もみられる。「何がここまで成長させたか」と題された以下の一節である。

『万人の文章、万人の本』をねらって生まれた『ふだん記』をここまで育てたのは、実は現在の日本の経済の生長と人類文化の前進という条件なのである。この『時』が私たちがごとき小っちゃな、無力な、痩せ細った平民たちの夢と試みを育ててくれた最大の理由である。どう考えても、その他の事でここまで進ませることはできない。（だから私はこれを拾い物という）

『私でも文が書けるんだから、書けない者はない』これが人々への文の勧めの言葉であった。『こういう人でも本がつかれるんだから、作れないものはない』これが『ふだん記本』サンプル作りの意味である。同様に『ふだん記運動』にしても、中央集権

的でなく、何時、何処でも誰でもできるものである³²⁾。

橋本自身は、「ふだん記」が広がった背景には、当時の日本の時代状況があると指摘している。すなわち、誰でも文章を書けるようにする自由や、識字、印刷技術の伸展などがあるというのである。このことは確かに、「ふだん記」発展の一因であることは間違いない。しかしながら、橋本のいう「拾い物」だけではないように思われる。なぜなら、文章を出せる条件が整っていたとしても、万人が文章を書けるようにならねば、その条件を生かすことは難しいためである。その意味では、橋本義夫の持つ人々に書かせようとする理念の意義は非常に大きいものである。

橋本義夫は、ふだん記運動は何時でも何処でも誰でもできるものと述べるが、このように誰でもできる運動を始め、広めていったのは、橋本義夫自身であり、さらに橋本の理念に共感をして活動に参加した多くの文友たちである。「ふだん記」の活動の展開からは、端緒は個人ではじめた学習・文化活動であっても、誰でも参加できるような活動でありそれが支えられるものであれば、時代・地域を越えて広がり多くの成果、(機関誌や文友個人の本など)が生まれることが可能であることがわかった。

第2節 橋本義夫の学習論における鍵概念

次に、橋本義夫の学習論における鍵概念の抽出を橋本の言説から試みたい。万人のための文章運動「ふだん記」には、その実践の性格を特長づける橋本が発した印象的な言葉が多くある。本節では、橋本義夫の述べる「ふだん記」の学習論に関して、これらの言葉を軸にして探る。

橋本は数多くの著書を残しているが、本節ではいくつかの書を対象に限定した。第一は、橋本義夫が「ふだん記」を始める以前にまとめた、文章に関する理論を記した書物、①橋本義夫『平凡人の教育と文章』(地方文化資料第49集、1960年、これは教育論である『平凡人の教育』と文章論である『平凡人の文章』の合本)である。第二は、この増補版である②橋本義夫『みんなの文章～万人文章論』(ふだん記草紙第1、みんなの文研究会、1960年4月初版発行、1968年4月増補再販発行)である。第三は、橋本義夫による「ふだん記」の概要をまとめた実践書である③橋本義夫『ふだん記案内-万人の書く文・出せる本-』(ふだん記新書31、ふだん記全国グループ、1976年)である。

第四は、④橋本義夫『ふだん記の大道-その道標-』(ふだん記全国グループ、1978年)、第五には、⑤橋本義夫『だれもが書ける文章』(講談社現代新書、1978年)を用いる。この

二冊は橋本義夫自身がこの本に関して「基本的な本³³」と評価していることで、橋本義夫の「ふだん記」の理論を概観するにあたり、ふさわしいと考えたため分析対象に取り上げた。なお、広く一般に流通した新書、『だれもが書ける文章』は「ふだん記」が普及されるにあたって、広く読まれた書籍であり、広く市販された書籍ということから橋本の文章論がまとめられたものとしての価値があると思われる。

①『平凡人の文章』

まず①橋本義夫『平凡人の文章』(1960年)³⁴をみていこう。『平凡人の文章』は「ふだん記」の原点ともいえ、橋本の基本的な考え方が読み取れる書であると思われる。目次には橋本の考える文章のあり方が端的に示されている。

『平凡人の文章』目次³⁵

- 一、妨げる者-名文、国文教師
- 二、みんなの言葉、みんなの文
- 三、これからの文章
- 四、後ろを向かないで
- 五、二、三、の注意
- 六、手紙
- 七、話し言葉、書き言葉
- 八、書かぬは下手以下
- 九、有力な手段

『平凡人の文章』は「ふだん記」の原点ともいえる書であり、「ふだん記」における学習論に通じる基本的な考え方の多くがすでにこの時点で示されている。以下大要を記す。「一、妨げる者-名文、国文教師」では文章は難しくかつ良い文章をみることで、文章を書こうとする意欲が減ってしまうことへの警鐘を鳴らす。「二、みんなの言葉、みんなの文」では文章はどんな文章があってもよい。つまり凡人の文があってもよいこと、誰でも書けるものであることを述べられている。「三、これからの文章」では文章は現在や将来に知らせるための手段であり、どう書くかではなく何を書くかを意識するべきであることが書かれている。「四、後ろを向かないで」では本文中の章題は異なった題名ににあっており「四、後ろ向

きではだめ」とより断定調のものになっている。ここでは、文語や難しい字を使って過去の人に恥ずかしくない文章を書くよりも、凡人の文章を書き未来の人々を意識すべきであることが書かれている。

「五、二、三、の注意」は、文章を書くに当たっての指導での留意点や心構え、具体的方法として小文の積み重ねであるべきことなど 2,3 の注意事項が書かれている。「六、手紙」では、万人の文の基本は手紙であり、自分なりの文で手紙を書くことが大切であると述べられている。「七、話し言葉、書き言葉」では文体に関する諸問題を上げつつ、文体は時代によって変化するものでありわかりやすい方向に向かっているという。現在や将来の人にわかるよう書くべきとしている。「八、書かぬは下手以下」は上手くではなく、書くことそのものが大事であるとする。「九、有力な手段」では書くことは意見を伝える手段となることであることや、発表機関がない人は小部数で印刷をするなどで発表することをすすめている。

以上で述べた『平凡人の文章』における九つのテーマの主旨からは二つの提言を読み取ることができる。第一は文章を書くにあたって意識すべき心構えを指南したものであることである。第二は、具体的な文章の書き方に関する方法である。いずれにおいても、「平凡人の文章」執筆当時から読み取れるのは、橋本義夫の考えの根底に言葉や文章はみんなのものであり、易しいのだととらえることがある。

②『みんなの文章～万人文章論』

次に②『みんなの文章～万人文章論』(1960年初版、1968年4月増補再販発行)を取り上げる。ここでも、比較のため目次からキーワードを探りたい。橋本義夫『みんなの文章』は基本的に章番号が附された文章に関する理念の部分と、番号なく箇条書されている具体的な書き方の技術の二つの構成により成り立っていることがわかる³⁶。

『みんなの文章』目次³⁷

はじめにひとこと

みんなの文章

一、妨げる者

二、みんなの言葉と文

誰でも書ける

- 三、これからの文章
- 四、後ろ向きではだめ
- 五、二三の注意
- 六、手紙
- 七、話し言葉・書き言葉
- 八、書かぬは下手以下
- 九、有力な手段
 - 平凡な技術
 - 曲芸でも数学でもない
 - 先づ習慣を身につける
 - ハガキと手紙
 - 身近な事から
 - 言葉や方言
 - 韻文
 - 調味料
 - 題
 - 発表機関
 - 保存
 - 読書
 - 先生
 - その他
 - あとがき

『みんなの文章~万人教育論』は大筋において基本的な軸となる考え方は『平凡人の文章』と同一であり、そのことは目次の前半部分からもわかるが、後半に新たに特徴的な事項が追加されている。それは具体的に文章を書くための技術、手法が示されていることである。例えば、「先づ習慣を身につける」の節では繰り返すことで文章執筆を身につけることや、「ハガキと手紙」ではハガキを沢山出すこと(具体的に先ず5本、10本出すべきと目標まで記してあり極めて具体的である)、「発表機関」では自分で発表機関を作ること、すなわち具体的にはペンフレンドをつくること、学校や職場などでの機関誌、ローカル新聞を利用す

ることなどの投稿先をつくることを述べている。他にも、「保存」では書いた文を少しずつ保存、校正を行い文集や単行本にまとめることや、「先生」では文の上手い人ではなく万人に文章を書かせる人(橋本義夫本人がモデルと思われる)を先生にすべきであることなども書かれている。

このように、「ふだん記」の実践を始めて来た中で、「ふだん記」をモデルに、文章執筆を通じた学習論に昇華されつつあるような萌芽が見られる。橋本の唱えた文章執筆による学習論は、実践的な手法が加わることによって実効性のあるものになったようにみえる。単に文章を書くことをすすめるのではなく、実際になにをすべきかも含まれたものであったことは、手紙を書くことで仲間を増やす方法を提示していることにもあらわれている。仲間の増やし方には、橋本の運動論をもみいだすことができる。

③『ふだん記案内-万人の書く文・出せる本』

さらに、実践は年数を重ね橋本の理念は③『ふだん記案内-万人の書く文・出せる本』(1976年)にまとめられる。本書は『『平凡人の文章』(一九六〇)、『みんなの文章』(一九六八)、『ふだん記について』(一九七〇)の三旧著その他を、再編集してまとめた³⁸⁾ものでありふだん記の入門書としてわかりやすい本になっている。『ふだん記案内』はより「ふだん記」にフォーカスをした形になっており、より実践を踏まえて作られたものにみえる。橋本の実践を踏まえた「名文美文を手本にするな」、「回数を重ねること」や「下手に書きなさい」など具体的である。例えば、グループづくりや「ふだん記」での書き手としての高齢者、詩(「ふだん詩」)に関することなどもそうである。橋本が編集する本の余白等にも好んで書かれ簡潔にまとめられた格言のような言葉である短言や短文も示されている。橋本義夫による文の書き方、グループの作り方などに加え、「ふだん記」から得られた成果である実践までの内容がより充実しているのが『ふだん記案内』である。

④『ふだん記の大道-その道標-』

そこから2年後に出された「ふだん記」の指南書、④『ふだん記の大道-その道標-』は端的にその結論を示している。「先ず結論から言わして貰う。『名文美文家、国文の先生、そういうたぐいの人言うことなど気にせず、気楽に、ハガキや文を書きだすのが最も近道、筆まめに回数を重ねれば、誰でも普通の事は普通に書ける。実行、実行³⁹⁾」。

文章は一部の専門家のもに限られものではなく、だれでも書けるもの、文筆の専門家

のことを気にするようなことはなく、まずは書いてみようとするのが大切であるとする。それまでに橋本が述べてきた一貫した理念がこの言葉に込められている。橋本による文章の理念は一貫して誰でも書けるものというところに力点が置かれていることを読み取ることができる。

この『ふだん記の大道-その道標-』は、「私でも書ける、書けない者なし」にみるような橋本の主要な理念以外にも特長的な言葉をいくつかみることができる。それが「万人可能宣言」であり、人間全てに力が備わっていると、人間の持つ力を信じる橋本の言葉である。この中ではその後の来るべき時代を見据えた「新人類文化」の考え方も示している。橋本義夫が好んで使ったと思われる言葉であり、橋本義夫『万人可能の哲学 附”新人類文化”』（ふだん記全国グループ刊、1976年）や橋本義夫（岡田勝美編）『「新人類文化」のすすめ』（ふだん記新書130、ふだん記旭川グループ・ふだん記全国グループ、1983年）などでも、この語をタイトルに用いた書を出版していたことから伺える。

新人類文化の言葉を使うに際して橋本は、『ふだん記』はまことにささやかなこと、野暮ったい田舎のできごと、無教養な庶民の企てのようなこととして取り扱われているが、人類文化の方向、その運命の展開を実験しているつもりである⁴⁰』という。「ふだん記」はさまざまな人々文章を書くことの先を見据えていることがみえ、庶民が文章を書く「ふだん記」の実践を契機としながら、庶民がこれからの文化を作るのであるとする橋本の自負をみることができる。

こうした言説からは橋本は万人に力があることを信じ、これからの時代はそのような人々が担っていくものであるのだとする期待を持っていたことが読み取れる。すなわち人間への徹底的な信頼である。橋本義夫の学習論は自分でも文章をかけるのであればだれでも書けるという着想から、具体的な実践に取り組み、そこでは多くの人々に文を書かせ、その実践で得られた結果として新しい時代の文化の担い手としての着想に行き着いたのではないかと思われる。橋本の思いと実践活動が結びついて橋本の理念が補強されてきたと推察される。

⑤『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』

「ふだん記」の実践の遍路の結果、橋本義夫の理念が広く読まれるに至ったと思われる書が、⑤橋本義夫『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』（講談社現代新書、1978年）である⁴¹。大手の出版社から出版された新書であることから本書が他書より広く読まれて

いたことが伺えるが、「ふだん記」で執筆している文友の一人、小林薫も「ふだん記」の出会い、自分の子どもが書店で『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』を購入し薦めてくれたことであったとの記録を自身の著書である「ふだん記」本に残している⁴²。

本節で取り上げた他の書に比べて顕著な違いが認められる箇所は、『自分史』を書きなさい」とする章があることである。主な内容は、地図・年表や辞書の使い方、年表を作ることなどの具体的方法と、実際に執筆された「ふだん記」を引きながら参加者がどのように「自分史」を記録しているかを紹介する箇所から成り立っている。ここで目を引くのは、内容を「自分史」の語を用いて説明している点にある。橋本が1960年に「平凡人の文章」を出した際には、「自分史」の語は用いられていなかったが、橋本の取り組みが「自分史」の語と結びついたことがみえる。「自分史」は誰しもが持つ歴史である。橋本は万人が持っている歴史の重みに着目していたことをうかがい知ることができる。

この中では橋本の学習論を考察する上で重要な理念をみることができる。それが「新人優先」の言葉である⁴³。「ふだん記」では一人ひとりが尊重される。特に新人は大切にされグループそのものが広がっていた。こうした万人を受け入れて広げていくあり方は、「ふだん記」理念の当初から万人を重んじるという意志をみることができたが、これからの書き、読み合い学び合う新しい仲間を大切にしようとする考え方がこの言葉から読み取れる。

加えて「その土地よかれ、その人よかれ⁴⁴」も重要と思われる言葉である。文字通り、様々な地域、そこで暮らす人々を大切に重んじた言葉であるとみることができるが、橋本が「ふだん記」の実践を行っていく中で繰り返し唱えていた万人を重視する考え方と地方それぞれを重んじている言葉が重なっているようにみえる。

本節でみた橋本義夫の学習論の鍵概念は橋本義夫が「ふだん記」以前の文章執筆活動や「ふだん記」の活動を通じて生み出してきた、いわば生きた学習論である。以上本節でみえてきた橋本自身の言葉から鍵概念を抽出し整理すると、以下にまとめることができよう。

「私でも書ける、書けない者なし」

「下手に書きなさい」

「新人優先」

「その土地よかれ、その人よかれ」

いずれも橋本が「ふだん記」の出発時や実際の活動を行い、実践していく中で確立してきたものである。次節においては、これらのキーワードを学習論として考察し論じたい。

第3節 橋本の学習論の検討

第1項 万人教育主義

ここでは橋本の四つの鍵概念を、学習論の観点から検討し、課題を考察したい。

第一が、「私でも書ける、書けない者なし」の言葉にみる、橋本の「万人教育主義」の理念である。学校教育のあるなしにかかわらず、橋本は文章は誰もが書けるものであるととらえていたが、そうした考えに至ったのは、決して文筆業の専門家ではない橋本が自分でも書ける、と気づいたことにある。

この理念の背景を考えるためには、橋本の生育歴を踏まえる必要がある。例えば橋本は次のように述べる。「生来不器用者で、小学校時代から真似るより何でも^{ため}験してみないと承認できない癖がつづいている。それに能力、智力とも普通以下だったので、競争すれば必ず負ける、それだから競争事は殆んどした事がない⁴⁵」。さらにこのようにもいう。「小学校に入学して『国語』とか『作文』にふれたのだが、拒否反応やら疑問やらで、それから後、学校が終るまで、私の肌には合わなかった⁴⁶」。

これらの言説からは橋本自身が物事を試したいと考える性質であったこと、学校時代の勉強は橋本にそぐわなかったことをみることができる。橋本義夫が自身の学歴を否定していたように、学校での教育は自らの経験として重要視していなかった。

しかしながら学校を出た後、人生の中で書く実践に取り組み、「ふだん記」を興すまで時間をかけて書く経験を積み重ねてきた。橋本は「ふだん記」以前におけるそうした自ら体験に関して、読む運動を22歳から、書く運動を55歳からはじめ、「ふだん記」が世に知られるようになったのは70代からで老人になっていたと自らを振り返る⁴⁷。書くことに取り組んだことが早くなかったからこそ「私でさえも文が書ける、書き始めたら繰返せば誰でも書ける⁴⁸」という着想を得たのであろう。

この気づきは、橋本が人生を通した学びにおいて身につけ、自身の体験を通じて文章が書けるに至った経緯から、誰もが同じようにできるのではないかと気づいた。そのため橋本は多くの人々に文章を書くことをすすめたのであろう。橋本のこの気づきが「ふだん記」を生み出したといえ、まさに橋本義夫の学習論の根本にあるのがこの「私でも書ける、書けない者なし」の考え方といえよう。ひらがなを知っていれば書けるということが根底にあり、万人が学ぶ力があるとの理念も伺える。ここでは文章を書く人物そのものに焦点を当てた視角から、気軽に文章を書くための心の持ち方が示されている。

なお、橋本義夫の「私でも書ける、書けない者なし」に係わる言葉に、橋本が「みんな

が主体⁴⁹」とする言葉を残していたことから、いかに橋本が万人を重んじることを念頭に置いていたかがわかる。学校で勉強しているかどうかは関係がなく人間はみなが主体であり、文章も文筆の専門家だけのものではなく、みんなの文章が主体であると論しているようである。

まさに誰もが学べる、「万人教育主義」である。これは橋本の学習論を構成する重要な考え方といえよう。すなわち「平凡人」の自分ができたように、誰もが学べるとする教育の理念である。

第2項 易行道主義

第二は「下手に書きなさい」の言葉にみる「易行道主義」である。橋本は、「ふだん記」の中で誰もが文章を気軽に書けるようになった、現代の社会状況を「紙があって、印刷所があって、万人が読みもし、字も書ける。本を出せる経済力がある。幸なことに、今の日本では、出版が自由である。こんな条件に恵まれたことは日本の歴史にはかつて無かった。この条件、このチャンスに、これらの条件を組合せ、それを可能にし、それを実行し、社会の慣行にまでもってゆくのが、私たちの仕事である⁵⁰」と説明する。いうなれば現代は書こうと思えば、誰もが書ける環境が整っていると考えていたのである。なお、この説明がされていたのは1976年である。当時の教育の状況はどうであっただろうか。

文部省編『我が国の教育水準』をみると、全国の高等学校等への進学率は1950年に42.5%だったものが、1959年に50%を超え、1970年代には80%台に、1974年に90%となるなど大きく上昇し、「ふだん記」が始まった1960年後半頃から変貌をみせている⁵¹。こうした数字から橋本がいう条件、チャンスがあったことを裏付けている。

橋本は「下手に書きなさい」について、以下のように述べている。

『『下手に書きなさい、好きになりなさい』。万人^{みんな}に文を書かせ、記録を刊行することは至難の事であった。然し紙があって、印刷所があって、万人が読みもし、字も書ける。本を出せる経済力がある。幸なことに、今の日本では、出版が自由である。こんな条件に恵まれたことは日本の歴史にはかつて無かった。この条件、このチャンスに、これらの条件を組合せ、それを可能にし、それを実行し、社会の慣行にまでもってゆくのが、私たちの仕事である⁵²』。

「下手に書きなさい」の言葉は、万人の文、万人の本の鍵であると橋本自身の実感を述べている。このように、書く内容を恐れずむしろ下手に書くことを勧めることでより多く

の人々が文章の執筆に参加できるように説く。この橋本の考え方は人々が何か新しい運動に参加できるよう促す方法論として注目すべきことである。

さらに、ここで引用した一節には「好きになりなさい」と続けられていたことにも言及しておきたい。遠慮をすることもなくむしろ下手に書くべき、さらに好きになるべきとすることで取り組みやすくするようにまで目を向けていることがわかる。

橋本は取り組むための心理的障壁を下げるためにも、下手に書くことを勧めていた。書くことは決して難行ではない。易行だとするのである。こうした橋本の理念は、人々が新しい活動に平易に参加できるよう導く学習論として注目できる。遠慮をすることもなくむしろ下手に書くべき、さらに好きになるべきとして徹頭徹尾、参画の敷居を下げるようにつとめていたようにみえる。

他にも「書かぬは下手以下」との表現も橋本は折々で用いている。類する言葉として例えば橋本は、「有と無⁵³」という題の一節も書き記している。そこでは「有るは無きに優る」が価値を決定すると考えており、自分なりの目にかまわず書いておくのを良いとし、正直に書いたものはいつでも面白いとする⁵⁴。橋本が下手に書きなさい、と述べていたのは無いよりも有ることこそが重要とする考えに通じる。橋本が重んじることは文章の巧拙ではない。有か無かなのである。「ふだん記」は文章執筆の運動であり、当然ながら文章が残ることこそが重要視されるべきであるとしていた。

下手に書いて良いとすることで多くの人々が文章を書けるのである。その結果もたらされたのが、多くの人の手により書き記された「ふだん記」である。書かねば残ることはない。格式などにとらわれてしまうことなく、存在させることをなにより優先するのが橋本の学習論であることが読み取れる。さらにこのような理念で書かれた文章に対して橋本は「正直に書いたものはいつでも面白い」、と内容が興味をひくものであるとしている。なぜなら同じ物がなく他で読めないものだからという。「下手に書きなさい」という橋本の言葉は人間に対して、書く内容を問わないことやその人にしか書けない個性的な内容が面白いと伝えることによって書くことへの心理的障壁をなくし、学びに参加できるものである。まさに橋本の「易行道主義」を如実に示しているものといえよう。

一方で、正直に書くことに関しては、課題もあるように思われる。「ふだん記」は、自らの来歴などの正直話を書き、読み合う実践であるが、橋本の論は書き手に書かせるということに主眼が置かれており、読者すなわち「ふだん記」の読み手に関する言及が少ないという点である。例えば、これまで本論文で対象に取り上げた橋本が語ってきた文章執筆

についての言葉の中では書き手が中心となっており、読み手の姿はあまりみられない。橋本は書き手が自由に書くことでもたらされる読み手の反応に関して、例えば「私たち人間は、数十万年の進化的財産をもっている。私たちは私たちの言葉をもっている。私たちは、それなりの生活歴を持っている。書くことは山ほどある。それを書けばよい。友だちみんなが共鳴するだろう⁵⁵」と記しており、書き手自らが持っていることを書くことは読み手に共鳴を得られるとする考えを示している。しかし、自らが自由闊達に書くことと読み手から共感を得ることの両立は常にできるものではなく、達成は必ずしも容易でない場合もある。それゆえ、書いた文章が共感を得ていくためにはどうすべきかの方法は「ふだん記」の実践の過程から読み取っていく必要があると思われる。

第3項 平等主義

第三に取り上げるのが「新人優先」とした橋本の考え方からみえる、橋本の「平等主義」である。橋本は出版活動を取り上げ、こう述べる。

「私がすすめる出版法とは『ふだん記』的グループ出版である。これは庶民に文章を書かせるから、万人に著書を出させる努力をする。グループみんなで文章を書き、本を出せるように協力する。みんなが書き、本を出せるように協力する。みんなが書き、本が出せるのだから、上手本位の競争はしない。年功主義でもない。金の順でもない。いわば新人優先である⁵⁶」。

「新人優先」の言葉には多様な意味が込められている。競争を排し、年齢が上だから下だからといって軽重が変わることもない。ましてやお金があるかどうかでも差別されない。橋本の万人教育主義とも通じる、徹頭徹尾それぞれの人を大切にしようとする橋本義夫の姿勢をみることができる。

なお、こうした「ふだん記」での新人優先の理念は今なお現在も受け継がれている。例えば「ふだん記」の地元八王子のふだん記雲の碑グループの機関誌<ふだん記 雲の碑>ではこうした理念に則り、目次にある著者一覧の中でも初投稿者の新人を明示し、積極的に手紙を出すことを推奨している⁵⁷。

橋本が新人を優先するようにしていたのは、多くの人が「ふだん記」という書く実践に参加をできるようにするためである。橋本は新しい仲間となる人を積極的に受け入れ、阻害しない。まさに新人優先の言葉によって示されているのである。こうした橋本の考えから浮かび上がるのは、競争を廃する原理である。

「新人類文化」を標榜する橋本義夫は「ふだん記」運動で庶民が担い手となる新たな時代の文化の創造を志向していた。新人優先はその一つとして重んじられていたようだ。「ふだん記」から自分史を着想し、「ふだん記」を広める契機を作った色川大吉が橋本義夫に対して「ふだん記」文化は欧米のコミュニティを重んじる考え方に近いとした問いかけに対して、橋本は次のように応じている。

「ふだん記の原則と同じです。ふだん記のグループも、競争しない、差別をみとめない、新人に拍手する(新人優先)。年功序列をみとめない、劣等感をあたえない。あらゆる職業、身分の人と共に楽しむ。そういう要素を内包した文化を創りたいのです⁵⁸」。

こでもやはり平等主義を色濃く示し、そこに新人優先の考え方をはっきりと示している。

この着想には橋本自身の人間観が背景にあると思われる。橋本は現代において人間に差はないにもかかわらず、「暗記的な試験とか、極小の障害物を意識的につくり、人間差を無理につくる⁵⁹」ことで多くの若者が劣等感を与えてしまっていることを危惧していた。すなわち、無理な競争を否定している。ここから見いだせるのは橋本義夫の「平等主義」、すなわちヒューマニズムである。学ぶ過程において橋本義夫は、他者を疎外せず平等に学びを進めることが重要であると説いているのである。

第4項 地域主義

第四に橋本の「その土地よかれ、その人よかれ」の言葉からみえる「地域主義」(または地方主義)に関して論じる。「ふだん記」はその理念を提唱した橋本義夫の暮らした八王子地域だけで行われているのではない。「ふだん記」には全国に活動を行っているさまざまな各地グループがある⁶⁰。ふだん記の各地グループそれぞれは独立しており、中央集権的なものではない。人間と同じく、組織であるグループそれぞれも各自が尊重されているものである。

「ふだん記」の各地グループでは「逢う日話す日」と題された大会が開かれている。この会の開催に触れ、橋本はこう述べる。「『その土地よかれ、その人よかれ』が方針である。庶民自身の文化だから、中央集権をさげ、地方分権的にならねばならない。とくに、先進国がなくなった今日では、地方地方が独立的に、地方色を出し、独創を生む素地にしたい。先進国は、地方が各々に先進的な歩みをするものである⁶¹」。この言葉に見られるように地方分権的であると謳われているように地域や地方を重視しているのが、橋本義夫の理念である。

日本でもこれまで多様な形で地域の活性化を目指す取り組みがなされてきた。例えば1970年代には「地方の時代」が叫ばれているが、それ以前からも現在もなお国レベル、地域レベルなどでさまざまな取組がなされている。特に地域活性化の側面では、地域に根付いたいわゆる「草の根」のさまざまな地域文化活動による役割は、地域それぞれを盛り上げる役割を果たしてきた意味において重要であったと思われる⁶²。

橋本は「ふだん記」以前から地域文化研究、地域の人を検証する建碑運動など地域文化に関する取り組みを行ってきたが「ふだん記」の実践を進めていくなかで各地グループの設立に対して応援をし、「その土地よかれ、その人よかれ」を標榜しながら、地域での書く実践を盛り上げてきた。橋本義夫は書き手それぞれが暮らす地域が重んじられていることを学習者にはっきりと示すためにも「その土地よかれ、その人よかれ」の言葉を使っているが、これは橋本の「地域主義」を示すものである。橋本が地域それぞれを大切にしようとした理念は、これからの地域活性化を展望する上でどのような意味を持ちうるのか、各地グループの実践等の検討が必要であろう。

第4節「ふだん記」の背景にみえる易行道の書

橋本の学習論の中でとりわけ、易行道は重要に思われる。そのため橋本が「ふだん記」の普及にあたり参照したとする書を取り上げながら「ふだん記」の背景にある易行道の考えを探る。橋本は「ふだん記」の普及とそれに関わる書に関して、次のように述べている。「夜半に目が覚めた。枕下には原稿プリントや赤や黒のペンがころがっている。『福音主義』のためパウロの『ロマ書』や『ガラテヤ書』が浮び、『易行道』のため身を挺した法然の『一枚起請文』、親鸞の『嘆異抄』、蓮如の『御文章』、その他が浮かんで来た⁶³」。興味深い点は、橋本の挙げた書名である。内村鑑三への傾倒があったが⁶⁴、上記引用文中では鎌倉新仏教の書名等も多く挙げている。

さらに、橋本はこうした鎌倉新仏教の経典等を橋本は「易行道」の語を用いながら以下のように取り上げている。（「ふだん記」は）「一般の文など全く書いたことの無い多数の人が相手であり、ご主人であり、お客さまである。この人々のために、『ふだん記』である。キリスト教のパウロの手紙（『新約聖書』後半に多し）法然や親鸞の信仰を書く『嘆異抄』、浄土真宗の普及者蓮如の『御文』等は、私の大きな指針とし学んだ。蓮如の本などは何年間も手元におかないと安心しなかった⁶⁵」。

これは「大普及者から学ぶ」という表題がつけられた橋本が「ふだん記」と「ふだん記」普及にあたって述べた庶民がこれからの文化を作るとする「新人類文化」に関して綴った一節である。橋本は「ふだん記」が多くの庶民（上記引用中では「一般の文など全く書いたことのない多数の人」と称している）が、書けるようになるために何をすべきか腐心し、そこで昔から庶民に受け入れられてきた経典等に示唆を得ていたことを伺うことができる。そこで、橋本が参照していたとする法然の「一枚起請文」、親鸞の「嘆異抄」、蓮如の「御文章」らから橋本の易行道を探る。

・「一枚起請文」

一枚起請文は法然上人が建暦2年正月23日の臨終に際し、弟子勢観房源智の請いによって、浄土宗の中心眼目を一枚の紙に簡叙し、書き残したものである⁶⁶。全文も簡潔で数十行ほどの文である。倉田百三はこの一枚起請文を歎異抄とともに「浄土門の信仰の極致を示す最も恰好な文献⁶⁷」としており、内容も極めて明快である。

「一枚起請文」のうち学びの支援方法という視点に関連して目を引く箇所は、最初の一節である。「唐土我朝にもろもろの智者たちのさたし申さるる観念の念仏にもあらず。また学問をして念の心をさととりて申す念仏にもあらず。唯往生ごらくの為には南無阿弥陀仏と申してうたがひなく往生するぞとおもひとりて申す外には、別のしさい候わず⁶⁸」。

この一節が意味するところは、極楽往生にはさまざまな智者達による観念の念仏ではなく、学問を修めて悟りを開いた者の念仏ではなく、ただ疑うことなく南無阿弥陀仏と唱える以外には他の仔細は問わないことである。すなわち、難しいことはなく南無阿弥陀仏と唱えるだけで良いとしているのであり、難行を排し易行を説いた考え方であるといえる。何かをすることは決して難しくないと伝えられることにより、実践をしやすいようにすることは、学びの支援方法の一つとしても伺うことができるのである。

一枚起請文はシンプルでかつ主旨も明快である。橋本は易行道のための書と評価し「ふだん記」の普及においてそのありかたを参考にしたことがここからも伺える。

・『嘆異抄』

『嘆異抄』は親鸞の語録をもとにして、親鸞の死後の異説を歎き、親鸞の誠意を伝えようとした書であり、作者は弟子の唯円とされている。二部の構成になっており前半は親鸞の語録、後半は弟子の唯円による著作である⁶⁹。『嘆異抄』の十二章に「本願を信じ念仏をまうさば仏になる、そのほか、なにの学問かは往生の要なるべきや⁷⁰」あるように、本願を信じて念仏を唱える仏となることが教義である。

『歎異抄』の文章のあり方に関して、橋本義夫との共通点を見出すことができる箇所がある。それが告白という言葉である。金子大栄は親鸞の主著である『教行信証』と比較しながら、『教行信証』は普遍の法を顕開するものに対し、『歎異抄』は個人の心境であると、「この書に現れるものは、全て告白である。見に感じたままを沁々と表わす述懐である⁷¹」と述べている。さて、このような告白の形で意見を伝えようとする方法は橋本義夫が重んじていたようで、折々で観ることができる。例えば、「告白ありて指導なし⁷²」のような言葉があり、自らの言葉は指導のものではなく告白しているのだとしていたり、「私は指導はしないが告白した。そうしたら人が集まってきた⁷³」との言葉もある。言葉は指導ではなく、告白であり、その読み手が告白を読むことで学べるように支援するという点に共通性がみえる。

『歎異抄』第六章では「専修念仏のともがらの、わが弟子、ひとの弟子という総論のさふらふらんこと、もてのほかの仔細なり⁷⁴」とあるが、このように誰かの弟子といったような視点を廃したあり方は、上記の橋本の指導法の中にもみいだすことができる。

『歎異抄』の中で最も知られていると思われる一節は第三条「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを世のひとつねにいはいく、悪人なを往生す、いかにいはんや善人をやと」であろう。善人が往生をできるのだから、悪人は往生が出来ないわけがないという意の言葉である。この言葉に関しては、橋本義夫が「先生」の小題が付けられた文で論じている。以下に引用する。

「万人の文章は、一人の文豪とあとは全部不文の大衆といったものではなく、みんなが一応普通のことを書くことそれが主眼である。万人の文章を考えると、キリスト教に『万人救済論』とか、『歎異抄』に『善人往生すいはんや悪人をや』という言葉などが浮ぶ。『万人の文』は、必ずしも、飛び切り的高手とか、名文、美名とかいったごく少数の貴族趣味を満足させるようなものではない。万人の文は、万人が書き文の目を開かせることになる。だから万人の文の先生は必ずしも文の上手な人が当たる必要はない。否むしろ才能もなにもなくて下手でもどうやら書ける人が『俺でさえ文がかけるんだから、誰れだって書けないものはない』といった人間を先生にする方が一層、スタートにむく『万人の文のよき先生』とは、万人に文を書く習慣をつける人のことを云うのである。(中略)万人救済論や、悪人往生論はみんなに希望をもたせ、やる気がでる。(中略)パウロという先生やホーネン先生、シンラン先生に今更感心する⁷⁵」。

歎異抄を引きながらこれをみんなに希望を持たせ、やる気を出させるものであるとして

いる。だれもができる、自分でもできるのだと唱えることによって書くことに向かわせる、いわば難しさを排除することによって書かせることが先生としてふさわしいとする橋本の志向がうかがえる。ここにも橋本の易行道の背景を伺い知ることができる。

・「御文章」（「御文」）

「御文章」は蓮如が浄土真宗の教えの精髓を人々の生活に即してわかりやすく説き、伝えられてきた聖教である⁷⁶。500年を経過した現在、現代では必ずしも易しい文章と断言することはできないが、「誰にでも分かる、易しい話言葉で書かれている⁷⁷」といった評価がされてきたものである。橋本義夫は「御文章」に対しても重視していたようであり、前述のとおり「蓮如の本などは何年間も手元におかないと安心しなかった」と述べている。

「御文章」の二帖第七通「易往無人章」の一節にはこのようにある。「そもそも、その信心をとらんずるには・さらに智慧もいらず才学もいらず・富貴も貧窮もいらず、善人も悪人もいらず・男子も女人もいらず、ただもろもろの雑行をすてて・正行に帰するをもって本意とす⁷⁸」。信心を得るには智慧も才学もいらないなど、主旨は明瞭で難行が排されている。このことから、橋本は「ふだん記」普及のため、「御文章」参照していたことを伺うことができる。橋本が取り上げたこれらの書は、易行をわかりやすく説いているものであった。橋本の「ふだん記」の理念にはこうした易行道を説く思想が背景に意識されていることが複数の言葉からみることができる。

第5節「ふだん記」の文友による易行道の受容

第1項 文友の語りからみる易行道

ここでは「ふだん記」の文友（「ふだん記」の執筆者）に焦点をあて、文友から易行道がどう受容されているかを論じる。例えば「ふだん記」文友の一人である小林薫は「下手に書きなさい」をこう語る。

「私はね、『下手に書きなさい』は先生の最高の褒め言葉だと思います。先生は期待してらして、そういうことでその人の劣等感を取って、下手だって主張することはちゃんと言うことはいっておけば。言えることが訓練だからね、そして世の中に出ていくっていうこと。誰だって目立ちたいでしょうし、人によく思われたいっていうのは本能でしょうから、それを先生はちゃんとみてて、伸ばしてくれるように仕向けてくれたんだろうと。そういう意味の言葉だろうと私は思います⁷⁹」。本能的に誰にでもいいたいことはあると思われるが、劣等感などからいうことができない、そういった人々に対して下手で良いと言い伸び

るように方向づける、そうした意味の褒め言葉だと捉えているとする。

金幹子は、『下手に書きなさい』はね、わからなかったです⁸⁰』と振り返る。さらに、「私は下手に書けというのは本当に大変な哲学を込めているのかなって思いましたね。それを聴いた時にはわからなかったですね。『下手に書け』は」。と語る。さらに金は自身の書く経験を次のようにふりかえる。「肩の荷をおろしてどうでも思う存分書きなさいというところへたどり着くには間がありましたね。やっぱり色々な先生のものを読んで、だんだん会得していったということでしょうかね。(中略)文章教室みたいに立派に書かないでいいんだな、話し言葉でいいんだっていうから。話し言葉で書きましようよって。それで肩の荷を降ろしたところからもう何百ぺんくらい書いているでしょうかね⁸¹」。すなわち、金は「下手に書きなさい」を哲学であるにとらえ、時間をかけながら受け止め消化していったとのことであったことを伺うことができる。この証言からは橋本が文章の執筆が易行であると説いていたことは、必ずしもすぐに実践されただけではなく、実践を重ねていく中で体得されるような受け止められ方をされていたことも伺うことができる。このように橋本の理念は実践と結びついていることも推察できる。

橋本和子は、「下手に書きなさい」をこう語る。「それこそ敷居を低くするというか、話ができる人は書ける、って橋本先生はおっしゃっていて。学校教育で受けた文章を書きなさいとかいうくびきから逃れて自由に真実のことを書けるということが、すごく肩の荷を軽くしました⁸²」。この語りでは、橋本が述べた字を書けなくても書けるといっていた内容にも触れつつ、自身も文章の書き方にとらわれず書ける肩の荷を軽くする言葉であったという。

張山てる子も、『自分宛の手紙だなあ』って思って気楽に書けるっていうところがね、(中略)自分宛の手紙だわって思って書くと気楽に書けるっていうの。そこが大好き⁸³』や「気楽にね。学歴もなくても書こうって言って。書けば読めるって⁸⁴』と語っており、「下手に書きなさい」が「ふだん記」の書き手を気楽に書かせるようにできるものであったことに言及していることがみえる。

「下手に書きなさい」は書き手に書きやすくできるような言葉として捉えられている一方で、その消化のされ方に関しては、一様ではなかったことも伺える。例えば、褒め言葉や哲学といった言葉でも表現されているが、直ぐに下手に書く書き方だけでなく、少しずつ書く実践を自らが積み重ねていく中でじっくりとこの言葉を体得したという証言もあった。橋本の「下手に書きなさい」は、書き手に書かせるように勧めるための言葉としての

役割だけでなく、書きながら文章の執筆は易行道であることを体験的に学ぶ契機をつくる役割を果たしていることが伺えた。

第2項 文友の記述からみた易行道

次に文友が執筆した「ふだん記」の記述において、橋本の易行道がどう論じられていたかをみていきたい。例えば「ふだん記」の草創期から参加しており、「ふだん記」の発展に深く寄与していた文友の一人である四宮さつきは、橋本との出会いの頃のやり取りを自身の著書で振り返っている。「『文を書きなさい』と言われたが、こんな厚かましい私でも(誰か何か思わないか?)などというためらいはあった。その後先生は『誰があんたの文をうまくいと思ってる人がいるもんですか、恥をかくつもりで書きなさい。とすゝめる『ほんとうにそうだ……』』と思いが楽になった。又、『おしゃべりな人は文なんて書けないもんです』とも言った、その時は(そんな事はない、うまく書けなくなって字を並べる位は出来る一)等と心の中で先生の言葉に反発を感じながら書きまくった。(中略)喜んだり悲しんだり一喜一憂しながら書きためて、見えた折に手渡した⁸⁵⁾。

書き始めた頃から橋本の言葉に一喜一憂しながら、少しずつ書き溜めて執筆を積み重ねてきたことが書かれている。「書きなさい」との言葉に当初は躊躇があったこと、恥をかくつもりで書きなさいと言われ、途中の葛藤はあるものの、気が楽になって書くことができたことへも言及している。橋本は「ふだん記」の実践の中で文友たちを励まし執筆をすすめてきたが、こうした思いが楽になったとする言葉は随所にみられる。

なお、橋本義夫没後の1986年に出された『橋本義夫追想集』では、文友たちからみた橋本義夫への想いが綴られているが、そこでも「下手に書きなさい」に対する言及がみられ、例えば熊坂千恵子「『下手に書きなさい』と励ましてくださった先生!!⁸⁶⁾」のように表題で「下手に書きなさい」に言及しつつ橋本を振り返っているようなものもある。

他にも木村恵美子も橋本の言葉に関する言及をしている⁸⁷⁾。「この言葉にどれだけ励まされ、元気、勇気、やる気を頂いたことだろうと、橋本先生の名言に出会ったご縁を振り返るのでした⁸⁸⁾」と橋本の言葉から励まされながら書き進めたことを振り返っている。

橋本が文章を書くことは易行であると伝えようとする主旨に関して述べた「ふだん記」は、初めて出された「ふだん記」各地グループの機関誌でもみることができる。橋本存命中に出版されている〈ふだんぎ 北九州〉創刊号(1980年2月)でも、「ハガキというのは、私の文を書く事が苦手な者でも、何とか書ける。そのうち、もう少し長い文を書いてみよ

うという気になる⁸⁹⁾と、ハガキのように少しから書けるもので文章に慣れてきた気持ちを綴っている。これらの書かれた「ふだん記」をみると、文友は必ずしも最初から文章を気楽に書けていたわけではない。むしろ書き積み上げの中で体得的に学んだようである。証言や書かれた「ふだん記」をみると、気持ちを楽に文章を書かせるものとして橋本の言葉があったことを伺える。しかしながら、その受容は一様でなく、書き始める契機であったことや、執筆の実践を通してからはじめて易行であると理解されるなどさまざまであった。

小結

本章は、書く実践「ふだん記」の創始者である橋本義夫の理念をまとめ、学習論として解き明かすことを試みた。以下、得られた知見を記す。

第一は、橋本が「ふだん記」を、青年にとって書くことによって前向きな心情変化や潜在する可能性を開花させる意義があるものにとらえており、青年に「ふだん記」の執筆をすすめていたことである。橋本義夫が「ふだん記」を着想したのは、自身のそれまでの文章を書く経験が出发点であった。さらにそこで留まったのではなく、学習論は「ふだん記」の実践の中で行われた極めて実証的な実験によって増強され、確立したことからも橋本の学習論は実践にもとづいていることがわかる。第二は、「私でも書ける、書けない者なし」、「下手に書きなさい」、「新人優先」、「その土地よかれ、その人よかれ」などの鍵概念から、「万人教育主義」、「易行道主義」、「平等主義」、「地域主義」の学習論の具体的な諸相を見出したことである。橋本の学習論は、誰でも書けると訴えかけることで、自らのことを書こうとする「未だ表出されざる潜在意識」を呼び起こし学習者の自己教育をエンパワーメントできる可能性がある。一方で、「ふだん記」の文章を書き、本を出版した後の執筆者たちの成長までは、橋本自身の詳細な説明を見出すことはできなかった。

第4部 第2章 注

¹ 片岡了、辻智子「共同学習・生活記録」、日本社会教育学会 50 周年記念講座刊行委員会編『講座 現代社会教育の理論 III 成人の学習と生涯学習の組織化』東洋館出版社、pp.114-116。

² 萩原岳信「共同体と自己教育—近代における擬似共同体の役割—」、大槻宏樹他編著『自己教育論の系譜と構造—近代日本社会教育史』早稲田大学出版部、1981年、pp.91-92。

-
- 3 三輪建二「成人の学習—本年報のねらい—」、日本社会教育学会年報編集委員会編（委員長三輪建二）『成人の学習』東洋館出版社、2004年、pp.9-15。
- 4 同前。
- 5 安藤耕己「成人の学習におけるライフ・ヒストリー法—学習の意味を人生に即してみる—」、『成人の学習』同前、pp.45-56。
- 6 小林平造「ヤングアダルトの学習とライフヒストリー」、『成人の学習』同前、pp.101-115。
- 7 梶国男「橋本義夫の生涯」、橋本義夫(色川大吉、梶国男、清水英雄編)『砂漠に樹を 橋本義夫初期著作集』揺籃社、1985年、pp.403-411。他に戦前の橋本を中心に論じた小倉英敬『八王子デモクラシーの精神史 橋本義夫の半生』日本経済評論社、2002年。戦後の橋本を中心に論じた増沢航『記録の戦後史—橋本義夫が残した記録』ふだん記創書 24、ふだん記雲の碑グループ、2007年。などがある。
- 8 橋本義夫、四宮さつき『下手に書きなさい—「ふだん記」のすすめ』大揚社、1984年、奥付。
- 9 小林多寿子「書く実践と自己のリテラシー 『ふだんぎ』という空間の成立」、桜井厚編『戦後世相の経験史』せりか書房、2006年、p.241。
- 10 色川大吉「現代の常民—橋本義夫論 昭和精神史序説」、<中央公論>89(8)、1974年8月。
- 11 「長期経済統計」、内閣府『平成 25 年度 年次経済財政報告』、p.485。
- 12 前掲「書く実践と自己のリテラシー 『ふだんぎ』という空間の成立」、及び辻喜代司「庶民による人生の記録の創出—橋本義夫と初期『ふだん記』運動の場合」、<京大大学生涯教育学・図書館情報学研究>9、京都大学大学院教育学研究科生涯教育学講座、2010年。
- 13 橋本義夫(岡田勝美編)『『新人類文化』のすすめ』ふだん記新書 130、ふだん記旭川グループ、p.17。
- 14 前掲「書く実践と自己のリテラシー 『ふだんぎ』という空間の成立」、p.248。より、女性率の平均値を算出した。
- 15 前掲「庶民による人生の記録の創出—橋本義夫と初期『ふだん記』運動の場合」、p.78。
- 16 同前、pp.78-79。
- 17 同前、p.78。
- 18 前掲「書く実践と自己のリテラシー 『ふだんぎ』という空間の成立」、p.248。
- 19 これは 1958 年頃の橋本義夫による回覧ノートの一節であり、橋本義夫『ふだん記案内—万人の書く文・出せる本』ふだん記新書 31、『ふだん記』全国グループ、1976年、pp.106-107で紹介されている。
- 20 「機関誌『ふだんぎ』」、四宮さつき著、橋本義夫編『ながれのなかに』ふだん記本 15、ふだん記グループ、p.213。
- 21 橋本義夫「誰れでも文が書ける」、前掲『ふだん記案内—万人の書く文・出せる本—』、巻頭言。
- 22 「『ふだん記新書』刊行について」、海端俊子著、橋本義夫編『海は私の絵本』ふだん記新書 3、『ふだん記』全国グループ、1974年、p.53。
- 23 橋本義夫『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』、講談社現代新書、1978年、pp.166-167。
- 24 同前、pp.12-13。
- 25 同前、p.13。
- 26 <ふだんぎ>創刊号、1968年1月。
- 27 同前。
- 28 橋本義夫「はじめに一言」、(四宮さつき(橋本義夫編)『十年—ふだん記と共に—』(ふだん記本 50、ふだん記全国グループ))、まえがき。
- 29 前掲『十年—ふだん記と共に—』、pp.3-86。
ここでは『ふだん記』のあゆみのうち特に重要と思われるものを抜粋して示した。

-
- 43.1.27 『ふだんぎ』 一号創刊
43.4.19 『みんなの文章』 橋本義夫 刊。(『ふだん記本』 1: 引用者補足)
43.9.24 (略)九月の末『ふだんぎ』 五号発行
44.9.26 『ふだんぎ』 十号(七月十五日発行八十四頁 38 人)記念会、陵南会館に於て四十五人。
45.4.17 『ふだんぎ』 十四号製本
45.4.25 『ふだん記について』 橋本義夫著 発行清水工房初仕事
45.7.1 『ふだん記』 十五号 八王子印刷にて印刷製本
45.11.1 (略)四十五年一月、十三号からはロー原紙でなくボールペンで書けば良い原紙に変わり、字はきたなくなつたが能率が上るようになった。
二月十四日『朝日』の「標的」と三月二日朝日の朝刊に出てからは地方の人々との交流も増え、投稿もぐんと増した。(後略)
45.12.19 『ふだんぎ』 十七号、ガリ版最後の本、百三十ページ 六十七人執筆
46.2.25 『ふだんぎ』 十八号 タイプ印刷で清水工房にて印刷三〇〇部(以後印刷は清水工房)
46.6.16 『ふだんぎ』 二〇号 発行
47.6.25 『ふだんぎ』 二十五号 発行
48.7.25 『ふだんぎ』 三十号発行。
48.12.1 第五回『逢う日話す日』 八十九人。
49.2.15 『短言』 橋本義夫 刊。(『ふだん記新書』 1: 引用者補足)
49.7.24 中央公論に『現代の常民』と橋本義夫先生を色川先生が書かれ掲載される。
49.9.3 『ふだんぎ』 三十五号 発行。
50.8 月初め 『ある昭和史』 色川大吉著 中央公論社刊、色川先生より頂く。
50.9.30 『ふだんぎ』 四十号 発行。
51.3.13 『ふだん記案内』 橋本義夫著 刊。
51.7.13 『八菅の女たち』 足立原美枝子著 刊。
51.11.5 『ふだんぎ』 四十五号 発行。
30 前掲『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』、p.169。
31 同前、pp.169-170。
32 前掲『ふだん記の大道—その道標—』、pp.140-141。
33 橋本義夫「この本のこのために書かれた」、橋本義夫著、岡田勝美編『新人類文化のすすめ 宛名のない手紙』、ふだん記新書 130、ふだん記旭川グループ、1983 年、p.3。
34 橋本義夫『平凡人の教育と文章』 地方文化資料第 49 集、1960 年。
35 同前、p.2。
36 橋本義夫『みんなの文章～万人文章論』 ふだんぎ草紙 1、みんなの文研究会、1960 年初版、1968 年 4 月増補再販発行、目次。
37 橋本義夫『みんなの文章～万人文章論』 同前、目次。
38 前掲『ふだん記案内—万人の書く文・出せる本』、p.115。
39 橋本義夫『ふだん記の大道—その道標—』 ふだん記新書 70、ふだん記全国グループ、1978 年、序文。
40 同前、p.148。
41 前掲『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』、pp.6-7。
42 小林薫『花咲く道へ』 ふだん記創書 34、ふだん記雲の碑グループ、2011 年、p.163。
43 前掲『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』、p.166。
44 同前、p.168。
45 橋本義夫「不器用の拾い物 『ふだん記』 運動から」 <言語生活> 第 375 号、1983 年 3 月、筑摩書房、p.74。

-
- 46 同前、p.75。
- 47 前掲『ふだん記の大道—その道標—』、p.4。
- 48 同前、p.4。
- 49 同前、p.138。橋本は誰しもが「主」であることを以下の様な言葉で語っている。
「みんなが主体」
「権威」などというものは、対照物そのものである。仮に例外ありとすれば、宗教の教祖ぐらいのものであろう。客観的事実そのものが権威なのだ。今は飾りたてた「権威者」などでなく、みんなが主体なのである。文章などもそう考えると、誰でも気軽に自分の文が書ける。
- 50 前掲『ふだん記案内—万人の書く文・出せる本』、p.35。
- 51 文部省編『昭和 55 年度 我が国の教育水準』大蔵省印刷局、1981 年 5 月、p.13。
- 52 前掲『ふだん記案内—万人の書く文・出せる本』、p.35。
- 53 同前、pp.35-36。
- 54 同前。
- 55 前掲『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』、p.131。
- 56 同前、p.166。
- 57 ふだん記雲の碑グループによる機関誌、〈ふだん記 雲の碑〉は 2015 年 8 月現在で、36 号(2015 年 6 月)まで出されており、36 号の目次でも「新人優先」に基づく新人への便りを推奨した形式をとっている。こうした新人を示す方法は「ふだん記」各地グループのさまざまな機関誌で見られるものである。
- 58 色川大吉『常民文化論』筑摩書房、1996 年、pp.368-369。
- 59 橋本義夫「青年版『ふだん記』のすすめ 学校暴力の原因—劣等感から解放—」、〈青年〉140 号、日本青年館、1981 年 1 月、p.30。
- 60 「ふだん記」各地グループは、〈ふだん記 雲の碑〉36 号(2015 年 6 月発行)によれば、21 グループ、北海道には北見、旭川、札幌、江別など 6 グループ、九州には福岡県北九州市にふだん記北九州グループがある。
- 61 前掲『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』、p.169。
- 62 例えば、荻谷剛彦編著『「地元」の文化力 地域の未来のつくりかた』河出ブックス、2014 年。では、「地域の文化活動とは、伝統や歴史に根ざしながらも新しいネットワークの形成につながる試みであったり、新たな地域の文化を創り出しながら、人びとの生活に意味を与える活動だったりする。」(p.5)と定義付け、遠野「遠野物語ファンタジー」、飯田「いいだ人形劇フェスタ」、壮瞥「昭和新山国際雪合戦」、那覇市周辺「琉球國祭り太鼓」、取手「取手アートプロジェクト」などの事例が紹介されている。
- 63 橋本義夫(ふだん記茅ヶ崎グループ編『万人の文章のために』ふだん記新書 77、ふだん記全国グループ、ふだん記茅ヶ崎グループ、1979 年、pp.118-119。(引用中一部ルビは削除。)
- 64 なお橋本のキリスト教は、内村鑑三への傾倒によるものであり、キリスト教徒ではない。
- 65 橋本義夫(岡田勝美編)『「新人類文化」のすすめ』ふだん記新書 130、ふだん記旭川グループ、1983 年、p.3。(引用中一部ルビは削除。)
- 66 倉田百三『法然と親鸞の信仰(上)—一枚起請文を中心として—』講談社学術文庫、1977 年。
- 67 同前、p.6。
- 68 「一枚起請文」、倉田百三『法然と親鸞の信仰(上)—一枚起請文を中心として—』同前、p.26。
- 69 金子大栄(校注)『嘆異抄』岩波文庫、1931 年、pp.5-8。
- 70 同前、pp.61-62。
- 71 同前、p.21。
- 72 橋本義夫「青年版『ふだん記』のすすめ(七) 私でも文章が書ける、書けない者なし」、

<青年>139号、日本青年館、1980年12月、p.32。

73 橋本義夫「青年版『ふだん記』のすすめ(四) 暗いその向こうに光がある」、<青年>136号、日本青年館、1980年9月、p.32。

74 前掲『嘆異抄』、p.50。

75 橋本義夫『みんなの文章～万人教育論』ふだんぎ草紙1、1960年初版発行、みんなの文研究会、1968年増補再版発行、p.30（引用中傍点は削除。）

76 浄土真宗教学研究所編『御文章 ひらがな版一拝読のために一』本願寺出版社、1999年。

77 大谷暢順『蓮如[御文]読本』講談社学術文庫、2001年、p.6。大谷は同書のまえがきの中で、「誰にでも分かる、易しい話言葉で書かれている」といわれているが、仏教用語が多く含まれていることや、現代ではそれらが生活から遠くなっており、蓮如存命の時代より読みづらくなっていると解説をしている。

78 「易往無人章」（二帖第七通）、前掲『御文章 ひらがな版一拝読のために一』、1999年、pp.78-79。

79 小林薫への「ふだん記」に関するインタビュー、2015年1月14日。調査名：「ふだん記」に関するインタビュー、調査日・場所：2015年1月14日、小林薫氏宅、調査対象：「ふだん記」文友4名(小林薫、金幹子、橋本和子、張山てる子)、聞き手：川原健太郎、調査方法：グループによる半構造化インタビュー、調査内容：「ふだん記」に出会うまでの人生の歩み、「ふだん記」参加へのきっかけ、「ふだん記」参加の感想、感じたことなど。

80 金幹子への「ふだん記」に関するインタビュー、同前。

81 同前。

82 橋本和子氏への「ふだん記」に関するインタビュー、同前。

83 張山てる子への「ふだん記」に関するインタビュー、同前。

84 同前。

85 四宮さつき『十年—ふだん記と共に—』ふだん記本50、ふだん記全国グループ、1976年 pp.1-2。

86 熊坂千恵子『『下手に書きなさい』と励ましてくださった先生!!』、四宮さつき、香川節編『橋本義夫追想集』ふだん記本105、ふだん記全国グループ、1986年、p.148。

87 木村恵美子『『下手に書きなさい』の重み』、<ふだん記 雲の碑>8号、ふだん記雲の碑グループ、2001年12月。

88 同前、p.132。

89 倉田栄子「私とふだんぎ」、<ふだんぎ 北九州>創刊号、ふだん記北九州コロニー、1980年2月、p.9。

第3章 「ふだん記」における青年の学びに関する一研究

本章は八王子の実践家・橋本義夫(1902-1985)により創始された文章執筆運動「ふだん記」における青年の学びを実証的に明らかにすることが目的である。

そこで「ふだん記」の書き手のうち、本章では青年の執筆者に焦点をあてたい。というのも「ふだん記」の執筆者は運動の開始時期の主力が女性であったことから、これまで青年に注目されることは少なく、同じ書く実践の生活記録などと比べても青年の側面から取り上げられることはなく、未到達の研究テーマとなっていたためである。

そのことを鑑み、本章では橋本義夫の青年に関する言説を分析することで、創始者の考える青年にとっての「ふだん記」の意義を分析し、さらに青年たちの具体的な文章に着目し、何を書いたかを、執筆から得たことを考察する。

主な研究対象は、橋本義夫が青年に対して「ふだん記」のことを書き、執筆をすすめた雑誌の連載記事「青年版『ふだん記』のすすめ」(<青年>日本青年館、第133号(1981年6月)-第157号(1983年6月))と、「ふだん記」の書き手が執筆した個人本である。ここではこれらを対象にとりあげ、前者からは橋本の理念の抽出を意識し、後者からは書き手の学びの側面の抽出を意識しつつ、文献研究の方法で分析を行った。構成は第1節 橋本義夫の中にみえる青年の学び、第2節 橋本の考える「ふだん記」の青年の学びの意義、第3節 青年の書く「ふだん記」の分析である。

第1節 橋本義夫の中にみえる青年の学び

(1) 「ふだん記」における青年の学びの研究意義

戦後青年に関する学習論の研究に関しては、グループワーク論への注目ののち¹、重視されたのが共同学習である。共同学習は、具体的な学びの方法である生活記録と結びついてきたことが特徴である。1951年に出された『共同学習の手引』では、吉田昇による共同学習の理論に関する「共同学習の本質」や²、今江正敏による「青年団と共同学習」などの青年団における共同学習の実践などが論じられていることから、共同学習が注目されていたことがうかがえる³。共同学習・生活記録運動そのものは早く下火となるが、青年の学習との関わりから社会教育学会の中でもしばしば再評価をされている。矢口悦子によれば⁴、共同学習は女性の学習の方法の深化と共に、青年の抱える課題に切り込む可能性を指摘し

ており、2000年代以降も片岡了・辻智子により共同学習と生活記録の展開や議論をまとめつつ、今後も研究の必要があることが指摘されている⁵。

なお、戦後の青年の学習論の概要を論じたものには、青柳伊佐夫、草野滋之による研究がある⁶。ここではグループワークから共同学習、共同学習の遺産を継承しながら生まれた新しい学習運動として信濃生産大学の運動の存在を指摘し、共同学習の再評価や、1960年代後半からの産業構造の変化における学習論の存在などを示している。

しかしながら、生活記録運動と同じ書く実践である「ふだん記」は、色川大吉に始まる現代史、民俗学からのアプローチによる橋本義夫研究⁷、小林多寿子によるリテラシーやライフストーリーの研究⁸などの先行研究の蓄積があるものの、青年の側面からアプローチしている研究はみられなかった。

1960年代後半から始まった「ふだん記」は「下手に書きなさい」を標榜し文章の質も問わない全く自由に書く実践であり、書く内容も個々の人間に委ねられている。それゆえ「ふだん記」はそもそも文章を書いたことがない人々により執筆されることを意識されていたことが伺える。このため「ふだん記」の青年を研究することで、そもそも書くことによって得られる学びとは何かという、書く実践の存在意義を根源から考えることができると思われる。

(2) 橋本義夫の青年期の学び

「ふだん記」を書く青年たちを論じる前に、橋本自身の青年期をみてみよう。まず橋本は、小学校時代は次のように回想している。「生来不器用、才能といったものにもまったく恵まれず、平凡そのものであった。人真似することすら満足にできなかった。明治四十一年に小学校へあがったが、学校とは肌が合わず、教科書も先生も学校自体もみな嫌いで、手をあげたことも、競争したこともない。誉められこともない。餓鬼大将になったことも、弱い者いじめをしたこともない⁹」。本人は学歴を重視しておらず、橋本本人は必ずしも学校のことを多く語っていない。

一方で学校外の府立農林学校時代の寄宿舎生活の経験は大きかったようだ。橋本義夫の農林学校時代の寄宿舎での学びについては、義夫の子息である橋本鋼二により明らかにされており、学校よりも寄宿舎生活での学びの重要性が指摘されている。橋本鋼二は、義夫を「学校には背を向けていたが、寄宿舎生活は義夫にとって学校そのものだった¹⁰」と文学好きになった16歳頃の義夫が創作や詩歌を多く読んだことや、寄宿舎の仲間とのことに言

及している。こうしたことから、学校にこだわらない学びへの視座は、学校卒業後に地域での学習活動を開始する以前の青年期に醸成されつつあったのではないかと推察される。

橋本の青年に対する思いは、橋本が残した言葉からも確認できる。例えば、戦後直後期1946年2月11日の手記では「青年諸君、老壮年層のきたならしい夢を、すっかりかなぐり捨て、よく消毒しよう。青年諸君、夢みろ、夢みろ、夢のないところに、復興はないんだよ¹¹」と綴った文がある。八王子が空襲にあい、自らの生活の基盤であった書店も失い、失意の中にあったと思われる橋本であったが、青年に対して期待を込めながら夢を持つように促している。

なお、橋本の遍歴をみると成人を対象にした社会教育というよりも青年を対象にした社会教育実践を主に取り組んでいたようで、講習会、教育研究、歴史・文化研究、居場所づくり、書く実践などのじっせんからもその傾向が伺える。例えば、戦前に農村における青年の学習運動への関わりが社会的活動の端緒であったことや、教育科学運動への参加などはそこに該当する事例と考えられる。このように青年を対象にした実践を行っていることをみると橋本義夫と青年教育の距離は決して遠いものではなく、青年教育にも少なからず関心を持っていたように推察することができる。これらを鑑みると青年に「ふだん記」の執筆を勧める背景には、橋本の経験と青年への期待が込められているように見受けられる。

第2節 橋本の考える「ふだん記」の青年の学びにおける意義

第1項 書くことによる前向きな心情変化

本項では、橋本が青年に「ふだん記」をすすめた「青年版『ふだん記』のすすめ」(<青年>日本青年館、第133号(1981年6月)-第157号(1983年6月)、以後<青年>連載記事とする)を対象に、その諸相から橋本の考える「ふだん記」の青年の学習における意義を考察する。

この連載記事は1968年1月にはじまった「ふだん記」の歩みと重ねると、1978年の各地グループ(全国各地で「ふだん記」の実践を行っているグループ)の誕生や、同年の講談社現代新書『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』など「ふだん記」運動が広く知れ渡ってきた時期に連載されたものである。「ふだん記」の文友で毎日新聞記者であった永杉徹夫にすすめられたものである。この<青年>の連載記事は¹²、1980年前半に書かれたという執筆時期から、「ふだん記」に関する橋本の理念がほぼ確立されてから書かれたものと推察され、そうした理念を青年に向けて発出したものが<青年>連載記事の特徴と考えられ

る。ここでは青年に向けて書くことの意義を発信した内容を三つの視点に整理してみたい。

第一には書くことは、劣等感の克服など前向きな心情変化をもたらす意義があると橋本が考えていたことである。＜青年＞連載記事で橋本は自ら経験してきた劣等感や挫折に関して多くのことを書いている。

「生来の愚鈍と不器用で、小学校入学と同時に、劣等感が積もり出し、学校を終るまで、一度も『賞』を貰った事無しで、私の学校は、川が海の出口に積る、劣等感の^{デルタ}三角州のようなものだった。いろいろな事をして生きたが、殆ど成功しなかった¹³」。

橋本が強調するのは劣等感という言葉である。橋本は若いころに吃音であった影響で話すことへの苦手意識ももっていた。さらに、しかし、劣等感があったとする橋本も、自らが書くことによって変わったことを綴っている。

「文を書く必要に迫られたが、文より冷汗をかき、劣等感が加わるばかり、二十八年頃『人生五十年』もう先が短い、書置きにと自分のことを書いてみる。(中略)止むなく書いた実はこれが病みつきとなり癖がつき、三年経ったら下手でも自分流の文が書けた。驚いた！『私でも文が書ける。繰返せばいい、言葉を覚えると同じだ。だれでも書けないものなし』¹⁴」。

橋本は自分が書けるのだからだれでも書けるのだと着想したといい、劣等感が新たな活動を生み出すための原動力となっていたとする。さらに「劣等感の退治のために、『ふだん記』が生まれた¹⁵」とも述べており、劣等感を克服することが「ふだん記」の出発点であるとする。劣等感からの解放に関しては、自らのことだけでなく他の人々にも当てはまっていたようだ。

「文などというものは、全然書けないと思い込んでいたものが、言葉と同様に、繰返せば書けた。文章なんか誰れでも繰返せば書ける。これに驚ろき『ふだん記』という文章運動が始まった。ところが劣等感に沈うつした人びとに、文が書ける。本が出せるという、自己表現が社会的にできるということは、劣等感の解放に大いに役立った¹⁶」。

橋本は書くことやそれを出版することは劣等感に悩む人々の解放を可能にすることであると述べ、社会に自己表現ができることの意義を説く。すなわち、「ふだん記」を書くことは前向きな心情変化を呼び起こす意義があると考えていたようにみえる。

書く実践「ふだん記」の特徴は、創始者橋本が実験と捉えていたことにも認められる。

例えば、橋本はしばしば自らの実践に対して実験の語を用いて説明している。「私は近頃は自分を社会的モルモットだと思ふようになった。徹底的な個人主義者でもないし、徹底的社会的生活者でない。個人的であって、社会的存在だからである。いわば二人の私が常住している。こういう人間はいつも自分を観察する自分があるので、自分を被実験者にできる性格と思っている¹⁷⁾」といい、自らを実験材料であるととらえ、客観視していたことを告白する。

さらに「八方ふさがりの私でも、自分で実験し、どうしてこうなること、と最も原理原則の上に立てば納得もするし、間違いがないことがだんだん判って来た¹⁸⁾」と、実験をするのであれば劣等感に悩む自分でも納得をするという話もしている。さらに橋本は流行を追わず真似をせず取り組んだことが「ふだん記」の正体であるという考え方ももっていた¹⁹⁾。つまり、「ふだん記」の本質は実験であると考えていた。

『ふだん記』のごときも、万人に可能な文体、発表機関の種類、各地のグループの独立と交流、その他もろもろ。それらが、現在と未来の社会を想定し、実際社会生活の上に成り立たねばならぬ。既成のものでは不可能である場合、新しい方法を実験によって、創り出し、それが、みなによく、充たされるならばそれでよい²⁰⁾。

「ふだん記」は実験であると橋本は記し、それが人々を充たすものであれば良いとしている。ここでも「ふだん記」という実験は、人々を前向きな心情変化をもたらすものであるとする橋本の捉え方を伺うことができる。

第2項 青年に潜在する可能性の開花

第二に、「ふだん記」を書くことで、人間誰しもが持つ可能性を伸ばすことができると橋本は訴え手いる。橋本は折々で万人の持つ可能に着目していたが、自身の人間観を次のように示している。

「人間はだれでもものすごい、いい感覚をもっている。これを生かせば、だれでもすばらしいものができる²¹⁾」。

この言葉は橋本が「ふだん記」の執筆者たち(文友)の交流の場である「逢う日話す日」での盛り上がりを見て述べた言葉である。誰もがいい感覚をもっているとの言葉は、人間には可能性が備わっているにもかかわらず、潜在的に備わっている能力が劣等感などの社会的排除をうけることによって発揮できていないことへの警鐘とそこからの回復を目指すべきであるとする橋本の実践の基本的視座をみることができる。さらに、橋本は次のように

人間の価値についても言及している。

「今は万人が主人の時代、云わば万人が『神様』。一人ひとりが数百万年の進化の傑作、僅か数千年前から、人間が創作した『神様』とか『偉人』を、偶像にした『神様』よりも地球の上にある宇宙の傑作の万人こそ、創作の神よりも立派なものである！²²」
一人ひとりの人間こそ最も尊いものであると述べる。人間は全員が傑作であり、それこそが尊ばれるべきであるとする橋本の人間観がわかる。一人ひとりが尊いとする思想は、「ふだん記」においてどのような文章を主体とするかの認識にもあらわれている。橋本は以下のように述べる。

「今日および明日の文章で、何よりも大切なことは、一般の万人を主人として、その万人が書く事ができ、読むことができる文章が主体でなければならない。名文・美作家、売文業者が主人でなくして、万人が主人でなければならない²³」。

誰もが可能性を持っている、そのため書く文章も万人の文章であるべきであると考えていたのである。文章を生業とする人間のためのものではない。万人が尊重されるべきであるとの考え方はここからも読み取ることができる。

「万人可能」はもちろん青年にも開かれていると橋本は述べる。橋本は、青年を文化に自由にふれられるようにすべきだととらえていた。

「[中学生の暴行問題の解決策は、戦後の重筋肉労働の解放、生活の向上、栄養と休養が与えられ、文化機関に自由にふれられると、万人がほとんど同じで可能性がみんな出る。誰でも普通のことは皆できるのである。この可能性が万人に開放されると、小学校教育は大して変わるまいが、それ以上は根本的に変るはずなのである²⁴」。

重筋肉労働の解放、生活の向上、栄養と休養のような生活の余裕を生じさせて、文化に関わることである。これによって誰しにも可能性がでると述べる。さらに、このような文化に関わることによる可能性の開花は、学校教育より先の年齢における教育の場で変わるものと考えていた。

人間が潜在的に持つ能力に着目する考え方から想起されるのは、ノーベル経済学賞を受賞した哲学者・経済学者である、アマルティア・センの述べるケイパビリティ(潜在能力)の考え方である。橋本の述べるこの万人の可能性に着目する考え方はまさにセンに通じるようにみえる。アマルティア・センのケイパビリティとは、人間に本来備わっている能力(潜在能力)を対象としてそれがどの程度達成されているのかに着目する考え方である。2000年代後半より、世界中で人間がどの程度幸せであるかを測ろうとする試みである「幸福度」

の測定においてもこの考え方が用いられており、日本でも注目されつつある。

ケイパビリティはアマルティア・センによれば、「機能」の言葉を用いて定義付けている。ではこの機能とは何か。センはこのように説明する。

「個人の福祉は、その人の生活の質、いわば「生活の良さ」として見ることができる。生活とは、相互に関連した「機能」(ある状態になったり、何かをすること)の集合からなっていると見なすことができる。このような観点からすると、個人が達成していることは、その人の機能のベクトルとして表現することができる。重要な機能は、「適切な栄養を得ているか」「健康状態にあるか」「避けられる病気にかかっていないか」「早死にしていないか」などといった基本的なものから、「幸福であるか」「自尊心をもっているか」「社会生活に参加しているか」などといった複雑なものまで多岐にわたる。ここで主張したいことは、人の存在はこのような機能によって構成されており、人の福祉の評価は、これらの構成要素を評価する形を取るべきだということである²⁵」。

ここでいう福祉とは **well-being** のことである。日本語では福祉や幸福の訳語をもって当てられることが多いため、「福祉」の言葉で考えるよりもより広い意味であると考えたほうがわかりやすい。この一節では機能を、具体的な例をあげて説明する。人間が生きる上で基本的に必要とされる事柄である、「適切な栄養を得ているか」「健康状態にあるか」「避けられる病気にかかっていないか」「早死にしていないか」などはもとより、それら衣食住が達成されることよりもより高次の概念である「幸福であるか」「自尊心をもっているか」「社会生活に参加しているか」などが機能に該当するという。ケイパビリティはこの機能の言葉を用いてこう説明されている。

「機能の概念と密接に関連しているのが、「潜在能力」である。これは、人の行うことのできる様々な機能の組合せを表している。したがって、潜在能力は「様々なタイプの生活を送り」という個人の自由を反映した機能のベクトルの集合として表すことができる。財空間におけるいわゆる「予算集合」が、どのような財の組合せを購入できるかという個人の「自由」を表しているように、機能空間における「潜在能力集合」は、どのような生活を選択できるかという個人の「自由」を表している²⁶」。

例えば、「適切な栄養を得ているか」「健康状態にあるか」のような機能の組み合わせから自由に選び取ったものの集合であるわけである。ここで重要なのは、機能のうちより高

次の部分に含められていることである。つまり、自尊心や社会生活の参加のような機能を自由に選び取れることも、ケイパビリティに含められるのである。

さらに、センはケイパビリティに関して、機能を自由に選択できるとの立場から、このように端的に説明している。

「潜在能力とは、第一に価値ある機能を達成する自由を反映したものである。それは、自由を達成するための手段ではなく、自由そのものに直接、注目する。そして、それはわれわれが持っている心の選択肢を明らかにする。この意味において、潜在能力は実質的な自由を反映したものであるといえる。機能が個人の福祉の構成要素である限り、潜在能力は個人の福祉を達成しようとする自由を表している²⁷」。

人間に本来備わっているさまざまな機能を選び取れる自由こそがケイパビリティであるところでは示されている。すなわち、自尊心を持つことや社会参加を自由にできることがケイパビリティである。このことで人間の **well-being** をセンは測ろうとしたのである。

ここにおいて、橋本義夫の万人の可能性論とセンのケイパビリティ論には共通項を見出すことができる。橋本は万人の可能性を伸ばすことを主張していたが、この可能性を伸ばすべきとする考え方には、誰でも言葉で表現することができる能力が本来から備わっていることや、それが学校から社会から植え付けられてしまった劣等感によって阻害されていることの警鐘が含まれている。

橋本の「ふだん記」をケイパビリティの考え方によって説明すると、以下のようになる。文を書くことや文章を発信できることは人間に備わっているはずの重要な機能であり、それが現在の社会において阻害されてしまっているが故に、「ふだん記」などの活動によって誰でも書ける、文章を発表できる自由を回復すべきである。ここからみられるように、橋本義夫の「ふだん記」をめぐる考え方は人間一人ひとりを重んじようとする平等への意識を少なからず垣間見ることができるように思われる。

加えて橋本のこの考え方に関しては、自らの劣等感の体験から潜在能力を高めるべきであるとの結論にたどり着いたことが肝要であると思われる。原稿執筆当時の橋本は 78 歳。人生において挫折や苦悩を重ねた中で、万人の可能性の伸張の重要性を見いだしたが、それを執筆活動による具体的な実践の中で各々が書くことで達成していこうと促している点が目を見く。橋本の思想は実践との結びつきが強いことを伺える。

橋本はしばしば橋本は執筆時の 1980 年代当時の社会状況の影響を意識し、その状況下において青年が何をすべきであるのか言及している。

「先進国となり、その先進ともなったからには、今度は日本の若者が、自ら試み、探り、『新人類文化』の道を創り、ここらで諸外国にご恩がえしをなすべき絶好のチャンスと思う²⁸」。

橋本が見据えていたのは先進国化のあとの日本の未来である。これまでは道が示されていた、しかし今後は目標にすべき姿は明確に見えていない。では、この先に進むにあたっての社会の担い手は誰であるのか。橋本は青年が担うのであるのだと考えていたことが伺える。

そこで先進国の未来の文化を考えるうえで鍵になる概念と思われるのが、橋本による造語である「新人類文化²⁹」である。語は、「ふだん記」を新しい人類の文化であると位置づけた言葉であり、「ふだん記」そのものを示す言葉である。橋本は「新人類文化」を『新人類文化』は新しい文化です、だから有名な人はお断りです。有名人は「過去」のものの上に立つ有名ですから」と説明する³⁰。「新人類文化」の担い手に関して橋本はこう述べる。

『ふだん記』が、『新人類文化』と重なる。無名の劣等感に沈む若者や、まだ世に埋もれている多くの婦人たちこそ『新人類文化』そのエネルギーの供給源であろう³¹。

橋本の主張にみられるのは、新しい文化の担い手は、苦しみに直面する青年やかつては世に出る機会が少なかった主婦こそであるとする考え方である。ここには困難に直面する人々が潜在している可能性を開花させることでこれからの時代が作られることを橋本が期待していたことが推察される。

第3項 有るは無きに優る

第三に、橋本は青年に文章を書き記すことを繰り返すすすめるが、その際「ふだん記」の理念である「下手に書きなさい」に通じる、恐れず書くことをたびたび強調している。

『ふだん記』は、普段日常に使う文字^まだけ知っているだけで、教養の有無、年齢、職業を一切を問わない。勿論、文章の上手下手などは論外である。いやむしろ文章のうまくない人を歓迎し、文友としている³²。

橋本は文章の下手である人を歓迎している。橋本はこの考え方を、「下手に書きなさい」と端的な言葉で表現し、この表題の著書も記している³³。橋本の実践は実験、すなわちまず行うこと。書く実践でいえばまず書くことである。「ふだん記」をすすめる別の書でも文章の巧拙よりも書くか書かないかを優先するべきであるとの考えをこう述べている。

「上手だの、下手だのの評価の前に、『有るか』『無いか』が評価されなければならない。もちろん『有る』方がよい。みんなの文章は『有るは無きに優る』をねらうに限る³⁴⁾」。

書き、文章を残すことが何よりも価値があるととらえていることが伺える。書くことは特別な限られた人のものではない。誰もが書くことができる力を持っているのだからこそ、恐れずまず書こう、有る方がよいと青年に対して書かせるように促している。橋本は「ふだん記」を劣等感からの克服や可能性の開花に寄与できる意義があると考えていたからこそこのように、「ふだん記」の執筆を青年にすすめていたと思われる。

第3節 青年の書く「ふだん記」にみる学び

本節は「ふだん記」を書く若年層(20代及び30代)の文友(「ふだん記」の執筆者)数名を取り上げ、書かれた文章の内容から執筆者たちの変容を追い、書くことによる学びが執筆者にどのような意義があったのかを論じていきたい。ここでは①書き手の前向きな心情変化と②書き手に潜在する可能性の開花の二つの視点から、計4冊の「ふだん記」本を取り上げ分析していきたい。

第1項 「ふだん記」がもたらす心情変化

「ふだん記」がもたらす前向きな心情変化の第一の例に、尾股協子『麦の穂』(ふだん記文書4、1975年5月20日発行、橋本義夫編)をみる。尾股は1940(昭和15)年12月17日、東京都荏原郡中延生まれで『麦の穂』の出版当時35歳の文友であった。昭和19年12月、4歳時に疎開により長野県南佐久郡豊里村へ、同地で小学校から中学校卒業まで過ごし、長野県の岡谷、松本などの製糸工場、工場閉鎖後には八王子の会社に勤務し、その後退社、結婚して主婦になる半生を送った人物である³⁵⁾。『麦の穂』の中で目を引くのは「ふだん記」との出会いによる尾股の八王子に対する印象の変化である。

尾股は、青春時代を過ごしていた松本の町を以下のように述べる。

「松本は全体が活気のある町であり、個性のある町であった。(中略)心のぜいたくの出来る町であった³⁶⁾」。

その反面転居した八王子に関しては良いように書かれておらず、松本と対照させながらこのように述べる。

「今住んでいる八王子は、ただ生活をするだけの町、人間が唯生きるだけの町。松本

は生活を楽しむことが出来る町。これは大きな違いである。私はそんな中で青春を過してきた。今後八王子も生活を楽しむ町になってほしい³⁷⁾。

しかしながら、この八王子評の直後に「今の八王子は『ふだん記』があるから好きである³⁸⁾」とも書いており八王子に対する印象が変化したことに「ふだん記」の存在があった。このことの意味は「ふだん記」が書き手にもたらした影響決して小さくないようにみえる。「ふだん記」が青年にもたらす影響の一つに、地域との関わりの変容を考えられるためである。そこで「ふだん記」が尾股に何をもたらしたかを確認していきたい。

尾股の「ふだん記」に対する記述の中で注目されるのは、「ふだん記」と関わりながら八王子に関する記述がしばしば見られる点である。「ふだん記」に入ってから回顧に関して、八王子のことを引きながら次のように述べている。

「私は『ふだんぎ』に入り三年目になった。一番良かったのは、まず私が八王子と云う土地を選んだことであった。傷心を抱いて、私は十年前、ただ自分が生きるために八王子へきた。何もない平凡なその土地には少々がっかりした。けれども十年前の私の心には、この八王子はピッタリであった。心の傷をいやし、私は元の自分を取りもどすことが出来た³⁹⁾。

「ふだん記」に対する前向きな変化は「ふだん記」において文章を書くことの経験が作用していたように思われる。

「私など誰れが書いてくれるものか。自分で書かなかつたら、何が残るであろう。とにかく書くことに体ごとぶつかろう。何だっちはじめからうまくいくはずはない。誰だって、どんなに偉い先生だって初めはあつたはず、そんな開きなおつた気持であつた。橋本先生にそのことを書いて送つた。先生の返事に、『上手に書くことはプロにまかせなさい。下手で良いから書きなさい』生れて初めてであつた⁴⁰⁾。

「ふだん記」で執筆するまでの尾股の心情の変化は、自らのことを書き残すことにより自分の歴史を紡ぐことができる「ふだん記」の理念に共感し、書く実践に取り組むに至るまでの考え方を示している。さらに橋本が述べる「ふだん記」の理念の一つである「下手に書きなさい」との考え方を知ることが、青年が執筆に取りかかる支えとなったことも書かれている。これは橋本の理念が青年に対して活動への参加を促すよう前向きに影響していることの現れであると思われる。さらにこのようにも述べる。

「八王子に来てよかった。自分の名前のはいった本を手を持つことが出来るとは全く想像もしなかつた。橋本先生には、何からなにまでお世話になり本当に有りがとう御

座居ました。又四宮さんの御厚意、うれしく思います。人を信じられなかった一時期、それを乗り越えて、大勢の人を知った喜び、これも出合があればこそです⁴¹。

失意を胸に八王子に移り住んだが、「ふだん記」の出会いにより前向きになったこと、「ふだん記」で得られた成果である自らのことの本に対する喜び、「ふだん記」の人々に対する謝意などが内包されている。橋本の理念がもたらしたものに苦難からの克服や今後の喜びがあったことは、橋本の言葉はただ活動を支えるものであっただけでなく、前向きな感情を呼び起こすものであったとみえる。この例では「ふだん記」が、自らの暮らす地域への心情の変化があったことが認められた。

第2項 「ふだん記」による生きがいの獲得

第二の例に、高野清子『道はるかなれど』（ふだん記草子 10、1969年6月25日、みんなの文化研究会発行、橋本義夫編）を取り上げる。高野は1934年12月23日、「ふだん記」の地元八王子に生まれる文友である。『道はるかなれど』出版当時は35歳であった。職業は主婦、家業である繊維の工場経営者の夫人で、美術短大服飾科を卒業している。本書の巻頭言には次のように記載されている。

「工場経営者の主婦で、家事・育児・その他非常に多忙な中をさいて書いた。このため走り書きせねばならず、細部に手が廻り兼ねる。だがこれこそ「みんなの文章」の条件が生んだ存在であろう。原稿を読んでも、飾りっ気なし、何でも即時的で、然も楽しく書き、全体的に明るい。この文は、必ずみんなを楽しく読ませ、みんなに一つの生き方を教える事だろう。『みんなの文章』の或る要素をもっているようだ⁴²。

この叙述からは橋本が、「みんなの文章」はどうあるべきか考えていたかがわかる。高野が多忙な生活を送っている現況をみた上で、これを「みんなの文章の条件」としてしている。高野は自営業の主婦であり、子育てで多忙であった人物である。その結果出されることになった、そのままの文章こそが「みんなの文章」と橋本は述べる。高野の文章に対して、巻頭言で明るく楽しませる文章であると評価する。巻頭言の後半部分でも、推敲を重ねた文章を後に出すとしても、飾らない文章のほうが勉強になるとも述べている。ここからはいいものをつくろうと難しく考えてつくるよりも、そのまま飾らず書く方が楽しいものになる、とする橋本の考え方がみえる。「ふだん記」運動が多くの人を惹きつけた実践であったことは、このように敷居を設けないことでもたらされる楽しさにあると推察される。あとがきには橋本や「ふだん記」に対する高野自身の感想が記されている。

「勉強のきらいな私には、むずかしい事は何も解りません。唯、見た夢、思った事、それを事実在即して書くだけです。それが又、楽しいのです。楽しくて楽しくて、どんどん書いてしまいました。大野さんが橋本先生を紹介して下さいました。橋本先生は時折、家へいらして下さい、「もっと書け、もっと書け」と、私をせきたてます。勿論、ほめたり、おだてたり、はげまして下さる事も忘れません。つい、私もどんどん書く事になりました⁴³」。

高野は書きながらさまざまな形でほめられて書いてきたことに言及をしている。書くこととの苦手意識をほめられることで払しょくし、書く意欲を湧き立たせてきたことが見受けられる。高野は勉強がきらいであると述べる。しかしながら、日常に思ったことを書き続ける「ふだん記」は楽しいものであるし、日々の暮らしの充実につながってきたことも言及している。このことから「ふだん記」では学校での学びとは異なり、書くことそのものが楽しいとの心情を持ち、生きがいとなっていたことがわかる。

第3項 「ふだん記」書き手の可能性の拡大

本項ではもう一冊、30代の著者が執筆した「ふだん記」を取り上げる。それが、小金井巽『小っちゃな八百屋』（ふだん記文書2、1975年5月20日再販、橋本義夫編）である。執筆者の小金井は1937年12月11日、埼玉県入間郡所沢町生まれで出版当時38歳であった。職業は八百屋であり、「ふだん記」の地元八王子に暮らす「ふだん記」文友の一人である。同書を評した橋本による巻頭言の記述をみると、以下のようにある。

「この本は、日本中の誰れでも読める本であろう。そして誰れにも読みたい本である。読めば解るが、著者は、不遇にもめげず、粘り強く、明るく、正直で、素直に生き、いつも暖かい人間性をもっている。(中略)著者がもてる素質を生かす日の来ることを、多くの著者と共に待望して止まない⁴⁴」。

橋本は本書を誰もが読め、誰もが読みやすい本だと評している。加えて、小金井の人物を高く評価している。一方で、必ずしも完成品であると評価をしていない。「素質を生かす日の来ることを、多くの読者と共に待望して止まない」との言葉を添えている。小金井は当時30代ということもあり、橋本は小金井の将来の可能性に期待していたことを読み取ることができる。小金井は、いわば普通の「町の八百屋さん」といった文筆を専門にした人間ではない。そういった書き手であったため、その潜在能力にも期待をしていたようにもうかがえる。

所沢に生まれた小金井が八王子を訪れるまでの経緯は、次のようである。小金井は 1951 年 9 月 1 日の中学 2 年のときに初めて八王子の商店を訪れ、その半年後に奉公に出ることになったという⁴⁵。当時の奉公に出されたことに関して、以下のように述懐する。

「母が病気で寝たきり、中学三年を頭に四人の子供である。学校に行くにも、本は買えない帳面は買えない。(中略)考えれば家にいるよりも小さい乍らよそに働きに出た方が食物はいいし、父に怒られないですむし、ずーっと楽なのである。家では姉弟三人(姉は足がわるくて家の中にいたっきりであった)下の妹をのぞいて他は中学も出ていない⁴⁶」。

小金井は中学 2 年で奉公に出された自らの境遇を決して悲嘆していない。むしろ「無理の無い事」や「ずーっと楽である」と述べ、前向きに捉えている。このような考え方を持つ小金井だからこそ、橋本は小金井に対して巻頭言の中で、境遇にめげず、粘り強く、明るく、との言葉を与えたのであろう。父に対しても、「今になると父の気持もわかるような気がする。父にもまちがった所が多くあるが、昔の封建的な社会の犠牲者のような気がして父を許せるようになったこの頃である⁴⁷」と述べ、前向きにとらえるようになった心境の変化があったことを書き記している。これら書き記されたことから窺い知れるのは、境遇に負けぬ執筆者小金井の人間像である。

著者である小金井と「ふだん記」の人との交流に関する記述は、橋本義夫と共に「ふだん記」を支え続けた四宮さつきとのことが中心である。例えば、「手紙交換」との小題を附した文章では四宮に宛てた文の冒頭でこう書いている。

「八百たつより、四宮の小母さんへー この頃『ふだんぎ』の出るのが楽しみで、いつも心待ちしています。小母さんに『ふだんぎ』の話聞いてから早や一年になりますね。此の頃少し物を書くという楽しさが湧いて来ました。これも小母さんのおかげと感謝しています⁴⁸」。

書くことの喜びを書いている。「ふだん記」運動に参加し、書くことに関する前向きな気持ちがあらわれてきているところに、「ふだん記」を通して前向きな気持ちが醸成される姿をみることができる。

「ふだん記」でつながりのあった四宮からみた、小金井に関する人物評も本書にて知ることができる。四宮さつきは小金井を以下のように論じている。

「何でも読みたがる。反骨精神も強い。それで書く事をすゝめた。『恥づかしい、恥づかしい』と云いながら乱暴な字で、それでも次々と昔ばなしを書いて来る。書いて発

表してみると、誰れも八百たつさんを馬鹿にしたりしない。みんなが励まし、みんながみつめている。読めば判るように明るいほがらかな青年である⁴⁹。

反骨精神が強いことを「ふだん記」での記録を進めたことや、周りの人びとが小金井を励ましながら「ふだん記」の執筆が進んでいたことなどがみられることなど、「ふだん記」に関わって書くことに取り組んでいく小金井の姿を四宮の書く一節から知ることができる。若者が自らの境遇を前向きにとらえ日々を過ごしていることや、その青年が「ふだん記」や人々と出会うことに喜びを感じている姿である。青年自身は書くことの楽しみを、それを支える橋本や四宮のような「ふだん記」の中心人物は青年から可能性を感じていたことがみえる。参加者が「ふだん記」に関わることで成長の可能性を広げることができたことが伺える。

第4項 「ふだん記」による潜在能力の開花

続いて「ふだん記」が書き手の可能性を開花させた事例に、海端俊子の詩集『海は私の絵本』（ふだん記新書3 1974年3月10日発行、橋本義夫編）を取り上げる。執筆者海端は1937(昭和12)年2月17日兵庫県明石生、詩集『海は私の絵本』出版当時は37歳だった。父は4歳で亡くし、母は9歳で亡くしている。さらに、終戦後に姉弟と別れ、長崎県五島の叔母の下の養女となる。長崎県の五島列島に位置する、南松浦郡玉之浦町向小浦の小さな島に暮らす7人の子どもを持つ主婦である。橋本は巻頭言でこう述べる。

「この人は生まれながらの詩人だと思った。『身边小文』で判る様に、幼時に両親を失い、更に貰われていった家でも、五年にして養父を失い、義母も去るという恵まれぬ星の下に育ち、然も教育や、文化にも恵まれぬ所にあつて労苦を重ねた。現在は家数二十戸の島に暮し、七人の子を持つ主婦として日夜働らきつづけている。この条件にあつて詩が生まれるのである⁵⁰」。

海端の苦難の経験が詩の形に結実したことは、劣等感や挫折を持つ青年だからこそ形となるとみる、橋本の考える理念が実践されている姿を見いだすことができる。

海端の「ふだん記」への思いを示しているのが、あとかきの「ありがとう」である。ここでは自らの詩への思いや学びの経験も踏まえて「ふだん記」への感謝を述べる。

「無学の私を書いたものを詩集にして下さって本当にありがとう。私は中学生の頃詩が好きでしたが、ベルネール詩集と、島崎藤村詩集を一回だけしか読んだことがありません。詩はどんなものであるかを少しも知っておりません。文章がうまく書けな

いので、短く簡単に書くと、詩のような、そんな感じに自分なるので書きました⁵¹」。

自らは詩が好きであったことを思いつつも触れることができなかったが、思いのままに書き連ねることで詩を作れたことに関する感謝を読み取ることができる。

橋本は「ふだん記」を勧める中で、繰り返し「下手に書きなさい」との姿勢を示したことや、書くことで積み重ねることが重要であることを示している。この考えは、不本意ながらも学ぶことが少なかった青年に対して書くことができるように促し、執筆者の精神的な支柱となっていたことがわかる。海端のように詩が好きで詩を書ける可能性を有しながら書けないという経験をしてきた青年が「ふだん記」で詩を書いた実践は、青年が書くことで自らの才能を見出し、自身の可能性を高められた意義があると考えられる。

小結

本章では「ふだん記」における青年の学びに関して、主に 2 点のことを明らかにした。第一は橋本が「ふだん記」には青年にとって、書くことによって前向きな心情変化や潜在する可能性を開花させる意義があるにとらえていたこと、さらに青年への期待を持ち、「ふだん記」の執筆をすすめていたことである。第二は実際に文友たちが「ふだん記」を書くことで自らの住む地域をポジティブにとらえられるようになったことや書くことが生きがいとなったことが確認できた。また、今回の対象であるいずれの「ふだん記」本でも、それぞれの書き手の中に潜在していた可能性が引き出されたことを認められた。

「ふだん記」運動では非常に多数の本が出されており、それらは青年の書く実践における社会教育研究の対象をより広げる可能性があると思われる。本章の課題はより多くの「ふだん記」を研究し、より多角的に書く実践の学びをみることや、執筆者のその後の変容を長期的視点でとらえ、分析をすることである。

附 橋本義夫「青年版『ふだん記』のすすめ」一覧表

(＜青年＞第133号(1981年6月)-第157号(1983年6月) 日本青年館、までの記事まとめ)

年	月	号	タイトル	副題	節のタイトル	短言
1980 昭和 55	6	133	青年版 『ふだん 記』のす すすめ	なし	<ul style="list-style-type: none"> ・劣等感の中から生れる ・新しい文化の生れる層 	
1980 昭和 55	7	134	青年版 『ふだん 記』のす すすめ	大きな力が埋蔵されている -好条件なき若者と女性層-	<ul style="list-style-type: none"> ・だれもが予想が外れた ・先進国は平国民が道をあける 	
1980 昭和 55	8	135	青年版 『ふだん 記』のす すすめ(三)	なし	<ul style="list-style-type: none"> ・(に) 日本の若者に『新人類文化』の基礎つくらせる ・小さな実験 ・実験のこわさ ・つぶやき 	どんな狭い土地で行なわれたことでも実験として試みれば全体の問題になる。
1980 昭和 55	9	136	青年版 『ふだん 記』のす すすめ(四)	暗いその向こうに光がある	<ul style="list-style-type: none"> ・対象が主人 ・江戸時代の問題少年 ・次の段階が生まれる ・暗い向こうに光がある 	○粘りはどうして養成するか。作る方にまわすこと。速成をほめぬこと、目標を向こうにおくこと、習慣にすること。可能なことからつみあげてゆくこと。 ○自然の破壊は人間の破壊に通じる。自然の回復と人間の回復が今こそ必要なきはない。人間は誰れかの云う事を聞いているものである。但し殆ど選んでいない。

1980 昭和 55	10	137	青年版 『ふだん 記』のす すめ(五)	劣等感の背後 のひかり	<ul style="list-style-type: none"> ・乞食は身近です ・どっちにも可能 ・特殊ではない ・問題青少年が主人 	<p>○文に書くと、楽しい思い出は、瞬時の出来事ではなく、読む度に微笑が湧く。文に書くと、怒りは忘れる事が出来て健康的になる。文に書くと、珍しい出来事は公共の記録になる。文に書くと、失敗は実験報告として、人の失敗が予防できる。</p> <p>○ブルドーザーが地形を変え、便利重宝が、家も家具も資料も惜し気なく廃棄する。工業が大発展し、破壊も又激しい。今は捨てることさえ「生活の知恵」とまで云われるようになった。だが捨てどきは、同時に拾い時である。</p>
1980 昭和 55	11	138	青年版 『ふだん 記』のす すめ(六)	無名人に明日 が見える時	<ul style="list-style-type: none"> ・単純と複雑 ・自分をモルモットにする ・歓喜と感覚 ・喜びをもって抑制する 	<p>○無力、無才と思ったら、毎日積んでゆけばよい。大きいものは小さいものが集まったものだ。大きい仕事を一時にとか、一ペンにとか、考える馬鹿はいない。</p>
1980 昭和 55	12	139	青年版 『ふだん 記』のす すめ(七)	私でも文章が 書ける、書け ない者なし	<ul style="list-style-type: none"> ・大脳の録画 ・臆病、小心、愚鈍 ・原則と実験にみせる ・自分をモルモットにする 	<ul style="list-style-type: none"> ・身近にいと欠点ばかり探す。いなくなると良い点を探す。身近にいるうちに良い所を探し、感謝し励ますようにしよう。 ・パンフレットがたまれば厚い書籍となる。厚いものは、うすいものが集まったことを知ればよい。うすいものから始めることだ。

1981 昭和 56	1	140	青年版 『ふだん 記』のす すめ(八)	学校暴力の原 因—劣等感か ら解放—	<ul style="list-style-type: none"> ・人間差はない ・学校が作る ・指導より開発 ・劣等感が道をあけた ・万人の大道 	<p>○聞き手がいれば話す。よい聞き手がほしい。奪うような聞き手、拾い物のような聞き手、聞かせたがる聞き手、その他いろいろある。繭の糸をほごすような聞き手がほしい。聞くのは話すよりもむずかしい。</p> <p>○自慢話は自分だけが喜ぶ。失敗談はみんなが聞く。</p>
1981 昭和 56	2	141	青年版 『ふだん 記』のす すめ(九)	次の時代はも う始まってい る—新人類文 化の呼び声—	<ul style="list-style-type: none"> ・テレビ、新聞をにぎわす問題 ・実験によって知る ・動物の軽作業 ・留岡先生の試み 	<p>他の人を賞める場合は早いほどいい。感情の生なほど文が生きる。怒りの場合はおくらせるほどよく、よく考えるほどよい。</p>
1981 昭和 56	3	142	青年版 『ふだん 記』のす すめ(十)	母性型文化と 母性型教育	<ul style="list-style-type: none"> ・人類社会の根本問題 ・私たちの試み ・喜びつつ生きる ・母性が可能にした ・社会動物は母性が基礎 	<p>○私の喜びは年老いて友が増したことだ。このことが最もうれしい。</p> <p>○正直は最短で、最良の記録である。尾ひれが魚の本体ではない。</p>
1981 昭和 56	4	143	青年版 『ふだん 記』のす すめ(十 一)	「差」から「同 じ」への前進	<ul style="list-style-type: none"> ・鍵を忘れた話 ・「同じ」安心 ・「差」のなくなる理由 ・「差」が混乱を招く ・平和と光 	<p>○物が成功し出すと、これに酔って本質を忘れる。この時が一つの危機だ。この時に、離れて遠くから客観することが大切である。</p> <p>○何でも活かす事ができる。何でも生かさぬ事もできる。生かすようにすれば、自分も生きる。</p>

1981 昭和 56	5	144	青年版 『ふだん 記』のす すめ(十 二)	ついて行けな い文科系	<ul style="list-style-type: none"> ・メード・イン・ジ ャパンの夢 ・舶来の夢さめず ・日本語の垣根の中 ・段差がついた ・一般人は肌から身 につける ・倒錯は先進に起こ る 	<p>○個人の容量は小さい。どんなに利 益をあげても、八十年たてば容器が ひっくりかえって零になる。名誉を つんでも同じ事だ。社会の容量は大 きく、永遠である。これに利益をつ み、名誉をみんなのものにすること だ。</p> <p>○応答なき者は、自ら出口に近づく ことになる。</p>
1981 昭和 56	6	145	青年版 『ふだん 記』のす すめ(十 三)	文科系の大飛 躍	<ul style="list-style-type: none"> ・実験の勝利 ・実験しない人に明 日はない ・ライシャワー氏の 言葉 ・前に進む方法 	<p>○世は不思議なものだ。「私は不正 直です」という人が一番正直であっ た？「親不孝者です」という人が最 も親不孝であったりする。さて「私 は愛国者」などといってる人は何だ ろうか？</p> <p>○応答が道をあける。一度、二度、 三度ノックする。不在かもしれな い。四度、五度ノックする。これが 人を得、師を得、友を得る。</p> <p>○消費だけの喜びは浅い。</p>
1981 昭和 56	7	146	青年版 『ふだん 記』のす すめ(十 四)	新学校教育学 が生まれるで あろう—実験 が明解な答え を出す—	<ul style="list-style-type: none"> ・広がる暴行中学生 ・必然現象である ・当面の策 ・戦争は止まらなか った 	<p>慣れることは能率的だが、慣れきっ てしまうと進歩が止まる。</p>

1981 昭和 56	8	147	青年版 『ふだん 記』のす すめ(十 五)	青年期の難し さを解く鍵	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児の可愛さ ・ 最も大切な岐路 ・ 一つ誇りとなる事 をもたせる 	<ul style="list-style-type: none"> ○何でも適量がある。例えば空気や 水でも、台風や洪水があり、食物で も過食短命がある。 ○経済力も多すぎると子孫に有害と なる。学校教育なども多すぎて害と なり、総合調和がないと、害毒を流 す。
1981 昭和 56	9	148	青年版 『ふだん 記』のす すめ(十 六)	鍵は何か？— 探すこと、験 すこと—	<ul style="list-style-type: none"> ・ 策の無い実例 ・ 打算は流れを変え ない ・ 桶職人の言葉から ・ 万人が尊いもの ・ 万人の尊厳 	容易に出来ない事を毎日考えてい るよりも、出来る事をやって積み上 げて行く。これにあたり外れはな い。
1981 昭和 56	10	149	青年版 『ふだん 記』のす すめ(十 七)	—事実実験 でもある	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自然は諸法則によ って成る ・ 「成り年」と大冷 害 ・ 何事も実験的にみ る ・ 客観できれば自分 も実験体 	<ul style="list-style-type: none"> ○もともと文は言葉がもとで、社会 の必要性から文になったものだ。現 代万人社会の必要性からみんなの 会話のような気楽な文を書けばい い。 ○一から始める。積み上げてゆく。
1981 昭和 56	11	150	青年版 『ふだん 記』のす すめ(十 八)	市民図書館の 前進—誰でも 書ける要素を 加える—	<ul style="list-style-type: none"> ・ 農村図書館を夢み る二人 ・ 『図書館運動五十 年』 ・ 道草を食う人間 ・ 先進国は実験して すすむ ・ 明日の市民図書館 	手紙はすぐ書くこと。文も直ぐ書く こと。これが秘訣。平凡だが昔から 変わらない。

1981 昭和 56	12	151	青年版 『ふだん 記』のす すめ(十 九)	高度機械化時 代の万人のた めの文化	<ul style="list-style-type: none"> ・高度の工業の基本 ・文明の方向と不安 ・万人の心身の健全 をいかに保つか ・『ふだん記』の試 み 	なし
1982 昭和 57	1	152	青年版 『ふだん 記』のす すめ(二 十)	ふだん記に魔 法なし	<ul style="list-style-type: none"> ・白昼には妖怪なし ・魔法は詐術 ・魔法はだますだけ ・『ふだん記』に魔 法なし 	<p>○生産力が高くなり、高度の工業が たくさん出来れば、人間生活が幸福 になるように説かれ、皆それを信じ た。教育が普及し、全国の学校が全 部鉄筋コンクリート造りになり、全 国民を大学に送ったら、さぞよい国 になるだろうと思った。だが到着先 は逆になるらしい。何事も限界があ る。</p> <p>○歴史のブルドーザーと、生物本来 の運命は、仮借なく人もものもかた づけられる。プラスは必ずしもプラ スならず。マイナスは必ずしもマイ ナスならず。</p> <p>○ハカマをはいて釣をするか、農業 をするか、木工をするか。その仕事 にふさわしい服装がある。ふさわし い労働がある。表現する言葉があ る。表現する文がある。</p> <p>○危機感は警告である。何が必要で あり、何を補うべきか、何を優先、 行うべきか、を判断すること、そし て即行すること。</p>

1982 昭和 57	2	153	青年版 『ふだん 記』のす すめ(二 十一)	高齢者の長生 き法一験して みると何でも 生きる一	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な実験材料— 自分 ・無力者の実験 ・高齢者の長生き法 ・今日を生かし、今 を生かす 	<p>○文は説得するが、燃え上がらせない。詩は説得しないが、燃え上がらせる。燃えれば行動になる。</p> <p>○近代工業は人間の欲望をのせて、地球をかけめぐり、さながら悪鬼の様相をして来た。量を巨大にし、時間を縮める。そして抑制を困難にして来た。</p>
1982 昭和 57	3	154	青年版 『ふだん 記』のす すめ(二 十二)	先端技術と新 人類文化	<ul style="list-style-type: none"> ・大きなショック ・当たるか？外れる か？ ・作る文化 ・自然法則と生物法 則 	なし
1982 昭和 57	4	155	青年版 『ふだん 記』のす すめ(二 十三)	自然法則と生 物法則—機械 化と母性—	<ul style="list-style-type: none"> ・作業機から感覚機 へ ・機械進歩のスピー ド ・逆転現象 ・母性が解く鍵 	<p>○ほとんど未知である。「ほとんど既知である」などと誰がいったか？他分、紙の張子の天狗さまだろう。</p> <p>○私は怠け者だ。これを私が一番よく知っている。いつもはげましたバケの皮を修復している。これが本当の事。</p>
1982 昭和 57	5	156	青年版 『ふだん 記』のす すめ(二 十四)	八十年間最大 の危機	<ul style="list-style-type: none"> ・危機は二回ふれた ・自己不要と人間不 要論 ・自己不要経験 ・窮して道が拓く 	なし

1982 昭和 57	6	157	青年版 『ふだん 記』のす すめ(二 十五)	並製の価値— 先進国の明日 を知る方法—	<ul style="list-style-type: none"> ・みんな明日を知り たがる ・先進国は一般人が 先を行く ・観念でなく実験で ・合理主義者が妖怪 とバケモノにみえ る ・だれもが並制(ママ) の時代 	なし
------------------	---	-----	------------------------------------	----------------------------	---	----

第4部 第3章 注

- 1 永井三郎「グループ・ワーク」、駒田錦一、佐藤幸治、吉田昇編『青年教育』朝倉書店、1951年、pp.31-45。佐藤幸治「グループ・ワークとグループ・ダイナミックス」、駒田錦一、佐藤幸治、吉田昇編『青年教育』朝倉書店、1951年、pp.119-129。
- 2 吉田昇「共同学習の本質」、青年団研究所編『共同学習の手引』財団法人日本青年館、1954年、pp.2-42。
- 3 今江正敏「青年団と共同学習」、『共同学習の手引』同前、pp.43-115。
- 4 矢口悦子「我が国における共同学習論の系譜」、＜日本社会教育学会紀要＞(28)、1992年、pp.1-5。
- 5 片岡了、辻智子「共同学習・生活記録」、日本社会教育学会編『成人の学習と生涯学習の組織化』東洋館出版社、2004年、pp.108-123。
- 6 青柳伊佐夫、草野滋之「青年の学習論」、日本社会教育学会三十周年記念事業特別委員会(委員長碓井正久)編『現代社会教育の創造 社会教育研究30年の成果と課題』1988年、東洋館出版社、pp.269-278。
- 7 色川大吉「現代の常民—橋本義夫論 昭和精神史序説」、＜中央公論＞89(8)、1974年8月など。
- 8 小林多寿子「書く実践と書く共同体の生成：初期「ふだん記」運動の場合」＜生活學論叢＞3、1998年。小林多寿子「書く実践と自己のリテラシー」桜井厚編『戦後世相の経験史』せりか書房、2006。小林多寿子(研究代表者)『「ふだん記」運動の展開過程と戦後のリテラシーの変容に関する実証的研究』(2003年度～2004年度科学研究費報告書、研究課題番号：15530340)。
- 9 橋本義夫『だれもが書ける文章 「自分史」のすすめ』講談社現代新書、1978年、pp.8-9。
- 10 橋本鋼二『万人に文を 橋本義夫のふだん記に至る道程』揺籃社、2017年、p.20。
- 11 橋本義夫「青年諸君に」、橋本義夫『暴風雨の中で』橋本義夫著作集第二集、ふだん記旭川グループ、1996年、p.185。

-
- 12 橋本鋼二『万人に文を 橋本義夫のふだん記に至る道程』揺籃社、2017年、p.249。
- 13 橋本義夫「青年版『ふだん記』のすすめ」、＜青年＞133号、日本青年館、1981年6月、p.14。
- 14 前掲「青年版『ふだん記』のすすめ」、pp.14-15。
- 15 橋本義夫「青年版『ふだん記』のすすめ(八) 学校暴力の原因—劣等感から解放—」、＜青年＞140号、日本青年館、1981年1月、p.32。
- 16 橋本義夫「青年版『ふだん記』のすすめ(十)、母性型文化と母性型教育」、＜青年＞142号、日本青年館、1981年3月、p.31。
- 17 橋本義夫「青年版『ふだん記』のすすめ(六) 無名人に明日が見える時」、無名人に明日が見える時」、＜青年＞138号、日本青年館、1980年6月、p.31。
- 18 橋本義夫「青年版『ふだん記』のすすめ(七) 私でも文章が書ける、書けない者なし」、＜青年＞139号、日本青年館、1980年12月、p.31。
- 19 橋本義夫「青年版『ふだん記』のすすめ(三)」、＜青年＞135号、日本青年館、1981年8月、pp.31-32。
- 20 橋本義夫「青年版『ふだん記』のすすめ(十三) 文科系の大飛躍」、＜青年＞145号、1981年6月、p.31。
- 21 前掲「青年版『ふだん記』のすすめ(六) 無名人に明日が見える時」、p.31。
- 22 橋本義夫「青年版『ふだん記』のすすめ(十六) 鍵は何か?—探すこと、験すこと—」、＜青年＞148号、日本青年館、1981年9月、p.31。
- 23 橋本義夫「青年版『ふだん記』のすすめ(二十) ふだん記に魔法なし」、＜青年＞152号、日本青年館、1982年1月、p.32。
- 24 橋本義夫「青年版『ふだん記』のすすめ(十四) 新学校教育学が生まれるであろう—実験が明解な答えを出す—」、＜青年＞146号、日本青年館、1981年7月、p.32。
- 25 アマルティア・セン(池本幸生、野上裕生、佐藤仁訳)『不平等の再検討 潜在能力と自由』岩波書店、1999年、p.59。
- 26 同前、pp.59-60。
- 27 同前、p.70。
- 28 前掲「青年版『ふだん記』のすすめ(三)」、p.30。
- 29 誤読を避けるため「ふだん記」の各種の機関紙において「新・人類文化」の表記を用いることも多い。
- 30 橋本義夫『万人可能の哲学 附“新人類文化”』ふだん記全国グループ、1977年、p.45。
- 31 前掲「青年版『ふだん記』のすすめ(三)」、p.32。
- 32 前掲「青年版『ふだん記』のすすめ(七) 私でも文章が書ける、書けない者なし」、p.31。
- 33 前掲『下手に書きなさい—「ふだん記」のすすめ』。
- 34 前掲『だれもが書ける文章 「自分史」のすすめ』、p.49。
- 35 尾股協子『麦の穂』ふだん記文書4、ふだん記全国グループ、1975年、p.61。
- 36 同前、p.2。
- 37 同前、p.3。
- 38 同前、p.3。
- 39 同前、p.54-55。
- 40 同前、p.55-56。
- 41 同前、p.62。
- 42 橋本義夫「はじめに」、高野清子『道はるかなれど』ふだん記草子10、1969年。
- 43 高野清子『道はるかなれど』、p.128-129。
- 44 橋本義夫「誰れにも読ませたい本」、小金井巽『小っちゃな八百屋』ふだん記文書2 1975年再版、巻頭言。

-
- 45 小金井巽『小っちな八百屋』ふだん記文書2、1975年再版、橋本義夫編、p.27。
46 同前、p.27。
47 同前、p.17。
48 同前、p.51。
49 四宮さつき「トンネルを通過して来た同志の・・・」、前掲『小っちな八百屋』、p.53。
50 橋本義夫「ひとこと」、海端俊子 詩集『海は私の絵本』ふだん記新書3 1974年、巻頭言。
51 海端俊子 詩集『海は私の絵本』ふだん記新書3 1974年、pp.50-51。

第4章 ナラティブの視点からみた書く実践に関する一研究

本章は八王子の実践家・橋本義夫が1960年代後半に始めた書く実践である「ふだん記」(ふだんぎ)を対象に、執筆過程における執筆者の変容を検討することでナラティブの視点から再評価することを目的とする。人間はその歴史の中でさまざまな物語を紡いできた。哲学者の野家啓一は、「人間のアイデンティティの在処を見出すとすれば、それは『物語るヒト』すなわち『ホモ・ナランス(homo narrans)』であるところにこそ求められねばならない¹⁾」と述べ、物語を語るこそ人間としてのアイデンティティとする。物語は人間に欠かせないものであることからナラティブは主に看護、医療や福祉など人間の生に関わる分野で研究されてきた。また、物語は口述だけでなく書くことによりつくられてきた。

社会教育でも、生活綴方、生活記録や「自分史」などさまざまな書く実践の蓄積があり研究対象とされてきた。さらに、社会教育の分野では書き手と読み手の相互的な学びによる実践の蓄積がある。近年の社会教育研究では識字教育方法としての「自分史」学習を対象にナラティブ・アプローチからモデル構築を行った研究があり、「識字の実践でありながら、書くことに固執しない識字学習の構築に向けての一つの方向性²⁾」が示され社会教育研究においてナラティブが持つ可能性が検討されてきた。このように、社会教育においてさまざまな物語を記述する学びの実践や研究が行われてきた一方で、依然掘り起こしがされていない実践もある。それが本章で対象とする「ふだん記」である。庶民がさまざまな文を自由に書き・交流する「ふだん記」の実践はナラティブと親和性が高い。というのも書き手は自らの来歴を制限されずに書き機関誌に掲載され、読み手は感想をハガキなどを通して交流する。この過程で小文を積み重ね、ふだん記本が出版される。ナラティブはインタビューが語り始めると原則的にその語りは阻害されず³⁾、語りの後インタビュアーとの相互作用でナラティブができるものであるから、「ふだん記」は、ナラティブが語られる過程と親和性をみいだせる。そのため本論文では、ふだん記本を対象に書き手と支援者の相互作用による執筆過程における書き手の変容と意義を実証的に検討することを課題に設定する。

第1節 ナラティブをめぐる諸相

第1項 ナラティブの語義及び研究の動向

本項ではナラティブを取り巻く諸相を把握したい。例えば『広辞苑』(第六版)にはナラテ

ィヴは収載されていないものの、ナラトロジー【narratology】を「人間が物語る行為と、その所産としての物語を研究対象とする学問分野⁴⁾」と定義する。『新英和大辞典』(第六版)には narrative 「(出来事・体験などの)話、物語、説話⁵⁾」と定義されている。やまだ(2007)はナラティヴを「広義の言語によって語る行為と語られたもの⁶⁾」と述べる。これらをもとにナラティヴは基本的に物語と同義であり、なおかつ何らかの方法により語られた物語であることが意味に含まれていることを伺える。

ではナラティヴはどう語られるのか。フリック(2011)は人々の主観的経験を明らかにする方法として、インタビューが語るナラティヴをデータに活用するナラティヴ・インタビューの手法を示している⁷⁾。ナラティヴは主にインタビューにより語られることが多く、インタビューは、ライフストーリーに関わる研究やさまざまな質的研究において用いられている⁸⁾。しかしながら、ナラティヴは必ずしもインタビューにより語られるものとは限らないとの指摘もある。例えば、やまだ(2008)はナラティヴを「一般的には、『広義のことばによって語る行為と語られたもの』をさす。広義のことばには、身振りや映像や建築や都市など視覚的・文化的表現も含まれる⁹⁾」とし、非常に幅を持った語であるものであることを示唆している。

こうした広義の言語によって作られたナラティヴの観点を踏まえると、ナラティヴはさまざまな手法により作成することが可能であると思われる。やまだは「相互行為としてのナラティヴは、インタビューや会話のように口頭で語られる研究者と相手のやりとりだけをさすのではない。書かれたテキストを読むという行為も対話的な相互行為である¹⁰⁾」とも述べ、ナラティヴの概念の広さを指摘している。そこでここではこうした観点に基づき書く行為により綴られた物語を対象とした。というのも社会教育・生涯学習においては既にさまざまな学習活動を通じて豊富な物語が蓄積されており、これらの活用により社会教育におけるナラティヴ研究をより広くの対象から実施することが可能になると推察したためである。

次にナラティヴに関連する先行研究を論じる。ナラティヴは前述の通り話・物語や語ることを意味する語であるが、その該当する意味は広範に亘っており、ナラティヴに関連する研究も非常に多岐に及ぶ。研究分野に目を向けると、心理学(特に質的心理学)、看護・医療、死生学、宗教学、福祉学、教育学などにおける研究をみることができる¹¹⁾。これらから共通して見いだされるのは人間、人間の生・生き方をどう捉えるかという点である。ナラティヴは人間を描出するための研究方法として用いられていることを伺うことができる。

しかし、ナラティブを用いた研究は一樣ではなく、ナラティブに含まれるさまざまな側面のうち、どの側面に着目するかによってアプローチが異なっていることが伺える。そのため、ここではそれらのうち一部を概括したい。

例えばさまざまな事象をナラティブからとらえようとする研究は多くを数える。子育て期の女性が自らの育児経験をどうとらえ、意味づけるかを明らかにし、モデルを示した徳田(2004)による研究¹²、人が死をどのように意味づけ物語るのかを検討する川島(2011)によるナラティブ死生学の研究¹³、死や喪失、障害や危機、病いなどを抱えながら人生を生きるプロセスに焦点をあてたやまだ他(2008)による質的心理学における研究などが該当する¹⁴。これらはナラティブというアプローチを通じて人が直面する多くの事象の意味を汲み取ろうとする試みであり、ナラティブが人間という存在の理解に重要な役割を果たしうるものであることを示していると思われる。

他にもナラティブに関する研究には、語り出す当事者に着目し、ナラティブによりもたらされる語り手の変容を検討しようとする、いわばアクション・リサーチ的なアプローチがある。例えば、人が糖尿病の療養に取り組むにあたりナラティブを用い体験を明らかにする野並、米田ら(2005)の研究¹⁵、仲野(2008)による女子少年院における少年と教官の語りを対象にした少年の変容に着目した研究¹⁶のような医療や教育の分野のものがある。さらには小森・野口・野村(1999)らによるナラティブ・セラピーの研究のような研究もある¹⁷。これらは、ナラティブに存在している人に影響を及ぼしうる潜在的な力に着目し、積極的にとらえようとしたものである。

これらを概観するとナラティブは人間を知り、人間を変えうることを可能にすることが評価されてきたものの、一方で主にインタビューなどによって語られたナラティブから現在を生きる人間を理解しようとする研究が多く、人間のこれまでの営みの中で豊富に蓄積されてきた書かれた物語をナラティブの視点から再構成するような試みは多く見られなかったように思われる。

第2項 社会教育において綴られてきた物語

社会教育では、これまで多くの物語が綴られてきた。社会教育における書く実践といえ、例えば無着成恭による『山びこ学校』などの生活綴方、鶴見和子らの生活記録運動、色川大吉により提唱され、鈴木政子などに取り組みされた「自分史」などの実践がある。

無着成恭は『山びこ学校』に関して、「社会科で求めているようなほんものの生活態度を

発見させる一つの手がかりを綴り方に求めたということです。だから、この本におさめられた綴り方や詩は結果として書かれたものでなく、出発点として書かれたものです。一つ一つが問題を含み、一つ一つが教室の中で吟味されているのです¹⁸⁾という。ここで書かれた作品はその後の学び合いの出発点に捉えられているのが無着の生活綴方であった。

生活記録運動に大きな足跡を残してきた鶴見は、生活記録運動を「歴史をつくる国民が、国民の歴史を書き、書くことをとおして、自分たち自身をつくりかえていく運動¹⁹⁾」と評価し、生活記録運動は書き手たち自身をつくりかえる意義を持つ運動であるという見方を示している。鶴見の生活記録運動において対象の中心が置かれていたのは、母の歴史であるが、これらから学ぶことで自分を作り変えていく力があると考えていたことが伺える。

「自分史」の概念を提唱した色川大吉は「人は自分を相対化し、自分以外の人生を生きる他者や世界を発見し、人たることの深遠な意味に到達する。同時にそれは自分の経験を理論化し、精神的な共有財産にも変えさせる²⁰⁾」という。人間は自らを相対化し、他を発見することで人が人たることを知ることや経験の共有化に関しても述べているが、こうしたことは「自分史」そのものが持つ意義に対する指摘としてみることができる。

『あの日夕焼け一母さんの太平洋戦争』を著した鈴木政子は、書くにあたっての体験をこう綴っている。「わたしは四十五歳になっていた。この文章を書く段階で、必要にせまられ、歴史を学びなおした。改めて日中間の、十五年のかかわりを知る。被害者意識のみ強かったわたしは、侵略国のひとりであったことを確認し、からだを震わせた。ものを見る目が変わったのを感じる²¹⁾」。ここから読み取れるのは著者の認識の転換である。鈴木は「ものを見る目が変わった」といい、物語を綴るために学ぶことで自らの意識が変わったことを話している。

以上の作品では、身の回りのこと、自分のこと、家族のことなどの物語が書かれ、これらが書き手や読み手に対して自分の作り変え、経験の共有化、認識の転換などさまざまな自己教育の意義があったことが伺えた。しかしながら、「ふだん記」は他の実践に比べると、研究の蓄積が十分ではなかった。

第2節 書く実践の執筆過程に関する事例分析

第1項 尾股の執筆と橋本による書簡の概観

「ふだん記」は庶民が自分史など文章を自由に書く運動であり、著者の「自分史」や家族史など多くの物語が綴られている。本項では中でも単行本であるふだん記本の完成まで

の過程に着目する。ふだん記本の中でも創始者の橋本が存命中に出版されたふだん記本は、執筆が書き手と支援者(橋本)の相互のやり取りを経て作られており、その過程で橋本から感想や激励などを受ける。こうして完成されるふだん記本には書き手が人生で直面した苦労や喜び、他者への感謝などが織り込まれている。そのため本の出版までの過程を分析する。

ここで取り上げる第一の本は、「ふだん記」の地元八王子の文友である尾股協子のふだん記本、『麦の穂』(尾股協子著(橋本義夫編)、1975年)である。『麦の穂』は長野で青年期を送った1940年生まれの著者が、八王子に転居するまでの30代半ばまでの半生や身のことが綴られた本である。第二は、橋本義夫から尾股に宛てられた書簡・ハガキをまとめた本、『その土地よかれ、その人よかれ』(故橋本義夫(尾股協子編)、1996年)である。本書は橋本が尾股に宛てた手紙を整理し収載し、尾股が振返り感想をつけた書である。そのため橋本や「ふだん記」と尾股の出会いから『麦の穂』出版に至る過程における橋本の言葉とそれを受けた尾股の考えを知ることができる書である。

次に示す表14 尾股協子の執筆日と橋本義夫の書簡の対照表は『麦の穂』に収載されているテキストの執筆日と、橋本義夫が尾股に宛てた手紙の日付と内容をまとめた一覧表である。左から分類No、尾股『麦の穂』中の項のタイトルまたは橋本から尾股へ宛てた書簡、出典を記載した。『麦の穂』は日付が記載してある項のみ表に掲載した。なお表中の(尾)は尾股の文章、(橋)は橋本の書簡である。

表 14 尾股協子の執筆日と橋本義夫の書簡の対照表

No	執筆日	『麦の穂』／橋本の書簡	出典	No	執筆日	『麦の穂』／橋本の書簡	出典
H1	S48. 2. 3	(橋)「ふだん記」について	(2)pp. 2-3	H19	S49. 9. 5	(橋)原稿送付、手紙のお礼状	(2)p. 23
H2	S48. 4. 22	(橋)原稿の書き方	(2)pp. 4-7	010	S49. 9. 10	(尾)洗濯	(1)pp. 41-42
01	S48. 6. 13	(尾)千円	(1)pp. 5-6	011	S49. 12. 3	(尾)先生の洋裁	(1)pp. 4-5
H3	S48. ○. 11	(橋)訪問できなかったこと の詫び(*月記載なし)	(2)pp. 8-9	H20	S49. 12. 6	(橋)本を出すことを推奨	(2)pp. 23-24
H4	S48. 7. 6	(橋)文友岡村保雄氏の出版 会案内：(尾股は欠席)	(2)pp. 9-1 0	H21	S49. 12. 14	(橋)尾股の本をふだん記 文書で企画したと連絡	(2)p. 24
H5	S48. 8. 28	(橋)印刷代喜捨のお礼状	(2)pp. 10-	H22	S49. 12. 26	(橋)本編集が1月予定と	(2)pp. 24-25

			11			連絡	
02	S48. 10. 5	(尾)床屋	(1)pp. 31-32	H23	S50. 1. 1	(橋)尾股の著書企画の伝達	(2)p. 26
03	S48. 10. 2 3	(尾)子供のアルバイト	(1)pp. 30-31	H24	S50. 1. 1	(橋)上記と別葉書で著書出版準備の連絡	(2)pp. 26-27
H6	S48. 10. 2 5	(橋)木曾谷旅行について、尾股の文章を褒める	(2)pp. 11-12	012	S50. 1. 7	(尾)洗濯談義	(1)pp. 43-46
H7	S48. 12. 3	(橋)本の出版をすすめる	(2)pp. 12-13	013	S50. 1. 8	(尾)わが夫	(1)pp. 37-39
H8	S49. 1. 1	(橋)本の出版をすすめる	(2)p. 14	014	S50. 1. 8	(尾)『ふだんぎ』との出会い	(1)pp. 54-56
H9	S49. 2. 26	(橋)文章をほめ、本の出版をすすめる	(2)p. 15	H25	S50. 1. 10	(橋)原稿の到着とタイトル「麦の穂」の決定通知	(2)p. 27
H10	S49. 2. 27	(橋)ふだん記新書出版の推奨	(2)pp. 15-16	015	S50. 1. 10	(尾)どもり	(1)pp. 23-24
04	S49. 5. 6	(尾)プロとアマ	(1)pp. 42-43	016	S50. 1. 10	(尾)ある友	(1)pp. 39-41
H11	S49. 5. 18	(橋)詩の創作をほめる	(2)p. 17	H26	S50. 1. 18	(橋)タイトル『麦の穂』の事	(2)pp. 27-28
H12	S49. 5. 21	(橋)童話を書く手ほどき	(2)p. 18	017	S50. 1. 29	(尾)片倉試験所	(1)pp. 14-21
H13	S49. 5. 29	(橋)「道のあしあと」「松本と八王子」の感想	(2)p. 19	H27	S50. 2. 4	(橋)本の編集完了通知、略歴執筆の伝達	(2)pp. 28-29
05	S49. 6. 2	(尾)イチゴ	(1)pp. 25-27	H28	S50. 2. 11	(橋)本の出版の意義	(2)p. 29
06	S49. 6. 21	(尾)二十四才	(1)pp. 7-14	H29	S50. 3. 8	(橋)本表紙の版面をほめる	(2)p. 29
H14	S49. 6. 24	(橋)秋の出版をすすめる	(2)p. 20	018	S50. 4. 30	(尾)あとがき	(1)p. 62

H1 5	S49. 7. 2	(橋)秋に尾股の本の出版見 通	(2)pp. 20- 21	H30	S50. 4. 22	(橋)5月上旬製本の伝達	(2)p. 30
H1 6	S49. 7. 3	(橋)詩をほめ、尾股の文の 共有化への期待	(2)p. 21	H31	S50. 5. 1	(橋)他の「ふだん記」本 の見本の発送、紹介	(2)pp. 30-31
07	S49. 7. 20	(尾)先生	(1)pp. 49- 51	H32	S50. 5. 25	(橋)本ができることの連 絡	(2)p. 31
H1 7	S49. 7. 24	(橋)尾股のどもり体験の感 想	(2)pp. 21- 22	H33	S50. 5. 31	(橋)本の完成通知	(2)pp. 31-32
08	S49. 7. 29	(尾)たたみ	(1)pp. 56- 58	H34	S50. 6. 8	(橋)尾股の著書の意義	(2)pp. 32-33
H1 8	S49. 8. 4	(橋)手紙応答集を作る方 法、手紙の良さ	(2)pp. 22- 23	H35	S50. 6. 9	(橋)尾股の著書が出版さ れたことの反応	(2)p. 33
09	S49. 9. 4	(尾)風呂	(1)pp. 27- 28				

出典：(1)尾股協子(橋本義夫編)『麦の穂』ふだん記文書 4、ふだん記全国グループ、1975年。

(2)故橋本義夫(尾股協子編)『その土地よかれ、その人よかれ』ふだん記新書 282、ふだん記旭川グループ、1996年。

尾股は1973(昭和48)年2月に橋本から最初の手紙を受け取り、本の出版前後の約2年4ヶ月の期間の間に35通の手紙を受け取っている。橋本の手紙をみると、①文章の書き方の指南期(H1,H2)、②文章の賞賛、出版推奨期(H3-H20)、③本の制作、完成期(H21-H34)、と時期に合わせ様々な内容の便りを尾股に送っている。尾股のテキストは、『麦の穂』の発行日に近い1975年1月の執筆が若干多くみられる(O12-O17)ものの、時期に偏りなく執筆されていることが伺える。

第2項 執筆過程における書き手の変容

文章の書き方の指南期(①)における橋本による最初の手紙(H1)は、「ふだん記」を知り数年を経て書き始めた尾股へのコメントである。『明治二ケタ対昭和二ケタ』面白く拝読いたしました。『ふだんぎ』二十八号に載せるようにいたしましょう。どうぞ、つづいてたくさんお送り下さい²²。手紙中で触れたのは、尾股が最初に「ふだん記」で書いた文である(『麦

の穂』未収載)。橋本は文章をほめ、多くの文章の執筆を推奨していることが伺える。この手紙に対し尾股は後の回想で「先生はいつも原稿を送ると、喜んでくれ必ず賞めてくれた。その賞められるのがうれしく、その後はセッセと書いた²³⁾」といい、橋本がほめることが文を書き続ける動機であったと綴っている。

他にも原稿の書き方を説明した手紙もみられ(H2)、「原稿ははじめ一字さげてください」など、原稿用紙への原稿の書き方を説明した手紙もあり、さらに「尾股さんは文の性がたいへん良いです」のような言葉や『着物と私』『今の子、昔の子』はいい文です」という尾股をほめるコメントもある²⁴⁾。なお、「今の子、昔の子」は『麦の穂』で現在の生活を語る項の一つである(執筆年月日無記載のため表に未記載)。子どもの遊び道具が大切にされていない現況を自らの子ども時代と比較し「子供が可哀相になり、子供を駄目になっているのは誰？それは大人ではないかと思う²⁵⁾」とする文である。橋本は書き方を指南し文章をほめながら、尾股が文章を積み上げる基盤を作ったことが伺える。

文章の賞賛、出版推奨期(②)で橋本は第6信の手紙でも尾股のアルバイトに関する文章をほめ(H6)、1973年12月3日の第7信で橋本は尾股に本を出版することをすすめる(H7)。一方で尾股は「私は全然そんな夢のようなことは、考えることなく、ただ書いて楽しいと思っていた時であった²⁶⁾」と振り返っており、本を出すことは念頭に置いていなかったと述べる。以降、橋本は尾股に本の出版を勧める(H8-H10)が尾股の心情が変化をみせるのは、1974年2月27日の第10信である。橋本は「原稿の書き方を、会得され、すっかりととのい、これなら、どこへ出しても立派です。内容もととのいました。(中略)原稿百枚もあれば、写真をのせ手頃な本になります²⁷⁾」といい、尾股は「先生より原稿の書き方を教わり、ようやくわかってきた。書く内容も、自分の書き方が、きまってきたようである²⁸⁾」と振り返る。以降、自分の歴史をテーマにした内容の執筆がみられる。

「二十四才」(O6)は尾股にとり最も印象的な年齢であったと振り返る。「大人になるための段階を一段ずつでなく、三段位一ぺんに登ったような気がした²⁹⁾」という、尾股の30代までの『麦の穂』の物語のクライマックスである。母の死、葬式、自らが働いていた工場の閉鎖、住み慣れた松本を離れ八王子への転居が重なった年である。執筆時に30代半ばに差し掛かった尾股は、「何といろいろなことがあった二十四才であろう。つらくとも悲しくとも、傷だらけになっても命があるかぎり、自分流で生きよう。『親のないものは』と後指さされずに、そう決心した、それは二十四才であった³⁰⁾」と綴る。自らの経験をまとめ、自分の生きてきた歩みを振り返る機会にしている。なお、橋本は第14信以降も尾股の本の出

版への期待を伝えるやりとりを経て、尾股は「先生」(O7)で尾股が出会った橋本を含む 3 名の師の名を挙げ「自分一人で生きているわけではない。大勢の人が自分をとり廻っている。それが今頃わかってきた³¹⁾」と心情変化があったことを記している。

本の制作と完成(③)の時期において、1974 年 12 月の橋本の手紙では、企画の立案(H21)や編集作業の見通しの伝達(H22)などを伝えている。当初尾股は「手紙を下さるたびに、本作りを勧めてくれ、私になんかできるのかなといつも想っていた³²⁾」と戸惑いの気持ちを持っていたが、具体的に本が完成をみえ、本に掲載するための尾股の略歴記載を依頼する(H27)などの通知を受けてから尾股は次のような気持ちになったことを語る。「自分の本が出来る。この手紙を見て今までの自分をふり返って見た。書くことが沢山ありすぎる。これが実感であった。こうなるとないよりある方が得、まさに(一)が(十)となる。先生ありがとう³³⁾」。尾股は本の完成が見える中で、自らの歩みの振り返りを行い、さらなる執筆への意欲が湧いたことを読み取ることができる。本が完成した通知(H33)を受け、完成した本に対して尾股は「ついに私の本が出来たのだ。(中略)自分で読んで見る。自分で書いた文章なのに涙が出てしまった³⁴⁾」と、自らの書いた物語への感動を述べる。書き始めた頃は書くことそのものに迷いがあった尾股は、文章を書きふだん記本という自らの物語を完成させていく中で自身の存在を発見し、自らの人生を見返すように変わった。ここから書き手が物語を綴る過程は、書き手が自身の物語から自らを知り、現在の自らの生を省察する自己教育の意義があったと考えることができる。さらに「ふだん記」の執筆者が書き方の指南を受け、文を褒められ出版をすすめながら、本を完成させる過程からは、経験のない筆者が自らの物語を綴るためのエンパワーメントをされている意義も認められる。また、その途中では師の大切さに気づくなどの他者の存在に関する気づきもあった。

なお、尾股の本は橋本によれば尾股の住む川口(八王子市)で女性による初の本である。本の出版後に届くさまざまな反響や、図書館に寄贈され 30 通にも及ぶ礼状をもらったことなどを踏まえ、尾股は「まったく予期していなかったことだけに、この薄い本の一人歩きの重大さを身をもって体験した³⁵⁾」と記している。ここでは創出された物語は、世に出ることがなかった無名の一庶民の生きた記録が形となったものであり、なおかつ尾股にとっては自らの歩みが他の人々に共感を呼ぶことの実感をもたらす意味をもちうるものでもあったことを伺える。

小結

本章では書く実践をナラティブの視点からとらえ、執筆過程における執筆者の変容を検討し、ナラティブの視点から再評価することを試みた。第1節ではナラティブ研究は物語や語る行為を広く内包する意味を持つものの、書かれたテキストを対象にしたものはそれほど多く見られなかったことや、社会教育の分野では多くの物語を綴る実践がある一方で、同じく書く実践である「ふだん記」は多く取り上げられなかったことを確認した。そこで、第2節では「ふだん記」を対象に、その執筆過程における書き手の変容をナラティブの視点から分析した。その過程には、自己教育やエンパワーメント、他者の存在の気づきなどさまざまな意義を見出すことができた。以上から「ふだん記」は第1節でみた社会教育での書く実践同様にナラティブとして再評価されうるものであることがわかった。「ふだん記」は社会教育における書かれたテキストを対象にしたナラティブ研究の対象をより広げられるものであると思われる。

第4部 第4章 注

1 野家啓一編『ヒトと人のあいだ』岩波書店、2007年、pp.28-29。

2 添田祥史「識字教育方法としての自分史学習に関する研究—ナラティブ・アプローチからのモデル構築の試み」、＜日本社会教育学会紀要＞44、日本社会教育学会、2008年、p.49。

3 ウヴェ・フリック(小田博志監訳)『新版 質的研究入門<人間の科学>のための方法論』春秋社、2011年、p.217。

4 「ナラトロジー」、新村出編『広辞苑』第六版、岩波書店、2008年、p.2105。

5 「narrative」、竹林滋他編『研究社 新英和大辞典』第六版、研究社、2002年、p.1643。

6 やまだようこ「ナラティブ研究」、やまだようこ編『質的心理学の方法—語りをきく—』新曜社、2007年、p.54。

7 前掲『新版 質的研究入門<人間の科学>のための方法論』、pp.215-237。

8 桜井厚『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』せりか書房、2002年。桜井厚、小林多寿子編著『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房、2005年。

9 やまだようこ「人生と病いの語り」、やまだようこ編『質的心理学講座2 人生と病いの語り』東京大学出版会、2008年、p.2。

10 同前、p.7。

11 やまだようこ「『発達』と『発達段階』を問う：生涯発達とナラティブ論の視点から」、＜発達心理学研究＞22(4)、一般社団法人日本発達心理学会、2011年、pp.418-427。川島大輔「死生学における質的研究の展開と意義—死の心理学研究を中心に」、＜質的心理学フォーラム＞2、2010年、pp.70-80。など。

12 徳田治子「ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ：生涯発達の視点から」、＜発達心理学研究＞15(1)、一般社団法人日本発達心理学会、2004年、pp.13-26。

13 川島大輔『生涯発達における死の意味づけと宗教』ナカニシヤ出版、2011年、p.51。

14 前掲『質的心理学講座2 人生と病いの語り』、2008年。

15 野並葉子、米田昭子、田中和子、山川真理子「2型糖尿病成人男性患者の病気の体験—

ライフヒストリー法を用いたナラティブアプローチ」、＜兵庫県立大学看護学部紀要＞12、兵庫県立大学、2005年、pp.53-64。

16 仲野由佳里「女子少年院における少年の「変容」へのナラティブ・アプローチ：語りのリソースとプロットの変化に着目して」、＜犯罪社会学研究＞(33)、日本犯罪学会、2008年、pp.138-156。

17 小森康永・野口裕二・野村直樹編著『ナラティブ・セラピーの世界』日本評論社、1999年。

18 無着成恭編『山びこ学校』岩波書店、1995年、p.313。(初版は青銅社、1951年)。

19 鶴見和子『生活記録運動のなかで』未来社、1963年、p.199。

20 色川大吉『ある昭和史 自分史の試み』中央公論社、1975年、p.375。

21 鈴木政子『自分史—それぞれの書き方とまとめ方』日本エディタースクール出版部、1986年、pp.229-230。

22 橋本義夫の手紙(尾股協子宛、1973年2月3日)、故橋本義夫(尾股協子編)『その土地よかれ、その人よかれ』ふだん記新書 282、ふだん記旭川グループ、1996年、pp.2-3。

23 尾股協子の橋本の手紙の感想(1986年2月2日)、前掲『その土地よかれ、その人よかれ』、p.3。

24 橋本義夫の手紙(尾股協子宛、1973年4月22日)、前掲『その土地よかれ、その人よかれ』、pp.7-8。

25 尾股協子(橋本義夫編)『麦の穂』ふだん記文書 4、ふだん記全国グループ、p.47。

26 尾股協子の橋本の手紙の感想(1986年2月20日)、前掲『その土地よかれ、その人よかれ』、p.13。

27 橋本義夫の手紙(尾股協子宛、1974年2月27日)、前掲『その土地よかれ、その人よかれ』、p.15。

28 尾股協子の橋本の手紙の感想(日時記載なし)、前掲『その土地よかれ、その人よかれ』、p.16。

29 前掲『麦の穂』、p.7。

30 同前、p.14。

31 同前、p.51。

32 尾股協子の橋本の手紙の感想(1986年3月23日)、前掲『その土地よかれ、その人よかれ』、p.25。

33 尾股協子の橋本の手紙の感想(1986年4月2日)、前掲『その土地よかれ、その人よかれ』、p.28。

34 尾股協子の橋本の手紙の感想(日時記載なし)、前掲『その土地よかれ、その人よかれ』、p.32。

35 尾股協子の橋本の手紙の感想(日付記載なし)、前掲『その土地よかれ、その人よかれ』、p.35。

第5章 書く実践の意義に関する一研究—「ふだん記」を対象として—

本章においては「ふだん記」を対象にしながら、人々が文章を書く実践の意義に関して論じたい。書く実践は「ふだん記」の以前から社会教育・生涯学習の場においてさまざまな形で取り組まれてきた。戦前には生活綴方などの実践、戦後では共同学習における生活記録や「自分史」などの実践が挙げられる。書く実践では文章を書くことに加え、書かれたもの詳察や意見の共有・学び合いなどが取り組まれてきた。

生活記録は主に 1950 年代くらいまでに隆盛し全国に広がった書く実践であるが、「ふだん記」の実践の展開はその後の時期にあたる。1960 年代後半頃から活動がはじめられ、1970 年代後半には全国に活動が広がるきっかけとなる各地グループによる実践がスタートし 2000 年代に入っても活動が継続されていることから、「ふだん記」をみることは、戦後史における生活記録運動後の書く実践の取り組みを明らかにする意義をも有していると思われる。

近年の書く実践を取り巻く環境を鑑みると、デジタルツールの発展に伴い、執筆から共有までの障壁が下げられ、より多くの人々が自由に書き、語るができる環境が整ってきつつあるように思われる。これまで以上に多くの人々が書くことが可能になりつつあるが、そうした現況の中、書くことが人間にとりどのような意義をもつのか考察することは重要であると思われる。そこで本章では書くことの意義を具体的な実践から実証的に考察する。特に執筆者の人生を通観しつつ、書くことが人の人生の歩みにどのような意義をもっているかの観点から研究を行いたい。「ふだん記」ではエッセイや詩なども含め、さまざまな文章が執筆されているが、中心となるのは執筆者自らの来歴、すなわち「自分史」である。「ふだん記」では書き手が自らのことを書き、機関誌等に掲載し読み合う。それぞれが書いた文章を通じ、読み合いや文通などの活動も行われている。

書く実践の意義をみるにあたり、本章で「ふだん記」を対象にした理由は 2 点ある。第一は「ふだん記」全国に広がっており、多くの機関誌や「ふだん記」本(「ふだん記」の執筆者が出版した書籍)の存在など実践の蓄積があることであり、第二は「ふだん記」の活動期間の長さである。「ふだん記」の活動期間は 50 年に亘る。そのため、執筆者の長い人生の関わりから長期的な視野での影響をみることができると思われるためである。

主な調査データは「ふだん記」の文友(「ふだん記」の書き手のこと)4 名を対象にしたインタビューによる語りとその文友たちそれぞれが執筆した「ふだん記」の文章である。研

究方法は、4名に対するライフストーリー・インタビューの分析と機関誌などに掲載された文章の文献調査である。本章ではこれらの分析を通じて、「ふだん記」という書く実践が、人生の中で書き手にもたらした意義に関して明らかにすることを目的とする。

現代は ICT の発展に伴いデジタルツールなどを活用することにより、書く・発表することが容易になってきた時代であるが、その傾向はますます進んでいるようにみえる。1960年代から万人の文章を掲げ、庶民が自由に書き、発表する実践を進めてきた「ふだん記」の研究は、これからの書く実践が書き手に対してもたらす役割の考察に示唆を与える意義があると思われる。そこで、以下第1節では先行研究及び本章の視角を、第2節では「ふだん記」のインタビュー調査を、第3節では「ふだん記」のケーススタディをそれぞれ論じる。

第1節 先行研究及び本章の視角

本節では書く実践に関わる先行研究を概観し、それらをふまえつつ本章における研究の視角に関して述べる。人々が文章を書く行為は、さまざまな年齢・階層の人々の手により、多様な学習に係る中で取り組まれてきたため、書く実践を対象にした研究はさまざまな分野において論じられてきた。

例えば、社会教育・生涯学習研究においては書くことや記録する行為に着目し、成人の学びの一環の中で有力な学習方法として取り組まれてきた研究は少なくない。日本社会教育学会(2004)による『成人の学習』においては、成人の学習に係るさまざまな場面において活用されてきたことが示されている¹。そこでは例えば専門職員の力量形成のための方法の観点から書くことや記録することに関する研究が取りあげられており、社会教育職員の力量形成や向上のための学習記録に着目した研究や²、成人学習の支援者の力量形成のための振り返りに関する研究³、実践記録に基づいた事例研究の意義に関する研究⁴などが行われている。これらは記録を力量形成の観点から評価したものである。社会教育学会における「学び合うコミュニティを支えるコーディネーターの力量形成とその組織⁵」の研究では、中田(2015)が福島県における「復興支援ラウンドテーブル」の実践の中で、ラウンドテーブル報告者にとり報告に際して記録を作る行為を「実践の中での詳察を踏まえて次のレベルでの詳察の機会になる⁶」とし、その意義を示している。

宮崎(2007)は、生活記録を手がかりにしながら成人学習論における記録分析と課題の方法に関して、記録とそれに基づく学習を媒介にすることで詳察と高度が切断されることのない

い循環的実践過程が見出せるとしている⁷。

詳察のための記録に着目した研究に関しては、村田(2011)は記録を、詳察を支える重要な学習の方法として位置づけ、実践を行っていた国立市の公民館女性問題学習・公民館保育室活動において、社会教育・公民館学習のあり方についてひとつの体系を持った思想を紡ぎだす上で、記録が重要な役割を果たしたと述べている⁸。矢口(2013)はイギリスでの生涯学習セクターの指導者養成における教育理念と方法を考察しているが、そこでは自らの実践を対象にした論文作成経験が「リフレクション」の機会になっていることを見出している⁹。これらの研究をみると、書く行為は記録する行為のみならず、作成された記録そのものも何らかの学びに係る意義を見出されていることが伺える。

学校教育分野における書く実践を対象とした研究では、書く実践を子どもたちの教育方法の一つととらえ、その意義に着目した研究などをみることができる。青柳(2007)は「経験の見つめなおし」に詩を書くことは、昔感じていたことを経験として見つめ直しその時の感情を新たな言葉で捉える行為だとし、小学校で詩による学習の実践研究を行っている¹⁰。この研究は小学校において詩を執筆することを学びの意義を持つものとして意味付け詳察したものである。子どもの生活指導における書くことの意義を取り上げた杉山(2009)の研究では、子どもが自らの生活を主観的に書くこととともに他者との対話などに関わらせることによって学ぶこと重要だと指摘する¹¹。さらに、小沢(2009)による大学生を対象に、文章作成をさせることで自己理解を促す視点で行われた研究もある¹²。これらの学校における書く実践に主眼を当てた研究は執筆者や書く内容こそ異なるが、いずれの研究においても書くことが書き手に何らかの学びをもたらす意義に着目している。一方でいずれも子どもを対象にした研究であり、教育的な意義に限定されている。さらに子どもを対象とした研究である性質上、短期的なスパンでの変化を促すことに主眼を置くものであり、人間の人生の歩みから書くことの意義をみる本章とは異なる。

さて、戦後社会教育の中で行われてきた書く実践に関する先行研究では、1950年代に隆盛した生活記録に関するものを中心に蓄積がある。紙幅の関係もあることから、ここでは書く実践の意義に関して言及しているものを中心に取り上げたい。

鳥羽(2010)は生活記録が盛んであった1950年代に関して「記録」の時代ととらえ、サークル活動・生活記録の他にもルポルタージュ絵画、テレビ・ドキュメンタリーなどとともに論じている¹³。そのうちサークル活動や生活記録に関しては、次のように述べる。

「この時代の生活記録運動と国民的歴史学運動は、それぞれの方法での『記録』により

自己を書き替えていく、主体を変革していく契機となった。その意味を軽んずることはできないであろう¹⁴。ここには記録する行為(生活記録では書く実践)は単に記録を残すことではなく、書き手自身の変革に関する意義が見出されていることが伺える。

さらに、北河(2014)による生活記録運動に関する研究では、山形・岩手・秋田の3県の運動に焦点を当て、岩手の社会・文化運動と『岩手の保健』、山形の教育文化運動、秋田の生活記録運動、山形県の農村女性生活と記録運動などを実証的に取り上げている¹⁵。そこでは農村の青年・女性にとって記録運動が持った意味に注目して検討しているが、例えば秋田県の文集『母の実』の発行に関する研究においては「女性たちの長い間抑えられてきた、忍従と諦観、『古い殻』からの脱却を願う感情の奔出をもたらした¹⁶」ことなど、女性の感情の奔出としての書くことの意義を明らかにしている。

生活記録の研究においては、例えば猿山(2014)は鶴見和子の1952年に組織された生活記録サークル「生活をつづる会」の組織構造や学習プロセスの研究を行っており、他者との新たなつながりを生み出しより多くの人々に向けた生活運動の「記録」の可能性を模索した姿を描き出されている¹⁷。さらに、辻智子らによる、1950年代の生活記録運動に関して多様な研究が行われてきたことをしめし、時代的社会状況を考慮しつつ多様な事実を顕彰することの必要性を論じた研究もある¹⁸。ここまで述べてきたように、成人の学習において、書く実践は多様な方面から研究がされており、例えば書かれた内容の詳察などを通じた学習や「自分史」学習などが着目されてきた。

本項で取り上げてきた研究を概観すると、学校教育における書く実践に係る研究では、多くが児童生徒の学習方法として何らかの執筆を行うことの意義に着目している一方で、あくまでも学びの一手段での位置づけの評価が中心となっているものが多く、書く実践そのものの持つ意義までは対象とされていないようにみえる。また、これまで戦後社会教育の書く実践に関する研究、特に1950年代に隆盛をみせた生活記録運動をみると、その豊富な実践の積み重ねから、書くことの意義も相当に解明されてきた。しかしながら、生活記録運動隆盛の中心は1950年代であり、必ずしも長期的な運動とはならなかった。そうしたことから、書き手の人生と重ねあわせながら書くことの意義をみる研究の側面に関してはこれまであまりみることができなかった。そこで本章では特に人生の長い歩みのなかで、書くという行為が人に何をもたらすのかという点を踏まえながら論を進めたい。

第2節 「ふだん記」インタビュー調査の概要

ここでは「ふだん記」の文友4名に対して行ったインタビュー調査の概要を論じる。今回調査を行った対象の4名はいずれも女性で概要は表15の通りである。

調査者のサンプリングの実施にあたっては、人生との関わりから書く実践の意義をみるという目的志向のサンプリングに主眼を置いた。すなわち、本章においては、特にライフストーリーを概観しつつ、人生の転機とも重ね合わせながらの分析を試みることに焦点化するため、「ふだん記」に自らの人生の歩みを多く投稿し、かつ70-80歳代で多くの執筆を重ねた人物を対象とした。本章で明らかにすることの中で主眼をおいたのは書く実践(ここでは「ふだん記」)の人生における意義であり、被調査者とある程度の「ふだん記」との関わりの長さの観点でとらえると、本章で対象とする4名は、「ふだん記」と関わりをもってからそれぞれ36年、34年、46年、25年の年数があり、分析しうるものと推察した。

表15 インタビュー調査を行った「ふだん記」調査対象者

氏名	年齢 (調査時)	性別	「ふだん記」を知った年 (参加年)
小林薫	80代半ば	女	1979年3月 (同年の「逢う日語る日」)
金 ^{こん} 幹子	80代半ば	女	1981年11月 (同上)
橋本和子	70代前半	女	1969年秋頃 (ガリ版刷頃より)
張山てる子	60代後半	女	1990年8月頃 (1990年11月初投稿)

(2015年1月14日時点、五十音順)

インタビューの概要を以下に示す。方法は上記4名を対象にグループでインタビューを行った(概要は表16 インタビュー概要に示す)。主に、被調査者それぞれから「ふだん記」との出会いを含めたライフストーリーを語ってもらい、「ふだん記」に参加した感想や「ふだん記」の中で感じたこと、橋本義夫の言葉の中で好きなものなどを挙げ、それぞれのライフストーリーの語りが終わったあとに4名全員で「ふだん記」や橋本義夫への思いを自

由に述べ合う形式をとった。さらに、インタビューに先立ち経歴や「ふだん記」との出会いの時期に関して問う調査紙による簡易アンケートを実施している。

次節においては、ライフストーリー・インタビューでの語りや執筆した「ふだん記」を参照しつつ4名それぞれの人生における「ふだん記」での書く実践の意義を論じたい。

表 16 インタビュー概要

調査名	「ふだん記」に関するインタビュー
調査日、場所	2015年1月14日、小林薫宅
調査対象	「ふだん記」文友4名
調査方法	グループによる半構造化インタビュー
調査内容	「ふだん記」に出会うまでの人生の歩み、「ふだん記」参加へのきっかけについて、「ふだん記」に参加しての感想、感じたことなど

第3節 書く実践の意義に関する「ふだん記」のケーススタディ

第1項 ケース1・小林薫

はじめに取り上げる「ふだん記」文友の小林薫は、1930年代生まれで調査時80代半ばの女性である。出生地は東京府下西多摩郡(現在の東京都西多摩地域)、主な生育地は北海道亀田郡であり、幼少期から青春時代までを過ごしている。「ふだん記」に多くの投稿を行っている。主著は2011年に出された『花咲く道へ』¹⁹。本書は小林薫による「自分史」の本であり、312ページに及ぶ。小林は本書を橋本義夫との「先生の約束」といい、2015年の「ふだん記」の機関誌にも次のように記している。「橋本義夫先生と約束した『いつか自分史を出します』。これはやっと数年前、果たすことができたけれど、その時の嬉しさと、安堵感は私を今も幸せにしてくれている²⁰」。

同書は自分史篇、エッセイ篇の二部構成であり、自分史篇の中では人生の振り返り、「ふだん記」に関する思いなどが綴られている。苦労を重ねた人生の歩みが克明に描かれた書である。自分史篇では自身の家族のルーツ及び自らの出生からの来歴と「ふだん記」に巡りあうまでの人生が、エッセイ篇では、自身の日常での記録や思い、さらには執筆時での人生の振り返りなどが収録されている。

小林は、幼少期から青年期までを北海道の各地で過ごす。学校での学びに関しては、国

民学校高等科入学頃は戦時中の中での学びであったこと、さらに小林自身が病気がちでありそのことから戦中から戦後直後にかけての学齢期においても入退院を繰り返してきたことなどから、学校で学ぶこと機会に恵まれることはそれほどなかったという。北海道の道南で就職後も北海道を転じたのち、小林は家族のこと、2人の子育てのことなどさまざまな事由から上京をすることになる。

「死ぬ気で出てきたことは確かなんです。いや、死ぬというかももう行き詰まったら死ぬしか無いというか、子ども二人いてね、それで家庭的にうまく行かなくて人間関係もギスギスして、一生懸命まじめに生きてきたのになんでこういう風におかしくなっていくんだろっていう、自分ばかり責めて、辛かったんでね。で他にいくところもないから生まれたところに近いところに行きたいなっていう気持ちで出てきたんです²¹」。

上京時の気持ちを語るこうした言葉からは、小林のそれまでの心情が読み取れる。「ふだん記」に出逢うよりも前の人生の歩みの中で、多く労苦を経験してきた。

上京後も苦勞ののち職を得ることができ、都心での暮らしを経たのち現居でもある三多摩に移り住んだ。しかしながら、1978年秋には心臓疾患で手術を行い失職することとなる。

「病気になって、働けなくなって行き詰まって、娘はだいぶ大きくなっていましたので、心臓手術しなきゃならないって時に、本当になんかこれからどうして生きていけばいいだろうって思っていたんです²²」。

小林が「ふだん記」を知ったのは手術と失職により、不安を覚えるようになっていたことがきっかけであると語る。この時期の気持ちについて、小林は自身の著書『花咲く道へ』においても次のように綴っている。「それまでの一家の柱として、慎ましく、二人の子供と身を寄せ合って働き詰めていた日々から、先の見えない病後の暮らし。決まった収入の未知が閉ざされ、つい希望も暗くなりがちになる²³」。必死に生きてきた小林が直面した困難、「ふだん記」に出会ったのはまさにこうした時期にあたる。

こうした状況をみた小林の長女が、橋本義夫の著書『だれもが書ける文章―「自分史」のすすめ』²⁴を購入し、小林に渡したことから「ふだん記」を知ることに至ったのである。橋本の書を長女が買ってきた理由は、「私がいつも聖書読んだり、一人で考えたりしていることを子どもたちなりにみててね、書いたり読んだりするのが好き²⁵」だった母の姿にあったという。それまでの歩みとそこで苦闘することが結果的に「ふだん記」へとつながったと思われる。小林は『だれもが書ける文章』を、「読んでたら私自身が今行き詰まっている道が拓けてきたんじゃないかなって感じで²⁶」読み、橋本へ手紙を出し、以降は「ふだん記」

の文友の集まりに参加するようになる。

「ふだん記」と関わり始めた頃に関して、小林は自身の著書において次のように綴っている。『ふだんぎ』に投稿して、四宮さつきさんを始め、大野弘子さんや諸先輩からのお便りをたくさん頂いた。いわゆる『新人優先』の決まりごとを皆守っていた。そうして、気の合う方々との交流を通し、書くこと、読むことで日頃の思いを分かち合い、新しい出会いに広がっていく。それは、私個人が社会を広く知るきっかけにも繋がっていった」。ここにある「新人優先」とは、「ふだん記」の根幹となる理念の一つであり、新しく文友となった仲間を重んじる考え方である。小林はこのような雰囲気の中、自らのことを綴り、読んでもらうこと、他者のことを読み、知ること、こういった過程を経て他者とつながり社会を知る契機になったとするのである。

こうした「ふだん記」へ参加し、書くこと・読むこと・話すことに関して小林はこう述べる。

「自分をそこで解放できるんですよ。・・・耐えていたものが全部解放されて、さっぱりしてきて(笑)、気持ちがよくされてね、そういう生き方もあるんだって。私どうしてどうしてって思ったけど私の感じてたことは間違ってたんだと、そういう風に思うようになったら、すごく気が楽になって、幸せな感じつかまえましたね。・・・少しずつ人間を変えていく、前向きに変えていく力は先生にはすごくあったんですよ²⁷」。

ここからみえることの一つは「ふだん記」での実践は、自らの解放につながることにある。書くことなど「ふだん記」に参加したことで自らが囚われてきたことから脱却し、自らの気持ちが開放されたと言っている。いま一つは、「ふだん記」の創始者である橋本の存在の大きさへの言及である。書くことで自己を肯定することができた背景に、橋本への強い信頼が読み取れる。

小林は好きな橋本の言葉に「その人よかれ、その土地よかれ」を挙げる。橋本がさまざまな人や地方・地域を重んじている言葉であるが、これはまさにさまざまな人を尊重している考え方が込められており、こうした言葉に出会ったことも小林が自らを肯定する考えにつながった要因の一つなのではないかと思われる。さて、「ふだん記」から得られたことを小林は以下のように振り返る。

「人間不信が解かれたこと。何の得にもならぬことに信念を燃して他の為に全霊を傾けて働く姿、信に足る真の人に出会った感動で私自身勇気をもらい救われた²⁸」。

ここでは人への信頼をもつようになったことに加えて、橋本そのものへの深い共感が示

されている。橋本は「ふだん記」の実践を興すに至るまで、失敗を重ねながら地域文化や教育の実践に努めてきた人物である。このような他人のために尽くし自らを肯定する橋本の生き方に対する共鳴が書くことの動機付けになっていたこともみえる。「ふだん記」と出会いで小林は人への信頼をもたらし、自らの半生で感じたことを肯定することができたことが読み取れる。小林にとって「ふだん記」で書くことの意義は、このような他者・自己への信頼の中で自らを解放することであると思われる。

「ふだん記」雲の碑グループの機関誌である〈ふだんぎ 雲の碑〉への小林の投稿作品をみると、こうした他者への信頼、自らへの解放を読み取ることができる。例えば、『私の宝物』橋本先生のお便り(9号、2001年12月)、「行って良かった、旭川交流会」(13号、2003年12月)や『ふだん記』にまつわること(20号、2007年6月)、『ふだん記雲の碑』25号に寄せて(26号、2010年6月)などがある。「ふだん記」創始者の橋本義夫や「ふだん記」、文友に関する作品では、「ふだん記」との小林の出会いの重要性をみることができ、さらに「心に学んだ、先生の言葉『素直になさい』(21号、2007年12月)、「私の三十歳の転換期とその後」(30号、2012年6月)、「父のこと、そして母」(31号、2012年12月)などの作品からは、自らの人生における重要なできごと、転機や家族のこと小林の心情が率直に綴られている文章を綴っている。

第2項 ケース2・金幹子

続いて取り上げる「ふだん記」文友は、金幹子である。金は1920年代末にまれ、実家は薬屋を営む家庭に育った人物である。金の人生と「ふだん記」を重ねみる上で重要な存在の一人が、薬剤師であった父のことである。次のように振り返る。

「生まれて親元に居るときは恵まれて生活出来ました。経済的ということだけじゃなくて、父親は非常に考え方が綺麗で、店だったから番頭さんだとか・・・そういう人達に対する態度が綺麗だったです。あの、卑しめるとか、荒立たしい声をだすとか、そういうことは一切なくて、・・・父を慕ってこうあるべきだという形で成長しました²⁹」。

恵まれた家庭・家族の中、そこで人の清らかさなどをみて育ってきた。1950年代に秋田市内で結婚、その後1970年台に夫の仕事の都合で東京へ移住をする。一方で結婚生活は、いわゆる「よめ・しゅうとめ」の関係に悩み非常に辛かったと振り返っている。

「夫は・・・あまり判断は私と違わなかったんですけど、あのそこでしゅうと・しゅうとめという・・・人並な嫁の苦痛を味わったということもあります。・・・人と人はこうあら

ねばならぬというそういうものは全然その中には通用しなくて、とにかくその姑のことを聞くという。そういうのですね。で、40年近く生活したところから、それであるところは私もちょっとノイローゼ気味なっていて、・・・閉じ込められた生活だったんです³⁰。

「ふだん記」との出会いはつらさが積み重なった時期でのことであった。「ふだん記」を知ることになったのは1982年11月3日。家族が不在の時に、文化の日の朝日新聞を偶然、目にしたことが契機であった。当該記事はすでに手元にないとのことであったが、八王子での技能功労者の表彰が掲載され、和裁の神田貞子が紹介されており、「自分史」を書くというふだんぎの会に神田が入っており、「和裁60年」という「自分史」をまとめていた短い記事であったという³¹。その記事を読みすぐに会場へ向かい、神田の自宅へ伺ったとのことである。金は次のように述べる。

「子どもの時から書いてればいいという人で書きたい人だったんですよ。・・・大きな紙に詩を書いて張り出しておくんですよ。・・・でもそれはもう一蹴されてしまって。・・・書けなかったらね、私死んでしまうって言ったの。死ぬってというのは実際に死ぬんじゃなくて、心が死んでしまうということでもう私じゃない人がここでただいるだけの。・・・それが、心のなかに少し残っていたかわからないですけども、とにかくここでは誰の承諾も得ないで、もうすぐにばっとなって飛び出したんですよ³²。

元々書くことが好きであったという金は書くことができない環境に置かれてしまったことを「心が死んでしまう」と強い言葉で表現をしている。ここには書くことを望む強い意志を感じられる。こうした「ふだん記」との出会いにおける気持ちに関しては、金が執筆をした「ふだん記」の叙述でもあらわれている。「ふだん記」みちのくグループの機関誌<ふだんぎみちのく>66号(2013年12月)には次のようにある。

「二十代で親元を離れ他人の中で暮らし始めた時、私にはとても大きな悲哀と喘ぎの生活が待っておりました。その重い時代は長く、ふだんぎに入った五十三歳まで続いたことになります。“世の中とはこんなものか”と失意で悶々としていた頃、朝日新聞で『ふだんぎ』のことを知りました。なんという運の不思議さでしょう。あの日から私の内部がガラリと変わりました。新聞の記事を読んだ瞬間、強烈な引力を感じて早くも私は八王子に向かっていました³³。

金が「ふだん記」の世界に飛び込む背景には「ふだん記」が文章を執筆する運動であることを、「ふだん記」で35年以上に亘り書き続けることには「ふだん記」の特質があったことを、それぞれ伺い知ることができる。

金の「ふだん記」をみる視点は、綴られた文章から何うことができる。例えば、「漫然と仲間が欲しかっただけではなくて、私がなにより好きな作文の世界だったからなのです³⁴」と、「ふだん記」を「なにより好きな作文の世界」と、「ふだん記」との出会いは、自身が幼少期から好きであった文章を綴る世界との出会いであったことが綴られている。しかしながら、書き続けることに関しては、他ならぬ「ふだん記」であったことが重要であったことをまた、記録している。

「文章を書くサークルなら何処にでもありますが、橋本義夫氏の様に苦渋の道を辿りながら、身にも心にも壮絶な傷を負ってまで大衆の幸福を願って生きる人物が、今の世に存在しているなど知るはずもなく、目の前で拳を振って会場の皆に熱く語る姿に私まで熱くなっていました。橋本義夫を知るほどに、次第に私の心の置き場所が定まって行ったと言っても過言ではありません。『下手に書け』はまるで魔法の様に自分でも驚くほどの勢いで書き続け、書くほどに辛かった過去は軽く語れるまでになりました³⁵。ここからは金も文章を書くことのみならず、「ふだん記」の創始者、橋本義夫の存在によって、「ふだん記」への関わりを深めたことを読み取ることができる。ここで書かれている「下手に書け」（「下手に書きなさい」）は「ふだん記」の鍵概念の一つであり、書くことを恐れずに記録を残すことの大切さを説いた橋本の言葉である。

さらに、「ふだん記」で書き続ける中で得た気付き書き残している。「これまで深くも考えずにふだんぎの世界で過ごしてきましたが、この世界には何か人の心を解いてくれる良いものがあるようです。まずは文章を書こうとする時、自分がとても素直になっているのです³⁶」。

金の書いた「ふだん記」をみると「ふだん記」との出会いや日常のことを綴った文章の他にも、「日本善行賞に輝いた人」（＜ふだん記雲の碑＞10号、ふだん記雲の碑グループ、2002年6月）のような家族（母方の従兄）を綴った文章、「小林薫さんの『花咲く道へ』を読んで」（＜ふだん記雲の碑＞10号、2012年6月）や「星野さんの自分史『木工職人で生きる』を読んで」（＜所沢ふだんぎ＞42号、ふだん記所沢グループ、2015年10月）のような文友の本へのメッセージなどもみることができる。

金は「ふだん記」に関して次のようにいう。

『ふだん記』の橋本先生を中心に『ふだん記』はまるで私の故郷を感じるんです。

「私の中のその理想は父親であった。その父親と同じ流れを組むような先生であった」。

「橋本精神が私の第一義で『ふだん記』にいるんです・・・書くなら他でも書けるんです

けど、橋本精神ですね³⁷」。

橋本の中に自らの生まれ育ってきた世界のやさしさや理想像を見出し、橋本精神を最も重視しつつ、橋本が存在する「ふだん記」だからこそ書いていることを強調している。金が「ふだん記」で書くことで得られたことに関しては、以下のような言葉を示している。

「書いて読んで頂いて、周りに理解されて、とても大きな鎮静剤となり、競争のない友人関係を育むことが出来たと思っている」。

「どの人との間にも優劣をおかない、『その人良かれ』が私を大きく変えたと思っている。優しい心で他人と接するようになった³⁸」。

金はおだやかさを獲得したと、例えば競争のない、優劣をおかない、優しい心、などの言葉をもって語っている。金が「ふだん記」で書くことの意義は他者をよりおだやかに受容するようであった自らの気持ちの変容がもたらされたことであると思われる。

第3項 ケース3・橋本和子

続いてとりあげるのが、1940年代半ば生まれの橋本和子である。橋本和子は、1969年秋頃のガリ版刷の時期より参加している「ふだん記」の初期から活動に参加をしていた文友にあたる。なお、「ふだん記」の機関誌である〈ふだんぎ〉の第1号は1968年1月の発行のため、1969年からの参加は、草創期から参加をした文友の一人と推察できる。この時期の「ふだん記」の状況をみると、1969年10月に「ふだん記」11号が発行されるなど、ガリ版刷りで機関誌が発行されていた時期であり(ガリ版の最後は1970年12月発行の「ふだんぎ」17号まで)、「ふだん記」が知られる契機の一つである1970年2月14日の朝日新聞夕刊のコラムよりも前の時期にあたる³⁹。なお、当時橋本和子は20代半ばであるが、橋本義夫は「ふだん記」を担う若い主婦に関して次のような言葉を記している。「家庭主婦たちが『ふだん記』運動の主力をなしている。これは明日の文明社会の報告を示唆している。とくに三十代の家庭婦人の活発さは人類文明に明るさを投げるようだ⁴⁰」。橋本和子はまさに橋本のいう主力にあたる若い時期からの文友である。

橋本和子は東京区部の生まれ、父は公務員、母は小学校教員の家庭に育つ。生まれて2ヶ月で疎開のため父の郷里の鹿児島県に移り、そこで幼少期を過ごした。最初の転機は高校卒業頃である。姉が既に在京の大学に在学し、それをたよって上京をしたものの大学受験に失敗、前年に父を亡くしていたために浪人ができなかったため、窓口事務の仕事に就く。当時を橋本和子はこう振り返る。

「落ちてしまって行き場がなくて本当にしんどいものですね・・・18歳でね・・・行き場のない18歳の娘はどうしようもなかったんですけど、それで就職でもしようかと思って探したらば、驚いたんですが世の中には差別があるっていうことにね・・・17歳で父が死にましたから・・・それから東京に家がないということと、その自宅から通勤できないということで試験が受けられないんです。それで・・・大学が職員を募集してたんで、そこに行ったら受かっちゃったんですね。それで窓口事務をやっていました⁴¹」。

18歳の年で強烈な矛盾を感じていたと橋本和子は振り返る。橋本和子の人生における転機の一つとして刻まれていたことが伺える。その後、大学で事務の仕事をするうち学生と係る仕事をしていながら、図書館司書を志望することになる。この時期の図書館司書を志望する思いには、橋本和子の書く実践との関わりの萌芽をみることができる。

「私が好きなことは本を読むことと、なんとなく文章を書くことが好きだったものですから。そして司書になって、自立した生活をしようと思ったんですね⁴²」。

本を読むこと、書くことが好きだったという橋本和子はその後、特待生として大学の短期大学夜間部へ入学、大学近くの職場に転職し勤務の傍ら大学に通い、図書館司書の資格や中学校の国語科教諭の教員免許を取得して卒業する。しかしながら大学卒業と同時期に結婚、さらに数年後に第1子、その翌年には第2子を出産する。この時期が「ふだん記」と関わる転機の一つである。

「その頃結婚したら仕事はしないというのが普通でしたから。なんとなく割り切れないまま、ずっと子育てをしてきていたんですけれども・・・一人をおぶって一人を抱いて、泣き喚くのはどうしようもなく、そして世間からみれば恵まれた暮らしなわけですよ。家にいて子育てをしながらという状況だったんですが、私はその時社会的に孤独を感じたんです」。

結婚・子育てだけではない人生の生き方への意識に触れ、当時の自らの状況を「社会的孤独」と評しながら振り返っている。「ふだん記」への出会いはこの時期である。1969年秋頃の朝日新聞三多摩版の記事であったというが、現在はその記事は手元に残っていないという。

「朝日新聞の三多摩版に「ふだん記」の事が出てたんですね。自由に普通の奥さんたちが文章を書いて、それを本にしているという。それがすごく衝撃的だったんですね・・・そしてすぐに橋本先生に手紙を書いて『ふだん記』に入れていただいたということが最初の契機です⁴³」。

橋本和子は記事のことをこう振り返る。その直後に橋本義夫宛に手紙を書き、「ふだん記」に参加したという。なお、記事を書いたのは坂本龍彦記者。坂本記者は他にも1984年10月11日朝日新聞夕刊に「ふだん記」の記事を掲載し『『だれもが本を書く時代』がきている⁴⁴』と評している。生前の橋本義夫と縁深い考古学者である梶国男や生前の橋本義夫とも関わりがあり、雲の碑グループの機関誌〈ふだん記 雲の碑〉にも追悼記事が掲載されている⁴⁵。

人生における度々の転機や「ふだん記」との出会いは、橋本和子自身も〈ふだん記 雲の碑〉への掲載作品で「自分史」を語るエッセイ、「連翹の花」に詳しい。同作では春先に咲く連翹の花から想起される感情を端緒に、17歳時の父の逝去や社会人として働きながら通った大学での学びののちの結婚を綴ったあと、こう綴る。「次々に子どもも生まれ、幸せいっぱいだった頃、幸せの裏の子育て中の閉塞感を新聞で見た『ふだんぎ』が救ってくれた。昭和四十五年頃のこと、生まれたての『ふだんぎ』も草創の気がみなぎっていた⁴⁶」。さまざまな人生の転機を経ながら、巡り合った「ふだん記」を閉塞感を救った存在として述べ、文友たちによる「ふだん記」創始期の熱に言及している。また橋本和子は、家族と共に「ふだん記」に関わりを持っている。本人だけでなく家族(義母)も参加し、「ふだん記」に執筆を行っていた。さらに、社会学者である橋本和子の配偶者も「ふだん記」に関心を持ち応援していたという。そのため橋本和子の「ふだん記」の実践は家族の応援の中で行われていたことも特徴として見出される。

橋本和子は10年ほど「ふだん記」に書いたあと、1980年代初頭に配偶者の仕事の関係でアメリカへ渡る。これを契機にしばらく「ふだん記」からは離れていたが、現在は再び「ふだん記」で執筆を続けている。

「ふだん記」に参加してから変わったことに関して、橋本和子は次のように語る。「書くことで考えますから、そして、なんと申しますかたくさんの家族を得たみたい。『独立するが孤立しない』という言葉と。「文通することでみんながきょうだいのような、家族がどこにもいるという感じがね、日本中にいるっていう感じが⁴⁷」。

「ふだん記」という実践は書き、読み合い、手紙を出し合う。こうした活動が「ふだん記」のもたらした自身の変容であるとする。他にも、「ふだん記」とは別に短歌の結社活動にも参加しており、書くことや仲間づくりということに関して「私は『ふだん記』と『音』、二本柱だと思っています⁴⁸」と述べている。橋本和子は雲の碑グループの機関誌〈ふだん記 雲の碑〉などで米国滞在中の記録を記している。橋本和子は自らが考える「ふだん記」の

社会的意義に関して、「私達が一声でも。残る、残らないじゃなくて、記録になる。時代の記録に、証言になる⁴⁹⁾」と「庶民」が書き記していくことが記録として重なり、それぞれの歴史の生きた証言になると語る。こうした語りにもみられるように、橋本和子の執筆した「ふだん記」には、時代の記録を意識した作品が少なからず見受けられる。

例えば、「逆白波のひと 土門 拳」(<ふだん記雲の碑>14号、2004年6月)は、写真家・土門拳が義父の入院時(1985年7月)の二人部屋の隣のベッドだった経験から、佐高信『逆白波の人土門拳の生涯』を読み、土門拳の生涯に対して「まったくの偶然から、日本の写真史に偉大な業績を残した人物の最晩年の姿を垣間見る機会があり、それから二十年近く経った今、またその業績をふり返って深く胸を打たれている⁵⁰⁾」と綴る。「篤姫をめぐる人々」(<ふだん記雲の碑>23号、2008年12月)では、自身の生育の地鹿兒島と姉の関わりから紹介され読んだ本から、篤姫を巡る人々を書いている⁵¹⁾。他にも「よくろべ列伝」(<ふだん記雲の碑>23号、2010年6月)という「酔いを食らう者」ともいべき郷土の酒飲み者の伝記を記す作品もある。

橋本和子は「ふだん記」から得られたこととして「庶民が生活記録を残すことの歴史的証言⁵²⁾」とする。「ふだん記」の文友たちが庶民の歴史を担っているのだとする自負をもちながら、自らとの関わりなどを契機にしながらかさまざまな歴史を書き記していることから庶民の書き残す歴史の証言という橋本和子の視点を読み取ることができる。

かつて「社会的孤立」を感じていたことを「ふだん記」との関わりから払拭し、文友との繋がりの中で、庶民の目線からの歴史を書き記し続ける「ふだん記」の意義をみることができる。

第4項 ケース4・張山てる子

張山てる子は1940年代半ばの青森県北津軽郡生まれで生育も同地であり、その後、三多摩に移り自営業を営んでいる。東京在住であるが、所属はふだん記津軽グループであるように、張山にとり津軽が極めて重要なものであることを伺うことができる。なお、「ふだん記」への参加は橋本義夫没後の1990年頃でありおおよそ25年(インタビュー時)の関わりとなる。全国に広がる「ふだん記」各地グループに広く投稿をしており、これらをまとめた自作本を3冊作っている。張山は青森県で中学、定時制高校卒業までを過ごす。高校卒業後2年ほど札幌で過ごしている。高校在学時地元の大学生協に勤めているが、その時の気持ちをこう語っている。

「定時制高校卒業して一回津軽から離れて私は札幌に就職したの。……私は弘大の生協に勤めてたのね。定時制の時。自分と同じ歳の子が皆大学生で入ってきたら悲しくて悲しくて。なんか1回は青森県から出てみようっていう⁵³」。

高校を卒業後における、学びに対する潜在的な意欲をこうした語りから伺うことができる。なお札幌では2年間、さらに弘前に戻り3年を過ごしてから、1970年初頭に上京、就職をして簿記学校に通う。その後結婚し、三多摩に居を構え自営業となる歩みを歩んでいる。

「ふだん記」との出会いは三多摩に出てしばらくの時を経た1990年8月である。弘前在住の友人から、東奥日報(1990年8月6日)の「ふだん記」の記事を送られたことが契機という。張山は自らの書くことに関する経験を述べつつ、以下のように振り返っている。

「私筆まめだったからね。暇さえあればね、……手紙をほんと書いてたのよ。……(弘前の友人が)「私は返事書けないけれど」って何気なく見てた新聞(を送ってくれて)……これが「ふだん記」を知るきっかけ⁵⁴」。

この東奥日報の記事では「ふだん記」津軽グループを紹介した記事で、『『下手に書こう』や『書いたら手元に置かず、どんどん送ってしまおう』拙速主義を信条とするあたり、なんともユニーク⁵⁵』と「ふだん記」を評している。同記事にはふだん記津軽グループの連絡先も記載されており、すぐに津軽グループの窓口に電話で連絡をとったという。既に当時三多摩に居住していたが、三多摩地域の「ふだん記」のグループに入らず、あえて津軽グループに加わった経緯がこう語られている。

「だけど私はね、青森県はさ、目立たない性格の人が多いのに、こういう人たちがどういうことを書くんだろうっていうのがまず興味わいたのね。もう、町の名前は全部青森県の地図に、青森県の位置がわかるからね、どこの町の人誰さんが何を書くんだろうっていうのが、津軽ふだん記に入りたかった理由⁵⁶」。

自らの郷里である津軽の人たちが何を書くのかが興味の出発点とし、あえて津軽グループに加わりたかったと語っている。今は故郷の青森を離れた地で暮らす張山であるが、書く実践に参加することで自らの故郷の人々のことを知る機会となっていることを伺い知ることができる。

しかしながら、現在は各地の「ふだん記」へ精力的に投稿を重ねる張山であるが、自らのことを綴ることに関する語りを見ると、すぐに書き始められたのではなかったことが伺える。

「はじめまして」って挨拶から初めて書いたんだけど。原稿用紙の3枚の長かったこと長かったこと⁵⁷」。

故郷との繋がりへの意識から参加を決意した一方、書き始めることは容易ではなかったことを伺うことができる。なお、張山が「ふだん記」を知ったのは1990年8月、初投稿をしたのは1990年11月で数ヶ月を要しているようだ。一方で、その後継続して書き続けられている理由は初投稿から推察できる。初投稿の感激を張山が〈ふだん記 雲の碑〉に投稿をしている。その叙述をみると、「平成3年(1991)年4月津軽25号に、私の初投稿文が掲載されてまもなく届いた『こんにちは』のおハガキは、北海道から九州迄、次々激励のお便りで感動の連日でした⁵⁸」と振り返られている。書き始めた新人が多くの文友からの手紙の励ましで支えられることが、書き続けられる原動力となっていることを推察できる。なお、張山が「ふだん記」に書くスタンスは次の言葉に表れている。

「素人だから、自分が書き残したいことを書くっていうのがふだん記だから、そこあたりは本当に堅苦しくなく⁵⁹」。

この結果「ふだん記」の各地グループや新聞投稿などを広げながら現在もさまざまなグループに投稿を続けているという。張山の執筆した「ふだん記」をみると、故郷のことや「自分史」、日常生活のこと、「ふだん記」のこと、さらに他の文友のことなど様々な文章が綴られている。例えば、「古里紹介」(〈ふだん記雲の碑〉4号、1999年6月)では、郷里の青森県北津軽郡小泊村に関して毎年の帰省時の道すがらの思い出を交えながら、「無人の家に灯がつくと、『誰が来てたらが』と、近所の人たちが声を掛けてくれ、『ワイハ久し振りだの』と会話も弾む⁶⁰」と故郷の様子を綴っている。「伝統を守る祭の主役」(〈ふだん記雲の碑〉8号、2001年6月)では、故郷の祭りである小泊村権現祭の様子を、青年団が主役だった自身の小学生時代(昭和20年代後半)からその後の小学生の太刀振りのことなどに触れ、「毎夏帰省したので、今もあの光景は目に焼き付いて故郷に想いを寄せている⁶¹」と記録している。さらに、張山は「ふだん記」あいちグループの機関誌〈あいちふだんぎ〉には、「予期せぬ出来事」というエッセイのシリーズを投稿している。〈あいちふだんぎ〉初投稿時では、津軽グループ参加の経緯やそこから始まった関東在住の津軽の文友とのミニ集会など、「ふだん記」をはじめから出会った文友との日々などを記録している⁶²。こうした故郷の人々との繋がりや、新聞・東奥日報への投稿からつながった青森の出会いを記しながら、「一枚のハガキは、人と人とを結びつける大きな波紋となって広がり、『予期せぬ出来事』は喜びの連続です⁶³」と綴る文章もある。

張山の書く津軽に関わる文章から伺えることは、故郷と離れ暮らしている執筆者と故郷のつながりである。書くことで友人関係を広げていった張山は、橋本義夫の言葉のうち好きなものに「ハガキ一人を動かす、ハガキ百本国を動かす」を挙げる。ハガキは小さくともハガキを出し、積み重なることで大きな影響を残すことを示した言葉であるが、本項でみる張山の文章は張山が自身の経験からハガキを書くことの重みを感じてきたことを示していると思われる。張山は、こうも語っている。

「気楽にね。学歴もなくとも書こうって言って。書けば読めるって。そこが私が『ふだん記』に入った大きな収穫でした。人のつながり⁶⁴」。

張山は、「ふだん記」で書き始めてから全国の文友から励ましを受け、文友との繋がりを得た実践の歩みを辿ってきた。中でも東京在住でありつつもあえて、津軽グループに所属し、さまざまな形で故郷のことを書くことなど、人生の歩みの中で故郷を離れて暮らしながらも故郷との繋がりを随所に見られる点は特徴的である。書くことを通じて故郷との繋がりをもち、また故郷を語ることでいたことを伺うことができる。

小結

本章では、1960年代後半から始まり現在も活動がつづく書く実践「ふだん記」を対象に、「ふだん記」という書く実践が、人生の中で書き手にもたらした意義に関して明らかにすることを目的とした。中でも4人の書き手に着目しつつ、その人生の語りや執筆した文章を対象にした。第1節では関連する先行研究を概観しつつ、本章の対象である「ふだん記」を人生との関わりから分析するという視角に関して論じた。第2節では「ふだん記」インタビュー調査の概要と、本調査の概要を論じた。これらを踏まえ第3節では4人の文友を対象にしたインタビュー調査と各自が書いた「ふだん記」によるケーススタディを行った。

本章においては、病気や生活環境の変化などそれぞれ何らかの人生の転機に直面しながら、「ふだん記」という書く実践に出会い、書くことでさまざまな変化がもたらされていることをみることができた。例えば、自己肯定感の獲得や前向きな心の変容、社会的孤立からの脱却、故郷とのつながりなどである。今回調査したケースからは、それぞれの書き手が人生の歩みの中で何らかの形で書くことや学ぶことへの渴望を持っており、そうした経験が書く実践である「ふだん記」への参加につながっていったことも伺い知ることができた。さらに、書く実践への参加の過程では書くことだけではなく、他者の励ましや他者の文章を読み感想を交わし合うことなど、書き手同士で支え合う創始者の橋本義夫の「ふだ

ん記」の理念に対する共感が語られていたこともみいだせた。これらを鑑みると、書き手にとって「ふだん記」で書くことは文章を執筆することとどまらず、より充実した生を送るための支えとなっている意義があることを伺うことができた。

また、書き手それぞれが選んだ主題からは、書き手それぞれが持つ書くことへの思いを読み取ることができる。例えば、家族史も含めた「自分史」を綴ること、他者への思いを書くこと、郷土史を綴ること、故郷のことなどさまざまな文章が発表されているが、いずれの書き手も出会った書く実践の場において得た、書くことへの渴望もみいだすことができるものである。今回取り上げたケースから浮かび上がった、各人が書く実践と出会い書くことであらわれた変容は、今後の書く実践の意義の考察に示唆を与えうるものと思われる。

しかしながら、少なからず課題が残されている。特に、人生のそれぞれの時期で異なる書く内容の変化や文章の質の向上など、書くことで学び変わっていく書き手の変化に関する分析は必要であると思われる。さらに、今回は4ケースの調査にとどまっているため、より多くの事例研究が必要であると思われる。特に全国に広がる「ふだん記」の文友を対象に、書き手相互の書き合い・学び合いなど、多角的な検討を行うことも課題である。

第4部 第5章 注

- 1 日本社会教育学会編『成人の学習』東洋館出版社、2004年。
- 2 木全力夫、齋藤真哉、的野信一「社会教育職員の力量形成と学習記録」、『成人の学習』同前、pp.147-159。
- 3 倉持伸江「ふり返りに注目した学習支援者の力量形成」、『成人の学習』同前、pp.160-172。
- 4 水野篤夫「実践をふりかえる方法としての事例研究と職員の力量形成」、『成人の学習』同前、pp.173-185。
- 5 倉持伸江、中田スウラ、柳沢昌一(司会 井口啓太郎、村田晶子) プロジェクト研究「学び合うコミュニティを支えるコーディネーターの力量形成とその組織」、日本社会教育学会六月集会、2015年6月6日(於立教大学)。
- 6 中田スウラ「社会教育実践研究・職員研究の展開とコーディネーターの力量形成」、プロジェクト研究「学び合うコミュニティを支えるコーディネーターの力量形成とその組織」報告資料、日本社会教育学会六月集会、2015年6月6日(於立教大学)、p.4。
- 7 宮崎隆志「成人学習論における記録分析の課題と方法--生活記録を手がかりに」、＜日本社会教育学会紀要＞43、2007年、pp. 61-70。
- 8 村田晶子「女たちの自己教育思想と記録-国立市公民館女性問題学習・公民館保育室活動を通して」、＜早稲田大学大学院文学研究科紀要＞第1分冊(57)、早稲田大学大学院文学研

究科、2011年、pp.19-31。

9 矢口悦子「イギリス生涯学習セクターの指導者養成における大学の役割：教育方法としての『リフレクション』をめぐって」、<東洋大学文学部紀要 教育学科編>(39)、東洋大学、2013年、pp.61-70。

10 青柳宏「「経験の見つめ直し」としての詩：詩を書く実践についての省察(その二)」、<宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要>(30)、宇都宮大学、2007年、pp.127-137。

11 杉山直子「教育方法としての『書くこと』についての考察：生活指導における『書くこと』」、<梅光学院大学論集>(42)、梅光学院大学、2009年、pp.18-29。

12 小沢一仁「大学の授業において自己理解を目指す文章を書くこと」、<東京工芸大学工学部紀要>(32)2、東京工芸大学、2009年、pp.9-19。他にも書く実践を教育方法の側面からみた歴史研究に関しては、森(2006)によるデューイ・スクールの研究(森久佳「デューイ・スクール(Dewey School)における『読み方(Reading)』・『書き方(Writing)』のカリキュラムに関する一考察：1898～99年における子どもの成長に応じたカリキュラム構成の形態に着目して」<教育方法学研究>31、日本教育方法学会、2006年、pp.85-96。)がある。

13 鳥羽耕史『1950年代—「記録」の時代』河出書房新社、2010年。

14 同前、p.46。

15 北河賢三『戦後史のなかの生活記録運動 東北農村の青年・女性たち』岩波書店、2014年。

16 同前、p.259。

17 猿山隆子「鶴見和子の生活記録運動におけるコミュニケーションと「記録」：「生活をつづる会」の学習組織の形成をめぐって」、<社会教育学研究>50(2)、2014年、pp.11-20。

18 片岡了・辻智子「共同学習・生活記録」、日本社会教育学会50周年記念講座刊行委員会編『成人の学習と生涯学習の組織化』東洋館出版社、2004年、pp.108-119。

19 小林薫『花咲く道へ』ふだん記創書34、ふだん記雲の碑グループ、2011年。

20 小林薫「約束」、<ふだん記 雲の碑>36号、ふだん記雲の碑グループ、2015年6月、p.14。

21 小林薫インタビュー(2015年1月14日、小林薫宅、聞き手：川原健太郎)。

22 同前。

23 小林薫『花咲く道へ』ふだん記創書34、ふだん記雲の碑グループ、2011年、p.163。

24 橋本義夫『だれもが書ける文章—「自分史」のすすめ』講談社現代新書、1978年。

25 小林薫インタビュー(2015年1月14日)。

26 同前。

27 同前。

28 小林薫へのインタビューに際して行った『「ふだん記」インタビューに関するアンケート』。

29 金幹子インタビュー(2015年1月14日、小林薫氏、聞き手：川原健太郎)。

30 同前。

31 金幹子へのインタビュー後の書面での照会による(2015年7月)。

32 金幹子インタビュー(2015年1月14日)。

33 金幹子「ふだんぎに救われて」、<みちのくふだんぎ>66号、2013年12月、ふだん記みちのくグループ、p.20。

34 金幹子「フダンギをありがとう」(金氏提供資料、平成10年2月25日、69歳時執筆のもの)。

35 前掲「ふだんぎに救われて」、p.21。

36 金幹子「ふだんぎの良さを再発見して」、<旭川のふだん記>60号、ふだん記旭川グループ、2014年7月、p.85。

37 金幹子インタビュー(2015年1月14日)。

38 金幹子インタビューに際して行った『「ふだん記」インタビューに関するアンケート』。

-
- 39 四宮さつき『十年—ふだん記と共に—』、ふだん記全国グループ、1976年、pp.20-25。
- 40 橋本義夫『だれもが書ける文章—「自分史」のすすめ』、講談社現代新書、1978年、p.15。
- 41 橋本和子インタビュー(2015年1月14日、小林薫宅、聞き手：川原健太郎)。
- 42 同前。
- 43 同前。
- 44 朝日新聞(夕刊)、1984年10月11日。
- 45 梶国男「弔辞」、<ふだん記 雲の碑>22号、2008年6月、pp.192-193。「ふだん記運動を全国に紹介した坂本龍彦さんを悼む(坂本記者が書いた朝日新聞のふだん記記事)」pp.194-195。
- 46 橋本和子「連翹の花」、<ふだん記 雲の碑>12号、ふだん記雲の碑グループ、2003年6月、p.38。
- 47 橋本和子インタビュー(2015年1月14日、小林薫宅、聞き手：川原健太郎)。
- 48 同前。
- 49 同前。
- 50 橋本和子「^{きかしらなみ}逆白波のひと 土門 拳」、<ふだん記雲の碑>14号、ふだん記雲の碑グループ、2004年6月、p.139。
- 51 橋本和子『『篤姫をめぐる人々』、<ふだん記雲の碑>23号、ふだん記雲の碑グループ、2008年12月、pp.95-97。
- 52 橋本和子へのインタビューに際して行った『『ふだん記』インタビューに関するアンケート』。
- 53 張山てる子インタビュー(2015年1月14日、小林薫宅、聞き手：川原健太郎)。
- 54 同前。
- 55 「東奥日報(夕刊)」、1990年8月6日記事。
- 56 張山てる子インタビュー(2015年1月14日、小林薫氏宅、聞き手：川原健太郎)。
- 57 同前。
- 58 張山てる子「橋本先生のお話」、<ふだん記 雲の碑>第2号、1998年6月、ふだん記雲の碑グループ、p.123。
- 59 張山てる子インタビュー(2015年1月14日)。
- 60 張山てる子「古里紹介」、<ふだん記雲の碑>4号、ふだん記雲の碑グループ、1999年6月、p.48。
- 61 張山てる子「伝統を守る祭の主役」、<ふだん記雲の碑>8号、ふだん記雲の碑グループ、2001年6月、p.27。
- 62 張山てる子「予期せぬ出来事」、<あいちふだんぎ>28号、ふだん記あいちグループ、1993年6月、pp.219-220。
- 63 張山てる子「予期せぬ出来事(その三)」、<あいちふだんぎ>30号、ふだん記あいちグループ、1994年6月、p.218。
- 64 張山てる子インタビュー(2015年1月14日)。

第6章 「ふだん記」と「自分史」の一考察—橋本義夫による実践の再評価—

本章の目的は「ふだん記」を社会教育実践として再評価することである。従来、生涯学習・社会教育研究の文脈において語られてきた文章を書く実践としては、生活綴方や生活記録、さらには「自分史」があり、学びに関わる重要な実践として位置づけられてきた¹。「ふだん記」はこれらの実践に比すると生涯学習・社会教育研究の文脈において取り上げられることは必ずしも多くはなかった。しかしながら、「ふだん記」を社会教育実践として再評価することは、今後の生涯学習・社会教育研究における文章執筆運動の幅を広げる意義があると思われる。

そこで本章においては、社会教育実践として研究されてきた「自分史」との比較を行いながら、「ふだん記」を社会教育実践として評価を行うことを試みる。本章では、「ふだん記」及び「自分史」をめぐるさまざまな言説、例えば「ふだん記」や「自分史」の定義や執筆の要点、「ふだん記」の実践の中で書かれた文章などを対象とし、比較する。「ふだん記」を「自分史」と比較することで、既に社会教育研究の文脈で多く取り上げられている「自分史」と同じく、「ふだん記」が社会教育実践の研究材料であることを示すことを課題として設定する。

以上をふまえ、第1節では先行研究と本章の位置づけ、第2節では「自分史」の定義・起源と「ふだん記」、第3節では「自分史」執筆の要点と「ふだん記」、第4節では「ふだん記」の執筆内容の検討の構成により論じる。

第1節 先行研究と本章の位置づけ

「自分史」は自分の歴史である。歴史という語には社会の移り変わり(パブリックな歴史)や個人の来歴(プライベートな歴史)の両者の側面が内包されている。つまり歴史という語は、来歴や個人史といった語と比較するとパブリックな側面も含んでいる点において一致しない。しかしながら本論文の研究対象である「自分史」においては、人それぞれが歩んできた来歴が中心に書かれるものであり、本論文で歴史という場合には、基本的には来歴や個人史と同一とらえたい。

「ふだん記」が、全国に広く知られるようになった契機の一つには、1974年の色川大吉の論考がある²。色川は橋本義夫を「自分史」運動の先覚者とし、研究価値を有するとしている³。その他、橋本義夫の思想遍歴⁴、橋本の功績を文章史から論じた研究⁵、橋本の地方

史研究活動に焦点を当てた研究⁶などがある。さらに、社会学の分野における小林多寿子による初期「ふだん記」などに関する研究がある⁷。小林は「ふだん記」を書く共同体と捉え論じている⁸。

しかしながら、生活綴方や生活記録運動、「自分史」と比較すると、「ふだん記」そのものを社会教育の研究対象として取り扱われることは少なかった。例えば、橋本が執筆をした「地方文化資料」と「ふだん記」の参加者が執筆した「自著本」の共通項から、いずれも庶民の人生における知の伝承を目指したものであったことを見出した研究⁹や、1970年代後半のある「ふだん記」グループが社会教育講座に関わるようになった実践を取り上げた事例研究¹⁰など若干はあるものの、充実しているとはいえない。例えば、全国各地のグループによる「ふだん記」の機関誌や「ふだん記」運動において発行された『ふだん記本』、『ふだん記新書』のシリーズなど、多数の「ふだん記」に関する著作物が残されていることを踏まえると、「ふだん記」が社会教育の研究対象として評価を受ける機会は必ずしも多くはなかった。

第2節 「自分史」の定義・起源と「ふだん記」

第1項 「自分史」の定義

本項は「自分史」や「ふだん記」がどのように定義づけられているか、語の定義の認識のされ方をみつつ、「自分史」や「ふだん記」を巡る状況を把握する。はじめに手がかりとして『広辞苑』を参照した。「自分史」の項目は収載され、「ふだん記」の語は収載されていない。そこで「自分史」の定義をみると以下のように記されている。

「じぶん - し【自分史】平凡に暮らしてきた人が、自身のそれまでの生涯を書き綴ったもの。自伝¹¹」。

文字通り自分の歴史であると定義づけられているとともに、平凡に暮らしてきた人の歴史であることが強調されている。すなわち「自分史」といった場合、特別でない人たちが自らの来歴を書き記したものであると定義づけられていると読み取れる。

「自分史」の定義に関連して、作家の三浦朱門は雑誌〈歴史読本〉の「自分史」特集において「自分史とは何か」を読者向けに以下の様な考えを示している。

「誰にとっても自分の生涯は掛けがえのないものである。(中略)私は名もなく、しかし必死に生きてきた凡人の自分史を読みたいのである¹²」。

三浦は人間誰しもにとって自らの歴史には重みがあることを述べるとともに、凡人の「自

分史」を読みたいという。ここでは凡人の歴史の価値が強調されているのである。

第2項 「自分史」の起源

それでは「自分史」の語の起源をみるために、「自分史」を命名したといわれる色川大吉の「自分史」をめぐる言説を概観する。「自分史」の言葉が登場した由来は、1975年における色川大吉の『ある昭和史 自分史の試み¹³』頃からであろう。その序において色川は、個人史による叙述のスタイルに関する考え方を以下のように示している。

「私はこの本を庶民生活の変遷から書きおこし、十五年戦争を生きた一庶民=私の“個人史”を足場にして全体の状況を浮かび上がらせようと試みた。(中略)もちろん同時代の歴史の全体をそのような方法で蔽えるとは私も思っていない。だが、これまでの歴史書のように、その時代の構造さえ描けば科学的であり、客観的になるという方法はとらなかつた。歴史の枠組がどんなに明快に描けたとしても、その中に生きた人間の中身がおろそかにされているようでは、専門家のひとりよがりとなさされよう¹⁴。

ここでの個人史とは色川自身の来歴のことであり、人それぞれの来歴ととらえた本論文でいうところの歴史とほぼ同一の意味に読み取れる。色川は、個人史によって同時代史を描くことの限界は把握しつつも、生きてきた人間の中身を書くことをおろそかにすべきでないと考えていたことが伺える。

さらに、庶民それぞれの歴史の価値への言及も行っている。色川は「人は誰しも歴史をもっている」と前書きしつつ、「その人なりの歴史、個人史は、当人にとってはかけがえのない“生きた証^{あか}し”であり、無限の思い出を秘めた喜怒哀歓の足跡なのである。——この足跡を軽んずる資格をもつ人間など、誰ひとり存在しない」し、誰もが持っている歴史はかけがえのないものという理念を示している¹⁵。このように誰もが持つそれぞれの歴史の大切さに着目する考え方が、それぞれの人間の歴史、すなわち「自分史」が持つ性質なのであろう。こうした性質は「ふだん記」を始めた橋本の「万人可能の哲学^{みち}¹⁶」や「万人の文章^{みんな}¹⁷」などの言葉にも万人を重んじようとする側面がみえ、ここに共通点を見ることが出来る。

なお『ある昭和史 自分史の試み』においては、色川大吉が「自分史」を試みようと思った理由も示されている。それによれば、「ふだん記」の取り組みをみると民衆一人ひとりが文字を通して「自分史」を表現することを始めていたこと、人は歴史を文字化することで自分を相対化し、人であることの深遠な意味に到達することや、自身の経験を理論化しつつ共有財産にもできるためという¹⁸。色川の「自分史」は「民衆一人一人が文字を通して

「自分史」を表現する」という「ふだん記」から、「自分史」を書くことを試みることから示唆を得たとしている。

加えて、「自分史」の命名に関する言説もあわせて確認したい。歴史学者の井上幸次は、「自分史」は色川大吉の造語であるとする考え方を述べている¹⁹。色川が「ふだん記」を下敷きにしつつ生み出し、広く一般に提起した「自分史」の語によって、自らの歴史を書く実践がより広まっていったと推察できる。色川は「ふだん記」を紹介したことが、「自分史」を流行させる発端になったとの考えを示しつつ、橋本を以下のように評している。

「橋本義夫は最初は『自分史』という用語を使っていない。『ふだん記』という用語を創始し、愛用していた。その『ふだん記』には当然、「自分史」的なものも含まれていた。(中略)『自分史』という用語は私が初めて使用したとしても、実質的な『自分史の運動』は橋本がはじめたものと思っている。²⁰」。

橋本義夫が文章を書く実践を始めた当初、自らはじめた文章運動に対して「自分史」の名称を用いず、「ふだん記」の言葉によって自身の文章運動を進めていたとする、上記の色川の指摘からは「自分史」の語を作ったといわれる人物が「ふだん記」は「自分史」そのものと考えていたことを読み取れる。

本項では「自分史」の定義や成り立ちに関する言説から「ふだん記」と「自分史」の関係を探ってきたが、いずれにおいても「ふだん記」と「自分史」の間に差異は認められなかった。

第3節 「自分史」執筆の要点と「ふだん記」

第1項 「自分史」執筆の要点

次に、横山宏の関わる東京の主婦による実践²¹の中でまとめられた「自分史」執筆における要点を「ふだん記」と対照させる。横山は「自分史」を社会教育実践経験の中から理論付け、社会教育実践に根付かせてきた一人である。中でも先行研究で前述した『成人の学習としての自分史』(国土社、1987年)は社会教育実践から導かれた「自分史」学習を論じた書であり、社会教育の文脈における「自分史」を考察する上で示唆を得られると思われる。

横山は「自分史」の持つ意義を「つねに時代や社会とのかかわりの中で自らを客観化し、その姿をしっかりと捉えておくことは不可欠のことであって、その素材としての自己の歩み=自分史=がもつ意義はきわめて大きい²²」と述べ、人間が自らの歴史を書く実践の意義を

社会教育の立場から示している。横山によれば自らを客観視して見失わないことが重要であり、このためにも「自分史」の意義が大きいという。これは自らの歴史を書く文章執筆の実践が成人の学びに寄与する意義を有していることを示す指摘である。

では、「自分史」とはどのような内容であろうか。前述の「自分史」学習の社会教育実践の中で示された「自分史」を綴る上でのポイントを以下に列記する²³。

- ①社会とのかかわりのうち、精神的成長をもたらしたと思われることをとりあげる。
- ②事実を先に書き、自分の考えを必ずつけ加えて書く。(事実と分析)
- ③事件を中心にして世の中の動きを自分なりのみつめ方、自分のことばで伝えていく。
- ④身近に感じた歴史(私に聞こえてきた足音)は必ず書く。
- ⑤建て前と本音の両面を書く。
- ⑥戦争体験を書く場合、忘れようとする姿勢ではなく、自分の骨肉と化していくという立場で、思い出をつきさしていくなかから自己の変革としてとらえる。

以上の綴り方のポイントを見ると、「自分史」学習の特質がはっきりとわかる。「自分史」学習は単純に事実を書くことにとどまるものではなく、上記①から⑥にみられるような「自分史」の筆者が考えた事柄も書かれるべきであるとされている。

①においては、「自分史」は執筆者の成長との関わりで論じられるべきであるとする。②では、事実のみを論じるのではなく自らの考え方を書くこと。③では、自分の言葉を用いること。④に関しては自分が身近に感じた歴史を書くこと。⑤では外にあらわれた言葉だけでなくその本音を書くこと。⑥は戦争体験を書く場合には、自己の変革としてとらえること。

以上の6点から見出される「自分史」執筆における心構えに共通するのは、書き手の成長が促されるべきことであることと、書き手が感じたことを自分の言葉で書くべきであることである。横山はこうした「自分史」を書き、話しあうことで自らの歴史との直面や戦争体験を通じて、加害者と被害者の両側面を同時に把握して正しく戦争をとらえることができ、これこそが成人にとってのおとなの社会科、政治学習であったとする²⁴。歴史とともにこれらの要点を含めることで「自分史」が重要な社会教育実践となっていたのである。

第2項 「自分史」の革新と「ふだん記」

色川大吉は「自分史」において書かれる内容に関して以下の様な見方を述べている。

「自分史の革新は歴史と切りむすぶその主体性にある、と。自分と歴史との接点を書く

ことにある。だから『自分×史』なのである。自分の人生の方向を決定づけたような原体験(最も思い経験、その後の経験のもとになったような経験)を記述することによって、その時代の活きた情況-世相、風俗、社会意識やそれに捉えられていた自分の姿を描き出す²⁵」。

この中で目を引くのは、「自分史」は書き手が自らの方向を決定づけた体験を書くことで社会を描き出し、そこに「自分史」の革新性があるとしているところにある。すなわち自らの生き方を変えた事柄を書き、書き手自らの認識を書くべきとしている点である。

こういった社会との関係から自らの歴史を描くことに関しては、橋本義夫も言及している。橋本は「ふだん記」の書き方を著した著書²⁶の中で「『自分史』を書きなさい」の章においては、自分史年表を作りながら自らを位置づけるように説いている²⁷。自分史年表とは世界暦、和暦、多摩・八王子地方(の歴史)、日本及び世界(の歴史)を表形式で書き、自らの身の歴史を書く年表である²⁸。すなわち自らを社会の動きと対照させることで、「ふだん記」を書くよう橋本がすすめていたと読み取ることができる。橋本義夫は書き手の歴史を書くにあたって客観的な位置も把握すべきとしている。

なお、色川は「ふだん記」を「自分史」そのものと捉えており、両者を截然と区別していない。例えば『自分史 その理念と試み』によれば、初期の「ふだん記」から具体的にいくつかの書を例示しながら、これらの「ふだん記」を「自分史の力作」と位置づけており、「ふだん記」は「自分史」であるとしている²⁹。

色川は「ふだん記」で出された多くの個人文集をみながら「多彩な形式と内容に目を見張るばかりだ。予想していた通り、高年層のものには、職種は違っても『おしん』に類似した人生記録が多数見つかった³⁰」と述べる。「ふだん記」の文集を総じて、「自分史(本)」をとらえ、内容は多様であるとしながらも、いずれの本も人生を示した記録、「自分史」であると認めている。

本項でみてきたように、「自分史」の命名者である色川が「ふだん記」を「自分史」であると述べていることは両者が共通する部分が多いことを推察させるし、「自分史」や「ふだん記」において自らの体験だけでなく、社会の動きを調べることやそこに自らを位置づける洞察などの学びに係る要素が含まれていることから伺うことができる。

第4節 「ふだん記」の執筆内容の検討

第1項 史料の概要

次に「ふだん記」の具体的な記述を取り上げ、「自分史」学習における執筆の要点と照らし合わせながら「ふだん記」の文章の共通点を実証的に分析する。

橋本は「ふだん記」を人生の報告書としてとらえ、「自分史」であると述べている。橋本義夫と四宮さつきの共著³¹における「人生報告書—自分史のすすめ」の中でそれぞれの人間が書く自分の人生は二度とはないものであり、写真や略歴などの資料もいれるように述べている。個人の歴史を書き記すことが「ふだん記」であり、橋本自身が「ふだん記」を「自分史」と同一に考えていたことが示されている³²。

ここでは「ふだん記」の中心人物の一人であった四宮さつきを検討する。四宮を取り上げた理由は二点ある。第一は四宮が「ふだん記」を支えた中心人物の一人であり、『十年—ふだん記と共に—』(1976年)『続十年—ふだん記と共に—』(1984年)『続々十年—ふだん記と共に—』(1994年)という「ふだん記」の詳細な活動記録を残すなど、「ふだん記」の歩みを記録し続けていたことである³³。第二は、四宮自身が「ふだん記は自分史です³⁴」という言葉を残しているように、「ふだん記」の執筆において「自分史」を意識していたことである。そこで四宮自身が自らの歴史を中心に執筆した『ながれの中に』を分析対象にした³⁵。

『ながれの中に』における四宮さつきの略歴を確認する。四宮は1923年8月九州久留米生まれ、満1年で上京。東京各地を動く。東京女子商業を卒業した後、1940年8月には満州への渡航、さらには1942年8月に結婚、1943年には東京に戻る。終戦後の1945年10月には、第10次移住開拓団への応募により、北海道へ渡道する。その後1956年5月に四宮自身は開拓地を引き上げ、富良野の町へ移り保険の外交員になる。東京に移ったのは1957年7月である³⁶。

『ながれの中に』の編者である橋本義夫は巻頭言において、厳しい条件下で生き抜いてきた人物の「人間記録」と評している³⁷。『ながれの中に』が出版されたのは1971年であり、「自分史」の語はまだ提唱される前であったために、「自分史」の語を用いた説明まではされていないが、本書を戦中から戦後の歴史の中を生きた四宮さつきの来歴の本であるとの考え方を示している。

第2項 「ふだん記」の検討

戦前・戦中の青年期に満州、戦後は北海道での開拓に従事するなど、まさに激動の時代の中で生きてきた四宮さつきの「ふだん記」を対象に、「自分史」学習における綴る6つの要点がどう書かれているかを検討していきたい。

①精神的成長をもたらした社会との関わり

第1点目が「社会とのかかわりのうち、精神的成長をもたらしたと思われることをとりあげる」ことである。四宮は東京、満州、北海道、八王子と自らの故郷を持たず各地を転々とめぐりながらあゆんできた。そのような人生遍歴を通じて、たどり着いた四宮の心の持ちようを『ながれの中に』で記している。

四宮は自分には実家がなく、妹は自らの家を実家のように尋ねるが自分にはそれすらないと前置きしながら以下を述べる。

「私の家には親戚でなくとも、北海道の人、金沢の人、九州の人、かわるがわる泊りに来る。私はそれが楽しい。(中略)私は人を大切にし、そして又、自分を大事にされたいと小さい時から願って来た。これからもそれは続くだろう。喜んで私を迎えてくれる人の住む所、それが私の故郷だと思っている³⁸⁾」。

四宮は自らが地域を移りながら社会とかかわりあってきたが、多くの人びとが自分を訪ねてくれるようになったことを経験することによって、自分がどこに行こうとも喜んで迎えてくれる人がいるところが自分の故郷であるとの気付きにまで至ることができるようになったと述べている。

上記の引用箇所は『ながれの中に』の本のタイトルが示すように、四宮の半生の流れの中に生きてきた中で四宮に精神的成長をもたらしたことを示していると思われる。

②事実と自分の考え

第2点目は、「事実を先に書き、自分の考えを必ずつけ加えて書く(事実と分析)」ことである。四宮は自らの歩みの中で見たものを書く場合も、振り返る中でも自らの感想を交えて記述している。例えば大連に移った1940年頃の地名についてこのように記す。

「大連には植物の名をつけた町があった、芙蓉町、蔦町、桔梗町^{ききょう}、山吹町等があり、会社の近くの様に昔の国の名を取って若狭町、薩摩町、駿河町、浪速町^{なには}、等があり又大山通り、東郷町、乃木町等といかにも後から日本人が入って行って区画整理を行い名づけた感がする³⁹⁾」。

ここには地名を羅列するだけでなく、そういった地名がなぜもたらされたのかなども自らの感想・分析も交えて記述している。

他にも、徐々に戦争が激化し物資が不足する中において店でなかなか買えないという状況にあって肉などを買っても、自らが住むアパートまで物資を届けてくれることに関して

は、「私が何んでもいゝなりの値だんで買っていたからかもしれない⁴⁰」のように、自らがどのような客とみられていたかを分析しつつ振り返ってもいる。

③事件を中心にした世の中の動き

第3点目は、「事件を中心にして世の中の動きを自分なりのみつめ方、自分のことばで伝えていく」ことである。『ながれの中に』においても当時の状況を事件を中心にして書いた「あまりに貧しければ⁴¹」という章がある。時期は四宮が北海道開拓団にて暮らしていた1948年頃以降の話である。

この章には開拓地の沢に起こった殺人事件を中心に伝えた「変死」、出会った人々とのエピソードを書いた「森口さん」、開拓地での兎、猫、いたち、隼、キツネ、くま、ブタなどの収入を得るための動物やそれを攫おうとする野生動物に関する話である「生きものたち」、生活の手段を得るために編み物教室に苦勞しながら通った話などを収めた「編み物教室」などにより構成されている。これらは四宮が自ら体験した小さい一つひとつの出来事の中で感じたことを記録したものである。それぞれ率直な言葉で述べているが、一つにまとめ、「あまりに貧しければ」のタイトルを付けることによってまさに、事件を軸に当時の開拓地の動向が厳しい状況にあったことを示していることがわかる。

④身近に感じた歴史

第4点目は、「身近に感じた歴史(私に聞こえてきた足音)は必ず書く」ことである。四宮さつきは、戦中は学校卒業後母を訪ねて渡った旧満州に暮らしており、現地で就職をして生活をしてきた。その中で戦争の激化を感じていることを記録している。ここでは戦時下のエピソードを例に示したい。それが、会社の中でも付き合いの長かった同僚に召集令状が届いた際の一節である。四宮は送別会の様子を「ふだん記」の中で記録している。

「もう二度と逢う事が出来ないかもしれない、等と思って何んでも飲み、料理もよく食べた。(中略)島根県から送別会の礼とこれから戦地にゆくということを書いた便りがあっただけで、その後便りはない。どうしているだろう⁴²」。

戦中、身近な人が召集され離れることになった時の様子をこのように書き残し、その際にもう二度と逢う事ができないとの思いを持ちながら見送ったことを述べている。ここでは召集という戦争が迫った歴史を書き記すことで、戦時が身近に感じたことを書き残していることがわかる。

⑤ 建て前と本音

建て前と本音の両方を書くことに関係する内容は、四宮の家族に関することを述べた箇所に表示されている。特に葛藤のあった四宮の父に関する箇所においては如実に示されている。以下をみられたい。

「父が死ぬまでいろいろの事であつれきがあり、どんなに頼られても父を好きになる事は出来なかった。(中略)私自身が世間に笑われぬために、十五年間一緒に住んで面倒はみたが、今でも親孝行をしたとは思っていない⁴³⁾」。

幼少期から続く父との問題に起因する、父への対応に関する建て前と本音の両面がここに描かれている。建て前とはすなわち頼ってきた父に対する親孝行であり、本音は自身が世間に笑われぬために親孝行をしたということである。他にも『ながれの中に』には、四宮の母が四宮を幼少の頃日本に残し満州に渡ったのも父が原因であるとの記述もある。このように家族関係というプライベートなことを書くにあたっては本音と建て前を記している。

⑥ 戦争体験を自己の変革としてとらえる

『ながれの中に』においては戦争体験に関して前述した同僚が招集された時のエピソードの他にも、四宮の母から聞いた話を書き記されている。戦後直後の満州において、ソ連兵からの通達で刀の回収命令があった際に、刀を出さず隠し持っていた人が密告されたことに関するエピソードである。結果として被密告者の処刑、さらには密告者も「人民裁判」にかけられ殺されたという悲惨な事件である。

その場にいた人の感情と状況を四宮はこう書いている。

「『助けてくれ』という声をきいて、みんな心のなかで何とかならないのか！と思った、だがうっかり口を開らけば今度は自分が殺ろ（マ）されるかもしれない、そんな恐怖で誰れも声をださなかった。今になってどうして銃殺されるどころなどをみつめていられたのかその時の心が自分でわからない。(これは母からきいた話である)⁴⁴⁾」。

人間が極限に置かれた状況の中では、助けたいと考えつつも自らの命を考えやむなく声を出せない。自分の行動や気持ちがわからなくなってしまうことなど、自らも被害者でありながら、傍観することでさらなる悲劇が生まれてしまう。戦争体験を間接的体験である

が、自分自身の「ふだん記」の中に記すことで自らの記録の中に残し、記憶としてとどめていることが伺える。

小結

本章では橋本義夫により創始された「ふだん記」を社会教育実践として再評価することを課題として設定した。

第1節では「自分史」と「ふだん記」に関する先行研究を概観しつつ、「自分史」が社会教育実践としての評価を受ける一方で「ふだん記」が社会教育の文脈で捉えられることが必ずしも多くなかったことを論じた。第2節では「自分史」の定義や成り立ちを取り上げ、「ふだん記」と重なるものであることを確認した。第3節では「自分史」学習の執筆の要点と「ふだん記」の共通点をみた。第4節では「自分史」学習の執筆の要点から「ふだん記」に書かれた文章を検討し、「ふだん記」に書かれていることを明らかにした。

以上により本章では、「ふだん記」と「自分史」の本質的には両者に変わりはなく、「ふだん記」は「自分史」同様に社会教育実践そのものであることを示した。「ふだん記」と「自分史」の書く実践は色川もいうように截然と区別されるものではない。「ふだん記」も生涯学習・社会教育分野での分析対象に捉えていくことにより、当該分野での研究がより深まるものと思われる。

第4部 第6章 注

1 例えば、片岡了、辻智子「共同学習・生活記録」、日本社会教育学会 50 周年記念講座刊行委員会編『講座 現代社会教育の理論 III 成人の学習と生涯学習の組織化』東洋館出版社、pp.108-123。新井浩子「戦後社会教育における生活記録の導入に関する研究—日本青年団協議会を中心に—」、〈関東教育学会紀要〉(40)、関東教育学会、2013 年、pp.39-50 などがある。

2 色川大吉「現代の常民—橋本義夫論 昭和精神史序説」、〈中央公論〉89(8)、中央公論新社、1974 年 8 月、pp.123-152。

3 色川大吉「自分史論」、色川大吉『常民文化論』筑摩書房、1996 年、p.389。

4 小倉英敬『八王子デモクラシーの精神史 橋本義夫の半生』日本経済評論社、2002 年。

5 土橋寿「新人類文化提唱者・橋本義夫論：『ふだん記』の哲人」、〈研究紀要〉13、帝京学園短期大学、2004 年、pp.2-21。

6 渡辺奨「地方史研究と文化運動—ふだん記運動の原点と継承」、〈地方史研究〉36(4)、地方史研究協議会、1986 年、pp.28-32。

7 小林多寿子「書く実践と書く共同体の生成—初期「ふだん記」運動の場合—」、〈生活學論叢〉3、日本生活学会、1998 年、pp.59-70、小林多寿子「書く実践と自己のリテラシー」、桜井厚編『戦後世相の経験史』せりか書房、2006 年、pp.240-261 など。

-
- 8 前掲「書く実践と書く共同体の生成—初期「ふだん記」運動の場合—」、p.68。
- 9 辻喜代司「庶民による人生の記録の創出—橋本義夫と初期『ふだん記』運動の場合」、＜京都大学生涯教育学・図書館情報学研究＞9、京都大学大学院教育学研究科生涯教育学講座、2010年、pp.73-78。
- 10 上田幸夫『『生活』と『歴史』をつなぐ『自分』の発見—『自分史』学習の系譜』、前掲『成人の学習としての自分史』、pp.10-40。
- 11 「自分史」、新村出編『広辞苑』第六版、岩波書店、2008年、p.1277。
- 12 三浦朱門「自分史とは何か」、＜歴史読本＞41(6)、人物往来社、1996年、pp.180-183。
- 13 色川大吉『ある昭和史 自分史の試み』中央公論社、1975年。
- 14 同前、p.4。
- 15 同前、p.32。
- 16 橋本は、「人間という動物は、素晴らしい性能を持っている」と説き、万人の持つ力に着目し、それぞれの協力により新しい文化を創造すべきとしていた(橋本義夫『万人可能の哲学 附”新人類文化”』、ふだん記全国グループ刊、1977年、pp.7-9)。
- 17 「ふだん記」は、橋本義夫の基本的な考え方である「私でも文が書けるんだから、書けない者はない」とする誰もが読み、書くことのできる「万人の文章」にある。(橋本義夫『ふだん記の大道—その道標—』、ふだん記全国グループ、1978年、pp.140-141など)。
- 18 前掲『ある昭和史 自分史の試み』、p.375。
- 19 井上幸治「序にかえて」、同志社大学労学アッセンブリー委員会編『暴徒—現代と秩父事件—』同志社大学アッセンブリー出版会、1976年、p.ii。
- 20 色川大吉「自分史論」、色川大吉『常民文化論』筑摩書房、1996年、p.365。
- 21 1967年秋、東京都教育委員会主催の婦人指導者養成講座における、横山宏が助言を行っていたサングループを母体にした「私たちの歴史を綴る会」の実践である(原輝恵「学び、綴り、行動した私の歴史」、前掲『成人の学習としての自分史』、p.211)。
- 22 「まえがき」同前、p.2。
- 23 横山宏『『自分史』を綴るといふことの意義、そして綴り方』、『成人の学習としての自分史』同前、p.56。
- 24 同前、pp.56-57。
- 25 色川大吉「自分史論」、前掲『常民文化論』、pp.365-366。
- 26 橋本義夫『だれもが書ける文章』講談社現代新書、1987年。
- 27 同前、pp.106-131。
- 28 同前、p.180。ふだん記年表では、例示として橋本が居住する八王子が挙げられているが、多摩・八王子在住でない人の場合は自分の郷土史を参考に書くよう補足されている。
- 29 色川大吉『自分史 その理念と試み』、講談社学術文庫、1992年、pp.27-29において、海端俊子『海は私の絵本』(1974年)、尾股惣司『あるとび職の記録』(1972年)、沢田鶴吉の『寺田の百姓』(1974年)、小泉栄一『ふるさと板木』(1971年)などの「ふだん記」を紹介している。
- 30 前掲『常民文化論』、p.377。
- 31 橋本義夫、四宮さつき『下手に書きなさい』大揚社、1984年。四宮は橋本義夫ともに「ふだん記」を支え続けた一人である。
- 32 同前、p.49。
- 33 四宮さつき(橋本義夫編)『十年—ふだん記と共に—』ふだん記本 56、ふだん記全国グループ、1976年。四宮さつき(橋本義夫編)『続十年—ふだん記と共に—』ふだん記本 79、ふだん記全国グループ、1984年。四宮さつき(橋本義夫編)『続々十年—ふだん記と共に—』ふだん記本 140、ふだん記全国グループ、1994年。はいずれも「ふだん記」の詳細な活動記録が収められており、「ふだん記」の活動内容を知ることのできる史料である。

³⁴ 小林多寿子『物語られる人生』学陽書房、1997年、p.46。四宮は同書に収められたインタビューの中で「ふだん記は自分史です。このごろは自分史でない随筆もありますけど、もとは日常生活を書こう、文法とかにこだわれないで、思った事を書こう、あったことを書こうじゃないか、いままでの文筆屋さんみたいに、理屈とか意見とかではなく、自分で自分の体験をかこうじゃないかっていうのが始まりですね」と述べている。

³⁵ 四宮さつき(橋本義夫編)『ながれの中に』ふだん記本 15、ふだん記グループ、1971年。

³⁶ 同前、p.32、55、63、148、178、212。

³⁷ 橋本義夫「ひとこと」、四宮さつき(橋本義夫編)『ながれの中に』ふだん記本 15、ふだん記グループ、1971年、巻頭言。

³⁸ 前掲『ながれの中に』、p.211。

³⁹ 同前、p.38。

⁴⁰ 同前、p.48。

⁴¹ 同前、pp.104-134。

⁴² 同前、pp.52-53。

⁴³ 同前、p.4。

⁴⁴ 同前、p.162。

補論 1 1980年代創始の各地グループに関する研究—「ふだん記」北九州グループ、あいちグループを対象として—

補論 1 は「ふだん記」の理念に共鳴し、1980年代に創始した「ふだん記」各地グループを対象にした研究である。

日本ではさまざまな場所において、各種の学習・文化活動が展開されてきた。戦後 70 年を経過した中、日本の各地方においてどのような学習・文化活動が展開されてきたのかをみることは、日本の戦後教育史をみる上でも、重要なことと思われる。一方で書く実践以外にも、青年団や女性の学習活動など多様な実践が該当するため、一つひとつを丹念に掘り起こしていくことも重要であるように推察される。

そこで補論 1 では「ふだん記」を、八王子から離れた各地で行っている「ふだん記」各地グループに焦点化する。特に、1980年代以降に創始された北九州グループ及びあいちグループを対象とし、その実践を描出しつつ、意義を明らかにすることを目的とした。

1980年代に活動を開始した「ふだん記」各地グループに着目した理由は、1950年代の生活記録運動が隆盛して以降の書く実践の取り組みをみたいと考えたためである。戦後の書く実践において最も知られ、全国に広がったこの運動は戦後初期の書く実践としても影響の大きい運動であった¹。文章を書く実践は、そこから時期に応じた人々の思いなどもみることが可能であり、重要な実践と思われる。一方で生活記録運動以後の書く実践の研究は生活記録運動に比べ、必ずしも多くないようにみえる。そこで、1980年代以降に取り組まれている北九州グループやあいちグループを対象に書く実践をとりあげたのである。「ふだん記」各地グループの内容に迫ることは書く実践に関する研究対象を広げうる可能性も帯びているのではないだろうか。

なお、各地グループは 1976 年 1 月に発会した八菅グループ(神奈川県)から始まり、現在九州から北海道までの全国各地で活動が行われている。2018 年 1 月現在においては約 20 のグループがある。各地グループは、橋本義夫が提唱していた「その土地よかれ その人よかれ」や「独立するが孤立せず」を標榜し、各グループ間で文章の投稿や交流会等の出席などでゆるやかにつながりつつも、各グループは独立してそれぞれの活動が行われてきた。

補論 1 において対象とする北九州グループ(機関誌<ふだんぎ北九州>1980 年 2 月創刊)及びあいちグループ(機関誌<あいちふだんぎ>1980 年 2 月創刊)は、いずれのグループも

「ふだん記」が誕生した東京西部三多摩地域の八王子からは地理的に離れているグループであり、なおかつ共に機関誌の創刊年が1980年代である。さらに現在まで活動が継続して行われてきた点も共通していることから対象に取り上げた。

ここでは主に、二つのデータにより研究を行った。研究対象の第一は、北九州グループ及びあいちグループの文友(「ふだん記」の執筆者)に対するインタビュー調査(個人及びグループ対象)、第二は北九州及びあいちグループの機関誌のバックナンバーである。以下、第1節「ふだん記」各地グループの概要、第2節北九州グループ、第3節あいちグループ、第4節各地グループの意義の順に論じる。

第1節 「ふだん記」各地グループの概要

第1項 先行研究

戦後日本においてはこれまで、さまざまな地方や地域に着目をした取り組みが進められてきた。例えば近年の政府レベルにおける取り組みをみても、1980年代後半のふるさと創生事業、2000年代に入ってから構造改革特区、今現在取り組みが進められつつある地方創世など、地方それぞれの良さを活かしながら地域の活性化などを目指そうとする試みを見ることができる²。

しかしながら、こうした各地域における文化に関わる実践は、政府・政策で行われてきたのではなく、市井に暮らしてきた人々の営みによりすすめられてきたと思われる。戦後の書く実践に限定しても、生活記録運動、その後の「自分史」学習など、多数の実践が行われてきた。例えば、近年の社会教育分野における生活記録運動や共同学習の研究に関しても、辻智子や猿山隆子らによる研究など豊富な蓄積がある³。

前述したうち、例えば1950年代を中心に隆盛した生活記録運動は、女性や青年たちにより担われ、日本の様々な地域においてさまざまな実践が展開されており、数多くの草の根の民衆の記録が紡がれてきた⁴。

さらに、生活記録運動の後に盛んになった書く実践として挙げられる「自分史」は、書き手が自らの歩んできた来歴を書き記す実践であるが、その綴られた歩みは人々がそれぞれ生きて来たことの記録であると同時に、庶民により作られてきた文化の記録でもある。例えば、「自分史」研究家の吉沢輝夫は、「自分史」をその芽生えからその後の展開を体系的に研究しつつ、「自分史文化論」として捉えようとする試みを行っており、「自分史」という文化に関する研究もみることができる⁵。

補論1の研究対象である「ふだん記」もこれらと同じ、文章を書く実践であり、本論で取り上げたように、少なからず研究が行われてきた。しかしながら、「ふだん記」研究においてこれからの研究を待つ箇所も少なからずあるように思われる。その一つが「ふだん記」各地グループである。例えばこれまでの「ふだん記」研究の対象は、1968年から10年に亘って展開されてきた「ふだん記」の活動初期や創始者の橋本義夫に関する研究が中心のテーマとして取り扱われることが多く、「ふだん記」が全国的に広がりをもせた各地グループに関する研究はこれまであまりみられなかった点に課題があるように思われる。

第2項 「ふだん記」各地グループの概要

次に、「ふだん記」各地グループの概要に関して述べる。各地グループはその名前が示す通り、全国各地において「ふだん記」を実践するグループであり、最初に発会したのは、1976年1月24日の八菅グループ(神奈川県)であるが⁶、現在は九州から北海道まで広がっている。

各地グループの基本的なあり方については、創始者橋本義夫の言葉からひも解きたい。

『その土地よかれ、その人よかれ』が前々からの『ふだん記』の方針である。庶民自身の文化だから、中央集権をさげ、地方分権的にならねばならない。殊に、先進国がなくなった今日では、地方地方が独立的に地方色をだし、獨創性を生む基地にしたい。先進国は、地方が各々に先進的な歩みをするものである。この意味でも各地にそれぞれ『ふだん記〇〇(地名)グループ』が生れねばならない⁷。

これは各地グループの結成が広がりつつある時期である1978年の言葉である。

ここから浮かび上がる鍵概念が「その土地よかれ、その人よかれ」である。中央集権ではなくそれぞれの地方が重んじられつつ、庶民文化を形作っていく「ふだん記」の考え方が示されている。ここでは「先進国がなくなった」という表現で時代背景を念頭に置きながら論じているが、高度経済成長期を過ぎ、ジョン・K.ガルブレイス『不確実性の時代』のベストセラーなど、先行きが見えづらくなっている中、新たな文化のあり方を模索していた時代とも重なりあうように思われる。

さらに橋本は各地グループのあり方に関してはこう続けている。「各地グループは、独立的であるが、孤立はさげなければ生長しない。(…)然も本当の『その土地よかれ、その人よかれ』にするには、各地に『ふだん記グループ』をつくり、その地のセンターとなり、全国で相互扶助をしなければ効果的ではない。(…)全国各地のどんなところにも、その土地の

『ふだんぎ』を発行し、それが土地の印刷所にも、公共施設ともつながり、『みんなの本』として機能を発揮し、『みんなの文化』として花を咲かせ伝統にして残したいものである⁸⁾。

もう一つの鍵概念が、ここで述べられている「独立するが孤立しない」である。それぞれが尊重されつつも孤立してしまうことのないように支える「ふだん記」のあり方である。「ふだん記」の各地グループが発行しているそれぞれの機関誌への他グループの文友による投稿、印刷費等の喜捨や他グループの交流会への参加も多く、グループごとの活動だけではなく相互に関わりを持っている現状からも、こうした指針を伺うことができる。加えて、上記引用文中では、橋本が各地で庶民の出版文化が広がり「みんなの文化」として定着を願う気持ちも示されているが、これは「ふだん記」の活動の伸展における各地グループへのこれからの期待を持っていたように読み取れる。

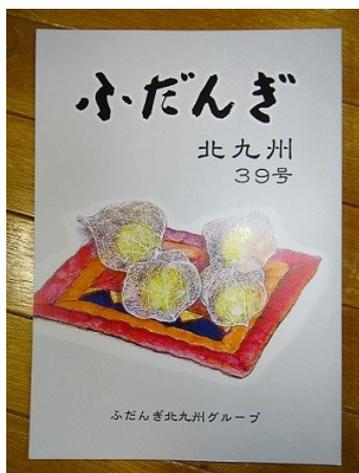
「ふだん記」の各地グループには、窓口と呼ばれる文友がいる。窓口とは文字通りグループの窓口であり、文友への連絡調整や会誌の発行や会合の準備等運営の中心となる人物である。「ふだん記」のグループによる活動に関する橋本の説明をみると、以下のように記されている。

『ふだん記』グループは、手紙の交流に始まり、機関誌『ふだんぎ』で各人が文章を発表し、個人文集を刊行する。それによって『文友』は、文字通り友人となっている。そこで年一回の会合は『逢う日話す日』と名付け、大会を兼ねて催す。この大会は会名の通り、『逢う日話す日』を目的として、普通の会のような形式をさけている。何よりもみんなが発言し、交流し、肩を叩き合う。新人も旧人もない。上も下もない。初めて来た人でもいつのまにかグループの一員のようになり、一緒に楽しむ⁹⁾。

手紙の交流、機関誌の発行と各人の文章の発行、文章をまとめた個人文集(「自分史」をまとめたふだん記本)、さらに会合である「逢う日話す日」の開催などの活動が企図されている。これらをみると、「ふだん記」の活動は文章を書き発表することだけでなく、手紙のやり取りや直接の会合など、文友相互のやりとりにも重きを置かれていることが伺える。会誌発行や手紙のやり取りを軸にしながら、各地グループは各自で実践をする形式となっていたようである。

各地グループのあり方に関しては色川大吉も次のように言及する。「このグループを、『一人のリーダーの下で、精神的なきずなで結ばれた運動体』と位置づける人もいますが、内側をみるとそうでもありません。各地ごとにたくさんの立派な地域のリーダーがいるのです¹⁰⁾。創始者橋本も「ふだん記」を中央集権的でなくとしていたが、色川の指摘にも「ふ

だん記」の各地ごとの地域のリーダーの存在が言及されている。こうした各地グループにおける活動がどのようになされてきたか、次項から論じていきたい。



▲<ふだんぎ北九州>39号(2017年9月)



▲<あいちふだんぎ>77号(2017年11月)

第2節 北九州グループ

第1項 北九州グループの概要及び調査概要

ふだん記北九州グループの誕生は1980年1月、1980年2月に機関誌<ふだんぎ北九州>の創刊号が出版された。窓口は創設当時から現在まで務めている川原洋子である。窓口は福岡県北九州市に置かれている。北九州グループとして執筆している文友の地域は福岡県を中心に九州から、中国・四国などに広がる。現在「ふだん記」各地グループの中では最も西に活動しているグループである。<ふだんぎ北九州>は2017年9月時点で39号まで発行されている。発行の間隔は約年1回、号によって発行月は若干の変動があるが、現在はおよそ7月から8月頃が発行の目安となっている。なお機関誌の発行部数は250部、北九州グループの文友数はおおよそ24、25名から30名弱程度のようなのである¹¹。主な活動は、機関誌の発行及び発行に係る編集・校正作業、機関誌の発送作業、さらには文友の交流会の開催などがある。

機関誌である<ふだんぎ北九州>の体裁は、1号(1980年2月)から5号(1983年4月)までは手書き・B5版(内1-2号は手作り、3号(1981年7月)以降は印刷会社での印刷製本)、6号(1984年12月)以降は活字・A5版になり現在までこの形での発行になっている¹²。<ふだんぎ北九州>誌では、橋本義夫による巻頭言や文友の写真の他、北九州グループによる

投稿と、他の各地グループ文友による投稿を柱立ての中心として構成されている。さらに、本誌の特徴にみることができるのが「おたより集」と題された北九州グループ宛に届いた全国の「ふだん記」文友からの手紙の抜粋記事である。「おたより集」では前号に対する感想、つどいへの参加の感想や近況報告などが掲載されており、直接の手紙の交流のみならず機関誌の誌上でも文友の近況などが伝え合える場になっていることから、機関誌は各自が執筆した「ふだん記」の文章の発表の場であると同時に誌上交流の場となっていることが伺える¹³。

なお、会の設立理念や活動状況、さらに執筆する文友の「ふだん記」との出会いや「ふだん記」への思い等を描出するにあたり、北九州グループ文友へのインタビュー調査を行った。インタビューは全3回、調査1及び調査3はグループインタビュー、調査2は窓口への個人インタビューの形式で実施した。概要は以下のとおりである。

【インタビュー調査1】

2015年9月4日ふだん記北九州グループ・グループインタビュー（於：北九州市「小幸」）
（倉田栄子、田村貴美子、川原洋子、山本久江立ち会い）、聞き手：川原健太郎。

【インタビュー調査2】

2015年9月5日ふだん記北九州グループ窓口・川原洋子ライフストーリー・インタビュー（於：北九州市、川原洋子宅）、聞き手：川原健太郎。

【インタビュー調査3】

2015年9月5日ふだん記北九州グループ・グループインタビュー（於：北九州市「湖月堂」）
（相原百里江、石橋英子、牛島和子、川原洋子、川原士道、川原奈津子立ち会い）、聞き手：川原健太郎。

なお、インタビューでは被調査者の「自分史」（「ふだん記」に出会うまでの人生とその後）、「ふだん記」参加の契機や執筆における思いなどを問いつつ、その他の「ふだん記」に関する事柄を自由に語ってもらう半構造化インタビューの形式で実施した。調査2の窓口へのインタビューでは窓口の方にライフストーリーを語りつつ、そこに「ふだん記」を位置づける形式で「ふだん記」への思いを語ってもらい、調査1及び調査3では文友複数人に対するグループインタビューの形式を取り、各自に来歴や「ふだん記」との出会いに加え、グループで「ふだん記」への思いを語ってもらう形式をとっている。

第2項 北九州グループの創設とあゆみ

北九州グループの創設は1980年1月であるが、その前史には創立者たちと「ふだん記」との出会いがある。ここでは創立者3名のうちの1人で創立当初から現在まで窓口を務める川原洋子と「ふだん記」との出会いから北九州グループのあゆみを論じる。中でも川原洋子の語りや自身の「自分史」を記した著書であるふだん記本などを参照しながらグループの創設時の理念をみることで、窓口の視点から北九州グループの一側面をとらえたい¹⁴。

「ふだん記」と北九州グループ窓口・川原洋子のつながりは、私立高校の教師として教鞭をとっていた川原が、「自分史」の視点での現代史の叙述を試みつつ橋本義夫や「ふだん記」に関して論じた書である色川大吉『ある昭和史』（中央公論社、1975年）を読み、1977年4月に橋本へ手紙を出したことが契機であった¹⁵。当時学校の必修クラブで文芸部を担当しており、「これでやろう、これならやれるね¹⁶」と「ふだん記」の関わりを持った川原は『ある昭和史』の橋本義夫を論じた章である「ある常民の足跡」に触れながら次のように語る。

「常民という言葉もひかれたというか、何だろうということ、その章を読んだということですね。そうしたら、『ふだん記』のことを書いてあったんですけど、(…)海端さんの人生の一端、それと詩が書いてあって。(…)それで、すごいなっていうか。読んだらパッと流して忘れられるものじゃなかったんですよ。残ったというんですかね、私の中に¹⁷」。

川原は『ある昭和史』で綴られる、「常民」・創始者の橋本義夫の他人の為に働く生き様や、長崎・五島に暮らし「ふだん記」の中で詩などを発表している文友、海端の印象が残ったといい、「ふだん記」への関心を深めたと言っている。

こうした出会いのあと、川原は「ふだん記」の文友や橋本へ手紙を出し、の交流が始まる。この時期、1977年4月から12月までの橋本義夫や他の文友との手紙や本の送付などのやりとりを重ねた記録も残されている¹⁸。当時の手紙での交流内容は、次のように語られている。「自分の自己紹介から始まりますよね。こういう者ですとか。(…)例えば作品を読むとかいうことじゃなくて、その人の生活に触れるという感じですよ。だから、作品を読んでその感想というんじゃないくて、その方の生活だとか、その方の趣味というか、好きなこととか、今どうしているとかいう、そのことに関する応答という感じですかね。だから書けたんじゃないですかね。(…)はがきのやりとりということはその方の生活とか、本当に話を聞いているような感じで、じかに会ってないけども、じかに触れている感

じではがきを書けたのじゃないでしょうかね¹⁹。北九州グループ立ち上げ前に行っていた頃の「ふだん記」文友との交流は、執筆した作品を介したものというよりも、日常的な会話に近い応答などのやり取りが中心であったようだ。こうしたことから執筆・出版などを行う各地グループの活動を始める前に、文友とのつながりによる関係づくりがあり、各地グループの活動を開始できる土壌が醸成されていったことが伺える。

北九州グループは、そこからおよそ3年弱後の1980年1月、川原洋子、倉田栄子、藤田裕子の文友3名で立ち上げられた。〈ふだんぎ北九州〉の創刊は1980年2月、橋本義夫が巻頭言「下手に書いて 粗末に出す」を寄せ、次のような一節を綴っている。「学校で、文字その他が読めれば、辞書、図書、講演、放送、新聞、一切が手にでき、一生喜んで勉強できる。今時、万人の文章、万人の本などは自由自在である。(…)『下手に書きなさい』が世を動かしたように、『うすく、小さく始めなさい』が全国に『ふだんぎ』を生むことであろう。北九州によって、一九八〇年の光が、ひろがるのである²⁰。小さくともまず始めることの重要性への意識が各地グループ誕生の背景にあったことをみることができる。こうした橋本による巻頭言もあり、川原は「『創刊号は無理しても、今後は無理せぬこと』という言葉に安心して、何とか自分たちの手で、うすい機関誌を出していこうという気持ちで固まりました²¹」と創刊時の気持ちを振り返りながら機関誌に綴っている。

「下手に書きなさい」を掲げ、下手であることを恐れずまずは文を書いてみようとする、形に残すことを重視することが「ふだん記」運動を示す性質の一つであるが、各地グループの立ち上げにあたって、薄い本でも小さい本でもとにかく作ってみようという視点で作られており、「ふだん記」の文章執筆における理念である「下手に書きなさい」と同じ意識が根底にあることを伺うことができる。こうした「ふだん記」運動のもつ、下手を恐れず少しでも書いてみようとする考え方への共感は、川原とともに北九州グループを立ち上げたメンバーの一人である倉田栄子からの記録からも読み取れる。

看護師であった倉田は、仕事での必要もあり文章執筆の指南書を探していた時に、橋本義夫による文章執筆の書である『だれもが書ける文章』（講談社、1978年）と出会ったのが「ふだん記」と関わるきっかけだという。〈ふだんぎ北九州〉創刊号では「『下手でもよいのだ、書き始めねば』と、ほそぼそながら、全国の方々にハガキを書いていった。ハガキというのは、私のような文を書くことが苦手なものでも、何とか書ける。(…)ふだんぎは、こんな風におずおずと書き始めた者を、暖かく受け入れてくれる²²」と綴り、「ふだん記」への入りやすさに言及している。

川原が北九州グループを立ち上げる契機に関してもこうしたことが伺える。「スッと受け入れられるというか、安心して、別に頑張ろうとかじゃなくて、これでできるのかとか、そんな感じでしたから。多分、北九州も（…）私たちもできるねという気持ちになって、そしてやろうかということになったのだと思います²³」。北九州グループ立ち上げ時の記録や語りから伺えるのは、「ふだん記」への参加、書くことやグループの立ち上げなどに通底する、易行の考え方への共感である。難しく大きいものを作ろうとせず、まずは小さいものからでも活動をはじめようとする易行の考え方が、北九州グループの設立から現在にまで影響を及ぼしていることが推察できる。北九州グループは創立したメンバーが現在まで運営の中心として関わり、創立当初から易行に書くという思いを継続しながら運営してきたグループである。繋がりたい、関わりたいという思いを受け入れながら、文章は易しく書けるという土壌を作ってきたグループの姿を見出すことができる。

第3項 文友の語りからみた北九州グループの役割

続いて、文友の側面から北九州グループが果たしてきた役割を論じたい。なお、文友とは「ふだん記」で執筆をする「ふだん記」の仲間のことである。「ふだん記」はそれぞれが自由に文章を書く運動であるが、参加の経緯は文友ごとに異なる。ここでは、こうしたことを踏まえ、「ふだん記」に集う人々がどのような経緯で「ふだん記」に集い、「ふだん記」での実践から何を得ているのか、インタビューによる語りと執筆の記録をたどって、北九州グループを述べる。

なお、インタビューの概要は既に第1項で示したとおりであるが、ここでは文友の語りを(1)「ふだん記」参加の契機、(2)「ふだん記」から得たこと、(3)北九州グループに関する語りの分類でまとめつつキーワードを抽出し、集約化する方法で分析を行った。

表 17 北九州グループの語りにもみる「ふだん記」参加の契機

インタビューでの語り	キーワード	出典
(1)_1「読書会って行って、いろんな本を読みながらお互いに、この本いいよねとかいろいろ言っ、（…）それの中の一人の人がふだん記に関わってたんですね。それで、その本を見てみないって言われて読んで、すごい、何ていうんですかね、いろんな人たちがいろんなことを自分の言葉で書いてるんですよ。これいいなと思って、即入るというふ	読書会 紹介 自分の言葉で書く	調査 1

うに」。(田村)(1990年頃当時の振り返り)		
(1)_2「朝日新聞に手紙ごっこの会とかいう紹介があったんですね。何でもピンときたらすぐにアクセスするものですから、それで問い合わせたら手紙ごっこの会に入られて、そしてその中の1人からこういうふだん記というのがあるよと教えてもらったんですよ」。(牛島)(1985年頃当時の振り返り)	手紙ごっこの会 紹介	調査3
(1)_3『下手に書きなさい』(橋本義夫、四宮さつき『下手に書きなさい ふだん記のすすめ』太揚社、1984年)というこの本に出会ったんです、本屋さんで。その後に川原先生が新聞に投書されていたんですね、ふだん記のことについてそれで、(…)お手紙を最初出したんですよ、こちらが。」(石橋)(1985年頃当時の振り返り)	本との出会い お手紙	調査3

表17に示したのは、「ふだん記」参加した経緯に関する語りである。創設した文友からは本に「ふだん記」が紹介されていたことが契機と語られていたが、ここではそれ以外の経緯が語られていることが伺える。特に、読書会((1)_1)や手紙ごっこの会((1)_2)という他の人から紹介を受けて、手紙を出していたことがきっかけとなっている語りを見ることができる。

例えば、上記(1)_2を語る文友の一人牛島は、「ふだん記」と関わりを持ち始めた当初の1986年頃を<ふだんぎ北九州>においても綴っている。(窓口の川原宛に出した手紙の)「返事はすぐ来た。私の不安をかき消すかのように『ハガキがかければ誰でも文章は書けますよ』と言ううれしい言葉だった²⁴⁾。さらに、その後の例会への参加に関しても、『書くことが好き』という共通項で結ばれた皆さんの輪の中に、何の違和感もなく入っていくことが出来た自分に我ながら驚いている²⁵⁾」と書いている。

ここで取り上げたこれらのことを語る3名の文友は、友人の紹介や本との出会いなどが直接のきっかけであることを語っていた。一方でいずれにおいても読むこと・書くことに関心を持っていたことに共通項が見いだせる。こうしたことから北九州グループは、書く実践に興味を持った文友が地元で参加できる場としての役割を果たしていたことを伺うことができる。

表18 北九州グループの語りにみる「ふだん記」から得たこと

インタビューでの語り	キーワード	出典
(2)_1「私たちにしてみたら友達ができた、心の底から話し合えるんですね。友達がで	友達	調査1

きたというのが、私、本当に良かったなと思っています(…)落ち込むようなことがあってもふだん記という、何かこうあるんですね。心のつながりがあるって、そんなことで救われるというんですかね」。(田村)	つながり 他の生き方	
(2)_2「いろんな人たちのいろんな生き方が全部文の中にあるでしょう。こんなこともあるのかとか、私よりもっといろんな苦勞をしている人たちもいるんだとか、いろんなことを文章の中から読み取れるんですよ。だから、すごいそれが自分のためになっている」(田村)		
(2)_3「主人が特殊な事故で亡くなりましたので。炭鉱の事故なんです。だから、昭和38年の5月の7日ですけど、いまだに海底に埋もれたまんまで、上がってきませんから(…)その事故の前後のことをこれに全部書かせてもらって。だから、ふだん記があったからこういう記録が私も残せたんだと思いますしね。先生がいつも記録というのは人間だけに与えられた特権であるってよく言われましたけど、まさにそうだろうなと思いますね。私にでも本が書かせていただけたというのが本当にふだん記に入って一番大きな、それが宝です。」(相原)	記録を残す	調査 3
(2)_4「自分が読みたい人のことを読んで、そしてそこから、わあ、こんなこと、こんなんやったんだと思うから私は励まされるというか、静かな声で励まされるというか」(川原)	他の人のこと 励まし	調査 1
(2)_5「書くことを結構するようにはなりましたよね」(倉田)	書くこと	調査 1
(2)_6「交友関係が一部ではありますけども広がったというのが非常に楽しいですね。」(牛島)	交友関係	調査 3
(2)_7「いろんな人と出会い。それはまたよその県の方だったり、北九州市内の人であったりもそうなんですけれども、やっぱり出会いがすごいいいと思うんですよ。」(石橋)	出会い	調査 3

次にみるのは、「ふだん記」から得られたことに関する語りである。キーワードを見ると、二つに大別することができる。第一は記録を残すことや他の人の記録を知るといふ、書くこと／書かれたものに関わる語りであり、第二は友人や出会いなどの交友関係に関するものである。

第一の書くことにおいては、自身が書くことのみならず他の文友の「ふだん記」を読むことで、色々な生き方を知ることができると語られている点は特に目を引く点である。

川原が(2)_4で「励まされる」として例に挙げていたのが、鹿児島島の文友・志風忠義である。志風は進行性筋ジストロフィーを患いながら、「生を受けている幸せをかみしめつつ、

できることは知れていても、自分の可能性の限りを尽くして『やってみる』心を養うことは生きる力となるのです²⁶」と綴るなど、「ふだん記」に精力的に執筆をしていた文友の一人であるが、他者の綴る文章を読むことが読み手の力となっている点に、「ふだん記」の持つ力を見出すことができる。こうした言及は、田村の(2)_2の語りで見ることができる。

第二にみえる交友関係に関しては、(2)_1, 6,7でそれぞれさまざまな形で表現されている。心のつながりや出会いという形で紹介されているが、書くこと、特にハガキや手紙を書くことでつながる関係があることを伺える。上記で取り上げた文友の一人、石橋はハガキのやり取りに関する気持ちを〈ふだん記北九州〉への初投稿で「あなたのおハガキ毎日心待ちにしておりました故、ポストに見つけた時は大変嬉しく思いました²⁷」と、「ふだん記」での経験を書き綴っている。

さらに、書き残すことの意味を語るのは相原百里江の(2)_3の語りである。相原は、自身の配偶者を炭坑の事故(1963年5月、山口県小野田市 大浜炭鉱出水事故)で亡くしているが、その記録を「自分史」の「ふだん記」本にまとめている(相原百里江(橋本義夫編)『白いノート』「ふだん記」新書64、ふだん記全国グループ、ふだん記広島グループ、1980年再販(初版1979年))。本書は創始者橋本義夫をはじめとする「ふだん記」文友による尽力でできたといい、(橋本)「先生から渡されたときには、本当もう、感動っていう、そんなもんじゃなかったですね²⁸」と語る。同書では事故の記録と心の動きが克明に綴られている。このような「ふだん記」本は「自分史」の記録であると同時に、その時代を生きる人々を通じた地域の記録としての意義をみいだすことができる。

表 19 北九州グループに関する語り

インタビューでの語り	キーワード	出典
(3)_1「言われるのは、北九州ふだん記は、本はものすごく本当にふだん着だって(…)本当にトイレに持って行ってそこで読めるような、ちょっと本当に電車に乗ってパッと広げて読めるというのはすごいとつきやすい本でいいよって、大体の人が言ってくれます」。(田村)	ふだん着	調査1
(3)_2「これ以上厚くせんでねって(…)ちょっと後から読もうとかなんとかなるから。これ以上厚くせんでねって言うんですよ。」(川原)	厚くせんで	調査1
(3)_3「北九州はやっぱり川原さんの力が大きい。(…)やっぱり窓口さんの力がどこでも、	窓口さんの力	調査1

全国のどこでも大きいですね。」(倉田)		
(3)_4「グループを作るということはみんなの書いたものを出す、(…)だから自分の記録を残す、そして発表機関も持つというのが。持たないで自分だけで書いていたら消えていったりするから、(橋本)先生は大事なのは発表機関を持つことだということだから各地グループでということで、(…)グループ作ったら当然文集を出してということで。」(川原)	発表機関を持つ	調査 3
(3)_5(北九州で「ふだん記」を書くこと)「自分では意識しませんよね。自分の所でやっているから。でも、逢う日に行くと、遠くから来てくれたねとか、九州から来てくれたからってということを言っ、乾杯はあなた一言言っ乾杯の音頭をしなさいとか、九州から来たということで、非常に遠くから来たということですごく温かく迎えていただいているわけです。(…)逆に私は自分が行けない所、例えば北海道とか、青森、東北でいったらあこがれたりしたりしますでしょう。それと同じで、九州にはまだ行ったことないけど行きたかったんですよとか、九州に対する、行ったことのない土地に対する関心というのもお持ちの方は九州から来たと言うと、九州からね、一度は行ってみたいのよって」。(川原)	自分で意識しな い	調査 2

最後にみるのは、北九州グループに対する語りである。北九州の地で「ふだん記」書くことに関する聞き手の問いかけには、(3)_5にみられるように普段意識することはないと語られている。自分たちが北九州の「ふだん記」の担い手として意識しながら実践に取り組むということではなく、むしろ「ふだん記」運動において書くことと並んで重視されている、他の文友との交友の中で結果的に気づくことがあると語られているようである。これらを鑑みると、普段の活動の中では「自分史」や日常などの内容をありのままに記すことが中心であり、特段の九州という地元への意識があることは伺えなかった。

一方で、(3)_4のように各地グループとして発表機関があることの意味に言及している語りをみる事ができた。〈ふだんぎ北九州〉誌には、「自分史」以外にも地元・九州で生活している暮らしのこと、郷土の歴史などに関する「ふだん記」の記録が収められてきている。自らが暮らす地元で自分の記録を残し、共有することで残すことを可能にする機関があることで、それぞれの地域に記録を残す場の役割を各地グループが果たしていることが伺える。

例えば、機関誌の〈ふだんぎ北九州〉のタイトルから九州を中心とした地元を記した北九州グループ文友の作品をみると、藤田裕子「博多にわか(一)」(創刊号、1980年2月)、山

本久江「九州ってところは」(5号、1983年4月)など、地元を紹介するような文章が見受けられる²⁹。一方で北九州グループ以外の文友からの投稿に九州のことを綴る作品がみられる(錦田文子「九州についての思い出」(9号、1988年3月)、大貫いと「思い出の九州路」(18号、1996年7月)など)。九州で発行されている機関誌である<ふだんぎ北九州>ということを鑑みながら、他グループの投稿者も折々で九州に関することを綴っている。いわば、地域を論じる交流をする材料となっていたことが推察される。

さらに、北九州グループを語る中で特に話されていることが(3)-1や(3)-3にみえる、窓口さんの力という語りである。3名で創立した北九州グループは当時のメンバー2名が継続して会を続けており、創立当初より気を張らずに続けるという思いを大切にしながら語り合いの場を継続させてきたグループであるととらえることができる。

第3節 あいちグループ

第1項 あいちグループの概要及び調査の概要

あいちグループは、1980年2月に機関誌<あいちふだんぎ>の創刊号が出版された。現在の窓口は堀昌逸(56号、2007年6月より現在まで)、窓口は岐阜県羽島郡笠松町に置かれており、活動は主に名古屋の周辺で行われている。あいちグループは愛知県、岐阜県等の東海地域を中心とした各地グループである。

<あいちふだんぎ>は2017年6月までに76号が発行されている。発行の間隔はおおよそ年2回、現在は6月と11月の発行となっている。なお機関誌の現在の発行部数は130部、文友数は投稿者数ベースで46名である³⁰。主な活動は、機関誌<あいちふだんぎ>の発行及び発行に係る編集・校正作業(編集会、校正会)、機関誌の発送作業、さらには交流会(例会、出版会等)の開催を行っている。機関誌<あいちふだんぎ>は創刊(1980年2月)から5号(奥付なし、橋本義夫記念資料庫に収蔵されている冊子には1982年12月到着のメモ書きあり)まではガリ版のB5版、6号(1982年6月)からはタイプ打ちの活字A5版の本となり、現在も活字A5版の体裁で発行されている。<あいちふだんぎ>の構成は文友の写真、橋本義夫の巻頭言、あいちグループ文友による投稿文、各地グループ文友による投稿文が主になっている。書かれている内容は「自分史」の他、日常生活で感じていることや活動の記録、掲載された文章に対する感想、他の文友へのメッセージなどである。さらに10号、20号、などの節目の号では記念号を発行しており、記念号では文友から「ふだん記」そのものやグループに寄せた文章の特集が組まれている。

ここでは、ふだん記あいちグループの活動をみるために二つのインタビュー調査を実施した。インタビュー調査 4 は個人へのライフストーリー・インタビュー、インタビュー調査 5 では、グループインタビューの形式で行った。両インタビュー調査の概要を以下に示す。

【インタビュー調査 4】

2015 年 12 月 4 日「ふだん記」あいちグループ窓口・堀昌逸ライフストーリー・インタビュー(於：笠松町、堀昌逸宅)、聞き手：川原健太郎。

【インタビュー調査 5】

2015 年 12 月 4 日「ふだん記」あいちグループ・グループインタビュー (於：熱田図書館) (石川多壽子、賀治美知子、加藤慶子、新矢久男、高橋千代子、細川忠一、堀昌逸)、聞き手：川原健太郎。

第 2 項 あいちグループの概史

次に、あいちグループの概史を取り上げつつ、現窓口を務める堀昌逸の語りを引きながらあいちグループの一側面をとらえたい。現窓口の堀は<あいちふだんぎ>8号(1983年5月)から参加、10号(1984年5月)から編集に関わっている。その後6号(1982年6月)から55号(2006年11月)まで窓口をつとめたあいちグループの現在の基盤を形作ったキーパーソンである林常重とともに、編集等の運営に関わり、56号(2007年6月)から現在まで窓口を担当している。

ここでは<あいちふだんぎ>の創刊の頃を機関誌の記述から追いたい。創刊当時のことは、グループの創刊者の一人であった加藤幸穂が<あいちふだんぎ>9号(1983年5月)に綴っている。そこでは『愛知支部誌を発行しましょう』当時、数名に満たぬ愛知の同人の中の三名が、(…)怖いもの知らずで全く無からの出発³¹⁾と、馴れないガリ版を彫り 手作りでの本造り(52ページ)であった1980年2月の創刊時を振り返っている。手作りの冊子であり、小規模の出発であった。その後、活字印刷化され徐々に活動が広がっていく。「蟹の横バイだったあいちに、宮崎さんの自分史あいち第一号(1982年宮崎信『日々の足あとから』：引用者)が発刊され、すかさず林常重さんが『活』を入れた。マスコミに乗じて一気にメンバーが増大³²⁾したことも言及する。その後、文友の数が増え、<あいちふだんぎ>40号(1996年6月)ではあいちグループで投稿者が最大の114名となっている。こうした記述からも、長期に窓口をつとめた前窓口の林常重がキーパーソンの一人となっていることが確

認できる。

林常重と現在の窓口である堀は編集など長期に亘り本の発行に関わってきた。そうしたことから、堀へのインタビューにより、運営・編集側の文友の側面からあいちグループをみたい。堀が「ふだん記」を知ったのは1982年11月、中日新聞に紹介された記事が契機であった(日付のメモを取っていなかったと堀)。当時三十代半ばの会社員であった堀が「ふだん記」の新聞記事を読み林宛にハガキを送ったことから関わりが始まる。「小説を書いたり詩を書いたり、そういう文芸誌かなと思って行ったら『ふだん記』はまた違うんですね。庶民の文章ということで。ちょっと違ってただけで、それはそれなりにすごい面白い活動だと興味を持って。(…)否定的じゃなくてこれはものすごい面白い活動してるんだなっていう。文芸を追っかけるグループとは全然違うなって、それは面白いと思ったんですね³³」。元々本が好きであったという堀は、予想していた作品を作るような文芸誌とはまた違っていたものの、「ふだん記」の本質である庶民の文章執筆である点に惹かれたことを語っている。さらに、堀は加入後すぐに10号(1984年5月)から〈あいちふだんぎ〉の編集に関わるようになっていく。

堀はさらにこう述べる。「私の『ふだん記』に関して(…)多少違う点は、若くして入りましたので、いつも作る側だったんです。一般のように自分の好きな文章書いて気の合った仲間とハガキ交流っていうよりも、作る側に回ってずっとやっていました³⁴」。「ふだん記」の文通などの側面を楽しみにしつつも、30代という「ふだん記」に参加する年齢が若い時期だったこともあり、本の執筆者の側面だけでなく制作への関わりから「ふだん記」への関わりを深めていったという。なお、堀がより本のつくり手として「ふだん記」に関わるきっかけとなった林常重は、新聞へのあいちグループの紹介や文章講座など、あいちグループの活動を広げてきたあいちグループの鍵となる人物であったようだ。〈あいちふだんぎ〉59号(2008年11月)に追悼特集号が組まれるが、あいちグループは元より全国の各地グループから追悼文が寄せられ、その影響の大きさを伺い知る事ができる。

堀が林から窓口を交代し担当することに関しては、2008年の林逝去まで28年という年月で林と「ふだん記」に関わってきたことも含みつつ、堀は「幸いなことに(…)、全く私は同じ考え方だったんです。『ふだん記』に対してなど色々な意味で。だから、人間関係がうまくいっていたというのか、自然な流れでいわゆる2人でコンビしてやっているようなものだったんです。林さんは窓口ということで前面に出ますが、その下の本作りだとか会計は私がやっていて、非常にうまくいっていたんですよね、お互いに。だからもう自然の流

れでしたね³⁵」と語る。こうしたあいちグループのあゆみを通して、創立メンバーから林常重から現窓口の堀へと窓口がつながりながら、地域に「ふだん記」の文章を発表する土壌を作ってきたグループであることが伺える。

第3項 文友の語りからみたあいちグループ

次にあいちグループの文友の語りに着目しながら、あいちグループの果たした役割の一側面をとらえたい。そのため、第1項で示したインタビュー調査 4,5 の語りを(1)「ふだん記」参加の契機、(2)「ふだん記」から得たこと、(3)あいちグループに関することの3点に集約し、キーワードを抽出しながら、文友からみたあいちグループの一側面をみていきたい。

表 20 あいちグループの語りにもみる「ふだん記」参加の契機

インタビューでの語り	キーワード	出典
(4)_1「書いていたんですよ、自分ででも発表する場がなかったんですね。時々同窓会誌に出したりしていましたが、書いても発表する場所がなかったわけですよ(…)さっき言ったような勧誘を受けまして、こりゃびったりだわということで入ったんです。(新矢)	発表する場	調査 5
(4)_2「中日新聞に『ふだん記』の募集があった。私そのときにその新聞見とらんならそれで人生が変わったかもしれん。だから『ふだん記』見て難しいこといやと、ハガキの最初にこんにちはって書けばお付き合いできるということだから、ということも考えたもんだね、これなら俺でもできるわということで入った」。(細川)	これならできる	調査 5
(4)_3「文章を書くのが嫌いではなかったの、多少何かに書いたりっていうね、自分で自己満足程度ですけど書いたりはしてありました。それでそのときに中日新聞で『ふだん記』のことが載ってまして、それに応募しました」(石川)	文章を書く	調査 5
(4)_4「家内工業を営んでいたものですから、私も家事の合間に仕事をしなければならず、趣味なんていうことに目を向ける余裕はなかったんです。(…)仕事をやめたもんですから暇ができて、心の中も穴が開いたっていうような状態でして、これから何をしようかなんて思って少し日がたったんですけど、(…)『東海ふだん記』の新年会の模様が中日新聞に載ったんです(…)私は小さい頃から読むことがとても好きだったもんですから、こう	読むこと 何をしようか	調査 5

いう会に入れば心の隙間も埋められるかななんていう感じですぐ入会の申し込みをしまして」(高橋)		
(4)_5「親と子どものことばかりやっていたので、ここで何か一つやらないと自分がなくなっちゃうような気がして、(…)先生が上手にいろいろ教えてくださったので、それで(…)友達もできるし、そういうところに引かれて」(賀治)	何か一つ	調査 5
(4)_6「当時子育てが終わって(…)就職したんですよ。それをずっと続けているうちに(…)自分のために何かをしなきゃいけないという気持ちになりました(…)書画を習いにいっていたんです。(…)その中の友達の一人が(…)『ふだん記』で名古屋に通うっておっしゃっていたもので、『ふだん記』ってどういうものなのかしらって興味を持ちまして、そしたらこういうふうでって本見せてくださって、文を書いてみようかなって」(加藤)	何かをしなきゃ	調査 5

上表は、あいちグループの文友が「ふだん記」に参加した経緯をインタビューの語りから抽出したものである。6人の文友の語りには、「ふだん記」参加前に二つの態様をみることができ。第一には、文章を書くことが好きであること、第二は何かの活動をしたくなるものである。あいちグループは、前者タイプの文友には、書いた文章を発表することができる場として、後者のタイプの文友には、何かの実践の機会を得る場としての役割を担っていたことを伺うことができる。

「ふだん記」に参加する直接の契機に着目すると、例えば(4)_1、(4)_6では友人の紹介を受け、(4)_2、(4)_3、(4)_4では新聞記事であったことが語られている。ロコミ等の紹介以外に、新聞記事が参加のきっかけとなった文友が少なくないのがあいちグループの特長であると思われる。1984年11月に出版された〈あいちふだんぎ〉11号では、「ふだん記」に参加した新人が特に多く、こうした状況を受け新人特集号と銘を打ちった形で編集されており、31篇の新人の文章が掲載され、加えて新人からの多くの自己紹介コメント「はじめまして」の項が掲載されている。こうした新人特集を組む〈あいちふだんぎ〉誌の11号(1984年11月)に対して、橋本義夫は「すごい『新人』の量、たまげました。『はじめまして』これはいい試みです³⁶⁾」という記事をつづり、多くの新人の参加や自己紹介の特集に前向きなコメントを寄せている。創始者の橋本義夫は存命中、各地グループに対して巻頭言をはじめとして様々な文章を寄せているが、各地グループの機関誌にもこうした励ましながら活動を支えていた姿をうかがうことができる。

なお、上記表4中に取り上げたうち2名の文友が11号の新人特集に執筆をしており、例えば(4)_3石川は「年月」という化粧を意識しなくなった自らの経験を、(4)_4賀治は「バ

イエルの練習」の題で新たにオルガンを練習するようになった日常を綴り、自己紹介のコメントを寄せている³⁷。現窓口の堀においても、「ふだん記」参加の契機に新聞記事があったことを語っている。あいちグループではこのような新聞記事で知ったことを語る文友をみることができる。なお、(4)_2を語る細川は1991年3月頃の中日新聞で「ふだん記」を知った文友である。細川が〈あいちふだんぎ〉に初投稿をした24号(1991年6月)にはあいちグループ新人特集の項に46篇と多数の投稿が寄せられている。発表の場や活動の場を求めていた文友を受け止める場としてのあいちグループの姿が伺える。

表 21 あいちグループの語りにみる「ふだん記」から得たこと

インタビューでの語り	キーワード	出典
(5)_1「やっぱり生きがいがありますね。最初に新聞に載ったときに感じましたもんね。自分の文章がこの何百万人って人が見ているんだということを思うだけで」(新矢)	生きがい	調査 5
(5)_2『『ふだん記』で楽しんでいるうちに高年大学で勉強する楽しむ学校ができたの平成8年にそのときも『ふだん記』の仲間に(紹介され)、(…)、ほんなら入れるなど思っ て申し込んだ』(細川)	勉強する楽しむ 学校の紹介	調査 5
(5)_3『『ふだん記』に入ってよかったのはね、『ふだん記』のことで字が上手下手はさておいて、書くことができるんですね。』(細川)	書くことができ る	
(5)_4「みんなすごく優しくて親切だし、例えばこちらの痛みが分かってくれるような気がします。」(石川)	痛みがわかる	調査 5
(5)_5「家内工業を営んでいたときは、うちから出るのは本当に買い物に行くぐらいで子どもの学校行っているときは学校へ行くか、そのぐらいしか出なかったのが、『ふだん記』に入ってから外へ出ることが多くなりました」(高橋)	外へ出る	調査 5
(5)_6「同年代の人だと大抵そういう、きょうだいが戦死されたとか親が戦死したとかそういう話が多いんですね。そういうのを聞くと、まだ私は親も戦争くぐりながら全部まだ一緒に暮らせるようになったんですけど、幸せだったなと思って」(賀治)	戦争体験	調査 5
(5)_7「文を書くことによって、全国に文友さんができますし、読ませていただくし、そうすると会ってみたいくなるんですよ。この人はどんな人だろうとか、文を通して相手を想像しちゃうんですよ自分が、そうすると会ってみたいくなる。そうすると各地で集いがあるんですよ、交流会が。(…)不思議な魅力なんですけど、皆さんもそういう気持	文友さん	調査 5

ちで迎えてくださるんですよ。これは『ふだん記』以外にはないと思う。こういうつながりはないと思います。」(加藤)		
---	--	--

「ふだん記」参加後に「ふだん記」から得たことに関する語りをみると、書いたものを発表する場や何らかの活動の場以外としてのグループの姿が浮かび上がる。書く実践であるため、(5)_1 や(5)_3 のような書き、発表する場としての「ふだん記」以外にも、他の文友に関する言及が目立つ。例えば、(5)_2 の語りでは文友から紹介を受け高年大学において学ぶようになったこと、(5)_4 では自らの痛みをわかってもらえる存在としての文友という語りをみることができた。

書かれた文章を通じた他者への意識がみえるのは(5)_6 である。80代前半で自らも戦争の苦勞を体験していながらも、同年代の他者の戦争体験の辛さを読みながら自らの生を前向きに捉えるようにする考えが語られている。他にも、(5)_7 は、他者の文章を読むことやその文章を媒介に文通や出会いがあることを語ったものである。書き発表すること、「ふだん記」文化の重要な柱である、他者とのやり取りという文友の活動状況が浮かび上がる。

表 22 あいちグループに関する語り

インタビューでの語り	キーワード	出典
(6)_1 「橋本義夫先生の好きな言葉なんですけど、『その土地よかれ、その人よかれ』っていう言葉があるでしょう。全くその通り。私これは大好きですね。この言葉ね。」(加藤)	その土地よかれ	調査 5
(6)_2 「その土地よかれって言葉があるでしょう。だからあいちがあいち、われわれはこの地元で文章活動をしているんですよね(…)われわれはこの地に根差して、橋本先生の唱えた『ふだん記』運動をやっている。だからローカル、地域でやっていることが大事なのかな。自分がたまたまこの地方にいるからここでやっているってことだけですね、結果的に言えば」(堀)	ローカル、地域 でやる	調査 4

さらに、あいちの地であいちグループが活動する思いに関わる語りを取り上げる。(6)_1 は橋本義夫の言葉で好きな言葉を尋ねた時の語りである。(6)_1 では「その土地よかれ、その人よかれ」が挙げられた。様々な地方で生きる人々それぞれを重んじる言葉である。この言葉に関する語りは、窓口の堀へのインタビューでも聴くことができた。「ふだん記」の柱の一つであろう、それぞれの地方を重んじる理念への意識があることは推察できる。しかしながら、(4)_2 で「難しい」と回答されているように、あいちの地で活動をすること

への特別な意識があるかどうかについては確認することができなかった。だが同時に、〈あいちふだんぎ〉の 35 年・74 号分に掲載されてきた多くの「ふだん記」の文章には地元の日常生活に関する記述が数多くみられる(干場治彦「名古屋御園座かいわい」(12 号、1985 年 05 月)、干場治彦「ああ 名古屋驛」(14 号、1986 年 05 月)他)。これらから推察するのは、地元を特別な形で意識するのではなく、書き手が自らの暮らす生活の様子やそこでの考えを綴ることにより、結果的に自らの暮らす地方の文化を映し出す形となっているように思われる。

なお、「ふだん記」各地グループの中における、あいちグループの特長に関しては、あいちグループ文友の記述する「ふだん記」からも伺える。それが、思いを受け継ぐという点である。長期に渡り窓口を務め、あいちグループの礎を作った林常重、さらにはその後現在の窓口である堀やあいちの文友へと思いを繋いできたグループのあり方がさまざまな箇所から伺い知ることができるのである。例えば、表 22 中で引用した(6)_1 を語ったあいちグループの編集委員の一人である加藤慶子は、2009 年 6 月の 60 号誌にて、「先輩ふだんぎ一世と言われる方たちの存在は大きく、継続と力には敬意を表しています。時間は休まず追いかけて来ますが、襷を絶やさず次に繋いでいくことが、先人たちの恩返しとなり、私達の使命でしょう³⁸」と綴っている。「襷を絶やさず次に繋いでいく」と書かれているように、ここでもみえるのはあいちグループを繋ぎながら形作られてきたあいちグループのあり方である。

第 4 節 各地グループの意義

これまで、「ふだん記」北九州グループ及びあいちグループの実践を論じてきた。ここでは、補論 1 でとりあげた「ふだん記」各地グループの意義を論じたい。

第一に、取り上げた各地グループは何らかの活動をしたいという文友の思いを文章に書く形で受け止めた場であった点である。文友たちは「ふだん記」を紹介する本との出会い、友人・知人からの紹介、新聞記事の紹介などさまざまな理由で活動に参加しているが、語りの中では文章の発表の場がほしい、何らかの活動をしたいなどの思いが伺えた。

第二であるが、文友たちは「ふだん記」を文章の書く場であると同様に文章を読み・知り合う場ととらえていたことである。文友が「ふだん記」から得たことに関する語りを取り上げたが、文章を書く以外にも友人関係を得ることや他の人の文章を読むことに関する言及が少なからずみられた。文友たちは自らの文章を書くと同時に、それぞれ

が綴った文章を媒介にしながら他の文友の人生を知り、文友同士の交友関係を広げる役割として活用していた。

第三は「ふだん記」で書かれた文章が、それぞれの土地で生きた人々の「自分史」となっている点である。この点に関わり興味深いのは、今回の調査における文章の書き手は必ずしも地元を特別に意識していないようにみえたが、普段の自らの思いや生活を文章に書くことで、結果的にそこに暮らす人々の地域の文化を残すことにつながったことを見出せた。

なお、1980年代における書く実践には、他にも鈴木政子による「自分史」の実践がある。鈴木政子は1980年に『あの日夕焼け—母さんの太平洋戦争』（立風書房）を出し、自身と家族の戦争体験を綴る「自分史」を出す。鈴木は「わが子に書きのこすだけでいいはずだった体験記を、欲張って、みなさんにも読んでいただくことにしました³⁹」と「自分史」を出版した理由を綴っている。「自分史」を残し、かつ他者に読まれることを意識していることが伺える。鈴木はまた、鈴木政子『自分史—それぞれの書き方とまとめ方』（日本エディタースクール出版部、1986年）において、さまざまな人々の「自分史」を紹介しつつ、その書き方をまとめている。

書き手は自らのことを文章に書きたいと思い、書かれた文章は他者に読まれることで共感が広がっていることである。多くの書く実践が1980年代においても展開されてきたことが予想され、これらを明らかにしていくこともまた、重要な課題と思われる。

1980年代に創始された「ふだん記」の各地グループは、八王子で始まった「ふだん記」に共鳴し、それぞれの地で人々を受け入れながら書く実践を継続してきた。ここで論じた各地グループは、1960年代後半に創始された「ふだん記」の理念に共鳴しながら、1980年代以降において、それぞれの地で人々の生を綴る場の一つとなってきた意義があるのだと思われる。

小結

補論1では「ふだん記」北九州グループとあいちグループを対象に、実践を描出しつつ、意義を明らかにすることを目的とした。第1節においては先行研究及び、各地グループの概要を論じた。第2節では北九州グループ、第3節ではあいちグループを取り上げ、1980年代に創設された二つのグループの実態を追った。最後に第4節では、ここで取り上げた各地グループの意義を論じた。

戦後の書く実践の歩みにおいて、生活記録運動は1950年代に盛んになった運動であったが、以降も人々の書く実践は続けられてきた。特に、本章で取り上げた「ふだん記」各地グループは、1960年代に八王子で創始された「ふだん記」の理念に共鳴し、1980年代以降から現在に至るまで、それぞれの地元で人々の生を綴る場の一つとなってきたという意義が見いだせた。

補論1 注

- 1 北河賢三『戦後史のなかの生活記録運動 東北農村の青年・女性たち』岩波書店、2014年など。
- 2 ここで挙げた政府レベルでの取り組みの他にも、井口貢編著『入門 文化政策—地域の文化を創るということ』、ミネルヴァ書房、2008年などでは、比較的新しい取り組みとして、文化政策学に関する取り組みが示されており、京都・観光文化検定試験や、文化芸術創造都市づくりとしてのクリエイティブシティ・ヨコハマなどの事例が紹介されている。
- 3 辻智子「1950年代日本の社会的文化的状況と生活記録運動—生活記録運動の系譜に関する考察(2)」、〈神奈川大学心理・教育研究論集〉(29)、神奈川大学、2010年。猿山隆子「共同で紡ぎだす<知>—鶴見和子の生活記録運動にみられる不連続性をめぐって」、日本社会教育学会編『<ローカルな知>の可能性 もうひとつの生涯学習を求めて』日本の社会教育52、東洋館出版社、2008年など。
- 4 例えば、前述の北河賢三『戦後史のなかの生活記録運動 東北農村の青年・女性たち』では岩手、秋田、山形など東北において展開されていた生活記録運動を解き明かしている。
- 5 吉澤輝夫『自分史文化論』の試み」、吉澤輝夫編『現代のエスプリ 338 自分史』至文堂、1995年。
- 6 四宮さつき『十年—ふだん記と共に—』ふだん記本 50、ふだん記全国グループ、1976年、p.77。
- 7 橋本義夫『ふだん記の大道—その道標』ふだん記新書 70、ふだん記全国グループ、1978年、p.72。
- 8 前掲『ふだん記の大道—その道標』、pp.72-73。
- 9 橋本義夫『誰もが書ける文章 「自分史」のすすめ』講談社、1978年、p.168。
- 10 色川大吉『"元祖"が語る自分史のすべて』河出書房、2014年、p.63。
- 11 ふだん記北九州グループへのインタビュー、聞き手：川原健太郎、2015年9月5日実施、於：湖月堂(北九州市小倉)。なお、「ふだん記」はゆるやかなつながりのグループであることから、会員数は概数であることを付記したい。
- 12 川原洋子『「ふだんぎ北九州」十号までのあゆみ』、〈ふだんぎ北九州〉10号、ふだん記北九州グループ、1988年12月、pp.124-125。
- 13 「おたより集」、〈ふだんぎ北九州〉37号、ふだん記北九州グループ、2015年8月、pp.95-109。他には、橋本義夫他ふだん記運動に関連する人物が執筆した文章の抜粋集や表紙の写真、絵の解説なども入っている。
- 14 川原洋子は、川原洋子『筑紫の山脈・遠賀川』ふだん記新書 253、ふだん記北九州グループ・全国グループ、1993年)を出し、自身の自分史と「ふだん記」との関わりを記している。
- 15 川原洋子『「ふだんぎ北九州」十号までのあゆみ』、〈ふだんぎ北九州〉10号、ふだん記

北九州グループ、1988年12月、p.124。

16 前掲『筑紫の山脈・遠賀川』、p.65。

17 川原洋子へのインタビュー、聞き手：川原健太郎、2015年9月5日実施、於：川原洋子宅(北九州市小倉)。なお、ここで名前を挙げられた海端とは、長崎の島嶼在住の文友であり、「ふだん記」で色々な詩を発表する詩人でもある。

18 前掲『筑紫の山脈・遠賀川』、pp.65-74。記録は1978年9月28日まで残っていると川原は回顧している。

19 川原洋子へのインタビュー、前掲。

20 橋本義夫「下手に書いて、粗末に出す」、<ふだんぎ>創刊号、ふだんぎ北九州コロニー、1980年2月。会の規模を小さく始まっていたこともあり、創刊からしばらくは「ふだんぎ北九州コロニー」の名称でスタートし、徐々に北九州グループの名称になっている。

21 川原洋子「三年たって」、<ふだんぎ北九州>創刊号、ふだんぎ北九州コロニー、1980年2月、p.17。

22 倉田栄子「私とふだんぎ」、前掲<ふだんぎ北九州>創刊号、pp.9-10。

23 北九州グループ文友へのインタビュー、聞き手：川原健太郎、2015年9月5日実施、於：湖月堂本店(北九州市小倉)。

24 牛島和子『『ふだん記』との出会い』、<ふだんぎ北九州>9号、ふだん記北九州グループ、1988年3月、p.13。

25 牛島和子『『ふだん記』との出会い』、前掲<ふだんぎ北九州>9号、p.13。

26 志風忠義「できることは知れているけれど・・・」、<ふだんぎ北九州>9号、ふだんぎ北九州グループ、p.27。

27 石橋英子「毎日心待ちに」、<ふだんぎ北九州>6号、ふだん記北九州グループ、1984年12月。

28 ふだん記北九州グループへのインタビュー、聞き手：川原健太郎、2015年9月5日実施、於：湖月堂(北九州市小倉)。

29 「<ふだんぎ北九州>著作リスト創刊号から第37号まで」、「橋本義夫の『ふだん記』各地グループにみる地方文化運動の一研究 報告書」(研究代表者川原健太郎)、2015年度早稲田大学特定課題研究報告書、2016年2月。

30 <あいちふだんぎ>72号、ふだん記あいちグループ、2015年、p.116。発行部数は堀昌逸へのインタビューによる(聞き手川原健太郎、2015年12月4日、於：熱田図書館)。

31 加藤幸穂「ふだん記の流れにのって」、<あいちふだんぎ>9号、ふだん記あいちグループ、1983年5月、p.5。

32 加藤幸穂「ふだん記の流れにのって」、<あいちふだんぎ>9号、ふだん記あいちグループ、1983年5月、p.6。なお、宮崎信はふだん記あいちグループの創立者の一人、著書に宮崎信『日々の足あとから』ふだん記新書105、ふだん記全国グループ、1982年。「マスコミ」の記述であるが、あいちグループは新聞で取り上げられることも多く、その影響で会員が増えている。例えば、<あいちふだんぎ>(8号、1983年5月、pp.131-132)では「“自分史”を刻む『ふだん記』運動」(記事掲載日や掲載誌等の記載はないが、本誌の記述より1982年10月7日中日新聞と推察できる)の記事が掲載されており、反響の大きさが記されている。

33 堀昌逸へのインタビュー、聞き手：川原健太郎、2015年12月4日実施、於：堀昌逸宅(岐阜県羽島郡笠松町)。

34 堀昌逸へのインタビュー、前掲。

35 堀昌逸へのインタビュー、前掲。

36 橋本義夫「おどろいた『あいち』十一号」、ふだんぎあいちグループ、1985年6月、p.4

37 石川多寿子「日常」、賀治美知子「バイエルの練習」、<あいちふだんぎ>11号、1984

年 11 月。

³⁸ 加藤慶子「六十号記念特集『私とふだんぎ』」、〈あいちふだんぎ〉60号、2009年6月、p.33。

³⁹ 鈴木政子『あの日夕焼け』立風書房、1980年、p.167。なお、鈴木は北九州市の自分史文学賞第18回(2007年)に「わたしの赤ちゃん」で大賞を受賞している。

補論2 地域における学習・文化活動の受容過程に関する研究—北海道における初期「ふだん記」を対象にして—

補論2は1970年代の日本において学習・文化活動が地域に受容される過程を、北海道における書く実践「ふだん記」の草創期のあゆみを対象に明らかにしようとする研究である。

「ふだん記」の実践を全国各地において行うグループは各地グループと呼ばれ、「独立するが孤立しない」を理念に持ち、各グループが独立して執筆・出版活動を行いつつも、それぞれが相互に文友の投稿を読み、気楽に「コンニチハ」はがきを出し合い、交流会などに参加しつつゆるやかな連携を保ちながら運動を展開している。

補論2においてはこうした各地グループのうち、初期の北海道の各地グループを対象に取り上げる。なぜならば、2017年9月現在において、北海道では「旭川グループ」、「札幌グループ」、「江別グループ」、「ふだん記と自分史・ふだん記さいはてグループ」、「留萌グループ」、「帯広ふだん記の会」と他地域に例を見ないほどの多くの「ふだん記」各地グループが活動を行っており、他の地域に比して「ふだん記」文化が広がっているためである。

そこで、補論2においては北海道の「ふだん記」運動に着目し、中でも北海道の「ふだん記」運動の黎明期から初期の動向を明らかにすることを目的とする。各地グループの中でも、多くのグループが存在し活動が盛んな北海道に「ふだん記」がどのように受け入れられる素地が作られたのかを確認していきたいと考える。このことは戦後の北海道における書く実践や学びとその受容過程のあゆみの一端を示すことにつながると推察する。

「ふだん記」の開始当初の1960年代後半から文章を書くことは限られた文筆に関わる専門家だけのものではなく、誰もが文章を書き発表できるということに着目した「ふだん記」の実践は、ICTの発展により言葉を書き発表しやすくなった現代の状況のさきがけともみることができると思われる。こうした書く実践が各地に根付く過程をみていくことは、これからのメディアと人々のあり方を考える上でも現代的意義があるのではないだろうか。

こうしたことをふまえ、ここでは北海道における初期「ふだん記」の事象を概観し整理することを試みつつ、今後の北海道の「ふだん記」研究の端緒としたい。

研究方法は、さまざまなものが発行されている北海道の「ふだん記」に関する文献に着目した文献サーベイである。中でも補論2のテーマに関わりが深い、北海道「ふだん記」

の初期に発行されている史料を中心に取り上げる。さらに併せて北海道「ふだん記」に関わる関係者へのインタビューも交えながら論じる。

以下第1節において先行研究及び初期の北海道「ふだん記」関連史料を概観しながら、第2節においては、ここでの調査の概要に関して論じる。さらに、第3節では北海道における「ふだん記」の黎明期から初期のあゆみを論じたい。

第1節 先行研究

歴史学者の色川大吉は『ある昭和史』において、昭和史を「庶民生活の変遷から書き起こし、十五年戦争を生きた一庶民＝私の“個人史”を足場にして全体の状況を浮かび上がらせる」試みにより昭和史を描き出した。色川によるとここで提唱された「自分史」の概念は「ふだん記」から着想を得たという。その後、「自分史」は現在に至るまでの間各地に広がり、現在もなお、かすがい市民文化財団(愛知県)の日本自分史センターや、北九州市の自分史文学賞(2013年度まで。現在は発展・継承され林芙美子文学賞)など、さまざまな形で影響を与え続けている。

こうした「自分史」に限らず近現代史を記録するにあたっては、さまざまな形で歴史を残そうとする実践が重ねられてきた。その一つに、民衆史への視点がある。例えば『図書館雑誌』(75(8)、1981年8月号、日本図書館協会)では特集として、民衆史発掘・記録の運動と図書館を取り上げている。

そこでは、ルポライターの蒲田忠良による民衆史に対する視点が示されている。蒲田は「本来必要なのは、血の吹き出す感覚を抱えつつ地に埋もれている人々に視野を据えていく姿勢であり、そのことを先決とする積極的、“土着”的態度の獲得であるのではないのか。そのうえで広く各分野の人々と呼応し、作業の共同的検証をはかり、次には民衆像の本来的ダイナミズムの回復化をなしながらその普遍化・史的把握に努めることといえないだろうか²⁾」といい、さまざまな分野の人々との協働することや、民衆像の本来的ダイナミズムとそれを普遍化し、史的に把握しようとすることの重要性を述べている。

人々が生きてきた記録を残すことにはさまざまな方法があり、それを支える方法もまた多様である。前述の研究に関連したものでは、民衆の歴史と図書館の出版活動を、高知市の図書館の例に焦点を当てつつ論じた関根善二の研究³⁾や、川上賢一による「民衆史と言った場合、それは、人間が生きてゆく、生きてきたあらゆる側面の歴史、記録を指すのだろう、それは非常に多方面に渡っている。それを残し、記録してゆくことが、並大抵のこと

でないことが、地方の出版社の方々との付き合いの中でわかってきた⁴⁾といった地方出版との関係を論じた指摘もある。

北海道の民衆史を対象とした研究には、地域民衆史の掘りおこし運動の実践を行っていた小池喜孝によるオホーツク地域における取り組みがある。小池は「私たちは掘り起こした歴史を全体像の中に位置づけ、新しい歴史像として住民に還す。新しい歴史像を見た住民が、掘られた者の無念さを自分の痛みとしてとらえれば追悼の住民運動の条件が生まれるし、掘り起こした民衆の生きざまを敬慕するときには、検証運動を展開する条件が生まれるのである⁵⁾」といい、民衆史の掘りおこしを行うことにより生じるさまざまな連動した実践の広がりを見出す。さらに、小池は自らの民衆史の掘りおこしに関する実践を「掘る者」と「掘られる者」の相互深化であることも示しているが、一方で、こうした掘りおこし運動と研究の一体化に関しては課題であるともとらえている⁶⁾。

オホーツク民衆史講座の掘りおこし運動を、桑原真人・川上淳は次のように評している。「昭和40年代からの北見地方において、小池喜孝らが提唱した、『オホーツク民衆史講座』という市民的立場からの、歴史運動の台頭である。この運動は、屯田兵や士族移民、あるいは内地の巨大資本による北海道開拓こそが北海道近代史そのものであるといった視点を強く批判した。そして、関係者からの聞き取り(証言)と現地調査を通じて北海道開拓の陰に覆い隠されてきた囚人労働・タコ労働・外国人労働者の強制連行などにスポットをあて、北海道の近・現代史を再構成しようというものだった。この運動は、やがて『民衆史の掘りおこし』運動として全道的な広がりをみせてゆき、北海道史研究は新たな段階に入ったのである⁷⁾」。北海道史において、民衆史の掘りおこしに関する運動が行われつつ新たな研究の段階に入った状況にあるとするのである。

なお、社会教育分野での研究においても、こうした民衆史運動は取り上げられており、中川功は民衆史運動の停滞についての課題と同時に外国人労働者問題のことなどにも言及しながら期待がある状況を示している⁸⁾。

上記で取り上げた研究や実践等をみると、人々が生きてきた証を刻むことに対しては、多様なアプローチがあり得ることは伺えつつも、無数の人間が記してきた膨大な積み重ねからより多様な歴史の叙述や研究が待たれる状況にあることが推察できる。

こうしたことを鑑みると、市井に暮らす人々が自然に自らのことを書き、雑誌や書籍などの形で残す「ふだん記」の実践は、開基150年を数える北海道のあゆみの中でも、近現代史研究をより拡大・深化させ得る存在としての可能性を見出せるのではないかと考えら

れる。

第2節 初期北海道「ふだん記」関連史料及び本研究に係る調査

本節では、はじめに北海道の「ふだん記」初期に関連する史料をいくつかの種類に分けながら概観していきたい。

第一は、「ふだん記」北海道の前史ともいえる橋本義夫の北海道訪問を収めた、橋本義夫『北海道紀行』、八王子文化サロン、1967年である。この書は、1967年6月に初めて北海道を訪問した記録をまとめたものである。北海道の各地を訪問した際の印象などが綴られているが、その中には教育学者の留岡清男と橋本の関わりや、橋本の北海道の教育論なども書かれている。橋本の北海道へのとらえ方をうかがい知ることができる史料である。

第二は、1970年代から80年代にかけて発行された『北海道のふだんぎ』である。このうち、橋本義夫編『北海道のふだんぎ』第1号(ふだん記全国グループ、1977年11月)は、北海道における各地グループのうち、最初に発足した士別グループ(1977年6月)が機関誌<士別のふだんぎ>創刊号を発行する以前に、橋本義夫や四宮さつきらにより、ふだん記北海道グループの名を付した形で発行された、「ふだん記」文友たちの文集である。さらに、ふだん記旭川グループ編(斎藤和、土田ひろえ、岡田勝美担当)『北海道のふだんぎ』第2号(『ふだん記』士別グループ、『ふだん記』北見さいはてグループ、『ふだん記』旭川グループ、『ふだん記』全国グループ、1982年11月)がある。これは、道内最初の各地グループである士別グループ(1977年、現在は活動終了)及び、北見市を中心に活動するさいはてグループ(1979年)、旭川グループ(1980年)誕生後に発行された。本書は、1982年6月に旭川で開催された「ふだん記」の北海道大会の記録や大会での橋本義夫の話、文友による大会参加の記録や、文友と北海道をテーマにした文集(「私と北海道」)や、文友の随想などが収められている。

第三は、近年の北海道各地グループ文友による北海道の「ふだん記」のあゆみをまとめた『北海道のふだん記』があり、2冊の書が発行されている。①池田晶信、岡田勝美、佐藤美恵子、岩渕敏江、名取善子、松崎拓郎編(斎藤道子、岡田勝美総括)『北海道のふだん記 歴史(年表) 出版目録』(ふだん記旭川グループ、2013年)は、北海道の「ふだん記」運動をまとめた歴史年表と出版目録である。年表は、1958年から2013年までの北海道の「ふだん記」に関する年表がまとめられており、出版目録は、北海道の「ふだん記」で出された書籍(ふだん記本、ふだん記新書、ふだん記創書、ふだん記叢書)の1972年から2013

年までの一覧がまとめられている。なお、この書籍一覧の点数を数えると、263 点にのぼる。最初の各地グループである士別グループ発足の 1977 年より、発行が途切れず継続されていることがわかる。さらに、ここでは本稿に関わる箇所を抜粋しまとめた。あわせて参照されたい。



▲北海道の各地グループで発行されている機関誌

表 23 北海道における「ふだん記」発行の書籍の点数(1972年から2013年)

年	点数	年	点数	年	点数	年	点数
1972	1	1985	12	1995	9	2005	8
1976	1	1986	9	1996	13	2006	9
1977	1	1987	7	1997	7	2007	7
1978	2	1988	12	1998	10	2008	5
1979	2	1989	7	1999	10	2009	5
1980	5	1990	6	2000	6	2010	6
1981	1	1991	10	2001	7	2011	2
1982	12	1992	4	2002	7	2012	4
1983	12	1993	5	2003	12	2013	3
1984	7	1994	8	2004	9	計	263

*池田晶信、岡田勝美、佐藤美恵子、岩淵敏江、名取善子、松崎拓郎編(斎藤道子、岡田勝美総括)『北海道のふだん記

歴史(年表) 出版目録』、ふだん記旭川グループ、2013年、pp.13-20より作成。

さらに、池田晶信、岡田勝美、佐藤美恵子、岩渕敏江、名取善子、松崎拓郎編『北海道のふだん記 グループの歴史(年表)』(ふだん記旭川グループ、2013年)もあり、こちらは北海道の各地グループ、ふだん記と自分史・ふだん記さいはてグループ、旭川グループ、留萌グループ、札幌グループ、江別グループ、帯広ふだん記の会)それぞれの年表がグループ毎にまとめられている。

第四に、橋本義夫とともに、「ふだん記」の草創期から運動を支え続けてきた四宮さつきによる『十年』のシリーズがある。これは北海道の各地グループはもとより、「ふだん記」全体のあゆみを知るうえで重要な史料であるが、北海道の「ふだん記」に関しては、1976年から1980年の歩みをまとめた四宮さつき『続十年 一ふだん記と共に一』(ふだん記本79、ふだん記全国グループ、1984年)と1981年から1985年までをまとめた四宮さつき『続々十年 一ふだん記と共に一』(ふだん記本140、ふだん記全国グループ、1994年)の2冊の中で記されている。

第五に、北海道の各地グループそれぞれにより発行されている機関誌がある。各グループから非常に多くの点数の雑誌が刊行されており、文集であるとともに多くの文友が創始の頃を振り返る記事が掲載されていることから、初期の北海道「ふだん記」を知ることのできる貴重な史料となっている。

以上、北海道初期の「ふだん記」を知ることのできる史料を概観した。発行された本が263点と多数であることなども含め、北海道「ふだん記」に関する史料は少なくないため、これらについては次節において漸次取り上げていくが、ここで取り上げたものは一部に留まっていることもあわせて言及しておきたい⁹。

また、補論2に関わる調査の全容についても、若干の言及を加えておきたい。当該研究は、2016年度から2018年度までの研究プロジェクト「戦後地方文化運動の実証的研究—「ふだん記」各地グループを対象として—」(JSPS 科研費(基盤研究(C) 研究代表者 川原健太郎、課題番号16K04572)の研究の一部であるが、この研究プロジェクトでは北海道で活動を行っている各地グループに訪問取材を行っている。2016年度には旭川グループ、札幌グループ、江別グループに対して訪問調査を実施した¹⁰。(なお、2017年9月にさいはて(北見)、帯広、留萌の各グループへの調査を行っている)。

なお、北海道における「ふだん記」の各地グループ研究にあたっては、色川大吉による重要な指摘がある。色川は、北海道「ふだん記」に関して次のように述べる。「橋本さんが

亡くなって、それでも『ふだん記』も終わりだろう、と言った人もいたのですが、その後も『ふだん記』は全国二七カ所で各地ふだん記として、それぞれ自律的に継続され、北海道などでは会員が倍増したりしています¹¹⁾。色川の指摘のように、北海道では現在もお、「ふだん記」の中でも特別な広がりを見せているのである。

表 24 初期北海道のふだん記の動向に関する年表

年	北海道「ふだん記」の動向	備考
1967年	6月橋本義夫北海道へ初の訪問。	*
	10月橋本義夫『北海道紀行』（八王子文化サロン、1967年）発行。	*
1968年	1月「ふだんぎ」創刊(1号)	*
1975年	8月23日 色川大吉先生、初めて士別を訪れる。「全体史と自分史のはざまで一民衆史の研究」→斉藤昌淳：士別ふだん記運動を始めるきっかけとなり、展開するための原動力となる	
	11月8日 斉藤昌淳、八王子のふだんぎ交流会「逢う日・話す日」に初めて出席→士別ふだんぎ創設へ拍車がかかる	
1977年	5月8日 士別ふだんぎ発足(高橋、渡辺、斎藤の三人)*全国で3番目・北海道で最初	
	6月18日 四宮さつき来士→士別グループできる	
	11月30日『北海道のふだんぎ』第1号発行	
	12月4日ふだん記10周年逢う日・話す日(八王子商工会議所)に斉藤昌淳出席	
1978年	2月26日『士別のふだんぎ』創刊号発行	
	6月25日橋本義夫、足立原美枝子、金井ゆき子の3人が八王子より来士 士別の「逢う日、話す日」	
	7月末日士別グループ解散の危機	
	8月6日新生「士別ふだんぎグループ」12名	
1979年	2月12日北見に さいはてグループ 誕生(窓口・真貝四郎)→七月に真貝氏が来士している	

	2月1日『さいはてふだん記』創刊号発行	
	7月士別市の開基80周年に「自分史年表」を全戸配布(士別グループ提唱)	
	8月24日色川大吉先生講演「自分史を書くということ」(士別グループ主催)	
1980年	8月30日旭川グループ誕生(岡田勝美)	
	9月14日『旭川のふだん記』創刊号(45頁)を持参し、斎藤昌淳が八王子大会に参加	
	11月8日旭川で初のふだん記集会(13名参加)	
1981年	2月1日『旭川のふだん記』2号発行	
	4月『さいはてのふだん記』7号発行	
	「ふだん記・春の集い」(初のふだんぎ全国大会)開催 大阪・中之島中央公会堂にて。140名集まる(大阪、四条畷、関西グループ共催) *旭川から今野春雄、士別から浅利甲、北見から真貝四郎が参加	
	8月9日ふだんぎ北海道集会(旭川市民文化会館)(北見、旭川、士別グループ合同)	
	11月八王子大会に士別の佐藤四郎、北見の吉田邦子、旭川代表の今野春雄が参加 この時、チラシと旭川観光パンフを持参(斎藤昌淳の代理で娘の道子が出席)	
1982年	4月1日北見グループで「自分史年表」発行	
	5月2日色川大吉先生の講演「自主憲法と押し付け憲法」(士別グループ主催)	
	6月1日岡田勝美がNHKテレビ「北海道の窓」で「ふだん記」を紹介	
	6月8日旭川大雪婦人会館で“ふだん記全道大会”の打ち合わせ	
	6月19~20日旭川市で「全国ふだん記北海道大会」開催(斎藤昌淳司会)174名出席⇒*全国大会は大阪について2回目於:旭川商工会議所→“新人類文化ここにはじまる”と!(橋本義夫)	

	→*留萌、札幌、富良野、江別…帯広グループ誕生へと促す。	
	6月21日さいはてのつどい(橋本先生を招いて・北見経済センター) 北見集会・町田とさいはて、姉妹グループとなる	
	6月『士別のふだんぎ』10号発行	
	9月留萌ふだんぎグループ発足(窓口 渡辺シゲ)	
	10月10日『さいはてのふだんぎ』10号発行	
	10月26日『留萌のふだんぎ』創刊号発行	
	11月1日『北海道のふだん記』第2号発行(旭川グループ編集、士別・北見さいはて・旭川・全国グループで発行)	
	12月札幌グループについて相談(柴田豊子、峯垣文雄、菅野博子、高田美喜男の4人が集まる)*岡田勝美、慶子夫妻の札幌グループ発足への積極的な働きかけがあった	
1983年	1月23日中原和夫の働きかけで札幌ふだんぎグループの発足へ向けて打ち合わせ(北見の真貝四郎、中原和夫、柴田豊子含め十五人程が集まる。岡田勝美にも声をかけるが都合で欠席)	
	2月札幌ふだんぎグループ発足	
	5月15日『札幌のふだんぎ』創刊号発行	
	7月富良野グループ発足(窓口・尾野美代子)、創刊号発行…4号で解散(86年)となる	
	10月30日旭川で北海道窓口会議(第1回)を開く (札幌、留萌、北見、士別、旭川の17人参加*富良野欠席)	
	12月9日士別図書館に「ふだん記コーナー」を作る(3万円の図書箱寄贈・斉藤20冊ほど納入)	
1993年	江別グループ発足*札幌グループ結成に大きな役割を果たした中原和夫が中心となり、江別の文友が結集して札幌グループより独立し、江別グループを発足させる	
1996年	1月30日『留萌のふだんぎ 歩み』第1号発行(*留萌グループ、前年解散後、再出発)	
	『江別のふだん記』創刊号発行	

2002年	帯広ふだん記の会発足	
2003年	『帯広のふだん記』創刊号発行	

*池田晶信、岡田勝美、佐藤美恵子、岩渕敏江、名取善子、松崎拓郎編(斎藤道子、岡田勝美総括)『北海道のふだん記 歴史(年表) 出版目録』、ふだん記旭川グループ、2013年より抜粋。備考欄の*は一部加筆を行ったもの。本年表は、全国ふだん記北海道大会開催までの1982年までと、その後の各地グループ結成に関する事項に限定して記載した。

第3節 初期北海道「ふだん記」の歩み

第1項 橋本義夫と北海道

北海道における「ふだん記」運動の展開の前史として言及しておきたいのが、橋本義夫の1967年6月の北海道訪問である。「ふだん記」の機関誌である〈ふだんぎ〉の創刊は1968年1月であり、「ふだん記」運動が本格的に展開されていく以前の時期であった。当然ながら北海道における「ふだん記」の展開と比しても、前の時期であるが、この訪問は直接の北海道訪問から醸成された、橋本義夫の北海道観を形作る契機の一つとして注目できる。

橋本がこの訪問をまとめた『北海道紀行』(1968年10月)には、橋本の北海道滞在の記録とともに北海道に対して感じた事柄を率直に綴っている。中でも北海道観を「北海道観を書いておこう。約百年で『よくこれまでやったものだ』と先づ関心する¹²⁾」と書き、厳しい自然に立ち向かいながら地域を形作ってきたことへの感嘆を示している。加えて、北海道滞在中厚別の高校の校長と話したという教育論も記録している。5点を挙げているが、そのうち一つには「技術は変化し来り、変化してゆく運命をもつ。既存の上に安住せず、未知なるもの前に希望をつなぎ、これと取り組み、新しいものをあみだし、前進すること¹³⁾」と述べている。開拓やフロンティア精神と重ね合わせながら、新しいものを生み出す地であろうとすることへの期待を持っていたようである。

北海道に「ふだん記」が芽吹き始めてからも、橋本は「旅行もせず、故郷に近い土地に住んで動かない編者が不思議に北海道だけには心が傾いて六十余年変らない。近代日本になって後、何らかの未知、何らかの夢を蔵しているからであろう。日本に何かの未知や夢を持つ土地は他にない¹⁴⁾」と書いているように、こうした思考を一貫して持ち続けていたことがうかがえる。ここから、橋本が後の北海道「ふだん記」の隆盛に期待を寄せることになる思想的萌芽を見出せる。

橋本が北海道に持つ期待に対して、旭川グループの窓口であり、北海道「ふだん記」発

展のキーパーソンの一人である岡田勝美は「橋本先生がふだん記運動の普及期の中で、北海道の人間に対して、このような期待を寄せ続けていたであろうことは疑えないと思います。第二回目の北海道訪問で、士別という小さな市のグループの招きに応じて直ぐおいでになったのも、以上のような気持ちが強く動いていたのではなかろうか¹⁵」と推察している。

橋本は前述の書でも未知や夢という言葉を使い表現しているが、少なからず新しい文化を生み出すことへの期待を抱いていたようにうかがえる。こうした点と「ふだん記」に何らかの共通性があるのではないだろうか。このことは橋本義夫の提唱する「ふだん記」の理念の一つである「新人類文化」(新・人類文化)と北海道「ふだん記」の関わりをも想起させる。

第2項 斉藤昌淳と士別グループ

北海道に「ふだん記」が生まれる直接の契機として挙げられるのが、「ふだん記」士別グループを創始した眼科医、斉藤昌淳(故人)である。本項では、斉藤昌淳のご息女である斉藤道子(「ふだん記」札幌グループ)へのインタビュー¹⁶を交えながら、北海道に「ふだん記」を興した中心人物である斉藤昌淳の側面から「ふだん記」の北海道での端緒をみていきたい。

北海道では初、全国でも3番目となる士別グループ立ち上げは1977年5月であるが、その背景にはその以前から斉藤昌淳の文化運動への視座があった。士別の開業医であった斉藤昌淳は、医師であると同時に地域文化への深い関心を示し、士別に文学学校を立ち上げ、市民向けの講座を開講していた。

斉藤道子によれば、斉藤昌淳による取り組みは北海道の文学の発展や士別の町の中でも文学に親しみ、豊かな文化に繋がたいとする着想により、有志3人で市民のための文学学校を立ち上げ講師として道内で活躍している作家・評論家などいろいろな人物を招聘しながら講座を開いていたものであったという¹⁷。士別での文芸活動を広げていく意味で一定の成果はあったようであるが、一方で活動の広がりという点では課題もあったようである。そうした中で出会ったのが「ふだん記」であったという。斉藤道子はこのように語っている。

「文学学校を開きながら『士別文芸』も発行していましたが、一般の人たちからの原稿が集まらず3号雑誌に終わっています。そういうときに、橋本先生の『ふだん記』を新聞

で見て、文芸誌に必要なのはこれだという勘が働いたようです。それで、橋本先生にすぐにお手紙をあげたらしいんですよ。多分自分のやってきたことと、今の自分の思っているのを手紙に書いて。そしたら橋本先生から早速返事が来た。互いに共鳴し合うものがあったのでしょね。(・・・)色川先生とも交流を持つようになって。そこから本当に『ふだん記』、そしてあと色川先生を通して自分史というものを父は意識していったと思いますね¹⁸⁾。

北海道「ふだん記」のあゆみには1975(S50)年8月23日に色川大吉が初めて士別を訪れたという記録が残っている。さらにその後1975年11月8日には、斉藤昌淳が八王子での「ふだん記」グループの交流会である「逢う日・話す日」に出席し、さらに1977年6月18日には橋本義夫とともに「ふだん記」を支え続けた中心人物である四宮さつきが士別を訪問し、士別グループの発足へとつながっていく¹⁹⁾。

当時の記録を、参加した文友の一人である渡辺いとこの記録をみると次のような記述がみえる。「昭和五十二年六月十八日、午後五時より八時まで、士別斎藤先生の大広間において、八王子の四宮さつき様をお迎えした。参加二十名近く、四宮様とは斎藤先生以外は皆初対面でしたが、どなたにも十年の知己に逢ったような、親しみと温かさを見せて接しられるお姿に感動いたしました。人々の緊張の心をほぐし、自然に心の輪に溶け込んでなごやかな雰囲気を作りつつ、目的のふだん記に付いて初心の人に解りやすく、どなたにも書く意欲を湧せる熱意に満ちし言葉に、熱心にメモを取る人、一口も聴き洩さずと全身を耳にしている人、此の大きな力に感激し、私なりに勉強になり、期待に沿えるよう努力して行きたいと決意を新たにしました²⁰⁾」。

「ふだん記」の持つ下手でもいい、誰もが書けるという考え方が熱意をもって伝えられ、それを聴き自らが書く原動力にしようとする文友の空気がこうした記述からも読み取ることができる。士別グループはその後翌年の1978年1月に創刊となり、その後の1982年6月の全国ふだん記北海道大会(於：旭川)を迎えることになる。

なお、斉藤昌淳と「ふだん記」に関する取り組みとしては、北海道への「ふだん記」文化発展や士別グループの他に、特筆すべき点がある。それが、士別市における自分史年表の全戸配布の取り組みである。旭川グループ窓口の岡田勝美は、こう綴っている。「斎藤さんのふだん記との関わり方は、一種の地域おこしの運動にふだん記の理念を活用した点にあるのではないかと思います。士別という屯田入植地の地域の歴史を、地域ぐるみ、街ぐるみで掘り起こし、その活動のエネルギーを現在の地域おこし、文化的土壌の深化発展に

つなげようとしたと言っただけでよいのかと思うのですが、その斎藤さんの努力は士別において目ざましい成果をもたらしました²¹⁾。これは、斎藤昌淳の地域に文化の土壌を発展させようとする意向について述べたものであるが、こうした視点は前述の斎藤道子のインタビューからも読み取ることができる。

その具体的な取り組みというのが、士別市における自分史年表の全戸配布である。これは1979年に開基80年記念事業として、「自分史」を配布したものであるが、「ふだん記」士別グループが提唱したものである。こうした「自分史」に力を入れる取り組みは以後も続いており、1999年の開基90年記念事業士別市史抄「私たちの歩み」、開基100年記念事業「自分史ノート」を全戸配布、さらに2016年3月には「私の記録 自分史ノート」が全戸配布されているなど²²⁾、士別の文化をそれぞれの人々の叙述から残していくという。

斎藤昌淳がもつ「自分史」や地域の歴史への視座は、士別の地域史叙述の発展に深くかかわっており、これは貝沢正編集による北海道二風谷の地域誌である『二風谷』²³⁾との関わりからもうかがうことができる。

こうした「ふだん記」のつながり、士別の自分史文化の発展からは、地域のキーパーソンと「ふだん記」の邂逅を契機とした、地域を記録する文化の芽生えとその受容・発展の過程を見出すことができる。

なお、北海道における初期の「ふだん記」各地グループには、他にも1979年2月の「ふだん記と自分史・さいはてグループ」(北見市、窓口・真貝四郎(当時))及び、1980年8月の「ふだん記旭川グループ」(旭川市、窓口・岡田勝美)がある。北海道「ふだん記」の初期に設立されたこれらのグループは、30年以上を経た2018年現在もなお活動を続けている。

第3項 「ふだん記」北海道大会の開催

初期の北海道「ふだん記」のあゆみの中で、北海道に「ふだん記」運動が広がる契機の一つに挙げられるのが、1982(S57)年6月19日から20日に旭川にて開催された「全国ふだん記北海道大会」の開催である。北海道はもとより、創始者の橋本義夫の参加もあり174名出席の会であった。この会は、上記に挙げた初期の3グループが北海道の各地で作ってきた素地がさらに広がる契機となった。

大会を象徴すると思われるのが、会場に掲げられた「新人類文化北海道に創まる」の横断幕である。この中にある「新人類文化」の言葉は橋本の説明によれば、機械化の進展に

伴う大きな社会変化で人間が不要になりつつある中、人々が「惜しみなく知恵をしぼり、試み、努力を払うべきである。『新人類文化』はその文化のことを云う。これはみんなで創りあげねばならぬ、絶対至上命令なのである²⁴」ということである。誰もが文章を書き、自らのことを書き残し歴史として積み上げる「ふだん記」のあり方に通底する考え方が、人工知能の深化や機械学習、ディープラーニングの問題がクローズアップされている現代においても、人間とコンピューターの在り方を考えるうえでの示唆を与えるものとも思われる。北海道の地に誰もが書くという新しい文化を根付かせようとする大会開催時の関係者の意志を伺うことができる。

北海道大会に関して、大会後に橋本はこうまとめている、「既成概念がない。そこ(北海道：引用者)に育った文友達が、まだ見ぬ新しい、まだ見ぬ本州の多くの文友さんを、十ヶ月も心を込めて支度して待っていたのである。その間、折なす文通が津軽海峡を往来したのである。『ふだん記北海道大会』には、それだけの多くの文友の心と、友情との長い結ばれの上に時が与えられたのである²⁵」。橋本が繰り返すのは、新しい文化を生み出そうとする地域の風土と、「ふだん記」により庶民が執筆することで生み出される新しい叙述の文化の重なりである。

北海道大会の成果は、文友たちに受け入れられながらその後に広がりを見せる。例えば大会の同年1982年9月に発足するふだん記留萌グループの初代窓口となる、渡辺シゲの記録にはこのようにある。「生きるよろこびを発散しているユニークな会に参加させていただきほんとうに楽しかった。(・・・)毎日鉛筆を持つことはむずかしいものである。原稿用紙に向かってすらすら書けない。名文、美文を書こうとする意識が、しらずしらずにうごめくからだろう。『文章の書き方』という本を何冊も買い、手当たり次第に読んでみた。どれも読むほど劣等感がつのる。しかし、橋本先生の本だけはわたしに書く気をおこさせた。(・・・)おみやげにいただいた櫻の苗は無事に活着してよろこんでいる。この苗木にあやかって『ふだん記』留萌グループも発足したいものだとねがっている²⁶」。こうした北海道の文友からはその後の「ふだん記」発展への動きとなっていた。札幌グループの創刊時窓口を務める柴田豊子もこの北海道大会に参加し、その後札幌へのグループ立ち上げを志向しつつ、峯垣文雄、菅野博子、高田美喜男、のちの江別グループ窓口となる中原和夫らの名前を上げながら立ち上げた経緯を、<札幌のふだん記>創刊号(1983年5月)に綴っている²⁷。

全国の文友が集った北海道大会が一つの結節点となり、その後新たなグループの立ち上

げにつながり、その後のグループ立ち上げを経て現在もなお、北海道では全国の中でも最多となる6つの各地グループが活動を続けられている。

小結

本稿では北海道の「ふだん記」運動を対象に、特に北海道の「ふだん記」運動の黎明期から初期の動向を対象に地域における学習・文化活動の受容過程をみた。最後に北海道における初期の「ふだん記」成立やその後の北海道における「ふだん記」の広がりを形作った要素と思われるものをまとめた。

第一は橋本の北海道観と「ふだん記」文化の結節である。「ふだん記」の創始者橋本義夫は、北海道の持つ新たな文化を生み出そうとする風土を感じ、なおかつここに庶民が自由に文章を執筆する新たな文化を生み出そうとする「ふだん記」と重ね合わせて、期待を込めていたことがうかがえる。第二には、地域のキーパーソンと「ふだん記」文化の邂逅である。「ふだん記」には創始者橋本義夫以外にもさまざまな「ふだん記」発展に関わるキーパーソンがいるが、北海道初期の「ふだん記」においても、士別、北見、旭川など各地において「ふだん記」を芽吹かせるキーパーソンが「ふだん記」や「自分史」と出会い、北海道各地で運動を興したことは、北海道における「ふだん記」文化の多様性を支える原動力となったと推察する。

第三は「ふだん記」のような誰もが文章を書くという文化に共感し、集った文友たちの存在である。「ふだん記」の運動を通して自らのことを書き残そうとする人々が多く集ったことは、「ふだん記」が運動として広く展開するにあたり重要であったと思われる。

第四に、「自分史」を記すことに対する人々のまなざしの強さである。士別における自分史年表に象徴されるように、北海道の「ふだん記」の初期の受容過程においては特に「自分史」を書くことへの側面への共感が随所にみることができた。この点は北海道が開基150年という中で、北海道に渡った人々が自らのルーツを近く感じられる環境にあることも影響を及ぼしているのではないだろうか。

補論2 注

1 色川大吉『ある昭和史 自分史の試み』中央公論社、1975年、p.4。

2 蒲田忠良「民衆史を発掘・記録することの意味」、<図書館雑誌>75(8)、日本図書館協

会、1981年、pp.441-442。

³ 関根善二「民衆の歴史と図書館の出版活動」、〈図書館雑誌〉75(8)、日本図書館協会、1981年8月、p. 454。

⁴ 川上賢一「民衆史発掘と地方出版」、〈図書館雑誌〉75(8)、日本図書館協会、1981年8月、p. 456。

⁵ 小池喜孝「北海道における民衆史掘りおこし運動」、〈図書館雑誌〉75(8)、日本図書館協会、1981年8月、p. 450。

⁶ 小池喜孝「オホーツク民衆史講座」、『岩波講座 日本通史』別巻2、岩波書店、1994年、pp.229-245。

⁷ 桑原真人、川上淳『北海道の歴史がわかる本』亜璃西社、2015年、p.181。

⁸ 中川功「北海道開拓と民衆史運動(北の大地からくらしを拓く<特集>)」、〈月刊 社会教育〉34(7)、国土社、1990年7月、pp.19-24。

⁹ 例えば、「ふだん記」や橋本義夫と北海道に係る文章や各地グループの動向を収めた、士別・北見・旭川・留萌・札幌・富良野・道内ふだん記六グループ編『橋本義夫と北海道』ふだんぎ本97、ふだん記旭川グループ・ふだん記全国グループ、1985年や、旭川グループ窓口の岡田勝美氏の北海道「ふだん記」に関する講演等を収めた、岡田勝美、谷口三郎編『橋本義夫とふだん記運動』、ふだん記旭川グループ、2003年、岡田勝美氏の「ふだん記」に関する文章をまとめた、岡田勝美『「ふだんぎ」にひかれて』ふだんぎ本114、ふだん記旭川グループ、1988年などがある。

¹⁰ なお、インタビューでは窓口への個人インタビューと文友のグループインタビューを実施している。

¹¹ 色川大吉『“元祖”が語る自分史のすべて』河出書房、2014年、p.63。

¹² 橋本義夫『北海道紀行』八王子文化サロン、1967年、p.27。

¹³ 同前。

¹⁴ 橋本義夫「編集後記」、橋本義夫編『北海道のふだんぎ』第1号、ふだん記全国グループ、1977年、p.92。

¹⁵ 岡田勝美「橋本義夫と北海道におけるふだん記運動」、〈旭川のふだんぎ〉38号、ふだん記旭川グループ、2002年7月、p.149。

¹⁶ 斎藤道子インタビュー、聞き手川原健太郎、2016年9月6日、於：センチュリーロイヤルホテル札幌(北海道札幌市)。

¹⁷ 斎藤道子インタビュー、聞き手川原健太郎、2016年9月6日。

¹⁸ 斎藤道子インタビュー、聞き手川原健太郎、2016年9月6日。

¹⁹ 池田晶信、岡田勝美、佐藤美恵子、岩淵敏江、名取善子、松崎拓郎編(斎藤道子、岡田勝美総括)『北海道のふだん記 歴史(年表) 出版目録』ふだん記旭川グループ、2013年、p.2。

²⁰ 渡辺いと「逢う日」、四宮さつき『続十年 一ふだん記と共に一』ふだん記本79、ふだん記全国グループ、1984年、p.37。

²¹ 岡田勝美「橋本義夫と北海道におけるふだん記運動」、〈旭川のふだんぎ〉38号、ふだん記旭川グループ、2002年7月、p.153。

²² 「私の記録 自分史ノート」、2016年3月発行。士別市ホームページにて書式をダウンロードできるようになっている。

<http://www.city.shibetsu.lg.jp/www/contents/1459127542916/index.html>

2017年9月10日閲覧。

²³ 新井かおり「アイヌの集落が自らの歴史を語り始めること―貝澤正が編集する地域史『二風谷』の到達―」、〈応用社会学研究〉(54)、立教大学、2012年。この中で7.1『二風谷』誌を可能にしたもの(p.233)において、貝沢が『二風谷』誌の実践を進める中で「ふだ

ん記」や自分史の運動からヒントを得たこと、貝沢が斎藤昌淳から自分史年表を取り寄せていたことなどを指摘している。また、斎藤道子「貝沢正と士別の自分史年表」、〈さっぽろ市士別ふるさと会情報誌〉(28)、2013年。において、士別市役所庶務課と斎藤昌淳宛てでそれぞれ1980年1月11日、1月18日に送られていた手紙に関して写真とともに掲載している。

²⁴ 橋本義夫「新人類文化ここに創まる」、橋本義夫著(岡田勝美編)『「新人類文化」のすすめ』ふだん記新書130、ふだん記旭川グループ、ふだん記全国グループ、1983年、p.73。

²⁵ 同前、pp.74-75。この回想の執筆は1982年7月12日の記録が残っている。おおよそ大会終了後1か月時の回顧である。

²⁶ 渡辺シゲ「感想」、ふだん記旭川グループ編(斎藤和、土田ひろえ、岡田勝美担当)『北海道のふだんぎ』第2号(『ふだん記』士別グループ、『ふだん記』北見さいはてグループ、『ふだん記』旭川グループ、『ふだん記』全国グループ、1982年11月、p.85。

²⁷ 柴田豊子「編集後記」、〈札幌のふだん記〉創刊号、ふだん記札幌グループ、1983年5月、pp.85-88。

結論

(1) 研究目的及び分析の視角

本論文は、明治維新以降の東京西部・三多摩における地域社会教育の歩みを、「自分史」という視点から研究し、「自分史」の源流を明らかにすることを目的とする研究である。

「自分史」は、1980年代以降に出現し、近年、執筆ブームとも言われる「自分史」であるが、社会教育実践の代表の一つとして位置づけられてきた。その原型は、三多摩南西部に位置する八王子の実践家・思想家・教育家である橋本義夫により1960年代後半頃に創始された、庶民の文章運動「ふだん記」(ふだんぎ)であるといわれる。色川大吉も、「ふだん記」を「自分史」の一つの源流と見なしている。そうであるとしたら、「ふだん記」は、発祥の地である三多摩のどのような土壌から生まれたのであろうか。

本論文では三多摩地域に軸足を置き、明治維新以降約150年に亘る時代の中で繰り広げられてきた多様な草の根の学習・文化活動の水脈の上に「ふだん記」が生まれ、これを受けて「自分史」の活動が展開されていったとする仮説を立て検証してきた。中でも本論で注目したのは人々の文章表現活動であった。例えば同人誌、機関誌、新聞投書などの書く実践が明治期以降豊富に展開されている。そして、明治維新以降の三多摩における地域社会教育の歩みを、「自分史」の源流という視点から研究し、人々はなぜ自らのことを書くのか、社会教育はそうした人々にどのような歴史的な役割を果たしてきたかをみることを目的とした。

本論文の分析の視角は以下の通りである。

第一に、本研究は三多摩地域における学習・文化活動を、社会教育史の文脈に位置づけ、とりわけ社会教育実践史として描くことにある。本研究では社会教育実践を、社会において展開される人間相互の学び合いや成長に関わる学習活動と広くとらえたい。

その意味で「ふだん記」には自らの来歴を知り、書くことによる自己教育だけではなく、他の文友の書いた「自分史」へ共感することによるお互いのエンパワーメントなど、さまざまな社会教育実践の要素が含まれている。

しかしながら「ふだん記」の広がり大きさの大きさに比して、社会教育研究の中で取り上げられることはほとんどなかった。「ふだん記」には無数の草の根の声がつつられているが、多くの文章がこれまで研究面では未着手となってきた。これらを発掘し検証することで、戦

後社会教育像の新たな側面を解明し、三多摩における地域社会教育史に新たな角度から示唆を与えることを企図した。

第二に、本論文では、とりわけ文章を書くといった自己表現の実践に重点をおいて論じてきた。「自分史」を書く行為は、書き手の内に潜在してきた思いを表出することを意味する。「自分史」は必ずしも歴史の表舞台に描かれてくることのなかった草の根の人々が、自ら見つめ書き残し人生の証を後世に伝えようとする意欲の発露である。また、「自分史」を書く人々や、「自分史」を書くことを励ます人々はいかようにして生まれたのかということは、「自分史」の成立に関わる疑問として浮かび上がる。

そこで本論文においては、人々がなぜ書くことを通じての自己表現へ向かうのか、そこに介在するのはどういったファクターかという分析の視角から論を進め、その上で、三多摩地域における「自分史」を中心とした草の根の学習・文化活動を検証し、地域社会教育実践史として描いてきた。

第三に、本論文での考究の対象は、いわば公的な社会教育活動ではなく、むしろ草の根の社会教育実践ともいえるべき学習・文化活動である。

本論文は近代以降の三多摩における草の根の地域社会教育史を跡づけようとしており、行政の範疇で実施される公的社会教育とは異なる領域を論じていく。広く社会における人間の学びは、近世からも継承されてきたのであり、三多摩では多様な学びが展開されてきたものとして把握してきた¹⁾。

(2) 各部の概要

以下では、第1部から第4部までで論じてきたことをまとめ、得られた知見を整理しつつ、結論を述べたい。

本論文では、上記の問題意識と仮説にしたがって、4部17章及び二つの補論の構成で考察を行った。要旨は以下の通りである。

①第1部

第1部は近代三多摩の出発点の時期であり、三多摩の近現代史において最初に学習・文化活動の熱が高まった時期である自由民権期に着目し、そこで展開されたさまざまな学習・文化活動を対象に検討した。第1章では、近代三多摩を俯瞰した。北多摩、南多摩、西多摩と三つの地域から構成されている近代の三多摩は、いわゆる都市近郊地域であったが、農村地域の特徴をもまた色濃く持ち、都心部とは異なる地域性があることがうかがえ

た。近代における三多摩の就学率をみると、都心と隣接しているものの、就学率は全国平均と比べても高い水準とはいえ、必ずしも学校教育は先進的に整備が進められてはいなかったことも推察できた。

続いて、第2章では自由民権運動下の学習・文化活動を対象にした。自由民権運動は主に1874年の民撰議院設立建白書の提出から1881年の明治十四年の政変にピークを迎えた政治運動として知られる。これに伴って政治以外にもさまざまな分野で多くの学習・文化活動が展開されている。民権運動が高まっていた三多摩では多数の結社の活動に示されるように多くの実践がみられた。第2章では三多摩の自由民権運動の中でも、五日市憲法という本格的な私擬憲法を生んだ西多摩・五日市地域の学習・文化活動を対象に取り上げ、社会教育史に位置づける試みを行った。第1節では三多摩における自由民権運動の概要を確認したが、三多摩は全域に存在する豊富な学習結社の存在があり、自由民権運動の下での学習・文化活動の展開を伺うことができた。第2節では西多摩の五日市を対象にし、文化を育んだと思われる地域風土に着目しながら学習・文化活動の姿に迫った。五日市は、地域外から来た人々が集う地域であったこともあり、五日市憲法起草の中心人物の一人、千葉卓三郎も五日市に流れ着いた。そのことから、五日市の地域性は多様な学習・文化活動展開の遠因となりえたと推察できた。第3節では五日市の勸能学校や、社会問題をテーマに豊富な討議が展開されていた学芸講談会を取り上げた。これらの活動は参加していた青年の成長に影響を及ぼしうるものであり、社会教育実践としての意義を持つことが明らかになった。

第3章においては、学習・文化活動に内在する人々の学習意欲に迫るため、学ぶ場が生み出される原動力を、地域外の人物を中心に論じた。対象としたのは仙台から三多摩に流れ着いた青年である千葉卓三郎である。五日市憲法起草のキーパーソンであった千葉の人生遍歴を追いながら三多摩の学習・文化活動との出会いとそこでの成長を論じた。第1節で焦点を当てたのは千葉卓三郎の遍歴である。千葉は戊辰戦争の敗北を契機に放浪をすることとなったが、物理的に地域を移っただけではなく、精神的面でも放浪者のようにさまざまな思想に触れながら学び続けた。千葉の自由民権運動に出会うまでの過程を示した。第2節では、仙台からの流入者であった千葉卓三郎が五日市に受け入れられた理由の考察を深めたが、そこには地域の開放性が影響していた。第3節では千葉が地域に果たした役割を取り上げた。学芸講談会に関わり五日市憲法を起草した千葉が、会の意見集約などのまとめ役となっていた。第4節では千葉の思想に着目し、千葉の言説と五日市で展開され

ていた議論とが重なりあうことを確認できた。第5節は、五日市と千葉の結びつき、例えば民権運動を通じた千葉と五日市の邂逅など、さまざまな人々の結びつきから結果としての私擬憲法・五日市憲法が生み出されたことをみた。以上から、千葉卓三郎は五日市にとって触媒の役割を果たす存在であったことが確認された。五日市のケースにおいては、千葉という個人の成長とともに、五日市の人々による受け入れや、私擬憲法を生み出すに至った熱意において、学習を通じた社会への理解の深まりや憲法への理解など、学びの要素をみることができた。

第4章では、人々の学びに寄与してきたと思われるメディア、中でも地域との結びつきの観点から地方新聞を取り上げた。対象は明治末期の調布地域の地方新聞である週刊多摩新聞であり特に着目したのは、読者からの発信や交流の場になっていた投稿欄である。投書は出版手段を持たない人々にとり、自らの意見を文章にして発表する上で重要な役割を果たしていた。

第1節では、明治期の三多摩における地方新聞の概況や全国的な動向も確認した。第2節では、週刊多摩新聞の及んだ地域の範囲や新聞の性格を、大新聞との比較を通して分析した。第3節では読者投稿欄に着目した。地域密着型のメディアの地方新聞は地域の情報を提供する役割だけでなく、大新聞では投書欄が縮小される流れの中、週刊多摩新聞においては活発になっていた点に特徴がみられた。同時に、書きたい意欲を持つ草の根の人々が存在していることもまた認められる。このような過程をみると、地方新聞は文章を投稿する人々の学びに向かう意欲を支えることができる役割を帯びていたことも確認した。

第1部を通観してみられるのは、近代の出発点にあたる時期に、多くの学習・文化活動が展開され、社会教育実践が生まれ育つ素地が芽生えていたことである。三多摩は自由民権運動が活発であった全国有数の地であり、数多くの学習結社も組織されていた。中でも、五日市では地元の人々の学びへの熱意と共に、外から人物を受け入れ、意見を交わしながら学びあう姿がみられていた。

さらに、第1部で取り上げた週刊多摩新聞の事例は、この時期の学びの実践が民権運動に関わる一部の人々によってのみ行われていたわけではないことを示すものであった。投書欄に書かれた多くの投書は、それ自体小さいつづやきであり、組織的に活動し大きなうねりとなるものではなかった。しかし、何らかの意見表明を発信したい人々が草の根に多数存在していることを表していた。

②第2部

第2部では大正デモクラシー期の地域文芸誌の研究、さらに明治末期から大正初期にかけて開設された私塾・奚疑塾に関する研究を行った。大正デモクラシーは、1910年代頃から始まった主に大正期を中心とする民主主義運動であり、政治に関する普通選挙運動はもとより、自由主義を重んじる風潮によりさまざまな学習・文化活動が展開された。この時期は三多摩において、自由民権運動に続く学習・文化活動の隆盛期と位置付けることができる。

第1章では大正デモクラシー期の青年たちによる書く実践を対象に検討を進めた。焦点を当てたのは南多摩・稲城における地域文芸誌である〈せゝらぎ〉、〈谷戸川〉、〈大丸同窓会誌〉である。文章に記されている人々の考え方などをとりあげつつ、地域での学びの姿に迫ることを試みた。第1節では大正デモクラシー期の学習・文化活動に関連する先行研究を取り上げた。第2節はこの時期の三多摩における文芸誌の大要の整理である。ここでは大正デモクラシーの自由闊達な意見を述べる機運が高まっていることを背景に、三多摩各地で数多くの文芸誌が発行されていることを論じた。第3節においては、稲城の青年による地域文芸誌の文章に視点を当て、青年たちによる学習・文化活動への思いや活動のありかたへの提言など、書き手である青年自身の言説から学びの姿を追った。地域文芸誌に収められている作品は、創作の作品であるが現実における社会的問題をテーマして創作しているものも少なからずみられ、創作の形を取りながら、社会に意見を発信していきたいとする書き手の情熱を見出すことができるものであった。加えて作品の創作に関しては会員相互で紙面を通じての意見交換などで青年たちが学びあう姿も確認できた。

第2章では、明治から大正にかけて稲城に開設されていた私塾・奚疑塾を対象に地域通俗教育の視点から、近代における私塾を論じた。第1節では奚疑塾が開設された背景として、奚疑塾開設時期の私塾に関する動向や、稲城の地域状況を確認した。近代以後も私塾が依然残されており、近代に入ってから設立された奚疑塾には自由民権運動の影響がみえること、地域ぐるみで塾を支える環境になっていたことが確認できた。

第2節では、奚疑塾の教育の目的や理念を示した。奚疑塾の目的の一つに経済的な理由で教育が受けられない人も中等教育の機会を提供することが掲げられていたことや、塾の創始者自身が私塾を学習者の自己研鑽の場と考えていたことが伺えた。第3節では奚疑塾が地域に果たした役割を考察した。奚疑塾は三多摩を中心にしつつも寄宿制度により広く塾生を集め、多数の同窓生を輩出していたこと、女子教育の役割も担っていたことが確認でき、地域の教育機会拡大に寄与していたことが明らかにされた。さらに、学習方法では

それぞれが自主性を持ち学習に取り組む自己教育の方法を取り入れられていたこと、塾に関わった人たちの書簡からは塾生たちの支えあいの姿もみられた。これらを鑑みると、奚疑塾は地域における学校以上の存在であり、学校教育と通俗教育の役割を併せ持つ塾であった。

第3章では、学習者の側面から私塾の奚疑塾の同窓生に焦点をあてた。同窓生の動向をみることで、私塾の学びが青年にもたらした影響を考察することが目的であった。第1節では、既存の近代私塾に関する研究の文献調査を行い、第2節では奚疑塾が多くの同窓生を生んだ背景と奚疑塾の同窓生の足跡を取り上げた。さらに、同窓生の学びや足取りをみることから浮かび上がってきた奚疑塾の役割は次のとおりである。1)中等教育以降の学びを続けたい人にとっての予備校、2)地域の政治経済のリーダーや教育者といった人材輩出、3)塾で学びたい人の自己研鑽の場。これらをみると奚疑塾は、地域に基盤を置く多様な機能を持つ教育機関であったと捉えることができよう。

第4章では、奚疑塾の教育方法の一端をみるため、奚疑塾に所蔵されていた錦絵を対象に取り上げ錦絵の持つ視聴覚教育メディアとしての意義を検討した。第1節では明治期の錦絵の概要を把握し、先行研究の到達点と限界を取り上げた。錦絵は明治期には衰退期とされるが、技術的には円熟していたことや、庶民に人気の高いメディアであり興味を集める力があつたことを確認した。中でも庶民の楽しみであるとともに、情報伝達の機能を持っていた。第2節では奚疑塾の教育方法と教育内容を取り上げた。奚疑塾の教育は教養を重視した基礎教育が中心であった。教育内容をみると、歴史に関する学習や、問答などの方法で学んでいることが浮かび上がった。第3節では、奚疑塾の錦絵を取り上げた。錦絵の題材を整理すると、歴史やニュースに関する錦絵が多く収集されており、教育的な意図を持って集められていたものであった。第4節では奚疑塾所蔵の錦絵の内容に着目した。歴史が題材となった錦絵でも通史的な把握が可能なものと、時代別のものの双方があり、視覚的に歴史を学ぶことができる錦絵が多かったことや、塾での教科書の主題が錦絵にされているものも所蔵されていた。さらに、同時代の事件や世相などを描いた錦絵は、日常生活ではみることが難しい事柄を主題にしたものが収集されていた。これらの錦絵はいずれも視覚的な側面から学習を支えることが可能であったことを示すものといえよう。

以上により、奚疑塾の錦絵は一般的に流通していた錦絵の主題傾向とは異なり、教育的な意図を持って収集されたこと、かつ歴史に関する事柄や文明開化などの内容を視覚的に知る、視聴覚教材の役割を果たしたことが明らかにされた。奚疑塾に集められた錦絵の資

料群は、視聴覚教育の先駆的存在であり、視覚によって新たな知識獲得の可能性を広げ得ることを提示している。

第2部では、地域青年文芸誌と私塾から自由民権運動後の三多摩における学びの実践活動を考察した。前者の地域青年文芸誌は、青年の学びに向かう意欲が形となった文章を収載し、これを読みあう実践であった。創作作品だけではなく、創作の形を取りながら書き手の意見表明をしている作品が収載されている点を特徴として挙げられる。ここでみられたのは、書き手それぞれに内在する思いを文章化すること、掲載された文章を読みあうことなど、青年たちの創作活動を通じた地域での学びの姿である。地域青年文芸誌からは、地域の中で書き続ける実践が、この時代においても息づいてきたことがわかる。

後者の奚疑塾の実践からは、地域での青年の学習の場として私塾を位置づけることができた。近代以降の私塾は学校の役割を帯びていた側面も持つが、本研究で取り上げた奚疑塾の事例では、学校だけの役割を果たすに留まるものではなく、小学学齢後の青年に所得や性別などには関係なく多様な形で学びを提供していた。中でも、錦絵の活用など独特の教育方法を取っていたことは特筆に値する。

この二つの事例は文芸誌と私塾と形態は異なっているものの、前者は人々が作品を書き発信できる場、後者は小学学齢後も継続した学びができる場であり、学び手の学習熱を受け止めていた場が、地域で一定の役割を果たしていたことを示唆するものである。

③第3部

第3部においては戦中から戦後初期における三多摩の社会教育実践の展開を論じた。中でも、戦後直後期の青年の学習・文化活動に焦点をあてながら、文化への熱が高まる状況下の青年の学びに向かう意欲に迫ることを試みた。

第1章では戦中における三多摩の社会教育を取りまく状況を取り上げた。社会教育団体の組織化など、社会教育でも戦争の影響が垣間みられ、三多摩の社会教育でもこの影響から免れ得なかったことが、稲城や府中の青年教育の事例からうかがい知ることができた。第1節では戦中の社会教育の概要を論じた。主に戦時態勢に即応した社会教化活動の強化や社会教育の体系的整備が進められていた。第2節においては、三多摩における戦中の社会教育に着目した。三多摩においても個別の事例は別にしても、むしろ青少年団の組織化など、戦中の社会教育のうねりの中にあることを確認した。さらに東京に近い立地の影響もあり多くの軍需工場が置かれている状況もみることができた。工場に設置された青年学校が学習機会を拡大したプラスの側面もあったが、一方で戦争の色彩の濃い点も内包して

いる。

第2章からは戦後直後期に軸足を置き、戦後の出発の時期に三多摩の社会教育実践がどのように展開されていたかを論じた。第2章では戦後の稲城地域を対象に、1940年代後半における青年による学習・文化活動の事例に関して証言を交えて活動内容を論じた。第1節では、南多摩・稲城を対象にし、地域状況を取り上げた。そこでは、稲城地域においても戦中の状況からは変化を迎え、学習・文化活動への期待の高まりとともに、地域が重要な社会教育実践の場となりつつあったことを確認した。第2節では稲城村青年団を取り上げ、戦後の新しい時代を迎えた中、文化国家建設の目標を掲げつつ活動に臨む青年の意欲をみる事ができた。第3節では地域密着型の美術鑑賞サークル「美を語る会」を検証した。この会は地域の人々の沙龙的な活動であり、青年団とは異なる静かな文化への期待を持つ会であった。第4節は「美を語る会」に関わりのある青年たちに焦点を当てた。有力者のサロンという会の性質がある一方で、少なくない青年層の参加があり、サークル活動への関わりがその後の人生に影響を持っていたことを指摘した。第5章では小規模サークルの事例を取り上げた。サークルでの学びが参加者にとり一過性の活動の意味にとどまらない価値ある学びであったことも伺えるものであった。第6節では、青年教員による演劇及び人形劇の事例を、活動をしていた人々の楽しみの活動であったと同時に、鑑賞する地域の人々にとっても娯楽として意義あるものであったことを確認した。

第3章では、戦後直後期の文献コレクションであるプランゲ文庫に収載された資料群を対象に青年の社会教育実践に関する研究を、小規模の出版物を対象に行った。そこではプランゲ文庫収載の出版物に記された青年たちの言葉から戦後直後期において、書く実践に携わってきた人々の姿をとらえるよう努めてきた。

第1節ではプランゲ文庫の大要把握につとめた。特にその概要と収録誌の分野を取り上げた。プランゲ文庫にはこれまでの資料群を越える相当数の資料が収載されており、そのため青年の学習・文化活動に関連する資料が一定以上収められていることを確認した。

第2節ではプランゲ文庫に収められた資料を取り上げながら、当時の活動に関わる人々の思いなどを読み取った。対象は青年団、学校、労働組合、地域でのサークル活動であった。出版物から、学習・文化活動の概要及びそこにおける考え方をみたが、いずれにせよ敗戦を経験した直後であり、これからの国を文化によって創り出していこうという強い思いは総じて共通していた。青年が関わる出版物のうちいくつかを形態別に取り上げた。それは、戦中と異なり文化に期待を持ちながら活動が行われていた青年団の団報、新しい学

校での教育に対する考え方や科学を意識した生徒活動への取り組み、労働組合での作品の巧拙を意識しない創作活動などである。いずれも戦後直後期の文化への渴望が高まっていた時代背景の中、希望を抱きつつ文章を書き記していることを確認した。

第3部では、戦中から戦後直後期にかけての学習・文化活動を、三多摩における書く実践の取り組みを取り上げながら論じた。戦後直後期の学習・文化活動の隆盛は、新しい時代の到来とともに文化への期待の高まりがあり、三多摩でも多様な社会教育実践が展開される下地が作られていたことを示唆するものであった。

④第4部

第4部は、戦前、戦中、戦後の三多摩を生きた八王子の実践家である橋本義夫及び「ふだん記」を対象とした研究である。「ふだん記」をめぐる理論と実践を解き明かしながら、「自分史」の起源を再検証することを目的とした。

第1章では、橋本義夫に関する先行研究を概括し、橋本の社会教育実践家の側面を論じた。第1節においては、橋本研究の端緒を開いた色川大吉ほかの、「ふだん記」や「ふだん記」以外の橋本の実践に焦点を当てた研究を整理し、先行研究の到達点と課題を論じた。そこで見出されたのは橋本や「ふだん記」は、社会学や文化人類学、歴史学などで取り上げられ、研究対象としての意義があることが示されてきた一方で、社会教育実践の視点からはこれまで論じられることがほとんどなく、未達の分野であることもまた浮かび上がった。第2節では橋本義夫、「ふだん記」に関わる主な資料に関して論じた。第3節では橋本の人生遍歴をみつつ、橋本の取り組んだ実践を社会教育として読み解いた。学校での経験には失望を感じていた橋本であったが、学校を出たのち青年の学習運動への参加、書店・揺籃社の設立とそこに集う人々との交流、さらにこのつながりから生まれた教育科学研究会の実践など精力的に学習・文化活動に取り組んでいた。戦後に入ってから橋本は地方文化運動、建碑運動、さらに三多摩の地方文化に関する執筆活動などを行ってきたが、地域の記録を文章などさまざまな形で残すようつとめた実践であり、これらはいずれも「ふだん記」の創始につながっていることを確認した。

第2章では「ふだん記」をめぐる橋本の言説を研究対象に、学習論としてまとめた。第1節では「ふだん記」の出発時の概要と、人々に受け入れられながら活動を拡大していく姿に迫った。第2節では、橋本の文章執筆に関する言説をまとめ、鍵概念の抽出をした。第3節ではその鍵概念を学習論としてまとめた。橋本の学習論は実践の中で確立してきたものであり、「私でも書ける、書けない者なし」、「下手に書きなさい」、「文章は手紙にはじ

まる」、「だれでも本が作れる」などの「書く思想」により成り立っていることがわかった。

橋本の学習論は万人教育主義、易行道主義、平等主義、地域主義として見出すことができた。これらから伺えるのは「ふだん記」の執筆における橋本の学びや活動の普及に関する考え方、さらに多くの人々が文章を書く実践に参加できるように支援しようとする考え方である。第4節は「ふだん記」に関わる橋本の学習論の中でも、特に重要であると思われる易行道に焦点を当て、橋本が「ふだん記」の普及にあたり参照したとする書を取り上げながら「ふだん記」の背景にある易行道の考えを探った。第5節では、こうした「ふだん記」の理念がどのように文友たちに受容されたかを文友の語りから明らかにした。

第3章では、橋本自身や、参加した30代の人々が書き記した「ふだん記」の文章を分析することにより、「ふだん記」にみられる青年論を実証的に解き明かそうと試みた。「ふだん記」には、青年の学びへの思いがあらわれているものであった。第1節では、橋本の青年期の学びを追った。橋本の青年に対する思いの出発は、自身が学校時代において経験してきた挫折とそれがもたらす劣等感が根底にあったことを見出すことができた。第2節では、橋本の雑誌連載記事、「青年版『ふだん記』のすすめ」の分析を通じて橋本の青年論に迫った。橋本は「ふだん記」の書き方を示しながら、実験の重視や、恐れずまず活動をすることの重要性を説いていた。さらに橋本の教育論は、被教育者の得意な事柄をまずみつけて、その部分を指導して伸ばすこと等も含んでいた。橋本は青年を含めた「万人の可能性」を徹底的に信じており、発見し、伸ばすことを意識していた。さらに青年が可能性を伸ばすための具体的方策の一つに「ふだん記」を執筆することを考えていた。

第3節は「ふだん記」に参加した若年層の文章の分析により、橋本の青年論に関する具体的な活動の姿を追うものである。さまざまな遍歴を経験してきた人々の「ふだん記」には、「ふだん記」により若者の可能性が伸ばされていたこと、文章執筆の実践によって新たに移り住んだ地域に関する愛着の念が生まれたことが示されている。また詩が好きでありながらこれまで経験できなかった人が詩を書くことで創作の力に気付いたこと、生まれながら一つの地域に暮らしていた青年が改めて自らの地域の良さに気付くこと等、それぞれの執筆から成長の姿を見出すことができた。

第4章では、「ふだん記」をナラティブ（語り）の視点から考察した。「ふだん記」の書き手と、橋本による相互のやり取りにより「ふだん記」の物語が完成する過程は、まさに「ふだん記」がナラティブとしての意義を持つことを示している。第1節ではナラティブをめぐる諸相を先行研究から示し、第2節では、ある「ふだん記」本が完成するまでの過

程を、書き手と橋本の手紙などのやり取りから分析した。

第5章では、書く実践がどのような意味を書き手にもたらすのか、書き手へのインタビューと書かれた文章から実証的に検証した。第1節においては、書き手の長い人生の中で書く実践がどのような影響を及ぼすのかという分析の視角を示し、第2節では調査概要をまとめた。第3節では、ライフストーリーとの関わりから、4人の「ふだん記」文友を取り上げ、自らの生きてきた来歴の文章化は、それぞれの生き方にポジティブな影響をもたらしていることを明らかにした。

第6章は「ふだん記」の作品と、「自分史」として書かれ、あるいは論じられている作品の比較研究である。「自分史」の源流を探る本研究のまとめとして、「ふだん記」と「自分史」の内容を比較し、「ふだん記」が「自分史」であることを再検証した。

第1節では、「ふだん記」及び「自分史」のさまざまな定義を確認し、「自分史」は社会の大多数を占めている市井の人間それぞれが自らの手で書き記した歴史のことであることを論じた。第2節は「自分史」の語の起こりを整理した。「自分史」は色川大吉の造語であるといわれるが、その語が生まれた念頭には「ふだん記」の存在があった。第3節では、「ふだん記」、「自分史」ともに単に事実のみを羅列するものではなく、執筆者の考え方を入れながら書き進めるべきであるとされていることが共通点であることを論じた。

第4節では「ふだん記」運動への参加者の手による「ふだん記」本を具体的な対象にして分析した。「ふだん記」には「自分史」そのものが描かれており、「ふだん記」は「自分史」の直接の原型であることがわかった。「ふだん記」は、すでに社会教育実践として評価されてきた「自分史」と同様に社会教育実践の範疇に組み込んで考察すべきであることを本章では明らかにした。

第4部では、橋本の思想や実践、戦後1960年代後半から創始された書く実践「ふだん記」を実証的に解き明かすことを目的としてきた。浮かび上がったのは、三多摩における地域文化に育まれた橋本が創始した、「ふだん記」に賛同した多くの草の根の人々が書くことへの意欲を持ちながら文章を書き続け、「自分史」の創出につながっていったことである。

なお、第4部の末尾には、「ふだん記」の実践を全国で行っている各地グループを対象にした論考を補論として置いた。各地グループは三多摩から地理的に離れているものの橋本や「ふだん記」の理念に共鳴しながら活動を行っていることが伺え、三多摩発祥の書く実践の文化が、全国で独自の発展を遂げていることを示す重要な証左となるといえる。

補論1での研究対象は、1980年代に創始された二つの各地グループ、「ふだん記」北九

州グループとあいちグループである。第1節では各地グループの概要、第2節では北九州グループ、第3節ではあいちグループを、それぞれ論じた。第4節では各地グループの意義に関して述べている。

補論2においては、北海道における各地グループの初期の活動を対象にした。北海道の各地グループは全国各地に広がっているグループ活動をみるうえで特に重要な存在である。なぜならば、道内だけで六つ（旭川、札幌、江別、北見、帯広、留萌）と最多の数を誇っており、なおかつ道内の各地グループの集まりである全道交流会など、活発な実践を行っているためである。ここでは、「ふだん記」が北海道に芽吹き、根付くまでの初期の北海道「ふだん記」を追い、学習・文化活動の広がり进行を考察している。これらの補論は、三多摩の水脈の上に培われてきた「自分史」の表現活動が、全国に普及していることを示し、さらに書く実践の今後の展開に示唆を与えるという意義がある。

（3）結論と課題

最後にまとめとして、本論文の結論について述べ、今後の課題を述べておきたい。

第一は、近現代三多摩の約150年にわたる地域社会教育の歩みを俯瞰すると、様々な学習活動が出現し、学習活動の中でリーダーが育ち、そのことでさらに新たな学習活動が展開するといった学びの循環が見いだされることである。明治期以降、橋本が戦後に創始した「ふだん記」に至るまで、三多摩では明治期の学習結社での討論、大正期の小学学齡外者を対象にした私塾、戦後直後期のサークル活動などが展開され、地域は時代の変遷にも変わらず学びの場となってきた。たとえば奚疑塾の創始者である窪全亮は、三多摩の自由民権の薫陶を受けつつ育ち、活動を展開し、さらに自身も多くの人材を生み出している。

また八王子で生涯を送った橋本義夫は、三多摩地域の薫陶を受けながら育ち、自身も多様な学習・文化活動を興してきた。中でも、三多摩の地域文化に着目しながらそれらの掘り起こしにつとめ、顕彰碑の建立や三多摩の歴史を研究し書き残す実践に取り組むなど、三多摩の地域文化に関心を寄せていたことは、注目すべき点であった。橋本がこうした執筆活動から、「私でも書けるのだから、誰でも書けるだろう」と庶民の文章運動の創始を着想したことも、重要なことと指摘できよう。換言すれば、橋本を育てたのは三多摩の地域社会教育実践の蓄積という土壌にあったのである。

こうした三多摩における学習活動の積み重ねが実践家、思想家、教育家といった学びのリーダーを生み出し、そこからさらに多様な活動が生まれるという学びの好循環が三多摩

には生まれてきたといえよう。

第二に、三多摩における近現代の地域社会教育史をみると、いわば基盤として「書く思想」が醸成されていたことである。本論文においては多様な学習・文化活動を事例に取り上げてきたが、中でも、自らの思いを文章にして伝える活動は、文章の種類や発表する媒体に関わらず、各時期でみることができた。

例えば、地方新聞の投書欄、地域文芸誌、戦後直後期の各種のミニコミ、60年代の「ふだん記」などの事例はそれを裏付けるものである。新聞投書欄では意見の投書が、地域文芸誌では文芸作品が、戦後直後期のプランゲ文庫に収められているミニコミでは文化活動の記録などが、さらに「ふだん記」では自分の来歴や身の回りの生活が、それぞれ書かれていた。いずれも文章の形態は違っていたが、自らのことを客観的に見つめ直し、社会の中で位置づけ、文章にすることは共通して根底にみるができる。

書く実践は、人間の内面に潜在化し沈潜していた学びに向かう意欲を文章という形にして顕在化し、時代を超えた思いを紡いできたともいえる。書く実践が各時期に存在し続けてきたことは、同時に、近現代の三多摩地域において、人々の直接の声を表出する場が、ありつづけてきたものと考えることができよう。三多摩では書くことで、人々がつながり、いわば「書くコミュニティ」が形成され、三多摩の文化的な土壌の中で脈々と受け継がれてきたことに他ならない。

明治期、大正期、戦後直後期の書く実践は、「ふだん記」、さらには「自分史」へと継承され、小林多寿子の言葉を借りれば「綴る文化史²⁾」の流れは続いてきたのである。また、「ふだん記」においては、文章を書くこととともに、その文章を出版し読まれることが重要な要素となっている。「書くコミュニティ」とともに「読むコミュニティ」が「ふだん記」の活動を支えてきた。その点、人の書いた「ふだん記」を読むという「読むコミュニティ」が三多摩においては長年の実践の中で形成される土壌があったことが大きい。また「自分史」の源流を考えるうえで、三多摩という地域における文化的な土壌、そこにおける「書くコミュニティ」と「読むコミュニティ」の形成は看過できない事象であるといえる。

また第三として、橋本の学習論の根底に「書く思想」があることを明らかにした点である。本論文では、橋本の作品を学習論の観点から分析を行い、橋本の学習論は実践の中で確立してきたものであり、「私でも書ける、書けない者なし」、「下手に書きなさい」、「文章は手紙にはじまる」、「だれでも本が作れる」などの「書く思想」により成り立っていると論じた。

また「書く思想」について、万人教育主義、易行道主義、平等主義、地域主義を見いだした点も、本論文の成果として挙げておきたい。書けない人を書けるようにすることが、「ふだん記」の目的であったが、本論文では、こうした「書く思想」の根源に迫ろうと試みた。

四つのキーワードが示す姿勢を持ち得ていたからこそ、橋本は草の根の人々の書く実践において第二の生産者としての役割を果たし、人々の学びを支え、やがてその潮流が、全国的な「自分史」の発展へとつながっていったのである。

第四は、「自分史」の源流として「ふだん記」があることを再検証した点である。小林多寿子によれば、「ふだん記」運動は、「自分史」という言葉を誕生させ、「自分史」が後半に広がる素地を開拓した文章運動である³。また、色川大吉の『ある昭和史』が「自分史」という概念を創出したこと、そして「ふだん記」を「自分史」という概念に連結させたことを、指摘している。

本論では、「ふだん記」と「自分史」で取り上げられている作品を対象として取り上げ比較しながら、「自分史」の直接の原型が「ふだん記」にあることを明らかにした。「ふだん記」では書き手が自身のことを書く際に、単に事実の羅列ではなく、自分の意見を書いたり、また社会的な事象と自分とを結びつけながら書くなど、「自分史」の作品に通じる点が多々ある。その意味で「自分史」の源流は橋本義夫の「ふだん記」にあることが再発見されたとも言えよう。

第五は、橋本が中心となって展開した「ふだん記」の活動を、社会教育史の中に位置づけて論じた点である。従来、社会教育の中では橋本の活動について、断片的な研究はあったものの、その業績に比して十分に系統的には論じられてこなかった。三多摩は戦後に限ってみても、60年代の三多摩テーゼ、あるいは国立公民館に代表される公民館活動など、社会教育実践の蓄積が豊富な地域である。しかしながら、どちらかという公民館活動を中心とする実践に目が向けられ研究も多く、橋本の「ふだん記」は、社会教育の領域において正面から論じられてくることが少なかった。

本論文においては、三多摩の地域社会教育史、社会教育実践史の中に位置づけて、橋本を中心とする「ふだん記」を論じた。そのことで、三多摩地域社会教育史を、より豊かなものとして描き出すことが可能となった。

本研究では、「自分史」の源流を三多摩における地域社会教育の歴史的な文脈から探求し

てきたが、課題もまた残されている。

第一に、自らのことを文章に書いた人々は、その学びを経てどう成長していくのか、その側面を十分に展開できていない点である。本論文では、「ふだん記」を書く人々に焦点をあて、インタビューを行い文章の内容や書き手の変容を論じてきた。しかし、一部の人が示すことができなかった。

今後、「ふだん記」だけに留まらず、80年代以降にブームとなっていた「自分史」などを含めて、書くことによって人は何を学び、変容し、成長していくのかに関する研究は課題の一つとして残されている。

第二の課題として、三多摩で展開された各々の実践の関係性や連続性、すなわち活動を牽引した人々の関わり合いや、周辺で参与した人々の接続などを必ずしも明確に示せなかったことである。本論文では、例えば書く実践が三多摩地域で発展したこと、なおかつ「ふだん記」と「自分史」の直接の関係を示すことはできた。しかし、こうした点への言及は限定的ともいえる。三多摩地域に展開されてきた多様な社会教育実践が、それぞれ直接にどのような関係にあり、いかにつながって来たのか、さらに資料を掘り起こし実証的に検証することもまた課題である。

第三は、「ふだん記」を、他の書く実践、たとえば1950年代の生活記録運動、さらに80年代以降に書かれ始めた「自分史」の実践、そこから生み出された理論との比較検討を行いながらさらに精緻に検証していくことである。書く実践は、戦後日本の社会教育の中で重要な役割を果たしていくが、その中で、生活記録運動と「ふだん記」とはどのようにつながっていくのか。あるいは、「ふだん記」は、その後全国に普及していくが、「自分史」ブームとどのような関係で展開されていくのか、明らかにしていきたい。その上で、戦後社会教育の中で、書く実践が成人の学びにおいてどのような意味を持ってきたのか、人々はなぜ自分の人生の物語を紡ごうとしているのかを明らかにし、より豊かな戦後社会教育実践史を描きだすことを、今後の課題としていきたいと考える。

注

1 大槻宏樹『近世日本社会教育史論』校倉書房、1993年。

2 小林多寿子『物語られる「人生」 自分史を書くということ』学陽書房、1997年、p.53。

3 同前。

参考文献

- 相沢源七『民衆憲法の創始者・千葉卓三郎の生涯』宝文堂、1990年。
- 青柳伊佐夫、草野滋之「青年の学習論」、日本社会教育学会三十周年記念事業特別委員会(委員長碓井正久)編『現代社会教育の創造 社会教育研究 30年の成果と課題』1988年、東洋館出版社、pp.269-278。
- 青柳宏「『経験の見つめ直し』としての詩：詩を書く実践についての省察(その二)」、<宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要>(30)、宇都宮大学、2007年、pp.127-137。
- 秋川市史編纂委員会編『秋川市史』秋川市、1983年。
- 浅野秀剛『錦絵を読む』山川出版社、2002年。
- 安保博史「自分史の可能性-記憶の『編集』と人生の再生」、<群馬県立女子大学国文学研究>(29)、群馬県立女子大学国語国文学会、2009年、pp.31-42。
- アマルティア・セン(池本幸生、野上裕生、佐藤仁訳)『不平等の再検討 潜在能力と自由』岩波書店、1999年。
- 新井かおり「アイヌの集落が自らの歴史を語り始めること―貝澤正が編集する地域史『二風谷』の到達―」、<応用社会学研究>(54)、立教大学、2012年、pp.219-236。
- 新井勝紘「『多摩百年の歴史から』―自由民権から戦後の地域文化運動まで―」、<多摩のあゆみ>第72号、たましん地域文化財団、1993年8月、pp.2-13。
- 新井勝紘「『プランゲ文庫』公開と多摩地域文化運動の課題」、<隣人>19号、草志会、2005年、pp.38-48。
- 井口貢編著『入門 文化政策―地域の文化を創るということ』ミネルヴァ書房、2008年。
- 池田晶信、岡田勝美、佐藤美恵子、岩淵敏江、名取善子、松崎拓郎編(斎藤道子、岡田勝美総括)『北海道のふだん記 歴史(年表) 出版目録』ふだん記旭川グループ、2013年。
- 池田雅則「近代日本における私塾を問う視点」、<東京大学大学院教育学研究科紀要>第49巻、東京大学大学院教育学研究科、2009年、pp.1-10。
- 五日市町史編さん委員会編『五日市町史』五日市町、1976年。
- 稲城教育一〇〇年のあゆみ調査委員会編『稲城教育一〇〇年のあゆみ』稲城市教育委員会、1975年。
- 稲城市編『稲城市史』下、稲城市、1991年。
- 稲城市編『稲城市史 資料編3 近現代I』、1997年。

- 稲城市編『稲城市史 資料編 4 近現代 II』稲城市、1995 年。
- 稲城市教育部生涯学習課編『奚疑塾と窪全亮 稲城市教育委員会文化財調査報告書第 23 集』稲城市教育委員会、2010 年 3 月。
- 色川大吉『民衆史—その一〇〇年』講談社、1991 年。
- 色川大吉『ある昭和史—自分史の試み』中央公論社、1975 年。
- 色川大吉編『三多摩自由民権史料集』大和書房、1979 年。
- 色川大吉(著者代表)『民衆文化の源流』平凡社教育産業センター、1980 年。
- 色川大吉『明治の文化』岩波書店、1970 年。
- 色川大吉、江井秀雄、新井勝紘『民衆憲法の創造』評論社、1983 年。
- 色川大吉『新編 明治精神史』筑摩書房、1995 年。
- 色川大吉「現代の常民—橋本義夫論 昭和精神史序説」、<中央公論>89(8)、中央公論新社、1974 年 8 月、pp.123-152。
- 色川大吉『色川大吉著作集第三巻 常民文化論』筑摩書房、1996 年。
- 色川大吉『常民文化論』筑摩書房、1996 年。
- 色川大吉『自分史—その理念と試み』講談社学術文庫、1992 年。
- 色川大吉『"元祖"が語る自分史のすべて』河出書房、2014 年。
- 岩崎爾郎『物価の世相 100 年』読売新聞社、1982 年。
- ウヴェ・フリック(小田博志監訳)『新版 質的研究入門<人間の科学>のための方法論』春秋社、2011 年。
- 海端俊子『海は私の絵本』ふだん記新書 3、ふだん記全国グループ、1974 年。
- 海端俊子 詩集『海は私の絵本』ふだん記新書 3 1974 年。
- 江井秀雄『多摩近現代の軌跡』けやき出版、1995 年。
- 江村栄一編『自由民権と明治憲法』吉川弘文館、1995 年。
- 圓入智仁『海洋少年団の組織と活動 戦前の社会教育実践史』九州大学出版会、2011 年。
- 青梅市教育史編さん会議編『青梅市教育史』青梅市教育委員会、1997 年。
- 大串潤児「戦後の大衆文化」、吉田裕編『戦後改革と逆コース』吉川弘文館、2004 年、pp.185-227。
- 大谷暢順『蓮如[御文]読本』講談社学術文庫、2001 年。
- 大槻宏樹『近世日本社会教育史論』校倉書房、1993 年。
- 大槻宏樹他編著『自己教育論の系譜と構造—近代日本社会教育史』早稲田大学出版部、1981

年。

岡野素子「明治期歌川派と教育錦絵-《文部省発行錦繪》を中心に」、<芸術学研究>8号、筑波大学大学院人間総合科学研究科、2004年、pp.167-170。

おがわ・としお「女性4人4様の自分史を読む」、<月刊社会教育>37(3)、国土社、1993年3月、pp.68-72。

小川利夫『社会教育の歴史と思想』小川利夫社会教育論集第2巻、亜紀書房、1998年。

小倉英敬『八王子デモクラシーの精神史 橋本義夫の半生』日本経済評論社、2002年。

小沢一仁「大学の授業において自己理解を目指す文章を書くこと」、<東京工芸大学工学部紀要>(32)2、東京工芸大学、2009年、pp.9-19。

小野秀雄『日本新聞発達史』大阪毎日新聞社、1922年。

尾股協子『麦の穂』ふだん記文書4、ふだん記全国グループ、1975年。

片岡了、辻智子「共同学習・生活記録」、日本社会教育学会50周年記念講座刊行委員会編『講座 現代社会教育の理論 III 成人の学習と生涯学習の組織化』東洋館出版社、pp.108-123。

片桐芳雄『自由民権期教育史研究』東京大学出版会、1990年。

神奈川県立教育センター編『神奈川県教育史通史編』上巻、神奈川県弘済会、1978年。

金子大栄(校注)『嘆異抄』岩波文庫、1931年、pp.5-8。

蒲田忠良「民衆史を発掘・記録することの意味」、<図書館雑誌>75(8)、日本図書館協会、1981年、pp.441-443。

苅谷剛彦編著『「地元」の文化力 地域の未来のつくりかた』河出ブックス、2014年。

川上賢一「民衆史発掘と地方出版」、<図書館雑誌>75(8)、日本図書館協会、1981年8月、pp.456-457。

川島大輔『生涯発達における死の意味づけと宗教』ナカニシヤ出版、2011年。

川島大輔「死生学における質的研究の展開と意義—死の心理学研究を中心に」、<質的心理學フォーラム>2、2010年、pp.70-80。

川島琢象(代表)『窪全亮先生と奚疑塾』窪全亮先生頌徳碑建立委員会、1986年。

川原洋子『筑紫の山脈・遠賀川』ふだん記新書253、ふだん記北九州グループ・全国グループ、1993年。

川又俊則「大衆長寿社会の自己表現・自分史と葬り方に見る」、<月刊社会教育>42(9)、国土社、1998年9月、pp.62-67。

- 北河賢三『戦後の戦後の出発 文化運動・青年団・戦争未亡人』青木書店、2000年。
- 北河賢三『戦後史のなかの生活記録運動 東北農村の青年・女性たち』岩波書店、2014年。
- 北田耕也『大衆文化を超えて 民衆文化の創造と社会教育』国土社、1986年。
- 北田耕也監修、地域文化研究会編『地域に根ざす民衆文化の創造「常民大学」の総合的研究』藤原書店、2016年。
- 北田耕也、草野滋之、畑潤、山崎功編著『地域と社会教育—伝統と創造』学文社、1998年。
- 金原左門『大正デモクラシーの社会的形成』青木書店、1967年。
- 金原左門編著『大正デモクラシー』吉川弘文館、1994年。
- 梶国男『土の巨人』たましん地域文化財団、1996年。
- 梶国男「八王子における大正デモクラシー文化」、〈多摩のあゆみ〉第41号、多摩中央信用金庫、1985年、pp.120-134。
- 倉田百三『法然と親鸞の信仰(上)——一枚起請文を中心として——』講談社学術文庫、1977年。
- 黒沢惟昭『市民社会と生涯学習：自分史のなかに「教育」を読む』明石書店、2002年。
- 桑原真人、川上淳『北海道の歴史がわかる本』亜璃西社、2015年。
- 小池喜孝「北海道における民衆史掘りおこし運動」、〈図書館雑誌〉75(8)、日本図書館協会、1981年8月、pp.448-450。
- 小池喜孝「オホーツク民衆史講座」、『岩波講座 日本通史』別巻2、岩波書店、1994年、pp.229-245。
- 小金井巽『小っちゃな八百屋』ふだん記文書2、ふだん記全国グループ、1975年再版。
- 小久保明浩『塾の水脈』武蔵野美術大学出版局、2004年。
- 小林薫『花咲く道へ』ふだん記創書34、ふだん記雲の碑グループ、2011年。
- 小林孝雄「民衆文芸の創造と川崎」、『神奈川の夜明け—自由民権と近代化の道』(第二版)、多摩川新聞社、1994年、pp.203-229。
- 小林忠『江戸浮世絵を読む』ちくま新書、2002年、p.105。
- 小林多寿子『「ふだん記」運動の展開過程と戦後のリテラシーの変容に関する実証的研究』、平成15-16年度科学研究費補助金基盤研究(c)(2)研究成果報告書(研究代表者 小林多寿子)、2005年。
- 小林多寿子『物語られる「人生」』学陽書房、1997年。

- 小林多寿子「書く実践と書く共同体の生成：初期『ふだん記』運動の場合」、＜生活學論叢＞3、1998年、pp.59-70。
- 小林多寿子「書く実践と自己のリテラシー 『ふだん記』という空間の成立」、桜井厚編『戦後世相の経験史』せりか書房、2006年、pp.240-261。
- 小林多寿子「日本の自分史における『第二の生産者』と自己反省的言説」、＜法學研究＞：法律・政治・社会＞90(1)、慶應義塾大学法学会、2017年1月、pp.476(67)-494(49)。
- 狛江市史編さん委員会編『狛江市史』狛江市、1985年。
- 駒田錦一、佐藤幸治、吉田昇編『青年教育』朝倉書店、1951年。
- 小森康永・野口裕二・野村直樹編著『ナラティブ・セラピーの世界』日本評論社、1999年。
- 斎藤道子「貝沢正と土別の自分史年表」、＜さっぽろ市土別ふるさと会情報誌＞(28)、2013年、pp.46-47。
- 坂野義光「デジタル自分史-日本の映像文化の底辺を広げたい」、＜社会教育＞54(8)、全日本社会教育連合会、1999年8月、pp.4-6。
- 桜井厚『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』せりか書房、2002年。
- 桜井厚、小林多寿子編著『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房、2005年。
- 桜井厚編『戦後世相の経験史』せりか書房、2006年。
- 佐藤広美・高橋智編『戦前 教育科学運動史料 1』緑陰書房、1997年。
- 猿山隆子「共同で紡ぎだす<知>—鶴見和子の生活記録運動にみられる不連続性をめぐって」、日本社会教育学会編『<ローカルな知>の可能性 もうひとつの生涯学習を求めて』日本の社会教育 52、東洋館出版社、2008年、pp.117-129。
- 猿山隆子「鶴見和子の生活記録運動におけるコミュニケーションと「記録」：「生活をつづる会」の学習組織の形成をめぐって」、＜社会教育学研究＞50(2)、2014年、pp.11-20。
- 沢久枝『『美を語る会』について』、＜稲城市史だより＞第15号、稲城市史編集委員会発行、1986年11月、pp.5-8。
- 四宮さつき『ながれの中に』ふだん記本15、ふだん記グループ、1971年。
- 四宮さつき『十年—ふだん記と共に—』ふだん記本50、ふだん記全国グループ、1976年。
- 四宮さつき『続十年 —ふだん記と共に—』ふだん記本79、ふだん記全国グループ、1984年。

- 四宮さつき、香川節編『橋本義夫先生追想集』ふだん記本 105、ふだん記全国グループ、1986年。
- 社会教育基礎理論研究会編『叢書 生涯学習 III 社会教育実践の現在(1)』雄松堂、1988年。
- 社会教育基礎理論研究会編『叢書 生涯学習 II 社会教育実践の展開』雄松堂、1990年。
- 社会教育基礎理論研究会編『叢書 生涯学習 IV 社会教育実践の現在(2)』雄松堂、1992年。
- 浄土真宗教学研究所編『御文章 ひらがな版一拝読のために一』本願寺出版社、1999年。
- 杉原俊二「自分史分析の一考察(V)-テーマ分析から生活史分析へ-」、<吉備国際大学社会福祉学部研究紀要>(13)、吉備国際大学、2008年、pp.11-21。
- 杉山直子「教育方法としての『書くこと』についての考察：生活指導における『書くこと』」、<梅光学院大学論集>(42)、梅光学院大学、2009年、pp.18-29。
- 鈴木理生『多摩・東京一その百年』たましん地域文化財団、1993年。
- 鈴木政子『あの日夕焼け一母さんの太平洋戦争』立風書房、1980年。
- 鈴木政子『自分史一それぞれの書き方とまとめ方』日本エディタースクール出版部、1986年。
- 青年団研究所編『共同学習の手引』財団法人日本青年館、1954年。
- 関口直佑「明治初期における東京の私塾一同人社を中心として-」、<社会学論集>Vol.12、早稲田大学大学院社会科学部研究科、2008年、pp.196-203。
- 関根善二「民衆の歴史と図書館の出版活動」、<図書館雑誌>75(8)、日本図書館協会、1981年8月、p. 454。
- 戦後社会教育実践史刊行委員会編『戦後社会教育実践史』民衆社、1974年。
- 添田祥史「識字教育方法としての自分史学習に関する研究-ナラティブ・アプローチからのモデル構築の試み」、<日本社会教育学会紀要>(44)、日本社会教育学会、2008年、pp.41-50。
- 高野清子『道はるかなれど』ふだん記草子 10、1969年。
- 高橋克彦『新聞錦絵の世界』角川書店、1992年。
- 多田仁一『在村文化と近代学校教育一多摩地域等の事例から一』文芸社、2001年。
- 多仁照廣『若者仲間の歴史』日本青年館、1984年。
- 多仁照廣『青年の世紀』同成社、2003年。

「多摩の印刷史」刊行会編『多摩の印刷史』東京都印刷工業組合三多摩支部、1985年。

多摩百年史研究会編著『多摩百年のあゆみ』けやき出版、1993年。

調布市市史編集委員会編『調布市教育史』調布市教育委員会、1982年。

辻喜代司「庶民による人生の記録の創出・橋本義夫と初期『ふだん記』運動の場合」、<京都大学生涯教育学・図書館情報学研究>9、2010年、pp.73-88。

辻智子「1950年代日本の社会的文化的状況と生活記録運動・生活記録運動の系譜に関する考察(2)」、<神奈川大学心理・教育研究論集>(29)、神奈川大学、2010年、pp.5-19。

土屋礼子「メディア史研究の動向―明治大正期―」、メディア史研究会編<メディア史研究>(4)ゆまに書房、1996年5月、pp.151-161。

鶴見和子『生活記録運動のなかで』未来社、1963年。

手島勇平「奇遇にも戦後50年に高齢者の自分史づくり」、<月刊社会教育>40(6)、国土社、1996年6月。

土井敏彦「自己実現と自分史」、<成蹊大学文学部紀要>(25)、成蹊大学文学部学会、1989年、pp.7-16。

東京経済大学多摩学研究会編『多摩学のすすめ I』けやき出版、1991年。

東京経済大学多摩学研究会編『多摩学のすすめ II』けやき出版、1993年。

東京経済大学多摩学研究会編『多摩学のすすめ III』けやき出版、1996年。

東京都教育研究所編集発行『東京都教育史通史編』一、1994年。

東京都立多摩社会教育会館『戦後三多摩における社会教育のあゆみ I―その揺籃期を探る―』東京都立多摩社会教育会館、1988年。

徳田治子「ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ：生涯発達の視点から」、<発達心理学研究>15(1)、一般社団法人日本発達心理学会、2004年、pp.13-26。

鳥羽耕史『1950年代―「記録」の時代』河出書房新社、2010年。

土橋寿「新人類文化提唱者・橋本義夫論：『ふだん記』の哲人」、<研究紀要>13、帝京学園短期大学、2004年、pp.1-21。

内務大臣官房文書課『大日本帝国内務省第二十六回報告』、1912年7月。

中川功「北海道開拓と民衆史運動(北の大地からくらしを拓く<特集>)」、<月刊 社会教育>34(7)、国土社、1990年7月、pp.19-24。

中澤智恵「私を書く 物語を書く」、赤尾勝己、山本慶裕『学びのスタイル生涯学習入門』玉川大学出版部、1996年、pp.28-42。

仲野由佳里「女子少年院における少年の「変容」へのナラティブ・アプローチ：語りのリソースとプロットの変化に着目して」、＜犯罪社会学研究＞(33)、日本犯罪社会学会、2008年、pp.138-156。

奈倉哲三「戊辰戦争諷刺錦絵の世界史的位罫-国民国家草創期における民衆思想」、＜跡見学園女子大学文学部紀要＞(40)、2007年、pp.1-15。

浪江虔『図書館運動五十年 私立図書館に拠って』日本図書館協会、1981年。

日本社会教育学会年報編集委員会編（委員長 三輪建二）『成人の学習』東洋館出版社、2004年。

日本青年団協議会編『地域青年運動 50年史-つながりの再生と創造-』日本青年団協議会、2001年。

日本統計協会編集・発行(総務庁統計局監修)『日本長期統計総覧』第5巻、1988年。

ニュースパーク(日本新聞博物館)企画・編集・発行『企画展 明治のメディア師たち—新聞錦絵の世界』、2001年。

野家啓一編『ヒトと人のあいだ』岩波書店、2007年。

野並葉子、米田昭子、田中和子、山川真理子「2型糖尿病成人男性患者の病気の体験—ライフヒストリー法を用いたナラティブアプローチ」、＜兵庫県立大学看護学部紀要＞12、兵庫県立大学、2005年、pp.53-64。

橋本鋼二『万人に文を 橋本義夫のふだん記に至る道程』揺籃社、2017年。

橋本義夫『みんなの文章～万人教育論』ふだんぎ草紙 1、1960年初版発行、みんなの文研究会、1968年増補再版発行。

橋本義夫『橋本喜市のこと』地方文化資料 第52集、地方文化研究会、1961年。

橋本義夫『村の母 橋本春子のこと』文化サロン双書第二、八王子文化サロン(後援 多摩文化研究会)、1966年。

橋本義夫『北海道紀行』八王子文化サロン、1967年。

橋本義夫編『北海道のふだんぎ』第1号、ふだん記全国グループ、1977年。

橋本義夫『万人可能の哲学 附“新人類文化”』ふだん記全国グループ、1977年。

橋本義夫『だれもが書ける文章「自分史」のすすめ』講談社現代新書、1978年。

橋本義夫『ふだん記の大道—その道標』ふだん記新書 70、ふだん記全国グループ、1978年。

橋本義夫(橋本義夫、四宮さつき、松岡喬一編)『何でも書いて験してみた』ふだん記新書

74、ふだん記全国グループ、1979年。

橋本義夫(ふだん記茅ヶ崎グループ編『万人の文章のために』ふだん記新書 77、ふだん記全国グループ、ふだん記茅ヶ崎グループ、1979年。

橋本義夫(岡田勝美編)『新人類文化のすすめ—宛名のない手紙—』ふだん記新書 130、ふだん記旭川グループ全国グループ、1983年。

橋本義夫、四宮さつき『下手に書きなさい—「ふだん記」のすすめ』大揚社、1984年。

橋本義夫(色川大吉、梶国男、清水英雄編)『砂漠に樹を 橋本義夫初期著作集』揺籃社、1985年。

故橋本義夫(尾股協子編)『その土地よかれ、その人よかれ』ふだん記新書 282、ふだん記旭川グループ、1996年。

橋本義夫「八王子に於ける教育運動—薫心会の活動記録」、<教育>岩波書店、1939年10月号、pp.66-75。

橋本義夫生誕100年を記念する会編『紙の碑 ふだん記運動創始者 橋本義夫の生涯と自分史の源流展図録』揺籃社、2002年。

八王子市市史編集委員会『新八王子市史 資料編5 近現代1』八王子市、2012年。

平沢信康「近代日本の教育とキリスト教(3) 幕末・明治初期におけるキリスト教系私塾・学校の出現と信仰の自由化」、<鹿屋体育大学学術研究紀要>第12号、鹿屋体育大学、1994年、pp.79-91。

藤岡貞彦『社会教育実践と民衆意識』草土文化、1977年。

藤崎慎一、村松真貴子「藤崎慎一氏に聞く(前編)『よそ者・若者・ばか者』の情熱で地域活性・地域の住民、文化、自然を生かす(特集 こんな時代だから、企業との連携)」、<月刊公民館>、全国公民館連合会、2006年3月、pp.19-27。

藤田秀雄『社会教育の歴史と課題』学苑社、1979年。

藤田秀雄、大串隆吉編著『日本社会教育史』エイデル研究所、1984年。

ふだん記旭川グループ編(斎藤和、土田ひろえ、岡田勝美担当)『北海道のふだんぎ』第2号(『ふだん記』士別グループ、『ふだん記』北見さいはてグループ、『ふだん記』旭川グループ、『ふだん記』全国グループ、1982年11月。

府中市教育委員会編『府中青年団のあゆみ 別冊』府中市、1993年。

府中市教育委員会『府中市教育史 資料編二』府中市教育委員会、1999年。

府中市教育委員会『府中市教育史 通史編上』府中市教育委員会、2002年。

- 府中市立郷土館編『武蔵野叢誌(下)』府中市教育委員会、1978年。
- 古屋貴子「明治初期の視覚教育メディアに関する考察—教育史における文部省発行教育用
絵図の位置づけをめぐって—」、＜生涯学習・社会教育研究＞第31号、2006年、pp.73-82。
- 古屋貴子「明治初期における視覚教育メディア政策の思想的背景に関する考察」、＜東京大
学大学院教育学研究科紀要＞46、2007年、pp.311-321。
- 保坂一房「昭和初期の南多摩郡青年団—松井翠次郎の動向を中心に—」、パルテノン多摩編
集発行『地域文化の源流 多摩に生まれた「学び」の系譜』、2001年、pp.72-78。
- 本田康雄「報知から雑報へ：明治初期の新聞記事」、＜学校法人佐藤栄学園埼玉短期大学
研究紀要＞13、埼玉短期大学、2004年、pp.160-152。
- 増沢航『記録の戦後史—橋本義夫が遺した記録—』ふだん記創書24、ふだん記雲の碑グル
ープ、2007年。
- 増沢航「橋本義夫が遺した記録—建碑運動という方法—」、＜国際文化研究紀要＞14、横浜
市立大学大学院国際文化研究科紀要委員会、2007年、pp.59-82。
- 町田市教育委員会編集発行『町田市教育史』上巻、1988年。
- 町田市立自由民権資料館編『「武蔵野叢誌」一八八三年秋、創刊！—自由民権期の地域雑誌
—』町田市教育委員会、2003年。
- 松井翠次郎著作刊行会編『松井翠次郎遺稿集』松井メイ子(出版)、1990年。
- 松岡喬一編著『多摩近現代史年表』たましん地域文化財団、1993年。
- 松岡喬一『年表に見る八王子の近現代史』かたくら書店新書、2001年。
- 松田武雄『近代日本社会教育の成立』九州大学出版会、2004年。
- 松原治郎編『地域の復権』学陽書房、1980年。
- 三浦朱門「自分史とは何か」、＜歴史読本＞41(6)、人物往来社、1996年、pp.180-183。
- 宮坂広作『近代日本社会教育史の研究』法政大学出版局、1968年。
- 宮崎隆志「成人学習論における記録分析の課題と方法—生活記録を手がかりに—」、＜日本社
会教育学会紀要＞43、2007年、pp.61-70。
- 宮原誠一『宮原誠一教育論集』第2巻社会教育論、国土社、1977年。
- 無着成恭編『山びこ学校』岩波書店、1995年(初版青銅社、1951年)。
- 村田晶子「社会教育の事業と実践 総説」、久保義三、米田俊彦、駒込武、児美川孝一郎編
著『現代教育史辞典』、東京書籍株式会社、2001年、pp.319-322。
- 村田晶子「女たちの自己教育思想と記録—国立市公民館女性問題学習・公民館保育室活動を

- 通して」、＜早稲田大学大学院文学研究科紀要＞第1分冊(57)、早稲田大学大学院文学研究科、2011年、pp.19-31。
- 森久佳「デューイ・スクール(Dewey School)における『読み方(Reading)』・『書き方(Writing)』のカリキュラムに関する一考察：1898～99年における子どもの成長に応じたカリキュラム構成の形態に着目して」、＜教育方法学研究＞31、日本教育方法学会、2006年、pp.85-96。
- 門奈直樹『民衆ジャーナリズムの歴史』講談社学術文庫、2001年。
- 文部省『日本教育史資料』三、1890年。
- 文部省『日本教育史資料』八、1892年、pp.270-271。
- 文部省『学制百年史』、1981年15版発行。
- 矢口悦子「我が国における共同学習論の系譜」、＜日本社会教育学会紀要＞(28)、1992年、pp.1-5。
- 矢口悦子「イギリス生涯学習セクターの指導者養成における大学の役割：教育方法としての『リフレクション』をめぐる」、＜東洋大学文学部紀要 教育学科編＞(39)、東洋大学、2013年、pp.61-70。
- 柳田國男『明治大正史 世相編』新装版、講談社、1993年。
- 山口桂三郎『浮世絵の歴史』三一書房、1995年。
- 山寄雅子『京都市文学園成立をめぐる戦中・戦後の文化運動』風間書房、2002年。
- 山田公平「創設期の名古屋新聞—近代地方新聞史研究—」、＜メディア史研究＞(1)、ゆまに書房、1994年3月、pp.75-101。
- 山田定一監修『地域住民とともに 講座主体形成の社会教育学』北樹出版、1998年。
- やまだようこ編『質的心理学の方法—語りをきく—』新曜社、2007年。
- やまだようこ編『質的心理学講座2 人生と病いの語り』東京大学出版会、2008年。
- やまだようこ『『発達』と『発達段階』を問う：生涯発達とナラティブ論の視点から』、＜発達心理学研究＞22(4)、一般社団法人日本発達心理学会、2011年、pp.418-427。
- 山本武利『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局、1981年。
- 山本武利「占領期雑誌目録データベースの作成—プランゲ文庫の活用をめぐって」、20世紀メディア研究所編＜Intelligence＞1巻、20世紀メディア研究所、2002年3月、pp.6-8。
- 山本武利「占領下のメディア検閲とプランゲ文庫」、＜文学＞第4巻第5号、岩波書店、2003年9月、pp.2-10。

横山宏編『成人の学習としての自分史』国土社、1987年。

吉沢輝夫「生涯現役論と自分史づくり」、＜社会教育＞53(1) 1998年1月、全日本社会教育連合会、pp.26-28。

吉澤輝夫編『現代のエスプリ 338 自分史』至文堂、1995年。

渡辺賢二「南多摩地域の中での戦後稲城の特徴」、＜稲城市文化財研究紀要＞第2号、稲城市教育委員会、1999年3月。

渡辺賢二「戦後初期の青年たち」、＜稲城市教育委員会編稲城市文化財研究紀要＞、第6号、稲城市教育委員会、2004年3月、pp.4-27。

渡辺奨「地方史研究と文化運動-ふだん記運動の原点と継承(〔地方史研究協議会 1986年度〕大会特集-新しい地方史をめざして)-(問題提記)」、＜地方史研究＞36(4)、地方史研究協議会、1986年、pp.28-32。

資料 橋本義夫略年譜と三多摩の学習・文化活動

西暦	歳	橋本義夫の履歴と実践	三多摩の学習・文化活動の動向
1902	0	橋本義夫 誕生(南多摩郡川口村字檜原)(3月13日)。	
1903	1		市立八王子織染学校が府立に移管 初代校長早崎亀寿(3月)。 府立織染学校校友会誌「八王子織界」創刊(4月)。 府立八王子織染学校教師石川弘蔵が硫化染料による絹染色の授業を開始し、当地の硫化染料法の普及に尽力する(1907年に大体普及する)(9月)。 俳人一世竜子秋山国三郎(76才)が死去[川口村](秋山国三郎は三多摩壮士の一員、北村透谷と交渉を持った人物、義太夫語り手芸名豊竹琴太夫)(11月)。
1904	2		多麻千草新報を発行 発行人 山崎留吉。
1905	3		
1906	4		私立有喜学校が八王子町立へ移管される。 町立八王子尋常小学校が第一尋常小学校と改称。 八王子教育懇話会が発足(7月)。
1907	5		国民新聞が八王子出張所を開設して、府下版の記事掲載を初める。
1908	6	川口村 陶鎔小学校に入学。	府立第四高等女学校が開校(5月)。 地方紙「関東新聞」が創刊[八木町](9月)。
1909	7		
1910	8		短歌誌「創作」が創刊(3月)。 東京府立織染学校附属工業補修夜学校が開校

			学習期間 秋冬 6 ヶ月間。
1911	9	父喜市、南多摩郡会議員になる。	町立八王子図書館開館(4月)。 八王子町立図書館が開館(昭和 30 年 1 月都立に移管)(9月)。
1912	10		
1913	11		(八王子)町立実業補習学校が町立尋常高等小学校内に開設。 府立織染学校卒業生らにより青年会「大正会」が結成。
1914	12		憲政擁護運動で三多摩壮士が活躍。
1915	13		
1916	14		政治家石坂昌孝頌徳碑が藤森公演内に建つ除幕の綱引きは北村透谷の未亡人ミナ(石坂昌孝の娘)(4月)。
1917	15	青梅の東京府立農林学校に進み寮生活をおくる。	恩賜井の頭公園開園(5月)。 八王子市教育会が郡部より分離発足(10月)。
1918	16		府立織染学校卒業生の大正会が大正青年会と改称(2月)。 八王子市染色青年会が発足(4月)。 私塾斯文学院長奥津雁江(78才)が死去(5月)。 南多摩郡青年団結成(5月)。 八王子市教育会が発足(6月)。 南多摩青年団が結成第 1 回運動競技会が藤森公園で開催。
1919	17		私塾教育家奥津雁江の頌徳碑が富士森公園に建つ(5月)。 (八王子)市立図書館が男子の夜間閲覧を開始(9月)。 分倍河原の古戦場が東京府史跡に指定される

			(10月)。 (八王子)文芸雑誌「うろこ」を発行。 (八王子)広井千次郎が地方紙「多摩日日新聞」を発行。
1920	18	府立農林学校を卒業し家業を手伝う。トルストイ、武者小路実篤や有島武郎の書を読む。	(八王子)内山忠一が地方紙「革新時報」を創刊(のちに商工日日新聞と改題)。 木下保太郎が地方紙「八王子新報」を創刊
1921	19	厭世的な気持ちをもちはじめる。	菱山栄一、松井翠次郎らが南多摩郡青年団の団報発行を考え10人ほどの青年に呼びかけ(9月)。
1922	20	厭世観にとらわれ、半年後ポール・ケラスの『ブッダの福音』で救われる。	八王子市聯合青年団が結成加盟 29 団体(6月)。 八王子史談会が結成(8月)。 武蔵毎夕新聞創刊(11月)。
1923	21	村の青年たちと年西庵で「教育の家」運動をおこす。回覧誌『自然人』を発行。	南多摩郡役所編「南多摩郡史」を南多摩郡役所刊行(復刻版 1973 年刊行)(3月)。 中村雨紅(本名高井宮吉)<恩方村>が童謡「夕焼け小焼け」を作詞発表(作曲は草川信)。
1924	22	賀川豊彦の影響を受ける。 檜原・中野グループを結成して農村青年教育運動を開始。(中心人物は川口村檜原本村の橋本義夫、檜原・佐貫出身の岸清次、小宮村上中野の井上栄蔵、及び井上助次郎)。	東京天文台が麻布飯倉町から三鷹村に移転(9月)。 薫心会が薫心学園(夜学校)を開設(11月)。
1925	23	内村鑑三に心酔し、傾倒する。 川口村橋本義夫が渋谷定輔らと組織した農民自治会の全国聯合委員の一人となる(12月)。	成蹊学園が池袋から武蔵野村に移転(3月)。 八王子市立図書館の新館が天神町に完成。
1926	24	下中弥三郎、渋谷定輔、犬田卯らの農村自治会運動に加わる。村で生活改善・悪習打	八王子聯合処女会が結成(4月)。

		破運動を起こす。	
1927	25	この頃『揺籃』と題する『自然人』と類似した回覧誌を1回発行。 農村図書館運動をおこす。	東京商科大学(現一橋大学)が神田から谷保村(現国立市)に移転(4月)。
1928	26	父、東京府会議員になる。 書店揺籃社を開店(八王子市横山町1丁目)(1月)。	私立和洋裁縫女学校が開校 創立者矢野明(現在の八王子実践高校)(2月)。 薫心会設立の多摩勤労中学が開校 校長は希望社の吉田弘(霊明)((現在の八王子学園高校)(4月)。 大日本社会教育会主催城山講演会開催(8月)。 大木竜吉が八王子童話会を結成。
1929	27	結婚。 須田松兵衛、松井翠次郎と親交を持つ。	南武鉄道(現 JR 南武線)が開通(立川-分倍河原)。 玉川学園が町田町に開校。 陵東土俗研究会が結成。 松井翠次郎・稲沼智隆らが「松竹少年少女団」を結成[恩方村]。
1930	28	長男行雄誕生。 揺籃社の新しい店が完成(八王子市横山町)。	井上保・黒柳卯一が「大東日日新聞」を創刊。
1931	29	長男行雄死す。 平井鉄太郎と親交を持つ。	津田英学塾が麴町から小平村に移転(9月)。 多摩中勤労中学校長に薫心会主宰の市川英作が就任。
1932	30		
1933	31	健康を損なう。信州教育に心酔し2泊3日の旅に出る。	千人同心の飯田徳右衛門が死去(最後の千人同心)(5月)。 東京競馬場が目黒から府中町に移転(11月)
1934	32	次男鋼二誕生。	自由学園新校舎が久留米村に完成
1935	33	2度目の厭世観にとらわれる。のちにライプニッツの「理由なしには荷物も存在しな	東京高等農林学校(現東京農工大学)が駒場から府中町に移転(9月)

		い」という言葉で救われる。	
1936	34		八王子市図書館が夜間開館。
1937	35	「教育科学研究会」八王子南多摩支部に参加。 教育科学研究会一行が八王子訪問(11月)。	恩方村居住の菱山栄一研究の「村落共同体」が東京で開催の世界教育会議で発表される(2月)。 松井翠次郎編「農村の生活調査」(恩方村)(4月)。 城戸幡太郎、留岡清男主宰の教育科学研究会八南支部が結成。
1938	36	母春子死す(1月)。 父喜市死す(11月)。 『武蔵毎日新聞』教育科学研究に「八王子市民と伝統」と題する掲載する(6月25日)。 会南多摩支部誕生(8月)。	
1939	37	岩波『教育』11月号に「八王子に於ける教育運動—薫心会を中心に」を發表。	
1940	38	定子と離婚。野副婦美と再婚。 恩方の小学校を舞台に教育映画”村の図書館”(文部省推薦)が作られ、出演(10月)。	
1941	39	「多摩郷土研究会」を結成(6月)。	教育科学研究会八南支部が解散。
1942	40	揺籃社開店15周年を行う。市川英作らと大東亜黎明会を結成し南方進展策を企画(1月)。 陸海軍に500円ずつ献金(3月)。 第3次ソロモン海戦のあと日米の戦力を分析して敗北を確信(10月)。 大東亜黎明会を解散し、戦争の想起集結を願って東条首相直訴計画を立てたが果たせず(12月)。	千人隊事跡碑が建つ[千人町]。
1943	41	もとの非戦論者・反戦主義者にもどる。	
1944	42	治安維持法で自宅搜索を受け、早稲田署に	松井翠次郎が治安維持法違反容疑で検挙される

		拘置される(12月)。	(三田警察署)(6月)。 経済学者大内兵衛・有沢広巳、社会思想家荒川実蔵が元八王子村へ疎開。
1945	43	八王子空襲で揺籃社及び檜原の生家焼失(8月)。 敗戦で新時代の到来を期待、「民族の復興を計り、世界人類の進歩に役立つ人間をこの国から出したい」(8・16)とし、さらに新生日本のあり方として天皇制の廃止、人民主権の国家など14項目を『わが主張』として記す(8月18日)。 祖国復興運動や青年教育運動を開始(10月)。	
1946	44	『戦争犯罪自己調書』を書く(2月)。 細谷俊夫を講師として浅川小学校で”近代教育史”の学習会を開く(1月)。	都立立川図書館・青梅図書館会館(10月)。 民間教育家須田松兵衛(53才)が死去。 短歌同好会の多摩青垣の会が結成され会誌「多摩青垣」を創刊(10月)。
1947	45	戦後の世相に失望し、3度目の厭世観におちいる。何度も自殺を図って果たせず、1年後「愛こそが日本を救う道である」という回心によって脱却。	民主主義科学者協会三多摩支部・八王子市教員組合ら4団体が第1回多摩文化講座を開催(5月)。
1948	46	檜原村の青年たちに頼まれて郷土の科学的な歴史研究に着手。	
1949	47	人類のよき変種といえる転載を祖国復興に役立てようとして天才研究に没頭(8月)。	
1950	48		秩父多摩国立公園、指定(7月)。
1951	49	地方文化研究会をつくり自宅に事務所をおく。 埋もれた義民・発明家などを顕彰するため	国立町、文教地区に指定(11月)。 第1回八王子市教育文化祭開催 参加4団体。

		建碑運動をはじめ。 民間教育先覚者須田松兵衛頌徳碑である” 友の碑” 建つ。	
1952	50	村田光彦と交わる。 ” 母の碑” 建立を意図。 宗兵衛麦の創始者河井宗兵衛の頌徳碑が 建つ。	
1953	51	横山の地名を残すため、” 万葉歌碑” の建 立を意図(1月)。	八王子市青年団体協議会が結成 初代会長 大 野聖二(10月)。 秋川丘陵自然公園指定(10月)。
1954	52	” 困民党首領塩野倉之助碑” 安養寺に建つ (4月)。 "万葉碑赤駒の碑"、散田真覚寺の丘上に建 つ(5月)。 平井鉄太郎図書塚が建つ(11月)。	都立小金井公園開園(1月)。
1955	53	絹の道碑が建つ。 由比牧祉碑建つ。 橋本義夫著「一都市の生活形成者」地方文 化研究会刊行。 橋本義夫著「土地の性格」地方文化研究会 刊行。	八王子市立図書館が都立に移管(1月)。 川口村が八王子市に編入(4月)。 砂川闘争(米軍立川基地拡張反対闘争)(5月)。
1956	54	大正記念館・八王子博物館の建設趣意書 (11月)と甲州街道まつりの趣意書(12月)を つくり運動をおこす。	
1957	55	内村鑑三先生記念文庫設立の趣意書をつ くる(1月)。 ” 絹の道碑” 建つ(5月)。 傷だらけの” 幻境碑”、” 造化碑” と名を 変えて谷の町の丘に建つ(10月)。	

		<p>”近代先覚者碑” 建つ(11月)。</p> <p>”コックス碑” 建つ(12月)。</p>	
1958	56	<p>会を作って地方文化を発展させるために奔走し鈴木龍二と交わる。</p>	<p>多摩動物公園開園(5月)。</p> <p>「幕末の八王子千人同心栗沢汝右衛門一代記」郷土史料刊行会鈴木龍二刊行。</p>
1959	57	<p>多摩文化研究会が発足 主幹鈴木龍二(1月)。</p> <p><多摩文化>創刊号(4月)。『地方の教育運動』刊(5月)。</p> <p>『伽羅のある家』刊(11月)。</p> <p>『明治の末』刊(12月)。</p>	
1960	58	<p>『砂漠に樹を一戦後地方文化運動の記録』刊(2月)。</p> <p>『天才』刊(3月)。</p> <p>『丘の雑木—地方文化運動の記録』刊(3月)。</p> <p>『古代・中世地方史研究法稿』刊(3月)。</p> <p>『平凡人の教育・文章』刊(4月)。</p> <p>『みんなの文章』刊(4月)。</p> <p>"北村透谷を憶う会"を都立八王子図書館で開く(5月)。</p>	<p>北村透谷を憶う会が都立八王子図書館で開催(5月)。</p>
1961	59	<p>『橋本喜市のこと』刊(10月)。</p>	<p>昭島市で太古のクジラの化石発見、のち「アキシマクジラ」と命名。(8月)</p>
1962	60	<p><多摩文化>第11号特集明治の村落—川口村研究(8月)。</p>	<p>青梅鉄道公園開園。</p>
1963	61		<p>八王子市史編さん委員会編「八王子史」上巻を刊行(7月)。</p>
1964	62		<p>東京オリンピック、聖火リレーが多摩地域を通</p>

			過。
1965	63		
1966	64	橋本義夫著『村の母—橋本春子のこと』刊(6月)。 橋本義夫著『雲の碑 地方の人びと』1巻2巻、多摩文化研究会刊行(7月)。	
1967	65	『ふだんぎ』運動のパートナーになった四宮さつきと出会う(1月)。 八王子郷土資料館開館式。同館運営委員を委嘱される(4月)。	八王子市史編さん委員会編「八王子史」下巻を刊行(3月)。 八王子史郷土資料館が開館(4月)。
1968	66	ガリ版刷りの<ふだんぎ>第一号発行、ふだん記運動をおこす。(1月)。 詩集『雲の碑』刊(9月)。	「五日市憲法」草案発見(8月)。 八王子郷土資料館が博物館法に基づく博物館となる。
1969	67	陵南会館で『ふだんぎ』グループ最初の集い(9月)。	
1970	68	<ふだん記通信>発行(6月)。	多摩文化研究会主幹鈴木竜二(63才)が死去(10月)。
1971	69	<ふだん記>18号からオフセット印刷になる(2月)。	
1972	70	橋本義夫著「地方の記録」刊行。 『多摩文化ニュース』に「近代八王子の教育文化—学制頒布百年にあたって—」を書く(3月)。	北村透谷の文学碑が甲の原団地から矢野町児童公園へ移転(3月)。 八王子地方教育百年史展実行委員会「八王子の教育百年」刊行(10月)。
1973	71		「新しい公民館像をめざして」(三多摩テーゼ)公表。
1974	72	『村の母』補足・刊(11月)。 色川大吉「現代の常民—橋本義夫論 昭和 精神史序説」<中央公論>89(8)、中央公論新社に掲載(8月)。	

1975	73	<p>自然保護団体が八王子大丸で開いた"多摩の自然を守る展"で「丘君・雑木林君」という台で公演(7月)。</p> <p>『抑制の哲学』刊(10月)。</p>	<p>季刊雑誌<多摩のあゆみ>を多摩中央信用金庫が刊行開始(11月)。</p>
1976	74	<p>『ふだん記案内』ふだん記新書 31、刊(3月)。</p>	<p>多摩考古学者梶国男が第1回藤森栄一章を受賞。</p>
1977	75	<p>「新人類文化研究会」発足(4月)。</p> <p>相州(神奈川県)八菅山に最初の地方ふだん記グループが発足、「八菅のふだん記」第1号を創刊。</p>	
1978	76	<p>橋本義夫『誰もが書ける文章』講談社現代新書、刊行。</p>	<p>小鹿鹿蔵著「由木村はわが故郷付由木村の百」ふだん記全国グループ(3月)。</p> <p>中央大学、八王子市へ移転(4月)。</p>
1979	77	<p>第一回八王子市文化功労賞を受ける(推薦者後藤聡一市長)。</p> <p>『何でも書いて験してみた』刊(9月)。</p>	
1980	78	<p>中学校社会「公民」教科書(学校図書)に、開発計画と住民生活の項で詩に『丘君・雑木林君』が掲載される(3月)。</p> <p>「ふだん記のすすめ」を<青年>日本青年館に連載開始(6月・133号から25回)。</p>	<p>国立高校野球部、都立高校初の甲子園出場(8月)。</p>
1981	79	<p>『姉・桶菊』刊(8月)。</p> <p>地方での第1回『ふだん記』全国大会を大阪中之島公会堂で開催(4月)。</p> <p>『平井鉄太郎——視同仁教育の使徒』刊(9月)。</p> <p>『暴風雨の中の小実験』刊(10月)。</p>	
1982	80	<p>『ふだん記』北海道大会が旭川市で開かれ"新人類文化北海道に創まる"のスローガン</p>	

		を掲げる。	
1983	81	『青年』に連載された「ふだん記のすすめ」が『新人類文化のすすめ—宛名のない手紙』として旭川グループから刊行(7月)。『道は誘惑する』刊(11月)。	国立昭和記念公園開園、全面開園後は日本一の都市公園(10月)。
1984	82	八王子で「逢う日話す日」閉会后「もう私のすることはすべて終わった」と文友に語る(10月)。 帯状疱疹にかかる(11月)。 青森県大鰐で『ふだん記』東北大会(6月)。 「朝日新聞」夕刊に『ふだん記』運動の大型記事載る(10月、坂本龍彦記者)。	
1985	83	食欲が減り体調不振に(1月-)。 『親友 須田松兵衛』刊(2月)。 食べたものを吐く(3月)。 戸吹町の三愛病院に入院(5月)。 病床上で「老枯日記」をつけ、『ふだん記』本の序文を書き、見舞い客を励ます。急速に体力が衰え病状悪化(7月)。 橋本義夫 没(享年 83 歳)(8月4日)。	困民党の碑が建つ(中野山王子安神社)(1月)。

本表は以下の出典から作成した。

橋本義夫『村の母—橋本春子のこと』八王子文化サロン、1966年。橋本義夫(色川大吉、梶国男、清水英雄編)『砂漠に樹を—橋本義夫初期著作集』揺籃社、1985年。多摩百年史研究会編著「多摩百年のあゆみ」東京市町村自治調査会、1993年。梶国男「橋本義夫 略年譜」橋本義夫(編者 橋本鋼二)『暴风雨の中で—橋本義夫著作集 第二集 戦中戦後日記・手記』ふだん記旭川グループ、1996年。色川大吉「自分史論」、色川大吉『色川大吉著作集第三卷 常民文化論』筑摩書房、1996年。日本青年団協議会編『地域青年運動 50年史—つながりの再生と創造—』日本青年団協議会、2001年。松橋喬一『年表に見る八王子の近現代史—明治元年～平成12年』かたくら書店新書46、2001年。小倉英敬『八王子デモクラシーの精神史—橋本義夫の半生』日本経済評論社、2002年。